早稲田大學出版部

明治四十三年一月二十五日印刷
明治四十三年一月二十八日發行

早稻田大學出版部
不許複製

早稻田大學編輯部編纂

發行者 東京市小石川區音羽町四丁目十一番地 荒川信賢

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 渡邊八太郎

發行所 東京牛込區早稻田 早稻田大學出版部 振替東京一一二三番

日清印刷株式會社印刷

章句、莫壞道理而已、何更多岐亡羊、糊人視聽哉、若夫文中生意、言外覔味、則自得可也。

寛文癸卯孟秋月

心耕隱客　鵜信之書

古文眞寶諺解大成跋

蓋聞之、書不備于一人、理必須于群言、朱考亭謂、今人多說章句之學爲陋、某見人多因章句看不成、却壞了道理、古文眞寶之行乎世也、叢林講說舊矣、如青松萬里、博覽明辯、演義盡善、自一元湖月以下、屑々然不足校焉、羅山林鴻儒、奮起于諸子之後、而肆力纂述、務袪沿習、嘗爲某公作此解、檃栝諸註、敷衍大義、可謂捷而奇矣、然直說其理、而略于事證、間或看不透、而艸々說過、非無遺憾、學者病焉、頃書肆村上氏、請余爲之補正、欲以印行、余曰、解書固難、得理不易、如今閱諸家說、集而大成、雖若甚易、而亦難矣、蓋爲他之是非難見、而我之昏明易惑也、淺識寡聞、奚敢能承、辭不允、乃大搜索而討繹文旨、務當其理、不求奇高、累月書成、凡二十卷、名曰大成、或謂、子之所輯、不別于羅山、且引據不廣、似未全備、何也、答曰、余之所得、則羅山之所失也、不必執拗其說、蓋將在其所許焉、我只成其

孟君將ニ有ㇾ適、思ㇷ与ニ吾子ㇳ別ㇾ、庶幾ハ一來、愈再拜、

韓文註ニ、孟君ハ東野ナリ、適ノ上ニ有ㇼ所字、孟郊近日他國へ往んとす、張籍と別れん事を思ふて、餘波惜さふ也、庶幾は張籍一度見廻れよと也、蔣之翹曰、方ニ高談潤論ナ、却ㇳ又將ニ敘事ヲ作ス餘波ヲ、

古文眞寶後集諺解大成　終

餘人とは辯難し給ふ事あり、衆人は恠み問故に、孔子も強く辯じて説給ふ、左あれば言も多く、非理を辯じ破る所あり注孔子の多言にして勝ことを好めりと云事は無を、退之孔子の强辯し給ふ樣に云成、其を借引て我勝ことを好むは、非にてなき事を明す、若才かに孔子の正事を使ひ用れば、即ち不是也、此退之が文章事を使ふことの所以好也、旁影は、似たり依たりの面影を、取來て寫し出すを云、即ち以無爲有也、退之今所引の孔子の事、彷彿に寫し出す事甚だ佳也、

駁雜之譏、前書盡之、吾子其復之、昔者夫子猶有所戲、詩不云乎、善戲謔兮、不爲虐兮、記曰、張而不弛、文武不爲也、豈害於道哉（用事中間架、）吾子其未之思乎、

【駁】説文、馬色不純、ふちと訓ず、まだらなる義也、駁雜は純粹ならず、むさと取ませたるを云、此にては退之行迹精專ならざるを云、張籍書曰、此見執事多尙駁雜無實之説、使人陳之於前以爲歡、此有以累於令德、退之答書曰、吾子又譏吾與人爲無實駁雜之説、此吾所以爲戲耳、比之酒色、不有間乎、吾子譏之似同浴而譏裸裎也、論語陽貨篇、子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳【詩】衞風淇澳之篇、戲も謔も、たはふると讀り、虐は、酷也、殘也、しえたぐると訓じて、人をむごく惡ざまにするを云【記】禮記雜記の語也、此下に云、弛而不張、文武不能也、一張一弛、文武之道也、註、張弛、以弓弩喩人也、弓弩久張之、則絕其力、久弛之、則失其體、韓文不爲の爲字を、蔣之翹が注に、作能字、有辯、退之が行駁雜なるの譏りは、前日の返書に委しく申入、張籍反復して亮恕せられよ、昔し孔子だにも、猶戲れ給ふ事あり、毛詩にも、善戲れ左禮言をすれ共、暴虐に人を惡くする事をばせずと云、禮記にも、弓を張て弛ざる如くに、人の言行嚴密に、はかりは不成、時として從容和緩なる事あり、時に依、事に因て、戲謔も可有、故に文王武王も、張而不弛ことは、し給はず、然れば戲動は、强ちに道に害あらず、張籍若未だ是を思慮せざる歟と也注文章を作り事を用る中に、間架有て、種々の事を引入る也、

前書謂吾與人商論不能下氣、若好己勝者、此是餘意然雖誠有之、抑非好己勝也好己之道勝也、己之道、乃夫子孟軻楊雄所傳之道也若不勝、則無所爲道、吾豈敢避是名哉、又重說、見得學孟子以道自在〇下得好處、

張籍書曰、自楊子雲作法言、至今近千載、莫有言聖人之道者、言之者惟執事焉耳 云云、又商論之際、或不容人之短、如任私尙勝者、亦有所累也、退之答書曰、若商論不能下氣、或似有之、當更思而悔耳【商論】は、商確するの論也、字彙、商量 裁度也、張籍より送る書に、退之人と事を爭ひ論ずる時に、退之氣をせき上て、己勝ん事を好めりと云 注張籍が二度目の書には、其事なきに、今初度の書中の事を取出して反復す、故に餘意と云、本集注曰、此段傍及追說前書語【然雖—】誠に張籍が所云の如なれ共、退之强ちに己が人に勝事を好むには非ず、己が道の老佛に勝ん事を好で也、己が道は、即ち孔子孟子楊子雲が道也、若佛老に勝ずんば、儒者の道とする所無るべし、然れば何ぞ敢て己勝ことを好むと云の名を避んや、孟子滕文公下篇曰、我亦欲正人心、息邪說、距詖行、放淫辭、以承三聖者、豈好辯哉、予不得已也、蔣之翹曰、籍第二書更切當、乃退之益不能下氣、答之不免自多强詞、黃震曰、退之答張籍兩書諄々然、自解未可著書闢佛之意、及說駁雜之議、其實張籍益友也、愛公之深者也注此段又重く說、退之孟子を學で、道を以て自ら負荷する事を見得たり、文字を下し得て佳好也、

夫子之言曰、吾與回言終日、不違如愚、則其與衆人辨也有矣、使事率引以無爲有、因彼借此、才使正事便不是此文字所以好〇旁影甚佳、

所引の孔子の語は、論語爲政篇にあり、注不違者、無所怪問於孔子之言、默而識之、如愚也、圖解曰、盡一日之間、但有聽受、不問難疑、一似愚人一般、孔子顏回と物語し給ふ事、終日の間、顏子問疑せずして、只聽受る許りにて、愚闇なる人の如しと宣へば、

不傳於久注下段の意を生ず、
然觀古人得其時行其道、則無所爲書、轉○意不露而接、爲書者、皆所爲不得行乎今、而行乎後者也、言著書之意、
古の人を見るに、時を得て道を行へば、何の思ふ事も可云事もなき程に、書を作る所あらず注轉じて云文字の上には、意露はれざれ共、脉絡接續す、【書を著はす事は、】皆其所爲當世に行ふ事を不得して、後世に行ふ者也注古人の書を著はす本意を說、
今吾之得吾志、失吾志、未可知、俟五六十爲之未失也、
今退之が志を得んと、志を失んと、如何可有も、未だ知べからず、年五六十なるを待て、書を作ん事、未だ失せず、年老るを待こと、過ちとせずと也、本集未可知の下に、有則字、蔣之翹曰、却將不必著書、作餘波、
天不欲使茲人有知乎、則吾之命不可期、如使茲人有知乎、非我其誰哉、使孟子捨我其誰之意、此點化好○蘇文田承祖書、亦同承襲孟子、
天若斯民をして、壽を知しむる事を欲せずんば、退之が壽命期すべからず、若斯民をして、道を知ること有しめんとならば、退之に非ずして、世に復誰かあるや、孟子公孫丑下篇夫天未欲平治天下也、如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也注孟子の語の意を使ふ、而も點化して好、其意を使ひながら、其語を直に用ひぬを云、蘇氏が田承祖に與る書も、亦同く孟子の此語を承襲へり、東坡全集を考るに無此文、別に可考、
其行道、其爲書、其化今、其傳後、必有在矣、應有力、一篇警策處、吾子其何遽戚於吾所爲哉、結有力、
退之長命ならば、道を行ひ、書を作り、今の世を敎化し、後代に傳る事、必ず在こと有べし注上に應じて有力、此一篇秀逸なる處、【張籍】何ぞ遽に退之が所爲を戚るや、韓文作戚戚、

未至、抑其時不暇耳、而云云者、乃從爲之辭、然其文特工甚、

自文王沒、武王周公成康相與守之禮樂皆在、至乎夫子未久也、自夫子而至乎孟子未久也、然猶其勤若此、其困若此、而後能有所立、吾其可易而爲之哉、其爲也易則其傳也不遠、故余所以不敢也、

文勢○鋪叙間架、 轉 結、中含警策意、 生下意、

張籍書曰、師之賢者、其徒數千人、或數百人、是以沒則托其師說以爲書、若孟軻者是已、傳者猶以孟軻自論集其書、不云沒後其徒爲之也、後軻之世、發明其學者、揚雄之徒、咸自作書、今師友道喪、漫不及揚雄之世云云、文王崩し給ひしより、武王、周公、成王、康王、相次で天下を守り、禮樂皆備つて存す、其より孔子の時に至て、未だ久しからず、孔子より孟子に至るまで、亦未だ久しからず、本集には、至乎孟子未久也の下に、自孟子而至乎揚雄、亦未久也の十二字あり 注 文勢如此なるべしと也、鋪叙間架あり、間架は間隙架棚也、文章を書内に、思の外なる他事の不急なる事を書入を云、間隙あり、架棚ありて、物を入置樣なる義也、唐書貨食志曰、毎屋兩架爲間【然猶其—】孔子の窮阨に逢給ひて、卒に天下に立る事、前に見へたり、孟子も亦齊梁などの國に客居せらるゝ事は、孟子史記にあり、言心は成王康王より、孔子に至て未久、孔子より孟子に至まで亦未久に、世衰へ道微にして、孔孟用ひられず、其身に勤め勵ます事如此、困窮する事如此にして、而後能身立る所あり、孔孟だにも如此なれば、退之に於て容易に書を作るべけんや 注 轉換して上に反して云【其爲也—】孔孟の困阨に逢て、後に書を著し給へる故に、道遠く傳はる、若容易に作爲すれば、其書傳はる事遠からず 注【結】前に所云の孔子の事を結ぶ、中含警策意とは、其間に秀逸なる意を含めり【故余—】退之身窮せず、道勤めざれば、易らかに書を作る共、永代傳はるまじ、此故に敢て書を不作也、本集注曰、言著書不可輕易、恐

人の惡聲毀言我耳に不入と宣ふ注抑とは、孔子をだに、何かと人の褒貶すと、抑て説也、其餘は、子路が七十餘人の弟子也、其外にも蓋し三千人とあり、此輩孔子を輔相し守護する人、天下に遍く多し注文章の氣勢自然にして、繕ひ飾らずして好と也、孔子の、子路が、外の訕りを防ぎ輔げ守る者、天下に遍きだにも、猶且絶粮之邦、孔子の道は尊しと云共、窮困し給ふ事は亦甚し注文を作爲すること佳、文法好、文章の長短相得て有功、功、一作力、

賴其徒相與守之、卒有立於天下、繳**向使獨言之而獨書之、**應**其存也可冀乎、**結好、

本集注云、言著書之難、以無羽翼其道者、孔子箇樣に甚だ窮し給へ共、幸に門弟子相與に守護して、孔子遂に天下に立てる事あり注【繳】前に孔子の事を段々説述て、此にて遂に患難を免れ給ひし事を云收む、繳は、矢に絲を付て、鳥を射取也、其如くに文章を鋪叙して、一轉して本意を取收むるを云、向に孔子をして、獨り説て獨り書を作らしめば、其言其書の後世に傳はる事、冀ふべけんや注應は、上の得子路其餘輔の句也、又結び括ること好、蔣之翹曰、或如退之言、則著書者必先植黨、吾不信也、

今夫二氏行乎中土也、蓋六百有餘年矣、抑**其植根固、其流波漫、**語健下字好**非所以朝令而夕禁也、**

六百有餘年、本集には年字、在有字上、後漢の明帝の時より、佛法中國に入、老莊虛無の説は、專ら晋の世に行はる、今六百餘年と云は、大數を云也、故に蓋と云注抑は、儒道の佛老に塞がるゝを指、老子、深根固蔕【漫】はびこると讀り、植根、固は、前の溉其根の二句に應ず、流波漫は、浚其源の二句に應ず注二句語健也、文法亦好、易係辭、非一朝一夕之故、古語、朝令而夕改、佛老二氏の中華に行はるゝ事、蓋し六百餘年、木の根固く、水の漫れるが如く、深く大にして、卒爾に平げ難し、朝に觸流しゝて、夕に禁制する樣なる事にてはなし、茅坤曰、退之不汲々著書固其力之

有宜復者至此、是抑輕明重段數鋪叙不雜、

書於吾何有、結佳、

其二氏の甚だ非なる者を指て、語るべきを擇で、學者に教誨するだにも、猶時として我と相違して、爭ふ聲譊譊たり、譊々は、怒り爭ふ貌、譊、泥交切、說文、恚呼也、又爭也、考異作嘵【若遂成一】若我遂に二氏を排する書を作り成さば、見て怒る者必ず多らん注二氏の教の非なる事を擇で云は、輕を擧る也、公卿宰相の尊奉するを云ざるは、重を明す也、轉は、轉じ換て、上と反する也、重は、只其非なる者を擇て云は輕し、遂成其書は重し【必且一】必ず且へに、人退之を以て狂人とし、智迷へる人とせん、然らば、我身だにも恤み保つ事能はじ、所作の書、我身に於て、何の益有んと也、其身之不能恤は、毛詩の語、本集注曰、書於吾何有、言無補也、第一段言著書闢佛、恐有禍患注自抑とは、必且と云より下は、退之自ら身を抑へて云也、上の其中有宜復者と云より、此に至るまでは、是輕き事をさへ如此と抑て、重くんば彌々大なる咎に逢んと云事を明せり、文段數して鋪叙する事不雜して分明也、文を結び括る事佳好也、

夫子聖人也、抑且曰、自吾得子路、而惡聲不入於耳、其餘輔而相者周天下、文勢自然、猶且絶糧於陳、畏於匡、毀於叔孫、奔走於齊魯宋衞之邦、其道雖尊、其窮也亦甚矣、作文佳、下字好、長短有功、

史記云、孔子曰、自吾得由、惡聲不入於耳、又曰、吳伐陳、楚救陳軍于城父、聞孔子在陳蔡之間、楚使人聘孔子、孔子將往、陳蔡大夫謀曰、孔子用於楚則陳蔡大夫危矣、於是乃相與發徒役圍孔子於野、不得行絶糧、從者病莫能興、孔子講誦絃歌不衰云云、又曰、孔子去衞適陳、過匡、々人以爲陽虎、陽虎嘗暴匡人、匡人遂止孔子、孔子狀類陽虎、拘焉云云、論語子張篇、叔孫武叔毀仲尼云云、史記又曰、孔子適齊爲高昭子家臣、欲以通乎景公、孔子去曹適宋、與弟子習禮大樹下、宋司馬桓魋欲殺孔子、拔其樹、孔子去、夫子は、孔子を指、孔子は、聖人也、且子路を得てより、他

暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔
子懼作春秋、春秋、天子之事也、是故孔子曰、知我者
其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎、又曰、孔子成春秋
而亂臣賊子懼、昔し孔子の春秋を作り給ふに、已に其
文辭を深微にして、人の聊爾に知難き樣にし給ふと
也、然れども猶敢て公義に推出して不傳道して、口
づから弟子に授く、後代に至て、其書初て出、是孔子
の患難に遇んかと慮り給ふ所以の道、微にして深し
と也、但し此説は、班固何休が説を受て云、杜預が左
傳の序に能辯せり、杜預左氏傳序或曰、春秋之作云云、
言公羊者亦云、黜周而王魯、危行言孫、以辟當時之
害、故微其文、隱其義云云、答曰、異乎予所聞、仲尼
曰文王既沒、文不在茲乎、此制作之本意也云云、若
夫制作之文、所以章往考來、情見乎辭、言高則旨遠、
辭約則義微此理之常、非隱之也、聖人包周身之防、既
作之後、方復隱諱以辟患、非所聞也、

今夫二氏之所宗而事之者、（避就○回
互）下及公卿輔相、（融化）吾豈敢昌
言排之哉、（藏人主意）

二氏は、佛老也、今二氏を宗主として奉事する所の
者、下公卿輔相に及べば、退之何ぞ敢て公けに言て排
黜せんや、書大禹謨曰、禹拜昌言、韓文注、孫曰、昌言、
猶公言也、注避は、さけて人主の崇敬するを云さる
也、就は、ついて公卿輔相の專らに尊ふ所を云、回互
は、婉曲の意文を曲て直截に不云、今上自人主と云
べきを、云廻して云ぬ樣にして、又底心には其義を含
む也、融化は、氷の消、金の鎔るを云、上に天子を不
云して、只下及公—と云は、文章融化して、無圭角觸
諱耳に當る所あらず、藏人主意とは、退之敢て排斥
し難しと云内に、憲宗佛を好むの意を藏せり、蔣之翹
曰、此言其下者、猶是公卿輔相、蓋微詞以見上自天
子亦宗事二氏之意、但退之何以有此畏縮語、然則論
佛骨表、是亦不可已矣乎、

擇其可語者誨之、（擧輕明重）猶時與吾
悖、其聲譊譊、若遂成其書、（轉）則
見而怒之者必多矣、（重）必且以
我爲狂爲惑、其身之不能恤、（自抑其中）

云、二つの其字は、退之を指[注]練語とは、絹を練白めたる様なる語也、此句只うろりと云出すに非ず、段々相應ずる所あり、故に有意と云、下得好と云【謂愈一】張籍強く異見をする事は、退之が生質、道に至るべき者ありと思て也[注]重く説、輕率の語に非ず、

浚其源導其所歸、漑其根將食其實此盛德者之所辭讓、造語好○即重明輕、況於愈者哉、抑其中有宜復者故不可遂已、轉換

浚は、水をさらへて深くする也、導は、水道を引て遣也、浚其源導其所歸の一句は、水に比し、漑其根將食其實の、二句は、木に比す、皆張籍退之が學を進め、行を勵さんとする事を云、前の欲推而納一と云より以下に相應す、云心は水の源を浚して、大きに湧出て塞がらず、河海に歸入する所を導き、木の根に灌漑し枝葉を茂盛せしめて、果實を食んとす、此德盛なる人だにも、辭退して敢て我こそ仕て見せんと思ひこなさゝる所也、況や退之に於てをや[註]語を造る事、一段好と也、即重とは、盛德者之所辭讓の句を指て云、明輕とは、況於愈者哉の句を指て云【抑其中一】張籍が方より來れる書中に、返事して云分せいでは叶はざる者あり、故に遂に默して止べからず[注]上には張籍が異見するを承引し稱美して、此にて抑と反語し、轉じ換て、我云分をする也、蔣之翹曰、籍第二書更切當乃退之益不能下氣、答之不免自多强詞、

昔者聖人之作春秋也、既深其文辭矣、然猶不敢公傳道之口授弟子、至於後世然後其書出焉、其所以慮患之道微也、應、

前漢藝文志曰周室既微、載籍殘缺、仲尼思存前聖之業云云有所褒諱貶損、不可書見、口授弟子、弟子退而異言師古曰、謂人各執所見也丘明恐弟子各安其意、以失其眞、故論本事而作傳、明夫子不以空言說經也、春秋所貶損大人、當世君臣有威權勢力、其事實皆形於傳、是以隱其書而不宣、所以免時難也、及末世口說流行云云、孟子滕文公下篇、世衰道微、邪說

ことを開き給はられんことを、惟朝宗分別し圖り給れと也、

○答張籍書

【東萊曰】此篇節奏嚴絜、鋪叙回護分明、

韓退之

韓文十四、張籍遺韓文第一書云、籍不以其愚、輙進說於執事云云、夫老釋惑乎生人久矣、誠以世相沿化而莫之知、所以久惑乎爾、執事材識明曠、可以任著書之事、故有告焉云云、昔顏子之庶幾、豈待五六十乎、執事目不覩聖人、而究聖人之道、材不讓於顏子、顏子不著書者、以其從聖人之後、若顏子獨立於世、必有所云著也云云、註韓曰、新史曰、籍性狷直也、嘗責愈喜博塞、及爲駁雜之譏、論議好勝人、其排佛老、不能著書若楊雄孟軻以垂世、即謂此書也、退之が博奕を好み、佛老を排き、論議人に勝ん事を好て、世人駁雜也と譏る、故に張籍書を贈て、退之を諫む、退之其に答る所の書是也【注】節奏は、樂のふしあや也、文章の體格を云、嚴は、きつかとしたる事を云、絜は、潔と通用、清潔、いさぎよし、鋪叙は、文字をしきならべ次第する也、回護は、めぐりまもると讀、後にて前を云結び、前にて後に相應する樣に云述る也、此篇文章の物體嚴かに潔く、文字の鋪叙、前後の回護、分明にして混雜せず○萬里曰、此篇七段自篇首至遂已第一段自昔者至冀乎第二段、自今夫至敢也第三段、自然觀至爲哉第四段、自前書至名哉第五段、自夫子至思乎第六段、自孟君至末第七段、

吾子不以愈無似、欲推而納諸聖賢之域、練語、此句便有意下得好拂其邪心、增其所未高、謂愈之質、有可至於道者、重說、

吾子は、指張籍【無似】禮記哀公問曰、寡人雖無似也、註、無似、猶言不肖、疏、肖、亦似也、哀公謙退、言己愚蔽、無能似類賢人也【推而一】孟子萬章上篇曰、伊尹云云、思天下之民、匹夫匹婦、有不被堯舜之澤者、若己推而內之溝中、集註、推、吐回反、內、音納退之言ろは、張籍退之を以て、愚蒙の人とせず、推進めて聖賢の域中に納れ、其邪僻の心を拂ひ去て、其氣象未だ高からざる事を增んと思へり、域は區域、其境內を

也、はかりことゝ訓す、史記留侯世家、運籌帷幄之中【畫】廣韻計策【雕蟲】楊子法言、或問吾子好賦、曰然、童子雕蟲篆刻、俄而曰、壯夫不爲也、細工人蟲を雕物にするを喩て、文章ばかり巧なるは、小なる藝也と云【小伎】伎は、藝能也【大人】高官の人を云べし、易曰、利見大人、且人聖人に非ずんば、誰か能善を盡さん、況や李白が智謀、何ぞ能自ら矜伐せんや、然共制作の文章數百篇、卷軸を積成すに至ては、朝宗が視聽を穢んとす、憚りながら淸覽に入れんと也、恐くは童子雕蟲の戲の如なる文章の小藝、大人の心に合はざらん事を、

若賜觀芻蕘、請給紙筆、兼之書人、然後退掃閑軒、繕寫呈上、庶青萍結綠長價於薛卞之門、（青萍結綠劒名、）

【芻蕘】毛詩板篇、先民有言、詢于芻蕘、集註曰、芻蕘、采薪者、古人尙詢及芻蕘、況其僚友乎、又孟子梁惠王下篇注、艸曰芻、薪曰蕘【青萍結綠】注劒名、唐書李德裕贊曰、公之智決、利若青萍、青萍は劍名、文選曹子建七啓曰、佩則結綠懸黎寶之妙微、青萍、寶劍名、事文類聚續集、玉書曰、周有砥厄、宋有結綠、梁有懸黎、楚有和璞、晉有垂棘云云、吳都賦曰、隋侯於是鄙其夜光、宋王於是陋其結綠、銑曰、結綠、玉名、今此注に二つながら劒の名と云は誤也【薛】越絕書曰、越王勾踐有寶劍五、聞於天下、客有相劍者名薛燭、王召問之云云【卞】卞和也李白卑下して言は、若艸かり木こりの申す事をも、朝宗の御目に被入ことを給はゞ、請紙筆をあてがひ給らん事を、兼て某書出す文章の、淸書をする人をも給れ、左あらば李白退て閑軒を掃除し、繕ひ寫して呈上せん、庶幾は青萍の劒、結綠の玉薛燭卞和に見せて、價を增ん事をと也李白自らの文章を寶劍美玉に比し、薛卞を朝宗に比する也、

幸推下流大開獎飾、惟君侯圖之、

下流は、李白謙退して、凡下の流輩と云ふ也、奬は、進也、飾はかざりつくろふなり、李白云、幸に我等如きの下流のものを推し上ぼして、大きに勸めかざる

許瑩之徒、或以才名見知、或以淸白見賞、

【嚴協律】嚴武と云說あれ共、唐書を考るに協律郎に成める事も、韓朝宗が薦用する事も見へず、嚴は姓、協律郎は樂官也【崔宗之】日用子也、唐書列傳、宗之襲封幷州長史亦好學、寬博有風檢、與李白杜甫以文相知者【房習祖】【黎昕】【許瑩】並に唐書に無傳、此五人は皆韓朝宗が薦むる所也、嚴は朝廷に入て秘書郎と成、崔房黎許四人は、或は才名を以て天下に知れ、或は廉潔淸白を以て嘉賞せらる、

白每觀其銜恩撫躬、忠義奮發、白以此感激、知君侯推赤心於諸賢腹中、所以不歸他人而願委身國士、儻急難有用、敢效微軀、

朝宗が薦擧する所の者、其恩を銜て、躬を撫主恩を報んとして忠義の志を奮ひ發するを、李白每に見て、心に感動し、朝宗が丹誠を諸賢の腹中に推布ことを知と也、我誠心を推て人に布く故に人も亦感激して、忠義を奮發す、通鑑蕭王後漢光武自乘輕騎、按行部陣、降者更相語曰、蕭王推赤心置人腹中、安得不投死乎、所以に李白他人に歸せずして、身を朝宗が門下に委ん事を願ふ、史記豫讓傳、國士遇我、我故國士報之、國士は、執權を指て云、委は、託也、身を寄付る也、若朝廷急難なる事有て李白を用ひば、果敢して、微軀を效さんと也、難に臨で打死するを云論語學而篇、事父母能竭其力、事君能致其身、

且人非堯舜、誰能盡善、白謨猷籌畫安能自矜、至於制作積成卷軸則欲塵穢視聽恐雕蟲小伎、不合大人、

【盡善】論語八佾篇【謨】說文議謀也、徐曰、慮一事畫一計爲謨、汎議將定其謀曰謨、尙書有大禹謨、皐陶謨【猷】亦謀也、書盤庚曰、聽予一人之作猷【籌】算

也、世仕州郡爲冠蓋、同郡郭林宗嘗見允而奇之曰、王生一日千里、王佐才也、靈帝中平元年、黃巾賊起、特選拜豫州刺史、辟荀爽孔融等爲從事、討賊破之【未下車】禮記樂記曰、武王克殷及商、未及下車而封黃帝之後於薊云云【荀慈明】同書六十二、荀爽、字慈明、潁川陰人、父淑、字季和、擧賢良方正、對策、補朗陵侯相、莅事明理、稱爲神君、有子八人、儉、緄、靖、燾、汪、爽、肅、專、並有名稱、時人謂八龍、爽幼好學、十二通春秋論語、大尉杜喬見而稱之曰、可爲人師、爽、耽思經書、慶弔不行、徵命不應、潁川爲之語曰、荀子八龍、慈明無雙、獻帝即位、董卓輔政、徵之、爽欲遁不得就拜平原相、行至宛陵、追爲光祿勳、視事三月、拜司空、自被命及登臺司、九十五日、因從遷都長安、爽見卓忍暴、必危社稷、辟擧才略之士、將共圖之、會病薨【孔文擧】同六十、孔融、字文擧、魯國人、孔子二十世孫、幼有異才、年四歲與諸兄共食梨、融取小者、人問其故、曰、我小、當取小者、宗族奇之、年十歲詣京師、時河南李膺不妄接士賓、非當世名人、及通家、皆不得白、融欲觀其人、故造膺門云云、後爲北海太守、復爲大中大夫、融恃其才望、數戲侮曹操、操遂收融幷其妻子殺之、東坡曰、文擧以英偉冠世之資、師表海内、意所予奪、天下從之、此人中龍也、昔し王子師豫州の太守と成て、其任に往、未だ車より不下して、即ち荀慈明を召、已に車より下て叉孔文擧を召、共に從事として其助けとす注是より上は、皆朝宗が德を頌、

山濤爲冀州、甄拔三十餘人、或爲侍中尙書、先代所美、

【山濤】晉書列傳十三、山濤、字巨源、河內懷人、少有器量、介然不群、年四十始爲郡上計、擢擧孝廉、武帝時遷吏部尙書、出爲冀州刺史、甄拔隱屈、捜訪賢才、三十餘人、皆顯當時、官至右僕射、卒贈司徒、甄、稽延切、察也、明也、山濤冀州の刺史と成し時に、三十餘人を選み拔て、各其才能を揚顯す、皆人物勝れたる輩なれば當時に擧用られて或は侍中尙書と成者あり、是前代の稱美する所也、

而君侯亦一薦嚴協律、入爲秘書郎、中間崔宗之、房習祖、黎昕、

提、倚馬可待、李白幸に朝宗心顔を開張て、能接待せられよ、只少あひしらひ、長揖せらるゝ迄にて、拒み斥けられざらん事を願ふ、必ず若高宴を以て接遇し、縦まゝに清談する事を被聴ば、請毎日に一萬言ばかりをも試み書せられよ、即時に筆を立て書示すべし、馬に倚て待つ間に呈覧すべし、文才敏達なる故也、

今天下以君侯爲文章之司命、人物之權衡、一經品題、便作佳士、

司命は、命令を總司するの義、一説に、宰相の民命を司り將帥の軍命を司るの義也、星に司命と云あり、道士に司命觀あり、故に山谷石牛洞の詩に、司命無心播物と云【權】は、秤の錘也【衡】は、秤の竿也、輕重を量る物也【經品題】後漢許劭傳曰、好共覈論鄕黨人物、毎月輙更其品題、其位の人、其題目の人と、品を分ち評判するを品題と云、今天下の人、朝宗を以て、文章の總司、人物の輕重を定むる權衡とす、人一たび朝宗が品評を經て、其許可を得れば、即ち善士と成と也、

而今君侯何惜階前盈尺之地、不使白揚眉吐氣、激昂青雲耶、

以上皆頌德自薦之辭、

【惜階前―】階は、堂に升る階也、盈尺は、一尺に滿るの地、甚だ狹小なる事を云、員半千詩、何惜玉階方寸地、皮日休集、惜幕間一足地【激昂】激は、水の岸や石などに當て、躍り上るを云、昂は、頭を上る也、人の志意を得て、首を昂、威を振ふ貌【青雲】史記伯夷傳曰、非附青雲之士、惡能施于後世哉、丹鉛總錄云、青雲之士、謂聖賢立言傳世者、孔子是也、附青雲、則伯夷顏淵是也、後世謂登仕路爲青雲謬矣、但し今は登仕路を云べし、李白言ろは、今朝宗何ぞ堂下階前の尺地を惜て、某をして其間に召寄、眉目を揚、辭氣を吐て、青雲の間に奮激昂擧せしめざるや、仕途に登て、意氣揚々たらん事を求むる也、

昔王子師爲豫州、未下車、即辟荀慈明、既下車又辟孔文擧、

【王子師】後漢書列傳五十六、王允、字子師、太原祈人

雄は英雄、萬人の長也、然る間諸侯王子公卿、皆李白が氣槩勇義を許容し與ふ、尤と同心する義也、疇曩は、皆むかしと訓す、隴西の布衣と云より、皆我身の心行を述、李白我若年よりの心立行跡を、朝宗に悉く説示さゞらましやと也、

君侯制作侔神明、德行動天地、
筆參造化、學究天人、

制作は、作爲する所を云、禮樂文章を初めて、萬事に通ず、然共今は、文章を作り出すを云【侔神明】とは、天地の神明に同く、神妙にして測られず、明察して鑑の如くなるを云、易上係辭曰、神明其德、下係辭曰、以通神明之德【德行】は、道德の行跡也、我身義理を心に得て、能道を行ふを云、易象下、議德行、論語、德行則顏淵閔子騫云云【動天地】とは、天神地祇を感動する也【筆參造化】とは、天地の間、陰陽の氣萬物を生化する者を、造化と云、亦造物とも、化工とも云也、造化の萬物を生ずるが如く、詞華言葉筆に隨つて巧みに作る、筆生花と云の類也、參は、三と通ず、天地と並て三と成の意也、中庸二十二章曰、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣、又參錯の義なれば、まじはる也【學究天人】とは、其學廣博にして、天と人との事を究め知也、朝宗が制作天地の神明に同じく、身の行ふ處、皆道德にして、只能人を化導するのみならず、亦能天地を感動す、且又文章巧みにして、筆造化の功に相並び博學宏識、天人の道理を究め盡せり、此段は、朝宗を稱揚して云、

幸願開張心顏、不以長揖見拒、
必若接之以高宴、縱之以清談、
請日試萬言、倚馬可待、

【開張心顏】とは、人を忌嫌ふ時は、心狹く目閉る者也、左樣にはせず、心目を開張して、愛幸談論せよと也、出師表曰、開張聖聽【不以長揖見拒】史記酈食其傳曰、沛公略地至高陽、召食其入見、沛公方踞牀、使兩女子洗、食其長揖不拜云云、揖、字彙、拱揖説文手著胸曰揖、をほよそに時宜をするを長揖と云【倚馬―】世説曰、桓宣武溫征鮮卑、喚袁粲作露布、倚馬手不輟筆、俄成七紙、學林作袁宏、靑松曰、作文敏

を按て上り、從約を殿上に定む、平原君已に從を定めて歸る、於是置酒して云、毛公先生一度楚に至て、趙の國をして、九鼎よりも重からしむと云て、引て座上第一の客とす、九鼎の義は、弔屈原賦の注にあり、左傳桓公二年註疏曰、戰國策稱齊救周求九鼎顏率謂齊王曰、昔周伐殷而取九鼎一鼎九萬人挽之、九鼎八十一萬人挽之【君侯—】朝宗富貴を以て士に驕らず、寒賤の人を以て忽略せずんば、門客三千の中に、必ず毛遂が如なる者有べし、李白自ら毛遂に比擬す、李白をして錐の嚢中に在て、其穎脫て出る事を得せしめば、即ち毛遂ならんと也、能我を用ひば、大きに功能を顯はさんと云意也、

白、隴西布衣、流落楚漢、十五好劍術、徧干諸侯、三十成文章、歷抵卿相、雖長不滿七尺、而心雄萬夫、皆王公大人、許與氣義、此疇曩心跡、安敢不盡於君侯哉、

隴西は、蜀の國、東の方秦と相鄰る、唐書文藝傳曰、李白字太白、興聖皇帝（才子傳或曰、凉武昭王暠）九世孫、十歲通詩書、蘇頲見而異之曰是子天才英特、少益以學、可比相如、然喜縱橫術、擊劍爲任俠、輕財重施、天寶初自蜀至長安、往見賀知章、知章見其文歎曰、子謫仙人也、言於元宗、召見金鑾殿、論時事、因奏頌一篇、帝喜賜食、親爲調羹、詔供奉翰林云云、代宗立以左拾遺召、而白已卒、年六十餘、才子傳曰、白晩節好黃老、度牛渚磯、乘酒捉月沈水中、漁隱叢話前集五山谷云、太白、豪放、人中鳳皇麒麟、李白は、蜀の隴西の布衣にして、楚と漢との間に、放流牢落す、布衣は、出師表の注に見へたり、論語、子曰、吾十有五而志學三十而立、李白年十五にして劍法を好み、縱横の術を喜で、任俠して彼方此方遍く諸侯に干し見ゆ、干は推參する意也、後に學問を好み、三十歲にして文章を成就し、歷く公卿宰相に至り謁す、抵は、至也、曾子固曰、李白詩集二十卷、舊七百若干篇、今九百若干篇、李白身の長は七尺に不滿と云共、心は萬人に雄長せり、唐の尺に長短あれ共、古尺は大方日本の大工の曲尺の六寸餘りに當ん歟、然れば七尺五尺許りならん、

元を鳳雛と云も、其人の才德勝れたるを稱する也、所以の二字は、上を承て云、此故に天下龍の蟠るが如く、鳳の逸するが如なる賢士、皆朝宗に名を知收られ、其人品の甲乙を定められん事を思ふ、君侯は、朝宗を指て云、

君侯不以富貴而驕之、寒賤而忽之、則三千之中、有毛遂、使白得穎脫而出、卽其人焉、

【史平原君傳】秦圍邯鄲、趙使平原君求救合從於楚、約與食客門下有勇力文武備者二十人偕、得十九人、餘無可取、門下有毛遂者、自贊於平原君曰、遂聞君將與二十人偕、今少一人、願以遂備員而行、使遂早得處囊中、乃脫穎而出、非特末見而已、平原君竟與遂偕至楚、定從於殿上、平原君已定從而歸曰、毛公先生一至楚而使趙重於九鼎、人皆以爲上客、

注平原君傳は史記の列傳十六にあり、平原君、名は趙勝趙の諸公子也、諸子の中に勝尤も賢にして、賓客を好めり、賓客至る者數千人秦より邯鄲を圍める時、平原君を使として、楚に往て救を求めしむ、合從は、秦を除て、關東の六國、相共に從約するを云、過秦論の注に詳か也、食客は、牢人にて、平原君に寄食する者を云、門下は、平原君が所從也、平原君期約して、我食客門下の中にて、勇力にして文武の才備る者、二十人を得て、倶に往んと云、擇みすぐりて十九人を得たり、今一人なれ共、其餘に取用ふべき者なし、門下の中に、毛遂と云者あり、進み出て、平原君に自贊して云、某承り聞り、君二十人を引ひて倶に往んとして、今一人を缺と也、願くは某を以て、其員數に備て往け、平原君が云、先生我門下に居る事何年ぞ、毛遂三年ありと云、平原君が云、夫賢士之處世、譬若錐之處囊中、其末立見、今先生處勝之門下、三年于此矣、左右未有所稱誦、勝未有所聞、是先生無所有也、先生不能、先生留、毛遂曰、臣乃今日請處囊中耳、遂をして早く君の囊の中に居る事を得せしめば、穎脫けて出ん、只其末の見はるゝ耳には非じ、穎は、禾穗、かひと讀り、のぎさきを云、此にては錐の尖りを云、只少し才能の見はるゝ迄にては有まじ、大きに功を顯はさんと也、平原君竟に毛遂と倶に往、楚に至て毛遂十九人と論議す、十九人皆服す、平原君楚と合從して其利害を云、日出る時よりして是を云とも、日中までに決せず、十九人毛遂に謂て云、先生上れ、毛遂劍

て、天下に貴き人なれ共、士の至る者あれば、即時に出て相遇、若髪を沐ふ時に當れば、洗ひさして髪を握りながら一沐に三度迄出食する時には口に哺るを吐て、一飯に三度迄起て、士を待遇す、あひしらふ義也、如此にして、猶天下の賢人の心を取失ん事を恐る、汝能謹で國を治むべしと云り、李白云心は、韓哀れ周公の風を以て、自ら飯を吐、髪を握るの事を行ふて、海内の賢士をして追慕て、皆其門に來歸せしめざらんや、豪俊は、千萬人に勝れたる者也、

一登龍門、則聲價十倍、

〔後李膺傳〕人有被其容接者謂之登龍門

後漢書列傳五十七、李膺、字元禮、潁川襄城人、性簡亢無所交接、唯以同郡荀淑爲師、陳寔爲友、擧孝廉高第、遷河南尹、及黨議起、流言轉入太學、諸生三萬餘人郭林宗賈偉節爲其冠、並與膺、陳蕃、王暢、更相褒重、學中語曰、天下模楷、李元禮不畏强禦陳仲擧、天下俊秀、王叔茂云云、膺拜司隷校尉、諸黃門常侍皆鞠躬屏氣、休沐不敢復出宮省、是時朝廷綱紀頽弛膺獨持風裁、以聲名自高、士有被其容接者、名爲登龍門、靈帝時、曹節諷有司奏捕前黨、膺等皆死獄中〔注〕李膺性簡重にして亢直也、容は、禮容又受容也、接は待遇、あひしらふ也、人李膺が容接を蒙る者あれば、是を登龍門と云、龍門の瀑、水極て急にして、魚上る事を不得、若能躍て登り得る者あれば、化して龍と成、符子曰、觀於龍門、有一魚奮鱗鼓鬐而登乎龍門而爲龍、三秦記曰、江海集龍門下登者化龍、不登者點額暴腮、李膺が容接の得難きを、龍門に比し、才德の人、其容接を被るを、魚の龍門に登るに喩ふ、今韓朝宗が知識を得るをも、亦登龍門に比す、一度朝宗が識を受れば、其人聲價十倍す、聲は、名譽也、價は、價直也、木の匠石に顧られ、馬の伯樂に遇て、其價を增が如く、重名を得る也、

所以龍蟠鳳逸之士、皆欲收名定價於君侯、

龍蟠は、龍の蟠まりて蟄し居り、未だ雲雨を得ざる者也、周易の潛龍、諸葛孔明が臥龍の如し、才德の人の、未だ世に出ざるに喩ふ、鳳逸は、鳳凰の超逸して、高く飛也、弔屈原賦の鳳凰翔乎千仭と云が如し、龐士

善、特賜中上考、帝傳位太子、朝宗與將軍龐承宗諫曰、太子雖睿聖、宜且養成盛德、帝不聽、累遷荊州長史兼開元二十二年、初置十道採訪使、朝宗以襄州刺史兼山南東道、襄州南楚故城、有昭王井、傳言汲者死、行人雖喝困、不敢視、朝宗移書諭神、自是飲者亡恙、人更號韓公井、坐所任所吏擅賦役、貶洪州刺史、天寶初召爲京兆尹、分滻水入金光門、滙爲潭以通西市材木、出爲高平太守、始開元末、海內無事、訛言兵當興、衣冠潜爲避世計、朝宗廬終南山、爲長安尉霍仙奇所發玄宗怒使侍御史王鉷訊之、貶吳興別駕卒、朝宗喜識拔後進、嘗薦崔宗之嚴武於朝、當時士咸歸重之、李太白が事は、春夜宴桃李園序の注にあり ○萬里曰、此篇六段、自篇首至十倍第一段、自所以至人焉第二段、自白隴至雲耶第三段、自昔王至所美第四段、自而君至微軀第五段、自且人至末第六段、

白聞天下談士相聚而言曰生不用封萬戸侯、但願一識韓荊州、何令人之景慕、一至於此、

談士は、談說の士、辯舌口才の人也、但し今は、強ちに蘇秦張儀が輩を云に非ず、萬戸侯は、在家一萬ある地の知行主とし、諸侯の並にするを云、景慕は、景仰の意、景、猶影也、影の形に隨ふが如く、其人を深く思ひ慕ふ義也、李白常に聞及べり、天下談論の士、相集て物語して云らく、士の萬戸侯に封ぜらるゝは、生涯の面目なれ共、一旦の榮利は差て用ひず、只願はくは、一度韓朝宗に見知られん事を、韓朝宗有德の人にして、輕々しく士を許容せず、其人を能知て、後に才能を稱して進用す、故に其知識せらるゝ事を得れば、士の大幸とす、是何故にか、天下の士人をして、追慕せしむる事一同に如此なるに至れるや、

豈不以周公之風、躬吐握之事、使海內豪俊、奔走而歸之、〔魯世家〕周公戒伯禽曰、我一沐、三握髮、一飯、三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人、

注 魯世家は、史記の世家第三也、周公の子伯禽、魯に封ぜられて國に往時に、周公戒めて宣はく、我は文王の子、武王の弟、今の王成王の叔父也王家の至親にし

れども、祿を求るには便利ならず、其の所求得ずんば、其行道爲文者、必ず科擧を司どる人を怒り怨みなん、君子は、蓋し韓公自らを云ふ、君子たる人、必ず行道爲文ことを求めんや否やを不知となり、必爾は、必然也、韓文注曰雖、或作誠、或雖上有誠字【注】前に同じ、

故區區之心、每有來訪者、皆有意於不肖者也、略不辭讓、遂盡言、惟吾子諒察、

【區區】小なる貌【不肖】弔屈原賦の註にあり、此は退之自ら言也【盡言】易の係辭に云、書不盡言、言不盡意、言字の下、本集の注に曰、一有之字【諒】亮と通す、照察也、察字の下、本集には、愈頓首の三字あり、又一本には、愈白の二字あり、韓公自ら云、故に、我區區の心、每に來て、退之を尋問者は、皆退之に情意有て、棄絕ざる者也、一說に云、每に來訪する者は、皆退之に請益すると有意輩也、蓋し文章不然、必ず是誤ならん歟【略不――】是よりは韓公陳商に、其心底を告る事を云、前の愈敢不吐露情實の義也、陳商懇に巽見せらるゝ程に、退之も亦少しも辭退遜讓せず、遂に心中を盡して言之、陳商能我愚意を照察せられよと也、

○與韓荊州書

韓朝宗、元宗時人、爲荊州刺史、人皆景慕之、李白與此書、膾炙人口、學者不可不讀、

李太白

【注】韓朝宗は、唐の元宗の時の人、荊州の刺史と成、朝宗德勝れたれば、人皆仰ぎ慕ふ、景は、影の形に隨ふが如く、仰ぎ慕ふ義也、李白此書を呈して、其薦擧せん事を求む、文辭奇絕にして、人の口に賞誦せらる、學者必ず讀べき者也、元宗は、即ち玄宗也、孟子盡心下篇曰、膾炙與羊棗孰美、集註曰、肉聶而切之爲膾、炙、炙肉也、膾や炙の口に佳なる如く、文章を賞誦せらるゝを、膾炙と云、唐書列傳四十三有韓朝宗傳、韓思復子朝宗、初歷左拾遺、睿宗作乞寒胡戲、諫曰、昔辛有過伊川、見被髮而祭、知其必戎、今乞寒胡非古不法、無乃爲狄道路籍籍、咸言皇太子微服觀之且匈奴在邸、刺客卒發、大憂不測、白龍魚服、可深畏也、況天象變見、疫癘相仍、厭兵助陰、是謂無益、帝稱

好で、瑟を好まざる故に、三年までに不呼入、瑟を鼓者腹立して叱て曰、我瑟を鼓ば、能鬼神を感動して上下せしむ、又瑟を鼓こと、黄帝の樂に合ふと云、案ずるに此段は、齊王竽を好むの證とする迄也、韓非子の故事とは相違せり、蓋し退之自ら託し作れる歟、董份曰、三句連下三鼓瑟字、而首句却倒一字、曰吾瑟鼓之、眞天然句法、不求奇而自奇【注】前漢書律曆志上云、律十有二云云、其傳曰、黄帝之所作也云云【譬喩―】退之喩を以て理を明すに長せり、本孟子を學べり、

客罵之曰、王好竽而子鼓瑟、瑟雖工、如王之不好何、是所謂工於瑟而不工於求齊也、〔謝云〕文婉曲有味、

齊王の内に、他國より牢人にて客と成居る者、瑟を操る者を叱り罵て云、我王は本竽を好めり、而るに子は瑟を鼓、瑟工みに上手也と云共、王の瑟を好まざる事を如何せんや、是迄は喩也、蔣之翹曰、瑟字句絶、諸本如此、或獨以鼓爲瑟而爲句絶、其下瑟字、乃屬下句、又一本上亦作瑟而下作之、皆非是【是所謂―】の二字を以て見れば、古語也、齊に仕る事を求めば、竽を吹てこそ可然に、瑟を以てするは、瑟には上手なれ共、齊に仕ん事を求るには、無調法なる也、是は古文を作るに工者なれ共、今唐の時に游宦するには合ざるに喩る也、下の文に詳かに說之【注】〔文婉―〕文章婉曲にして直截ならず、云廻して味あり、蔣之翹曰、婉而宕、筆力輕俊如此、

今擧進士於此世、求祿利、行道於此世、而爲文、必使一世人不好、得無與操瑟立齊門者比歟、文誠工不利於求、求不得、則怒且怨、不知君子必爾爲不也、文婉曲而有味、

今の世進士に擧られん事を求め、祿利を求めるとて、道を行ひ、古文を作らば、必ず當世天下の人、敢て好まじ、然らば瑟を操て齊の門に立てる者と同じかるべし、比は、擬也、校也、相似たる意、文は誠に上手な

棄絶、其上に身を守る所を以て敎へ喩さるゝ事は、退之が幸甚しと也、知、俗本作智、且、一本作具、

愈敢不吐露情實、然自識其不足補吾子所須也、

敢字、此にては何字の意、本集に無露字、情實は、皆まことゝ訓ず、心中に所懷也、吾子は、相手を指、謂陳商也、韓文注云、須、求也、意所欲也、陳商懇に異見する程に、退之何ぞ心中の情實を吐露さゞらんや、而も自ら陳商が求むる所を補ふに足ざる事を知、退之陳商が異見の如くには成まじきと也、

齊王好竽、【韓子十二篇】齊宣王好竽、南郭先生不知竽、而濫吹三百人之中、以飲食祿、有求仕於齊者、操瑟而往、立王之門、三年不得入、叱曰、吾瑟鼓之能使鬼神上下、吾鼓瑟合軒轅氏之律呂、【前律曆志】陽六爲律、陰六爲呂、黃帝之所作也【疊山云】譬喩學孟子、

注【韓子十二篇】按ずるに韓非子卷九第三十篇内儲說上曰、齊宣王使人吹竽必三百人、南郭處士請爲王吹竽、宣王說之、廩食以數百人、宣王死、湣王立、好一一聽之、處士逃、齊の宣王竽を吹ことを好む、必ず三百人そろえて齊しく吹南郭先生と云者竽を吹ことを不成して、齊に往て竽を吹んと申す、宣王悅で、三百人の中に入て、扶持方を給ふ、南郭まじりとして、濫りに其樂人の中に雜りて、御倉の米を食つぶし居れり、濫吹の義は北山移文に見へたり【操】琴瑟をしらぶる也【叱】は、人をしかる也【能使鬼―】書舜典曰、八音克諧、無相奪倫、神人以和、禮記樂記曰、及夫禮樂之極乎天而蟠乎地、行乎陰陽而通乎鬼神、窮高極遠而測深厚、又曰、禮樂偩天地之情、達神明之德、降興上下之神云云、天地の鬼神、瑟の音に感じて、上なる者は降り、下なる者は升る也【合軒轅―】史記、黃帝者、少典之子、姓公孫、名曰軒轅、索隱曰、黃帝居軒轅之丘、因以爲名、又以爲號、蔣之翹韓文注曰、但以絲聲太細、恐其掩於衆樂而不可聽、故大其器、使其聲重大而與衆樂相稱耳、其中固自有五聲、而聲必中律呂也、齊王竽を好む、或者齊に仕へん事を求めて、瑟をあやどつて、往て齊王の門に立、齊王は竽を

萬姓統譜曰、陳商、德宗時與王沖霄同隱馬仁山、江表從學者衆、後應詔射策、仕至卿、韓文集注曰、商、元和九年進士、會昌五年爲侍郎典貢擧、此書乃商未第前、以文求益於公、爲國子先生時作也、此書は本集十八載之、陳商書を退之に贈て有所諫、退之答るに此書を以す【注】道理を明曉にする文を以て、仕を當世に求れば、時の好む所と相違す、不投は、其好みに打入合せぬ也【如操瑟―】本文に詳也、時に合ぬ事をするは、喩ば齊王竽を吹ことを好めるに、瑟を調べて、齊王の門に立が如し【然君子―】され共君子は、時に從て己を不枉、故に君子の守る所は、時の爲に遷り就ことをせず、節操を改め換ざる義也、俗本に、隨作遁、遷作迁、誤也、韓文蔣之翹題注曰、引喩甚佳、甚逼眞戰國策文字、顧充曰、好作奇語、自有一種才料、但當以理爲主、理得而辭順、文章自然出奇、觀退之答陳商書、婉曲而奇、不待繩削自合矣、錢穀曰、譬喩之妙、自孟子莊子外、吾獨取韓退之、彼其意到筆隨、思餘語止、伸縮變化、惟所欲爲、吾不得而窺其際焉

○萬里曰、此篇五段、自篇首至幸甚第一段、自愈敢至須也第二段、自齊王至齊也第三段、自今擧至不也第四段、自故區至末第五段、

愈白、辱惠書、語高而旨深、三四讀尙不能通曉、茫然增愧赧、又不以其淺弊無過人智識、且喩以所守、幸甚、

白は、告也、孟子盡心下篇曰、言近而旨遠者、善言也、【茫然】不分明貌、此にては不心得義也【愧赧】唐書閻立本傳曰、瞻望坐賓、不勝愧赧、赧、乃版切、說文、面慙而赤也【淺弊】才能淺く弊れて用られざる也、弊は、故く敗る也、やぶると訓ず、今の學徒ついゆと讀は誤也、言心は、退之敬白陳商、此間辱く書を與へらる、其語高して卑からず、趣深くして淺からず、此一句は、先稱揚する也、三四度もくり返し讀ども、猶其意に通じ曉る事能はず、茫然とほれ〴〵として、自ら心愧面赤ことを增、此二句は、陳商が退之に、己を屈して時に隨へと異見するに依て、退之同心せず、何と思案しても、合點ゆかぬ事を云也、抑る也、又退之が才能淺弊にして、人に過たる知識なき者なれ共、不

家老迄申上ると也、冒進とは、推參を顧みず、進獻する也、累は、苦勞を係る意也、不自量とは、我分限を量らざる也、又其材能を度らざるにも成也、已字の下本集の註に云、一有也字、然れ共貴公某を如何底の者とか目利し給ふぞや、御心中量し難しと也、

昔人有鬻馬不售於市者、知伯樂之善相也從而求之、伯樂一顧、價增三倍、【春秋後語】蘇代欲見齊王、齊王怨蘇秦、欲用蘇代、不說見、代乃說淳于髡曰、人有賣駿馬者、比三旦立於市、人莫與言、及見伯樂還而視之、去而顧之、一日而價十倍足下有意爲臣伯樂乎其與其事頗相類、是故始終言之耳、

本集作昔者、售、承詔切、說文、賣物去手也、昔し馬を賣んとて、市に往て久く在れ共、人凡馬也として不買、伯樂が能馬見知たりと聞て、伯樂に從て彼馬を相して給れと求む、伯樂過りて一度見廻らす、市に集まる人大に驚きて、扨は良馬にて有けりとて、忽ちに其價を增こと三倍也【注】春秋後語は、周の末春秋の後戰國の時の事を記したる書也、即ち戰國策也、蘇代は、蘇秦が弟也、史記に有傳、蘇代齊の威王に見へん事を思ふ、威王蘇秦が存生の時、嘗て我を欺ける事を怨る故に、蘇代を用んとは思へ共、見ん事を悅びず、蘇代往て淳于髡に說て云、人駿馬を市に賣者あり、三日に及ぶ迄、市に立とも人馬主と與に彼馬の事を云者なし、伯樂他所より還るとて、彼馬を見、行過て又顧る、人是を見て、大きに目を付替て、只一朝に其直十增倍に求む、足下淳于髡殿情あらば、臣蘇代が爲に伯樂と成て、齊王へ手引し給はらぬ歟と云【足下】は、其相手を指云、其人を敬して、足の下まで申入ると云意也、猶天子に陛下と云、宰相に閣下と云が如し、春秋戰國の時に、其方と云辭也【某與—】某が貴公に望む事、馬の伯樂に知るゝ事を求ると、大に相似たり、是故に發端より終篇、馬の伯樂に遇ことを以て云耳、耳字下、本集有某再拜三字、梅菴曰、首擧木與馬、至其尾、不擧木而以馬一事終之、文章法度、

○答陳商書　　韓退之

以明理之文而求仕於當世、不投時好、如操瑟而立於齊門、不能投合齊王之好竽、然君子之所守不隨時而爲之遷就、

此なる美好の材木を不見、而るに先生匠石視る事を肯ぜざるは、何故ぞや、肯は、うけがふと讀、合點するを云、匠石が云、彼木の事をば云こと勿れ、散木也、林希逸註、言無用散棄之木也、何の用にも不立、散じ棄べき木なる事を云以て舟に作れば水に沈み、棺槨に作れば速かに腐、器物に作れば速に破れ傷ふ、屋の柱とすれば虫食、是良材に非る木也用ふべき所なし、故に人伐用ひずして如此長命なる也、

以某在公之宇下非一日而又辱居姻婭之後是生于匠石之園長于伯樂之廐者也、

某は、今薦むる所の者を指【宇下】左傳昭十三年、諸侯事晉、未敢携貳況衞在君之宇下敢異志、注、屋宇之下【姻婭】孫曰、爾雅、壻之父曰姻、兩壻相謂曰婭、詩、瑣瑣姻婭、某公が閣下に居ること已に久し、而して又辱く緣坐の末席に在、是木の匠石が園に生育し、馬の伯樂が廐に成長する者の如し、某初めより能處に依居る事を比喩して云也、

於是而不得知假有見知者千萬人亦何足云耳、

能處に居り能人の緣者にて在ながら、其人に能者と知られずんば、假令他人千萬人に知らるゝ事あり共、木の匠石に顧みられず、馬の伯樂に遇ざるが如し、發端の句に照應す、耳字、韓文には作爾、注曰、一無爾字、

今幸賴天子每歲詔公卿大夫貢士若某等比咸得以薦聞是以冒進其說以累於執事亦不自量已然執事其知某何如哉、

今幸に天子每歲、公卿大夫に詔命して、士を擇で進貢せしむ、賴は、憑也よると讀り、又幸也、某等が類の如なる者皆薦進奏聞せらるゝ事を得たり、比は、類也、法華經曰、如我等比、比頃の比とすべからず、一本無比字、是を以て貴公は薦められね共、諸人の薦擧せらるゝに就て、某も身上の事を進め説て、憚り乍ら御

也、矢の的に中るが如く、刀の肌に觸るが如く、能道理に當るを云【簡明】は、文簡要にして明白也【圓活】圓なる物は必ず活動す、意圓にして、少しも滯らず、活て動く也○梅菴曰、此篇五段、自篇首至足也第一段、自以某至者也第二段、自於是至云耳第三段、自今幸至如哉第四段、自昔人至末第五段、

木在山、馬在肆、過之而不顧者、雖日累千萬人、未爲不材與下乘也、

本集には、發頭に某聞の二字あり、莊子曰、求馬於唐肆、注、肆、猶厩也、又市店也、不材は、惡木にて棟梁の用に成ぬを云、下乘は駑駘也、首の句より喩て云、木の山にある時、馬の肆にある時に、目利を知ぬ者、其傍を過れ共、顧みざる者は、每日千萬人を累ぬと云共、未だ必ずしも其木不材なるに非ず、其馬駑駘なるに非ず、

及至匠石過之而不睨、伯樂遇之而不顧、然後知其非棟梁之材、超逸之足也、

【莊子人間世】匠石之齊、見櫟社樹、其大蔽牛、其可以爲舟者旁十數、觀者如市、匠石不顧、弟子走及匠石曰、吾未嘗見材如此其美也、先生不肯視何邪、曰、勿言之矣、散木也、以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、以爲柱則蠹、是不材之木也、無所可用、故能若是之壽○伯樂事見二卷、

匠石は、戰國の大匠、石は名、能木の目利をする者也、過木集作遇、伯樂は、能馬を知者也、詳に雜說の注に見へたり、棟梁は、屋のムナギウツバリ也、良材ならでは用ひられず、超は、越也、逸は駿也、足早く、堀岸をも能飛過るを云、又凡馬に超勝たるをも云べし、山にある木、匠石通り過れ共不見、肆にある馬、伯樂遇見れ共目を不留に至て、而後扨は良木に非ず、駿馬に非る事を知と也【注】【莊子―】林注、櫟、木名也、社之中、有此櫟木也、匠石齊に徃時に、櫟社の樹を見る、櫟は樗櫟、あふちと訓す、本艸綱目を考れば、ぬるで也、其木大に成ても棟梁の用に不中、故に散木と云、其大さ牛を蔽すとは、廣さを云、此句下云、絜之百圍、其高臨山、十仞而後有枝、其可以爲舟者云云、注、枝可爲舟、則其身可知矣、舟に作るべき者十本許りも其旁にあり、觀る者市の如し、匠石通りて顧みず、匠石が弟子後より走り、追付て問て云、我未だ昔より如

稱於天下曰知己則未也、受人之恩與受人之知不同、感恩易、感知己難、故曰士爲知己者死、此兩句下得妙、

孫曰、任昉代范雲謝表云、千秋之一日九遷、荀爽之十旬速至、方之微臣、未爲速達、文選李周翰注、車千秋自園寢郎論戾太子事一日起至大鴻臚、史記、豫讓曰、士爲知己者死、女爲説己者容、若張公退之が所望を不許して、上に所言の如ならば、毎日千金の賜を受、一歳に九度官位を遷し進めらるゝ共、恩遇を感ずる事は有べし、天下に稱ぜられて、張公は退之が知己と云れん事は、未しきこと也、知己は、知音也【注】人の恩德を受ると、人の己を知ことを受ると、同じからず一旦人の恩を受感する事は易く、我を見知ことを感ずる事は難し、故に士は己を知者の爲に死すと云【兩句―】感恩則―と云より下の兩句、此に下し得て妙也、

伏惟哀其所不足、矜其愚、不錄其罪、察其辭而垂仁採納焉、此三句無緊要、句法亦不苟且愈恐懼再拜、

伏惟の二字は、敬して云時に書辭也、退之が材能の所不足を哀れみ、愚鈍なるを憐て罪を免し、所云の辭を察し、慈仁を垂て、其所望採納し給へと也、採納は、合點し納受する也【注】此三句は、差て干要なる語なしと云共、句法亦粗末當座やかなひなるに非ず【恐愼】は、其人を敬して恐愼る也、

○爲人求薦書　　韓退之

終篇以馬遇伯樂之顧、便增價、比喩人才遇知己者之賞識、便至入用、起以木與馬對説起、亦的切、文簡明而意圓活、

韓文十七載之、此書は、退之人に代つて、官位を薦ん事を求るの書也、而して何人の爲にする事を不知、亦退之何れの年なるも不知、又何れの人へか呈すと云事も不知、但し四たび博士たりし時に、侯喜等十人を祠部員外郎に薦む、陸傪、字は公佐、是時權德與貢擧を典る、貞元十六年陸傪祠部員外郎と成、此書盍し陸傪爲に權德與に呈す歟【註】全篇馬の伯樂が見廻るに逢へば、即ち名馬の譽を得て、價値を增と云を以て人の材能ある者、我を見知者を嘉賞し、知識するに遇は、即ち官に入れて用ひらるゝに比し喩ふ、起句に木と馬とを以て相對して説起す【的切】的當親切の義

又將曰、韓愈之識其所依歸也如此、十一字句韓愈之不諂屈於富貴之人如此、十三字句、韓愈之賢、能使其主待之以禮如此、十四字句〇又連下三個、如此字、長短錯綜、此章法也、則死於執事之門無悔也、一段文勢、如狂瀾浩波、只此一句截斷、有氣力、

天下の人、又退之が依賴み飯宿する所を知こと如此、退之が直言して、富貴の人に諂ひ屈まざる事如此、退之が賢にして、所依の主をして、退之を待遇するに、禮義を正さしむる事如此と云はゞ、退之張公が門下に老死す共、後悔する事無らん【其主】孔子主顔濁鄒家、主遽伯玉家と云の主字也 注 十一字句十三字句十四字句、又三つの如此の字を連ね下す、長短錯綜す、是章の法也【一段―】此一段の文勢、狂驚せる海濤、洪大なる波浪の如し、而して只此則死――と云一句を以て、收拾截斷す、甚有氣力筆法也、

若使隨行而入、逐隊而趨、言不敢盡其誠、道有所屈於己、天下之人、聞執事之於愈如此、皆曰、執事之用韓愈、哀其窮、收之而已耳、韓愈之事執事、不以道、利之而已耳、前段說話、此一反只用六句、頓挫、波瀾絕妙、

行は、行列也、隊は、羣也、又行列、唐詩、畫袴朱衣四隊行、若張公退之を人並に行列に隨て院に入、群隊を追て奔走せしめば、言敢て誠を盡して直諫せず、己に於ては道を枉屈する所あるべし、天下の人、張公が退之を屈する事如此也と聞ば、皆張公が退之を擧用る事は、只退之が困窮を哀れみて、收め取て職に就る耳、退之が張公に仕る事、道を以てはせずして、只利の爲にする耳と云ん 注 前段に所望の品を說述、此にて一變して、上の意に反し、只六句を用て頓挫す、きりきりと引收むる也、文章波瀾の如にして、句法絕妙也、

苟如是、雖日受千金之賜、一歲九遷其官、感恩則有之矣、將以

上の直言素氣なるを救ひ得て好、是則ち婉曲也、

愈蒙幸於執事、其所從舊矣、若寛假之使不失其性、加待之、使足以爲名、寅而入、盡辰而退、申而入、終酉而退、率以爲常、亦不廢事、

本集愈下有之字【寛假】詩、昭假遲々、箋曰、假、暇也、寛假天下之人遲々然、正義曰、假借之義、故爲暇也、

退之汴州の亂を避て、張公を頼み居る、張公奏聞して退之を推官とす、是蒙幸於執事其由來久し、若此番直の訴訟を聞分られ、寛やかに恩意を假して、退之が本性を失はざらしめ、彌々待遇してのあひしらひ、退之が正直の名を成すに足しめんとならば寅にして院に入辰過て家に皈り申にして又院に入酉過て退出せん、如此にして大率常例とせば心無怠慢して、職事を廢せじ、

天下之人、聞執事之於愈如是也、必皆曰、執事之好士也如此、八字句 執事之待士以禮如此、九字句 執事之使人、不枉其性、而能有容如此、十五字句 執事之欲成人之名如此、十字句 執事之厚於故舊如此、九字句○

連下五個如此字、句法長短錯綜凡四變、此章法也、

上に退之訴訟する樣に、張公寛假せば、天下の人聞て、必ず皆張公が士を好む事如此、張公が士をあひしらふに、禮を以てする事如此、張公が人を官職に就て使用するに、其人の本性を枉屈せずして、能寛容する事如此、張公が人に瑕を不付、名を成就する事如此、張公が舊知久友に厚き事如此と云ん、論語、故舊無大故則不棄【注】八字句九字句十五字句九字句、是文章長短の句法【連下──】五つの如此の字を連ねて下す、句法長と短と錯綜する事凡四樣に變化す、是章の法也、錯綜は、雜へ織の義也、

正しく成、家齊り國治まり、次第に外迄も歸服する程に遂に大に鄰國の諸侯に過る者あり、孟子の本文には、即ち湯王齊桓の事を引て云、

今之時、與孟子之時、又加遠矣、皆好其聞命而奔走者、不好其直己而行道者、聞命而奔走者、好利者也、直己而行道者、好義者也、未有好利而愛其君者、未有好義而忘其君者、此一段、分明是以孟子之言、譏張公、斡轉得婉曲、可法、

今唐の時は周の末、孟子の時と、又彌々遠し、唐の代の人、皆其云付を聞て、駈走する者を好み其己が身を正直にして、道を行ふ者を好まず、其命令を聞て、何事も御意次第に奔走する者は、利欲ある者也、其己を直うして道を行ふ者は、義を好で利を忘る者也、未だ利欲を專らにする者の、君を愛し、忠を盡す事あらず、未だ義を好み、正を守る者の君を忘れ、身を私しする事あらず 注 此一段、退之分明に孟子の語を以て、張僕射が其所言を聞て、役使する者をば好み、直言して立義、道を行ふ者をば好まざる事を譏る【斡轉】は、めぐらし、めぐらすと讀り、くるりと云迴し、云換得、文章婉曲とまげまぐる事文の手本とすべし【婉曲】は、眞直に素氣なふ不云、巧みに筆を曲て、美しく云樣にして實には諷諭する所ある也、杜預春秋左氏傳序、婉而成章、

今之王公大人、惟執事可以聞此言、惟愈於執事也、可以此言進、此一章、辭太直、兩句救得好、

今唐の親王諸侯王三公宰相等は、皆前に所云の、皆好其聞命而奔走者、不好其直己而行道者、獨り執事張公のみ、退之が直言を聞入べし、世の宦遊する者は、皆聞命而奔走す、獨り退之のみ執事に於て、直言を奉つり進むべし、韓文作可以言此事 注 此一章言辭太はだ直して、人の所不言也、此兩句を云出して、

凡そ執事の、退之を選み擧て、節度の推官と被レ成事は、退之能晨に院に入、夜家に歸んと思へるにて如レ此するには非じ、必ず退之が材能を取用ること有んとして也、苟も退之に取ことあらば、晨に入夜歸らずと云共、別に所レ取の事猶在べし、

下之事レ上、不レ一ニセ其事ニ、上之使レ下、不レ一ニセ其事ニ、量レ力而任レ之、度レ才而處レ之、其所レ不レ能、不ニ彊使一レ爲、是故爲レ下者、不レ獲ニ罪於上ニ、爲レ上者、不レ得ニ怨於下ニ矣、

任は、負荷ふ也、其分際に叶ふ官職に任用する也、處は、其職位に居る也、下の上に仕る事、一色の事のみに非ず、上の下を使ふ事も、一色の事のみに非ず、皆其品多し、其人可レ成程の力を量て、是を任用し、其才を度りて、其官職に居しむ、其人能し得ぬ事をば、無理に强て其職に成しめず、此故に下たる者、其身に叶ふ程の官に居り、職に任ずれば、爲損じなき故に、罪過を上に不レ得、上たる人も目金違はずして、下に怨まるゝ事なし、

孟子有レ云、今之諸侯、無ニ大相過ルコト一者、以ニ其皆好レ臣ニ其所一レ敎、而不レ好レ臣ニ其所一レ受レ敎、

公孫丑篇下云云、湯之於ニ伊尹一、學而後、臣レ之、故不レ勞而王、桓公之於ニ管仲一、學而後臣レ之、故不レ勞而覇、今天下地醜德齊、莫ニ能相尚一、無ニ他好レ臣ニ其所一レ敎而不レ好レ臣ニ其所一レ受レ敎云云、朱子註、所レ敎、謂ニ聽ニ從於己一、可ニ役使一者一也、所レ受レ敎、謂ニ己之所ニ從學一者上也、孟子云心は、今の諸侯、何れも似たり依たりにて、其中にどれぞ大に相過たる者無ことは、何故ぞや、諸侯いづれも皆其心安く敎へて召使ふ者を、臣とする事を好み、其我に物を敎へ、異見し諫る者をば、祿を與へ、禮を成て、召使ふ事をば好まざる故也、我云儘に使はるゝ者は、何事も御意次第に成て、我身恣まゝに、心行共に亂る、其より身を失ひ、國家を滅す事も出來る、若夫我從て道を學び、直言諫をする者を臣とすれば、其君心行共に

の故き例也、節目は、其細書也【自九月一】韓文注、嚴曰、退之以貞元十五年二月、從董晉之喪、自汴之洛、聞汴之亂、遂來彭城、依張建封、至秋欲辭去、建封奏爲節度推官、因留幕中、受命之明日、見院中事目、有晨入夜歸一件、以爲不便、乃於九月一日上書言之、云心は、文公推官の召狀を受るの明日、節度使の院中に在處へ、小吏院中の故實法度十餘箇條を持參して、退之に示す、是を視れば、其中不可然事一條あり、九月より明年二月の終に至る迄、皆早晨に院に入、夜に及で歸る、疾あるか、又何ぞ事あるに非れば、容易に院を出る事を不許と云、退之初めて召命を受たるを以て遠慮して敢て不申、

古人有言曰、人各有能有不能、若此者、非愈之所能也、（用事、變化當如此）抑而行之、必發狂疾、上無以承事于公、忘其將所以報德者、下無以自立、喪失其所以爲心、夫如是、則安得而不言、

【古人一】韓文注、孫曰、左氏定五年、王孫由于之言、古人の云、人は面々に能し得たる事と、能し得ざる事ありと、今院中の法、官人晨に入て夜歸る、此の如んば、退之が能し得ん所に非ず、我成ざる所を、强て抑へて行はゞ、必ず物狂はしき疾を發せん【注】故事を用る時、如此變化すべし【上無以一】承事は、奉公する也、上に所云の如ならば、上は公儀に承仕する事不成、官祿を給る恩德に報ん所以を忘ん、下は自ら身を立る事なく、公を重んじ、義を立んとする志を失はん、然れば何ぞ口を閉て、敢て申ざる事を得んや、

凡執事之擇於愈者、非謂其能晨入夜歸也、必將有以取之、苟有以取之、雖不晨入夜歸、其所取者猶在也、

執事は、執權也、張建封を指云、一元曰、其人の名を不云して、左右の者と云心也、非謂の謂字、本集作爲、

隱兗州、少喜文章、能辯論、慷慨尚氣、自許以功名顯、貞元四年、拜徐泗濠節度使云云、十二年加檢校右僕射云云【僕射】周禮六典冢宰、掌邦治、統百官、均四海、秦漢置左右丞相、魏晉改爲司徒、後罷置中書監令或相國、晉魏以來、宰相以它官參掌機務、或委知政事者、無有常官、唐以僕射爲尚書省長官、與侍中中書令號丞相【上書】韓文集註、公以貞元十五年二月、脫汴州之亂、依張建封于徐、秋、建封辟爲節度推官、至是供職、書意以晨入夜歸爲不可、其不諂於富貴之人可知也、又上張僕射第二書曰、愈再拜、以擊毬事諫執事者多矣、諫者不休、執事不止云云、諫不足聽者、辭不足感人心也、樂不可捨者、患不能切身也云云、此書は、文公三十三歲の時に、建封に上つる○文章軌範曰、上張僕射書、答陳商書、凡學文、初要膽大、終要心小、由麄入細、由俗入雅、由繁入簡、由豪蕩入純粹、此集皆麄枝大葉之文、本於禮義、老於世事、合於人情、初學熟之、開廣其胸襟、發舒其志氣、但見文之易、不見文之難、必能放言高論、筆端不窘束矣、萬里居士曰、此篇九段、自篇首至敢言第一段、自古人至不言第二段、自凡執至下矣第三段、自孟子至君者第四段、自今之至言進第五段、自愈蒙至如此第六段、自又將至悔也第七段、自若使至末也第八段、自伏惟至末第九段、

九月一日愈再拜、受牒之明日、在使院中、有小吏持院中故事節目十餘事來示愈、其中不可者有、自九月至明年二月之終、皆晨入夜歸、非有疾病事故、輙不許出、當時以初受命不敢言、

【九月】唐德宗貞元十五年己卯歲也【愈再拜】愈は、退之が名、再拜は、敬て書時に如此【受牒】韓文注曰、節度推官牒也、說文、牒、札也、徐曰、議政未定、短牒諸謀曰牒、簡也、官府移文、謂之牒、官人の召狀也【使院】節度使の所居の官院也【小吏】院中の小使官也【故事節目】使院の署中、法度の書付也、故事は、其官

昭、右爲穆【墮】註壞也、善本作隳【死人手】注謂秦王子嬰爲項羽所殺也、子嬰は、始皇が嫡孫、太子扶蘇が子也趙高胡亥を殺して、自ら天子たらんとす百官從はず、高恐て子嬰を立、子嬰高を誅す、沛公灞上に至る、子嬰天子の璽符を頸に係、軹道の旁に出て降す、沛公咸陽に入て、宮室府庫を封じて、灞上に還る、月餘にして項羽至て、子嬰を殺し、咸陽を屠り、宮室を燒秦の祚遂に絕、史記に詳也【爲天下笑】春秋考異郵曰、君殺妻誅、爲天下笑、陳涉凡下の一夫謀叛して、遂に秦を傾け七廟破れ、子嬰項羽が手に死して、始皇天下の爲に笑はるゝ事は、何ぞや【仁義—】兵道は詐謀を先にすと云共、而も其人を懷け、士卒身を忘しむ者は、仁義を本とす、城を攻、野に戰ふ時は、敵を打取ことを專らにすと云共、國を守るには、仁義を本とす、秦仁義をば施さずして、只暴虐を事とし、一旦敵を攻取ことは、爲得たれ共、永く天下を保つ事は能はず、其理勢同じからざれば也、通鑑、唐太宗問侍臣帝王創業、與守成、孰難、房玄齡曰、艸昧之初、與群雄並起、角力而後臣之、創業難矣、魏徵曰、自古帝王、莫不得之於艱難、失之於安逸、守成難矣、上曰、玄齡與吾共取天下、出百死得一生、故知創業之難、然創業之難、既已往矣、守成之難、方當與諸公愼之、

書類

璿璣鈐曰、書者、如也、寫其言如其意云云、見韻會、顏氏家訓曰、書奏箴銘、生於春秋者也、事物紀原、舜曰、書用識哉、春秋、子家弔宣孟以書、漢曰尺牘、陳遵所善是也、故今曰書尺、名雖見於有虞、而實始於春秋、文式曰、書宜簡要明切、書の名は、尙書に見はると云共、文を人に贈て書と云ことは、春秋より始る、今文の一體として門類を立たり、

○上張僕射書　韓退之

韓文公僕射張建封が、召て節度推官とするに因て、番直の寬優ならん事を望て、此書を上つる、節度は、國司也、推官は、其下奉行也、紀原曰、太甲既立不明、伊尹作書以戒、此上書之始也、七國時臣子言事於其君、皆曰上書、秦改曰奏、今亦有上書之事、又通於臣下者也【張建封】唐書列傳八十二、字本立、鄧州南陽人、客

使―】翰曰、山東國、謂六國也、絜、圍也、善曰、莊子人間世曰、天樹絜之百圍、司馬彪曰、絜、匝也、下結切、註曰、絜之、以手量之也、兩手合而圍之、爲一圍、朱子大學章句云、絜、度也、若試に山東の九國をして、陳涉と其長ずる所を度り、大なる所を絜り、權謀を比校し、勢力を考量せしめば、年を同ふして語るべからず同じ口に云ふべからざる事を云、

然秦以區區之地、致萬乘之權、招八州而朝同列百有餘年矣、然後以六合爲家、殽函爲宮、

又然と云て、秦の强大にして、天下を有ちながら、頓てに滅亡せん事を云也【區區】字彙、小貌、漢禮樂志、河間區區小國【萬乘】孟子梁惠王上篇曰、萬乘之國集註、乘、車數也、天子畿內地方千里、出車萬乘【招八州】鄧展曰、招、猶舉也、蘇林曰、招、音翹、良曰、九州之數、秦有雍州、餘八州、皆諸侯之地、九州は、弔屈原賦にあり【朝同列】良曰、謂六國諸侯、嘗與秦爲列國、皆使朝服也【百有餘年】秦の孝公在位二十四年、惠文王二十八年、武王四年、昭襄王五十六年、孝文王立三日卒、莊襄王四年、始皇三十七年、二世二年、子嬰立四十六日而降漢、凡一百五十七年【宮】咸陽宮也、孝公初め區々たる秦の國を以て、內政を治め、兵を强くし、外六國と攻戰ふ、是より次第に國强大に成、萬乘の權勢を致し取、九州の內、只雍州一國を以て、八州の諸侯を皆舉て、日比は同列の國なれ共、秦の威强きに依て、悉く秦に服し朝せしむる事、百五十餘年也、而後始皇に至て、天下を以て一家とし、殽山函谷を以て宮殿とす、是迄は秦の强大なる事を云、

一夫作難而七廟墮、身死人手、爲天下笑者、何也、一夫謂陳涉爲首唱也、天子七廟、墮、壞也、死人手、謂秦王子嬰爲項羽所殺也、仁義不施、而攻守之勢異也、

濟曰、一夫、謂涉爲首唱也、唱は、先也、導也、陳涉首めて唱ふて、謀反するを云【七廟】禮記王制曰、天子七廟、謂三昭三穆與太祖之廟而七、中庸十九章曰、宗廟之禮、所以序昭穆也、朱子章句曰、宗廟之次、左爲

れば其位此九國の君よりも尊きに非ず【鉏】鋤同、すき【耰】孟康曰、鋤柄也、晉灼曰、椎塊椎也、師古曰、摩田器也、服虔、呂延濟、並に鉏の柄を以て戟とすと云、師古非之【棘】爾雅、戟也、濟曰、棘矜戟也、以鋤柄爲之、善曰、言鋤柄及戟穳也、穳、巨巾切、左傳隱十一年子都拔戟以逐之【矜】說文、矛柄也、項羽傳、鉏耰棘矜、師古曰、矜與穳同、謂戈鋋之柄、韻會、矜居陵切【銛利―】濟注也、銛利は、皆とし と讀、能切るを云【鉤戟】師古曰、戟、刃、鉤、曲也、如淳曰、似矛及下有鐵橫、上曲勾也、かまやり也【長鎩】說文、鎩、鈹有鐔也、師古曰、鎩、鈹也、言往者秦銷兵及陳涉起時、但用鉏耰及戈戟之穳、以相攻戰也、長やり也、言心は、涉が鉏耰棘矜は、九國幷に秦の鉤戟長鎩よりも利に非ず、

謫戍之衆非抗九國之師也、深謀遠慮行軍用兵之道非及曩時之士也、

善曰、通俗文曰、罰罪曰謫、度厄切、良曰、謫戍、謂涉戍漁陽也、抗、敵也【深謀―】善曰、史記曰、賢人深謀於廊廟、論語曰、人無遠慮、必有近憂【曩時―】史記陳涉賛、作鄉時、索隱曰、鄉、音香亮反、鄉時、猶往時也、蓋謂孟嘗信陵蘇秦陳軫之比也、銑曰、謂不及六國之將相、言心は、陳涉が徒衆は、九國の師旅に敵對するに非ず、其深謀り、遠慮り、軍を行ひ、兵を用るの道、昔しの九國の名將に及ぶに非ず、

然而 轉 成敗異變、功業相反、試使山東之國與陳涉度長絜大、比權量力、則不可同年而語矣、

上に陳涉が九國の賢君良臣、大國强兵、深謀遠慮の、一つも皆に所不及を、段々云述て此にて然而と一轉して、陳涉が萬事不足にして、卻て秦を滅したる事を不審問難する也【成】は、其事の成就する也、陳涉に係る【敗】は、事の敗れて成ざる也、九國に係る【異變】相違して、同じからぬを云【功業―】向曰、謂六國滅、涉盛也、陳涉が不及は、却て勝、九國の有餘は、卻て敗れ、其勳功事業の彼と此と相同じからぬは何ぞや【試

州迄行けるが、大雨に會て、日限延引しければ、罪科に逢ん事を恐れ、呉廣と密談して、遂に謀反す、是史記の意也、若顏師古が義なれば、徭役を免れて、阡陌の中より起る也、阡陌は、田路也、若漢書音義如淳が義なれば、千百人の中に、卑く屈み臥起する也【斬木―】良曰、斬木爲兵器而無鋒刃、揭舉竿爲旗、無旌幡也、善曰、埤蒼曰、揭高舉也、師古曰、揭、音竭、謂竪之也、巨列切、莊子曰、揭竿求諸海也【雲會】漢書作合、銑曰、如雲之會、多して能合を云【嚮應】如嚮之應嚮の聲に應するが如く、陳涉が倡ふに隨て、人皆起り附を云【贏糧】方言曰、贏、擔也、音盈、銑曰、擔軍粮也、善曰、莊子曰、今使民曰某所有賢者贏粮而起之【景從】銑曰、如影之隨形也、始皇已に悉く天下の兵器を銷鑄金人、天下に鋒鏌無れば、陳涉木を切て兵具とし、竿を擧て旌とす、天下動亂して、一揆雲の合か如く、響の應ずるが如く、兵粮を擔ふて、影の從ふか如くにして來り附、遂に山東の諸國、千人の豪、萬人の傑、我劣らじと並ひ起て、秦の一族を滅亡す【山東】は、華山の東、六國の分也、

且夫天下非小弱也、（呂云）反覆詰難、在此一節、雍州之地、殽函之固自若也、

翰曰、秦兼有天下、所以非小弱也、秦の天下小きなるに非ず、弱きに非ず、【註】前に秦の國大きに、兵强く、天下一統して、古の書を燒、萬民を愚にし、天下の兵を銷秦の子孫獨り千萬世持傳へんと、始皇君臣謀る、然るに陳涉微賤の身、中常の材にて、不慮に謀叛して遂に秦の國を滅しぬる事をくり返し詰り難ずること、此一節にあり【詰難】不審を立、問難する也【雍州】即ち秦の國也【自若】漢書注、如故也文選注、自然也、秦の地の廣大なる、殽山函關の固めは、本の如くにして、始皇が時に、少しも易らず。

陳涉之位、不尊於齊楚燕趙韓魏宋衛中山之君也、鉏耰棘矜、耰、鉏柄也、棘矜、戟也、以鉏柄爲之、銛、利、不銛於鉤戟長鎩也、鉤戟鎩、皆兵名、謂九國時兵器也【鎩】音殺、

是も不審問訊する也、陳涉が位、本より卑しき士民な

て樞とする也【氓】たみ【隸】奴隸、やつこ【遷徙之徒】罪有て遷し流されて、漁陽の番守と戍也、陳涉至て微小卑賤なる者也、云心は、始皇已に死して餘れる威勢遠方殊俗に震ふ、然るに陳涉は、甕牖繩樞の子、氓隸の人にして、遷されて漁陽の番と戍者也、

材能不及中庸、非有仲尼墨翟之賢、陶朱猗頓之富、陶朱公、猗頓、皆富人也、言涉不賢、又不富、

【材】は材智【能】は行能【中庸】善曰、方言曰、庸賤稱也、言不及中等庸人也、銑曰、庸、常也、言不及中庸之人、史記作中人【陶朱公】善曰、史記、范蠡之陶爲朱公、以爲陶、天下之中、諸侯四通、貨物所交易也、乃治產積居、與時逐、而不責於人、十九年之中、三致千金、詳かに史記の越王勾踐世家、及び貨殖傳に見へたり【猗頓】孔叢子曰、魯之窮士也、耕則常飢、桑則常寒、聞朱公富、往而問術焉、公告之曰、子欲速富、當畜五牸、乃適河東、大畜牛羊于猗氏之南、其滋息不可計、以興富猗頓、故曰猗頓也、氏族排韻、猗頓、用鹽起家、與王者埒富、云心は、陳涉材智行跡、中常の人にたも不及、況や又孔子の聖、墨翟か賢、陶朱猗頓が富有に非す注陶朱公猗頓は、皆財に富る人也、此段涉賢ならず、又富るにも非る事を云、向曰、自涉之起、封建諸侯、高祖入關破秦、竟始於涉也、

躡足行伍之間、俛起阡陌之中、率疲散之卒、將數百之衆、轉而攻秦、斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲會而響應、贏糧而景從、山東豪傑遂並起、而亡秦族矣、

翰曰、躡足、驅馳也、言在兵行伍而起於道路、謂涉行至蘄遇雨、不得已而舉事也、如淳曰、躡、音疊、行伍は、陣に行者の、五人組なるを云【俛起—】漢書、俛作免、師古曰、免者、言免脫徭役、免字或作俛、讀與俛同、音義曰、俛、音免、史記作倔、如淳曰、時皆僻屈在千百之中、翰曰、阡陌、道路也【疲散—】濟曰、時兵皆疲於行役而逃散也【數百—】言少也、漢書音義曰、首出十長百長之中、言心は、陳涉閭里より發して漁陽の戍卒と成、九百人の中にて、什伍の頭として、行て蘄

始皇前に所說の如にして、後華山の頂を踐て城郭を構へ、大河を池とす、華山の頂にある城なれば、億丈の高さ也、渭河を池とすれば、其深き事測られず、此城に據居、此谿に俯臨て、以て固めとす、良將强弩要害の處を守り、信臣精卒利兵を並へ列ねて、聊爾に人を通せず、若夜行の者あれば誰と問、天下巳に定つて、始皇が心自ら關中の堅固、金城千里子孫帝王千萬世の基業也と思へり、

始皇既沒、餘威震于殊俗、然而陳涉甕牖繩樞之子、甿隷之人、 樞、戶樞也、謂以甕爲牖、以繩繫戶、甿隷、賤稱、遷徙之徒、謂涉爲戍漁陽之徒也、言涉至微賤也、
而遷徙之徒也、

三十七年、始皇東巡、至平津而病篤、七月崩於沙丘、趙高與李斯謀、矯詔立胡亥爲太子、更爲書賜扶蘇數罪、而蒙恬不矯正、皆賜死、胡亥至咸陽、發喪襲位九月葬始皇於驪山下、濟曰、沒、死也、殊俗、遠方也【陳勝】漢書列傳第一、陳勝、字涉、陽城人、吳廣、字叔、陽夏人也、勝少時嘗與人傭耕、輟耕之壟上、悵然甚久、曰、苟富貴、無相忘、傭者笑而應曰、若爲傭耕、何富貴也、勝太息曰、嗟乎燕雀安知鴻鵠之志哉、秦二世元年秋、發閭左戍漁陽九百人 通鑑注曰、閭左、言居閭里之左也、秦時復除者居閭左、今力役煩、在閭左者盡發之也、漁陽、幽州漁陽郡、今蘇州是、大澤鄉、在沛郡蘄縣 勝廣皆爲屯長、行至蘄大澤鄉、會天大雨不通、度已失期、失期法斬、勝廣乃謀曰、等死、死國可乎、勝曰、天下苦秦久矣、吾聞二世少子不當立、當立者乃公子扶蘇、扶蘇以數諫故不得立、上使外將兵、今或聞無罪二世殺之、百姓多聞其賢、未知其死、項燕爲楚將數有功、愛士卒、楚人憐之、或以爲在、今試以吾衆爲天下倡、宜多應者、廣以爲然、幷殺兩尉、召令徒屬曰、壯士不死則已、死則擧大名、侯王將相、寧有種乎、徒屬皆曰、敬受令、乃詐稱公子扶蘇項燕、從民望也、袒右稱大楚、勝自立爲將軍、廣爲都尉、乃入據陳、數日號召三老豪傑會計事、皆曰、將軍身被堅執銳、誅暴秦、復立楚社稷、功宜爲王、勝乃立爲王、號張楚、以廣爲假王【甕牖繩樞】禮記曰、儒有蓬戶甕牖【注】樞、戶樞也、くろゝと訓す、謂以甕爲牖以繩繫戶、韋昭曰、繩樞、以繩扃戶爲樞也、貧民の家、甕を以て牖とし、繩にて戶を係

銷以爲鐘鐻金人十二、重各千石、置宮庭中、徙天下豪傑於咸陽十二萬戸、向曰、墮、壞也、文選作隳、應劭曰壞堅城、恐人復阻以害己、翰曰、兵、戰具也【鍉】如淳曰、箭足也、鄧展曰、鍉扞頭鉄也、翰曰、鋒鍉、箭鏃兵刄也、鍉、音的、二十六年、有大人十二見於臨洮、身長六丈、足履六尺、皆夷狄服、始皇以爲瑞、遂鑄之、師古曰、所謂公仲者也、綱目注云、號曰翁仲、漢世在長樂宮門【弱天下之兵】翰曰、謂去其兵器也、云心は始皇、己が私を恣まゝに行ひ、人の貶議せん事を否がりて、詩書を焚て先王聖人の道を廢棄し、百家の書記を燔て、天下の民を愚にす、諸國の名城を墮ち、豪傑英俊の、人に勝れたる者を殺し、天下の兵刄を收て、咸陽の都に集め、劔鋒箭鏃を鎖化して、鑄て金人十二體とし、天下の人民を弱まして、一揆謀叛せざる樣にする也、尹遂昌綱目書法曰、書鎖兵器何、譏私也、秦之亡、斬木揭竿者爲之、

然後踐華爲城、因河爲池、據億丈之城、臨不測之谿以爲固、良將勁弩守要害之處、信臣精卒陳利兵而誰何、誰何、言誰敢問、天下已定、始皇之心、自以爲關中之固、金城千里、子孫帝王萬世之業也、

【踐華】晉灼曰、踐、登也【華】山名、五嶽之一、在華州、在陝西西安府、濟曰、登踐華山以爲城、因河水以爲池、取其高深廣大而言也【河】字彙水出積石山、自乾位來、十里一曲而入海、史記正義曰、黃河、自勝州東直南至華陰、即至懷州南、又東北至平州碣石山入海也、東河之西、南河之東、南河之北、皆冀州也【億】十萬也【丈】十尺也【勁】强也【弩】いしゆみ【信臣】信義ある臣也【精卒】精鋭の軍卒也【利兵】鋭利の兵刃也【誰何】注誰そと言て强く問尤むる也、張銑が注也、漢書有誰何卒、如淳曰、何、謂何官也、廣雅、何、問也、師古曰聞之爲誰、又曰、何人、索隱、崔浩云、何、或作呵、漢舊儀、宿衛郎官、分五夜誰何、何夜行者誰也、何、呵、字同、東坡梅詩、月黑林間逢縞袂、霸陵醉尉誤誰何【金城】善曰、言堅也、韓子曰、雖有金城湯池云心は

塞、起臨洮至遼東延袤萬餘里威震匈奴師古曰、言以長城扞蔽胡寇如人家之有藩籬言ろは始皇蒙恬をして兵三十萬人を引率し、北方の胡狄を逐伐、河南の地を得て、四十四縣とし、萬里の長城を築て邊塞の藩籬を守護せしむ、匈奴を卻くる事七百餘里胡國の人、敢て南へ下り來て、馬を不牧、胡國の士、敢て弓を引て、其怨を不報、其威に恐て也、

於是廢先王之道、燔百家之言、以愚黔首、隳名城、殺豪俊、收天下之兵、聚之咸陽、銷鋒鍉、鑄以爲金人十二、以弱天下之民、

始皇二十六年、制曰、死而以行爲謚、則是子議父、臣議君也、甚無謂、自今以來、除謚法、朕爲始皇帝、後世以計數、二世三世至千萬世、傳之無窮、三十四年、丞相李斯上書曰、異時諸侯並爭、厚招遊學、今天下已定、法令出一、百姓當家則力農工、士則學習法令、今諸生不師今而學古、非當世、惑亂黔首、聞令下、則各以其學議之、入則心非、出則巷議、如此弗禁、則主勢降乎上、黨與成乎下、臣請天下有藏詩書百家語者、皆詣守尉雜燒之、有偶語詩書者棄市、以古非今者族、所不去者、醫藥卜筮種樹之書、若欲有學法令、以吏爲師、制曰可【愚黔首】綱目注曰、黔、音琴、黑色也、蓋郡黎謂之黔首者、猶言黑頭之民也、章碣焚書坑詩、竹帛烟消帝業虛、關河空鎖祖龍居、坑灰未冷山東亂、劉項元來不讀書、文蓬窻日錄載、焚書秪是要人愚、人未愚時國已墟、唯有一人愚不得、又從黃石讀兵書、丘瓊山曰、嗚呼先王之經籍、自是無全書矣、夫使自古聖帝明王、賢人君子、精神心術之微、道德文章之懿、行義事功之大、建置議論之詳、所以闡明已往而垂示將來者、一旦皆成煨燼之末、秦之罪、上通于天矣、秦無道之罪十數、如壞井田、刑三族、坑儒生、罪妖言之類、然皆一時之事也、繼其後者、苟一旦興改革起廢之心、其弊端可撤去而理也、若夫詩書百家語、累千百人之見、積千萬年之久、而後備具者也、乃以一人之私、快一時之意、付之烈焰、使之散爲飛烟、蕩爲寒灰、以貽千萬世無窮之恨、嗚呼、秦之罪、上通于天矣、此始皇李斯所以爲萬世之罪人也歟【隳名城一】二十六年、分天下爲三十六郡、收天下兵、聚咸陽、

馬爲喩也策所以撾馬【呑二周】呑は幷呑其地を合せ取を云、濟曰、時周分爲二、稱東周西周、史記曰、始皇滅二周、置三川郡、【履至尊】尊位を踐也良曰、謂稱始皇帝也、二十五年に、天下を併せて尊號を稱す、言心は、始皇に至て六代の餘業を奮發し長き鞭を擧て馬を馭するが如く、宇宙の内を服御す【御】は、馭也馬車に乘を云、其より天下を始むるを御宇とする也、東西の二周を併せ呑て、六國幷に三國の諸侯を伐亡し、遂に尊位を踐居り、始皇帝と稱して、天下を制服す【六合】四方上下天下の間を云、

執敲朴以鞭笞天下、威振四海、南取百粤之地、以爲桂林象郡、取南粤土地、分爲二郡、**百粤之君俛首係頸委命下吏、**自係其頸、低頭任性命於獄官下吏、

【敲】説文横撾也徐曰、從旁横撃也、漢書、鄧展註、短杖也【朴】説文、小撃也、亦作撲又以杖撃也鄧展曰、捶也、臣瓚曰、短曰敲、長曰朴【鞭】馬策也【笞】罪人を打杖、しもと也【四海】阿房宮賦の注に見へたり【百粤】文選作越善曰、音義曰、百越非一種、若今言百蠻也【桂林――】史記曰、始皇略取陸梁地、爲桂林象郡、韋昭曰、桂林、今鬱林、象郡、今日南也、銑曰、破南越、分爲此二郡也【俛】向曰、低也漢書作頫、音俯、師古曰、古俯字【係頸】向曰、自係其頸也【委命――】向曰、言任性命於獄官也云心は、始皇已に天下を幷呑して、長杖短杖を執て、黔首を鞭笞し、威勢四海に振ふ、而して又南の方百越の地を取て、南越の土地を分て、桂林象郡の二郡とす、百越の君首を地に著、自ら其頸に縄を係て、身命を始皇が牢舍の奉行の、生んも殺んも、心儘に任する也、

乃使蒙恬北築長城而守藩籬、卻匈奴七百餘里、胡人不敢南下而牧馬、士不敢彎弓而報怨、

【蒙恬】史記有傳、其先齊人、恬大父蒙驁自齊事秦昭王、驁子曰武、武子曰恬、始皇二十六年蒙恬得爲秦將攻齊大破之拜爲內史、秦已幷天下、乃使蒙恬將三十萬衆北逐戎狄收河南築長城因地形用險制

侯已困矣、

【亡】失也【遺】棄也【鏃】爾雅注、以金爲箭鏑、秦は矢一筋をも失はず、鏃一つをも不弃して天下九國の諸侯は皆已に困れ艸臥る也、

於是從散約解、爭割地而賂秦、秦有餘力而制其弊、追亡逐北、伏尸百萬、流血漂櫓、因利乘便、宰制天下、分裂河山、彊國請伏、弱國入朝、

九國の君、秦を恐れて、合從離散し、約束分解して韓魏を始め、我劣らじと其土地を割て秦に賂ふ、故に秦は彌々勢力餘有て、敵の弊れ弱きを征伐して制服し其敗北するを追逐して、屍骸を伏る事計るべからず、其血は河の如にして楯を漂はす、秦我利ある處により便なる處に乘て恣まゝに天下を割破り、山河土地を分ち裂强國は降伏せんと請弱國は秦に入て朝參す【弊】敗也、濟曰、軍敗曰北【百萬】濟曰、言多也【流血――】尙書武成血流漂杵、史記、流血漂鹵韋昭曰、大楯曰櫓【因利】孫子曰、勢者、因利制權【宰制】宰、字彙制也、烹也屠也、調和膳羞之名宰は、肉を切、料理する也、制裁也、斷也、制も亦切斷制服するの意、史記漢書文選並に作宰割、

施及孝文王莊襄王、享國日淺、國家無事、

師古曰、施延也昭襄王卒子孝文王立、除喪三日卒子莊襄王立、四年薨、始皇卽位【享國】公羊傳曰、桓公之――也長、何休曰、享、食也、孝公惠王武王昭襄王已に卒し、引て孝文王莊襄王に及て國を有ち享る事久しからず國家無事にして靜也、

及至始皇奮六世之餘烈、自孝公至始皇六世振長策而御宇內、吞二周而亡諸侯、履至尊而制六合、

張晏曰、孝公惠文王武王昭王孝文王莊襄王【餘烈】上の故業遺策也烈は、業也【振】說文、擧也師古曰、以乘

紹【樓緩】戰國策曰、秦王伐楚、魏王不欲、樓緩謂魏王曰、不與秦攻楚、々且與秦攻王、王不如令秦楚戰、交制之、高誘曰、樓緩、魏相也【翟景】未詳【蘇厲】史記曰、蘇秦之弟、厲因燕子而求見齊王、齊王怨蘇秦欲囚厲、燕子爲謝、遂委質爲齊臣【樂毅】史記列傳曰、賢而好兵、爲魏昭王使於燕、々昭王以客禮待之、樂毅遂委質爲臣、燕昭王以爲亞卿【吳起】史記有傳、出師表の注にあり【孫臏】亦史記有傳、田忌進孫子於齊威王【帶佗】未詳、佗、音駝【兒良王廖】兒、五兮切、廖、文選音留、漢書音聊、呂氏春秋曰、王廖貴先、兒良貴後、此二人者、皆天下之豪士也【田忌】戰國策曰、韓魏之君朝田侯、鄒忌爲齊相、田忌爲將、使田忌伐魏、三戰三勝、高誘曰、田侯、宣王也【廉頗】史記有傳、趙之良將也、惠文王以頗爲將伐齊、大敗之【趙奢】亦史記有傳、秦伐韓、趙王令奢將而救之、六國の士に、甯越等有て合從して、以六攻一か爲に計策を廻らし、齊明等游說して互に其意を通し、吳起等兵法に達して、軍事を司とり制す、制は裁制、はからふ義也、

嘗以什倍之地百萬之衆、仰關而攻秦、秦人開關而延敵、九國之師、遁逃而不敢進、九國、謂六國及中山宋衞也、

【以】春秋僖公二十六年、公以楚師伐齊取穀、左氏傳曰、師能左右之曰以、杜預註、左右、謂進退在己【什倍】十增倍也【仰關】仰、六臣注作卬、李善曰、卬、擊也、漢書、師古曰、秦之地形高而諸侯之兵、欲攻關中者、皆仰嚮故曰仰關也、今流俗書本、仰字作卬、非也【延】引也【九國—】注謂六國及山中宋衞也【遁逃—】史記、九國之師、逡巡遁逃而不敢進、漢書、師古曰、遁巡、謂疑懼而卻退也、遁、音千旬反、流俗書本、巡字誤作逃言ろは惠王の時、九國の君合從して秦に十倍の土地、百萬の師旅を引率して函谷關を仰き上つて秦を攻、秦人事共せず、要害好處なれば、函谷關を開て安々と敵を引入、九國の猛勢を、一手もなく打敗る程に、敵遁巡して進まず走り去【遁巡】しゆん〳〵と讀へし、不進貌、

秦無亡矢遺鏃之費、而天下諸

王弟、封信陵君【約從】合從を約束する也、六國云合せて一つに成を云【離衡】を連衡分離する也六國秦と中惡く離れて、力を合せて是を攻防くを云【兼】韓魏燕趙齊楚を六國と云此には齊楚を除て、宋衞中山を加ふ、通鑑注曰、中山、古之狄都也、漢爲中山郡、今直隷眞定府、言ろは此時に當て、齊に田文あり、趙勝あり、楚に黄歇あり、魏に公子無忌あり、此四人は、皆明智にして忠信あり、心寛やかに厚して、人を愛し、賢者を尊て士を重す、合從を約して連衡を離つ、其人衆此七國を兼合て大軍也【註】秦は、雍州の咸陽に都す、東は函谷、南は武關、西は烏關、北は黄河あり、是四塞の國也、其内を關中と云、東を關東と云西を關西と云、亦山東山西とも云、東には趙魏韓齊宋衞あり、北に燕中山あり、南に楚あり、西に巴蜀漢中あり、綱目注曰、咸陽、縣名、屬西安府、

於是六國之士、有甯越徐尚蘇秦杜赫之屬爲之謀、齊明周最陳軫召滑樓緩翟景蘇厲樂毅之徒通其意、吳起孫臏帶佗兒良王廖田忌廉頗趙奢之朋制其兵、

【甯越】李周翰曰、趙人也、呂氏春秋曰、齊攻廩丘、趙使孔靑將而救之、與齊人戰、大敗齊人、得尸三萬、以爲二京、甯越謂孔靑曰、不如歸尸以内攻之、彼得尸而府庫盡於葬、此之謂内攻之【徐尚】未た詳ならす【杜赫】呂氏春秋曰、杜赫以安天下說周昭文君、昭文君曰、願學所以安周、高誘注、杜赫、周人也【齊明】索隱曰、東周臣、後仕秦楚及韓、戰國策曰、齊明謂東周君曰、臣恐西周之與楚韓寶、令之爲己求地於東周也【周最】字林、最才勾切、或作聚、最、亦古之聚字、戰國策曰、齊令周最使鄭立韓擾而廢公叔、周最患之、高誘曰、周最、周君之子也、仕於齊、故齊使之也【陳軫】戰國策秦王謂陳軫曰、吾聞子欲去秦而之楚信乎、軫曰、然、高誘曰、陳軫、夏人、仕秦、亦仕楚也、史記有傳【召滑】韓子、干象謂楚王曰、前時王使召滑之越、五年而能成之、史記、范蜎對楚王曰、王前嘗用召滑治江東、師古曰、召、讀曰邵、文選注、召、晉

收の四字皆有意味、聊爾に當座やかなひに文字を下さず、

諸侯恐懼、會盟而謀弱秦、不愛珍器重寶肥饒之地、以致天下之士、合從締交、相與爲一、

左傳隱公元年正義曰、諸侯自不相信、則盟以要之、凡盟禮、殺牲歃血、告誓神明、若有背違、欲令神加殃咎、使如此牲也、曲禮曰、約信曰誓、涖牲曰盟、周禮秋官司盟職曰、邦國有疑會同、則掌其盟約之載及其禮義、北面詔明神、劉炫云、策書之例、先會後盟者、上言會、下言盟、々稱會者、未必先行會禮也【肥饒】韓生曰、關中、四塞之地、地肥饒、可都以霸、上に所云の膏腴の地と、同く皆其土地肥潤ふて、物生豊饒なるを云【合從締交】下に約從離衡と云も、同じ事也注に云、關東連兵曰從、關西連兵曰衡、史記蘇秦傳、夫衡人者皆欲割諸侯之地以予秦、索隱曰按衡人、即游說從橫之士也、東西爲橫、南北爲從、秦地形東西橫長、故張儀相秦爲秦連橫、衡人、指張儀、儀合六國以欲皈秦、蘇秦滅秦以欲皈六國也、關東六國の諸侯、秦の次第に強大なる事を恐て、會合して盟誓を立、同く兵を合せて、秦を弱まさん事を謀る、珍しき器物、重き寶物、善知行を惜まずして、是を與へて、天下の謀士良將を招き致し、東方の諸侯六國從を合せ、交りを結で、相共に一と成也、

當此之時、齊有孟嘗（田文）、趙有平原（名勝）、楚有春申（黃歇）、魏有信陵（無忌）、此四君者皆明智、而忠信、寬厚而愛人、尊賢而重士、約從離衡兼韓魏燕趙宋衛中山之衆、（關東連兵曰從、關西連兵曰衡、）

【齊有孟嘗】姓田氏、名文、父曰靖郭君嬰、齊宣王庶弟也、初封薛公、其父嬰請以文爲嗣、號孟嘗君【趙有平原】姓趙氏、名勝、趙武靈王弟、封平原君、綱目注、平原、趙屬邑、今屬山東濟南府德州【楚有春申】姓黃氏、名歇、楚考烈王以封春申君【魏有信陵】姓魏氏、名無忌、魏安釐

鬪諸侯、

張銑曰、商君、衞鞅也、說孝公而封於商、號爲商君、史記有傳、東坡曰、商君之法使民務本力農、勇於公戰、怯於私鬪、食足兵强、以成帝業、然其民見刑而不見德、知利而不知義、卒以此亡、故帝秦者商君也、亡秦者商君也【具】史記漢書並作備【連衡】銑曰關西連兵曰衡、善曰、戰國策、蘇秦說秦王曰、始將連橫、高誘曰合關東從通之於秦故曰連橫、文穎曰、關西爲橫衡音橫、又進學解に見へたり、言ろは、此時に當て、商君公孫鞅、孝公を輔佐し內には法度を立、耕織を務め、城を守り、野に戰ふの具を修めこしらへ、外には橫さまに關西を連ねて、關東六國の諸侯を戰はしむ、連衡は、以一離六也、合從は、以六攻一也、一は、秦、六は、韓魏燕趙齊楚也、

於是秦人拱手而取西河之外、孝公既沒、惠文武昭襄（惠王、文王、武王、昭王、襄王）蒙故業、因遺策、南取漢中、西舉巴蜀、東割膏腴之地、北收要害之郡、〔呂云〕自取字至收字、皆不祔下、

【拱】又手也、師古曰、拱手、言其不費功力也【河西】向曰、魏地名、綱鑑注云、春秋晋地、今改太原府汾州是、李斯上書曰、孝公用商鞅之法、楚魏之師擧地千里【惠文ー】文選無襄字、秦簡公在位十二年、簡公卒、子惠公立、史記作惠王武王、漢書作惠文武昭襄、師古注曰、惠文王、孝公之子、武王、惠文王之子、昭襄王、武王之弟【蒙故ー】惠王より以下の五王孝公の故き政業を傳へ蒙り、孝公の遺し示す所の計策に因從ふ、策、史記作册【南取ー】李斯上書曰、王用張儀之計、西幷巴蜀、南取漢中、東據成皐之險、割膏腴之壤、濟曰、擧、破也、周顯王廿九年、梁惠王割河西地七百里、獻秦以和【割】は、秦に割與る也、史記索隱曰、近城之地、沃潤流澤、最爲膏腴【要害】師古曰、在我爲要、於敵爲害也、言ろは、秦國中既に强く、外は敵國友食にすれば、秦人手を束ねて、苦勞もなくして、西河の外の地を取、孝公已に卒して五王相續で故業を受、遺謀に因て、南は漢中を取、西は巴蜀を破り、東は魏の良地を納、北は燕の要害の郡を收め取、〔注〕【自取字ー】取擧割

曰、殽函守、與殽澠通、殽山、一名嶔岑山、在洛州永寧縣、函、謂函谷、在陝西桃林縣、南有洪溜澗水、山形如函、路在谷口、故曰函谷、綱目註曰、雍、古之州名、今陝西西安府咸陽縣是也【注】文選呂延濟注也、史學提要注曰、秦本顓頊之裔、伯益佐舜、掌山澤、爲虞官、賜姓嬴氏、是爲栢翳、非子爲周考王養馬、考王封之於秦、號曰秦嬴、宣王時以非子曾孫秦仲爲太夫、誅西戎、國始大、有車馬禮樂射御之好、穆公十七世孫孝公立、時河山以東强國六、小國十餘、以夷狄遇秦、不與會盟、孝公發憤修政、下令求賢、衞公孫鞅聞之、乃入秦、公任之、鞅說孝公、定變法之令、廢井田、開阡陌、更爲賦稅法行之、孝公卒、惠文君立、遂稱王、時秦已强、諸侯爭割地而賂秦云云、秦孝公に至て、彌强く盛也。是より次第に國大にして、莊襄王に至り、始皇に及て、遂に天下を幷せ治む、故に先孝公の事を說述【秦塞也】通鑑、韓生說項羽曰、關中阻山帶河、四塞之地、注、阻山帶河、謂山關險阻如被、河渭之圍繞如帶、四塞、謂東函谷、南武關、西烏關、北黃河、是爲四塞、又漢婁敬說高祖曰、夫秦地被山帶河、四塞以爲固、注、謂關山之遮蔽如披渭河之環遶如帶也、謂山河四圍蔽塞、以爲堅固也、秦關中の地に都して、崤山函谷渭水黃河四方を塞き固むる故に、塞と云、漢高祖紀曰、秦形勝之國也、帶河阻山、懸隔千里、持戟百萬、秦得百二、【君臣―】孝公商鞅を用て、政に任し、兵を强くし、固く其國を守て、周室を窺ひ計る、劉良曰、周室、天子之國也、

有席卷天下、包擧宇內、囊括四海之意、幷呑八荒之心、

李善曰、春秋握誠圖云、諸侯氷散席卷、各爭恣妄【包】文選作苞【宇內】皈去來辭の注に見へたり、善曰易、括囊、無咎無譽、良曰、括、盛也、猶囊盛而結之、張晏曰、括、結囊也、言能苞含天下也良曰、八荒、八方也、言皆盡欲取也、孝公國を强して、席を卷か如くに、天下をまくり取、宇宙の間を、包兼擧挈し、囊に盛て緖を結ふが如くに、四海を含み籠、八方の荒忽極遠の地に至る迄を幷せ取の心あり、

當是時也、商君佐之、內立法度、務耕織、脩守戰之具、外連衡而

の呵責を不受して、永く天賦の一期を保有す、如是ならば、眞仙の天漢を凌で升り、天地の外に出るが如なるべし、豈又區々と屈辱して、帝王の門に趨る事を羨んや、

○過秦論　賈誼

【前漢】賈誼、洛陽人、文帝立、召爲博士、著過秦論、論秦之過、

秦の過失を論ず、秦を尤むるの意注賈誼が事は、詳に弔屈原賦の注にあり、漢の文帝即位して、賈生を聞及び、召て博士とし給ふ、賈生此論を著はして、文帝に上つる、史記二世本紀の賛に載之、漢書には、項籍傳の賛に載之、應邵曰、賈生書有過秦二篇、言秦之過此第一篇也○文式曰、文字有終篇不見主意而結句見主意者、賈誼過秦論、仁義不施而攻守之勢異、退之守戒在得人之類是也、樓迂齋古文訣曰、過秦論、秦始終興亡盛衰之變、盡在此書○梅花無盡藏曰、此篇十五段、自篇首至之心第一段、自當是至諸侯第二段、自於是至爲一第三段、自當是至之衆第四段、自於是至困矣第五段、自於是至無事第六段、自及至至下吏第七段、自乃使至報怨第八段、自於是至之民第九段、自然後至誰何第十段、自天下至業也第十一段、自始皇至若也第十二段、自陳涉至士也第十三段、自然而至語矣第十四段、自然秦至末第十五段、

秦孝公據殽函之固、擁雍州之地、秦至孝公、益強盛、故先述之、殽山、秦塞也、函谷關名、擁、據也、**以窺周室、君臣固守**

史記通鑑並云、周安王二年、秦簡公卒、惠公立、十五年惠公卒、十六年秦出公立、十七年秦弑出公、立獻公、周顯聖王七年獻公卒、子孝公立、二十一年孝公卒、子惠文王立、周赧王四年惠文王卒、子武王立、九年武王卒、弟昭襄王立、五十九年、赧王盡獻其邑于秦、東周惠公六年、昭襄王卒、子孝文王立、三日而卒、子莊襄王立、元年東周君盡入其地于秦、三年莊襄王薨、始皇呂政立、秦の孝公は、穆公十七代也、崤山函谷の要害に據守り、雍州關中の地を擁き居る、韋昭曰、崤、曰二殽、函、函谷關也、左傳僖三十二年注、殽在弘農澠池縣西、殽有二陵焉史記、張良曰、關中、左殽函、右隴蜀、通鑑注

兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮○三禮圖曰、琴本五絃、曰宮商角徵羽、文王增三、曰少宮少商、絃最淸也、

【達者】は、道に通達する人也【數子】は數輩也、數三より七に至る迄の間を、數て云【二儀】は、即ち兩儀陰陽也、易係辭曰、仰以觀於天地、俯以察於地理、又曰、易有太極、是生兩儀【錯綜】送孟東野序の注にあり、係辭又曰、——其數、錯は參錯、綜は綜核、彼此相參へて、正し論ずる也【南風】は、舜の詩【雅】は、正也【操】劉向別錄、其道閉塞、悲愁而作者、名其曲曰操、言遇災害不失其操也【發】は、聲音を發起するの義【淸商】商は、五音の一つにして、其絃尤も輕く淸る故に云【妙曲】精妙の曲調也、言ろは道理に達せる輩數人と、道を談論し、書籍を講習し、天地に俯仰して、萬物を觀感し、古今の人物を評論錯綜し、南風の和調を彈じ、淸商の妙曲を發す 注【家語】辨樂解の語也、舜五絃の琴を彈じ、南風の詩を造り給ふ、南風は、夏の時、南方より吹風也、夏は萬物茂盛し、吹風迄も艸木の薫香を帶て、人意を快ふす、故に人民の慍る所あるをも皆解散する也、南風に依て興起し、聖人の風化を被り及ぶ處、民皆滿足する事を宣へり、南風の時、五穀

生長すれば、民の財食を阜厚せんと也【三禮圖——】五絃は、宮商角徵羽五聲の絃也、文王少宮少商二絃を增、商尤も淸り、

逍遙一世之上、睥睨天地之間、不受當時之責、永保性命之期、如是則可以凌霄漢、出宇宙之外矣、豈羨夫入帝王之門哉、

【逍遙】は、前赤壁賦の注に見へたり【不受當時——】官職に服する者は、事に依て罪責を受る也【睥睨】韻會、傍觀也【保性——】性命は、賦性壽命を保安する也、易乾彖曰、各正性命、保合大和、人壽以百年爲期、故曰期、皈去來辭曰、聊乘化以皈盡、樂夫天命亦奚疑【凌】陵通、乘也、干也【霄】霄雲近天、揚子雲甘泉賦、騰淸霄而軼浮景【漢】天漢、即ち天河、又銀河とも云【宇宙】皈去來辭の注にあり、天地の間を云也、莊子齊物論曰、至人神矣、乘雲氣、騎日月、而遊乎四海之外【入帝王之門】皈去來辭、帝鄉不可期、仲子隱居して、人世の外に自適逍遙し、天地の間に眺望し、當時朝廷

地之始有名萬物之母、常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼、此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門、林希逸注、玄者、造化之妙、衆妙、即易所謂妙萬物者也、門、言其所自出也有と無とは、兩つにして、其名異也と云とも、實は同しく一本より出、常に有に、常に無にして、其理を觀ずれば、造化の妙測し難し、故に玄妙と云、其道理巳に玄にして又玄也と云は、至て妙なる事を賛して云、有と無と一原に出て、天地萬物の道理、大となく微となく、皆同く是より由て出るが故に、衆妙の門戸と云也、又第三章曰、聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、强其骨、常使民無知無欲、使夫知者不敢爲也、希逸注、虛其心、無思慕也、實其腹、飽以食也、聖人の天下を治むるは、民に求め欲する所なくして、其心を空虛にし、飲食を與へ養ふて、其腹を充實せしむる也、今眞寶の注に此を引て、玄虛の義を解するは、義淺近にして理通ぜず、第六章曰、谷神不死、是謂之玄牝、玄牝之門、是謂天地之根、十六章曰、致虛極、守靜篤、萬物並作、二十一章曰、道之爲物、唯恍唯惚、二十五章曰、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、凡そ老子經一部は、皆虛無自然を説【呼吸】注天の精和の氣を吸咽我腹の穢氣を呼吐て、元精を保ち、情性を養ふ也【莊子—】刻意篇曰、吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此導引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也、今此注作噓煦字彙、吐氣曰吹、虛口出氣曰噓、煦、溫也、口を空ほにして息を吹ば、其氣溫也、是を噓煦と云、氣を吹出して、故き穢しき氣を吐、天の精氣の新しきを腹中に吸納、是道家の事也【至人—】又逍遙遊篇曰、若夫乘天地之正、而御六氣之辨、以遊無窮云云、故曰至人無己、神人無功、聖人無名、注、此乃有迹無迹之分也、至於無迹、則謂之至人矣、無己無功無名、皆言無迹也【彷彿】後出師表に注あり、云心は、心神を閨房の內に安保し、老氏の尙ぶ所の玄妙虛無の道理を尋思し、道術吐納の法を習て、天の精和を呼吸し、至人眞人の神仙に、彷彿とさもにたる事を求むと也、

與達者數子論道講書俯仰二儀錯綜人物彈南風之雅操發清商之妙曲、【家語】舜彈五絃之琴、造南風之詩、曰、南風之薰兮、可以解吾民之慍

及び冬至清明などの類、吉日は、常時のよき日迄にてはなし、毎月の朔日也、周禮天官冢宰曰、正月之吉、鄭康成注、吉、朔日也、論語鄕黨篇曰、吉月必朝服而朝、朱子註、吉月月朔也、又杜甫北征詩曰、閏八月初吉、杜子將北征、邵國賢集註、初吉、朔旦也【羔】小羊、ひつじのこ【豚】小豕也、いのこ、ぶたの子也、周禮、春行羔豚【奉】進也【躕躇】猶豫也、又住足也、行不進貌、たちもとふる、莊子養生篇曰、爲之躕躇【畦】田區也、うね【苑】林苑、所以養獸也、その【釣游鯉】說苑曰、呂望年七十、釣于渭陽、初下得鮒、次得鯉、刺魚腹中得書、書文曰、呂望封於齊云云【弋高鴻】楊子法言曰、鴻飛冥々、弋者何慕焉、論語、弋不射宿、圖解云、弋、是用生絲繫矢而射、弋は、いぐるみすと讀り、矢に生絲を係て鳥を射る也、鴻は、鴈の大なる者、ひしくひ也【風乎—】論語先進篇也、曾點、字晳、與子參者侍孔子、集註曰、春服、單袷之衣、浴、盥濯也、今上巳祓除是也、沂、水名、在魯城南、地志以爲有溫泉焉、理或然、也、風、乘涼也、舞雩、祭天禱雨之處、有壇墠樹木也、詠、歌也、論衡曰、春服既成、謂四月之服成也、冠者童子、雩祭樂人也注雩、祭旱之名、爲壇而舞其上以祈雨焉、言心は、嘉辰令日には、羔豚を烹調て奉進し、或時は畦隴苑圃の間に徘徊躕躇し、平々たる林の中に遊び戯れ、或時は淸水に臨で、面を洗ひ、手足を濯き、涼風の所在を追て移り、或時は池邊に傍て游泳する鮒鯉を釣、高く飛翔る鴻鴈を弋し射、或時は舞雩の壇の下に納涼して、風を受、吟詠して高堂の上に歸り來る注曾點願ふて云、暮春には春服の袷子已に裁縫す、其時に及で、長しき冠する者五六人、少年の童子六七人、相伴ふて沂縣の溫湯に浴し、其より早の時に歌舞雩祭して、雨請する壇の上に祭て、風に髮を吹せ汗を收めて、道すがら吟詠して歸らんと也、

安神閨房、思老氏之玄虛、呼吸精和、求至人之彷彿、

【老子曰】玄之又玄、虛其心、實其腹、

呼吸、謂咽氣養性也、莊子曰、噓煦呼吸、吐故納新、又曰、至人無己也、

【神】精神也【閨】宮中門小者曰閨、但し今は臥室の義ねや也【房】室也、房帷とて、ねや也【老氏】は、老聃也、姓は李、名は耳、道德經五千言を作れり【玄虛】老子經第一章曰、道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天

劉揚、今簡撮其書有益政者、略載之云〇韓文公有後漢三賢贊、王充、王符、仲長統三人是也、

使居有良田廣宅、背山臨流、溝池環匝、竹木周布、場圃築前、果園樹後、舟車足以代步涉之難、使令足以息四體之役、

【環】繞也、周廻也、孟子、環而攻之、莊子、王三環之【匝】帀同、作答切、周也、遍也【場】場同收禾圃【圃】種菜之處、周禮云、樹果瓜曰圃【使令】厮役也、孟子、便嬖不足使令於前與、人の使ひ者を云、言心は、我居好田あり、廣き舍宅あり、山を背にして、風暖かに景好時に乘じて登臨しつべし、前に川流有て、汲つべく濯つべし、溝池宅を廻り、竹樹圍み茂る、舍前に禾麥を收め入、こしらへ治むる場あり、瓜菜を種べき畠あり、屋後に果實を樹る林園あり、舟は水を渡るの難を助け、車は步行の勞に代るに足り、奴僕は田畠を耕作し、薪を採、水を汲、所用を供給して、我手足の勞役を休息するに足れり、此段の大意、溫公獨樂園記の注に見へたり、

養親有兼珍之膳、妻孥無苦身之勞、良朋萃止、則陳酒肴以娛之、

【兼】幷也【珍】珍味也【膳】師古曰、熟食曰饔、具食曰膳、又美食也【孥】妻也【萃】聚也、言心は、我親を養ふに、種々珍美を兼備る膳饈あり、妻子は耕桑を親からせざれば、身を苦しむるの苦勞なく、良朋友來り集れば、酒肴を陳ね並べて宴樂せしむ、

嘉時吉日則烹羔豚以奉之、蹁躚畦苑、遊戲平林、濯淸水、追凉風、釣游鯉、弋高鴻、風乎舞雩之下、詠歸高堂之上、

雩、祭旱之名、爲壇而舞其上、以祈雨焉〇【論語】曾點曰、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、

【嘉】亦作佳、善也、嘉時は、元日上巳 端午 七夕 重陽、

也、李性學文式曰、論レ理、貴二反覆而盡一レ事情、又曰、論宜二曲折深遠一【論】は、事を議し、理を論じて、反覆して其情を盡す、天寶遺事曰、李白、說論、皆成二句讀一、如二春葩麗藻一、粲二於齒牙一、時號二粲花之論一、

○樂志論

後漢仲長統、字公理、少好レ學、性俶儻敢言、不レ矜二小節一、每二州郡命召一、輒稱レ病不レ就、常以爲凡遊二帝王一者、欲二以立一レ身揚一レ名耳、而名不二常存一、人生易レ滅、優游偃仰、可以自娛、二其志一、故爲レ之著レ論云、

後漢の仲長統隱居し仕へず、其情志を娛樂する事を論ずるの文也【注】倜、音逖【倜儻】不レ羈貌、又高擧貌、又卓異貌、世事に羈されざる也、又高く塵外に超出るを云【敢言】敢直言也、物を飾らず、覿面に指付て言を云【矜】伐也【小節】細小の信節也、小さき義理だてを云【州郡―】其國郡の守護代官公命を以て招呼也【優游】綏々と我儘に逍遙する也、詩曰、以優以游【偃仰】仰て觀レ天、俯て察レ地、我身の儘に樂む也、本文の內に、俯仰二儀と云是也【同】仲長統少年より學問を好めり、其性世務に拘はらず、人と言時は、直言して阿順せず小さなる信義だてして矜らず、州郡より召出せ共、奉公を嫌ふて病者也と云て、其召命に不レ就、常に自ら謂く、大凡帝王の門に宦遊する者は、立身して名譽を揚んと思ふ故也、され共名譽は常にしも永く存せず、頓て失易し、人生は朝露電光の如にして、死亡し易しと、只優游偃仰して、己れが儘に遊山玩水し、自ら其志趣を娛ましむ、是故に此篇を著述す○萬里曰、此篇三段、自二篇首一至二之上一第一段、自二安神一至二之期一第二段、自二如是一至レ末第三段、

仲長統

後漢書列傳三十九、仲長統、字公理、山陽高平人也、少好レ學、博二涉書記一、贍二於文辭一、年二十餘、游二學靑徐幷冀之間一、與交友者多異レ之、幷州刺史高幹、袁紹甥也、素有レ名、招二致四方遊士一、士多歸附、統過レ幹、幹善待遇、訪以二當時之事一、統謂レ幹曰、君有二雄志一而無二雄才一、好レ士而不レ能レ擇レ人、所以爲レ君深戒也、幹雅自多、不レ納二其言一、統遂去レ之、無レ幾、幹以二幷州一叛、卒至二於敗一、幷冀之士、皆以レ是異レ統、々性俶儻、敢直言、不レ務二小節一、默語無レ常、時人或謂二之狂生一、尙書令荀彧聞二統名一、奇レ之、擧爲二尙書郞一、後參二丞相曹操軍事一、每レ論二說古今及時俗行事一、恒發レ憤嘆息、因著レ論名曰二昌言一、凡三十四篇、十餘萬言、卒年四十一、友人東海繆襲常稱二統文章一、足レ繼二西京董賈

と論じ結ばずんば、文章收まり難からん、斡は、廻轉也、羅山曰、箇樣に上を承て、斡らし轉せずんば、文章收め結り難ん【句法—】不塞より以下の八字を云、

人其人、〔謝云〕句法、火其書、句法 廬其居、句法 明先王之道以道之、〔謝云〕此是句法、鰥寡孤獨廢疾者有養也、此一句出禮運、

上の人字は、先王の敎を學て、士農工商をする者也、下の人字は、佛者老者を云、道士をも、僧尼をも、髮を長くし、四民常の人にせんと也、愚謂く、唐の太宗、諱は世民、故に文に臨では不諱、二字ある名は不偏諱と云共、民其人と云、さる歟、但し上に已に民字を書出せば、必しも左には非ず【火其書】とは、佛老の書籍を焚捨んと也【廬其居】とは、道觀寺院を、四民の廬舍にせんと也、如此して先王聖人の道を明かにして、人々を敎へ導かば、鰥寡孤獨廢疾の者、綏りと衣食ありて、養ふ事有んと也、老て無妻を鰥と云、老て無夫を寡と云、幼ふして無父母を孤と云、老て無子を獨と云、病て愈難き者、又足不立、用に立ぬ者を廢疾と云、如此なる者は、天下の愁へ苦む者也、上に相生養之道と云、相生相養と云、此に又有養也と云、相應の文也【注】【句法】人其人より以下の三句、各三字つゝ也、明先王の一句は、八字也、是皆句法也、禮運は禮記の篇の名也禮運篇曰、大道之行也、天下爲公、選賢與能、講信脩睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壯有所用、幼有所長、鰥寡孤獨廢疾者、有所皆養、

其亦庶乎其可也、〔呂云〕言語下得好、主意又見於此一〇〔謝云〕一篇皆大議論、結得尤有力〇結得似軟而實健言有盡而意無窮、

上の如くにせば、庶幾くは善しと云 結ふ也【注】其亦庶乎の結句、筆を下し得て好と也【一篇—】原道一篇の本意皆大議論にして佛老を破り、吾道を表章す、而して此長篇の結句尤も筆力有て、彌〻奇妙也とぞ【結得似—】書止結る事柔軟なるに似て實に壯健也 其言は收まり盡し共、其意味は限り窮まる事なし、

論類

字彙、論、盧昆切、紬繹討論也、又去聲盧困切、議也、辯

思へ共、人皆許さず、吾道と異端との善悪を擇び分つと云共、義理密ならず、其意疎濶なる故也、吾道を説論すと云共、詳審ならず、其語粗率にあらくしき故也注荀楊を下手くろしく長々と不說、只二句にて辨析するを、文有頓挫と云、羅山曰、此間に荀と楊とが事を書加るは、文章のしつらひ也、此註大に誤る、

由周公而上、上而爲君、故其事行、由周公而下、下而爲臣、故其說長、〔謝云〕伊川云、周公沒、聖人之道不行、孟軻沒、聖人之學不傳、道不行、百世無善治、學不傳、千載無眞儒、其說本於此、

周公より以上は、上に居て君たり、聖人にして天下を治る故に、堯舜文武の事は、其當時に行はる、周公より以下は、孔子孟子聖賢也と云共、下に居て臣たり、故に、其道時に行なはれず、而も後世を敎ん爲に、書を著はす、是を其說長と云也、荀と楊とは不精不詳して道を傳る事能はず、羅山曰、孟子以後には、退之道を傳へたりとて、原道を著はす也、愚謂く、此說未だ必しも然らず、退之若其心に左思ふ事あり共、此篇の内には、文字に見へず、何の書よりか出るや未考注所引の程伊川の說は其兄明道程顥の墓に題する辭也二程全書に見へたり、孟子集註の終りに載たり、周公沒して後、聖人の道、天下に行はれず然れ共其道は、孔孟に傳ふ、孟子沒して後、聖人の學傳らず、其道行はれざれば、百世善政なし、其學傳はらざれば、千年眞實の儒者なし、久しく道傳はらずと云共、明道先生千歳以後の眞儒の道を傳へたりと云ん爲也、伊川の此語は、原道に本づいて云也、退之が意、此道傳はらざる故に、老佛其透間を見て、世に漫こると云、

然則如之何而可也、〔謝云〕此一轉有萬鈞筆力、不如此斡轉、如何收拾結得、曰、不塞不流、不止不行、〔迂云〕又言所以去異端之術、〔謝云〕佛老之道不塞、聖人之道不流、佛老之道不止、聖人之道不行、句法最巧、

然らば異端を排ひて、吾道を廣むる事は、何としてか善らんと云に、佛老の道を塞がずんば、聖人の道流傳せじ、佛老の道を止ずんば、聖人の道行はれじ注此然則より以下の八字大なる力量あり【鈞】十錢曰兩、十六兩曰斤、三十斤曰鈞、如此に引くり返して、きり

〔呂云〕文流暢、承₂上幾句₁有ㇾ力、一篇精神在ㇾ此〔謝曰〕此兩句絕妙、上六句直下來、如₃瓦馬下₂峻坂₁、如₃輕舟下₂長湍₁、若無₂一句欄截₁、便不ㇾ成₂文章₁、

以ㇾ是傳ㇾ之の是之の二字は、同く皆上の吾所謂道即ち聖人の道統也、堯は是を舜に傳へ、舜は是を禹に傳へ、禹は是を湯に傳へ、湯は是を文王武王周公に傳へ、文王武王周公は孔子に傳へ、孔子は是を孟子に傳ふ、孟子死して後に其傳受を失ふ、此段は、論語堯曰篇と、孟子盡心篇の終の章とを以て書出せり、堯曰篇には、堯より舜に傳へ、舜より禹に命じ、又湯王武王の道を述たり、是孔子の傳る處也孟子には、堯舜禹は見て知、湯王文王武王孔子は聞て知、五百年にして聖人出と云るは、孟子の傳る處也、孟子以後其傳を不ㇾ得と云は、退之此道を受得傳へたりと自ら思へるなるべし、此段の語を、朱子引て、孟子の序說に載たり、諸儒の論あり、猶復別に考ふべし 注〔文流暢—〕水の長く流れて、寛やかに暢るが如く、上より數多の句を承て力量あり、一篇のたましひ、堯舜孔孟傳受の處にある也〔此兩句—〕軻之死—の兩句、絕れて妙也、上六句は、上の堯より下の六句也、筆を馳る事、馬の峻しき坂を下るが如く、輕舟の長き瀨を下るが如く、眞直に云下す也軻之死と云句に至て、上の六句を塞留る樣に書り、若一句の塞留る所無んば、即ち文章を成さじ、欄截は、塞遮る意也〔黃氏日抄曰、所謂傳者、前後相承之名也、所謂道者、即原道之書所謂其位君臣云云、皆道之實也、故曰₂以ㇾ是而傳₁、以是者、指₂原道之書所謂道者₁而言ㇾ之、以明₂中國聖人、皆以₂此道₁而爲₁ㇾ治也、故他日論₂異端₁又曰、果孰爲而孰傳ㇾ之耶、正言₂此之所謂道者、無ㇾ非ㇾ實、而其傳具有₁ㇾ自來₁、彼之所謂道者、無ㇾ非ㇾ虛、而初無ㇾ所₂自傳₁云ㇾ爾、非₃他有₂面相授受之₁之密傳₁也、託₂附程錄₁者、乃發爲₂異說₁、稱₂譽原道₁、以爲₃此必有ㇾ所ㇾ見、若無ㇾ所ㇾ見、所謂傳者、傳₂箇甚麼₁、嗚呼異哉、堯舜禹湯文武周公孔孟相傳之道、備見₂原道一書₁、豈復他有₂險怪歇後語₁、陰幽不ㇾ可₂名言₁、如₃異端所謂不立文字、單傳心印之傳₂者哉、

荀與ㇾ揚也擇焉而不ㇾ精、語焉而不ㇾ詳、〔謝云〕文有₂頓挫₁、

荀は、荀卿、名は況、楊は、楊子雲、名は雄、詳かに進學解の注に見へたり、荀も楊も、自ら此道を傳へたりと

此故に先王の敎を以て、己が爲にする時は、禎祥あり、是を以て人の爲にすれば、慈愛有て公正也、是を以て心を修むれば、和平也、是を以て天下國家を治むれば、往處として理に當らざる所なし、愚謂く、處は、分別處當也、事を指計ふを云、此故に生る時は、其情意滿足し、死ぬる時は、其常の道を盡し得る也【郊】周禮曰、祀天神、祭地示、饗人鬼、爾雅、邑外曰郊、說文、距國百里爲郊、吳澂曰、冬至祀天於南郊之圜丘、夏至祭地于北郊之方澤、郊は、天子天を祭るの名也、南郊に出て、壇を圓く築て、とつて祭る、故に其祭りを郊と云、孫曰、假、至也、音格、假と格と通ず、天の神靈影向するを云也【廟】釋名、貌也、先祖形貌之所在也、孫曰、人鬼、祖宗也、享は、饗と通ず、祭而神歆之也、神明納受の義也、天の靈を神と云、地の靈を祇と云、人の靈を鬼と云、只言ふ時は、神祇鬼通ずる也、天を祭て郊すれば、天神來格す、先祖を宗廟に祭れば、父祖の鬼神歆享す、生る時に禮を以て仕へ、死する時に禮を以て葬り、祭る時にも禮を以てするの意なるべし【注】三句一樣の句法とは八字づゝ也、第四句は便ち變化して、十三字を一句とす、是章の法也、字法とは、假字享字を指べし、此兩字有心字にて、うつかと下さず○案ずるに其爲道易明と云より下、皆叶韻、明、叶謨郎切、公、叶姑黃切、平、叶皮陽切、情、叶慈良切、詳かに韻會小補に見へたり、

曰、斯道也、何道也、〔謝云〕文有收拾、有關鎖、曰斯吾之所謂道也、非向所謂老與佛之道也、〔呂云〕關鍵鎖盡一篇之意、

自問自答する也、右に所云の此道は、何の道ぞや曰、是こそ吾所謂道にて、聖人の敎へなれ、老と佛との道には非ず【注】文有收拾とは、此篇原道と名づく、於此斯道と云時は、一篇結り收むる所有て、其かなめのしまり有を關鍵と云也【關鍵鎖盡一】關鍵ありて、一篇の意を鎖し占盡す、鍵一本に作健、筆力强きを云、

堯以是傳之舜、舜以是傳之禹、禹以是傳之湯、湯以是傳之文武周公、文武周公傳之孔子、孔子傳孟軻、軻之死、不得其傳焉、

先王の敎は、堯舜禹湯文武周公孔子の傳る所にして、所謂仁義道德是也、佛老の道に非ず注此一轉妙とは、前に夷狄の法を擧て、先王の敎の上に加ふと云、此にて其敎は何也と轉換したる處妙也【與前面—】發端の語を、此にて再たび出すを云、是文章の一體の法也、

其文詩書易春秋、其法禮樂刑政、其民士農工賈、此三句短、

先王の敎の文は、詩書易春秋等の書也、禮記を云ざる事は、下に禮樂を云故也、先王の法は、禮樂刑政也、先王の民は、士農工賈の四民也注三句皆短し、

其位君臣父子、師友賓主、昆弟夫婦、此一句長、其服麻絲、其居宮室、此二句短、其食粟米蔬果魚肉、此一句又長 其爲道易明、其爲敎易行也、此一句合二句爲一句【謝云】連下九個其字、變化六樣、句法、與前章爲之字相應、此是章法、

先王の品を定むる位は、君臣父子師弟子朋友賓客主人兄弟夫婦也、其衣服は麻絲也、其居室は、宮室也、其食は、粟米蔬果魚肉也粟米は、五穀を兼たり、五穀は、米大麥小麥大豆小豆也、又曰、黍菽粟麥稻也、蔬は、野菜也、果は、艸木の實、五果は、李杏梅桃栗也、肉の一字、鳥獸魚を兼たり、其道明かにし易く、其敎行ひ易し注一句は長く、二句は短く、次の一句又長し、是長短錯綜の文法也、又後の一句は、二句を合せて一句とす、道と敎と二句なれ共、續けて一句とする也【連下—】九つの其字を連ね下す、其文其法以下の其字也、六樣に變化す、前の十七の爲之の字と、文字相應ず是文章の法也、

是故以之爲己、則順而祥、以之爲人、則愛而公、以之爲心、則和而平、以之爲天下國家、無所處而不當、【謝云】上三句一樣句法、第四句便變化、十三字一句、此章法也、是故生則得其情、死則盡其常、郊焉而天神假、【謝云】字法、廟焉而人鬼享、字法、

夏之亡也、是は中國は盛に禮義有て、夷狄には禮義なし、夷狄と云時は、西戎南蠻にも、禮義なしと知べし、諸夏は中國也、夏は大也、諸の大ひなる禮義の國と云義也、又中國には、花やかなる文章の光りある故に、華夏とも云也、夷狄には君あれ共、禮義なし、中國には若偶君無れ共、禮義廢れざる故に、夷狄の有君は、諸夏の無に劣る也、此に經曰と云は、五經に周禮儀禮孝經論語を加へて、九經と云時は、論語も經也、又論語を圓珠經と云は、世俗の說也、孟子滕文公上篇曰、魯頌曰、戎狄是膺荊舒是懲、周公方且膺之、註曰、魯頌、閟宮之篇也、膺、擊也、荊、楚本號也、舒、國名、近楚者也、懲、艾也、按今此詩爲僖公之頌、而孟子以周公言之、亦斷章取義也、又下篇曰、周公兼夷狄、驅猛獸、而百姓寧、孔子成春秋而亂臣賊子懼、詩曰、戎狄是膺、荊舒是懲、則莫我敢承、無父無君、是周公所膺也、注曰、兼、幷之也、承、當也、春秋論語詩を引て、夷狄を賤んじ惡む事を云也、佛法は、夷狄の法なる故也、春秋には、中國の諸侯も、夷狄の禮を用れば、是を夷狄にす、夷なれ共進で中國を慕へば、是を中國にす、夷狄を變じて中國に向ふを譽て也、論語に夷狄には假令君あれ共禮義なし、中國には君無れ共禮義あれば、夷狄に勝れり、詩閟宮篇には、戎狄は君父を無がしろにする故に、周公是を伐、荊舒は蠻夷に近く、要害を賴て、中國に隨はず、周公是を懲すと云り、荊は、楚國也、舒は、國の名にして、楚に從がふ、風俗の亂れたる國也、孔子周公皆夷狄を惡む事如此、

今也舉夷狄之法而加之先王之敎之上、幾何其不胥而爲夷也、〔謝云〕好句法、應在後、

然るに今夷狄の佛法を舉て、先王の敎の上に加ふ、儒釋道三敎相並ぶ事を云也、如何ぞ相率て中國も皆夷狄とならざらんや、胥字は、相共にと云義也　注　應在後とは、此下に所謂先王之敎何也とあるを云也、

夫所謂先王之敎者何也、〔謝云〕此一轉妙、

博愛之謂仁、行而宜之之謂義、由是而之焉之謂道、足乎己無待於外之謂德、〔迂云〕與前面許多說話相應、是作文一法、

來我褒之也、

左傳僖公二十七年春、杞子來朝、傳曰、杞桓公來朝、用夷禮、故曰子、公卑杞、々不共也、註杞、先代之後、而迫於東夷、風俗雜壞、言語衣服有時而夷、故杞子卒、傳言其夷也、今稱朝者、始於朝禮、終而不全、故唯貶其爵、杞用夷禮、故賤之、杞の桓公魯に來朝す、來て朝禮を行ふを、來朝と云也、諸侯の位の品五つあり、公侯伯子男也、杞は夏の禹の後東樓公の國也、本より侯爵也、杞侯と云べし、然るを春秋に杞子と記せり、侯は第二、子は第四也、杞國東夷に近ふして、風俗雜り破れ、其言語衣服時有て夷に同じ、故に其君の卒する時にも、春秋に杞子と書す、今杞の桓公來て、始朝禮を行なふと云共、終りに全く調らず、東夷の風俗用る故に、其爵位を貶して、杞侯と不云して、杞子と云也、杞を賤んずる故也、又韓文注、僖二十三年左氏、杞子卒、用夷禮、故曰子、是諸侯夷の禮を用る時、是を夷にする也、又此杞子貶爵の辨、朱子語類に詳也別に考ふべし、但し此處には不合故に不引之、穀梁傳文公九年冬、楚子使萩來聘、楚無大夫、無命卿其曰萩何也、以其來我褒之也音義曰、萩、子遙反、又子小反、或作萩、左氏作椒、楚子は、楚國の王也、萩は楚の大夫の名也、萩をして魯に來聘せしむ、聘は、問也、來て音信するを云也、楚に大夫なしとは、此時周衰へて、楚君自ら王と稱し、其臣自ら大夫と成、天子より命せられて大夫と成を、命卿と云也、春秋の法に、卿大夫に非れば不書名、今名を萩と書すは、楚に有大夫とする也、楚は蠻夷の國なれ共、中國を慕て、使者を魯へ來す、故に是を譽て、楚に有大夫とする也、我とは、魯を云也、春秋は、魯の史記なれば、魯を我と稱する也、是夷なれ共、中國に進めば、中國之と云也、

經曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡、【語】八佾篇、詩曰、戎狄是膺、荊舒是懲、【詩】閟宮篇、

論語八佾篇子曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡也、正義曰此章言中國禮義之盛、而夷狄無之、舉夷狄則戎蠻可知、諸夏中國也、言夷狄雖有君長而無禮義、中國雖偶無君而禮義不廢、故曰夷狄之有君、不如諸

外天下國家、滅其天常、子焉而不父其父、臣焉而不君其君、民焉而不事其事、〔謝曰〕極論佛老之禍天下

然れば則ち古の聖人の正心誠意は、將に以て爲る事有んとす、心と理と事と同じく通じて天下國家を治むる事をし、人倫道を行なふ事をする也、德の外に理なし、心さへ靜かなれば、無別事とて、空しく方寸の虛を守るには非ず、韓文註云、尹彥明曰、介甫謂退之正心誠意將以有爲非是、蓋介甫不知道、正心誠意便休卻是釋氏也、正心誠意、乃所以將有爲也、非韓子不能至是、尹彥明は、程伊川の門人也今佛老其心を修めんとす、只心許りを守て、天下を外にし國家を外にする時は、天常を滅す也、天地自然の常の道を、天常と云、天地有て後に男女あり、男女有て後に夫婦あり、夫婦有て後に父子あり、父子有て君臣あり、兄弟あり、朋友あり、是を五倫と名付て人間五つの品也、此外に道なし、聖人は人倫の極めにて其道を立たり、則ち天地自然の道也、故に儒者の自然は、眞の自然也、莊老の自然は、私に作れる自然也若我心を修めて此外別事なしとて、天下國家を外にし、天地自然の常を亡さば、子は子の道を失ふて、其父を蔑しろにし、父は父の道を失ふて、其子を敎養はず、臣は臣の道を失て、其君を無がしろにし、君は君の道を失て其臣を治めず、一切の人民は、其する業を事とせずして、徒らに在ん、是君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらず、民民たらず、如何ぞ其身を修んや、如何ぞ國家を治んや、故に儒者の敎は、人倫の外に別に道なし、大學の正心誠意は、身を修めて、其上に人を治め、國を治むるの根本也、佛老は人倫を捨る故に異端と云也〔注〕此段極めて佛老の天下を禍する事を論ず、人倫亂る時は、天下亂る故也〇退之大學を引て、格物致知を洩せり、退之が爲には、不足也遺恨也など先儒の説あれ共、左樣には責べからず其辨は、黃氏日抄に詳也、退之に非ずんば、誰か能大學を引て證し明さんや、殊勝の事也、

孔子之作春秋也、諸侯用夷禮、則夷之、〔左傳〕僖二十七年春、杞桓公來朝、用夷禮、故曰子、夷而進於中國、則中國之、〔穀梁〕文九年楚子使狄來聘、楚無大夫、其曰狄何也、以其

義に隨ふ、古あり今あり、時により事により、所によりて宜くするは、儒者の道也、今の世に生れて、古への無事をせよと云は、冬の裘著る者を責て、夏の如く葛を著るが易しと云、飢て食する者を責て水を飮ことをするが易しと云が如し、何を以て行なはれんや、されば五王三帝と不云して、五帝三王と云も其時の號也、其理は一つ也、

傳曰古之欲明明德於天下者、先治其國、欲治其國者先齊其家、欲齊其家者先脩其身、欲脩其身者先正其心、欲正其心者先誠其意、〔謝云〕拔大學格言、

傳は、禮記を指也、是は大學の語なれ共、退之が時は、禮記の中にあり、宋の程子に至て、大學を拔出せり、明德は、人の天より生れ得て、心に具はれる明かなる道理也、君自ら明德を明かにして、人人を治め敎るを、明明德於天下と云、如此なれば、天下平か也〔欲平天下者—〕天下國家は末也、身は本也、主人の身修らずんば、國家治まるべからず、結構なる大厦高堂ありと云共、主人無れば、荒屋なるが如し〔欲修—〕心は無形無色、何と正うすべきと云に、其意を誠にする也、心の發する所を意と云、惡をすまじきと云て惡をし、善をすべしと云て善をせぬは、皆僞り也、善をせんと思ふては、必ず善をし、惡をすまじきと思ふて、必ず惡をせぬは、誠也、一念の起る所を愼みて善惡を明かにし、必ず善をし、必ず惡をせぬを、誠意と云也、意誠あれば、心は自ら正しき也、心正しければ、其身修まる、耳目口も身に備はれば、身修まる時は、見る事聽こと、言こと、不背道理身巳に如此なれば、家自ら齊ふ、妻子眷屬臣下も、家の內に籠れり、家齊れば政事能行はれて其國治まる、國治る時は、天下從つて太平也、是は大學の八條目にて、先儒の委しく注せり、今あら〳〵と申也、詳かには能本文大全を見るべし 謝〔拔大學格言〕格は、正也、善言昌言の義也、

然則古之所謂正心誠意者、將以有爲也、今也欲治其心、說佛老而

子也、其亦不幸而不出於三代之前、而不見正於禹湯文武周公孔子也、【呂云】從而有力、意外意、有關鍵、

又嘆息して云、佛者老者幸にして夏殷周三代の後に出で、禹湯文武周公孔子に黜罰せられず、亦不幸にして三代の先に不出、禹湯文武周公孔子に正されず、堯舜の時に佛者老者出は、罪人也とて、必ず除かるべしと、先儒の云るも此意也、其三代の後に出で、世世の聖人に黜罰せられざるは、佛老の幸歟、又三代の前に不出して、世々の聖人に正されざるは、佛老の不幸歟と云也【註】此段筆力壯健にして、又思の外の意思あり、人の思慮の所不及也、關鍵は、文章の固め守り有を云、關は、關の木也、鍵は牡鑰、じやう也、

帝之與王、其號各殊、其所以爲聖一也、

王肅曰、漢總帝皇之號號曰皇帝、有別稱帝、無別稱皇、則皇是差輕者也、註孫盛曰、化合神者曰皇、德合天者曰帝、是故三皇創號、五帝次之、然則皇之爲稱、妙於帝矣、肅謂爲輕、不亦謬乎、帝は、天下を有つの號也、王も亦同じ、五帝三王是也、其名異也と云共、其聖たる事は一也、

夏葛而冬裘、渴飮而飢食、其事雖殊、其所以爲智一也、

夏は葛を著て涼しく、冬は裘を著て暖か也、史記太史公自叙傳曰、夏日葛衣、冬日鹿裘、葛は、絺綌也、絺は細布、綌は粗布也、渴して湯水を飮、飢ては飯食す、其事は殊也と云共、人の智たる事は一也、

今其言曰、曷不爲太古之無事、【迂曰】此是佛者之言、是亦責冬之裘者曰、曷不爲葛之之易也、責飢之食者曰、曷不爲飮之之易也、【迂云】攻擊佛老、

佛老の言に曰、何ぞ太古の無事をせざる、老子經に爲無爲、事無事と云、又莊子動もすれば、太古上古の事を引て其質朴の道を譽る也、凡そ時あり事あり、皆

し、第三句は甚だ長し、是短より長に入、文章の法也、

君不出令則失其所以爲君、（第一句七字）臣不行君之令而致之民則失其所以爲臣、（七字）民不出粟米麻絲作器皿通貨財以事其上則誅、（此是第二句三字、章法、）

若夫君命令を出さゞる時は、君たる道を失ふ、號令行れざる故也、臣として君の令を受行はず、民に致し示さゞる時は、臣たる道を失ふ、民として粟米麻絲を出さず、器具を作らず、貨財を通せずして上に仕へざる時は、誅罰せらる、民たる道を失ふ故也〔註〕第一句七字とは、則失以下の七字を云、第三句二字とは、則誅の兩字也、是亦文章の法也、倭本に二句三字に作るは非也、

今其法曰、必棄而君臣、去而父子、禁而相生相養之道、以求其所謂清靜寂滅者、（〔呂云〕譏佛老所以不可行之意）

孫曰、而、皆謂汝也、文章軌範生字下有相字、韓文作相生養、孫曰清淨、謂老、寂滅、謂佛也、史記老子傳曰李耳無自化、清淨自正、涅槃經曰、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、其法は、佛老の法也、佛老は出世間、或は山林に入時は、君臣を捨る也、而は、其君臣と云んか如し、男女夫婦の道無んば父子を捨る也、君と成、師と成て、民を生養する道なし、是佛老の所云にて、其道の清淨寂滅を求めよと、人に云教る也、清淨寂滅の四字共に、佛老に係ると云共、分て云へば、老は清淨、佛は寂滅也、佛老は、人倫を捨、民を生養する道を禁じて、只我一心の清淨一心の寂滅と云者を求めて知れと云也、畢竟虛と云、空と云、無と云事を云んとて、清淨寂滅と名を立たり〔註〕佛老は五倫を廢する道なれば、果して獨り行はるべからざる所以の意を說述る也、

嗚呼、其亦幸而出於三代之後、而不見黜於禹湯文武周公孔

若古への聖人無んば、人倫の類は絶滅せん事久し、人類今に至て有べからず、其故如何となれば、鳥獸は羽毛有て寒熱を防ぐ、魚鼈には鱗介有て寒熱を防ぐ、又鳥獸には、爪あり牙有て食を爭ふ、人には羽毛鱗介無れば、生れ出たる儘にては、何を以てか寒熱に居らん、又爪牙無れば、何を以てか食を爭はん、是人と禽獸と不同也と云ん爲也、鱗は、魚龍の類也、韓文注曰、介、甲也、萬つ甲ある物を、介蟲と云、又甲蟲とも云、龜蟹蛤螺の類是也、鳥獸の爪あるは、鷹犬の類是也、前漢刑法志曰、夫人肖天地之貌、懷天常之性、聰明精粹、有生之最靈者也、爪牙不足以供嗜欲、趨走不足以避利害、無羽毛以禦寒暑、必將役物以爲養、任智而不恃力、此其所以爲貴也【註】再起文とは、上に古之時人之害多矣、有聖人者立と云、此に再び如古之無聖人と云起す也【一段文相應】とは、此一段上の聖人出てこそ、人をば生養すれと云と相應する也【文勢有頓挫】とは、如古之無聖人一何也と云は、文勢長々と不說して、きりきりと急に收むるを云【此數句一】韓文第二十送浮屠文暢師序曰、民之初生、固若禽獸夷狄、然聖人者立、然後知宮居而粒食、親親而尊尊、生者養而死者藏、是故道莫大乎仁義、敎莫正乎禮樂刑政、施之於天下、萬物得其宜、措之於其躬、體安而氣平、堯以是傳之舜云云、書之於册、中國之人、世世守之、今浮屠孰爲而傳之邪、此序と原道と、其意相同じ、互に考へ見るべし、

是故君者、出令者也、（謝云）第一句四字　臣者、行君之令而致之民者也、第二句十字、民者出粟米麻絲、作器皿、通貨財、以事其上者也、第三句十七字、由短入長此是章法、

令は、號令とて上よりの云付也、君は法度を仰せ出す者也臣下は君の仰せを承行ふて民に致し示す者也、民は粟米麻絲を出し、器皿を作り貨財を四方に通じて、君上に事る者也、粟は、米の孚穀ある者也、器は、諸道具、韓文の注に、四者飲食之器、ごきさら也、字彙貨、金玉曰貨、又以物售與人亦曰貨說文、財、人所寶也、徐曰、可入用者也、廣韻貨也、賄也【注】第一句四字、第二句十字、第三句十七字とは、皆者也の二字を除て數る也【由短一】第一句は短し、第二句は漸く長

り、誠をせよと云故に、僞る者あり、忠孝をせよと云故に、不忠不孝の者あり、種々の事を云は、有聖人故也、然れば聖人死なば、天下泰平無事ならん、聖人死なずんば、盗人は止まじ、幾人の聖人を重ねて、天下を治むと云共、人皆私あれば、只重ねて盗跖を能樣に利德を付るに異ならず、假令は、聖人の政事に、斗斛を作て物を量れば、其太き細きを僞るのみならず、升の大小共に盗む也、權衡を作て、金銀を秤れば、其輕重を欺くのみならず、秤の輕重共に盗む也、符璽を作て、僞なき樣にすれば、其印判を僞るのみならず、其印判共に盗む也、仁義を作て人を矯正せば、人不仁不義をするのみならず、其仁義共に幷せて盗む也、然れば聖明を斷絕し、智慧を捨ば、大盗即ち止べし、聖人と仁義を惡く云ん爲に、箇樣に段々云こと也、珠を捨、玉を破らば、小盗即ち止べし、符璽を燒捨ば、民朴質鄙野にすなほなるべし、升を打破り、秤を打折ば、民自ら正直にして、爭ふべからず、天下の聖人の法を皆破て後に、民と共に大道を論ずべし、口義、摘猶投棄之也、殫殘、毀削也○總じて胠篋篇の心は、小盗を防かん爲に、篋に牡を鎖し結び繫るは、世俗の智惠也、大盗來る時は、其箱共に盗む也、又國を治むる者、仁義を設けて、法度を立と云共、勝れたる大盗來れば、其國を奪ひ取故に、其仁義をも、法度をも、幷せて盗む也、故に大盗は諸侯と成、小盗は被虜と云り、然んは聖人の仁義、盗跖を利する也と、莊子が流を訕る也、

嗚呼、其亦不思而已矣、〔呂云〕反覆辨論、

嗚呼は、嘆息の辭也、老子莊子が所云、何の理をも思はざる迄也と、嘆て笑止がる也、不思の二字、佛老に係ると云共、世の人も惑ひて、此理を思はぬかと見ても、兼通ずべし注此道理を、佛老は不思、くりかへして論ずる也、愚謂く此解大に誤る、退之老莊が妄言を、反覆して辨じ論ずる也、

如古之無聖人、再起文人之類滅久矣、〔呂云〕一段文相應何也、文勢有頓挫〔謝云〕此數句送文暢序同意可互看、無羽毛鱗介以居寒熱也、無爪牙以爭食也、

の錘也、衡は、秤の竿也、今の代の天秤も此類也、人正直ならずして、欺き賺す故に、符璽斗斛權衡を作て僞り無らしむる也、

相奪也、爲之城郭甲兵以守之、害至而爲之備、患生而爲之防、

〔謝曰〕此一段連下十七個爲之字、變化九樣句法、起伏頓挫、如層峯疊巒、如驚濤巨浪、讀者快心暢意、不覺其下字之重疊、此章法也、

亂を起し兵を集て、國を襲ひ奪ふ故に、城郭を搆へ、甲兵を作て守る也、害至とは、人を殺んとする惡事來らんか爲に、兼て其備を成す也、備は、用心するを云、患生とは、凡そ其氣遣なる事あるを云、患謂く、患難わざはひ也、其患生せん爲に、兼て防ぐ事をする也、水を止めんとて、堤を築くを防と云が如し、是皆聖人の道也〔注〕【轉換文法】上には、寒然—、飢然—と云、次には、爲之工、爲之賈と云、下には、相欺相奪と云、又害至患生と云は、皆轉じ換るの法也【此一段—】爲之の二字を、十七續いて下す、九樣に變化す、其句法の起伏頓挫する事、峯巒の層疊するが如く、波浪の大きに驚くが如し、是を讀者、心快く情暢て、其文字の多く重なる事を覺へず、是文章の法の妙也、起伏頓挫、層峯疊巒の義は、送孟東野序の注にあり、轉換章法の義は、送薛存義序の注に見へたり、

今其言曰、再說佛老、聖人不死、大盜不止、剖斗折衡而民不爭、

〔莊〕〔胠篋篇〕夫川竭而谷虛、丘夷而淵實、聖人已死、則大盜不起、天下平而無故矣、聖人不死、大盜不止、雖重聖人而治天下、則是重利盜跖也、爲之斗斛以量之、則幷爲斗斛而竊之、爲之權衡以稱之、則幷與權衡而竊之、爲之符璽以信之、則幷與符璽而竊之、爲之仁義以矯之、則幷與仁義而竊之、故絕聖棄智、大盜乃止、擿玉毀珠、小盜不起、焚符破璽而民朴鄙、剖斗折衡而民不爭、殫殘天下之聖法、而民始可與議論、

今其言と云は、佛者老者の云詞也、此段は、莊子胠篋篇を云、彼篇には、聖人を訕り、仁義を毀る、聖人死なずんば大きなる盜人止まじ斗斛を剖破り、權衡を折挫かば、民爭はじと云〔注〕谷より出る水は、川に入、川より海に入、川流盡れは、谷空虛也、丘山高ければ、其溜り多して港深し、丘崩れて平かなれば、淵も塡む實る也、此二句は喩へ也、上古の無爲自然なる時は、盜賊なし、聖人出で、善をせよと云故に、惡をする者あ

に音樂を成也、韓文注曰、宣導也、湮塞也、史賈誼傳、獨堙鬱、其誰語、漢書作壹鬱、音樂は、心の和きを口に唱へ、手舞足踏也、西山眞德秀曰、天高而居上、地卑而居下、物生萬類、有大有小分散而差殊、聖人因之制爲之禮云云、陰陽五行之氣、流行于天地之間、未嘗止息、相摩相盪、若雷霆之鼓動、風雨之散潤、二氣和合、故能化生而不窮、聖人因之制爲之樂云云、阮籍曰、尊卑有分、上下有等、謂之禮、人安其生、情意無哀、謂之樂、車服旌旗、宮室飮食、禮之具也、鐘磬鞞鼓琴瑟歌舞、樂之器也、禮踰其制、則尊卑乖、樂失其序、則親疏亂、禮定其象、樂平其心、禮治其外、樂化其內、禮樂正而天下平、

爲之政、以率其怠勸、爲之刑、以鋤其强梗、

人勤め勵す事能はずして、懈怠する事あり、懈怠すれば、其所作廢る、故に政法を作て、其怠り勸むことを勸め率る也、祝曰、勸、疲也、懈也、莊子、學道不勸、孟子滕文公上篇曰、民事不可緩也、詩云、晝爾于茅、宵爾索綯、亟其乘屋、其始播百穀、民之爲道也、有恒產者有恒心、無恒產者無恒心、苟無恒心、放辟邪侈、無不爲已云云、人の敎を不聽强梗なる者あり、刑に五つあり、墨刵劓宮大辟是也、鋤は、鉏と同じ、字彙に、去穢助苗也、又誅也、斫也、梗は、塞也、害也、詩注、病也、法度に從はず、無理に性强く、惡事をして政道を塞ぎ妨る者あれば、刑罰を立て是を除く、尙書舜典、帝曰、契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五敎、在寬、又曰、皐陶、蠻夷猾夏、寇姦宄、汝作士、五刑有服、五服三就、五流有宅云云、孔子曰、勝殘去殺、

相欺也、爲之符璽斗斛權衡、以信之、轉換文法

孫曰、符者、分而爲二、如後世銅虎竹使類是也、璽者、天子之印、以王爲之、權、稱錘、衡、稱衡也、舜典曰同律度量衡、脩五禮五玉、白虎通曰、量者、侖合升斗斛也、所以量多少也云云、十升爲斗、十斗爲斛云云、權者、銖兩斤鈞石也、所以稱物平施知輕重也云云、饒魯曰、謹權量、是平其在官之權衡斗斛、使無過取于民、符は、わりふ也、璽は、しるし也今の印判也、斗は、一斗量るます也、斛は、一石量るます也、權は、秤

用ひん爲に、賈を成す也、賈は商買人也、下係辭曰、日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、攷工記曰、或通四方之珍異以質之、或飭力以長地財、或治絲麻以成之、審曲面勢以飭五材以辨民器、謂之百工、通西方之珍異以質之、謂之商旅、飭力以長地材、謂之農夫、治絲麻以成之、謂之婦功、

爲之醫藥、以濟其夭死、爲之葬埋祭祀以長其恩愛、

生れて形あれば、尊も卑も疾病あり、疾病急なれば死す、夭はわかじにと訓す、非命にして死するを云、病を救ひ、死を救ん爲に、醫藥を作也、淮南子脩務訓曰、古者民茹艸飲水、采樹木之實、食蠃蠬之肉、時多疾病毒傷之害、於是神農嘗百艸之滋味、水泉之甘苦、令民知所避就、當此之時、一日而遇七十毒、玉堂綱鑑、神農本紀曰、民有疾病、未知藥石、炎帝始味艸木之滋、察其寒溫平熱之性云云、陶弘景本艸序曰、舊說皆稱神農本經、余以爲信然、人死ぬる時に屍を山野に捨んは、忍び難き所也、故に葬埋を成也、下係辭曰、古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期無數、後世聖人易之以棺槨、孟子滕文公上篇曰、上世嘗有不葬其親者、其親死、則擧而委之於壑、他日過之、狐狸食之、蠅蚋姑嘬之、其顙有泚、睨而不視、夫泚也、非爲人泚、中心達於面目、蓋歸反虆梩而掩之、又君父死して後に、其臣其子孫、恩を報ひん爲、本を尋ん爲に、祭をする也、是葬埋祭祀は、人の恩愛を增ん爲也、禮記祭統曰、齋之日思其居處、思其笑語、思其志意、思其所樂、思其所嗜、祭之日入室、僾然必有見乎其位云云、外則盡物、內則盡志、此祭之心也、白居易議祭祀曰、祭祀之義、大率有三、禋于天地、所以示人報本也、祠于聖賢、所以訓人崇德也、享于祖考、所以敎人追孝也、三者行於天下、則萬人順、百神和、此先王所以重祭祀也、

爲之禮、以次其先後、爲之樂、以宣其湮鬱、

始あれば終あり、先あれは後あり、上あれば下あり、天高く地卑きは、君臣貴賤の位也、先に生れ後に生るゝは、兄弟自然の理也、故に禮儀を作て、前後の次第をする也、人の氣沈み、心鬱する事あり、是を宣ん爲

不登、禽獸偪人、獸蹄鳥跡之道、交於中國、堯獨憂之、擧舜而敷治焉舜使益掌火、益烈山澤而焚之、禽獸逃匿、禹疏九河、瀹濟漯而注諸海、決汝漢、排淮泗而注之江、然後中國可得而食也云云、后稷敎民稼穡、樹藝五穀、五穀熟而民人育云云、使契爲司徒、敎以人倫云云又下篇曰、當堯之時、水逆行氾濫於中國、蛇龍居之、民無所定、使禹治之、禹掘地而注之海、驅蛇龍而放之菹、水由地中行、江淮河漢是也、險阻既遠、鳥獸之害人者消、然後人得平土而居之、古へに蛇龍の類人に逼りて、皆不得其所、聖人是を驅平けて、民始めて中土に居る事を得たり【注】此一段天地の間、聖人の道無ては叶ふまじき事也、聖人の道は、人々に功あり、佛者老者の所及に非す【眼目】聖人の君と成、師と成て、民を治め敎へ給ふ事を指也【條理】條は箇條、理は文理、聖人の天下を治めらるゝには、條々筋路ある事を云、此下に詳に說、

寒、然後爲之衣、飢、然後爲之食、木處而顚、土處而病也、然後爲之宮室、爲之工、以贍其器用、爲之賈、以通其有無、

古への聖人の政は如何と云に、人は鳥獸の羽毛あるか如くならざれば、寒に堪難し、故に始て衣服を作れり、物を食では叶はざる故に、飢を救ん爲に、飲食を作れり、木の上に居れば覆へり落、鳥の巢を作るが如なる事能はず、土の穴を掘て居れば、濕氣の病あり、是に因て宮室を作れり、易下繫辭曰、上古穴居而野處、後世聖人易之以宮室、耕作には鋤鍬無ては叶はず、飲食には器皿無ては叶はず、故に萬づの道具を造んが爲に百工を成也、下係辭曰、作結繩而爲網罟、以佃以漁、斲木爲耜、揉木爲耒、刳木爲舟、剡木爲楫、斷木爲杵、掘地爲臼、弦木爲弧、剡木爲矢、周禮攷工記曰、智者刱物、巧者述之守之、世謂之工、百工之事、皆聖人之作也、爍金以爲刃、凝土以爲器、作車以行陸、作舟以行水、此皆聖人所作也、甚だ詳に說之【贍】足也、我有て又無物あり、假令は、金銀有ても米持ぬ者あり、米有ても錢持ぬ者あり、鍛冶は鋤鍬作れ共、五穀を作らず、農人は五穀を持とも、鋤鍬をは鍛冶大工より買取也、人其有と無とを互に通はし

一、今之教者處其三、添了佛老農之家一、而食粟之家六、工之家一、而用器之家六、賈之家一、而資焉之家六、奈之何民不窮且盜也、

【呂云】用得新、文警策【謝云】好句法、

古の民は四つ、士農工商是也【注】穀梁傳成公元年曰、古者立國家也、百官具、農工皆有職以事上、古者有四民、有士民、學習道藝者、有商民、通四方之賢者、有農民、播殖耕稼者、有工民、巧心勞手以成器物者、士は奉公人、文を武總て云、農は耕作人、工は百工とて、諸の巧みをする者、細工大工皆是也、商は商人、往て賣、居ながら賣、皆是也、六韜に云、大農大工大商謂之三寶【今之――】士農工商の四民に、佛者と老者を加へて六つ也【古之教――】古の教は、聖人の道一つ也、即ち儒者の教也、今の教は、聖人の教一つ、佛老二つを加へて、三教とす、世に稱する所の儒釋道是也【農之――】農民の家は一つにして、粟を食ひ費す家は六つ、四民に佛老を加る故也工巧の家は一つにして、器物を用る家は六つ、商人の家は一つにして、器物を資用る家は六つ也、如何ぞ民困窮して盜賊をせざらんや【注】用得新とは、四つに二つを添る事を云述て、民窮して盜む事を新しく云出す、文の警策也、秀逸なるを云、又是好句法也、

古之時、人之害多矣、有聖人者立、【呂云】一句生文 然後教之以相生養之道、【謝云】此一段見得天地間不可無聖人之道、聖人之道、有功於人、非佛老可及、為之君、為之師、【迂曰】眼目【呂云】聖人治天下有條理、驅其蟲蛇禽獸而處其中土、

上古には未だ治まらざる故に、人の害多し、聖人出て、人に教るに、相生し相養ふの道を以てす、易の繫辭に、伏犧、神農、黃帝、堯舜の、人を養ひ教る事を說、孟子惠王篇下曰、使民養生喪死無憾也と云類是也、聖人天下を治る時は、為之君也、天下を教る時は、為之師也、尚書泰誓篇曰、天佐下民、作之君、作之師と云是也、又滕文公篇上曰、當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、氾濫於天下、艸木暢茂、禽獸繁殖、五穀

也と云、此注に所引の、孔子禮を老子に問の類是也、佛家には、孔子は、釋迦の弟子也と云、清淨行法經曰、我遣三聖化彼震旦禮義先開大小乘經然後可信、光淨爲孔丘、儒童爲顏回、迦葉爲老子、文句疏六云、佛遣三弟子震旦化敎　儒童菩薩彼稱孔丘、光淨菩薩彼稱顏回、迦葉菩薩彼稱老子、震旦既然十方亦爾、故先用世法而授與之、破邪論曰、內典天地經曰、佛遣三聖化彼東土、藏本塚墓因經云、閻浮界內有振旦國、我遣三聖云云、李商隱讃佛曰、吾儒之師、曰魯仲尼、仲尼師聃龍、吾不知聃師、竺乾善入無爲、稽首大覺吾師云云統紀通塞志　箇樣に孔子顏淵も、佛菩薩の化現也と云、孔子老子も、佛の弟子也と云訇りて、人を誑かす也、儒道を習ひ、孔子を學ぶ者も、佛者の說を聽習て、其僞を喜び、眞ぞと思ひて、吾道を自ら小き也として、佛老を尊大にする也、吾師の孔子も、老子を師とせらるゝと、口に云のみならず書にも筆記する也、禮記に孔子の辭を載て是を老聃に聞と云、史記家語に、孔子禮を老子に問と云、又老子は如龍と、孔子の譽られたるなと記す、皆僞り也問禮の事は、先儒の批判ありて、疑ふ事なれ共、孔子の老子を尊ふと云事は、本より莊子が寓言に出たり、漢儒是を取て禮記に書し、史記に書す、故に實事の樣に成來る也、去共聖人常の師無れば、老子に物を被問たる事も有べし、師說の注に見へたり、

噫後之人雖欲聞仁義道德之說、其孰從而求之、甚矣人之好怪也【呂云】接有力　不求其端不訊其末、惟怪之欲聞、

上にて嘆息して、又重て噫と云、異端佛盛なれば、後の世の仁義道德の說を聞んと思ふ共、誰に從てか求んや、甚しひ哉、世の人の怪き事をすき好む事、根本を知ざれば、端緒を尋ね求めず、何の分もなく、奇怪なる事を聞んと思ふ也、聖人の道は人間日用の常也、異端は世法の外にて怪也【注】上の句を承接て有力量也、

古之爲民者四、成公元年、古者有四民、有士民、有商民、有農民、有工民、今之爲民者六、古之敎者處其

此道を出る也、楊墨に入、佛老に入者は、必す聖人の道を出、異端に入て、異端を主とする者は、聖人の道を以て奴とす、聖人の道を出る故也、異端に入て異端に附者は、聖人の道を汙らはしとす、愚謂く、異端に入者をば尊ひ主とす、異端を出る者をば、奴隷の如くに卑しむ、異端に入者をば、喜て懐け付、異端を出る者をば、汙れ垢く様にする也、但し是にては謝註に不合【噫】如此なれば、嘆息する也、然れば後の仁義道德の説を聞んと思ふ共、誰に從てか聽んや【注】【孟子題辭】後漢の趙岐が孟子の註の序也、註疏曰、趙岐、字邠卿、京兆長陵人也、註孟子、張鎰釋云、孟子題辭、即序也、趙注尙異、故不謂之序、謂之題辭、其書に題號するの義也、周衰へて、戰國縱橫の時、大道廢れて、異端多く興る、縱橫の義は、送孟東野序に見へたり、楊朱が爲我を義とし、墨翟が兼愛を仁とするが如き、放蕩の言、時世を干し亂り、衆人を迷惑する者多して、幾等もあり【放蕩】放は、恣也、蕩は、淫也、我儘に妄なる事を云【謝云 孟子―】孟子滕文公下篇曰、聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言、不歸楊則歸墨、楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也、又盡心下篇曰、逃墨必歸於楊、逃楊必歸於儒、退之今歸字を改めて入字とす、退之文章を作るに、陳言を去て、新語を作る、孟子に歸楊歸墨と有を、其儘用れば、陳言也、人の云經れたる陳き語を、陳言と云、退之改め用るは、是文章の變化也、退之陳言を除き去る事は、其本集に見へたり、又進學解の注にあり、

老者曰、孔子、吾師之弟子也、佛者曰、孔子、吾師之弟子也、爲孔子者、習聞其說、樂其誕而自小也、【呂云】從異端之病原也 亦曰、吾師亦嘗師之云爾、不惟擧之於口、而又筆之於書、【家語觀周篇】孔子謂南宮敬叔曰、吾聞老聃博古知今、通禮樂之原、明道德之歸、則吾師也、今將往矣 敬叔與俱至周、問禮於老聃、

孫曰、老者、謂學老子者、佛者、亦謂學佛者、爲孔子者、謂學孔子者、老子の流には、孔子は、老子の弟子

遠、范曄胡爲以謂明帝之時、佛始入中國耶、退之一世大儒、非承襲謬誤者、將由心惡其教不復詳考其源流所自耳、又佛骨表注曰、眞誥云、裴眞人有三十四人弟子、十八人學佛道、餘者學仙道、陶隱居云、長安中似已有佛、裴君即是其事、以此考之、中國有佛尚矣退之所云、據正史也、佛法は、周漢の時代にも、天竺より渡來する樣に云說もあれ共、必しも實說には非す、後漢の明帝の時に、西域より始めて來り渡れり、去共未だ盛に行はれず、摩騰竺法蘭二人の僧、佛像幷に四十二章經を持來れり、其經を白馬に馱せり、勅して鴻臚館に置、其舊跡後に寺と成て、白馬寺と云、三國の呉の孫權か赤烏四年に、康僧會天竺より來て、江南に始めて建寺、唐人の詩に、經來白馬寺、僧到赤烏年と作るは是也、此後晉宋の世に及て、道安、惠遠、羅什、生法師、肇法師等、或は寺を立、或は經を飜譯す、梁魏の時には、達磨西來す、惠文、南岳、天台なども、齊陳隋の間に當れり、是より佛法甚た流布せり、菽林伐山には、南朝に寺を立る事、四百八十、北朝には寺を立る事、千數百所とあり、杜牧か詩に、南朝四百八十寺と作るも是也〇釋迦入滅より、明帝永平八年、摩騰等中國に入に至て、一千十九年、是歲より日本寬文三年まで千五百九十三年也、

其言道德仁義者、不入于楊、則入于墨、【孟子題辭】戰國縱橫異端並起、若楊朱墨翟放蕩之言、以干時惑衆者非一、不入于墨、則入于老、不入于老、則入于佛、入于彼、必出于此、（謝云）孟子說歸楊歸墨、今變歸字爲入、蓋文公去陳言、自撰新語、只是把古人文章變化、入者主之出者奴之、入者附之出者汙之、（謝云）入于楊墨佛老者、必出于聖人之學、主異端者、必以聖人之道爲奴、附異端者、必以聖人之道爲汙、噫、後之人、其欲聞仁義道德之說、孰從而聽之、（迂云）此處說人從異端、

孔子沒して後に、世の仁義道德を云者、楊朱が道に入ざれば、墨翟が道に入、墨子か道に入されば、老子の道に入、老子の道に入されば、佛道に入、楊墨老佛皆是異端にして、聖人の道に非す、彼道に入れは、必す

依て、老子流を學ふ者、老子と並べて、黃老と稱する也、神仙道士、幷に陰陽家以下に、黃帝を引も亦如此、前漢儒道を尊ばずして、黃老をはやらかすを黃老于漢と云也【注】【曹參傳】漢書列傳第九也、史記にも曹相國世家あり【膠西】通鑑註曰、漢國名、今山東青州府高密縣是【蓋公】史記漢書、並に名字を註せず【幣】帛也、財也、錢也【淸靜】張晏曰、靜與淨通用、曹參膠西の蓋公と云者、能黃帝老子の言說を會得すると聞て、厚幣を贈り、請待して、客殿に止舍せしめ、治道を云しめて、其術を用ふ【儒林傳】前漢書列傳五十八也【孝景】即ち景帝、高祖の孫文帝の太子也、漢書に有本紀、母を【竇太后】と云、漢書外戚傳に見へたり【汲黯】漢書列傳二十に見へたり【佛于晉―】後、漢書列傳七十八西域傳曰、天竺國、一名身毒、其人弱於月氏、修浮圖道、不殺伐、遂以成俗、浮圖即佛也、世傳明帝夢見金人長大、頂有光明、以問群臣、或人曰、西方有神名佛、其形長丈六尺而黃金色、帝於是遣使天竺問佛道法、遂於中國圖畫形像焉、楚王英始信其術、中國因此頗有奉其道者、後桓帝好神、數祀浮圖老子、百姓稍有奉者、後遂轉盛、韓文三十九佛骨表曰、佛者、

夷狄之一法耳、自後漢時流入中國、上古未嘗有也云云、漢明帝時始有佛法、明帝在位纔十八年耳、其後亂亡相繼、運祚不長、宋齊梁陳元魏已下、事佛漸謹、年代尤促云云、孫曰、後漢明帝夜夢金人長丈餘、頭有光明、飛行殿庭、以問群臣、傅毅曰、西方有神、名曰佛、其形丈六尺而黃金色、帝於是遣郎中蔡愔及秦景、使天竺求之、得佛經四十二章及釋迦立像、幷與沙門攝摩騰、竺法蘭東還、愔之來也、白馬負經、因立白馬寺於洛城雍門西以處之、其經緘于蘭臺石室、又畫像於淸涼臺、及顯節陵上、自是始傳中國、又韓文二、送靈師詩曰、佛法入中國、爾來六百年、樊曰劉孝標注世說、引劉向列仙傳序云、歷觀百家之中、以相檢驗得仙者百四十六人、七十四人已在仙經、又漢武故事昆耶王殺休屠王來降、得其金人神、置之甘泉宮、其祭惟燒香禮拜、上使從其俗祀之、則是佛入中國始自漢武、至成哀間、已有經矣、補注、杜致行守約編亦曰、漢武作昆明池、掘地得黑灰、東方朔云、可問西域道人、西域道人、佛之徒也、又開皇歷代三寶記云、劉向稱予覽典籍、已見有經、將如周時九流、釋典秦雖焚除、漢興復出、則先漢之前、逆至于周、有佛有經、其來也

可二以爲一天下母一、吾不レ知二其名一、字レ之曰レ道一云云、老子の道と云は、天地未分の處を指て云也、我心の一念未生の處是也、其に仁義の名もなく、禮樂の名もなし、本來虛無なれば、名付べき樣なし、去共名をなづけざれば、人に示すべき樣なき故に、名付て道と云也、此道より德あり、次第に末へ成て仁義あり、無心にして世を經る處を、道の用とす、道の一重下れるを德とす、故に仁と義とを捨て、道德を云、　老子の私也、聖賢儒者は然らず、人生れて心に具はれる理を性と云、即ち天命也、虛と氣とを合せて、身に具はるを心と名付、心に具る德の內にて、物を愛する理あるを仁と名付、心に斷はる所有て時により事に因て、宜き理あるを義と名付、此理を眞圓に得て失はぬを、德と名付此理に因て日々行ふ所を、道と名付、然れば性命道德仁義其名不同にして、其實は一也、故に吾所謂道德は、仁義を合せて云、天下の公言也一人の私に非ず、

周道衰、孔子沒、〔迂云〕異端行有レ所レ自、　火二于秦一、　黃老二于漢一、

【史秦皇紀】李斯請史官非二秦紀一皆燒レ之、非二博士官所レ職、天下敢有下藏二詩書百家語一者上、悉詣二守尉一雜燒レ之、

【曹參傳】聞下膠西有二蓋公一、善治中黃老言上、使二人厚レ幣請一レ之、蓋公爲言下治道貴二清靜一、而民自定上、於レ是避二正堂一、舍二蓋公一焉、其治要レ用二黃老術一、又【儒林傳】孝景不レ任レ儒、竇太后又好二黃老術一、【汲黯傳】黯學二黃老言一、治レ官、民好二清靜一、

佛二于晉宋齊梁魏隋之間一、【文公佛骨表】宋齊梁陳魏隋以下事レ佛漸謹、年代尤促、

周の末、聖人の道衰へ、孔子沒して異端邪說行はれて、吾道を知者なし、偶六經ありと云共、秦の始皇が時に、李斯が勸めに依て、詩書百家の書を燒棄注【異端之行―】周の道衰へ、聖人沒する故に、異端因て行はる、是有レ所レ由來一也【史秦皇―】秦の政道苛く虐ぐる故に、天下の士民嗷々と相訴ふ、始皇三十四年、丞相李斯請て云、史官秦の紀錄に非るをば皆燒ん、詩書百家の語を藏し置者あらば、郡縣の代官に持參して、悉く雜へて燒んと云て、遂に皆燒棄る也、詳に本紀に見へたり、博士は、文學に廣才なる者を此官とす【守】は、郡司也【尉】は、縣官也【黃老―】漢の高祖惠帝の時、曹參政をす、黃老の術を貴ぶ、又景帝儒者を用ひず、竇太后黃老の術を好む、又汲黯黃老の道を學て、民を治むと云り、黃老は、黃帝老子を云也、黃帝は、聖人也、黃帝の云ぬ事を後の世に託けて、人に信せさせんが爲に、列子莊子などに、黃の語を設け作て、引に

臧、非仁義之謂也、臧於其德而已矣、又馬蹄篇曰、蹩躠爲仁、踶跂爲義、而天下始疑矣、又曰、毀道德以爲仁義、聖人過也、林希逸口義曰、呴兪、猶嫗撫也、蹩躠、勉强而行之貌、踶跂、行立不安之貌、又胠篋篇曰、攘棄仁義、而天下之德、始玄同矣、如此仁義を詘る事、老子莊子甚た多し、莊子か蹩躠爲仁、踶跂爲義と云は、此の煦々孑々の義也、又道德不廢、安取仁義と云語もあり、是皆老子莊子が仁義を詘る處也注【老子病源】其見る事小なる故に、仁義を小也として詘る、退之能見付たり【當看莊子】仁義を毀る事、莊子に多し、殊更駢拇馬蹄胠篋の二篇に出たり、

其所謂道、道其所道、非吾所謂道也、其所謂德、德其所德、非吾所謂德也、此一截、謂老子道德之非、凡吾所謂道德云者、合仁與義言之也、天下之公言也、老子所謂道德云者、去仁與義言之也、一人之私言也、【史本傳】老子乃著書上下篇、言道德之意、五千餘言〔謝云〕此一篇斷盡聖人之道、與老子之道不同處、更以莊子胠篋馬蹄篇觀之、

老子の所謂道は、其道とする所を道とす、所謂德は、其德とする所を德とす、儒者の所云の道に非ず、德に非ず、凡そ吾儒者の所言の道德と云は、仁義を合せて云、古今天下の公言也、無私を公と云也、をほやけと訓す、老子の所云の道德と云は、仁義を捨て云、老子一人の私言也注老子道德の非なる事を云也【史本傳】史記老子の傳也、老子周を去て西に往の時に、函谷關の令尹喜、迎へ接して所望する故に、老子書を著す、上下篇五千餘字あり、皆道德の意を云り、今の老子八十一章ある是也、道德の意を云に因て、道德經とも名づく、或は上篇を道經と云、下篇を德經と云、希逸が口義の序に見へたり【此一篇斷盡―】聖人儒者の道と、老子の道と不同の處を斷り盡せり、更に莊子の胠篋篇馬蹄篇を考へ見よと也、胠篋馬蹄の篇の語は、前に見へたり、老子曰、道可道、非常道、又曰孔德之容、唯道是從、道之爲物、唯恍唯惚云云、又曰、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆

道消之類、若是志於道、據於德、方是好底方是道德之正、【總說】上に仁と義とを云て、下に其定名たる事を總て說【上句長—】上に七字八字十字の句を云、此に六字の句二つを續くるを云也、長句短句入雜て云事を、頓挫成文と云也、頓挫の義は、送孟東野序の註にあり【四句總—】定名、虛位、君子小人、有凶有吉合せて四句也、上の博愛以下の四句を、此下の四句にて總詰る也、

老子之小仁義、非毀之也、其見者小也、〔呂云〕老子病原〔謝云〕當看莊子、坐井而觀天、曰天小者、非天小也、彼以煦煦爲仁、孑孑爲義、其小之也則宜、

〔謝云〕此語出老莊之書【煦】音詡、

老子十八章曰、大道廢有仁義、十九章曰、絕仁棄義、民復孝慈、三十八章曰、失道而後德、失德而後仁義、失仁義而後禮、夫禮者、忠信之薄、而亂之首也、老子の仁義を毀て、小也とするは、老子の所見小しき也、

仁義は本より大きにして、小しきに非ず、喩は井の內に坐して、天を見て、天を小也と云は、天の小なるに非ず、己が所見狹く、其眼小きなる故也、尸子曰、井中視星、不過數里と云が如し、老子は、道德と仁義とを別々に見て、大道の內には、德も仁義もあり、仁義許りを云へば、大道を離れて裂碎る樣に思へり、故に大道廢れて有仁義と云、道を失ふて德あり、德を失ふて有仁義と云り、是其仁義を小也として毀るは、井の中の蛙也、仁義道德一つにして、各別に非ずと云は、聖賢儒道の說也【煦煦—】老子莊子は、煦々を以て仁とし、孑々を以て義とす、仁義の大きなる事を不知、然れば仁義を小き也とする事、尤もの事也、【煦】は、昫と同じ、日出て溫なる也、あたゝむと讀り、やはらかに、あたゝかに物云て、人を嬉しがらするを煦々と云也【孑孑】は、獨立の義にて、己を守り、志を立るを云也、莊子は、老子を學ぶ者也、莊子駢拇篇曰、仁義、非道德之正、又曰、仁義、其非人情乎、彼仁義何其多憂也、又曰、屈折禮樂、呴兪仁義、以慰天下之心者、此失其常然也、又曰、仁義又奚連々如膠漆纆索、而遊乎道德之間爲哉、使天惑也、又曰、吾所謂

公、愛公二字、卻甚有レ義、又曰、問原道起頭四句、恐説得差、且如二博愛之謂一レ仁、愛如何便盡二得仁一、曰、只爲二他説二得用一、又遺二了體一、又曰、問二由レ是而之焉之謂一レ道、曰、此是説二行底一、非二是説一二道體一、問二足二乎己一、無レ待二於外一之謂一レ徳、曰、此是説下行レ道而有二得於身一者上、非二是説中自然得二之於天一者上、羅山曰、博愛するを仁と云ことは、墨氏か兼愛、佛氏が平等利益と云に陷るべければ、如何可有と、先儒是を評論す、其上程子は愛を仁とするは非也、仁者は物を愛すと云共、愛の一字を仁とすべからず、博愛の説不可也と云り、朱子は、愛は仁の用也、仁の體に非ず、退之が博愛を仁と云と有は、用を云て、體を忘たりと論せり、朱程の説、誠に有レ理然も論語に、樊遲仁を問時に、孔子答て人を愛すと宣へば、博愛を仁と云と云共、可ならんと黄氏日抄に見へたり、又朱子退之が所レ云の道は、道を行ふを云、道の本體を云に非す退之か所レ云の徳は、道を行ふて身に得る所を云、天命木然の徳を云に非すと評論せり、

仁與レ義爲二定名一、（迂云）總説　道與レ徳爲二虚位一、（謝云）上句長、此兩句短、便頓挫成レ文、　故道有二君子一、有二小人一、而徳有レ凶有レ吉、此四句、總二結上意一、

仁と義とは實なれは、定名とす、道と徳とは、上下に通して云、假令は、仁の道、義の道と云、仁の徳義の徳と云か如きは、是道徳の二字仁義に就て云は、虚なる故に、虚位とする也【道有君子─】とは、君子是を行へば、君子の道也、小人是を行へは、小人の道也、易にも、君子道長、小人道消とある時は、道に君子あり小人ある也【徳有凶─】とは、善人は吉徳を成、惡人は凶徳をする也、假令は堯舜の道、堯舜の徳と云、桀紂が道、桀紂か徳と云、是を以て道徳の二字、虚位たる事を知へし、韓文の補注には、楊誠齋、張無垢、楊龜山が論を載たれ共、今不レ及レ引、朱子の説を以て、此段を斷る也、性理大全五十八、問仁與レ義爲二定名一、道與レ徳爲二虚位一、虚位之義如何、朱子曰、亦説得通、蓋仁義禮智是實、此道徳字是通二上下一説、卻虚、如レ有二仁之道、義之道、仁之徳、義之徳一、此道徳只隨二仁義上一説、是虚位、他又自説下道有二君子一、有中小人上、徳有レ凶有レ吉、謂二吉人則爲二吉徳一、凶人則爲二凶徳一、君子行レ之、爲二君子之道一、小人行レ之、爲二小人之道一、如二道二、仁與一二不仁一、君子道長、小人

德四字の義を、別々に散分して說起す【五字句】起句に先字數少なく書出して、後次第に字數多く述る也、疊山文章の法を學者に知さん爲に、每句に幾字と云事を註す、

行而宜之之謂義、七字句

釋名曰、義、宜也、裁制事物、使各宜也、毛萇曰、義理也、節行也、由仁行得其宜曰義、孟子曰、義者、人之正路也、又曰、羞惡之心、義之端也、朱子曰、義者、心之制、事之宜、又曰、義者、天理之公、心に裁制する所より出て、正理に從ひ行ふて、其事を宜くする、是を義と云、君の仁、臣の忠、父の慈、子の孝、兄の友悌、夫婦の別、朋友の信、皆其各々の義理也、

由是而之焉之謂道、八字句

孫曰、是、謂仁義、之焉、適也、孟子曰、道也者、猶大路然、朱子曰、道卽理也、以人所共由而言、則謂之道、以其各有條理而言、則謂之理、又曰、道、猶路也、人物各循其性之自然、則其日用事物之間、莫不各有當然之路、是則所謂道、仁と義とに由從ふて行ふ、是を道と云、人間日用の道を大路に比し、道を行ふを路を適くに比す、羅山曰、之は、赴き向ふ意也、道路の意を假て之と云也、

足乎己無待於外之謂德、十字句○開端四句、

四樣句法、此乃文章家巧處、

孫曰、仁義足於己也、朱子曰、德者、得也、行道而有得於心也、又曰、得於心而不失也、又大學の明德を釋して云、明德者、人之所得於天、而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也、人此生を天より受、卽ち天理を心に具へ得て、己れに滿足り、外に假求る事を待ことなし、是を德と云【註】開端は、發端也、四句五字七字八字十字にして、句法自亦皆各別に四樣也、是文者の巧みに筆を弄する處也、羅山曰、獲麟解に、詠於詩、書於春秋など有も、上短く下長く書る句法也○性理大全三十五、程子曰、退之言博愛之謂仁、非也、仁者固博愛、然、便以博愛爲仁、則不可也、又曰、仁者必愛、指愛爲仁則不可、又五十八、問博愛之謂仁、朱子曰、程先生之說最分明、只是不子細看、要之仁便是愛之體、愛便是仁之用也、後段云、以之爲人、則愛而

書、辭而闢之昭如乎、奈何溺於異端之士、吹毛求釁、竊附程錄、尙欲陰爲異端報仇耶、此程門高第尹和靖力排語錄之非歟、程錄嘗謂愛、主情而言、蓋辯析精微之極也、仁者愛人、此正吾夫子之言、豈可因以博愛爲仁非原道哉、彼以煦煦爲仁、而此以博愛爲仁、正將以吾道之大、擴其所見之小也、原道不可非也、程錄雖嘗以虛位之說爲非、決非程子之言也、夫道二、仁與不仁而已、此正孟子之言、豈可反以道德仁義虛位非原道哉、仁與義爲道德、去仁與義亦自以爲道德、故特指其位爲虛、而未嘗以道德爲虛也、原道不可非也、程錄又載呂黎言治國平天下、止及正心而不及致知格物、此殆程子一時偶然之言也云云、原道云云、軻之死、不得其傳焉、所謂傳者、前後相承之名也、所謂道者、即原道之書所謂其位君臣父子、其敎禮樂刑政云云皆道之實也故曰以是而傳以是者、指原道之書所謂道者而言之、以明中國聖人皆以此道而爲治也云云、所謂道者、無非實、而其傳具有自來、彼之所謂道者、無非虛、而初無所自傳云爾非他有而相授受之實傳也云云、蓋不以愛爲仁、而以覺爲仁、必欲排除乍見赤子入井之心者、上蔡之言也、二程無之也、謂有不二法門而言、道無精粗彼此之分者、上蔡之言也、二程無之也云云、凡今所議原道之說、往々類此云云、必以孔孟之說而稽之、則讀者原道幾矣○此篇、古先或以爲十七段、或以爲二十一段、

博愛之謂仁、【迂云】散起、○【謝云】五字句、

論語、子曰、汎愛衆而親仁、又曰、仁者愛人、通論曰、仁者兼愛、故人二爲仁、中庸曰、仁者、人也、孟子曰、仁、人心也、又曰、惻隱之心、仁之端也、莊子曰、愛人利物、謂之仁、說文曰、干心爲仁、唯仁者能服衆心也、朱子曰、仁者、心之德、愛之理、程子曰、心譬如穀種、生之性、便是仁、博く慈愛して物を務む、是を仁と云、孔子の所言を以て見れは、君子は博く人を愛して、妄りに人を惡まず、其中にて仁者をば、別して親しみ近く、家に在時は先父母に有孝、子孫を慈しみ、夫婦和して別あり、兄弟相友愛し、次に奴婢を不便がり、後に犬馬に及ぼす、外に出る時は、君に忠あり、朋友に信ありて、且睦ましくす【謹】【散起】何晦夫曰、此四句散起、且鋪大道之原、此句より下の四句、先仁義道

は、成帝の時の人、穀梁傳を傳授す、封事を上りて天子を諫む又説苑、新序、列女傳を撰へり、博學にて忠義の人也、揚雄は、哀帝の時の人也、周易に準じて太玄經を作り、論語に准して法言を作り、諸國言語の異同を記して、方言を作れり、又甘泉賦、長楊賦、羽獵賦解嘲を著せり、此四人前漢の勝れたる文人也、傳は集昌黎文序の注にあり、箇様の人、後の世に稀なれば、退之深く道の本源を探り、卓然と高く建立し、文章を作て、一家の言を成就す【卓】説文、高也、論語集注、立貌、自ら吾家を建立するを、成一家言と云、史記自序傳曰、以拾遺補藝、成一家之言、其著はす所の原道原性師説等の數十篇、皆奥衍とふかくひろく、閎深とをほひにふかし、孟子楊子雲と相互に表裏と成て、六經を佐け助くと云、又黄魯直が云、退之が原道の一篇は、堯舜、禹王、湯王、文王、武王、相傳授するの正しき道を推本づけて、孔孟を尊び、佛老を排ひ闢く、其文辭の布置、尤も文章の正格を得、又迂齋曰、此篇詞嚴かにして、義正しく、佛老を攻擊、進學解に排異端と云、李漢が序に、酷排釋氏と云是也【開闔】辨論する所に、或は開き或は閉、或は縱し或は捨る事

あり、其文字の能續く事、縄を引て珠を貫くか如し、長く云述、連りて麗しき事、瓔珞を掛たりと云か如し

○謝疊山文章軌範注曰、此集文章、占得道理强、以清明正大之心、發英華果鋭之氣、筆勢無敵、光焔燭天學者熟之、作經義作策、必擅大名於天下云云、東坡嘗曰、自孟子後、能將許大見識、尋求古人、其斷然曰、孟子醇乎醇、荀與楊也、擇而不精、語而不詳、若非有見識、豈千餘年後、便斷得、伊川亦曰、退之晩年作文、所得甚多、如曰軻之死、不得其傳、以此言語非是蹈襲前人、又非鑿空撰得、必有所見、二先生之論、豈輕發者哉、山谷嘗曰、文章必謹布置、毎見學者、多告以原道、命意曲折、後以此槩求古人法度、如老杜贈韋見素詩、布置最得正體、如官府甲第、廳堂房室各有定處、不可亂也、韓文公原道、與書堯典、蓋如此、石守道曰、孔子之易春秋、自聖人以來未有也、吏部原道原性原毀行難禹問佛骨表諍臣論、自諸子以來未有也、源流至論曰、原道一篇、名教砥柱、佛骨一疏、群疑氷釋、黄氏日抄五十九云、嗚呼、自昔聖帝明王所以措生民於理、使其得自別於夷狄禽獸者、備於原道之書矣、孔孟沒、異端熾、千有餘年而後得原道之

木山川之主也、人者、夷狄禽獸之主也、主而暴之不得其爲主之道矣、是故聖人一視而同仁、篤近而擧遠、結得極好、

右に云るも、次第を以て見れは、天は日月星辰の主也、日月星辰の運る事を得ざるは、天の亂る也、地は山川艸木の主也、山川の平かなる事を得ざるは、地の亂る也、人の夷狄禽獸の情を得ざるは、人の亂る也、是其附屬する物を暴げ害ふ也、何ぞ主たるの道を得んや、主として主たらざるは、人として人たらざるが如し、君父として君父たる道を得ざるが如し、故に聖人は一つに見て同く仁愛す、天地同根、萬物一體なれば、物我の隔なし、是を一視同仁と云、然れ共、仁の道廣大也、至て廣く云へば、風を捉り、虚空を掴か如し、我心に無私、欲少く公けに、理に合ふ時は、仁自ら備りて、君は君の道を得、父は父の道を得て、近き所より篤くし、遠きを擧れは、仁道廣りて、人倫の道備はるべし、韓文注樊曰、或曰、聖人之所以異於墨者、以其有別焉爾、今曰一視而同仁、則是以待人之道待夷狄、以待夷狄之道待禽獸也、而可乎、曰、不然、舜命九官、蠻夷猾夏則命皐陶作士、疇若予上下艸木鳥獸、則命益作朕虞、及其終則總命之曰、咨汝二十有七人、欽哉惟時、亮天功、其命官雖殊、然其所以施仁政於天下則一也注結得極好とは、聖人一視より以下の語にて、此一篇を結り得て好と也、

○原道

【按韓愈傳】愈毎言文章自漢司馬相如、太史公、劉向、揚雄後、作者不世出、故愈深探本原、卓然樹立、成一家言、其原道原性師説等數十篇、皆奥衍閎深、與孟軻揚雄相表裏而佐佑六經云【山谷云】韓文公原道一篇、推原堯舜禹湯文武相傳之正道、以開佛老、布置最爲得體【迂齋云】詞嚴義正、攻擊佛老、有開闔縱捨、文字如引繩貫珠、

韓　退之

韓文公唐の名儒にて、孔子孟子の道を守り、異端佛老の道を排けり、其の聖人の道を推本づけて論する故に原道と名付注韓愈傳は、唐書列傳百一に載之退之毎に言、文章は、漢の司馬相如、太史公、劉向、揚雄より以後、能作者代々に不出、相如は、武帝の時の人、子虚上林の賦、幷に大人賦、封禪頌を作れり、太史公は、司馬遷也、史記を作れり、是も武帝の時の人也、劉向

形於上、日月星辰、皆天也、形於下、艸木山川、皆地也、命於其兩間、夷狄禽獸、皆人也、辨析三説、

日月星辰上に形るゝは、皆天也と云べし、山川艸木下に形るゝは、皆地也と可云、夷狄禽獸天地の中間に命を受て生るゝは、皆人也と可云〔注〕三才の説を辨析分開して、其人と共に生出する物も、亦根本一同なる事を云分る也、

曰、然則吾謂禽獸曰人可乎、曰、非也、指山而問焉曰山乎、曰山可也、山有艸木禽獸、皆擧之矣、指山之一艸而問焉、曰山乎、曰山則不可也、

或人の問を設けて、答へ辨ずる也、韓公が云如くならば、禽獸を指て人と云ん歟と云、答て云、其は大に非也、萬物兩間に生れ出る所は同しと云共、而も人と禽獸とは各別也、山を指て山かと云はゞ好、凡そ山には艸木鳥獸あり、山を擧れば、艸木鳥獸其内に籠れり、故に山の一艸を指て、山と云へからす、天と云へば、日月星辰其内にあり、地と云は、山川艸木其中にあり、人と云は、夷狄禽獸其中にあり、

故天道亂而日月星辰不得其行、地道亂而艸木山川不得其平、人道亂而夷狄禽獸不得其情、

天道亂れては、日月も蝕し、或は光なく、星辰も運行次舍を違へ、或は妖星客星出、地道亂れては、艸木も枯、或生せず、山崩れ川竭、或は溢れ、其平和を不得、人道亂ては、父父たらず、子子ならす、君君たらす、臣臣たらす、夷狄も其國を亂り、或は中國を侵す、禽獸も、其所を失ひ、或は時を違へ、或は迫り、其實情を不得、

天者、日月星辰之主也、地者、艸

非其道有悔吝、故必推原古、決其可比者而比之、淮南子第一原道訓註云、原、本也、本道根眞、包裹天地、以歷萬物、故曰原道、因以題篇、韓註云、原、本也【原】は、たづぬる共、たづねみる共、もとづく共讀り、本來を推尋て云述て議論する也、是に因て文の一體とす、陳繹曾古文矜式曰、原、以原理、貴精嚴而直造本原云云、

○原人　論人者夷狄禽獸之主、聖人一視同仁　　韓退之

人の本來を云述て、天地の中間に生れ、夷狄禽獸の主たる事を論す、根本一體なる故に、聖人物我を一つに見て、同く仁をする也、西銘の注に詳也、韓文十一雜文の部に、原道原性原毀原人原鬼五篇あり、何晦夫曰、此篇專論人者爲夷狄禽獸之主、當有一視同仁之心、收拾皆在末二句、前面說天地、說人、亦本原之論、故名原人、黃氏日抄曰、原人、謂命於兩間爲夷狄禽獸之主、主而暴之、不得爲主之道、故聖人一視而同仁、篤近而舉遠、此說已見仁之全體大用、漢唐諸儒不及也、本朝西銘、又加精密○青松曰、此篇五段、一段總論、自首至之人第二段、自形於至人也第三段自曰然至不可、以問答明理、以譬明文也、第四段自故天至道矣、正心也爲主者不可暴、第五段、自是故至末、愈願望也、意也、萬里曰、此篇第四段、自篇首至人也第一段、自曰然至不可第二段、自故天至其情第三段、自天者至末第四段、

形於上者謂之天、形於下者謂之地、命於其兩間者謂之人、

（鼎足立說、）

天は無形と云共、日月の行道定れる數あれば、無形と云べからず、其外は無形の天にて、即ち太虛也、故に上に形るゝ者を天と云也、形字は、あらはるゝ共、かたちす共可讀、上あれば必す下あるは、自然の理也、天に對して下に形るゝ者を地と云也【兩間】は、天地の間也、天地の中間に命を受て生るゝを人と云也

【注】鼎は、三足兩耳、五味を調和するの寳器也、鼎足立說とは、天地人の三才を、鼎の三足の如くに、三つ並へて云立る也、史學提要曰、天地未分、惟一氣耳、一氣渾沌、形如雞子、渾沌既判、兩儀奠位、陽淸爲天、陰濁爲地、人生其中、負陰抱陽、是も三才を云述る也、

幸と同し、さいはひをねがふの義也、向曰、庶、冀、保、安、卒、終也、冀祖母蒙僥倖之恩、安終殘年也、本臣保字在卒字下、言心は願くは陛下、今令伯が愚かなる誠を憐みて、其寸志を遂ん事を聽し給へ、庶幾は劉幸に餘年を保ち終ん事を、然らは君の御恩、令伯生ては首を落しても報謝すへし、死後には黄泉苔の下にても物知ことあらば、艸を結て國恩を報ふへし【注】它日は後日を云、九泉は、黄泉也、地下の泉至て深きを云、必すしも九重無れ共、深を云んとては、九淵と云、高を云んとては、九天と云の類也、淮南子に見へたり【史記】本は左傳に出たり、晉の臣魏顆は、武子か子也、武子は、魏犨也、武子に有妾無子、武子病る時に魏顆に語て云、我死なは、此妾を宜く婦入させよと云、其病急なる時に成て云、妾を殺して葬に殉へよと云、我死なは、妾をも殺て共に埋めと也、武子死す、魏顆願くは正氣の時の遺言に從んと云て、彼妾を嫁せしむ、治時言とは、其命正しき時の言也、即ち治命也、病氣に侵されて死に臨む時に云をば、正しからさる故に、亂命と云也、魏顆其父の治命に隨て、亂命に從はす、其後魯の宣公十五年七月、晉秦と戰ふ、輔氏と云處にて、魏顆一人の老人艸を結て、秦の將杜回を禦くを見る、杜回は、大力の强兵也、老人に防かれて、杜回躓き仆れぬ、魏顆杜回を打取て、大きに秦の軍を敗る、後に魏顆夢に一りの老人を見る、老人の云、我は彼妾の父也、君其父武子が治命に從ふて、我女を嫁したり、故に我出來て其恩を報て、杜回を防くと云、是より結艸の故事起る、死して靈魂有て、恩を報るを云、

臣不勝怖懼之情、謹拜表以聞、

善本及び類聚には、怖字の上に、犬馬の二字あり、善曰、史記、丞相翟靑曰、臣不勝犬馬之心【以聞】は、奏聞也、上聞に達するを云、愚案するに、古來以聞の二字を、連ねて音にて讀法也、然れ共秦漢以來の表疏の文意を味ふに、以て聞すと讀て能通す、必すしも古點に不可拘、令伯如此申上るは、恐怖るの情に堪難し、謹て再拜して表を進上して、以て奏聞する也、此表の內、烏鳥私情怖懼之情と有は、皆陳情の字也、

原類

周易曰、比、吉、原筮元永貞無咎、傳云、比、吉道也、苟

より餘年を終難し、祖母と孫と二人、相互に生命を救ひ成、是を以て區々とうじつきて、祖母を廢て遠かり去ことと能はす、

臣密今年四十有四、祖母劉今年九十有六、是臣盡節於陛下之日長、報劉之日短也、烏鳥私情、願乞終養、

令伯は今歳四十四、劉は九十六歳也、然れば出仕して忠節を陛下に盡さん日は、行末永し、劉に養育の恩を報ん日は、甚た短し、葛龔喪伯父記曰、烏鳥之情、誠竊傷痛、翰曰、烏鳥反哺其母、烏の母餌を其子に飼、後に其子餌を其母に飼反す、山谷詩云、看盡林烏反哺兒、餌を反すを反哺と云、烏は孝鳥なる故に、白樂天が烏中之曾參と作るも是也、毛詩曰、蓼莪孝子、不得終養、翰曰、言我有烏鳥反哺情、乞畢祖母之養、烏さへ母に飼反す、況や人間をや、願くは養に終ん事を乞と也、

臣之辛苦、非獨蜀之人士、及二州牧伯所見明知、皇天后土、實所共鑒、

句解曰、密之事祖母孤苦也、獨字五臣作徒、銑曰、二州、謂梁州益州、牧伯、謂榮逵也、言非但人知我辛苦、天地亦知也、左傳僖公十五年、晋太夫曰、皇天后土實聞君之言、令伯が辛苦する事、蜀の人士の知のみに非ず、二州の牧伯にも、明かに被知、牧は、後出師表の注に見へたり、伯は、五爵の一也、大守を尊て、牧伯と云、牧伯の知のみにも非ず、皇天后土も實に昭鑿すへし、皇も后も皆君也、天地を尊て神明に云成す時皇天后土と云也、

願陛下矜愍愚誠、聽臣微志、庶劉僥倖、保卒餘年、臣生當隕首、死當結艸、

它日九泉下、死而有知、猶當報國〇「史記」魏顆、武子之子、武子有妾、病謂顆曰、我死嫁此妾、病亟又曰、殺以殉葬、及死、顆曰、寧從治時言而嫁之、及秦晋之戰、魏顆見老人結艸以抗杜回、回躓而顚、遂獲之、後顆夢老人云我、乃所嫁婦人之父也爾從先人之治命、余是以報耳、

中庸、子曰、小人行險以徼幸、僥は、徼と同し、倖は、

るを僞朝とす、先主は正統也、僞朝に非す、此表に晋を聖朝とし、蜀を僞朝とす、常に讀て此處に至て、滿足せさる也、令伯か爲に不足に思ふ也、惜哉と嘆く、古文珠璣、林希元曰、僞朝之語、甚爲人所病、然其時邪正未明、無足怪也、言ろは當時魏呉蜀、孰れか正、孰れか僞なる事、未た分明ならされは、蜀を僞朝と云も、指て不審ならさる事也、又按するに、荒朝と書る本あり、荒廢の朝廷の義なるへし、古今説海、百家名書にあり、

今臣亡國賤俘、至微至陋、過蒙拔擢、豈敢盤桓有所希冀、

銑曰、軍所虜獲曰俘、蜀爲晋滅、故曰俘、善曰、賈逵國語注、伐國取人俘、善本豈字上、有寵命優渥四字、毛詩、既優既渥、向曰、拔擢、謂郎中洗馬也、周易曰、初九盤桓、利居貞、向曰、不進貌、今令伯は、亡國の賤き俘人にして、至て陋し、不慮に過て拔擢を蒙る、人の多き中に、抽てられ被召出を云、尤も早く出仕すへし、何ぞ敢て盤桓と、たちもとをりて、此外別に何をか願望する所有んや、

但以劉日薄西山、氣息奄奄、人命危淺、朝不慮夕、

揚雄反騷曰、臨汨羅而自隕、何恐日薄於西山、向曰、日迫西山、喩劉年老暮也、廣雅曰、奄、困迫也、向曰、奄奄、將絶也、濟曰、危、易落、淺、易拔、慮、謀也、言朝不謀至夕之生也、左傳、趙孟曰、朝不謀夕、何其長也、令伯强く奉公を辭する事は何そや、劉老て病急なれは也、一期を一日に喩れは、夕日の西山に迫るが如し、僅に息の未だ絶ぬ迄也、奄々は、息の絶んとする意、人の命は、甚た危く、甚た淺し、朝にして夕を謀らす、劉か命、今晩をも不知と也、

臣無祖母、無以至今日、祖母無臣、無以終餘年、母孫二人更相爲命、是以區區不能廢遠、

鷦鷯賦曰、匪餘年之足惜、良曰、餘年、殘年也、區々、猶勤々也、廢遠、謂廢養而遠離祖母、令伯初め祖母無んば、今日迄長成し難し、祖母も亦令伯無んは、今

て養ふへき人なし、己か私情に順ひて辭退せんとすれは、告訴れ共許されす、令伯か進退此に極つて、實に狼狽とうろたふる也、

伏惟聖朝以孝治天下、凡在故老、猶蒙矜育、况臣孤苦、特爲尤甚、

晉武帝朝

爾雅、矜、憐也、令伯伏て惟れは、當今晉の武帝の朝廷、天下を治むるに教を以てす、堯舜より以來、人に不孝をせよと云の政なし、今の天子も亦如此、大凡故老の年よりたる者も、哀れみ育まるゝ事を蒙る、養老の禮あるは、古の善政也、劉甚だ年老て、令伯か便りなく獨り苦しめる事、殊更尤も甚し、誠に養ふ事を許さるべき道理也、

且臣少事僞朝、

言少年嘗仕於蜀、今按李密本蜀人先主帝室之冑、紹漢正統、名正言順、大非曹操漢賊之比、密又在孝子順孫之列、國亡歸晉、尤當不忘舊君、何忍自稱蜀爲僞朝乎、予每讀至此、爲之不滿、惜哉

歴職郎署、本圖宦達、不矜名節、

銑曰、僞朝、謂蜀朝也、郎署、謂尚書郎、言我本謀爲官職、非隱逸以名節自矜也、禮記鄭玄註曰、矜、謂自尊大也、令伯少年にして蜀に仕へて、尚書郎の署を經たり、臣が本意仕宦顯達せん事を思ひ計る、强ちに初より隱遯して、賢者の名聞貞節だてをして、自ら矜り、人に尊ひられんと存するには非すと也、羅山曰、其本意官位の聞達を圖て、名を揚ん共思はず、節義にも矜らざりき、此解甚誤 注論語子路篇、名不正則言不順云云、說文、冑、胤也、增韻、裔也、又嗣也、尚書敎冑子、廣韻、冑子、國子也、令伯蜀の人にして、年少ふして先主に仕ふ、先主は、漢帝の冑裔子孫にして、漢の正統を繼、其名號正しく、稱呼の言順調也、物の名正しければ、其を稱する辭、順にして不逆也、曹操が類には非す、曹操は漢の賊也、其上令伯孝子順孫の輩也、晉の武帝已に魏を纂ひ、又蜀を亡ほす、蜀亡ひて令伯晉に皈す、忠臣は孝子の門より出、令伯尤も蜀の舊君を忘るへからす、何ぞ蜀を指て僞朝とするに忍んや、位に卽まじき者の、妄りに位に卽て、王と稱す

施、令伯自ら謙退して云、猥りに卑きを以て、東宮に事ふまつるに當れり【東宮】は太子也、天子も諸侯も、太子を東宮と云毛詩左傳に見へたり、唐書に春宮坊と有も東宮也、内裏の東にある故也、又春は、東方也、震の卦は、東方に當て長男也、故に太子の號とす、又靑は木の色、東方の色、春の色なれば、靑宮共云也、令伯を召て、太子の洗馬の官とせんとす、令伯是を辭退して不參、己が首を隕す共、報謝する事能はす、因て表を上つて奏聞し、其官職に就ことなし、

詔書切峻、責臣逋慢、郡縣逼迫、催臣上道、州司臨門、急於星火、

切峻は、迫切峻厲とて、嚴き義也、翰曰、逋、緩、慢、倨也、羅山曰、のがれをこたる也、何とて引こみ根性にて、由斷するぞと被仰也、愚謂く、勅命を恐れず、逃隱れ慢とり倨る也【逼迫】は、せめせたぐる也【上道】羅山曰、上洛の義也、愚謂く、誤也、何方へ也とも、已に門出をし、其路に臨み行を云【急於星火】羅山曰、星火は、火打の火を打出す義也、咸陽火一星と云も、此字也、金石より火出れば、活と螢火の如く出るを云、愚謂く此說是也、但し燧より出る火星也、火を打出すと云は、僻に誤あり句解曰急於星流火發、此說恐くは非ならん、言心は令伯表を上つて、其官職に就さる處に、又重て勅書嚴重に下て、密か逋亡倨慢する事を被責、然る間郡縣よりも迫せたげて、早く發向せよと催促す、蜀の國司も來て、令伯か門に臨み、早々出行せよと勸る事、火星の飛よりも急速也、

臣欲奉詔奔馳、則以劉病日篤、欲苟順私情、則告訴不許、臣之進退實爲狼狽、

善本無以字、翰曰、篤病甚也、許謂許於州司也、進、謂欲去退、謂欲仕也、狼狽、猶悽惶也、善曰、孔叢子、孔子曰、吾於狼狽見聖人之志、荀悅漢紀論曰、周勃狼狽失據、塊然囚執也、韓文答崔立之書注樊曰、狼狽、獸名、狼屬也、生子或欠一足二足、相附而行離則顚、或曰、狼狽是兩物、狽、前足絶短、毎行常駕兩狼、失狼則不能動、故世言事乖者稱狼狽、令伯今勅を奉て、奔馳して出て仕へんとすれは、劉が病日日に重ふし

病して、自ら湯藥を煎し呑しめて、劉か左右を離れす、

逮奉聖朝、及蜀亡歸晋、沐浴清化、前太守臣逵察臣孝廉、後刺史臣榮、後刺史顧榮禮、舉臣秀才、臣以供養無主、辭不赴、辭不赴召、謂密就舉、則祖母無人主供養之事、

良曰、聖朝、謂晋朝也、令伯は、蜀の人也しが、蜀亡びて、西晋の武帝に皈す、當代の事なれは、尊て聖朝と云也【沐浴】の注は、漁父辭の註にあり、此にては、濕ふ義也、此時蜀郡の先の大守を逵と云、逵は名也、姓は知れす【察】は人を見知を云【孝廉】鄕里にて試みられて後、天子へ上る表なる故に、臣字を加ふ、孝行にして廉直なるの科第に舉らるゝ也、蜀郡の後の刺史、榮姓は顧氏也、晋書顧榮傳云、字彥先、吳國人也、吳平、與陸機兄弟同入洛、時人號三俊【秀才】鄕試せられて後に、此科に被舉也、言心は當代聖朝を尊奉するに及て、武帝の淸き政化に潤ふ、蜀の前の大守逵、臣密を孝廉の科に察し舉、後の刺史榮、密を秀才の科に進む、然れ共令伯出て仕へば、祖母劉氏か側に供養を主るへき人なき故に、皆辭退して赴かず【注】禮字衍文也、

會詔書特下、拜臣郎中、尋蒙國恩、除臣洗馬、猥以微賤、當侍東宮、東宮、即太子宮、非臣隕首、所能上報、臣具以表聞、辭不就職、

會は、あふと訓す、其事に會遇する也又たま〳〵と讀者あり、令伯太守刺史の召に出ざる處に、又勅書別して降り、令伯を召て郎中に拜せらる、天子の左右に給仕する官也、其頭を侍郎と云、先郎中に成て、次第に昇て侍郎に至る也【國恩】朱浮書曰、同被國恩、伯を郎官に被召て、尋て御恩を蒙り、又洗馬に除せらる、除は、のぞくと讀り、前官を除去て、新官に就の義也、一說に、階除の義にて、次第に昇進む義也、如淳漢書註曰、凡言除者、除故官就新官也、廣雅曰、猥、頓也、良曰、微賤、自謙也、隕落也、言自斷落其首不能報此恩、漢書、谷永上書王鳳曰、齊客隕首公門、以報恩

功五月、近如緦麻三月、緦麻以上、親之類、漢書文帝紀、服大紅十五日、小功十四日、纖七日釋服、註服虔曰、皆當言大功小功布也、纖、細布衣也、應劭曰、紅者、中祥大祥、以紅爲領緣、纖者、禫也、凡三十六日而釋服矣、此以日易月也、晉灼曰、漢書例以紅爲功也、師古曰、紅與功同、服晉二說是也、此喪制者、文帝自率己意、創而爲之、非有取於周禮也、何爲以日易月乎、三年之喪、其實二十七月、豈有三十六日之文、禫又無七日也、應氏既失之於前、而近代學者因循謬說、未之思也、韻會、大功小功、喪服名、謂治布功有精麤之分、禮記間傳曰、大功七升八升九升、小功十升十一升十二升、緦麻十五升云云、具に儀禮の服問間傳に見へたり、向曰、强盛也、世說新語第一云、陳太丘詣荀朗陵、貧儉無僕役、乃使元方將車、季方持杖、張文倘少、載著後車、既至、荀使叔慈應門、慈明行酒、餘六龍下食云云、善曰、董仲舒曰、仲尼之門、五尺童子、羞言五伯、大明李鵬元曰、二歲半一尺、五尺十二歲、六尺十五歲、文選類聚 には、並に童字を作僮、向曰、僮、僕也【煢煢—】煢、音瓊、獨也、濟曰、煢單也、弔問也、善本作獨立、曹操責躬表曰、形影相弔、五情愧赧、令伯

本より叔父伯父なく、又無兄弟、家門衰へ、運祚薄ふして、年闌て始て男子二人を持り、外には朞功强近の親なしとは、喪服に大功を服し小功を服する親類あり、大功も小功も布の名、布帛を織に、經の絲上に四十下に四十、合て八十筋を一升と云、大功の布は、七升八升九升、小功の布は、十升十一升十二升、緦麻は十五升、其女工の所織の功、精粗の差別ある故に、大功小功と云也、大功は九月、小功は五月、伯叔兄弟等を、朞功の親と云也、齊衰其月年遠くも近くも家盛なる親類なし、又內には門に應る五尺の童子をも持ぬと也【應門】は、人の問尋る時に、誰と答る義也、毛詩に、天子の門を應門と云の應門には非す、令伯獨り居て憂へ、獨成立て親類もなく、奴僕もなく、我相手と成者は、只我形と影と相弔問する許り也、形と影と、互に無事なるかと相問の義也、

而劉夙嬰疾病、常在牀蓐、臣侍湯藥、未嘗廢離、

【蓐】茵也、臥席を云【侍湯藥】禮記曰、父母有疾飲藥、子先嘗之、劉早く病に係て、常に床蓐に臥り、令伯看

也、憂謂父憂也、左氏傳、楚少宰曰、寡君少遭閔凶、險釁は、けはしきひまと讀り、難苦わざはいを云、愍凶は、悲しき不吉の事也、父を失ふを云【生孩】孩、說文、本作咳、小兒笑聲、孟子曰、孩提之童、趙岐註、知孩笑可提抱者也、文選句解曰、密生而爲孩僅六月、毛曰、孩始生小兒【慈父】文子曰、慈父之愛子、非求報【見背】銑曰、背、死也【行年】莊子、田開之曰、單豹行年七十【舅】母之兄弟也【奪志】毛詩序曰、衞世子蚤死、其妻守義、父母欲奪而嫁之、銑曰、謂舅嫁其母、不得守節、臣は、令伯也、令伯生れて仕合惡く艱難して、早く凶事に逢、出產僅に六月にして、父死して離背く、年四歲にして、母何氏再ひ他所へ嫁す、母は本再ひ嫁すまじきと思ふ志あれ共、母の父兄强て嫁せしむと也、

祖母劉閔臣孤弱、躬親撫養臣
少多疾病、九歲不行、零丁孤苦、
至於成立、

毛詩曰、父兮生我、母兮鞠我、撫我畜我、長我育我、毛萇曰、鞠、養也、善本無少字、李陵贈蘇武詩曰、遠處天一隅、苦困獨伶丁、銑曰、零丁、危弱貌、成立、謂二十成人也、國語、晉趙氏冠、韓獻子戒之曰、此之謂成人、論語、子曰、三十而立、祖母劉は、令伯か父の母、姓は劉氏也、令伯が孤にして幼きを悲て、自ら能撫養ふ、令伯少ふして多病也、九歲迄に行步自由ならず、零丁は、おちぶれたる獨り身也、一丁の客僧を單丁と云が如し、丁字を、よろほふと讀り、獨身にして苦み、祖母に被養て、漸々に人と成に至れり、

既無叔伯、終鮮兄弟、門衰祚薄、
晚有兒息、外無朞功强近之親、
內無應門五尺之童、（朞功、謂大功小功親）煢煢
子立、形影相弔、

毛詩曰、終鮮兄弟、維予與汝、向曰、衰微也【祚】福也【兒息】從義補註曰、子初在胎、依於母息、故俗名子以息也、兒子曰息、東觀漢紀、此蓋我子息也、密本傳曰、二子賜興、賜、字宗石、少能屬文、興、字雋石、亦有文才云云【外無朞功】文海註曰、朞、周年服、大功九月、小

太子出、則當直者在前導威儀也、國語曰、勾踐親爲夫差洗馬、續漢書百官志曰、洗馬員十六人、秩六百石、如謁者、太子出、當直一人在前導威儀、蓋洗馬之義也、唐書中朝雜制曰、洗馬進賢冠、出則在馬前清道、故曰洗馬、東宮の官、太子の前駈也【晉帝】西晉の世祖武帝姓は司馬、名は炎、字は安世、懿が孫、昭が子、師が姪也【欵】苦管切、徐曰、今文言誠欵也、增韻、敬也、【奉膳服】一義、膳下脫祖母卒三字、服下脫一終字【漢中】通鑑注、今漢中府、屬陝西道〇萬里居士曰、此篇六段、自首至廢離第一段、自建奉至狼狽第二段、自伏惟至尤甚第三段、自且臣至短也第四段、自烏鳥至共鑑第五段、自願陛至末第六段、

李令伯

晉書列傳五十八、李密字令伯、犍爲武陽人也、一名虔、父早亡、何氏改醮、密時年數歲、感戀彌至、烝烝之情遂以成疾、祖母劉氏躬自撫養、密奉事以孝謹聞、劉氏有疾、則涕泣側息、未嘗解衣、飲膳湯藥、必先嘗後進、有暇則講學忘疲、而師事譙周、々門人方之游夏、少仕蜀爲郎、數使呉有才辯、呉人稱之、蜀平、泰始初詔徵爲太子洗馬、密以祖母年高、無人奉養、遂不應命、乃上疏云云、帝覽之曰、士之有名、不虛然哉、乃停召、後劉終服闋、復以洗馬徵至洛、司空張華問之曰、安樂公何如、密曰、可次齊桓、華問其故、對曰、齊桓得管仲而霸、用豎才而蟲流、安樂公得諸葛亮而抗魏、任黃皓而喪國、是知成敗一也、次問孔明言敎何碎、密曰、昔舜禹皐陶相與語、故得簡大雅誥、與凡人言宜碎、孔明與言者無己敵、言敎是以碎耳、華善之、出爲溫令、而憎疾從事、嘗與人書曰、慶父不死、魯難未已、從事白其書司隷、以密在縣清愼、弗之劾也、密有才能、常望內轉、而朝廷無援、乃遷漢中太守、自以失分懷怨、及賜餞東堂、詔令賦詩、末章曰、人亦有言、有因有緣、官無中人、不如歸田、明明在上、斯語豈然、武帝忿之、於是都官從事、奏免密官、後卒於家、

臣以險釁、夙遭愍凶、生孩六月、慈父見背、行年四歲、舅奪母志、

文選及び事文類集三に載此表、臣字の上に、有臣密言三字、又愍を作閔、銑曰、險釁、艱難禍罪也、閔、憂

弱二云云、

臣鞠-躬盡-瘁、死而後已、至二於成-敗利-鈍一、非三臣之明所二能逆-覩一也、

一篇大意、皆在二結末數語一、

論語郷黨篇、入二公門一、鞠躬如也、註【鞠躬】曲レ身也、又泰伯篇【死而後已】不二亦遠一乎、綱目集覽【逆覩】猶レ預料也、然れば孔明身を曲めて、誠を致し忠を盡さんとして、疲れ瘁けめ、死して後に已んとは、孔明一息も存する間は、先帝の恩を報ひて、漢の賊魏を討へし、死せば無レ力志已んと也【至於成―】孔明忠義の軍を催す共、其勝負强弱に至ては、臣が目金の前方より、能見透すべき所に非ず、只勝負を論せず、義理を以て軍を出すと云心也【注】結末數語は、鞠躬より以下の語、孔明が本心也、性理大全六十二、南軒張氏曰、諸葛武侯左二右昭烈父子一、立二國於蜀一、明レ討レ賊之義、不レ以二强弱利害一二一其心一、蓋凜々乎三代之佐也、侯之言曰、漢賊不二兩立一、王業不二偏安一、又曰、臣鞠躬盡レ力、死而後已、至二於成敗利鈍一、非二臣之明所一レ能逆覩上、嗟乎、誦二味斯言一、則侯之心可レ見矣、雖レ不幸功業未レ究、中道而殞、然其扶二皇極一、正二人心一、挽二回先王仁義之風一、垂二之萬世一、與二日月一同二其光明一可也、

○陳情表

【蜀志】李密、字令伯、父早亡、母何氏更適レ人、密見レ養二於祖母一、以レ孝聞、侍レ疾日夜未二嘗解レ帶、蜀平、晋帝徵爲二太子洗馬一、密上レ表、帝嘉二其誠款一、賜二奴婢二人一、使二郡縣一供二祖母一、奉二膳服一、遷二漢中太守一、

陳情は、李令伯が孝行の情を陳明す也、此注に、蜀志を引とも、蜀志の目錄には、李密が傳なし、東萊が三國志詳節、幷晋書孝友傳に載たり、事は表の內に見へたり【注】令伯が父早く死亡す、母何氏再び他人に嫁す、故に令伯祖母に養育せられて成長せり、令伯祖母に仕へて、孝行を以て稱譽せらる、祖母の疾る時は、令伯傍に侍りて供養す、未だ嘗て帶を解て臥ことなし、蜀亡びて、晋の武帝召て太子の洗馬の官に被レ成、令伯此表を上つて奉公を辭退す、武帝令伯が誠孝を感して、其望に任せ、其上奴男一人、婢女一人を賜り、令伯か在所の郡縣の守令に被二仰付一、祖母の衣食を供奉せしむ、祖母死して後に、奉公して漢中の太守と成【太子洗馬】前漢書百官表云、太子太傅少傅屬官有二洗馬一、注如淳曰、先、或作レ洗、後漢志、太子洗馬、職如二謁者一、

羽所置江邊屯候、盡收縛之、故羽不聞知、芳仁開門出降、蒙入江陵、盡虜羽士衆妻子、陸遜別取宜都、獲秭歸枝江夷道、還屯夷陵、守峽口以備蜀、羽聞南郡破、即過保麥城、權使誘之、羽僞降、立幡旗、爲象人於城上、因遁走、兵皆解散、尚十餘騎、權先使朱然潘璋、斷其徑路、十一月璋司馬忠獲羽及子平于章鄉、斬之、臨沮、遂定荊州、初め呉と蜀と誓約して、共に魏を伐滅さんと計る處に、孫權忽ちに違變して、魏の爲に誘かれ羽を襲ふて江陵に入、羽敗亡して捕へ殺さる【秭歸】注今歸州、綱目注曰、縣名在四川夔州府、是も蜀の國にあり【蹉跌】注言失措也、つまづくと讀り、怪我をして狼狽る義也、行儀の崩れて、手足の措處を誤つ意也【權既―】蜀志一、劉焉、江夏人也、領益州牧云云、興平元年卒、其子璋、字季玉、襲焉位、建安十九年先主圍成都、璋出降、先主遷璋于南郡公安、盡歸其財物、故佩振威將軍印綬、二十四年、孫權殺關羽取荊州、以璋爲益州牧、駐秭歸、秭歸は、蜀の內なるに、呉の陸遜が爲に被取ぬ、劉璋已に先主に降參して、公安へ遷されしに、孫權が關羽を殺して荊州を取時、再び璋を以て益州の牧として、秭歸に留る、此秭歸を他人に被

取たるを、蹉跌すと云也【曹丕―】建安二十五年、曹操死して、太子丕帝と稱し、國號を魏と云、黃初元年と改む、上に云如く、漢の事業漸く成んとする處に、呉の孫權約を變じて、關羽を被殺、秭歸を他に被取、曹丕位に即て帝號を稱す、凡そ此等の事變、兼々に料り見難し、前に難平者事也とあるは是也、南湖丁奉曰、朱子云、學者但知曹操之爲漢賊、而不知孫權之爲漢賊也、若孫權有意興復漢室、自當與先主協力併謀、同正曹氏之罪、如何先主纔整頓得起時、便與壞倒、如襲取關羽之類是也、朱氏先存此見、故綱目於呂蒙襲取江陵、不曰蒙使潘璋殺關羽、而乃書曰權邀斬之、所以歸罪於權、著其無助漢之心、有助操之惡耳、黃氏日抄四十八云、江東孫氏、不過以戴漢爲名、而曹氏之簒漢、則罪不容於天地之間矣、何物鬼魅、竊弄史筆、謂賊爲帝、謂帝爲賊、且黜漢之號、而蜀其名、嗚呼不知蜀之名、其何所據乎、蜀者、地之名、非國名也、雖孫氏之盟、亦曰漢呉既盟、同討魏賊、是天下未嘗以蜀名之也云云、世言昭烈之漢卒爲魏所滅、愚謂魏豈能滅漢、魏爲晉所滅耳、司馬氏本碌々無它長、託身曹氏、陰爲蟷螂黃雀之勢、徐伺三國之既

也、故に西取二巴蜀一と云也。註に劉璋とある處に、相違あり、呂東萊三國志詳節、魏武紀曰、建安十三年、公南征二劉表一、表卒、表子琮降二劉備一、公至二赤壁一與レ備戰不レ利、備遂有二荊州諸郡一、劉琮は、劉表が子にて、荊州の牧也、琮死して後に先主取二荊州一、劉璋は、劉焉が子にて、益州の牧也、璋降參して、先主益州を取り、劉焉劉璋父子二代、益州の牧たり、是に因て焉と璋とを蜀の二牧と云也【舉兵一】先帝軍兵を舉發して、北の方魏を伐、魏の大將夏侯淵戰ひ負て死す、先帝襄陽敗軍の時、曹操天下は早我物也と思ふ處に、先帝孫權と和親して、吳越を連ね、又劉璋降參して、先帝巴蜀を取、又先帝北征して、夏侯首を被レ取は、是皆過失越度にして、漢家功業の成んとする時也、

然後吳更違レ盟、關羽毀敗、（先主二十四年、權襲二殺羽一、取二荊州一、）秭歸蹉跌、（秭歸、今歸州、蹉跌、言レ失レ措也○同上、權既取二荊州一、從二劉璋一爲二益州牧一、駐二秭歸一、）曹丕稱レ帝、凡事如レ是、難レ可二逆見一、

蜀志第六、關羽字雲長、本字長生、河東解人也、亡命奔二涿郡一、先主於二郷里一合二徒衆一、而羽與二張飛一爲レ之侮レ禦、先主爲二平原相一、以二羽飛一爲二別將司馬一、分二統部曲一、先主與二二人一、寢則同レ牀、恩若二兄弟一、而稠人廣座侍立、終レ日隨二先主一周旋、不レ避二艱難一云云、先主與レ羽到二夏口一、孫權遣レ兵佐二先主一拒二曹公一、曹公引レ軍退歸、先主收二江南諸郡一、乃封二拜元勳一、以レ羽爲二襄陽太守、盪寇將軍一、駐二江北一、先主西定二益州一、拜レ羽董二督荊州事一、二十四年先主爲二漢中王一、拜レ羽爲二前將軍一、假二節鉞一、於レ是羽率レ衆攻二曹仁於樊一、曹公遣二于禁一助レ仁、秋大霖雨、漢水汎溢、禁所レ督七軍皆沒、禁降レ羽、羽又斬二將軍龐悳一、梁郟、陸渾群盜、或遙受二羽印號一、爲二之與黨一、羽威震二華夏一、曹公議レ徙二許都一以避二其鋭一、司馬宣王蔣濟以爲關羽得レ志、孫權必不レ願也、可レ遣レ人勸二權躡一其後一、許レ割二江南一以封レ權、則樊圍自解、曹公從レ之、先レ是權遣レ使爲レ子索二羽女一、羽罵二辱其使一不レ許レ婚、權大怒、又南郡太守麋芳在二江陵一、將軍傅士仁屯二公安一、皆素嫌二羽輕一レ己、羽之出レ軍、芳仁供二給軍資一、不二悉相救一、羽言還當レ治レ之、芳仁咸懷レ懼不レ安、於レ是權陰誘二芳仁一、芳仁使二人迎一レ權、而曹公遣二徐晃一救二曹仁一、羽不レ能レ克、引レ軍退還、權遣二呂蒙一逆二擊羽一、蒙至二潯陽一、盡伏二其精兵𦩷䑢中一、使二白衣搖一レ櫓、作二商賈人服一、晝夜兼行襲レ之、

上の六の未解を云畢て、是より下三段云起す、故夫の字を以て說起せり【雜平】平は、平章也、一說に、平定也、羅山曰、和平也、夫ろくに平らけ難き者は事也、小事猶然り、況や國家の大事をや、昔し先帝建安十二年荆州の大主劉璋降參す、璋死して先帝襄陽に到る、荆州の人多く歸服す、其兵十餘萬あり、曹操謂く、江陵と云處に軍實あり、先帝是を取んかと恐て、大勢を牽ひて追駈る【劉璋】は、後に見へたり【荆州】は、府の名、湖廣道に屬す【襄陽】は、楚邑、今荆州是、乃南陽南郡之地【江陵】屬直隸揚州府【軍實】兵糧武具財寶也、先主敗軍して妻子を捨、孔明張飛等と、僅に數十騎にして逃る【張飛】蜀志、字益德、涿郡人、與關羽俱事先主、雄壯威猛、爲世虎臣、魏程昱等咸稱萬人敵、爲前將軍、封曲鄕侯、飛愛敬君子而不恤小人、及代吳、臨發帳下將、操大に打勝て、大に得物を取て、沔水を渡て去【沔】字彙、音勉、說文、水出武都沮縣東狼谷、東南入江、一曰、入夏、通鑑注曰、沔水下尾與漢合、乃入江、荆州は、楚國なれは、敗軍於楚と云也、此時曹操悅で手を打て、天下已に定りて我物也と思へり、

然後先帝東連吳越、（及到夏口、遣亮結好孫權、權據江東、國號吳、其地亦屬越州、）**西取巴蜀、**（十九年、先主進圍成都、劉璋降、遂領益州牧、）**舉兵北征、**（北伐曹魏、）**夏侯授首、**（斬夏侯淵、）**此操之失計、而漢事將成也、**

然る處に先帝襄陽を逃て、夏口に至る時に、孔明を使者として、孫權へ遣し、盟を成、好を結で互に云合せ、曹操を拒み防ぐ也、史學提要曰、蜀西吳南、魏居其北、蜀都益州、吳都建業、魏都鄴、綱目注云、鄴、今臨漳縣屬河南彰德府、孫權江東に在て、其國を吳と名付、此時吳と越とを併せて、同く吳國とす、故に東連吳越と云也、綱目建安十七年、孫權徙治建業、注曰、今直隸應天府、上元江寧二縣、是其地也、昔楚威王因此地有王氣、埋金以鎭之、名曰金陵、即今南京、建安十九年、先主兵を進めて、成都を圍む、成都は、蜀都也、成都府屬四川道、益州も、即蜀也、益州の太守劉璋降參す、是に依て先主遂に益州の太守と成て、蜀を取り【牧】は、やしなふと讀り、太守は民を安じ養ふ者なれば、太守を牧と云也【巴】縣名、屬四川道、巴は、蜀に續ける處

之精銳、非一州之所有、若復數年則損三分之二也、當何以圖敵、此臣之未解五也、

論語憲問篇、齊桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也、輯釋云、九合之事、未見之、九字作糾可矣、蓋其音同而訛耳、朱子註曰、九、春秋傳作糾督也、古字通用【糾】は、糾と同、たゞす也、又三くれの繩也【精銳】の義は、阿房宮賦の注にあり、但し今は精兵鋭卒也、趙雲より以下の八人、幷に曲長より武騎まで、皆數十年來糾し練り集め合せたる所の、四方の勝れたる精兵利卒也、一國一州に所在に非す、而も朞年の間に、或は死亡し、或は打死す、若又今より數年の間には、其外の兵も、三分が二つは損亡すべし、然らば何を以てか、敵を謀る事をすべきや、今戰はずんば叶ふべからず、而るに各合戰は如何有んと云は、孔明が解らざるの五つ也、

今民窮兵疲而事不可息、事不可息、則住與行勞費正等、而不及今圖之、欲以一州之地與賊持久、此臣之未解六也、

古文珠璣注曰、雖三國鼎立、籍民爲兵、悉師攻守、住則有守城之勞、行則有戰伐之苦、而粮食財用皆不可闕、若不伐賊、必須嚴守、是住與行勞費同也、今蜀の民窮し兵疲る、然れ共魏を伐ん事は、不可止息、戰を止めて國を守り、城を守るにも苦勞あり行て魏を伐時は、合戰の苦みあり、然れば止ても行ても、兵粮幷に雜料いるべし、守るも攻るも、苦勞と費と同じ事なれば、魏を伐は勝れり、早く此事を不料して、一州の蜀の地を以て賊と睨合て、久しく延引せんは、孔明が未解事の六つ也、是迄六つの未解を擧て、戰ふべき理を明せり、珠璣、関如霖評曰、中凡六段、一字一涙、

夫難平者事也、昔先帝敗軍於楚、

先主十二年、劉璋降、先主乃將其衆過襄陽、荊州人多歸之、比到襄陽、衆十餘萬、曹公曰、江陵有軍實、恐先主據之、乃追之先主棄妻子、與諸葛亮張飛等數十騎去、曹公大獲其人衆輜重、濟沔遁去、

當此時、曹操拊手謂天下已定、

山眞定也、及先主爲曹公所追於當陽長阪、棄妻子南走、雲身抱弱子、即後主也、保護甘夫人、即後主母也、皆得免難、遷爲牙門將軍、先主入蜀、雲留荊州、成都既定、以雲爲翊軍將軍、建興元年、爲中護軍征南將軍、封永昌亭侯、遷鎭東將軍、五年隨諸葛亮駐漢中、明年亮出軍、揚聲由斜谷道、曹眞遣大衆當之、亮令雲與鄧芝往拒、而身攻祁山、雲芝兵弱敵强、失利於箕谷、然斂衆固守、不至大敗、軍退貶爲鎭軍將軍、七年卒、追謚須平侯、【陽群―】此七人は、三國志に無傳、孔明漢中に到てより、僅に中一年の間に、趙雲以下能兵八人、病死するもあり、鬪死するもあり、其外死亡する者、猶又下に云、

及曲長屯將七十餘人、突將無前、賨叟青羌、散騎武騎一千餘人、

夷税曰賨、亮南征、南中既平、皆即其渠率而用之、賨叟青羌、皆此屬也、散騎武騎、皆騎兵以上、乃計其士卒物故也、

句解曰、領軍皆有部曲、部下有曲、曲有長、曲下有屯、屯有將【曲】は部曲也、曲長は、一組の頭らを云【屯】字彙、音豚、聚也、漢律、勒兵而守曰屯、屯將は、一陣一營の大將也、此類七十餘人死亡す、孔明文集注曰、七十餘人、亦皆戰死【突將―】孔明文集注云、衝突之將、無可前者、先驅して敵を突破る大將にて、別に是より先へ進む者なし、愚案ずるに、此說蓋似而非歟、先驅して前に無敵之敢當者を云也【賨叟―】注夷税曰賨、賨、狙宗切、說文、南蠻賦也、後漢書南蠻傳曰、秦昭王使白起伐楚略取蠻夷、始置黔中郡、漢興改爲武陵、歲令大人納賨布一疋、小口二文、是曰賨布【渠卒】史記建元年表曰、殺其渠卒、吳志甘寧傳曰、招合輕薄少年、爲之渠師、諸の頭と成、長と成者也【賨叟】は、蜀の南の蠻夷の長也【青羌】は、西南の夷也、孔明南中の夷を征伐し、其降參するの渠長を、其儘に職任を授て用ふ、賨叟青羌、皆其屬也【散騎武騎】は、皆騎馬の組の號也【物故】は、死する者を云也、人死すれは、昔の事に成故に、物故と書て、ことふりたりと讀り、一說に、物は、沒也、故は、事也、物故をことなしと讀り死すれば隙明て無事と云義也、兩說皆漢書の註に見へたり、言心は曲長より武騎迄の類、一千餘人死亡す、孔明漢中に至て、一年の間に如此、

此皆數十年之內、所糾合四方

水、緣山稍前於定軍山、淵兵來爭其地、先主命黃忠乘高、鼓譟攻之、大破淵軍、斬淵部及曹公所署益州刺史趙顒等云云【張魯】魏志曰、張魯、字公祺、沛國人、祖父陵客蜀學道鵠鳴山中、造作道書、以惑百姓、從受道者、出五斗米、故世號米賊、陵死、魯又行之、遂據漢中、以鬼道敎民、建安二十年、太祖出武都征之云云、後降太祖、拜鎭南將軍、又封閬中侯云云、張魯は、張道陵が孫也、道術を以て民を惑す、其驗有とて人多く從ふ、米五斗を出して、其門徒と成後に、數十萬の兵を集て、國郡を亂る、五斗米賊と云は、是也、建安二十年、曹操是と戰て勝、魯遂に操に降參して、漢中平らく、即ち夏侯淵を以て、諸軍の大將として、漢中に居らしめ、操は鄴へ歸る、淵は、操が從弟婿也【委任】は、ゆたねまかす共、まかせまかす共讀り、諸軍の事を淵に打任せて置を云也【夏侯―】先主出て、陽平關に陣取淵が副將軍張郃戰て負、淵兵を分て郃を救ふ、先主ゝ大將黃忠、進で急に襲ひ攻戰ふ、淵遂に打死す【授首】とは、首を被取を云、郃も同時に死する也、是に因て、先主遂に漢中を取有てり、

先帝每稱操爲能、猶有此失、况臣駑下、何能必勝、此臣之未解四也、

先主每に曹操を譽て、才能有と宣へる事は、有智謀て、能兵を用る故也然共昌覇巢湖李服夏侯等の數多の失あり、况や孔明が駑下なる才にて、何ぞ必ずしも軍に勝んと定んや、是孔明が解らざる事の四つ也【駑下】駑、駘也、謂遲鈍力劣りて、卑く下れる才能を云、

自臣到漢中、章武五年北駐漢中、中間朞年耳、然喪趙雲、陽群、馬玉、閻芝、丁立、白壽、劉郃、鄧銅等、喪、謂死亡也、自趙雲而下凡八人、

孔明傳曰、建興五年率諸軍、北駐漢中云云【朞年】周年也、周伯溫曰、日行三百六十六日、則復其初度、謂之朞年【注】【章武五年】と有は、誤也、建興五年也、辛丑の歲四月、先主即位して、章武元年と改む、三年癸卯四月、先主崩して、後主即位、明年甲辰建興と改元す、然れば章武は、僅に三年也【趙雲】蜀志六、字子龍、常

淮出肥水軍合肥、又呉志孫權傳曰、建安十三年、與備俱進、遇於赤壁、大破曹公軍、權自率衆圍合肥、曹公自荊州還、遣張喜赴合肥、未至權退、十九年權反、自陸口遂征合肥、合肥未下、徹軍還、注【魏以合肥―】字彙、淝、音肥、水名、在廬江、出九江入淮、又合淝、地名、應劭曰、夏水出父城東南、至此與淮合、故曰合淝、渦、水名、在沛國譙縣、合肥は、淮水と肥水と相合の地也、重鎭は、重き守り也、要害の處を云、合肥は、魏の爲に重きかなめの處也、合肥の東南に、巣湖と云處あり、孫權が合肥を圍める時に、曹操渦水より淮水に入、肥水を出て、合肥に陣を取こと數度也、然れ共孫權と戰勝ざれば、四越巣湖不成と云也、愚通鑑幷綱目を考るに、建安十三年十月、曹操東下、孫權遣周瑜魯肅等與劉備迎擊於赤壁大破之、十七年十月操擊孫權至濡須、十九年七月、魏公操擊權、二十三年正月、魏王操擊權、注云、濡須、水名、今在廬州府巣縣、文選句解曰、曹操五次攻昌覇而不服、四次過巣湖而不能成功○羅山曰、案ずるに魏志には、權先合肥を攻、後に赤壁の戰ありと云呉志には、先赤壁にて曹操を破て、後合肥を圍むとあり、呉志の說を是とすべしと、魏志の註に見へたり、

任用李服、而李服圖之、

李服は、三國志に無傳、重て考ふべし、曹操李服と云者を用て、職事に任じたれば、服野心を挾で、操を伐ん事を圖ると見へたり、

委任夏侯、而夏侯敗亡、　操降張魯、留夏侯淵屯守、北還、後先主擊之、淵授首、

魏志九、夏侯淵、字妙才、惇族弟也、建安十七年、太祖以淵行護軍將軍、二十一年、增封三百戸、幷前八百戸云云、太祖西征張魯、淵等將涼州諸將侯王已下、與太祖會休亭、會魯降、漢中平、以淵行都護將軍、督張部徐晃等平巴郡、太祖還鄴、留淵守漢中、即拜征西將軍、二十三年、劉備軍陽平關、淵率諸將拒之相守連年、二十四年正月、備夜燒圍鹿角、淵使張部護東圍、自將輕兵護南圍、備挑部戰、部軍不利、淵分所將兵半助部、爲備所襲、淵遂戰死、又先主傳曰、建安二十年、曹公使夏侯淵張部屯漢中、二十三年、先主次于陽平關、與淵部等相拒、二十四年春自陽平南渡沔

が衆先河を渡る、操獨り精兵百餘人と、南の岸に留まる、超萬餘人の兵を引て來り攻、矢を射る事雨の如し、許褚が云、敵多く來れり、我兵已に渡る、公早く渡り給へと云、操猶胡床に據て不動、褚急に操を引立て船に上す、敵に追れて來る者船を爭ふ、船重して沈まんとす、褚船に取付者を切拂ふ、左の手に馬の鞍を取て操を蔽ひ、矢を防く、船を漕者矢に中て死す、褚右の手を以て船を刺、やう〳〵に渡る事を得たり、此日許褚無んば操危かるへし、

然後僞定一時爾、（時暫平定）况臣才弱而欲以不危而定之此臣之未解三也、

曹操智謀有て、能兵を用ふ、去共南陽烏巣祁連黎陽北山灌關六箇所の軍に、毎度危き難を遁れて、其後暫く平定也眞に長久なるまじきと云ん爲に、僞定一時と云也愚謂く此借僞之僞也、文選句解曰、歷盡險難方得借竊於魏以一時天下の正統を可繼者に非すして借竊僞號する者を云、言心は操一旦借僞して、平定する耳と也、操が武略にてさへ如此况や孔明才昏弱なれは、坐ながら分別だてを云て、緩々と危き事をせすして、天下を平定せんとするは、臣亮が未だ解らざる事の三つ也、

曹操五攻昌覇不下、（昌覇、地名、未詳所出、）四越巣湖不成、（魏以合肥爲重鎭、其東南巣湖在焉、孫權圍合肥、魏自渦入淮出肥水、軍合肥者數矣、）

蜀志二、先主傳曰、東海昌覇及郡縣、多叛曹公屬先主、衆數萬人、遣孫乾與袁紹連和、曹公遣劉岱王忠擊之、不克、五年曹公先征先主、先主敗績【昌覇】は、地の名、東海郡にあり、昌覇反逆する時に、其邊の郡縣多く曹操に叛て、先主に屬す、操が兵來て攻れ共不勝、勝て取を、下すと云也 注【未詳所出】此は五度攻る事詳ならずと云義歟、昌覇叛く事は、蜀志にあり【四越—】魏志第一云、建安十三年十二月孫權爲劉備攻合肥、公自江陵征備至巴丘、遣張喜救合肥、權聞喜至乃走、公至赤壁、與備戰不利、於是大疫、吏士多死者、引軍還、備遂有荊州、十四年七月、曹公自渦入

忠取米、忠過期不還、雲將數十騎輕行出圍、迎視忠等、値曹公揚兵大出、雲爲公前鋒所擊方戰、其大衆至勢偪遂前突其陣、且鬪且卻、公軍敗、已復合、雲陷敵還趣圍、將張著被創、雲復馳馬還營迎著公軍追至圍、此時沔陽張翼在雲圍內、翼欲閉門拒守、而雲入營更大開門偃旗息鼓、公軍疑雲有伏兵引去、雲擂鼓震天、惟以勁弩於後射公軍、公軍驚駭、自蹂踐墜漢水中死者甚多、先主明旦自來至雲營圍視昨戰處曰、子龍一身都是膽也、作樂飲宴至暝、軍中號雲爲虎威將軍、曹操漢中を取んとて、自ら大軍を引て來る、先主險阻に據て守る、操千萬嚢の米を、北山の下より運ぶ、蜀の大將趙雲數十騎を從へて、出て黃忠を迎ふ、操多勢を擧て出、雲と相遇、雲進て其陣を突、且戰ひ且退く、操か兵追て營下に至る、雲營に入、操引去、雲大きに鼓を打て、天地を震動し、大弩を以て後より射る、操か軍大に崩て驚き逃、漢水の中に落て死る者、勝て計ふべからず、操兵を引て長安に還る、劉備遂に漢中を有つ【蹂】踐也【履】踐也、

殆死潼關、 曹操討馬超韓遂於潼關、操將北渡、與許褚留南岸斷後、超將步騎萬餘人來奔操軍、矢下如雨、褚白操云、賊來多、乃扶上船、褚幾危、

曹操傳曰、建安十六年、馬超韓遂叛屯潼關、公勑諸將、關西兵精悍、堅壁勿與戰、秋七月、公西征、與超等夾關而軍、潛遣徐晃朱靈等、夜渡蒲阪津、據河西爲營、公自潼關北渡、未濟、超赴船急戰、校尉丁斐因放牛馬以餌賊、々亂取牛馬、公乃得渡云云、又魏志十八、許褚字仲康、譙人也、以衆歸太祖、從討韓遂馬超於潼關、太祖將北渡、臨濟河先渡兵、獨與褚及虎士百餘人留南岸斷後、超將步騎萬餘人、來奔太祖軍、矢下如雨、褚白太祖云賊來多、今兵渡已盡、宜去、乃扶太祖上船、賊戰急、軍爭濟、船重欲沒、褚斬攀船者、左手擧馬鞍蔽太祖、船工爲流矢所中死、褚右手刺船、僅乃得渡、是日微褚幾危、後太祖與遂超等單馬會語、超負其力、陰欲前突太祖、素聞褚勇、問曰、公有虎侯者安在、太祖顧指褚、々瞋目眄之、超不敢動、後數日戰大破超等、遷武衛中郎將、軍中以褚力如虎而癡、故號曰虎癡、文帝踐祚遷武衛將軍、綱目注曰、潼關在華州華陰縣、建安十六年、馬超韓遂等十部皆反く、其衆十萬潼關に屯し據七月曹操自ら征討す閏八月操

操自襲攻烏巢とあり、

危於祁連、

西域國名、

此註に祁連、西域國名とあれ共、漢書を見れば、匈奴の山の名と見へたり、霍去病傳、入匈奴至祁連山、又曰、遂臻小月氏、攻祁連山、註師古曰、祁連山、即天山也、匈奴呼天爲祁連、今此曹操が祁連山にて危き事、重ねて考ふへし、案するに魏志、建安十三年、公將北征、七月陟鮮卑庭、八月登白狼山、卒與虜遇、衆甚盛、公輜重在後、被甲者少、左右皆懼、公登高望、虜陣不整、乃縱兵擊之、使張遼爲先鋒、虜衆大崩、斬獲蹋頓及王以下云云、羅山曰、袁紹が子尙と熈と、逃て西北の夷烏桓鮮卑へ入、曹操往て伐、時に祁連山に至る事も有へし、又博物志には、曹操白狼山にて獅子に逢て、危き事ありと云り、

偪於黎陽、

黎陽、屬河朔、表譚據之、曹公用兵吳蜀、譚兵逼迫其後、

魏志六云、建安七年五月、袁紹死其小子尙代紹位、譚至不得立自號車騎將軍、屯黎陽、由是譚尙有隙、又袁紹傳曰太祖渡河攻譚、譚告急於尙、尙欲分兵益譚、恐譚遂奪其衆、乃使審配守鄴、尙自將兵助譚、與太祖相拒於黎陽、自二月至九月大戰城下、譚尙敗退入城守、又魏志曰、八年太祖南征荊州劉表軍至西平、譚尙遂擧兵相攻、譚敗奔平原云云、九年二月、尙復攻譚、四月太祖攻鄴、七月尙還戰、敗走幽州、太祖遂入鄴、綱目注曰、黎陽、今濬縣是、屬直隸大名府、通鑑注曰、烏桓、其先東胡也、漢初匈奴冒頓破東胡、其餘衆退保烏桓山、因爲號焉、其俗無常居、男女悉禿頭爲輕便、十年太祖攻南皮克之斬譚、幽州將吏逐袁熈、遣使降太祖、熈尙倶奔烏桓、十三年太祖擊烏桓、熈尙奔遼東、公孫康斬之、官渡の戰に、袁紹打負て後、病を發し、血を吐て死す、紹が子尙代つて立、其兄譚位に即こと能はすして、自ら將軍と成、黎陽に居れり、此にて曹公と度々合戰す、操兵を以て、蜀の劉表を攻る時、譚出て操か後より攻て、苦しましむる也、

幾敗北山、

即伯山也、夏侯淵敗、曹公爭漢中、運米北山下數千萬囊趙雲遇之、乃入營閉門曹公引去雲雷鼓震天、以大弩射之曹公軍驚駭、蹂踐墜漢水中、

蜀志趙雲傳註曰、建安二十四年、夏侯淵敗、曹公爭漢中地、運米北山下數十萬囊、黃忠以爲可取、雲兵隨

似たり【孫】は、孫武也、呉王闔廬が臣也、其兵法の書、孫子と名付、十三篇あり、古今第一の兵書也【呉】は、呉起也、魏の文侯の臣也、後に楚王の臣となる、其兵法の書を、呉子と名付、孫武も呉起も、史記に有傳、周の末の人也、呉子孫子は、七書の内也、孫子をば、曹操が註せるあり、操又別に兵書を著はして、曹公新書と名付【髣髴】韻會、若似也ほのかなりと訓ず、又そもにたり共讀、相似たる義也、又大方の義也、

然困於南陽、 操與張繡戰於宛、爲流矢所中、宛、即南陽縣名、

魏志第一曹操傳曰、建安元年、張濟自關中走南陽、濟死従子繡領其衆、二年春正月、曹公到宛、張繡降既而悔之、復反、公與戰、軍敗爲流矢所中、長子昂、弟子安民遇害、注、魏書曰、公所乘馬名絶影、爲流矢所中、傷頰及足、幷中公右臂、世語曰、昂不能騎、進馬於公、公故免而昂遇害、曹操張繡を討んとて、宛の清水に軍たちす、繡其衆を率て降參す、操張濟が妻を納て妾とす、繡是を恨で、操を襲撃て、操が長子昂弟子安民を殺す、操流矢に中て敗れ走る、諸軍大に亂る、是を困於南陽と云也【注】宛、即南陽縣名、繡は、張濟が族子、魏志八に有傳、

險於烏巢、 袁紹拒操於官渡、紹輜重萬餘在故市烏巢、時曹公糧少、議欲還許避之、

曹操傳曰、建安五年、曹公軍於官渡、袁紹進保陽武、八月紹連營稍前、依沙堤爲屯、東西數十里、公亦分營與相當、合戰不利、時公兵不滿萬、傷者十二三、紹復進臨官渡、起土山地道、公亦於內作之以相應、紹射營中、矢如雨下、行者皆蒙楯、衆大懼、時公糧少、與荀彧書、議欲還許、註、許攸謂公曰、袁氏軍盛何以待之今有幾糧乎、公曰、可一月、爲之奈何、攸曰、公孤軍獨守、外無救援、而糧穀已盡、此危急之日也、今袁氏輜重有萬餘乘、在故市烏巢、屯軍無嚴備、今以輕兵襲之、不意而至、燔其積聚、不過三日、袁氏自敗也、公大喜云云、遣兵燒之、綱目註曰、官渡城名、在開封府東牟縣【輜重】弔屈原賦の注にあり【許】即許州、今屬河南開封府、曹操、袁紹と官渡にて戰ふ時、兵少く糧乏し、紹は兵多くして、其兵糧車馬烏巢と云處にあり、曹操恐れて、引て許へ歸んとす許は、操が都也、此時許攸が敎に因て、潛に兵を遣し、烏巢の糧を焼、是に依て紹敗北して、操危き事を免れたり、袁紹傳には、

屯江邊以拒之、以景貣術所授用、乃追逐使去、於是術乃自置揚州刺史、與景貣幷力攻英能等、歲餘不下、漢命加繇、爲牧、振武將軍衆萬餘人孫策東渡、破英能等、繇奔丹徒、遂泝江南、保豫章、駐彭澤云云、王朗遺策書曰、劉正禮昔初臨州未能自達、實賴尊門爲之先後、用能濟江云云、其兄岱、字公山、兗州刺史、陶丘洪曰、用公山於前、擢正禮於後、所謂御二龍於長途、騁騏驥於千里、不亦可乎【注】【曲阿】縣名、屬揚州府、兗州、今改爲府屬山東、魏志十三、王朗、字景興、東海郡人也、漢帝以朗爲會稽太守、孫策渡江略地、朗自以身爲漢吏、宜保城邑、遂擧兵與策戰敗績、浮海至東海、策又追擊大敗之、朗乃詣策、策以儒雅詰讓而不害云云、太祖召之拜諫議大夫、參司空軍、魏國初建以軍祭酒領魏郡太守、遷少府奉常大理【注】【魏郡一】羅山曰、此注に、王朗守魏郡とあるは、魏に仕へて後の事也、朗初め會稽の太守たる時、孫策と戰ひ負れば、會稽郡の魏郡には非ず【據】依也拒守也、劉繇は、曲阿に揚州の太守たり、王朗は、會稽の太守たり、是等を早く伐て取べきに、安からん事を評論し、永々しき謀を談合して、速かに戰はず、愚謂く、論安は、彼を懷け安んずる事を議論する也、動もすれば聖人の事を引て、時に合はぬ義を云、兵を用ひずして治めんなと云、群臣それに惑て、疑滿心服、諸の詰難胸懷に塞る、今歲も不戰【孫策】孫堅、字、文臺之長子、權兄也、吳志第一、孫策、字伯符、與周瑜相友、堅薨、從袁術、甚奇之、術常歎曰、使術有子如孫郎、死復何恨、時袁術僭號、策以書責而絕之、曹公表策爲討逆將軍封吳侯、後術死、袁紹方强、而策幷江東、曹公力未能逞、且欲撫之乃以弟女配策小弟匡、建安五年、曹公與袁紹相拒於官渡、策欲襲許迎漢帝、密治兵部署諸軍、未發會爲故吳郡太守許貢奴客所殺、年二十六及權稱尊號追諡策曰長沙桓王、明年も征伐せず、何かと日を移す間に、孫策兵を率ひて、繇と朗とを伐て、曲阿を取、會稽を治め、坐ながら大に成て、果して江東を兼合せ、大國の吳を保つ、是孔明が解らざる事の二つ也、

曹操智計殊絕於人、其用兵也、髣髴孫吳、

曹操が智謀尤も人に絕れたり、其兵を用る事、孫吳に

策取勝、坐定天下、此臣之未解一也、

【高帝】は前漢の高祖也、姓は劉氏、名は邦、字は季、沛公に封せらる、後に漢王に進む、天下を有つに及で帝と成、崩して高祖と謚す、史記漢書の本紀に詳也【明並日月】易の語【謀臣―】智謀の臣下多くある中に、張良陳平が類、世に希なる人也、亦史記漢書に有傳【淵深】二字共に、ふかしと讀り、又ふちの如くにふかし共讀【渉險―】高祖百戰を經て、彼方此方と艱難辛勞せらるゝ事、本紀に見へたり【被創】創は、瘡と通ず、金瘡也、高祖紀曰、漢軍方圍鍾離昧於滎陽東、聞羽至、盡走險阻、羽亦軍廣武、與漢相守、漢數羽云云、羽大怒、伏弩射中漢王、漢王傷胸、乃捫足曰、虜中吾指、漢王病創臥云云、又曰、匈奴寇邊、帝自將擊之、聞冒頓單于居代谷、悉兵三十萬、北逐之至平城、冒頓精兵四十萬騎、圍帝於白登七日、用陳平秘計、使間厚遺閼氏、冒頓乃解圍去、高祖兵を起せしより、項羽と相共に三箇年の間に秦を破り、又項羽と不和にして、五個年の間合戰し、或は矢に中り、疵を被り萬死を出て一生に逢、遂に項羽を滅せり、前後合せて八年、七十餘度戰ひ、果して漢の天下と成、是危ふして後に安也、云心は高祖の智明かなる事、日月と相並て光を爭ひ、又智謀の臣計策淵深也、其さへ險艱を經渉し、身に多く疵を被り、至て危ふして後に、始て安し【今陛下―】今後主の明未及高祖、群臣の智謀張良陳平に不及然るに不戰して、延緩なる計策を以て勝敵、坐ながら天下を定めんとす、是孔明が未だ解悟せざるの一也、

劉繇王朗各據州郡、（劉繇、字正禮、據曲阿、王朗、字景興、守魏郡）論安言計、動引聖人、群疑滿腹、衆難塞胸、今歲不戰、明年不征、使孫策坐大、（孫策、乃孫權兄）遂并江東、此臣之未解二也、

呉志四、劉繇、字正禮、東萊牟平人也、詔以爲楊州刺史、袁術在淮南、繇畏憚不敢之州、欲南渡江、呉景孫賁迎置曲阿、術圖爲僭逆、攻沒諸郡縣、繇遣樊能張英

す、如何となれば、今適賊利を失ふて、西方に疲れたり、孔明が祁山を攻る時、魏の三郡孔明に降服して、魏の關中騷動するを云也、此注に後主五年と云は誤也、當作六年、蜀志亮傳曰、六年春、揚聲由斜谷道取郿、使趙雲鄧芝爲疑軍據箕谷、魏大將軍曹眞擧衆拒之、亮身率諸軍攻祁山、戎陣整齊、賞罰肅而號令明、南安天水安定三郡、叛魏應亮、關中響應、註、魏畧曰、始國家以蜀中惟有劉備、備既死、數歲寂然無聞、是以略無備預、而卒聞亮出、朝野恐懼、隴右祁山尤甚、故三郡同時應亮【曹眞】操族子也、通鑑注云、祁山、在岷州長道縣南十里、天水、郡名、今陝西鞏昌府、安定、郡名、今陝西平涼府、此に疲於西と云は是也、[註]震は、恐慄也【又務―】魏の曹休、吳の陸遜と戰て、大に敗北するを云、魏志第九曹休傳曰、太和二年帝爲二道征吳、遣司馬宣王從漢水下、督休諸軍向尋陽、賊將僞降、休深入、戰不利、退還宿石亭、軍夜驚、士卒亂、棄甲兵輜重甚多、休上書謝罪、帝遣屯騎校尉楊暨慰諭、禮賜益隆、休因此癰發背薨、吳志十三、陸遜、字伯言、吳郡人也、孫權以遜爲鎭西將軍云云、權使鄱陽太守孫魴譎魏大司馬曹休、休果擧衆入晥

乃召遜假黃鉞爲大都督逆休、伏既覺知、恥見欺誘、自恃兵馬精多、遂交戰、遜自爲中部、令朱桓全琮爲左右翼、三道俱進、果衝休伏兵、因驅走之、追亡逐北、徑至夾石、斬獲萬餘、牛馬騾驢、車乘萬兩、軍資器械略盡、休還、疽發背死[注]【石亭―】【兵法―】孫子、敵佚能勞之、又曰、以佚待勞、佚は、くたびれぬを云、つかるゝ也、軍法に、敵の疲勢せる處を見て、其勢に乘て擊ことを貴ぶ、孔明が意は、今魏祁山を攻られて、驚き騷で、關中悉く響の聲に應ずるが如く、震恐するは、疲於西也、曹休が石亭に戰て敗軍するは、務於東也、然れば今魏疲勞せり、乘勞は兵法也、是孔明が兵を出して、進み趨むくべき好時分也、因て其兵を出すべき意趣六個條、子細に下に演說す、如左とは、下に云が如しと云義也、若上に云時は如右と書也、此は下に云述る故に、如左と書り、大學朱子の注に、別爲序次如左と云も、此類也、

高帝明並日月、謀臣淵深、然涉險被創、危然後安、今陛下未及高帝、謀臣不如良平、而欲以長

若嗣子可輔輔之、如其不才、君可自取、臣受命之日、寢不安席、食不甘味、思惟北征、（北討曹操、）宜先入南、故五月渡瀘、深入不毛、（詳見前篇、）幷日而食、臣非不自惜也、顧王業不可得偏安於蜀都、故冒危難以奉先帝之遺意、

毛詩關雎篇云、寤寐思之、展轉反側、文選東方朔非有先生論曰、休不安席、食不甘食、呂氏春秋曰、越王欲致必死於呉、身不安枕席、口不甘厚味、【北征入南渡瀘入不毛】並に前の表に詳也【幷日而食】禮記儒行篇曰、易衣而出、幷日而食、註、二日用一日食也、陳澔注云、謂不日日得食、或三日二日幷得一日之食、羅山曰、二日に一度物を食ふ事を云也、常には一日に二度三度食するに、軍陣にて不自由なれば、時々に物を得食ぬ也、司馬懿告人曰、諸葛孔明食少事煩、其能久乎、言ろは先帝の遺勅を受し日より、賊を討ことを大事に思ふ故に、孔明寢ても臥席を安せず、ろくに得寢ざる事也、食を食へ共味を甘せず、厚味を食へ共、甘しとせざる也、此二句は愼みを云、北に發向して曹丕を討んと思へば、先我國邊の亂を靖めて、內を固せん爲に、南方に進討する也【註】曹操此表七年前に死す、操字誤也、丕字に可作、孔明軍の事繁きに就て、二日三日に一度食ふ、自ら我身を惜まざるには非ず、漢家の王業の一方蜀都に安穩なる事を得べからざらん事を顧み思ふ故に、危く艱難なる事を冒して、先帝の遺意を奉承し行ふ也、其人已に亡すれ共、其意慮は殘り留る故に、遺意と云、

而議者謂爲非計、今賊適疲於西、（疲、困也、後主五年亮攻祁山、南安天水安定三郡、皆叛魏應亮、關中響震、）又務於東、（曹休東與吳陸遜戰于石亭大敗、）兵法乘勞、此進趨之時也、謹陳其事如左、

孔明魏を伐んとするを、蜀の群臣皆相議して、然るべからざる謀也と云、評議する者を議者と云、題註に群臣多以爲疑と云是也、孔明が心は、議者と同じから

王曹操薨、子丕襲位、冬十月、皇帝遜位、魏王丕稱天子、奉帝爲山陽公、明年劉備稱帝於蜀、孫權亦自王於吳、於是天下遂三分、綱目曰、初蜀中傳言漢帝已遇害、於是漢中王發喪制服、謚曰孝愍皇帝、群下競勸王稱尊號、四月王即帝位於武擔之南、大赦、改元章武、後漢書は、獻帝位を魏に讓るの說也、魏志にも漢帝禪位於魏とあり、是に因て司馬溫公の通鑑に、漢魏と次第し續けて、天下の正統とし、吳と蜀とを附國とす、程子此事を論じて、蜀は正統也、魏と吳とは僣國也と云り、是に依て、朱子通鑑綱目を作る時に、蜀を正統として、蜀と不云、直に後漢と云て、獻帝の建安廿五年に引續て、後漢の昭烈皇帝章武元年と大字に書して、其下の分註に、細字に魏文帝曹丕黃初二年と書せり、劉備素より漢の子孫にて、正統たる事を明さん爲也、溫公は、後漢書幷に魏志に、漢帝禪位于魏と有に因て、漢魏と次第すれ共、程子朱子は不取此義、魏の受禪は、推て受る也、實は位を奪て竊む事なれば、曹操父子を盜賊とする也、此義程子朱子始て云に非ず、晉の習鑿齒が漢晉春秋を作る時に、劉備を漢とし、正統として漢魏と不云して、漢晉と次第せり、此に孔明が漢賊と云は、其本意なるべし、善惡不兩立、君子小人不兩立、善進めば惡退く、君子道長ずれば、小人道消す、其如くに漢立ば、賊亡ぶべし、賊立ば漢亡ぶべし、是不兩立と云、漢立ざる故に、王業不安、賊討せざる故に、王業危し、此故に先帝孔明に附屬するに、盜賊を追討する事を以する也、

以先帝之明、量臣之才、故知臣伐賊、才弱敵彊也、然不伐賊、王業亦亡、惟坐而待亡、孰與伐之、是故託臣而弗疑也、

古語に知臣莫若君と云如く、先主の明なる目利を以て、孔明が才能を量り、孔明が賊を討ん事を知給へり、而も才弱少にして、賊敵暴強也、され共賊を討せずんば、漢の王業も亦亡なん、然れば坐ながら亡びんを待んよりは、賊を伐んは勝れり、故に賊を討事を、孔明に付託して、先主少も不疑也、孰與の二字は、孰れか勝り劣らんと云時に用る字也、先主崩御に臨で、孔明に謂て云、君才十倍曹丕、必能安國、終定大事、

興五年に上つり、此表は六年に上つる故に後出師表と云也、此表本傳に不載、本傳の註に載たり、文選にも不載、眞寶と珠璣とには載たり、此表を上つりて後、兵を引て、散關を出て、陳倉を圍む、魏の大將曹眞拒之、孔明粮盡て引返る、魏の大將王雙追驅るを、孔明戰て王雙を打取【註】此篇言心は、天下の事と勢と、成ると敗ると相互に因從ひ、利鈍と頑鈍と、相互に禪り代る、分別思案の、前方より定め難き事也、假令は、軍旅の上に云はゞ、成は勝也、敗は負也、强は利也、弱は鈍也、意料臆度は、推量思案也【惟當―】只公道を專にして身の私を忘れ、國を本として、己が家を忘れ、危き事を先救ふて、安樂を後にすべし、公爾國爾の爾字は、而字の義也、亦のみにしてと讀も好、當座まかなひなる事を好便とす可らず、苟は苟且、かりそめなる意、偸は、偸安など云て、そくひ付にして、後を顧みざる義也、二字同意【讀此―】此表を讀ば、孔明が忠節の肝、義理の氣を見る、先主の深く孔明が忠義の人なる事を知る恩に、身を投うちて報ひんと欲する事如此【迂云―】此一篇の首尾、事勢の巳べからざる事を云、せいでならぬ事を不可巳と云也其は何ぞと云に、漢

賊不兩立王業不偏安の故也【血脈―】文章の血脈聯り屬きて、條々能貫き總て、森然といよやかにして不亂、前の表と相並べて見るべし、愚案するに、條貫統紀の四字、羅山の解大に誤る、字彙、條貫、規繩也、漢書、同條共貫、條者、綱目分析、貫者、聯絡貫穿、規繩也の注に依て見れば、法度の義也、今此所に能通ず、又統、綱也、總也、大曰綱、小曰紀、總之曰綱、周之曰紀、統は、大くゝり、紀は、小くゝり也、森然は、多く立て亂れざるの意○萬里曰、此篇十二段、自篇首至疑也第一段、自臣受至非計第二段、自今賊至如左第三段、自高帝至一也第四段、自劉繇至二也第五段、自曹操至三也第六段、自曹操五至四也第七段、自臣至五也第八段、自今民至六也第九段、自夫難至巳定第十段、自然後至成也第十一段、自然後至覩也第十二段、

先帝慮漢賊不兩立、（漢謂先主、賊謂曹操、）**王業不偏安、故託臣以討賊也、**

先帝は、先主也、漢は、蜀の劉備を云、賊は、魏の曹操を指也、後漢書本紀第九、獻帝建安二十五年正月、魏

不羞愧而入地乎、

○後出師表

諸葛孔明

〔按本傳〕時亮聞曹休敗、魏兵東下、關中虛弱、欲出兵擊魏、群臣多以爲疑、亮乃上表言云云、此篇言天下事勢、成敗相因、利鈍相禪、非意料臆度之所能前定、惟當公爾忘私、國爾忘家、先危後安、不可以苟偷爲便、讀此可以見其忠肝義氣、誠欲圖報於先主之知己者也〔迂云〕一篇首尾、多是說事不可已之意、不可已者則漢賊不兩立、王業不偏安故也、血脈聯屬、條貫統紀森然不亂、宜與前表相兼看、

綱鑑、漢建興六年　魏太和二年吳黃武二年　丞相亮伐魏、魏主遣張郃督兵五萬、西拒亮、亮以參軍馬謖督諸軍在前、與張郃戰于街亭、謖違亮節度、擧措煩擾、舍水上山、不下據城、張郃絕其汲道、擊大破之、士卒離散、亮進無所據、乃拔西縣千餘家、還漢中、乃收謖殺之、漢晉春秋曰、或勸亮更發兵者、亮曰、大軍在祁山箕谷、皆多於賊、而不能破賊、爲賊所破者、則此病不在兵少也、在一人耳、今欲減兵省將、明罰思過、校變通之道於將來、若不能然者、雖兵多何益、自今已後、諸有忠慮於國、但勤攻吾之闕、則事可定、賊可死、功可蹻足而待矣、於是考微勞、甄烈壯、引咎責躬、布所失於天下、勵兵講武以爲後圖、戎簡練、民忘其敗矣、亮聞孫權破曹休、魏兵東下、關中虛弱、十一月上言曰、先帝慮漢賊不兩立云云、於是有散關之役、此表亮集所無、出張儼默記、世史類篇曰、吳主使鄱陽太守周魴、遣人誘揚州都督曹休、言欲以郡降、休率步騎十萬以應魴、爲陸遜所敗而還、亮聞休敗、欲出兵擊魏、群臣多以爲疑、亮上言於帝云云、綱鑑曰、十二月亮引兵出散關、圍陳倉、陳倉有備、亮不能克、魏主叡召張郃于方城、使擊亮、郃晨夜進道、未至、亮糧盡引去、將軍王雙追之、亮擊斬雙、此注に所引の本傳は、蜀志第五諸葛亮が傳の註に、漢晉春秋を引て所云也、曹休、字は文烈、曹操が族子也、征東將軍揚州の太守たり、操嘗て云、此吾家千里駒也、吳の孫權黃武二年に彼を、誑らかさん爲に、周魴と云者をして、僞て降參せんと云しむ、休眞ぞと思て、兵十萬を率ひて、魴が所へ往、其時魴鄱陽にあり、鄱陽を取んとする約束也、吳の大將軍陸遜と戰ふて、休負て皈る、孔明此事を聞て、曹休敗北し、魏の兵東に去、關中虛弱也、好き時分なれば、魏を伐んとす、群臣如何あらんと疑ふ時に、孔明此表を奉る也、前の表は、建

罪、以告先帝之靈、責攸之、禕、允等之咎、以彰其慢、

呂向曰、言事得宜、及盡忠節、則郭攸之、費禕、董允、堪此任也、託、委也、效、功也、委我興功、如無功、則理我之罪、以告先帝、若攸之等有罪咎、則亦責之以彰其慢、使衆知之、文選には、若無興德之言、戮允等、以章其慢に作る、今此に上の六字なし、義に於て闕る事あり、言心は政事の損と益とを斟酌し、忠讜の言を進め盡すことは、郭攸之、費禕、董允が任職也、願はくは陛下臣亮に委ね託るに、漢賊を討平し、國家を興復するの功効を以し給へ、若其效無んば、亮が罪を治め罰して、先帝の尊靈に告白させ給へ、攸之、禕、允等若其功無んは、其罪過を責て、怠慢を顯はし給へ、

陛下亦宜自謀、以諮諏善道、察納雅言、深追先帝遺詔、

【謀】善本作課、王逸楚辭注、課、試也、毛詩曰、載馳載驅、周爰咨諏、毛萇注、訪問於善爲咨、咨事爲諏、【善道雅言】は、並に論語の字、濟曰、察、視也、言當謀咨政事、視納正言、深追先帝之意、【深追—】南都賦、奉先帝而追孝、【遺詔】は、先主崩するに臨て、後主に遺し詔せられし言也、上に見へたり、孔明云、亮攸之等に於ては、右に申す如くにし給ひ、陛下も亦宜しく自ら身に謀りて、其雅正の言を察して受納し、大切に深く先帝の遺命を追存して、果し行ひ給へと也、

臣不勝受恩感激、今當遠離、臨表涕泣、不知所云、

劉良曰、不勝受恩之重、內激於懷、今當遠別、悲傷失次、故不知所云、孔明云、先帝の恩を受る事の重きに不堪して、深く心內に感動す、今南方を征伐せんとして、遠く陛下に離る故に、表奏するに臨て、涕泣し、何とか申さん所を不知と也、胡致堂曰、孔明一代之英、遠謀宏議、無不售者、至其自明之語、曰謹愼而已、何其約也、詩不云乎、惟此文王、小心翼翼、昭事上帝、聿懷多福、若亮者有文王之小心矣、彼劉禪凡庸、何足以當元臣如此其敬、而孔明事之、靡不盡道、握國魁柄、總御六師、而無專意恣行、毫末可指者、非盛德孰能臻此、使曹操而聞孔明事幼主之規、得

報先帝而忠陛下之職分也、

蜀志亮本傳曰、建興元年、封亮武鄕侯、開府治事、頃之領益州牧、政事無巨細、咸決於亮、南中諸郡並皆叛亂、亮以新遭大喪、故未便加兵、且遣使聘吳因結和親、遂爲與國、三年春、亮率衆南征、其秋悉平、軍資所出、國以富饒、乃治戎講武以候大擧云云、通鑑、建興三年、丞相亮率衆討雍闓、七月亮至南中所在戰捷、由越嶲入斬雍闓、孟獲收闓餘衆以拒亮、獲素爲夷漢所服、亮募生致之、既得云云、亮笑縱使更戰、七縱七禽云云、注南中、即西南夷之中、綱目曰、時四郡皆平、亮即其渠率而用之云云、注、四郡、益州、永昌、牂牱、越嶲、注【講】習治也【漢中】通鑑注、今漢中府、屬陝西道【起發】國を出て行也【兵甲—】五臣作甲兵、兵は、五兵の類、甲は、鎧也【奬率】五臣作帥將、善本作奬帥、通鑑注、奬、進也、善曰、爾雅曰、奬、勸也、銑曰、諸侯三軍也、中原、謂魏也、一萬二千五百人を軍と云、三軍は、三萬七千五百人也、必ずしも此數に限るにてはなし、只大軍と云ん爲也、通鑑注曰、關中之地、上沃物豐、故曰中原、長安の都を指て云、言心は時に南中の諸郡、已に平らぎ定まり、甲兵を繕治し、武事を講習して、大に征伐の事を擧發するを待、今諸軍を引率して北方に發向し、漢中府に宿陣す、出軍に臨で、此表疏を上つる、孔明云、今南方已に定て、兵甲已に足、當に三軍を勸め引ひて、北方漢室の故都關中の地を征し定むべし【庶竭—】庶は、庶幾、冀也、竭、盡也、駑、鈍馬、亮自比也、毛萇傳曰、攘、除也、良曰、攘、卻也、姦凶、謂曹丕也、備、中山王後、故云興復漢室、也、舊都謂雍洛二州、兩漢所都、相則謀存社稷、將則開拓境土、而亮兼之、故云職分也、孔明云、上に云如くせば、庶幾は我愚鈍なる才能を隨分に盡して、姦賊凶逆なる魏の曹丕を掃ひ除き、遂に再び我漢家を興復して洛陽の舊都に還幸し奉ん事を、是孔明が先帝の遺恩を報酬して、陛下に忠を盡す所以の職分也、職は其身の役也、分は、其分限也、

至於斟酌損益、進盡忠言、則攸之、禕、允之任也、願陛下託臣以討賊興復之效、不效則治臣之

年、吳呂蒙上疏孫權、而窺關羽攻樊襲之、羽聞南郡破、即還保麥城、因遁走、馬忠獲羽及其子平于章鄉、俱被害、章武元年七月、先主恥關羽之沒、自將伐孫權、二年二月、先主進軍猇亭、六月陸遜進攻猇亭、諸軍敗績、先主夜遁、僅得入白帝城、大慙恚曰、吾乃爲陸遜所折辱、豈非天耶、

受命以來、夙夜憂慮、恐付託不效、以傷先帝之明、故五月渡瀘、瀘水、出牂牁郡句町縣、東南入海、深入不毛、不毛、不生草木之地、謂南諸中郡也、

李周翰曰、受命、謂顧託之命、夙、早也、早夜憂歎、恐不稱所職、損先帝聰明也、文選、付託、作託付、渡作度　孔明先帝之遺命を奉受せしより以來、朝夕大事に存し、心に憂へ思ふて、我に嗣子を預け漢室匡復の任を屬託し給し事の、空しく功効なくして、先帝の明鑑を傷損し奉ん事を恐ると也、傷明は、目金を違るを云【故五月―】善曰、蜀志曰、建興元年、南中諸郡、普皆叛亂、三年春、亮率衆征之、其秋悉平、漢書曰、瀘水出牂牁郡句町縣、瀘、平聲、句、求俱切、町、庭、冷、切、瀘、在蜀徼外、今嶲州有瀘津關、中有瘴氣、三四月經之多死、通鑑注曰、五月渡瀘、以言其艱也、方輿勝覽六十二、潼川府路瀘州、李嘉謀瀘州武侯祠堂記云、武侯南征、使李恢自建寧、馬忠自牂牁、而身自出越嶲五月渡瀘、世未有原其說者、蓋吳蜀之分、五溪諸夷、遙接益州云云【深入―】史記鄭襄公曰、君王錫不毛之地、使復得改事君王、何休曰、墝埆不生五穀曰不毛 注【不生―】文選句解曰、孔明五月渡瀘、此平諸郡、叛亂不生、北方謂之不毛之地者、至寒故無草木、南方者至熱、故亦如此、通鑑注云、蓋指南中諸郡而言也、孔明先帝の仰付らるる事の効も無んことを恐て、建興三年丙午五月に、南方諸夷の叛亂を討平ん爲に、瘴氣を冒して、瀘水を渡り、深く不毛の地に入、孟獲雍闓等を征服す、

今南方已定、時南中已平亮乃治兵講武、以俟大舉、建興五年、率諸軍北駐漢中、臨起發上疏云、兵甲已足、當獎率三軍、北定中原、庶竭駑鈍、攘除姦凶、以復興漢室、還于舊都、此臣所以

表劉琦爲荊州刺史、引兵南狗武陵、長沙、桂陽、零陵四郡、皆降之、注、四郡俱屬湖廣道、廬江、縣名、屬直隸廬州府【會荊州—】璋字誤也、當作琦是也、通鑑、建安十四年十二月、孫權表劉備領荊州牧、注、時劉琦卒、故權表備領也【後先主—】又曰、十六年、備留諸葛亮關羽等守荊州、備將歩卒數萬人入益州、至涪璋往會之、增備兵、厚加資給、使擊張魯、按するに此注に所引は、本文と意合さる樣に覺て快活ならず、只文選の濟が註を用ふべし、云心は先帝後獻帝建安十三年に、當陽の長坂に漢、曹操に破られ、軍兵を傾け覆へすに値て迷惑せり、適呉の魯肅に行逢て、其異見に就、孫權に救を乞しむ、孔明敗軍の間に、其使を任を受、危難の時に、先帝の命を奉て呉に往、遂に孫權が援兵を借得、相共に曹操を赤壁に打破る、赤壁の戰は、東坡が賦の注に詳也、其歳建安十三年より今建興五年までは、凡て廿一年也、蜀志、裴松之注曰、按劉備以建安十三年敗、遣亮使呉、亮以建興五年抗表北伐、自傾覆至此、整二十年、然則備始與亮相遇在軍敗前一年也、此說に依は、先主敗軍の年より、孔明北征の年迄と云は誤也、先主孔明と始て相見るの時より數るが是也、

先帝知臣謹愼、故臨崩寄臣以大事也、

章武三年、先主於永安病篤、召亮於成都、屬以後事、謂亮曰、君才十倍曹丕、必能安國、終定大事、若嗣子可輔輔之、如其不才、君可自取、又爲詔勅後主曰、汝與丞相從事、事之如父、

良曰、寄、委託也、大事、謂社稷也、先帝孔明が小心に謹み愼で、律義に無疎略事を知給ふ、故に崩御せんとするに臨で、孔明に嗣子を守立、漢家を恢復する事を附屬す【注】章武二年六月、先主呉の孫權を伐、陸遜が爲に敗られて、永安に歸る、翌年四月病篤し、孔明を成都より召寄て、死後の事を附屬す、孔明に謂て云、君が才曹丕に十倍す、必ず能國を安じて終に天下を定めん、若我子劉禪、輔佐して人主の器に成べくんば輔けて守立よ、若其不才愚庸ならば、君自ら國を取べし、又詔書を作て、劉禪に勅命して云、勉之勉之、勿以惡小而爲之、勿以善小而不爲、惟德惟賢、可以服人、汝父德薄、不足效也、汝丞相孔明と事に從ひ、孔明に事ること父の如せよと云り【曹丕】は、魏の文帝也【從事】は、其事に從ひ行ふ也、通鑑建安三十四

事を許諾すと也、蜀志五云、先主詣亮、凡三往迺見、因屏人曰、漢室傾頽、姦臣竊命、主上蒙塵、孤不度德量力、欲信大義於天下、而智術淺短、遂用猖獗、至于今日、然志未已、君謂計將安出、亮曰、今曹操已擁百萬之衆、挾天子以令諸侯、此誠不可與爭鋒、孫權據有江東、已歷三世、國險而民附、此可與爲援而不可圖也、荊州北據漢沔、利盡南海、東連吳會、西通巴蜀、此用武之國、而其主不能守、此天所以資將軍也、益州險塞、沃野千里、天府之地、劉璋闇弱、民殷國富、而不知存恤、智能之士思得君、將軍既帝室之胄、信義著於四海、若跨有荊益、保其巖阻、撫和戎越、結好孫權、內脩政治、外觀時變、則霸業可成、漢室可興矣、先主曰、善、

後値傾覆、獻帝建安十三年、先主敗於當陽之長坂、受任於敗軍之際、先主遣亮結好孫權、權遣周瑜等兵數萬、與先主并力戰曹公于赤壁、大破之奉命於危難之間、自後先主南征武陵、長沙、桂陽、零陵、廬江、皆降、會荊州刺史劉琦卒、群下推先主爲荊州牧、後先主入於益州、留亮據荊州、爾來二十有一年矣、自建安十三年至建興五年、

濟曰、値逢傾覆者、曹公敗先主也、蜀志曰、後漢獻帝建安十三年戊子曹操南征劉表、表卒、表子琮立、遣使降先主、及將其衆過襄陽、或說先主攻琮荊州可得、先主不忍、琮左右及荊州人多皈先主、比到當陽、衆十餘萬、或曰、宜速行保江陵、今雖擁大衆、被甲者少、若曹公兵至、何以拒之、先主曰、濟大事、必以人爲本、今人皈我、何忍弃去、曹公以江陵有軍實、恐先主據之、乃將精騎五千急追之、及當陽之長坂、先主棄妻子、與諸葛亮張飛等數十騎走、曹公大獲其人衆輜重云云【受任—】先主濟沔、遂到夏口、遣諸葛亮自結於孫權、權遣周瑜程普等水軍數萬、并力與曹公戰于赤壁、大破之云云【奉命—】濟曰、亮時使吳、請周瑜等救之敗曹公、奉命危難之間也、蜀志、魯肅遇先主當陽長坂、曰、孫討虜敬賢禮士、兵精糧多、足以立事、今爲君計莫若遣腹心自結於東、先主用肅計、進往鄂縣之樊口、曹操自江陵將順江東下、諸葛亮曰事急矣、請奉命求救於孫將軍、遂與肅詣孫權云云、綱目注、南陽當陽縣、今屬荊門州、樊口、在江夏鄂縣、通鑑注、江夏、郡名、今胡廣武昌府注【自後】は、即ち爾後也【武陵—】通鑑には廬江なし、建安十三年十二月、劉備

琬選、參軍、統留府事、言ろは侍中尚書陳震、長史張裔、參軍蔣琬は、是皆貞正明亮にして、節義に死なん忠臣也、陛下是を睦び親しみ信向せば、漢家の興隆せん事、近きに在べし、日を計へて可待と也【節】操也、義理を守、忠節を立るを云、

臣本布衣、躬耕南陽、在襄陽城西二十里、隆都屬鄧縣、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯、

向曰【布衣】庶人服也、說苑、唐且謂秦王曰、王聞布衣之士怒乎、文選、奮布衣【南陽】郡名〔注〕在襄陽城西二十里、隆都屬鄧縣、綱鑑註曰、襄陽、楚邑、今荊州是、乃南陽南郡之地、家於南陽鄧縣、號曰隆中【苟】苟且、又纔也【聞達】論語、孔子曰、在邦必聞、在邦必達【諸侯】左傳正義曰、諸侯者、公侯伯子男五等之摠號、侯訓君也、五等之主、雖爵命小異、而俱是國君、故總稱諸侯也、孔明本布衣の庶人にして、南陽の隆中に、自ら田を耕作し、聊か身命を亂世に全ふせんとして、聲聞顯達を不求、迂齋曰、述出處本末、

先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於艸廬之中、先主三次往顧草廬之中、諮臣以當世之事、由是感激、許先帝以驅馳、

向曰、卑鄙、賤稱、善曰【猥】猶曲也、言己曲蒙先帝自枉屈而來也、漢晉春秋曰、諸葛亮家于南陽之鄧縣、荊州國圖曰、鄧城舊縣西南一里、隔沔有諸葛亮宅、是劉備三顧處、劉韶七略詩曰、結構野艸起室廬【諮臣——】向曰、當代事、謂陳匡復之義【由是——】濟曰、感三顧之重、內激於心、遂許與先帝經營匡復之事、趙岐孟子章指曰、千載聞之猶有感激也、感激の下に、文選には有遂字【驅馳】走馬謂之馳、策馬謂之驅、毛詩鄘風載馳載驅、又軍前鋒曰先驅、言ろは先帝孔明が身卑賤なるを以て不弃、叨りに辱く自ら其身の尊を枉屈めて、孔明を草の廬舍の中に顧問して、三度めに相見へ、孔明に咨詢るに、當代分裂して、一統に皈せざる事を以し給ふ、孔明其至誠に我を厚遇せらるゝ事を感動激切して、遂に先帝に我身驅走りの御用に可立

字彙、軍壘曰營、良曰、與謀營中之事、必能使士卒和美、强弱得其所宜也【行陣】は、出軍也【睦】は、親也【優劣】は、才能の勝劣也【得所】とは、其々に宜き所を得て、優も劣も皆不廢也、孔明思へらく、軍中の事は、大となく、小となく、皆向寵に問諮らば、必ず能陣中和睦して、能不能各其宜き所を得んと也、

親賢臣、遠小人、此先漢所以興隆也、親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頽也、先帝在時、每與臣論此事、未嘗不嘆息痛恨於桓靈也、桓帝靈帝、後漢無徳之主、

【隆】高起也【頽】敗也、忠賢の臣を親み進め、惡小の輩を遠け退るは、是前漢の高祖、文帝、景帝、武帝、盛に興て治平する所以也、小人を用ひ、君子を捨るは、是後漢の桓帝、靈帝、無徳の主の傾き敗る所以也、先帝存在の時每に孔明と此事を談論して、每度嘆息して、深く桓帝靈帝を恨み給はざる事なし、桓帝靈帝が事は集昌黎文序に見へたり、詳に漢書、綱目、通鑑、綱鑑を考へ見べし、

侍中尙書、長史參軍、此悉貞亮死節之臣也、陛下親之信之、則漢室之隆、可計日而待也、

紀原曰、尙書、秦官、秦時少府遣吏四人在殿中主發書、故謂之尙書云云、漢百官表曰、成帝建始四年、始置尙書四人、續事始云、尙、主也、出納王命、敷奏萬機、政令所由、宜選擧所由定、罪賞所由正【長史】漢百官表曰、秦置郡丞、其郡當邊戍者、丞爲長史、則長史宜秦所置官也、通典曰、唐五府長史、理府事、餘府、州通判而已【參軍】杜佑云、參軍、後漢末置參諸軍府事、若今節度判官、漢書曰、靈帝以幽州刺史陶謙參司空張溫軍事、此其始也、本公府官、晉始置其官於州郡、唐諸曹皆稱之、銑曰、侍中尙書、謂陳震、長史參軍謂蔣琬也、此二人皆亮所進用、出師後恐帝不能用、故屬之、貞、正、亮、明也、善曰、蜀志曰、建興二年、陳震拜尙書、又曰、諸葛亮出駐漢中、張裔領留府長史、蔣

して誠なる也、純は、一色也、無二心を云、言心は侍中郭攸之、費禕、侍郎などは、此皆善良誠實にして、志慮忠信純一也、故に先帝是を衆中より簡擇抽拔して、陛下に遺し與る也、向曰、遺、與也、言攸之等、先帝選拔、以與陛下、

愚以爲宮中之事、事無大小、悉以咨之、然後施行、必能裨補闕漏、有所廣益、

【咨】文選沓作諮、說文、謀事曰咨、或作諮、濟曰、咨、謀、裨、益也、漏、猶缺落也、言宮中之事、謀郭費等、必能益補缺落也、孔明以爲く、禁中の事、大小となく、皆郭攸之、費禕、董允などに僉議せしめて、後に外へ施し行はゞ、必ず能政事の缺漏る所を裨け補ふて、其事を廣め益す事有んと也、

將軍向寵（將軍職掌征伐、姓向、名寵）性行淑均、曉暢軍事、試用於昔日、先帝稱之曰能、是以衆議擧寵爲督、

將軍注職掌征伐、紀原曰、周禮、天子六軍、軍萬二千五百人、其將皆命卿、蓋在國稱大夫、在軍稱將軍、自晉獻公作二軍、而公將上軍、故將軍之名、特出於此、左傳、閻沒汝寬偕謂魏獻子爲將軍、後漢百官志云、初漢武將軍、始自秦晉、以爲卿號、七國皆有其事、漢以來其所命官之名極多、謂之雜號也【向寵】注姓向、名寵、向、式亮切、音餉、姓也、蜀志十一曰、向寵、襄陽人也、建興元年、爲中都督、典宿衞兵、遷中領軍、良曰、淑、善、均、平、曉、明、暢、達、督、率也、言寵性善平、曉達軍事、先帝嘗經試用、衆臣擧以爲率、綱目注、督、官名、史炤曰、凡言督、察也、云心は將軍向寵は、性情行蹟善平にして、能軍事を明し通達す、已に先帝の時に試み用られて、稱美して能將と宣へり、故に諸人僉議して、向寵を擧用て、中軍都督とし、禁中宿衞の兵を主とらしむ、

愚以爲營中之事、事無大小、悉以咨之、必能使行陣和睦、優劣得所、

曰、偏私、謂執情不均、言ろは若姦僞を作て、罪過の科條を犯し、又或は忠義善良をする者あらば、宜く有司奉行に付屬して、其刑罰と恩賞とを論し、陛下平かに明かなるの政治を昭明にせしむべし、宜く偏頗私曲して、內官と外府と、法を異にせしむべからず、

侍中侍郎、郭攸之、費禕、董允等、

侍中、官名、比二千石、掌侍左右、贊導衆事、顧問應對、車駕出則驂乘、侍郎、亦官名、比四百石、掌守門戶、出充車騎、郭、費、董、皆姓、攸之、禕、允、皆名、

此皆良實志慮忠純、

盡己之謂忠、不貳之謂純

是以先帝簡拔、以遺陛下、

【郭攸之】蜀志無傳、董允傳云、攸之、性素和順、備員而已、註、楚國先賢傳曰、郭攸之、南陽人、以器業知名於時、善曰、攸之子與禕俱爲侍中、【費禕】蜀志、字文偉、江夏人也、建興十三年四月、爲尚書令、延熙六年十一月、爲大將軍、錄尚書事、七年閏三月、相魏有功、冬兼益州刺史、雅性謙素、當國功名略與蔣琬比、十六年爲盜所殺、【董允】蜀志列傳九、字休昭、掌侍中郎將、和之子也、先主立太子、以允選爲舍人、徙洗馬、後主襲位、遷黃門侍郎、延熙七年、守尚書令、注【侍中官名】事物紀原、環濟要略曰、古官也、風后爲黃帝侍中、周有常伯、見尚書立政、秦漢爲侍中、徐堅初學紀曰、秦取古官制、本丞相史也、丞相使史五人、來往殿中奏事、故謂之侍中、後魏始爲樞密之任、梁又以爲宰相職事、唐侍中、與中書尚書二令、並爲眞宰相矣【比二千石】綱鑑注、漢制、九卿已上秩一歲滿二千斛、中二千石俸月百八十斛、侍中は、官の名、秩祿二千石に比擬す、天子の左右に近侍し、諸事を佐け導き行ふて、顧問所あれば應じ對ふ、天子の車駕出幸し給へば、驂乘する事を主とる、故に侍中と云、驂乘は、傍に侍り乘也、通鑑、帝初立、謁見高廟、大將軍光驂乘、注曰、驂、駕三馬也、乘車之法、尊者居左、御者居中、又一人處右、以備傾側、是以戎車則曰車右、餘曰驂乘、【侍郎】注亦官名、【各比四百石—】漢武帝置中書、領尚書事、有令丞郎、魏黃初置通事郎、後改中書侍郎、又曰、漢制、尚書郎、三歲稱侍郎、隋煬帝即位、於尚書六曹各置侍郎一人、按漢百官表、有侍郎、秩比四百石也、侍郎も亦官の名、秩四百石に比す、門戶を守る事を主る、天子出御なれば、騎馬にて御供に充當す、向曰、良、善也、實不虛浮也、純、美也、注【盡己—】我心を隨分に盡

引レ喩失レ義、以塞中忠-諫之路上也、

漢書、谷永上レ書曰、王法納二乎聖聽一、天子の耳に所レ聽を敬ふて言也、莊子盗跖篇曰、此父母之遺德、遺、餘也、其人已に死して、其德澤の後に餘り殘るを云、良曰、恢大也【志士】は、論語に出たり、文選には無二弘字一、方言曰、菲、薄也、郭璞曰、微薄也、良曰、菲薄、輕脱也、誠須レ開二耳目一、察二善道一、以光二先帝之德一、廣二大志士之氣一、不レ宜三妄爲二輕脱一、引二喩非義一、以拒二忠言之道一也、言ろは誠心に宜しく陛下の聽給ふ所を光大にして有レ志士の氣概を大にし廣すべし、必ず宜く妄に自ら其德を薄して、臣下の諫を申す時に、非義を引喩て、其忠なる諫の路を絶塞ぎ、重て異見を申す所なき樣にし給ふべからず、

宮-中府-中（宮中、宮官女子所レ出、府中、大臣宰相所レ居、）倶爲二一-體一、

陟-罰臧-否（臧善者升二陟之一、否不然者罰レ之、）不レ宜二異-同一、

【宮中】善曰、禁中也【註】宦官女子所レ出【宦官】は、內官、諱辯に見へたり【府中】善曰、大將軍幕府也【註】大臣宰相所レ居【一體】綱鑑註曰、宮禁及官府中、一體而行、無二彼此一也、內外の隔なく、皆一法に從て行ふ也【陟罰一】毛詩曰、嗚呼小子未レ知二臧否一、公羊傳何休註曰、否、不也、陟は、有レ功者を賞して、官位に昇す也、罰は、有レ罪者を黜罰する也、臧は、善也、否は、不レ然也、善ならぬを云【不宜一】綱鑑注、升二陟臧善一、及降二罰否惡之人一、不レ可下或異或同而變中王法上也、善を陟、惡を罰する事、贔屓偏頗して、或は異にし、或は同じ樣にすべからずと也、迂曰、一篇骨髓、在二此兩句一、善惡を陟罰するに、大小輕重、皆其科に隨ふ、私しに依怙する者は、我氣にさへ入ば、大罪を輕し、小功を重す、我に不レ合は、大功を輕じ、小過を重する也、公平なる君子は、孔明が所レ說の如し、

若有下作レ姦犯レ科、及爲二忠-善一者上、宜下付二有-司一、論二其刑-賞一以昭中陛-下平-明之治上、不レ宜下偏-私使二內-外一異上レ法也、

翰曰、姦犯、謂二姦僞犯二科條一也、昭、明也、善本文選、治作レ理、文選句解曰、昭二示後主一、以至二平至明之治一、翰

未だ半ならずして、中途にして崩御し給へり【註】【涿郡】通鑑註曰、今改涿州、直隷順天府是也【中山】古之狄都也、漢爲中山郡、今直隷眞定府、

今天下三分 曹丕受獻帝禪、國號魏、孫權於魏太和三年、即皇帝位、國號吳、據江東、與蜀三分天下、 益州罷敝 此誠危急存亡之秋也、

【三分】蜀は、國を漢と號す、故に蜀漢とも季漢とも云、年號を章武と改む、曹操が子丕、漢の獻帝に逼て、天下を讓らしめ、洛陽に都し、國を魏と號し、黃初と改元す、孫權魏の太和三年に、江陵に於て帝位に即、國號を吳とし、黃武と改元す、杜甫が詩に、功蓋三分國、名成八陣圖【益州】即ち蜀の國の本名【罷敝】文選五臣註には作疲敝罷も、亦疲也、敝は敗也【危急—】向曰、危、傾、急、迫也、言傾迫存亡在今時者也、善曰以秋爲功畢、故以喩時之要也、馮衍與田邑書曰、忠臣立功之日、志士馳馬之秋、言心は當今天下三つに分れて、而も我國益州尤も疲れ敗る、是誠に國危く傾き、急に迫て、若は存し、若は亡るの時也、

然侍衛之臣、不懈於內、忠志之士、忘身於外者、蓋追先帝之殊遇、欲報之於陛下也、

【侍】近也、從也【衞】護也、文選六臣注には、忘作亡、濟曰、懈、惰也、內、宮中也、志士、節士也、亡身、謂以身許國於邊疆也、言此人等皆追先帝顧遇、欲申報於陛下、善曰、遇、謂以恩相接也、史記、豫讓曰、以國士遇我、先帝、謂劉備也、陛下、指劉禪也【陛下】陛、升堂之陛級也、應劭曰、王者必有執兵陳於階陛之側、群臣與至尊言、不敢指斥、故呼在陛下者而告之、漢高祖五年、諸侯上疏、始稱陛下、言心は此國疲れ時危しと云共、而も君の傍に侍べり護るの臣、國の內に事を怠らず、忠ある志の士、身を忘れて攻守る事は、蓋し是先帝の諸士を厚く接待給ひし事を追感じて、其恩を陛下に報ひ奉んと欲して也、

誠宜開張聖聽、以光先帝遺德、恢弘志士之氣、不宜妄自菲薄

天下奇才也、

先帝創業未半、而中道崩殂、

先帝、蜀先主也、姓劉、諱備、字元德、涿郡涿縣人、漢景帝子中山靖王勝之後、稱帝據蜀成都、即帝位僅三年而崩

文選には、先字の上に、臣亮言の三字あり

註【先帝―】中山靖王は、景帝第八の子也、先主身長七尺五寸、垂手下膝、顧目見其耳、少孤貧、與母以販履爲業、有大志、少言語、喜怒不形於色、嘗與公孫瓚同師事盧植、由是往見瓚、瓚以爲平原相、先主少與河東關羽、涿郡張飛相友善、以羽飛爲別部司馬、分統部曲、先主與二人寢則同床、恩若兄弟、而稠人廣座侍立終日隨先主周旋、不避艱險、常山趙雲爲郡將兵詣瓚、先主見而奇之、深加接納、雲遂從先主至平原、爲先主主騎兵、建安元年、曹操以先主爲豫州牧、三年爲左將軍、四年起兵徐州討曹操、操遣兵擊之、五年春曹操殺董承、遂擊先主破之、先主奔冀州歸袁紹、紹去鄴百里迎之、駐月餘、亡卒稍歸之、六年曹操自擊劉先主於汝南、先主奔劉表、表聞先主至、自出郊迎、以上賓禮待之、益其兵使屯新野、先主在荊州數年、嘗於表座起至廁、慨然流涕、表怪問先主、先主曰、平常身不離鞍、髀肉皆消、今不復騎、髀裏肉生、日月如流、老將至矣、而功業不建、是以悲耳、十二年先主見諸葛亮於隆中、十三年曹操定荊州、走先主、先主南走、魯肅迎之於當陽長坂、先主用肅計、進往鄂縣之樊口、十月曹操東下、亮奉命與肅詣孫權求救、權遣周瑜魯肅等與先主迎擊於赤壁大破之、十四年十二月、權表先主領荊州牧、周瑜分南岸地以給先主、權以妹妻先主、十五年權以荊州借先主、與共拒曹操、十六年先主入益州、十七年十二月據涪城、十九年領益州牧、二十四年七月、稱漢中王、呂蒙入江陵殺關羽、遂定荊州、二十五年正月、曹操薨、十月太子丕即帝位、廢獻帝、章武元年四月、先主即皇帝位於武擔之南、大赦改元、以諸葛亮爲丞相、許靖爲司徒、七月自將伐孫權、二年六月、吳陸遜進攻猇亭、諸軍敗績、先主還永安、三年四月、崩於永安、年六十三、諡昭烈皇帝、丞相亮奉喪還成都、五月太子劉禪即位、封丞相亮爲武鄉侯、領益州牧【創業】基業を始め造るを云、孟子梁惠王下篇云、君子創業垂統【崩殂】春秋穀梁傳曰、天子崩、以尊也以在民上、如從天墜下、故曰崩、字彙、殂、死也、云心は、昭烈皇帝王業を艸創し給へ共、其功

が如なる人物、又如此の文章、有りや否やを不說、曾て似たる者無之と云心を含り ○萬里曰、此篇十一段、自首至秋也第一段、自然侍至法也第二段、自侍中至廣益第三段、自將軍至得所第四段、自親賢至靈也第五段、自侍中至侍也第六段、自臣本至年矣第七段、自先帝至不毛第八段、自今南至分也第九段、自至於至任也第十段、自願階至末第十一段、

諸葛孔明

蜀志第五本傳曰、諸葛亮、字孔明、瑯邪人、漢諸葛豐之後、亮躬耕隴畝、好爲梁父吟、身長八尺、每自比管仲樂毅、時人莫之許也、惟穎川徐庶、與崔州平、謂爲信然、先主劉備在荊州、訪士於襄陽司馬徽、徽曰、識時務者、在乎俊傑、此間自有伏龍鳳雛、先主問爲誰、曰、諸葛孔明、龐士元也、徐庶亦謂先主曰、諸葛孔明、臥龍也、將軍豈願見之乎、先主曰、君與俱來、庶曰、此人可就見、不可屈致也、將軍宜枉駕顧之、先主由是詣亮、凡三往乃見云云、先主於是與亮情好日密、關羽張飛不悅、先主解之曰、孤之有孔明、猶魚之有水也、願諸君勿復言、羽飛乃止、章武三年、先主病篤、召亮屬以後事、曰、君才十倍曹丕、必能定大事、若嗣子可輔輔之、如其不才、君可自取、亮涕泣曰、臣敢不竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死、先主勅後主曰、汝與丞相從事、事之如父、建興元年、封亮武鄉侯、領益州牧、南中諸郡皆叛、亮以新遭大喪、未使加兵、且遣使聘吳、因結和親、遂爲與國、三年春亮南征、五年北駐漢中、臨發上疏云云、亮屯于沔北陽平石馬云云、始魏以漢先主既崩、數歲寂然無聞、是以略無備豫、而卒聞亮出、朝野恐懼、於是天水南安安定皆叛應亮、關中響應、魏主遣張郃督兵五萬西拒亮、亮以參軍馬謖督諸軍在前、與張郃戰于街亭、謖違亮節度、張郃擊大破之、亮進無所據乃還漢中、十二年亮率大衆十萬、由斜谷伐魏、進軍於渭水之南、司馬懿引兵渡渭、背水爲壘以拒之、相守百餘日、亮數挑戰、懿不出、八月亮病篤、有大星赤而芒、墮亮營中、未幾亮卒於軍中、年五十四、長史楊儀整軍而出、司馬懿追之、姜維令儀反旗鳴鼓、若將向懿者、懿不敢逼、於是儀結陳而去、百姓爲之諺曰、死諸葛、走生仲達、亮嘗推演兵法、作八陣圖、至是懿按行其營壘處所、歎曰、

する者の輩の、能此忠直に至るべき所に非ず【冷齋―】洪覺範が作也【李格非】統譜、字文叔、宋濟南人、擧進士、累官禮部員外郎、嘗著洛陽名園記、謂洛陽之盛衰、天下治亂之候也、其後洛陽陷於金人、以爲知言、格非工於辭章、嘗言文不可苟作、識不著則不能工、妻王氏、拱辰孫女女清照、自號易安居士、皆能文【李令伯―】此文の後にあり、古今文海註云、學者學爲忠孝、忠孝、臣子之大節也、諸葛孔明之忠、李令伯之孝、百世之師也、爲人臣、爲人子者之所當取法也、然國無忠臣、雖有孝子、不遑寧處、不得直遂其養親之志有之矣、故先之以出師表而陳情表次之、蓋所以示初學之軌轍也【沛然】孟子梁惠王上篇云、民皈之、由水之就下沛然、誰能禦之、集注、沛然、雨盛貌、韻會、流貌【肺腑】肺は、五臟の一、腑は、六腑、【斧鑿痕】斧は、斧鉞、をの也、まさかりの類、鑿は、鏨鑿、のみ也、生細工なる者の、木をあつかふは、斧鑿の痕多し、文章の上手は、故らに掘穿ち績はげる所なく、良工の仕立たる器に、鐁をかけ、木賊磨きをして、斧鑿の痕見へぬ如なる者也【以誠爲主】此下に夜話には、故其詞意超邁如此也の九字あり、言心は李格非能文章を評論す、或時に云樣は、出師表、陳情表は、皆沛然と盛に流れて、其胸中の眞心より流出す、强ちに文章の巧なる事を求ね共、自然に好して、更に斧鑿の痕を不見、然れば文章は、氣槩を以て主とす、其氣は至誠を以て主とす、氣正しく心誠なれば、其詞自ら超然として拔羣事如此と也、蘇子瞻曰、孔明不以文章自名、而開物成務之姿、綜練名實之意自見於言語云云【汪曰規模―】規はぶんまはし、模は、いかた大圖を云、蔡虚齋四書蒙引曰、規所以爲圓者、是一箇大圈子、模、鑄金之模、空廓也、皆以其大綱言、言心は此篇、文章の模樣正しく大にして、其忠孝の志念深く遠し、邪小淺近を離れ去たる文章也、詳かに味ふて、乃ち其趣を見る、尹起莘曰、孔明、身率大軍北駐漢中、將以規恢關洛、克復舊物、其正大氣象讀之凛々猶有生意、義聲充滿於天地之間矣【吳魏―】孫堅漢の末に、亂に乘じて江東に跨り據、堅死して子策立、策死して弟權襲國、遂に帝位に即き、國を吳と號す、權死して子皓繼、後に晉の爲に併せらる、曹操は、漢の獻帝の末に、簒立して死す、其子丕繼て帝位に即き、國を魏と號す、後に亦晉に簒はる、言心は吳魏にも人才盛なれ共、孔明

周公孔子曾子には、遂に勝るべからず、若親の名を諱こと許り、周公孔子曾子に勝て徒に宦官宮妾づれに比校せば、即ち是宦官宮妾の其親に孝ある事卻て周公子曾子に勝れる者歟、小しき揚て、大に抑る也、

表類

韻會、釋名云、下言二於上一曰レ表、文選註、李善曰、表者、明也、標也、如二物之標一、表言標二著事序一使二之明白一、以曉二主上一、得レ盡二其忠一曰レ表、三王已前謂二之敷奏一、故尚書云二敷奏以一レ言是也、至二秦幷一天下一、改爲レ表、總有二四品一、一曰章、謝レ恩曰レ章、二曰表、陳レ事曰レ表、三曰奏、劾二驗政事一曰レ奏、四曰駁、推二覆平論有一異事一進レ之曰レ駁、六國及秦漢兼謂二之上書一、行二此五事一、至二漢魏已來一、都曰レ表、進二之天子一稱レ表、進二諸侯一稱二上疏一、魏已前、天子亦得レ上レ疏、臣下たる者、天子へ奏聞すべき事有て、其事を書著はし、幡などを竿に著て、掲げ標す如く、其文明白にして、王者を曉らしむるを表と云、

○出師表

〔東坡曰〕孔明出師一表、簡而且盡、直而不レ肆、大哉言乎、與二伊訓說命一相表裏、非三秦漢以下事レ君爲レ悅者所二能至一也〔冷齋夜話〕李格非善論二文章一、嘗曰、孔明出師表、季令伯陳情表、皆沛然肺腑中流出、殊不レ見二斧鑿痕一、是知文以レ氣爲レ主、氣以レ誠爲レ主〔迂曰〕規模正大、志念深遠、詳味乃見、吳魏國未レ說、有二此人物一、有二此文章一否上

【出】去聲、韻會、凡物自出則入聲、音しゆつ訓いづる、使二之出一則去聲、音すい、訓いだす【師】字彙、五旅爲レ師、二千五百人也、凡行軍多謂二之軍一、次謂二之師一、少則曰レ旅、又春秋之兵、雖レ累二萬之衆一、皆稱レ師、蜀漢の後帝劉禪建興五年三月、孔明北の方關中に入て、漢賊曹操を平げ定め、漢業を興復して、長安の舊都に還さん事を謀り、自ら三軍を引率して、蜀の成都を出、其進發するに臨て、此表を書、後帝へ上つる故に出師表と云、孔明時に四十六歲、文選三十七に載レ之【註】【簡】略也、簡要にして事少なゝるを云【肆】放也、恣也、取廣げて放埓なるを云【伊訓】伊尹太甲を訓る書也【說命】殷の高宗傅說に命じ、說對越する事を記せる書也、並に尚書にあり【相表裏】此彼無二勝劣一、互に表にも成、裏にも成を云、言心は孔明が此表は、言簡要にして理盡辭質直にして放肆ならず、其所レ言至忠にして正しく大也、伊訓說命と相表裏して、天下の名文たり、秦漢より以來君主に仕へて、媚悅を盡して、容られん事を

今考之於經、質之於律、稽之以國家之典、爲可爲不可耶、

以字或は作於、諱文には典字の下に有賀擧進士四字、註曰、一無擧字、非、又爲可の下に有邪字、中庸二十九章曰君子之道、本於身、徵諸庶民、考諸三王而不謬、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑、云心は此諱の事を諸經に參へ考へ、法律に質し證し、且又當代國家の典法を以て、稽へ驗るに果して可とせんや、不可とせんや、不可とすまじき心を含り、

凡事父母、得如曾參、可以無譏也、收意不衰作人得如周公孔子、亦可以止也、

曾子の孝は、論語孟子禮記等の書に詳也、孝經は、孔子曾子の爲に說給へるを、曾子述て傳を作れり、凡字は、曾子周公孔子迄に係る、大凡父母に事ること、曾子の如くなる事を得ば、譏無るべし、左傳、季札觀於周樂、自檜以下無譏焉、註文章一篇の意を結り取る時、動もすれば、筆力衰へたるが者也、此篇は勢力强して衰へず【作人ー】凡そ人として、周公孔子の如なる事を得ば、其上に何の求る事か有ん、只聖人にして止べし、

今世之士、不務行周公孔子之行、而諱親之名、則務勝於周公孔子、亦見其惑也、亦以人情反說、

韓文軌範には、並に周字の上に、曾參の二字あり、當世の人、周公孔子の行を學び行ふ事をば務めずして親の諱を避る事は、卻て周公孔子よりも勝らん事を務む、周孔さへ仕給はぬ事をするは、大に惑ひうろたうる者也註是亦人の性情に背反するを以て說也、

夫周公孔子曾參卒不可勝、勝周公孔子曾參乃比於宦官宮妾、則是宦官宮妾之孝於其親、賢於周公孔子曾參者耶、

る丶書也【註】許は誤、滸字是也、唐の太祖の名をば、李虎と云、虎は滸と音相近し、太宗の諱をば世民と云、世と勢と音相近し、代宗の宗字誤也、當レ作ニ祖字一、太祖の子、代祖の名を昺と云、秉と昺と音近し、玄宗の諱をば隆基と云、飢と基と音近し、皆廟字を付る事は、尊て云也、云心は當代臣下より上つる書章にも、天子より出さる丶綸旨にも、四君の諱の字に音近き滸勢秉飢の字を、諱る丶事を不レ聞也、

惟宦官宮妾、（此一段盡是不レ諱ニ嫌名一、事再用ニ宦官宮妾一、承ニ上一段一、有レ力、）乃不レ敢言ニ諭及機一、以爲ニ觸犯一、（抑揚、）

【惟】は、獨也【宦官】は、奄人也、即ち内官、男子罪を犯して、其勢を被レ去、宮中に給仕する者也【宮妾】宮中に侍御する姫妾也、字彙、妾、女婢【註】周公作レ詩と云より是迄は、皆不レ諱ニ嫌名一の引證也、此に至て再び宦官宮妾の事を用て上の一段を承續、甚だ力量ある文法也【乃不敢―】代宗は、玄宗の子、諱は豫、諭と豫とは通韶にして音亦相近し、玄宗の諱は隆基、若同韻を以て呼ときは、飢と基と音近し、通韻を以て辯ずれば、機と基と音近し【獨犯】獨は誤也、軌範に作レ觸是也、

云心は、周公、孔子、武帝、呂后等、及び當今君臣の詔疏などには、嫌名を諱ざるに、獨り宦官宮妾小人罪奴づれの輩、代宗玄宗の諱に音近き字とて、諭と機とを不レ云若云ば、其諱に觸犯すとす【觸】は、牛の角にて物を突傷る也、物にさはり當るを云【犯】は、罪科を犯す也、すまじき事を侵したるを云【註】抑揚とは、上に周孔武呂などの事を云は、揚也此に宦妾の事を云は、抑也、謝曰、此一轉最高罵ニ得時人諱ニ嫌名一太毒一、

士君子立レ言行レ事、宜ニ何所法守一也、（將要レ收ニ歸周孔曾參事一、且問起、何所法守句、已含ニ周孔曾參意一、）

中庸二十九章曰、行而世爲ニ天下法一、言而世爲ニ天下則一、當世の士君子言を立つにも、事を行ふにも、宜しく誰人をか手本目當にして、傚ひ法り保ち守るべきや、又案ずるに、法は、言を立て法度あり、守は、事を行ふて保守する也【註】上に段々辯論し、此にて遂に周公孔子曾子の事に結び收め、皈依せん事を須要して、何所法守と云句を以て、士君子に問起す、此句の中に、已に周孔曾子を法とせんと云の意を含り、

あり、又漢の時に杜操と云者あり、字は伯度、魏の曹操が時の人、其名曹操に同きを以て、避て其字伯度と云を以て、其人を呼、後に又伯度の伯字を除去て、只杜度と云、是一人は不忌、一人は避之【武帝】は、即曹操也、

此其子宜如何諱、將諱其嫌、遂諱其姓乎、將不諱其嫌乎、

其の上に、韓文には有於字、韓公其何かと云者を難じて云、以上如此諸不諱の支證あり、若强ちに避るとならば、人の子たらん者、父の名を無正に何とか可忌や、若又嫌名を諱とならば、あげくには、父の姓をも忌ん歟、姓氏は先祖より傳て、我一人の私に非ず、但し又嫌名を忌べき歟と問也、此二句は下の段々に係て見るべし、謝が批に云、此二句又設疑問之、不直說破、甚妙、嫌下有者字、

漢諱武帝名徹爲通、不聞又諱車轍之轍爲某字也、

韓文補注云、謂徹侯爲通侯、蒯徹爲蒯通之類、漢の武帝の諱を徹と云故に、其世には徹字を忌て皆通字とす、され共又轍字は同音なれ共、改めて何の字とする事を不聞、車轍の轍は、其本字のまゝにて有と也

諱呂后名雉爲野雞、不聞又諱治天下之治爲某字也、

呂后は、漢の高祖の后、惠帝の母也、惠帝崩じて後天下を奪ひ、諸王子を殺して、我親族を立んとし、既に漢を改て周と號す、死して後に、陳平周勃等が謀にて呂氏を誅し、文帝を迎て帝位に即しむ、呂后の名を雉と云故に、雉を野雞と改む、又雉と治と音同し、され共天下を治むると云治字をば、改て別字と成ことを不聞と也、天下に君として臣下に諱しむるの類、事文類聚後集三卷に見へたり、

今上章及詔、不聞諱滸勢秉饑也、滸近太祖廟諱、勢近太宗廟諱、秉近代宗廟諱、饑近玄宗廟諱、

【今】は、韓公が時也【上章】は、臣下たる者、天子へ上つる書也、奏疏表啓の類也、文選註云、表有四品、一曰章、謝恩曰章【詔】は、詔命勅誥天子より宣下せら

ば衛の桓公の名は完、謚を桓と云、完と桓と音同じけれ共、國人臣子皆桓公と云て、完字の同音なるをば不諱、又魯の僖公名は申なれ共、春秋に戊申と書す、定公名は宋なれ共、宋仲幾と書す、莊公名は同なれ共、同盟と書す、是文に臨では不諱也、

康王釗之孫、實爲昭王、

周康王名釗、書用敬保元子釗、

周の康王名は釗、音、昭、昭王名は瑕、史記、孔安國、通鑑、並に昭王を以て康王の子とす、今退之康王の孫とす、蓋し誤也、昭王父康王の名釗と云共、謚を昭と云、是父の諱と子の謚と同音なれ共、不諱嫌名也【注】【書】顧命篇 成王將崩、命召公畢公率諸公相康王、作顧命云云、爾尙明時朕言、用敬保元子釗、弘濟于艱難、孔安國曰、用奉我言、敬安太子釗、々、康王名也、廣韻、元大也長也、成王崩せんとして、諸臣を召て遺命を宣給ひ、各朕が言を用ひ奉じて、敬て太子釗を安んじ保てと宣ふ、

曾參之父名晳、曾子不諱昔、

若曰、昔者吾友、又曰、裼裘而弔、

曾子名は參、字は子輿、孔子の弟子也、曾晳は、曾子の父、一の名は點、晳と昔と同音なれ共、昔字を云事を不忌【注】論語泰伯篇、曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友嘗從事於斯、馬融註、友、謂顏淵也【裼裘—】禮記檀弓上云曾子襲裘而弔、子游裼裘而弔、曾子指子游而示人曰、夫夫也、爲習於禮者、如之何其裼裘而弔也、主人既小斂、袒括髮、子游趨而出、襲裘帶絰而入、曾子曰、我過矣、我過矣、夫夫是也、方氏註、曾子徒知喪事爲凶、不知始死之時尙從吉、此所以始非子游而終善之也、周の時に人死すれば、裘を肩脱て、其家に入て弔ふ、子游能禮に習ふて知る故に、人始死る時、其禮に從へるを、曾子裼裘而弔ふ事を譏れり、晳と裼とも、亦同音也、是亦不諱、

周之時有騏期、漢之時有杜度、

杜操、字伯度、曹魏時人、以其名同武帝、故因以其字呼之、又去其伯字呼爲杜度、

韓文注、期下度下一本皆有者字、董彥遠曰、騏期、以姓苑考之、期爲朞、韓文註、孫曰、杜度、漢章帝時爲齊相、見衛恒四體書、周の姓は姬なれ共、騏期と云者

の名仁と云者のあらば、其子人とは云まじき歟、仁と人と音同き故也[注]穿鑿し論じ迫る也、謝曰、妙甚、

夫諱始於何時、作法制以教天下者、非周公孔子歟、引古人以證一篇之意

諱の法度は、何の代よりか始るや、事物紀原二、左氏傳曰、周人以諱事神、名終將諱之、則是諱名自周人始也、禮祭義云、文王稱諱、如見親、黃氏日抄曰、愚嘗攷諱之所始、乃周制、子孫奉祀廟中、不敢斥其父祖之名、而以謚易之、所謂卒哭乃諱也、今人少壯無恙而多方面避其名以爲諱、是敬之所以瀆之、而預死其人於生之日也云云【作法―】禮法制度を作て、天下萬代を敎へらるゝは、周公孔子にては無歟、周公孔子は、諱を忌るゝ事は不有と云心を中に含り[注]【引古―】周公孔子の上を引て、下に云逃る也、

周公作詩不諱、謂文王名昌、武王名發、若曰克昌厥後、又曰駿發爾私則不諱也、

古には父祖の諱を忌ざるの證據也、周公詩を作れるには、父の名を諱給はず文王の名を昌と云、周公の作れる雝の詩は、文王の廟中に祀る時の樂歌也、其辭に燕及皇天、克昌其後と云、又武王の名を發と云、噫嘻の詩は、武王を祭る樂の章也、其辭に駿發爾私、終三十里と云是也、毛萇傳曰、燕、安也、鄭箋云、能昌大其子孫、云心は天下を安じて能子孫を昌んに大にする也、傳曰、私、民田也、言上欲富其民而讓於下、欲民之大發其私田爾、終三十里、言各極其望也、箋云、駿、疾也、發、伐也、使民疾耕發其私田、萬夫之地、爲方三十里、擧其成數、正義曰、終三十里者各極其望、謂人目之望所見、極於三十里、每各極望、則徧及天下矣、云心は大に民の私田を發し耕さしめて、各其見渡す所三十里を極めしめ、遂に天下に普く及すと也、又箕子武王の爲に洪範を陳て曰、使羞其行而邦其昌是箕子不諱文王名也、厲王名は胡、其子宣王の時の詩に曰、胡不相畏、

孔子不偏諱二名、若曰宋不足徵、又曰某在斯、

前に詳也、

春秋不譏不諱嫌名、若衛桓公名完、

春秋に同音の嫌はしき名を諱ざる事をば譏らず假令

人の名に二字なるを、一字云時は不レ忌是を不二偏諱一と云、此文を註解する者の云、假令は、孔子の母の名を徵在と云然れば孔子二字の名を一字云事を忌給はゞ、徵字在字は、一生口より出し給はざるべし、只徵字を宣へば、在字を不レ云、在字を說給へば、徵字を稱せず、是其苦しからざる證也、

律曰、不レ諱二嫌名一、釋レ之者曰、謂レ若二禹與レ雨、丘與レ蓲 烏蓲、艸名、詩音義、江東呼爲二烏蓲一 之類一是也、

〔記〕曲禮、不レ諱二嫌名一、二名不二偏諱一、註爲二其難一レ避也、嫌名、謂三音聲相近、若二禹與レ雨、丘與レ蓲也、偏、謂二二名不二一一諱一也、孔子母名徵在、言レ在不レ稱レ徵、言レ徵不レ稱レ在、

嫌名注謂二音聲相近一也其名の字の音に近き音の字は、其人の前にて云へば疑はしく、嫌はしき故に嫌名と云され共禮に已に不レ諱と云假令ば禹と雨と音近く丘と蓲と音近き類也若是を忌ば禹の前にて雨と云事を云孔子の前にて蓲の字を云さらまし韻會區字註、刊謬正俗曰、禹宇二字、其音不レ別、丘之與レ區、今讀別異、然尋二古語一、其聲亦同、玉篇、蓲即荻也、此註なれば、烏蓲は、荻の別名也【詩音義】誰が所レ作未レ考陸機が毛詩艸木疏あり、或は是歟注爲二其難一レ避也とは、二字の名を一字づゝ云をも忌避んとすれば、遍く避難き事ある故に、二名不二偏諱一と云、漢和帝名肇、不レ改二京兆郡一、魏武帝名操、陳思王詩曰、脩坂造二雲日一、後漢范曄、泰之子、爲二太子詹事一、因辭、朝議以禮不レ諱二嫌名一、乃居レ之、唐賈曾授二中書舍人一、以二父名忠一、辭不レ受、議者以中書是曹司名、又與二曾名一音同字別、禮無レ嫌、曾乃就レ職、

今賀父名晉肅賀擧二進士一、爲レ犯二二名律一乎、爲レ犯二嫌名律一乎、

爲レ犯二二名律一乎、爲レ犯二嫌名律一乎、疊山曰、此二句、設レ疑問レ之、不二直說一、破不レ犯レ諱、此章法也、李賀が父の名晉肅と云、賀進士に擧らる、二字名を二字共に犯すにてもなく、嫌名を犯すにてもなし、是二つの法度を犯すとせんや、

父名晉、子不レ得レ擧二進士一、若父名仁、子不レ得レ爲レ人乎、 有二議論一、

韓文、晉下有二諱字一、註云、一本有二肅字一、假令ば、父の名晉と云者の子は、進士に擧らるゝ事を得ずんば、若父

肅賀不レ擧二進士一爲レ是、勸レ之擧者爲レ非、

韓文注云、公與二賀書一今亡矣、所謂諱辯者此也、其曰二與レ賀爭レ名者、按二劇談錄一、其元稹耶、然考二之史一、稹未二嘗爲二禮曹一也【晉】韻會、音與レ搢同進也、時に李賀と名を爭ふ者有て、賀をも退之をも妬み毀て云、賀か父の名晉肅と云へば、晉と進と同音なる程に賀忌避て進士の科に擧られ登らざるを是とすべし、退之が賀を勸めて擧る者は非也と云、

聽者不レ察、和而倡レ之同一レ然一レ辭、皇甫湜曰子與レ賀且得レ罪、

韓文、察下有二也字一、事文類聚、作二倡而和一レ之【倡和】倡は、唱と通ず、導也、先也、和は、去聲、應和也、云心は此說を聽者、其言の是非を察せず、其に相應して付て云、人に先立て觸廻て倡ひ、口を齊へて同じ樣に云囃すを、皇甫湜は、退之門人なれば、笑止がりて、退之に告らく、世間に此沙汰あり、先生も李賀も、同じく罪に逢んかと云也、湜が事は、潮州韓文公廟碑の注にあり、韓文、類聚には、並に曰の下に、若不二明白一の四字あり、

愈曰、然、律曰、二名不二偏諱一、釋レ之者曰、謂レ若レ言レ徵不レ稱レ在、言レ在不レ稱レ徵是也、

禮記曲禮上曰、卒哭乃諱、禮不レ諱二嫌名一、二名不二偏諱一、逮レ事二父母一、則諱二王父母一、不レ逮レ事二父母一、則不レ諱二王父母一、君所無二私諱一、大夫之所有二公諱一、詩書不レ諱、臨レ文不レ諱、廟中不レ諱、夫人之諱雖レ質二君之前一、臣不レ諱也、婦諱不レ出レ門、大功不レ諱、鄭玄注、謂レ若レ言レ徵云云、陳澔註曰、葬而虞、々而卒哭、凡卒哭之前、猶用二事生之禮一、故卒哭乃諱二其名一、嫌名、音同者、不二偏諱一、可二單言一【言徵―】論語八佾篇、子曰、夏禮、吾能言レ之、杞不レ足レ徵也、殷禮、吾能言レ之、宋不レ足レ徵也、文獻不レ足故也、足則吾能徵レ之矣、又衛靈公篇、師冕見、及レ階、子曰、階也、及レ席、子曰、席也、皆坐、子告レ之曰、某在レ斯、某在レ斯【律】は、律令とて法度の文也、此にては曲禮を指て云、退之云樣は、其方の云る丶通り、左も有べし、但し古の法律の文に、

祖の諱を取て我名に著る事是等のみに非ず、其類徐多あり、韓公が此篇は、張昭が論の意を取用て、作れりと也、類說曰、引孔氏雜說太史公名譚、故史記無談字、季布傳改趙談為趙同、范曄父名泰、故後漢書無泰字、郭泰鄭泰皆作太字、李翺父名楚金、故為文皆以今為玆、韓愈為李賀作諱辯、特言在不稱徵之說、愈父仲卿未嘗諱焉、曹志、植之子奏議云、幹植不強、不諱植字、三國志猶不諱其君名、功以權成、是斥孫權之名也晉書、咸和元年、當徵蘇峻、司徒王導欲出王舒為外援、乃拜撫軍將軍、會稽內史、舒上疏以父名會、不作會稽、朝議以字同音異、於禮無嫌、舒陳狀音惟異而字同、乞換他郡、於是改會為鄶、舒不得已行類說、引青箱雜記云、劉溫叟父名、岳終身不聽樂、不遊嵩華、每赴內宴、聞鈞奏、則涕泣移時、曰、若非君命、則不至於是此與李賀父名晉肅、不擧進士頗相類○王字集云、一篇辯明、理強氣直、意高辭嚴、最不可及者、有道理可以折服人矣、全不直說破、盡是設疑佯為兩可之辭、待智者自擇、此別是一樣文法○梅花無盡藏曰、此篇八段、自篇首至得罪第一段、自愈曰至是也第二段、自今賀至人乎第三段、自夫諱至嫌乎第四段、自漢諱至字也第五段、自今上至觸犯第六段、自士君至可耶第七段、自凡事至篇末第八段、

愈與李賀書、勸賀擧進士、賀擧進士有名、

韓文、及事文類聚、文章軌範、並與字下有進士二字、又韓文注曰、一本無賀擧進士名、退之李賀文章を能するを以て、書を與へ異見し勸めて、進士に擧しむ、賀進士及第して、名聲藉甚也【進士】錦綉萬花谷前集廿二唐薛登疏曰、漢世求士、必觀其行、魏取放達、晉先門閥、梁陳尚詞賦、隋文納李諤之言、禁浮詞、煬帝始置進士科、後世相馳競、綴小文名曰策、學以浮為貴、書言故事八曰、唐制取士之科、多因隋舊、其大要有二、由學館曰生徒、由州縣曰鄉貢、皆升于有司而進退之、其科之目、有秀才、有明經、有進士、學生試場に入て、科擧に應じ、及第して、士に進められ、官人と成故に、進士と云、

與賀爭名者毀之曰、賀父名晉

心乃已、憲宗朝爲協律郎、一日晝見緋衣人駕赤虬持一板書云、上帝成白玉樓、召君作記、遂卒、時年二十七【父晉肅―】韓文諱辯註曰、李賀父名晉肅、邊上從事、賀年七歲能歌詩、時愈與皇甫湜未信過其父使賀賦詩、立就、自目曰高軒過、二人大驚、它日擧進士、或謗賀不避家諱、公特著諱辯一篇、幽閒鼓吹錄曰、賀以歌詩謁愈、愈送客歸、困解帶、旋讀首篇雁門太守行云、黑雲壓城城欲摧、甲光向日金魚開、卻捕帶、急命邀之【邊上】四方の國境を云、又邊邑とも、邊郡とも云、西北の界を邊塞と云、邊は邊陲とて、國の果を云【從事】は正守の外に副司從事とて、上奉行の命を受、相談の相手に成、佐けて政事を行ふ者也、近、朝鮮國より日本に來聘するにも、正使副使從事とて、三人首として來るが如し【長短之制】歌章に多し、一篇の內に、長句あり、短句ある製作也、李賀幼少より、詩歌を能作れり、年七歲にして、長短句の文章を著はす、奇妙秀逸なる故に、其名京師を動し震へり【京華】京大也、王城は天下の集る所なる故に云、中夏を曰華文明繁華の地なる故に云【他日擧―】廋駢劇談錄曰、李賀善爲歌詩、韓愈深所知重、每延譽縉紳間、由

此聲籍甚、時元稹年少、以明經擢第亦工篇什、嘗交結賀、執贄造門、賀覽刺不容、遽令僕者謂曰、明經及第、何事來看李賀、稹無復致情、慙憤而退、其後稹制策登科日當要路及爲禮部、因議賀父名晉肅不合應進士擧、賀亦以輕薄爲時輩所排、遂致坎坷也【或謗―】元稹、李賀に宿怨有て誹謗する也【家諱】李賀が其家父の諱を不忌避と謗る也【張昭】統譜を考るに、三國吳人に張昭字は子布と云あり、又南北朝陳人に張昭字は德明と云あり、案ずるに此兩人共に、文章を善する人と見へたり、但し論舊君諱事は、統譜に見へず、され共吳の張昭は、孫策孫權に仕へたれば、疑らくは是人歟、但し又別にある歟、張昭、字子布、彭城人、少好學通左氏春秋、漢末大亂、昭渡江、孫策命爲長史撫軍中郎將、策臨亡以弟權托昭、權爲吳王、敬禮彌重、拜輔吳將軍、封婁侯、昭容貌矜嚴有威風、自權以下皆憚之、卒諡曰文、張昭君に仕る時、先君の諱を忌べきと、忌べからざるとを論辨する也【周穆王―】穆王は、武王より五代後の主定王は、穆王より十八代の後、厲王は、穆王より六代の後、莊王は厲王より七代の後、其子僖王、名は胡齊、子孫として先

策】湖月曰、勝れたる貌、羅山曰、一篇の括り也愚謂く、二説を合せて、總結して警拔なる語句と見るべし【委蛇】毛詩召南羔羊篇曰、退食自公、委蛇委蛇、註、委曲自得之貌、羅山曰、詩にては、ゆるくやはらげる義也、此に委蛇曲折と有ときは、ゆる〱と、まげめぐる也、此文の心曲折有て、不盡の味ある也、周公の所爲に非ず、信ずべからずと云て、史佚が所爲也と不指定、愚謂く、委蛇曲折とは、委曲に段々云盡して、殘さず議論するを云【又設一】羅山曰、次の或曰と云處を指て云、

或曰、封唐叔史佚成之、【史】晉世家、成王與叔虞戲削桐葉爲圭、以與叔虞曰、以此封若、史佚因請擇日立叔虞、成王曰、吾與之戲耳、史佚曰、天子無戲言、言則史書之、禮成之、樂歌之、於是遂封叔虞於唐、

是は周公には非ず、史佚が所爲也と云也、説苑には、周公とあり、史記晉の世家には、史佚とあり、上の段には、説苑を承て、周公の所爲には非ずと辯じ終れり、末句に至て、唐叔を封ずる事は、史佚が所爲也とす史記と不云して、或曰と云、説苑と不云して、古之傳者と云、是皆文法也【史佚】史は、王の言行を記す官なり、佚は名なり、武王の時の大史なり、故に史佚と號す、史逸とも書けり、史逸は、賢人なりとも、かほどのことはすることも有るべし、周公にては必ず有まじき也、

○諱辯　韓退之

【東萊曰】洪云李賀父晉肅、邊上從事、賀年廿歲、以長短之製、名動京華、他日舉進士、或謗賀不避家諱、文公特著諱辨一篇、文曰、張昭論舊君諱云、周穆王諱滿、至定王時、有王孫滿者、厲王諱胡、至莊王之子名胡、其比甚多、退之諱辯取此意、

字彙、生曰名、死曰諱、君父の名をば臣子の忌避て所不云、故に諱と云、又護短曰諱、惡き事を隱し忌を云、李賀が父の名を晉肅と云、賀進士及第するに就て、或者晉と進と同音なれば、賀父の名晉なるからは、進士には擧らるべからずと云、韓文公其爲に諱辯を作り、二字の名は一字用る時は、不忌の證を引て、論辨する也【洪云】容齋が説也【李賀】新唐書列傳百廿八、文藝傳下にあり、萬姓統譜、字長吉、七歲能辭章、苦吟每旦出、騎弱馬、小奚奴背古錦囊隨後、遇所得投其中、暮歸、母探囊、見所書多、即怒曰、是兒嘔出

也【飯】飯依飯宿也【大中】至正之道也、道を指理を指
【逢其惡】柳文注、孫曰、逢、謂逢迎也、孟子曰、逢君
之惡、其罪大也【爲之辭】孟子公孫丑下篇曰、古之君子
過則改之、今之君子、過則順之、今之君子、豈徒
順之、又從爲之辭、過ちを改めずして、非を是の樣に
云理はるを爲辭と云、柳子厚思ふに、周公は聖人也、
其成王を輔佐する事、宜しく道を以て寛く優かに樂
ましめて、大中至正の道に歸依せしめん耳、必ず王の
過失を逢て、辭を作るべからず、

又不當束縛之、馳驟之、使若牛
馬然、急則敗矣、警策、

【束縛】くゝりゆはふる也、人を縛り、物をからぐるを
云【馳驟】字彙、驟、鉏救切、馬疾行也、詩小雅注、小曰
馳、不馳而小疾曰驟、又疾速曰驟、馬のはせうこつ
く也、人を束縛し、馳驟せしむる事、牛馬を使ふ如く
にすべからず、左樣に甚しければ、急にして事を破る
也、繋げ共不聽、鞭打共不行猫綱に成て用られず、然
れば破れん事必せり【註】警、戒也、寤也、策、謀也、籌也、
軍陣に在て、要害の處を、能戒め備へ、又敵に可勝計
策あるは、皆簡要の事也、故に文章に於て、一篇の內、
秀逸なる所を指て、警策と云、警拔など云の類也、

且家人父子、尙不能以此自克、
況號爲君臣者耶、是特小丈夫
駃駃者之事、非周公所宜用、故
不可信、結策、委蛇曲折有不盡意、不指走史佚、又設一難在此【駃】傾雪切、

馮唐傳、師古注曰、家人子、謂庶人之家子【小丈夫】孟
子公孫丑下篇云、予豈若是小丈夫然哉、史記孟嘗君
傳云、始以薛公爲魁然也、今視之、乃眇小丈夫耳【駃
駃】柳文註、老子、其政察察而其民缺缺、缺缺小智貌、
與駃駃同、言心は、凡人の父子の間は心安しと云共、
其さへ馬を使ふ如くにしては、自ら克こと能はず、吾
一家の內、上より下に勝て、能する事ならぬを云也、
況や君臣たるに於てをや、成王は、君也、周公は、臣也
周公のしたき儘には成まじきと云心也【是特――】右段
々辯難を以て見れば、桐葉封弟は、小丈夫のちいさ
き才學の者の所爲ならん、大聖人周公の用ふべき所
に非ず、不審に思ふ故に、信仰すべからざる也【註】【結

人は、內官とて、男子の無レ勢者也周禮に是を奄人と云、漢書に是を宦者と云り、言心は、若不慮に不幸なる事有て、成王桐葉を以て、婦女內官などに戲れて、汝を國に封ずと云はゞ、是をも又周公尤も可レ然と從んや、周公の必ず從ふまじき事を擧て、彌難ずる也、凡そ帝王の德は、是を行ふ事如何と云にあり、宜く行ふて理に合ふ事をば行ふべし、是王者の德也、理に叶はぬ事をば、必ず行ふべからず、行ふと行なはぬとの間を、何若とは云也[註]若不幸と云より何若と云迄、能辯難し得倒す處也、我理を以て、相手の迫る樣に云倒すを、難得倒と云也、大抵辨難の文章は、段々に難を設けて、問迫云迫すべし、假令は、爭ひ訟る者の、互に理非をからかふ時、理を明に擧て、相手の閉口する樣にすべし、是より前に此事を難倒す、此に於て正理を說、王者の德と云處は、即ち正理也、

設未レ得二其當一、雖二十易一レ之、不レ爲レ病、要下於二其當一、不上レ可レ使レ易也、（此幾句郤是正理、）而況以二其戲一乎、

若其理に當り、道に合ふ事を得ざれば、十度改め易ると云共、苦しからず、王者の德の病とせざる也、必ず其理に當るに於ては、改め易べからず[註]に此幾句正理を說也【而況以―】當ると當らざるとを論ぜずして、戲を以てすべからず、

若戲而必行レ之是周公敎二王遂一レ過也、（破得好、）

若戲れ也とも、天子無二戲言一として必ず是を行なはゞ周公の成王をして過ちを遂しむる也、過は必ず可レ改事也、是を改めずして育るを、遂ると云也、王は、成王を指、柳文軌範には、並に王字に作る[註]破得好とは、題の事を能辯じ破る也、

吾意公輔二成王一、宜下以レ道從容優樂、要上レ歸二之大中一而已、必不レ逢二其失一而爲中之辭上、（意思好、）

【從容】書君陳篇、從容以和、註云、動不レ失レ和、德敎之治也、をもふると訓ず、靜かに寬やかなる義也【優】寬

也【註】難の一字を下すは、古の傳る者の云如く、周公此事をせらるゝ事は、有べからずと難じて云也、是此難の字は、即ち辨の字の意に相應す【王之弟―】叔虞は、武王の子にして、成王の弟也、國に封じて善時分ならば、周公其時を以て成王に申て、諸侯と成べし、何ぞ成王の戲を待て善次で也と賀し悅で、此事を成べけんや、柳文注、當、並如字、中、去聲、以地、謂晉也、以民、謂晉民爲之主、主、一本作王、若又未だ國に封ずべき時も至らず、其齡も幼くは、周公何ぞ似合ざる戲言を以て其土地と其人民とを、幼少の人に與へて、大國の主と成べけんや、周公は聖人也、王の弟封じて然るべくは、王に申て封ずべし、封じて然るべからざるに、戲言をかこつけて弱弟を國王とせば、周公聖人たる事を得べからず【註】此一段の說を云開て、難辨する也、荀子榮辱篇曰、將以爲智耶、則愚莫大焉、將以爲利耶則害莫大焉、此篇の耶字、荀子の耶字の法と同じ、古點に封ずべきならばか、封すべからざらばかと讀、

且周公以王之言、不可苟焉而已、必從而成之耶、又難、

其上周公政を攝して、成王を佐く、成王の言語も行迹も、苟くもすべからざる迄也、苟すとは、眞しからぬ義もあり、聊爾なる義もあり、當座やかなひにそくひ付なる心も、此字の内に籠れり、成王の云事苟しからざる樣にせしむべし、箇樣の戲の苟もする事を、周公何ぞ必ずしも從て是を成んや、論語子路篇に、君子於其言無所苟而已矣とあり、此苟字の意也【註】又難とは、上に一段の難を設けて、又再び難也、

設有不幸、王以桐葉戲婦寺、亦將擧而從之乎、凡王者之德、在行之何若、自設有不幸止何若、難得倒處大抵難文字須難得倒、譬如爭訟、須爭得倒、前既難倒、須說正理、

【設】は、若字の意、もし共たとひ共訓ず【婦寺】詩大雅、婦有長舌、維厲之階、亂匪降自天、生自婦人、匪教匪誨、時維婦寺、鄭玄箋云、寺、近也、婦ちかづくと讀り此にては非其義、朱子註曰、婦、々人、寺、々人、寺

曰、各之其土也、寸、守其制度也、諸侯を國主にして、其地を守らしむるを云【圭】の義は、晝錦堂記の注に見へたり【弱】禮記に二十曰弱とあり、韻會には、若と弱と通じて、わかしと讀り、此にては二十歳に限らず、只幼弱の義なるべし、軌範注曰小弱弟、叔虞也、此に於て、周公旦入て成王に見へ、叔虞を國に封ずる事を賀し申さる、成王是は戯也と宣ふ、周公天子無戯言と云て、叔虞を唐に封ぜらる、此唐は、昔し堯の御坐せし國也、周の時には、是を晋と云、詩の國風に、唐風と有も、此晋の風の詩也、禮記に、王言如綸と云、漢書に、王言如汗とも云、出て再び返らぬ喩にて、天子は不可戯と云義に通ずる也、此注に所引の說苑は、前漢の劉向が作也、其内に君道篇あり、其に此事を載たり、天子物云時は、史官是を記す【工誦之】の工は、目盲たる者の事也、音聲を知故に、其事を歌ひ唱る也【士稱之】とは、諸の宮仕する者、此事を云廣むる也、一言出て隱れなき故に、天子は不可戯とて、虞を晋に封ぜらる、周公旦能敎へ進むるの說を述と云ん爲に、善說と云也○此段只叙事とは、凡そ文章、議論あり、叙事あり、事を有の儘に記すを叙事とす、

論辨批判するを議論とす、此篇論辨の文也、され共此發端の一段は、成王桐葉の事を有の儘に記す故に、叙事と云也、文章正宗に、文體を四つに分つ、辭命と敍事と議論と詩賦と也、天子の詔勅を、辭命の文とす、左傳史記漢書等の實事を記せるを、叙事の文とす、後世の序と記と傳と行狀碑などの類も、叙事也、古今の評論議辨を議論の文とす、文章に有韻を詩賦とす、文體多しと云共、大抵此四つに不過、又叙事の内に、議論を書雜たる文あり、史記の伯夷が傳、屈原が傳韓退之が傳王承福が傳等其外數多あり、此辯も議論の文にて、發端は叙事也、

吾意不然、王之弟當封耶、周公宜以時言於王、不待其戯而賀以成之也、不當封耶、周公乃成其不中之戯、以地以人與小弱者爲之主、其得爲聖乎、開一段說難辨、

吾は、柳子厚也、柳が思ふは、上に云如くには非じと

之明矣、若曰周公入賀、史不之見、孫曰、事又見劉向說苑、黃曰、觀經而不盡信於經、始可與言經、觀史而不盡信於史、始可與言史、經史猶有不可信言阨於灰燼之餘、汨於異端之學也、謂伊尹以滋味干湯、謂西伯以陰謀傾商政、遷史每每如此、豈特剪桐一事誣周公哉、讀遷史者、當知其爲實錄、又當知史之失自遷始○題の故事は、本文の下に見へたり【註】呂東萊云心は、此一篇の文章、段々末へ行ほど能辨する故に、一段好如一段と云【大抵】大凡大率などの義也、凡そ文章を作るには、善意思を後へに可置、讀ほど奥へ成て、段々善らしめんが爲也、黃氏日抄曰、封弟辯謂不當因其戲而成之、甚當、文章軌範註云、七節轉換、義理明瑩、意味悠長、字字經思、句句著意、無一字懈怠、亦子厚之文得意者○自篇首至之耶第一段、自設有至何若第二段、自設未至過也第三段、自吾意至成王第四段、自宜以至敗矣第五段、自且家至之事第六段、自非周至末第七段　文章軌範分段○自篇首至於唐第一段、自吾意至聖乎第二段、自且周至之乎第三段、自凡王至過也第四段、自吾意至敗矣第五段、自且家至可信第六段、自或曰至末第七段　古說○自篇首至聖乎第一節、自且周至之乎第二節、自凡王至戲乎第三節、自若戲至過也第四節、自吾意至敗矣第五節、自且家至者耶第六節、自是特至末第七節　萬里說○右三說、蓋當先從疊山之說爲宜、

古之傳者有言、成王以桐葉與小弱弟戲曰、以封汝、周公入賀、王曰、戲也、周公曰、天子不可戲、乃封小弱弟於唐、

【說苑君道篇】成王與唐叔虞燕居、剪梧桐葉以爲圭、而授唐叔虞曰、余以此封汝、唐叔虞喜以告周公、周公以請曰、天子封虞耶、成王曰、余與虞戲也、周公對曰、天子無戲言、言則史書之、王誦之、士稱之、於是遂封唐叔虞於晉、周公旦可謂善說矣○此段只敘事、

古之傳者とは、史記說苑などを指て云也成王は、周の武王の子、周公の姪、叔虞の兄也、成王戲に梧桐の葉を、珪の形に刻て、其弟叔虞に賜ひ、是を驗として、汝を國に封ぜんと云り、總じて天子諸侯を國に封ずる時は、圭と云玉を刻て、其國の信として是に與ふ、後世の勅印の如し【封】字彙、封建、說文、从之从寸、徐

り、東坡今此心を承て文公を祭て、其神を迎へ其文公暫くも逗留せず、虚空を指て行る〻程に、殘多き餘りに、泣涙雨の大きに降様也とぞ【容齋隨筆】宋の洪邁字は景盧と云人著す所の書の名也【劉夢得】名は禹錫、唐書萬姓統譜、氏族排韻三體詩姓氏等に詳也【李習之】名は翺、唐書、統譜に傳あり【李漢】集昌黎文集序の作者也、各皆文公を頌て文を作る、何も至極せり、然れ共東坡が此碑出て後、諸人の説盡く廢れたり此文大きに諸人の文に優れりと也【騎龍―】東坡か此詩也【蹈厲―】禮記樂記曰、發揚蹈厲云云陳澔註、手足發揚蹈地而猛厲字彙、越發揚也強く地を蹈飛上つて越ると云は、東坡が此詩を譽て力量健かにして、凡庸を離れ抜出たる義に取也【雅頌】は、毛詩にあり、此詩雅頌にも及ぶべきと也【若捕龍―】柳子厚が文公の文を譽たる辭也、柳文にあり、故に所謂と云、喩へば龍蛇を擒へ、虎豹を搏んとするが、力不及、手がらにも眞似られぬ事也とぞ【大哉言乎】とは、子厚が辭を譽て云也【東坡―】坡公常に詩を作るには、心思を經歴せずとて、思案もせず其故其詩の意思淺々として味短く少し【此詩―】神道の碑は、墓の前に立る者也、溫公神道碑表忠觀碑、並に東坡文集にあり、此三文は、皆奇妙に勝れたり【刻意―】意思を細かに刻み苦しめて作りたる文也、能念を入て案する事を云、

辯類

韻會、辯、邦免切、説文、罪人相與訟也、左傳、君必辯焉、羅山曰、辯も議論の文也、事を論辯するに依て、辯と名付、文の一體也、文式曰、辯、宜方析明白、謝疊山文章軌範王字集二云、辯難攻擊之文、雖厲聲色、雖露鋒鋩、然氣力雄傑、光焰長遠、讀之令人意强而神爽、初學熟此、必雄於文、千萬人場屋中、有司亦當刮目、

○桐葉封弟辯

〔東萊曰〕此一篇文字、一段好如一段、大抵做文字、須留好意思在後、令人讀一段好一段、

柳子厚

此篇は、柳文第四卷に載之、注、韓曰、史記晉世家、成王與叔虞戲、削桐葉爲珪、以與叔虞曰、以此封若、史佚因請擇日立之、成王曰、吾與之戲耳、史佚曰、天子無戲言、於是遂封叔虞於唐、此則桐葉封弟、史佚成

二尺許りも起り出背にも肉高く起て鞍の如にして一邊にあり、健かにして能行こと日に三百里也、今是を祭の牲とすと也【雞卜】註郊祀志は、漢書にあり、粤と越と同字也、越の國の風俗に、雞骨を以て占ふて祭る、如鼠卜とは、鼠を以て占ふ事あるに依て也、此外に米卜筳卜牛骨卜雞卵卜田螺卜あり、漢の武帝神を祭らるゝ時に、越の祠を立て雞卜す、史記武帝本紀曰、祠天神上帝百鬼而以雞卜、上信之、越祠雞卜始用焉、正義曰、雞卜法用雞一狗一生祀、願訖、即殺雞狗煮熟又祭、獨取雞兩眼骨、上自有孔裂、似人物形則吉、不足則凶、今嶺南獨行此法云云、此詩に言心は、中國京師にて、文公を祀らば、籩豆を備へ、牛羊を牲とし、蘋蘩をも供すべけれ共、南方潮州にての事なれば、奇しき犦牛を牲として供へ、雞卜して、東坡が杯觴を羞め祭ると也【於】語辭與于同、又即也、こゝにと讀り【餐】千山切、呑食くらふ【荔丹】荔支の實の赤きを云、南方の果子也【蕉黃】芭蕉の子の黃なるを云、韓文卅一、柳州羅池廟碑曰、羅池廟者、故刺史柳侯廟也、柳侯、諱宗元、字子厚云云　荔子丹兮蕉葉黃雜肴蔬兮進侯堂、注曰、芭蕉也、味如蒲萄子長數寸、一作蕉葉黃一作蕉子黃柳子厚死して神と成故に、柳州に羅池廟を立て祭る、文公其碑の銘を書て、子厚が神を迎へ、神を送る歌の辭に、荔丹蕉黃の語あり【蘇公只用—】今東坡韓公が言し荔蕉の事を用て、潮州の人をして、亦荔蕉を以て文公を祭らしむ、昔し文公が柳州の人をして二種を用て子厚を祀らしむるが如し、故に本文に、此荔蕉を以て文公に食はしむと云、

公不少留我涕滂、翩然被髮下大荒、

〔文公詩〕翩然下大荒、被髮騎麒麟〔容齋隨筆〕劉夢得、李習之皇甫湜李漢、皆稱頌文公之文、各極其至、及東坡此碑一出、而衆說盡廢騎龍白雲之詩、蹈厲發越、直到雅頌、所謂若捕龍蛇、而搏虎豹者、大哉言乎〔謝云〕東坡平生作詩不經意、意思淺而味短獨此詩與司馬溫公神道碑、表忠觀碑銘三詩奇絕、皆刻意苦思之文也、

【滂】滂沱、大雨也、又滂沛、雨盛下貌註【文公詩—】韓文第五雜詩にあり、註、孫曰、謂復仙去、樊曰、東坡爲公潮州碑詩終篇多取此意【翩然】飛翔るを云【被髮】は、豬熊の如くに、髮を亂す也【大荒】は、大虚也、又山海經曰、大荒之中有暘谷【騏驎】名馬也、是は文公存生の時自ら詩作て、翩然と飛翔りて、大虚より下て髮を亂し被き、名馬に乘て、飛行自在に神仙と成んと云

を驅使ふが如しと也、鮫は、さめ也、文公が上に、鮫の事は無れ共、是も鰐の類なれば、文章のあやを以て書續けたり、

鈎天無人帝悲傷、謳吟下招遣巫陽、

謂太鈎之天、無人輔佐、文公歿於長慶四年、敬宗爲之感傷也、巫陽、巫祝之美名也、下招者、謳吟此詩、招文公之魂、

呂氏春秋曰、天有九野、中央鈎、淮南子天文訓曰、中央曰鈎天、其星角亢氏【註】【謂大鈎之天 ―】字彙、陶鈞、陶家謂轉者爲鈞、葢取周回調鈞之義、言聖王法天以馭天下、亦猶陶人轉鈞也、八方と中央との天を數へて、九天とす、其中央の天を、鈎天と云也、萬里曰、鈎天、指朝廷也、無人、謂韓公歿也、言心は、文公去て後、鈎天に帝の輔けたるべき人無れば、天帝是を悲み傷むと也、是は長慶四年に文公卒去す、其時の天子敬宗嘆き惜まれしを指云也、敬宗は、穆宗の子也【謳】音歐、吟也、歌也、齊聲而歌也、一說、謳爲歌之別調、歌爲謳之總名【吟】吟咏也【下招】楚辭宋玉招魂帝告巫陽曰、有人在下我欲輔之魂魄離散、汝筮予之云云、乃下招曰、魂兮歸來、註、帝天帝也、玉假文天帝及巫陽以爲辭、招屈原魂【巫陽】註 巫祝之美名也楚辭註、女曰巫陽其名也巫は、みこ也、神靈に交はり通ずる者也、其巫の名を陽と云故に巫陽と名付【註】下招者、謳吟此詩、招文公之魂、今東坡此詩を作り、謳吟せしめて、神下しとて文公の魂魄を下し招く、其爲に巫陽に云付て遣はす也、巫陽は古の人なれ共、事を借て用る也、

犦牲雞卜羞我觴、於粲荔丹與蕉黃、

犦牲者、犎牛〔郊祀志〕立粤祠而以之卜、李奇曰、持雞骨卜如鼠卜爲【犦】滿各角沃二反又音雹〔文公羅池廟碑銘〕荔子丹兮蕉葉黃爲迎送柳子厚之歌也、蘇公只用其事使潮人以此祭文公亦如文公使柳人以此祭柳子厚也、

犦牲【註】【犎牛】韻會犦、弼角切、牛名爾雅註、即犎牛也領上肉犦扶起高二尺許、狀如橐駝肉鞍一邊、健行者日三百餘里、今交州合浦徐聞縣出此牛、此獸抵觸、百獸無敢當者、故金吾杖刻犦牛於槊首犎方容切、牛名、出罽賓國漢順帝時、疏勒來獻犎牛及師子、又困學紀聞、犎野牛也、犦は、野牛の類にて、頸の上に肉高く

謂發揚蹈厲、然作書詆佛譏君王一句、大有節病、君王豈可訕耶云云、若改譏字作規君王取沔水規宣王之義豈不善哉云云【要觀南海―】文公の潮州へ流されたるは、有罪に非す、只態と南海を見物し、衡山を窺ひ望み蕭湘の水を躋り、舜の崩御せし所の九疑を經過して、娥皇女英を弔はん爲也【注】【疑似―】山の峯九つ有て、其形相似て、何れの峯ぞと九つながら疑はしき故に、九疑と名付、疑、似也、似たる物は眞かと疑ふ故に、疑似と云也【長曰娥―】娥皇女英は、堯の女也、姉を娥皇と云、妹を女英と云、此二女を舜の妻とす、舜南方へ巡狩とて、國巡りをし給ひしに、二女も從ひ行給へり、但し此註には、舜南方の夷三苗を退治せんとて征給ふとあり、舜此間にて崩し給へるを、即ち蒼梧山に葬埋す、二女悲に不堪して、路次の沅水湘水の間にて死給ふ、亦蒼梧の山に葬る【三苗】國名、書の舜典の註に詳也、

祝融先驅海若藏、〔太公金匱〕南海之神曰祝融〔離騷〕使湘靈鼓瑟兮、令海若舞馮夷、皆海神、**約束鮫鱷如驅羊、**謂驅鱷見前注、

【注】【南海之―】韻會、祝融、神名、顓頊之子曰犂、爲火宮、禮記月令、其神祝融、淮南子天文訓曰、南方火也、其帝炎帝、其佐朱明、註、朱明、祝融也、祝融は、南海の神也、龍神とも云べし、南方の神にて夏を司れは、火神とも云也【海若】離騷の註に、海神號、又莊子に、北海若馮夷水仙あり、又曰、馮夷得之以游大川、又云、河伯也、海若は、本北海の神なれ共、此にては只海神とまで見るへし【湘靈】堯の二女死して、湘水の神と成、故に湘靈と云、娥皇を湘君とし、女英を湘夫人とす【馮夷】赤壁賦に見へたり、云心は文公の此地へ御越也とて、祝融も出向て先驅し、海若は恐れて隱る也【約束】增韻謂圍繞束縛也、前漢高祖紀、待諸侯至而定要束耳、師古曰、要亦約也、韻會嘯韻、約、音要、契也、周禮司約註、約、言語之約束也、約、於妙切、束詩註切、又藥韻約、乙卻切、廣韻、約束、羅山曰、約束は、人を下知して使ふ義也、或は結縛る義もあり、愚案するに、前說未詳、果して何の註に出たるや、疑らくは誤也、後說を是とす、凡そ約束の二字、皆ゆはへくゝる義にて、言語を以て其事を堅め、外れ違はぬ様にする故に、契約と註す、但し此にては、鰐魚を束縛る義也、恐ろしき鮫鰐を逐て、他所へ移す事、柔弱なる羊

也、山谷が詩集の序に、衣被天下と云も、此心也、青松曰、文公之道、光輝發越、雖艸木亦傳及之、猶日之昭回于天而有光明也、愚謂此義勝れり【昭回】詩雲漢集註、昭、光、回、轉也、言其光隨天而轉也、

追逐李杜參翺翔、汗流籍湜走且僵、張籍、皇甫湜、皆從韓公游、滅沒倒景不得望、（司馬相如大人賦）貫列缺之倒景（服虔曰）人在日月之上、下視日月之反從下照、故其景倒、

文公毎に李白杜甫を追慕ふ、此故に醉留東野詩云、昔年因讀李白杜甫詩、長恨二人不相從、又李杜文章在光燄万丈長とも作れり【翺翔】回飛也とびかける、云心は、二人を追慕ふて共に肩を並べ名を齊しふする也、世に李杜韓柳と稱して、詩文の唱首とす【汗流―】張籍皇甫湜二人共に、文公の門人にて詩文の達者也されども文公を學て追付んとすれば、汗を流して走り仆るゝ故に、遂に逐付こと不能と也唐書韓愈本傳云、爲文章沛然若有餘、至其徒李翺李漢、皇甫湜從而効之、遂不及之遠甚從愈游者若孟郊、張籍亦皆自名於時、又曰、張籍字文昌、和州烏江人第進士云云、皇甫湜、字持正、睦州新安人擢進士第【滅沒―】云心は、文公天上に在て、倒景の光り耀く如くなれば、籍湜が輩地上に居て差明して望む事を不得と云【注司馬―】此註に所引は、前漢書司馬相如傳にあり、註服虔曰、列缺、天閃也、人在天上下向視日月故景倒在下也張揖曰、貫穿也、陵陽子明經曰、列缺氣去地二千四百里、倒景氣去地四千里其景皆倒在下也列缺は、いなびかり也列缺の地下より景倒まに上へ耀いて地上の人を照す也、

作書詆佛譏君王、（佛骨表）謂佛本胡人、身死已久、枯朽之骨、凶穢之餘、豈宜入禁宮乞以此骨付之水火、表入、帝大怒、將抵以死裴度崔群等力救解之乃貶潮州刺史、要觀南海窺衡湘、歷舜九疑弔英皇、（山海經云）蒼梧之山、其中有九疑山、在零陵營道縣、（湘中記曰）疑、似也、山有九峯、其形相似、故曰九疑、堯以二女妻舜、長曰娥皇、次曰女英、從舜南征三苗、道死沅湘之間、葬蒼梧、

作書とは、文公佛骨表を作て、佛は夷狄の法也、不可用と諭て、憲宗へ奉るを云、君王は、憲宗也、注の義は、前に詳か也、學齋佔筆曰、東坡作唐韓文公廟碑、可

得ニ之天生一也、文公手を以て雲漢を捜りて、天の文章を分つ也、雲漢は、天河也、天章は、天文也、天孫は、織女の星の異名也、天章の女孫也と云り文公の爲に、織女機に上りて五色の雲錦の裳を織也、文公勝れたる文章の達者なる故に、天章と雲錦とを、其文に比して云也【注】所レ引の史記の語、文字多く脫落す、今考るに史記の天官書云、杵臼四星在ニ危南一、匏瓜有ニ靑黑星一守レ之、魚鹽貴、牽牛爲ニ犧牲一其北織女、織女、天女孫也とあり、又【注】に所レ引の太上飛行羽經は、道士の書の名也、太上は太上老君とて老子の事也、雲錦裳の出處に引也○此詩七言、一句每に韻を押す、栢梁の體也、

飄-然乘レ風來ニ帝旁一、下與ニ濁-世一掃ニ粃-糠一、

文公風に乘て、ひら〳〵と天帝の旁に來る、天より下を見れば、世濁り亂れて汚らはしきが爲に、其ぬかゝすを掃ひ除くと也、一說に、帝は、唐帝也、文公出て朝廷に仕るを指と云り、愚謂く、後說是也【粃】は、米のこぬか也【糠】は、あらぬか、もみがら也、一義に、こぬか也、無盡藏曰、飄乎降ニ下界一、掃ニ世人粃糠之文章一、粃糠蓋用ニ古人糟粕之意一也、帝者、下土之天子也、靑松曰、公飄飄然乘ニ高風一而下來、降ニ於帝之側旁一、謂ニ自レ天而來一也、濁世粃糠、喩ニ佛老之濁ニ亂吾道之正一也、公自レ天降與ニ衰世一而拂ニ佛老之害一、道者、猶レ掃ニ除粃糠一耳、言ニ其闢ニ異端一也、今按ずるに萬里の說勝れる歟、下に承るに皆文章の事を云、其後異端を排する事を云故也、

西游ニ咸池一略ニ扶桑一、〔離騷〕飮ニ余馬於咸池一、總ニ余轡乎扶桑一〔淮南子曰〕日出ニ暘谷一、浴ニ於咸池一、拂ニ于扶桑一、**艸-木衣-被昭-回光、**

【游】は、游泳、をよぐ也【咸池】楚辭注、日落處、卽蒙汜【略】通作レ掠、力灼切、拂過也【扶桑】楚辭注、木名、日出ニ其下一也、韻會、日出處、咸池扶桑は、日輪の經過する處也、天地東西に驅りて、咸池にも遊浴し、扶桑をも拂ひ過、文公が神靈を云故に、騎レ龍と云、乘レ風と云、來ニ帝旁一と云、咸池扶桑を飛行すと云也、萬里云、蓋表ニ其道與レ日爭レ光也【注】【離騷】楚辭にあり、注、摠結也【淮南子】天文訓の語也、注、拂、猶レ過也、日初て暘谷に出て、咸池にて洗ひ、扶桑の枝を拂ひ過て上る也【艸木ー】文公の光り昭回して艸木までに被らしむる也、衣被は、きせかづくと讀り、蓋ひ蒙らしむる義

には不有と云は、何ぞ理ならんや、神は祭る處に至て、何くにも必ずある者也、地中に有水譬是也【注】一篇の文の意餘り有て此段殊更警策也、警策は、簡要の處也、愚謂く、前に已に公之神ーと云にて、道理分明なるを、又此にて其餘の意を云衍る事、最も秀逸也とぞ、警は、過誤を戒しむ、策は、有罪を鞭策す、然れば二字にて善と云心に成故に、文章の評語に、其秀逸なる所を譽て云とて、書辭也、

元豐元年、詔封公昌黎伯、故榜曰昌黎伯韓文公之廟、

元豐は、宋神宗の年號、元祐五年より、十三年以前也、此時勅詔有て、文公を昌黎伯に追封す【封】は、其土の守護に、封建する也【昌黎】は、郡の名【伯】は、公侯伯子男五等の爵の内、第三に當る、文公死後に、此官爵を贈封する也【榜】は、額也、文公の廟に額を掲げて、昌黎伯韓文公之廟と書付、詔して孔子の廟に從祀せしむる也、

潮人請書其事于石、因爲作詩以遺之、使歌以祀公、其辭曰、

潮州の人、文公が事を記して石に刻ん事を、東坡に所望す、是に因て此文を書、又詩を作りて、潮州の人に贈り、詠歌して文公を祭らしむる也【其辭曰】は下の詩を云、

公昔騎龍白雲鄕〔莊子〕乘彼白雲遊于帝鄕**手抉雲漢分天章、天孫爲織雲錦裳、**

〔史記云〕四星在危南、匏瓜牽牛爲犧牲、其北織女、織女天孫女〔也道書太上飛行羽經曰〕七色夜光雲錦裳、

【注】【莊子ー】天地篇に、華封人が堯に答る辭也、千歲にして、世を厭ひ去て上仙し、彼白雲に乘て、天帝の鄕土に至んと云り、註云、白雲帝鄕、虛無上也、言心は、文公死すと云共、只人に非る故に、其精神仙と成て、龍に乘白雲の鄕に遊で、天地の間に不至と云所なしと也、萬里曰、言韓公未降下土以前、在天帝鄕手抉雲漢爲文章天孫製其服也、此說當是歟【抉】羅山は捜ると云、梅花無盡藏は剔抉と見る、愚謂今は引裂意歟【雲漢】毛詩倬彼雲漢昭回于天、注云、天文也、無盡藏曰、公以手决開雲漢分大之爲章者、謂公之文、乃

按ずるに韓公、以憲宗元和十四年正月十四日被貶、三月二十六日至潮、其年十二月二十四日、量移袁州刺史、故云不能一歳而歸、或人の云樣には、文公京都を去こと一萬里にして、潮州に貶謫せらる、一年まで不居して又袁州へ移る、然れば文公死して、假令神と成て物知ことあり共、潮州を慕はざらん事分明に審か也とぞ【眷戀】は、かへりみしたふと讀り、ゆかしく思ふ義也、

軾曰、不然、公之神在天下者、如水之在地中、無所往而不在也、

軾は、東坡が名也、上に或曰と云て、此に軾曰と云は、自問自答也、議論を設けて、不審を晴さん爲に、如此云也、是亦文法也、軾言心は、或人の云樣には非ず、文公の神靈の天下の間に在ことは、譬へば水の地中に在が如し、何れの地にか往處として、水あらざらんやと也、

而潮人獨信之、深思之、至焄蒿悽愴、若或見之、

其上潮州の人、文公を信仰する事深く、慕ひ思ふ事至極せり、焄蒿は、神靈の氣の顯れ動く所を云、神明を祭り敬拜して、其光容を見る樣なるを云、悽愴は、人の心に感じて、身の毛よだちすさまじき意也、焄蒿悽愴にも文公の神靈を見るが如にして、奇特も有て、祈る驗しもある樣に思ふ也、禮記祭義、宰我曰、吾聞鬼神之名、不知其所謂、子曰、氣者、神之盛也、魄也者、鬼之盛也、合鬼與神、敎之至也、生必死、死必歸土、此之謂鬼、骨肉斃于下、陰爲野土、其氣發揚于上、爲昭明焄蒿悽愴、百物之精也、神之著也、集說、朱子曰、如鬼神之露光處、是昭明、其氣蒸上處、是焄蒿使人精神悚然、是悽愴、又曰、昭明、是光耀底、焄蒿、是衰然底、悽愴、是凜然底、又曰、昭明、乃光景之屬、焄蒿、氣之感觸人者、悽愴、如漢書所謂神君至、其風肅然之意、又曰、焄蒿、是鬼神精氣交感處、

譬如鑿井得泉、而曰水專在是、豈理也哉、餘意譬策、

前の公之神在天下一と云を承て云、假如は、井を掘て、涌出る泉を得るが如し、水專ら此のみに有、他所

る也【注】此數句祭の禮法に合へり、愚按ずるに、禮記の祭法に、法施於民則祀之、后稷、后土、帝嚳、堯、舜、禹、黄帝、顓頊、契、冥、湯、文王、武王、此皆有功烈於民者也、今文公も民に功德あれば、必ず祭るべき事也、是即ち禮の祭法の義に合へり、然れば文公の廟は、是淫祠に非る事を見ると也【淫祠】禮記、――無福、祭るまじき無用の祠を云、

而廟在刺史公堂之後、民以出入爲艱、前太守欲請諸朝作新廟、不果、

文公の廟、刺史の居る公堂の後ろにあり、公堂は、太守の居て政を聽處也、故に民廟へ參詣出入するを以て艱めりとす、六借く思ふを云、是より前の太守、朝廷へ奏して、廟を新しく作らんとすれ共、未だ果し作らず、前の太守は、誰人なる事を不知、

元祐五年、朝散郎王君滌、來守是邦、凡所以養士治民者、一以公爲師、民既悅服、則出令曰、願新公廟者聽、民讙趍之、卜地於州城之南七里、期年而廟成、

宋の哲宗元祐五年に、王滌來て潮州の太守と成、宋史にも、東都事略にも、王滌が傳記は無之【朝散郎】事物紀原曰、隋散官也、王は姓、君は尊で稱す、滌は名也、潮州に來て、士を養ひ民を治むる事、一向に文公を以て手本とす、民已に悅て服從す、王滌即ち命令下知して云、士民の文公が廟を新造せんと願はん者には、許容せんと也、其下知を聞て、百姓皆喜て馳走し、頓て其可建地形を卜ひ選ぶ、即ち潮州の城の南、日本三十六町の一里餘りに於て、文公の廟を造營す、一年にして成也【期年】は一周年也、今年の今月より明年の今月までを云、

或曰公去國萬里而謫于潮、不能一歲而歸、沒而有知、其不眷戀于潮也審矣、

州の民戸一萬に餘りてあれば、學問を庶幾する者無んや【庶幾】易係辭下傳、子曰、顏氏之子、其殆庶幾乎云云、禮記檀弓篇曰、吾今日其庶幾乎、註疏云、幾冀也【刺吏】は太守、州の長、國司也【縣令】郡縣の長、郡奉行也【閭里】二十五家ある所を閭と云、又里門を閭とも云、刺史縣令自ら其師と成ずんば、閭里の後生學ぶべき樣有まじ、趙德と云者及第して秀才と云小官にて、此州にあり、生れ付沈雅と心深く雅しく、專靜と心專ら靜也、此人頗る六經の旨に通じて、文章をも悟り、能先代聖王の學を知、其上異端を排ひ黜けて、孔子を尊崇す、是を以て師匠とすべし、然れば海鹽縣の尉の官を兼て、其所を以て衙とし、專ら潮州の學校を勾當せしめ、學徒を督さしめん事を請也【衙】は、官人集まりて、政を聽處也【勾富】は、役に當る義也、本文言心は、始め潮州の人、學問する事を不知に、文公來て進士趙德と云者を選で、潮州の學者の師匠とす、秀才の及第して後、進士と成也、是より後、潮州の人、道を知て皆文行に篤し、學文して身の行ひ能あるを文行と云、其仁義忠孝薄からぬを篤と云【齊民】毛詩の注に、平民也【至今】文公が時より、東坡が時までは、二百七十餘年に成也、文公が士たる者を敎へ、下に引傳へて、一切の百姓までも習ふ也、其時より今に至る迄、潮州の仕置治め易しと云、是文公學校を立、士民を敎る故也、

信乎孔子之言、君子學道則愛人、而小人學道則易使也、（此論潮好學）

論語陽貨篇の語也、此君子小人は、皆位を以て云、言心は、貴き者道を學ぶ時は、人を愛す、賤き者道を學ぶ時は、敎に隨ふ、故に使ひ易し、聖人の言實もとぞ覺ゆと也[注]曰、是潮人と云より、潮人の學を好む事を論す、

潮人之事公也、飲食必祭、水旱疾疫、凡有求必禱焉、（謝云、此數句合祭法、見文公廟不是淫祠）

是より潮州に、文公の廟を立る事を云、唐の穆宗長慶四年文公卒す、年五十七、潮州の人、文公が恩を感じて、公に事ること、其存生の時の如くに、何ぞ飲つ食つすれば、必ず先初穗を文公の神靈に祭る也、洪水大旱諸疾疫にも、凡そ請求る事あれば、亦必ず文公に祈

事能はずと也、馴鰐魚之暴と云は、不可欺豚魚と云に應ず、

能信於南海之民、廟食百世、而不能使其身一日安於朝廷之上、

公自觀察推官入仕貶陽山、貶潮州、移袁州、或行軍蔡州、或宣撫鎭州、在朝之日少也、

南海は、潮州を指也、潮州の民に信仰せられて、追慕して廟を立、百世迄祭と云共、其身は君相に信せられずして、一日も朝廷の上に安穩に不居、廟食は、廟を立て、酒肉を祭るを云、注文公觀察推官より朝廷に入て仕へ、陽山縣の令に貶黜せられ、復入て奉仕し、潮州に配流せられ、袁州に移さる、或は蔡州行軍たり、或は鎭州に宣撫使と成、故に朝廷に奉公する日は多からず、信於南海之民は、得匹夫匹婦之心に應ず、

蓋公之所能者、天也、其所不能者人也、

文公が丹誠を以て、君に仕へ民を治むるは、只天のみ所知也是公が能し得たる所は、蒼々の天鑑也、時澆季に生れて、昏君姦相に逢、其をして感信せしめざるは、人間の力所不及也、上の天人之辨と云に應ず、湖月曰、文公の所能は、或は開雲、或は馴鰐是天理也、憲宗の怒逢吉等が謗は、人道也、今案ずるに、此說最是、羅山曰、文公所能者天也とは、誠の道也、其所不能者人也とは、僞の道也、此說甚だ迂濶、

始潮人未知學、公命進士趙德爲之師、

〔韓文〕潮州請置鄕校牒云、十室之邑、必有忠信、今此州戶萬有餘、豈無庶幾者邪、刺史縣令不躬爲之師、里閭後生無所從學耳、趙德秀才沈雅專靜、頗通經旨文章、能知先王之學、且排異端而宗孔氏、可以爲師矣、請攝海陽縣尉、爲衙專勾、當州學以督生徒、

自是潮之士、皆篤於文行、延及齊民、至于今、號稱易治、

注〔潮州請―〕文公潮州に鄕校を置んと請の牒あり、鄕校は、一鄕の學校を云、左傳に見へたり、牒は、表狀の類也〔十室―〕論語公治長篇の語也、十家ばかりある程の小里にも、必ず忠信なる生れ付の人あり、今潮

を承支る也、是に因て文公神靈の奇特を感じて、下馬して拜して祭るとあり本文言心は、文公の至誠能神明感通して、衡山の雲をば開け共、憲宗の惑を引廻して正道を悟らしむる事不能、佛骨を信仰して忠言逆耳御て公を流罪するを惑と云也、開衡山之雲と云は天不容僞と云に應ず、

能馴鱷魚之暴、愈至潮問民疾苦、皆曰、惡溪有鱷魚、爲民害、愈爲文投溪水中、祝之、是夕暴風震雷起溪中、數日水盡涸、西徙六十里、自是潮無鱷魚患、【鱷】音咢

而不能弭皇甫鏄李逢吉之謗、憲宗得愈謝表、頗感悔欲復用之、皇甫鏄素忌愈直、即奏言愈終疎狂、可且內移、改袁州、宰相李逢吉因臺參之事使愈與李紳交鬭、逢罷、愈爲兵部侍郎、

注文公已に左遷せられて、潮州に至り、百姓に何たる否に疾み苦む事有やと問、民皆申樣には、惡溪と云所あり、其溪に鰐有て、民の害を成、人を取、六畜を食ひ盡して、迷惑致すと云、元和十四年四月二十四日、文公文を作て秦濟と云者を遣はし、一羊一猪を以て溪に投ち、鰐に與へ食はしめて、其文を讀上て祝す、今夜大風吹、雷大に鳴て、鰐惡溪の中より起る、日を經て溪水盡く涸き、西の方に移り去こと六十里、其後潮州に鰐の患なし、是を文公鰐魚の暴惡なるを馴しむと云、又鱷魚文題註曰、鱷魚之狀、龍吻虎爪、蟹目鼉鱗、尾長數尺、發大如箕、芒刺成鈎、仍有膠粘、多於水濱潛伏、人畜近以尾擊取、蓋猶象之任鼻也、

注愈潮州より謝表を上つる、死罪にも可被行を、命を免され、剩へ此州の守護代官に被仰付は、忝しと謝禮を申す狀也、憲宗表を見て、漸く感悟して、召返し復用んとし給へば、皇甫鏄李逢吉、文公を忌惡て讒言す。此二人は皆小人也しか共、憲宗の御意に入て宰相と成、政事をさばく故に、帝彼等が云に隨ひ、潮州より移して、袁州の刺史とす、轉任して吏部侍郎と成李逢吉又李紳を惡で、外に出さん爲に、文公を以て、京兆尹として、御史大夫を兼官せしむ、別して詔有て、朝臺へ出仕せざらしむ、而して李紳を中丞に除す、李逢吉李紳に臺參の事をからかはしめ、けしかくる樣にして、文公を惡くす、李紳文公臺參せざる事を劾奏す、文公詔に因て出仕せざる由を云分す、李紳等種々に惡く云程に、李逢吉頓て奏して文公が官を罷、文公亦兵部侍郎と成、今云心は、文公能鰐魚を馴けて、六十里の外へ移せ共、皇甫鏄李逢吉が讒奏を止る

不至、惟天不容僞、

【葢】は、疑の辭、如此有んかと推量して云時に置字也【嘗】は、是より先にと云心あり、東坡天と人との辨を論じて思ふに、人の巧至らざる所なし、あらゆる事をするを云、只天道は無私故に、必ず僞を許容せず、天道は公けにして、少しも私なし、誰知天上亦容奸と云も、不容僞義を反して云、

智可以欺王公、不可以欺豚魚、力可以得天下、不可以得匹夫匹婦之心、

周易中孚彖曰、豚魚吉、信及豚魚【豚魚】豚は、いのこ也、ぶた也、豚と魚とを云也、或は海豚魚河豚魚也と云說もあり、孚は、誠信也、言心は人智惠才學を以て、帝王三公をも欺くべけれ共、僞て豚魚をばだますべからず、誠信は豚魚の無智なるを感ずる義あり、淮南子主術訓云、至精之所動、若春氣之生、秋氣之殺也、雖馳傳騖置、不若此其亟孟子曰、以力服人者非心服也、力不贍也、以德服人者、中心悅而誠服也、又曰、得天下有道、得其民、斯得天下矣、得其民有道得其心、斯得民、又論語、匹夫匹婦之爲諒威力を以て天下を得る事はすべく共、無德時は人心から皈服せざる故に、匹夫匹婦之心を得べからずと也、

故公之精誠能開衡山之雲、愈有謁衡岳廟詩云、我來正逢秋雨節、陰氣晦昧無淸風、潛心默禱若有應豈非正直能感通、須臾靜掃衆峯出、仰見突兀撐淸空、

而不能回憲宗之惑、

【精】は、不雜也、白米の如し亦水精の如し、くはしと訓ず【誠】は、眞實誠信也注【愈有謁―】衡岳は、即ち衡山、亦霍山と名付、南岳と稱す、五岳の一つ也、文公潮州より皈る路次にて、衡山の廟に謁する詩也、韓文第三卷にあり【我來―】とは、文公南岳を見物せんと思ふ處に、雲霧暗く、秋雨の時節天氣陰りて、淸風不吹也【潛心―】潛かに不言して、心中に祈念し、見上げたれば、其應驗あるが如し、是誠正の心感通する故ならずやと也【須臾―】暫時に風吹拂ふて雲霧も消峯峯顯れ出る間、仰ぎ見たれば、衡山突兀と高く聳へて、淸たる虛空を支撐すると也、撐は手を以上なる物

を冀州節度使とす、二年二月、廷湊先翼を深州に圍む、韓愈を勅使として止させらる、宣撫は、勅詔を宣て安撫する也、人皆危しと思ひて、韓愈を惜む、穆宗愈に勅して、事の體を見合すべし、必しも陣に入事勿れと宣ふ愈至る時に、廷湊が兵集り列なる、韓愈義を正しふして、廷湊に云て、牛元翼が圍を解しむ【力折其黨】とは、強く說云て、其廷湊が諸卒の爭論を、理に折れ服せしむる也【欲廷湊何所爲】とは、廷湊逆心して、又已に牛元翼を取圍みて居れば、何とかしたらば可然と思はるゝやと、退之に問也【神策六軍】事物紀原曰、自西魏始作府兵、而其法備於隋唐、唐兵志曰、唐有天下、兵勢三變、其始盛時有府兵、已而廢爲彍騎、又廢、而爲方鎭、及其末也、强臣悍將兵布天下、而天子亦置兵於京師、曰禁兵、又曰、唐承隋制、置十二衞府兵、及罷始置神策神武等軍、曰禁軍、此禁兵之始也、神策軍は、禁中に指置るゝ軍兵の名也、日本にて、北面の士、西面の士と云て置るゝの類也、天子は六軍也、一萬二千五百人を一軍とす、六軍は七萬五千人也、諸侯は、三軍也、退之云樣には、天子の官軍の大將牛元翼が類の者多ければ、此一人をさして惜み給ふには非ず、但天子將士を哀憐し給ふ大法を顧れば、弃て攻殺さしむべからず、其方久しく圍む事は、何故ぞやと云、廷湊卽ち圍を解て、元翼を出さんと云、退之若左樣にせられば、別義も有まじと云、如此示し合せたる内に、元翼一方を突拔て城より出廷湊退之と約ある故に不追之、退之數千の敵軍へ只一人入て、道理をつめて服せしめ、元翼を免れしむる事を、勇奪三軍之帥と云也、三軍は、三萬七千五百人也、帥は、大將也、

此豈非參天地關盛衰、浩然而獨存者乎、（公浩然之所發、）

文公正道の衰へたるを正し、文章を起し、佛骨を諫め、王廷湊を屈折する類は、人を以て天地に參りて、其化を助け、盛衰の運に關かりて、世道を扶持し、身已に死すと云共、今に至るまで其氣洪然として獨り存する者に非ずやと也注には、文公の洪然の氣より、此等の事を發出すと云り、

蓋嘗論天人之辨、以謂人無所

文佛指骨一節、其法三十一開、開則歳稔人泰、元和十四年正月、憲宗遣中使杜英奇、押宮人三十、持香花迎入大內、留禁中三日、乃送佛祠、王公、士庶贍禮舍施、百姓鍊頂灼膚以爲供養、刑部侍郎韓愈上表切諫云云、帝大怒、出示宰相將加愈極刑、裴崔群等、爲言愈雖狂、發於忠悃、宜寬容以開言路、乃貶愈爲潮州刺史、憲宗皇帝佛骨を迎へ、禁中に入れて敬禮せしかば、朝廷の士太大より庶民に至るまで、奔走賛嘆すれば、京中動いて、其費計るべからず、文公表を上つりて云樣は、佛は夷狄の法にして、何の益もなく、是を好む者は、後漢以後南北朝の間の諸帝王の如く、國を失ひ、身を亡ぼす、必ず中國に用ふべからず、假令佛生て來朝す共、夷狄の者に、天子對面せらるゝ法を用ふべし只一見して已ん而已、況や天竺にて千年餘り以前に死たり、其汚れたる穢なき骨を、禁中へ入られんや、乞此骨を以て有司に付て、火に燒、水に沈め、永く根本を絶去、天下の疑を斷、後世の惑を絶給へと、念比に諫む、是を佛骨の表と名付て、韓文にあり、文公が忠、憲宗の怒を觸犯と云是也、憲宗怒て文公を潮洲へ流さる【勇奪三軍―】注【鎭州―】韓愈傳云、鎭州亂殺田弘正、而立王廷湊、詔愈宣撫、既行、衆皆危之、元稹言韓愈可惜、穆宗亦悔、詔愈度事從宜、無必入、愈至、廷湊嚴兵迎之甲士陳廷、既坐、廷湊曰、所以紛紛者、乃此士卒也、愈大聲曰、天子以公爲有將帥材、故賜以節、豈意同賊反邪、語未終、士前奮曰、先太師爲國擊朱滔、血衣猶在、此軍何負、乃以爲賊乎、愈曰、以爲爾不記先太師也、若猶記之固善、天寶以來、安祿山、史思明、李希烈等有子若孫在乎、亦有居官者乎、衆曰、無、愈曰、田公以魏博六州歸朝廷、官中書令、父子受旗節、劉悟、李祐、皆爲大鎭、爾軍所共聞也、衆曰、弘正刻故此軍不安、愈曰、然、爾曹亦害田公、又殘其家矣、復何道、衆讙曰、善、廷湊慮衆變、疾麾使去、因曰、今欲廷湊何所爲、愈曰、神策兵軍將、如牛元翼者爲不乏、但朝廷顧大體、不可弃之、公久圍之何也、廷湊曰、即出之、愈曰、若爾無事矣、會元翼亦潰圍出、廷湊不追、愈飯奏其語、帝大悅、以愈轉吏部侍郎云云、唐の穆宗長慶元年七月、鎭州亂れて、都知兵馬使王廷湊等、成德節度使田弘正を殺して、自ら留後と稱す、詔して弘正が子涇原の節度使田布、魏博の節度使とす、布驛に乘て鎭に往、深州の刺史牛元翼

此獨韓文公―と云數句を用ふ、文章簡古にして奇妙也、古義に、說文消盡也と云註を用ふ、羅山曰、此數句にて、文公を譽盡せりと云也、今案ずるに文法に不合註也、

文起八代之衰、〔愈傳贊云〕正元元和間、愈以六經之文爲諸儒倡、八代、謂東漢魏晉宋齊梁陳隋也、

道濟天下之溺、文公每言原道數十篇皆奥衍宏深、與孟軻揚雄相表裏、障百川、廻狂瀾、所以救溺人心之溺、

注〔愈傳贊―〕正元を、貞元とも書り、唐の德宗の年號也、元和は憲宗の年號也【六經】は師說に見へたり【爲諸儒倡】倡倡和、唱と通ず、唱は、導也、引也、先也、又發歌謂之唱【八代】注謂東漢魏晉宋齊梁陳隋也、言心は、此八代の間、或は莊子老子を尙ひ、或は佛法を好み、或は淫亂を好て、女色の詩を作り、或は四六の對句に泥みて、古文の正しき法を不知、文公六經に本づいて、能文章を作り、八代の衰へたる古文を起し、諸儒の先導として倡ひ示す【道濟―】孟子離婁上篇曰、今天下溺矣、注言今天下大亂、民遭陷溺、注〔文公每言―〕文公原道の篇を作て、聖人の道を云述、異端を排て、儒道を起し、天下の人の心の溺れたるを救へり【奥】室西南隅、又深也【衍】水溢也、又豐也、盛也【宏】大也、原道、原性、原毀、原鬼等數十篇、皆正道に推本づいて、其文深く盛に、大いに深して、孟子揚子雲など丶互に相表裏す、彼と此と、表と成、裏と成て、相互に其道理を助け明すを云【障百川―】此二句は、文公進學解の語也、注は其中に見えたり、文公が文道を起すの功、譬へば百川の溢れ流るを塞ぎ止め、大海の大浪を推廻すが如し、是天下人心の異端に溺れ陷るを引上救ひ出す也、唐書本傳、愈每言文章自漢司馬相如、太史公、劉向、揚雄後、作者不世出、故愈深探本元、卓然樹立、成一家言、其原道、原性、師說等數十篇、皆奥衍閎深與孟軻揚雄相表裏、而佐佑六經云、

忠犯人主之怒、憲宗遣使迎佛骨入禁中、愈上表極諫、帝大怒、貶愈潮州、

而勇奪三軍之帥、鎭州亂殺田洪正而立王廷湊、詔愈宣撫衆皆危之、愈至對廷湊、力折其黨、廷湊曰、今欲廷湊何所爲、愈曰、神策六軍將、如牛元翼者爲不乏、但朝廷顧大體、不可棄之、公久圍之何也、廷湊曰、即出之、愈曰、若爾則無事矣、會元翼亦潰圍出、廷湊不敢追、

注【憲宗―】鳳翔法門寺、有護國眞身塔、塔内、有釋迦

封蔡國公、食三千戶、別食益州千三百戶云云 與玄齡共筦朝政、引士賢者、下不肖、咸得職、薨年四十六○同四十九、姚崇、字元之、陝州陝右人、少倜儻尙氣節、長乃好學云云、武后時拜侍郎、聖曆三年進同鳳閣鸞臺平章事、遷鳳閣侍郎云云、玄宗 先天二年拜兵部尙書同中書門下二品、封梁國公、開元四年、山東大蝗、崇奏殺蝗、々害息云云、八年 授太子少保、以疾不拜、明年卒、年七十二、贈揚州大都督、謚曰文獻○同卷、宋璟、邢州南和人、耿介有大節、好學工文辭、擧進士中第、調上黨尉、爲監察御史、遷鳳閣舍人、居官鯁正、武后高其才云云、玄宗開元初進御史太夫、四年遷吏部、兼侍中、封廣平郡公、十三年東巡泰山、璟復爲留守、帝將發 謂曰、卿國元老、別方歷時、宜有嘉謀以遺朕、璟因一二極言、手制答曰、所進當書之座右、出入觀省以誡終身、賜賚優渥、進兼吏部尙書云云、二十五年卒、七十五、贈太尉、謚文貞、

獨韓文公起布衣、談笑而麾之、天下靡然從公、復歸于正、蓋三百年于此矣、（謝云、褒文公、只消此數句、）

文選、奪布衣、呂延濟注曰、布衣、庶人之服、言漢始起庶人之服、以登大位、羅山曰【布衣】は木綿の著物也、無官無位の人を布衣とす、文公が始め官位に昇らざる時を指也、前の起匹夫に應ず【談笑】秦圍趙欲爲帝、魯仲連談笑、卻秦軍五十里、句解曰談笑、容易也【麾之】麾、說文、旌旗所以指麾也、通作麾、尙書右秉白旄以麾、々は、旗の類也、一つの旗を揚て、諸軍皆靡き隨ふ、文事を以て 武事に比す、句解曰、天下之人、從風而靡、韓文公道衰へ 異端盛なるの時に當て、獨り布衣より起り、其道德文章を以て、人に敎る事、喩へば大將の旗を把て、數萬の軍兵を下知するが如し、天下皆文公に靡き隨ふて、復び正道に皈するは、文公か功也文公が時より、東坡が時までは、三百年に及ぶと也、唐の第十三主憲宗元和十四年、退之佛骨の表を奏して、潮州の刺史に貶せらる、是より宋第七主哲宗元祐七年、東坡揚州に在て、此碑文をつくれるに至て、凡て二百七十四年也、今三百年と云は、大數を擧る也【汪】消は、須字の意、須は用也、文公を褒るに、只

自東漢以來、道喪文弊、異端並起、

綱鑑、東都洛陽、故曰東漢、東漢は、後漢也、後漢より以後、聖人の道亡び、文章弊れて、異端並び起る、論語爲政篇集註云、異端、非聖人之道而別爲一端也、楊朱、墨翟、老子、莊子、佛法、皆異端也、後漢の第二主明帝の時に、佛法始て中國に入、

歷唐正觀開元之盛、輔以房杜姚宋而不能救、【謝云】得君行道、如房杜姚宋、不能救、而文公獨能之、

後漢より晉宋齊陳隋數代の間、皆佛老を好めり、唐隋を滅して、天下を有つ【正觀】は即ち貞觀、唐の第二主太宗の年號也、二十三年あり【開元】は、第七主玄宗の年號也、二十九年あり【房杜】は、房玄齡、杜如晦、太宗の宰相也【姚宋】は、姚崇、宋璟、玄宗の宰相也、東漢より以來、道も喪び、文も衰へて、異端多く起り、唐の貞觀開元の全盛にして、房玄齡杜如晦が太宗を輔け、姚崇宋璟が玄宗を佐けて、其名を得、道を行はんとせしか共、道德文章の亡びたるを、救ひ匡す事不能、韓文

公一人出て後に、是を善する也○唐書列傳二十一、房玄齡、字喬、齊州臨淄人、幼警敏、貫綜墳籍、善屬文書、兼艸隸、年十八擧進士云云、謁太宗一見如舊、即授府記室、封臨淄侯、征伐未嘗不從、衆爭取怪珍、玄齡獨收人物、致幕府、與諸將密相申結、人人願盡死力、居府出入十年、軍符檄或駐馬即辦、文約理盡、初不著藁云云、引杜如晦、協判大計、隱太子將有變、王召二人、以方士服入、夜計事、事平、王爲皇太子、擢右庶子、太子即位、爲中書令、第功班賞、與如晦長孫無忌、尉遲敬德、侯君集、功第一、進爵邢國公、食邑千三百戸云云、居宰相積十五年、薨、年七十一○同卷、杜如晦、字克明、京兆杜陵人、少英爽、喜書、以風流自命、內負大節、臨機輒斷云云、秦王引爲府兵曹參軍、徙陝州總官府長史、時府屬多外遷、王患之、房玄齡曰、去者雖多、不足吝、如晦、王佐才也、大王若終守藩、無所事、必欲經營四方、捨如晦無共功者、王驚曰、非公言、我幾失之、因表留幕府、從征伐、常參帷幄機秘、方多事、裁處無留、僚屬共才之、莫見所涯、進陝東道大行臺司勳郎中、封建平縣男、兼文學館學士、天策府建爲中郎、王爲皇太子、授左庶子、遷兵部尚書、進

滅す時に、杜預が云辭也、竹を破るに、節三つ四つ迄は、手間入れ共、後は破易く、刀の向ふに隨て、はら〳〵と分解する也、此五つの失字續けて用る勢を畳て云也、

其必有不依形而立、不恃力而行、不待生而存、不隨死而亡者矣、【呂云】此四不字、亦有力【謝云】句法好、

洪然の氣、天地の間に滿塞る物なれば、必ず人の形の中に依居て不立、足の力を恃て不行、人の生活するを待て存留せず、死歿するに隨て、消亡せざる者有べし、次の段に所云是也羅山曰、目難見口難云と云共獨り建立し、獨り行ひ、獨り存する者は、此氣也、今案ずるに、大きにもてあつかふたる說也〔注〕不字を四つ用ふ、亦筆に有力【句法好】一段句の法好と也、

故在天爲星辰、在地爲河嶽、幽則爲鬼神、而明則復爲人、此理之常、無足恠者、【謝云】此是的確之論、

上を承て云、其人死すと云共、而も形に隨て亡びざる者あり、故に其洪然の氣獨り存して、天に上て星辰と成事あり、前に云、傅說是也、又蕭何は說星の精、李白は長庚星の精と云事あり、地に在ては河岳と成前に申呂自岳降と云に相應ず【幽則―】易係辭上云、知幽明之故、知鬼神之情狀、隱れて見へぬ處を幽とす、幽は、喩へば夜也、死也、顯はれて見ゆる所を明とす、喩ば晝也、生也、中庸十六章、鬼神之爲德、其盛矣乎、朱子註云、以二氣言、則鬼者、陰之靈也、神者、陽之靈也、以一氣言、則至而伸者爲伸、反而皈者爲鬼、其實一物而已、又人死して魂の天に升て散盡るを神とし、魄の地に降て皈り去を鬼とす、此所の鬼神は、死して後の幽靈を指て云、言心は人死して幽冥に入れば、鬼神と成、生れて顯明に出れば人と成、文公の廟中に祭るは、鬼神と成也、退之と生れて世に出れば、人と成也と云心を、底心に含めり、上の必有不依形而立と云より明則復爲人と云迄は、是道理の定れる常にして、怪み不審するに不及者也〔注〕【的確】其道理明かに堅ふして、破るべからざる議論也とぞ、

卒然遇之、王公失其貴、晉楚失其富、良平失其智、賁育失其勇、儀秦失其辯、是孰使其然哉、〔呂云〕五箇失字、如破竹勢、

孟子公孫丑上篇曰、我善養吾浩然之氣云云其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間、集註、浩然、盛大流行之貌、氣、即所謂體之充者、本自浩然【尋常】八尺曰尋、倍尋曰常、浩然は、盛んに大きに、遍く至る義也、天氣の正氣を、浩然の氣と名付、人此氣を受て生し、五體に充滿する者也、義理を以て此氣を養ふ時は、恥べき事もなく、恐るべき事もなし、此氣尋常の僅かなる人心に備はりて、其廣大なる事は、天地の内に滿塞る、是則ち仁義の大用也、

孫子曰、善用兵者、譬如卒然、卒然者、常山之蛇也、孟子梁惠王上篇、卒然問曰、天下惡乎定、集註【卒然】急遽之貌、にわかなる義也【王公】帝王三公也、天下の貴き人也【晉楚—】公孫丑下篇、曾子曰、晉楚之富、不可及也、彼以其富、我以吾仁、彼以其爵、我以吾義、晉楚は、大きに富る國也【良平—】張良陳平二人は、漢の高祖の智謀の臣也、史記漢書に有傳【賁育—】公孫丑上篇夫子過孟賁遠矣、註曰、孟賁勇士、齊の國の人、能生ながら牛の角を拔、秦の武王多力の士を好むに因て、孟賁往て仕ふ、漢書音義、或云、夏育、衛人、力擧千鈞【儀秦—】張儀蘓秦二人共に、周の末戰國の時の辯舌の者也、詳に送孟東野序に見へたり、箇樣の人、俄かに浩然の氣を養ひ得たる人に遇る時は、王公も其貴を忘れ失ふて、其人を禮すべし、晉楚も其富を失ふて、其人を敬すべし、如何となれば、富貴は浮雲の如にして、身外の物也、浩然の氣は、自ら義理より出て天爵なれば、孟子の所謂得志、與民由之、不得志獨行其道、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈也、良平が智惠も、とはうを失ふて窮まる事あり、賁育が勇も德義に服して、氣を奪はれ失ふべし、儀秦が辯口も、義理の前には振ひ難し、誰か王公等人をして、其所有の富貴等を失却せしむるや、羅山曰、誰か此氣をして如此ならしむるや、可有子細案するに氣の字甚だ不是、當能味而後看得〔註〕晉書、杜預曰、兵威已振、譬如破竹數節之後、迎刃而解、晉より呉を伐

關かる事あり、其生れ出るも、本より來る所あり、由緒由來あるを云、其死逝も徒らに不果去して、亦爲る所ありと也、註【起得―】此句も云起す事健か也發端の句を承る事弱からず、愚謂く、此起得健の三字も、亦發端の二句を指歟、云心は、發端に健かに書起し得て是皆―と云數句、接承る事亦健也と云り、

故申呂自嶽降、〔詩〕崧高維嶽、降神生甫及申、申、即申伯、呂、乃姜氏、即甫侯也、初爲呂侯、後爲甫侯、傅說爲列星、〔莊太宗師〕傳說得之、以相武丁、奄有天下、乘車維、騎箕尾、而比於列星也、

古今所傳、不可誣也、此數句承上起句、

註【詩崧高―】大雅蕩之什、嵩高之篇也、朱子集傳、山大而高曰崧、嶽、山之尊者、言嶽山高大而降其神靈和氣、以生甫侯申伯云云、嵩山は、五岳の內の一つ也、岳は、だけと讀り【申即申伯―】申も甫も、國の名、侯伯は、五爵の二つ也、姜氏は、太公望呂尙が姓也、甫侯は、其後裔也、始は呂侯に封ぜられ後は甫侯と成れり、周の宣王の時申伯呂侯と云二人の大臣あり、王を佐けて國家を治む、此二人は、嵩山の神靈降りて世に生れたり、直人に非ず、故に申と呂と岳より降ると云り、毛詩の嵩高の篇は、此事を云也【傅說―】註【莊―】林希逸注曰、言得此道而後能如此也、玄英疏云、傅說、星精也、而傅說一星、在箕尾星上、然箕尾則是二十八宿之數、維持東方、故曰乘東維騎箕尾、而與角亢等星比並行列、故云比於列星也、傅說は、道を得て、殷の高宗を相けて、天下を安んず、事は尙書の說命に見へたり、死して箕尾と云星と成り、箕尾は、二十八宿の內にて、東方にある二の星の名也、故に乘東維と云、維は、天地の維とて、天地を維ぎ持つ綱維也、漢の東方朔世にある時に、歲星隱れて見へず、朔死す、其夜歲星出現す、歲星降て東方朔と成と云も此類也、【古今―】申呂傅說が事、古今の云傳る所僞り有べからずと也【誣】說文、加也、徐曰、以無爲有也、禮記註、於事不信曰誣、誣、無理に無ことを有と詐り云を、誣と云註此數句上の發端の句を能承たりと也、

孟子曰、我善養吾浩然之氣、是氣也寓於尋常之中、而塞乎天地之間、

り○萬里曰、此篇八段、自篇首至誣也第一段摠論也、自孟子至佐者第二段、自東漢至者乎第三段、自蓋嘗至之上第四段、自蓋公至禱焉第五段、自而廟至廟成第六段、自或曰至也哉第七段自元豐至末第八段、

匹夫而爲百世師、一言而爲天下法、〔謝云〕起句健、章子厚猶以爲褒文公太過、似孔孟廟記、

【匹夫】論語、匹夫不可奪志也、左傳、匹夫無罪、註疏、庶人夫妻相匹、前漢食貨志、布帛廣二尺二寸爲幅、長四丈爲匹韻會、匹、一曰、偶也、又配也、合也、庶人は無妾媵して、一夫一婦相匹偶す、故に匹夫と云、羅山曰、官も位もなき、賤しき者也【百世師】孟子盡心下篇曰、聖人百世之師也【天下法】中庸二十九章曰、動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則、匹夫なれ共、賢なれば百代の師と成、一言物を云へ共、天下の式法と成と云は、韓文公が如なる者也【起句健】此發端の二句強く健にして、無弱氣と也【章子厚】氏族排韻、章惇、字子厚、宋元豐中拜相、封申國公、紹聖元年四月、爲尙書左僕射、建中靖國元年二月、貶雷州司戸參軍、後徙睦州、卒章惇は、極惡至姦なる者也、哲宗の昏愚に逢て、用ひられて宰相と成、天下の政を執て、悉く賢人を傷害し、百姓を慘刻するに依て、終に雷州に被流、其配所に赴くとて、南山寺に至る、其寺の僧奉忠、夏雲の詩を作て、章惇に呈して云、如峯如火復如綿、飛過微陰落檻前、大地生靈乾欲死、不成雲雨漫遮天、章惇見て大に恥て、赤面すと也、其姦惡の事は、具に通鑑綱目綱鑑に見へたり【以爲褒文公―】章惇が云、此發端の句韓退之を譽るには、太はだ過たり、孔子孟子の廟の記に似たりと、百世師、天下法は、孔孟の上さなるべしと云心也、

是皆有以參天地之化、關盛衰之運、其生也有自來、其逝也有所爲、〔謝云〕起得健、接亦不弱、

【以參天地之化】中庸二十二章、能盡人之性、則能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以與天地參矣、靑松曰、天地之化、盛衰之運、一篇張本、百世の師と成、天下の法と成者は、天地の氣化に交はり、盛衰の運命に

佛骨事、帝大怒將抵死、持示宰相崔群裴度、群度力言愈忠、願少寛假以來諫諍、帝稍解、乃責潮州刺史、又云、潮州、在嶺南、距長安八千里、公が事は、詳に前の師說の注にあり、及び進學解等の注を參考すへし、羅山曰、退之が謚を文公と云、公潮州に流さる、後に召還さるゝと云共、所の人、公の德を追思て、廟を立て、公を祭れり、其後東坡も被流て潮州へ來る時、此廟の碑を作れり【註】【後世】論語子罕篇、子曰、後世可畏、焉知來者之不如今也、人より後に生るゝ者を、後生とも、晩生とも後輩とも云、人より先に生るゝ者を、先生先達先師先輩と云、後生を弟子の稱に用ひ、先生を師の稱とす、此は後世の學者を指て云【熟】は、火にて物を煮て、能うめるを云、飯羹にても能飪、其外果實にても、能つはりたるを云、其より道理文章の上にも、詳かに會得するを熟と云、うまく共、つくづく共讀り、言心は、學者念を入て能此文章を讀ば、必す筆に勢力有て、光彩を生すへし、文章健かに美麗なるを云○句解評に云、韓文公生於李唐、蘇公生於趙宋、先後相應輝、皆以文名世、豈偶然哉、起兩句有大力量、首言其生有自來、次論其量之剛大、已含廟祀意、次論

文公浩然之所發、又次論公能動天而不能勝人怨、后論潮人之事、學與潮人思公以立廟、次論新廟之成、又發明潮人思功之切、然后述作碑之由、黃氏日抄五十九云、東坡作韓文公廟碑、詞絢雲錦、氣盪霄漢、振古一奇絶也、然一言以蔽之、不過謂其門氣所生、不爲死生禍福奪、此殆坡公胸中所自得、因之而發歟、若文公之所以爲文者、則似未暇盡及也、蓋自孟子沒、而異端作、中國之不爲夷狄者幾希、公始出而斥之、天地之所以位、人之所以異於禽獸、中國之所以異於夷狄、一一條析明盡、而世始昭若發蒙、孔孟而後、所以扶植綱常者、公一人而已云云、夫綱常非徒禮樂刑政之可扶也、我朝是以復極其根於性命之源、性非徒品三之可盡也、我朝是以復析其微於本然之性、氣質之性之別、功有相因、理日以明、譬之事業、文公則撥亂世而反之正者也、我朝諸儒、則於反正之後、窮極治要、制禮作樂、躋世太平者也、文公所以爲文者、其大若此、豈曰文起八代之衰、止於文字之文而已哉、羅山曰、東坡一生の間、詩文を作るに、少しも案ずる事なし、即座に筆に任す只此碑と司馬溫公神道碑とは、東坡深く案じたる文也、末の注に見へた

も横か死たる事を聞て皆盡く自害す、高祖橫が首を見て、涙を流して、王者の禮義を以て葬らる、此に云は、橫か兵五百人多けれ共、空しく橫を死に免れしむる事能はす、擾々は、多也、夫子は、橫を云也、韓文注、鉏、及也、橫か死ぬるは、其寶とする所の兵、皆賢人に非る歟抑又天命の定れる運の常歟と也荊公此退之が文の意を承て、其詞の中より變化して書出す也、退之は得一士可王と云、此には得一士焉宜可以南面而制秦と云、

碑類

說文、碑、竪石紀功德、徐曰、按古宗廟、立碑以繫牲耳、後人因於其上紀功德此碑字从石、秦以來製也、七十二家封禪勒石、不言碑、七十二家封禪之言、始於管仲不言碑、穆天子傳、乃爲名迹於弇茲石上亦不言碑也、銘勒功德當始於宗廟麗牲之碑也、又祭義、麗牲、疏、賈氏曰、宮必有碑、士昏禮聘禮、入門當碑揖、則大夫士廟內皆有碑、鄉飮酒、鄉射三揖、則庠序之內皆有碑、據祭則諸侯廟內有碑、碑、所以識日景觀碑景邪正以知早晚宮廟用石爲之、葬碑取懸繩繂暫時往來運載、當用木而已、喪大記、天子用大木爲碑、謂之豐碑、諸侯樹兩大木謂之桓楹檀弓注、鄭氏曰斲大木形如石子於槨四角樹之、穿中爲鹿盧下棺以繂繞、天子六繂四碑、諸侯四繂二碑云云又釋名曰、碑、被也、葬時所設臣子追述君父之功以書其上徐曰、劉熙言起於懸棺之碑者、蓋今神道碑也、初學記、碑、悲也、所以悲往事、今人墓隧宮室之事、通謂之碑矣文選陸士衡文賦曰、碑披文以相質註碑叙德、故文質相半羅山曰、碑は、廟の中に牲羊を繫ぐ石也或は木を以て作る事もあり、其に事を記して彫刻む、故に碑と名付、又初學記には、碑は悲也、死せる人の事を悲みて、其事を書傳るを碑と名付と云り、塚の前に石を立て、其傳を記すを、墓誌と云是も碑の類也、碑文の末に銘を書をば、碑の銘と云也皆文の一體也、

○潮州韓文公廟碑　蘇子瞻

（謝疊山云、後生熟讀此等文章、下筆便有氣力光彩、）

韓文第十註云、元和十四年、公爲刑部侍郎、上表極諫

故に雞鳴狗吠の力を取及んや、喩ば伊尹傅說太公なども、是士也、湯王高宗文王武王是を得て、天下を治め給へり、戰國孟嘗君士を得たりと云べからず、若其士ありとても、孟嘗君用る事能はじと也【南面】論語雍也篇集註、南面者、人君聽治之位【制】增韻、勝也

雞鳴狗吠之出其門、此士之所以不至也、

此一轉、筆力健〔謝云〕此篇立意、亦是祖述前言、韓文公祭田橫墓文云、當嬴氏之失鹿、得一士而可王、何五百人之擾擾、不能脫夫子於劔鋩、豈所寶之非賢、抑天命之有常介甫蓋自此篇變化來、

雞鳴狗吠の輩の、孟嘗君が門に來て出入するは、即ち善士の至らざる所以也、所以は、故也、但し今は俗語に其筈と云心也、善士は、賢人君子也、雞鳴狗吠の者と大きに異也、孟嘗君が身、雞鳴狗吠の首らたる者なれば、雞鳴狗吠の輩は多く來れ共、天下の善士は、一人も不來〔註〕【此一轉―】文章軌範謝疊山云、筆力簡而健、然得意處、只是檀齊之强、得一士焉、宜以南面而制秦、尚取雞鳴狗吠之力哉、先得此數句、作此一篇文云云、上に嗟乎―言得士と云て、此にて一轉して不然―と云へるは、筆力健かにして弱まずと也【謝云】此篇の意を設くる事、前代の人の語に本づき述たりと也【祖述】中庸、仲尼祖述堯舜、朱子註、祖述者、遠宗其道【前言】易大畜、前言往行、疏曰、多記識前代之言、往賢之行云云【韓文公―】此祭文、韓文廿二巻にあり、此に所引は、其略也【嬴氏】は、秦の姓也【失鹿】は、天下を失ふに喩ふ、史記淮陰侯傳、秦失其鹿、天下共逐之、注曰、鹿、喩君道也【得一士―】史記、田横初爲漢將灌嬰敗於垓下、亡梁皈彭越、高祖即位、懼誅與其徒五百餘人、入海居島中、高帝聞齊人賢者多附横、恐後有亂、乃使使赦横罪而召之、横與其客二人、乘傳詣洛陽、至尸鄉厩置、遂自剄、令客奉其頸、從使者馳奏、高帝流涕、以王者禮葬横、既葬、二客穿其冢旁、皆自剄從之、其餘客在海中者、聞横死、亦皆自殺、齊の田横と云者、秦の亂に兵を起して齊を取、又天下をも望めり、若善士を得たらば王と成へし、然るに高祖と戰ひ負て、海島へ逃る、高祖使を以て横を赦さんと云、時横か兵五百餘人あり、横漢の使者と同道して降參す、路次にて横云樣は、我生て高祖に見へんは、本意に非すと云て、自ら頸を刎て、其客に渡し、高祖の使に遣しむ、島に殘れる五百人の兵共

君傳、其外史記の中に多し、又漢書賈山傳、秦以熊羆之力、虎狼之心、蠶食諸侯、幷吞海內、而不篤禮義、故天殃已加矣、是迄は世間に稱する所の、孟嘗君が上さ也、孟嘗君天下の士を招きて、每日三千人程集りて、食する也、食客三千人とは是也、其秦に往時に、秦の昭王是を囚へて殺さんとす、其客の中に、狗の眞似をする者あり、夜狗の體に成て、秦の藏に入、狐白裘を盜み出して、秦王の寵愛の女房に遺り、其云成に因て孟嘗君を免す、孟嘗君即ち私に夜に紛れて、急ぎ車馬を馳出して、夜半に函谷關に至る、關の法度に、鷄鳴ねば人を通さず、孟嘗君が客の中に、鷄の鳴まねをする者あり、其をして時をうたはしむ、一鷄已に鳴けば諸の鷄皆鳴、門番常の鷄鳴也と思ひて、孟嘗君を通す、昭王後悔して、人を遣はし見せしむれば、早旅宿に不居、依て急に追かけしめて關に來れば、孟嘗君已に關を出去ぬ、是孟嘗君が士の力を得て、恐しき虎豹の如くなる秦を脱出、鰐の口を逃れたりと云也、韋昭曰、以狐之白毛爲裘、謂集狐腋之毛、言美而難得者、太史公曰、千金之裘、非一狐之腋、禮記玉藻曰、君衣狐白裘、注、狐之白者少、以少爲貴也、

嗟乎、孟嘗君特雞鳴狗吠之雄耳、豈足以言得士、

是より荊公が、史記の孟嘗君が傳を讀て、我意趣を云述る也、荊公嗟乎と嘆息して云、世間に孟嘗君能士を得ると云共、左樣には非ず、只鷄鳴狗吠の者の勝れたる也、何ぞ士を得たりと云んや、士と云は、學問して道德仁義を知行ひ、君を佐け、政を修め、民を救ふて安からしむる者也、雞鳴狗吠は、盜賊の才ある類なるべし、【雄】東方朔傳、滑稽之雄乎、師古曰、雄、謂爲之長帥也、

不然、擅齊之强、得一士焉、宜可以南面而制秦、尚取雞鳴狗吠之力哉、

【不然】俗語に無左ばと云意、雞鳴狗吠に非ずして、其實に善士を得るならばと也、孟嘗君大國の齊の强を我まゝにするからは、一人の士を得ても、南面の君と成て、秦を制服すべし、秦に制せらるべからず、何

裘、乃夜爲狐、以入秦宮藏中、取所獻狐白裘至、以獻秦王幸姬、幸姬爲言昭王、昭王釋孟嘗君、孟嘗君得出、卽馳去、更封傳、變名姓、以出關、夜半至函谷關、秦昭王悔出孟嘗君、求之、曰去、卽使人馳傳逐之、孟嘗君至關、關法、鷄鳴而出客、孟嘗君恐追至、客之居下坐者、有能爲鷄鳴、而鷄盡鳴、遂發傳出、出如食頃、秦追果至關、孟嘗君出、乃還、始孟嘗君列此二人於賓客、賓客盡羞之、及孟嘗君有秦難、卒此二人拔之、自是後、客皆服孟嘗君云云、王安石此傳を讀て、此文を作る也○萬里曰、此篇三段、自篇首至之秦第一段、自嗟乎至得士第二段、自不然至末第三段、

王荊公

宋史列傳八十六、王安石、字介甫、撫州臨川人、少好讀書、一過目、終身不忘、其屬文、動筆如飛、初若不經意、既成、見者皆服其精妙、友生曾鞏攜以示歐陽脩、脩爲之延譽、擢進士上第云云、神宗召爲翰林學士、熙寧二年、拜參知政事、於是設制置三司條例司命、與知樞密院事陳叔之同領之、安石令其黨呂惠卿任其事、而農田水利、靑苗均輸、保甲、免役、市易保馬、方田諸役、相繼並興、號爲新法、遣提擧官四十餘輩、頒行天下、八年加尚書左僕射、兼門下侍郎、其後封舒國公、元豐二年、復拜左僕射觀文殿大學士、擢特進、改封荊、哲宗立加司空、元祐元年卒、年六十八、贈太傅、紹聖中諡文、荊公は、極惡の人也、神宗の猜隘、哲宗の愚懦に遇て、其姦黠を恣まゝにす、詳に通鑑綱目、綱鑑補等の書に見へたり○荊公罷相、出鎭金陵、時飛蝗自北而南、江東諸郡皆有之、百官餞荊公於城外、劉貢父後至、追之不及、見其行楊上、有一書屛、因書一絕以寄云、靑苗助役兩妨農、天下嗷嗷怨相公、惟有蝗蟲偏感德、又隨台旆過江東、

世皆稱孟嘗君能得士、士以故歸之、而卒賴其力以脫於虎豹之秦、

世に云傳るは、孟嘗君能士を招得たり、是に因て天下の士、多く來て孟嘗君に隨ふ、果して其士の力を得て、虎豹の秦を免れたり、秦の國仁義を不知、只暴虐なる故に、虎狼の國と云也、虎豹の國ともあり、孟嘗

人具飧饔以勞吏者、且不得暇、又何以蕃吾生、安吾性耶、故病且怠若是、則與吾業者、其亦有類乎、

論語先進篇、鳴鼓攻之【擊木】擊柝也、拍子木を打也【具】本集作毉【饔飧】孟子滕文公上篇、饔飧而治、饔、於用切、熟食、又朝食曰饔、夕食曰飧【勞】慰也、右に云如くに、呼はりふれて、太鼓を鳴して民を集め、木を拍て民を呼、百姓小人共、饔を具へて、其吏をもてなし御辛勞也と云て馳走すれば、少しも暇手透を不得、而るに又何を以てか民の生育を多くし、民の性情を安定せんや、故に民皆疲れ苦しみて、卻て又其所作を怠る、如此なる時は、駝が木を植る事を業とすると相似たる所ある乎と云、

問者嘻曰、不亦善夫、吾問養樹、得養人術、傳其事、以爲官戒也、

【喜】本集作嘻、注曰、一作喜【也】本集無之、註曰、一有也字、問者駝が云ことを聞て、喜て云、亦善らずや、我は只木を養ふ事を問つるに、思の外に民を養ふの道を得たり、此事を語り傳へて、官人の戒めとせんと也、官は、人を治めて政をする者也、

○讀孟嘗君傳

〔史記〕秦昭王囚孟嘗君、君變姓名、夜半至函谷關、關法、雞鳴出客、追至、客有居下坐者、能爲雞鳴、於是群雞皆鳴、遂出關、

史記列傳十五、孟嘗君、名文、姓田氏、文之父曰靖郭君田嬰、田嬰者、齊威王少子、而齊宣王庶弟也云云、孟嘗君在薛、招致諸侯賓客、及亡人有罪者、皆歸孟嘗君、孟嘗君舍業厚遇之、以故傾天下之士、食客數千人、秦昭王聞其賢、求見之、孟嘗君將入秦、蘇代曰、今秦虎狼之國也、而君欲往、不得還、乃止、齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦、昭王即以孟嘗君爲秦相、人或說秦昭王曰、孟嘗君賢而又齊族也、今相秦、必先齊而後秦、秦其危矣、於是秦昭王乃止、囚孟嘗君、謀欲殺之、孟嘗君使人抵昭王幸姬求解、幸姬曰妾、願得君狐白裘、此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無雙、入秦獻之昭王、更無他裘、孟嘗君患之、偏問客、莫能對、最下坐有能爲狗盜者曰、臣能得狐白

駝答て云様には、我只木を植る事を知のみ也天下國家を治むるの道は、我作業に非す、然れ共、我郷里に居て、人に長たる者を見れば、好て其命令下知を煩數にしげふす、民の惡をせぬ様にと、甚た哀憐する如くなれ共、卻て卒に罪禍に陷る也、老子の治大國如烹小鮮と云語、參考して見るへし、羅山曰、長人とは大小に不依、主と成君と成者を云り、愚案するに、長は、君長の義にて、をさと訓ず、若は長民とも云べきを長人と云は、太宗の諱世民と云故に、避て如此云事も有へき歟、下の養人術と云と合せ見よ、長人の字は左傳にあり、

旦暮吏來而呼曰官命、促爾耕、勗爾植、督爾穫、蚤繰而緒、蚤織而縷、字而幼孩、遂而雞豚、如此便煩擾了、

〔迂云〕句法字法皆好、

朝夕代官の下にある小奉行役人來て里中に呼はつて云、公方より下知あり、汝か耕作を促かにせよ、汝か桑麻を植る事を勉めよ、汝か田刈事を催せ、早く汝か蚕を飼て、其繭の緒を繰れ、汝か絹を織れ、汝か幼少なる子を育てよ、汝か雞豚を生長せしめよと責る

【促】催促、もよふし急く也【勗】呼土切勉也【督】音篤、董也、責也、又催趨也たゞすと訓す、今はもよふす心あり【繰】本集註、韓曰、繰謂繹繭爲絲【緒】絲口也【縷】綫也【孩】幼稚也、孟子、孩提之童、二三歲小兒、知孩笑可提抱者【字】養育するを云【遂】達也しとぐるを云、此にては生長し遂る也、羅山曰、雞や豚を牧て多く成やうにせよと也【注】【如此—】如此民に勉め勸むるは好事なれ共、餘りにせはしふして、卻て民を煩はし亂る也周公旦の攝政し給ふ時に、晝爾于茅、宵爾索綯と命じ給へるは、民の由斷懈怠なき爲に課せらるゝ迄也、今は責はたりて嚴密に催促する也【迂曰句法—】官命の下の三句は皆三字づゝ也、其下の二句は、四字づゝにて二つの蚤字を用ふ其下の二句は、四字づゝにて幼孩雞豚と續けて云、又爾字而字、幷に促勗督繰字遂、及ひ耕植、穫緒縷などの字を用ふ、句法字法皆好、

鳴鼓而聚之、擊木而召之、吾小

かも前の木を植る道理に反く者は、又其木を愛して、太はだ慈恩あり秘藏過たるを云、著まじきかと憂へて太はだ勤む、撫つ控つ いろふを云[注]〔與前相反〕上の植木之性、其本欲舒——と云段の反也【且視——】愛し過し、憂へ過す者は、植木の著さるやとて朝に往て見、夕に往て撫摩り、已に其木の傍を去て、又寄て見ると也、

而甚者、爪其膚以驗其生枯、搖其本以觀其疎密而木之性日以離矣、形容助長之病如親見、

植木を愛し憂る者の中に、殊に甚き者は、其木の肌に爪形を入て、生付たるや、枯たるやと驗む、驗は、其證據を考るを云、又或は其木を搖かして、根と土と疎たるや密したるやと觀る也[注]【形容——】此段助長の惡き事を形どり云こと、目の前に親しく見るが如しと也、

雖曰愛之、其實害之、雖曰憂之、其實讎之、故不我若也、吾又何能爲哉、

上の他人の木を植る如くにすれば木を愛すと云と云共、實には卻て木を害ふ、又木を憂ふと云と云共、實には卻て木の讎と成、故に他人は駝に不若也、此外には駝又可爲事あらずと也、

問者曰、以子之道、移之官理可乎、

木を植る事を問者、橐駝か道を以て官に居て政を治る者に移して用ひば、善んかと也【理】說文治玉也、徐曰、物之脈理、惟玉最密故从玉、治玉治民、皆曰理、廣韻、料理也、萬里曰、治理通用之、唐高祖諱曰治、故避之曰理、今案するに、唐高祖、姓は李氏、名は淵、其次子太宗、名は世民、太宗第九の子高宗、諱は治、字は爲善是也、

駝曰、我知種樹而已、理非吾業也、然吾居鄉見長人者、好煩其令、若甚憐焉而卒以禍、

故吾不害其長而已、非有能碩而茂之也不抑耗其實而已、非有能蚤而蕃之也、（即孟子勿助長）（應上文碩茂蚤實故蕃之故、）

此故に駝は、植木の生長する所を害はざる迄也能其大にして茂らしむる事あるには非す其長大に成は、自然の性也、其を害はねば自ら碩茂する也【注】【孟子―】公孫丑上篇、必有事焉、勿正心、勿忘勿助長也云云、宋人有閔其苗之不長而揠之者云云、予助苗長矣、其子趨而往視之、苗則槁矣云云、以爲無益而舍之者、不耘苗者也、助之長者、揠苗者也、非徒無益、而又害之、洪然の氣を養ふに、急に其氣の出來る樣にすれば、助長とて艸木の根を引拔て昨日より今日は長大也と云が如し、卻て其木を害ふ也、久しく義理に違はねば、心に愧る事なき所より、洪然の氣自ら生す、是を勿助長と云也【不抑―】駝其實のる事を抑へ耗さゝる迄也、能早く實のりて、蕃多にする事あるには非す、木茂れば、必ず實のりて多き也【注】【應上文―】此段上の碩茂蚤實以蕃の句に相應す【故蕃―】上の故は、心有て强てするを云、蚤而蕃之は、無理に本の實の早く成て、多き樣にせんとする也、但し此注の上下に缺文有ん歟、一本に以蕃之故に作る、是にては通すべし、

他植者則不然、根拳而土易、其培之也若不過焉則不及焉、（不順其性之反、）

他人の木を植る者は、駝が如くにする事能はず、根を曲めて、土を取換、其培ふ事、若過ざれは、必す不及、木を植るにも、能道理に合ふ事を中とす、其中を過るも惡く中に及ばざるも亦惡し【注】【不順―】上の順木之天と云と相反す、是木の天性に逆ふ者也、反は、うらはらなるを云、そむくと訓ず、

苟有能反是者、則又愛之太恩憂之太勤、（與前相反）且視而暮撫、已去而復顧、

【苟有能―】苟は、苟且苟簡、猶言聊且也、いさゝかに粗忽にする義也、又若如の義も有歟、言心は、若聊

駝が植たる所の木は、若移し易る事あれ共、能活著て大きに茂り、早く實のりて多くあり、他人伺ひ效ふて植れ共、駝に如者なし、

有問之、對曰、橐駝非能使木壽且孳也、以能順木之天、以致其性焉爾、

【孳】本集註、乳化曰―音字、又滓之切、尚書鳥獸孳尾、說文、汲汲生也、其植様を問者あれば、駝答へて云我能木をして長生し孳殖せしむるには非ず、只木の自然に順ふて、其生する性を遂しむると也、人其を少しもいろはずして、自らなるを天と云、致は、至也、來路を推開て、自ら至らしむる義也、史記扁鵲傳、越人我非能生死人也此自當生者、越人能使之起耳、

凡植木之性其本欲舒、其培欲平、其土欲故、其築欲密、既然已、勿動勿慮、去不復顧、其蒔也若子其置也若棄、〔迂曰〕子之非難、棄之爲難、非眞棄之也、所以子之也、要緊在此、則其天者全、而其性得矣、天便是性、易天字便新、

凡そ植木の性其本は曲まずして、舒ん事を欲す、其培ふ事は、ろくに平かならん事を欲す、其土は元の故き土を欲す其根際を築固めて、密にして疎ざらん事を欲す、如此して後に、木を動す事勿れ、案じ慮る事勿れ氣遣すなと也、已に植て其を立去て顧みず其植る時は、子を育ふ如くすべし、其打置事は、弃るか如くにして、再びいろひなぶるべからずと也【注】〔子之難―〕子の如くに秘藏がる事は、仕難き所に非ず、只打弃置ことを成難しとす、弃てなぶらぬは、却て其木を育て養ふて、子の如くにする所以也、右の如くに植置は、其木の自然なる者害ねずして、其木の本性不失、能著て茂り實ると也此段一篇の簡要也【天便是―】天命は、即ち其本性也前には順木之天と云、此には天者全と云、或は其性者全而其天得とも可書を、天者全―と書て、前の天字と易用ふ、便ち文章の新なる事を見ると也、

釋文、瘻、傴疾、せかゞまると讀、今俗にせむしと云仰く事ならぬ病也【隆】は、高也、こんもりと高き貌也【橐駝】山海經曰、號山陽光之山、其獸多橐駝、若流沙日行二百里、負千斤、韻會、外國圖云、大人國、人長一丈五尺、好騎駱駝、陸佃云、駝臥腹不帖地屈足漏明則行千里、背有肉鞍如峯、糞煙直上如狼煙、杜詩、駝背錦模糊謂馬似橐駝也、張華博物志曰、燉煌西渡流沙往外國歩千餘里、中無水、時伏流處人不能知、皆乘橐駝、知水脈遇停不肯行、以足踼地人於踼處掘之得水、又曰、流沙數百里夏日多熱風為行路之患、其風欲至、唯老駝知之、即預鳴而聚之、埋其口於沙中、人以為候、即以氈擁鼻口、其風迅速須臾即過、不爾則至危斃、郭が背橐駝と云馬に似たり、故に其所の人、名付て橐駝と云、橐は、ふくろ也、駝は、今の世にろとうと云物也、背に肉鞍有て橐に似たり、力強くして千斤を負、人の背曲りたる體、此獸に似たり、郭是を聞て、駝と名付る事甚た能我に相當せりと云て、因て其本の名を捨て、自ら亦橐駝と名のる也、

其郷曰豐樂、郷在長安西駝業種樹、

駝が所居の郷里を、豊樂郷と云、長安の都の西にあり、駝善木を植る事を業とす、長安は唐の都する所也是を西京と云、又西都とも云、班固西都賦曰、漢之西都在於雍州、寔曰長安、左據函谷二崤之阻、表以太華終南之山、右界褒斜隴首之險、帶以洪河涇渭之川、

凡長安豪家富人為觀游、及賣果者、皆爭迎取養視、

【豪】英也强也、豪家は、官位ある歷歷の家也、【富】財貨豊かなる人也【養】準也【視】廣韻、比也效也、長安の豪家富人駝が木を植る上手なる事を聞及て、遊覽見物し、其外果子を賣る者、皆我先にと爭ふて、駝を迎へ入て、念比にし、其植へる所に似せ效ふ也、

駝所種樹、或遷徙無不活、且碩茂蚤實以蕃、他植者雖窺伺傚慕、莫能如也、

歟、葛天氏之民歟、（二氏皆太古之時也、）

【酣】説文、酒樂也、徐曰、飲洽也、又熟也、羅山曰、酣飲は、酒たけなはなる盃也、酒を飲、詩を作て、其志を樂む、先生今の世に生ると云共、上古の時の人かと云へり、無懷葛天は、上古の王號也、綱鑑一云、無懷氏、其治世也、以道存生、以德安刑、其民甘食而樂居、懷土而重生、刑有動作、心無好惡、雞犬之音相聞、民至老死、不相往來、命之曰無懷氏之民、又葛天氏、其治世也不言而信、不化而行、蕩蕩乎無能名之、俗以熈熈其作樂也、三人操牛尾、投足以歌、八闋、一曰載民、二曰玄鳥、三曰遂艸木、四曰奮五穀五曰謹天帝、六曰達帝、七曰依地德、八曰總萬物之極、是謂廣樂、淵明此にては無懷葛天の時の民かと云り、又夏月北窓の下に臥て、風に涼しく吹れて、大きに樂み、羲皇上世の人也とも云り、

○種樹郭橐駝傳　柳子厚

〔迂齋曰〕凡事有心則費力、求工則反拙、曲盡種植之妙、非特爲種植作也、

此篇柳文第十七に載、郭橐駝と云者、能木を植る故に、種樹郭橐駝と云、迂齋が題註の意は、凡そ事を爲るに、無心にしてすれは、無勞して好成者也、強ちに有心にしてすれば、力を費して苦勞す、工みに見事ならんとすれば、却て拙く醜し、無心と有心との間に味有べし、此文曲さに木を植る事の妙を盡す、而して只木を植る許りの爲に作るには非ず、民を治むる上の事を説ん爲也、柳文註、孫曰、姓郭、號橐駝、駝、馬類也、背肉似橐、故以名之、黃曰、事有可觸類而長者、聞解牛得養生、問鑄金而得治人爲天下之道、與牧馬何異、牧民之道、以牧羊而知、橐駝傳宜其有爲而作也、橐、音託、駝、徒何切、黃氏日鈔六十、郭橐駝傳、戒煩苛之擾、

郭橐駝、不知始何名、（【橐】音托【駝】音陀）病僂、隆然伏行、有類橐駝者、故鄉人號曰駝、駝聞之曰、甚善、名我固當、因捨其名、亦自謂橐駝云、

郭は、氏也、其名初は何と云つる事を不知、僂を病て腰曲まり背高く成て伏て行【僂】は、柳文作瘻、韓曰

篇、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷云云、簞は、食物を入る器、瓢は、ひさご、飲物を入る器也【屢空】先進篇、子曰、回也其庶乎屢空、屢は、頻數、しきりなる義、さい〳〵貧しく乏しうして、何も無を云【晏如也】白孔六帖云、揚雄家產不過十金、無儋石之儲、晏如也、羅山曰、晏如はやすらかにして、何共思はぬ體也、居所衣食如此貧しけれ共、先生晏如として樂み居る也、

常著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終、

先生平生文章を作て、自ら樂で心を慰む、今世に行はるゝ淵明集十卷あり、詩も文も載せたり詩作り文作て、其志趣を示し、人間の得失に心を不係、頗る樂を以て、自ら其身を終ふ【頗】韻會、差多曰頗多、良久曰頗久、多有曰頗有【懷】其心の中に所思也【得失】富貴を得ると失ふと也、

贊曰、黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴、極其言、茲若人之儔乎、

此傳の贊也、史記には、諸の傳の後に、太史公曰とあり、是贊也、漢書には、傳の後に、贊曰とあり、今此傳も、漢書の體を學べり、後漢書には、論曰、贊曰とあり、是亦傳贊の書樣に不同ある也、但し晉書の本傳には、此贊を不載、註に、贊は、史の評也とあり【黔婁】劉向列女傳曰、魯黔婁妻者、魯黔婁先生之妻也、先生死、曾子哭之畢曰、何以爲諡、其妻曰、先生甘天下之淡味、安天下之卑位、不戚戚於貧賤、不欣欣於富貴、求仁得仁、求義得義、其諡曰康、不亦宜乎【戚戚】說文、慽、憂也、通作戚、論語、小人長戚戚孟子於我心有戚戚焉、憂る義也【汲汲】增韻、不休息貌、又勤急貌、欲する意也、黔婁姓は庾、魯國の賢人也、其云樣は、貧賤にも戚戚たらず、富貴にも汲汲たらず、列女傳には、黔婁が言に非ず、其妻の言也と記せり、今此言を極めて思ふに、五柳先生は、黔婁が輩かと也【若人】の二字、論語公冶長篇に見へたり、かくのごとき人と讀り、

酣觴賦詩、以樂其志、無懷氏民

其如此、或置酒而招之、造飮輒盡、期在必醉、既醉而退、曾不吝
與客同
情去留、

先生天性酒を好む、家貧しければ、常々酒を得る事能はず、親戚舊友其事を知て、酒を調て、先生を招き呼ことあり、先生即ち往て飮で、必ず醉を以て期とす、既に醉ては即ち退出す、必ずしも歸んと云心もなく、亦必しも留らんと云心もなし、只興に乘ずる迄也
【嗜】説文、嗜欲、喜之也、すきこのむ義也【親】親族也
【舊】舊故友達を云【造】詣也、其所に至る也【期】限也
【既醉】毛詩大雅既醉篇云、既醉以酒既飽以德
【吝】注、與客同、説文、吝恨惜也、又悋鄙也、慳也、增韻、俗作悋、通作吝、論語、出納之吝、註、嗇於出納也、やぶさか共、をしむ共讀、しはく、をしむ義、其中にむさぼる意あり、羅山曰、吝惜せざるを、やぶさからずと云也、

環堵蕭然不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也、

禮記儒行篇曰、儒有一畝之宮環堵之室、疏曰、環、謂周廻也、東西南北唯一堵、説文、堵、垣也、五版爲一堵、徐曰、一版、五尺也、註、一丈爲版、五版爲堵疏云、版、廣二尺、一堵之牆、長丈、高一丈、後漢樊英傳、列環堵之中、註、面一堵也、羅山曰、環堵は、方丈の事也、先生居れる所、環堵の中、蕭然とさびしくして、あばらなる家なれば、風をも日をも掩はざる也、史記に、司馬相如が居、徒に四壁立とある類也【褐】韻會、一曰、粗衣徐曰、粗、猶麤也、鄭康成曰、毛布也、正義曰、今夷狄作褐、皆織毛爲之賤者所服、左傳、余與褐之父睨之、杜註、褐、寒賤之人也、孟子、衣褐、註、以毳織之、若今馬衣、前張良傳、老父衣褐、師古曰、褐制若裘、今道士所服、羅山曰、先生の著る物、短き褐衣つゞれの事也、或は毛を以て織とも云り【穿結】うげ破れて、つゞり結べる義也、つゞれを百結衣とも云り、董先生百結衣、子夏之懸鶉衣の類是也、唐書杜甫傳、衣不盡體、常寄食于人と云り、其醉時歌に、杜陵野客人更嗤、被褐短窄鬢如絲云云【簞瓢】論語雍也

て、自ら其傳を書り、是も五柳先生が傳を慕ふて書りと、舊唐書樂天が傳に見へたり、淵明集第五註藝苑雌黄曰、士人言縣令事、多用彭澤五株柳、雖白樂天六帖亦然、以予考之、陶淵明、潯陽柴桑人也、宅邊有五柳樹、因號五柳先生、後爲彭澤令、去家百里、則彭澤未嘗有五柳也、予初論此、人或不然其說、比觀南郭新書云、晋書、陶淵明本傳云、潛少懷高尚、博學善屬文、嘗作五柳先生傳以自況、先生不知何許人、不詳其姓字、宅邊有五柳樹、因以爲號焉、即非彭澤令時所栽、人多於縣令事使五柳誤也、豈所謂先得我心之所同然者歟、茗溪漁隱曰、沈彬詩、陶潛彭澤五株柳、潘岳河陽一縣花、蘇子由詩、指點縣城如掌大、門前五柳正搖春、皆誤用也○萬里居士曰、此篇二段、自首至去留第一段、自環堵至終第二段、

先生不知何許人、亦不詳其姓字、宅邊有五柳樹、因以爲號焉、

萬里曰、先生、陶自云也淵明は、潯陽柴桑里の人也、方輿勝覽二十二、江州部、柴桑山、在德化縣西南九十里、近栗里源、此傳詞を設けて云に因て、何れの所の人なる事を不知と書也、其姓は陶、名は潛、一の名は淵明、字は元亮、此に姓字を詳にせずと云事も、假設て云也、後漢逸民傳に、野王二老者、不知何許人也と云文法也、其宅邊に柳五本あり、因て五柳先生と名付く、淵明が柴桑の宅に五柳あり、彭澤には五柳なし、淵明彭澤縣の令と成に依て、縣令の事に五柳を用るは、誤也と云り、

閑靖少言、不慕榮利、好讀書、不求甚解、每有意會便欣然忘食、

先生人となり、閑かにして言少なし、世間の榮華利達を慕はず、常に好んで書を讀め共、其むつかしき處に至ては、強ちに深く解ほどかん事を不求、すら／＼と通り過、或は義理の心に合ふ事あれば、每々面白く喜びて、食事をも忘る許り也【靖】韻會、安也、又安之也、やすらかなるを云【解】韻說文、判也、廣韻講也、說也、又禮記經解註、解者、分析之名【會】說文、合也【欣】說文笑喜也、

性嗜酒、家貧不能常得、親舊知

蠃之與螟蛉、二豪、諸公子處士也、蜾蠃螟蛉、彼小虫也、言此二人侍ニ我之側一、有レ如ニ此虫一、言ニ見之微小一也、蜾、音果、蠃、音裸

善曰、廣雅、擾擾、亂也【江漢】二水の名、晉書には作ニ江海一文選には、之浮の之字作レ載、五臣註には、無ニ浮字一【註】【言見万物―】呂向が註也、伯倫天地の間、萬物の亂れて有を見るに、大水の中の浮艸、風波に随て、彼方此方へゆらめき寄が如し、何ぞ我眼に懸らんや、前の以ニ天地一爲ニ一朝一と云一段に相應ず【二豪】は、【註】諸公子處士也、向註也【蜾蠃】蜾、音果、蠃、音裸、善曰、隨己而化、猶ニ蜾蠃之變ニ螟蛉一也、法言曰、螟蛉之子、蜾蠃祝曰、類レ我、久則肖レ之矣、速ニ三子之化ニ仲尼一、李軌曰、【螟蛉】桑、蟲也、蜾蠃、蜂蟲、肖、類也、蜂蟲無レ子、取ニ桑蟲一蔽而殪レ之、幽而養レ之、祝曰、類レ我、久則化成ニ蜂蟲一矣、疾速哉、二三子受ニ學仲尼之化一疾也、蜾蠃は、似我蜂也、螟蛉は、桑の蟲也、蜾蠃には無レ子、螟蛉の子を取て養ふて、猶我類我と祝しまじなへば、久して能似る也、今此に所レ云の心は、二蟲共に小蟲也、公子處士の二人、伯倫が側に在を、此蟲の如くに思ふ也、伯倫が志大きに、眼高うして、二豪を甚だ小き也と見ると也、

傳類

韻會、傳又柱戀切、史氏紀ニ載事迹一以傳ニ于世一、亦曰レ傳、諸史列傳是也、古へに事を記すには、年月を編り、春秋魯史の體是を古史と號す、前漢の司馬遷、初めて史記を作て、本紀列傳を分たり、帝王をば本紀とし、臣下をば列傳とす、是を正史と云、其後前後漢書、三國志、晉書、南北史、唐書以下、皆史記の體を學べり、是に因て人人の事を記すを、傳と云也、是又文の一體と成れり、

○五柳先生傳　陶淵明

陶淵明、門栽ニ五柳一、因自著ニ五柳先生傳一、

淵明が事は、上に見へたり、淵明が門前に五柳樹ある故に、自ら五柳先生と號す、而して自ら其傳を書也、凡そ傳を書には、佗人から書事なるに、淵明初めて、自ら書也、是も司馬遷が自叙傳、班固が叙傳の例とも云べきにや、其後唐の白樂天、自ら醉吟先生と號し

曰、下有藉糟語、則作糟可也、諸説に優りて是也、【潄】口をすゝぐ也、今は含み飲ことを云【醪】註濁酒にごりさけ【先生不聽—】李周翰也【自若】本の如く改めぬを云【奮髯】註奮、動、髯、鬚也、羅山曰、濁酒の付たる髯をそらす也、湖月曰、髯をくひそらす也、愚謂く、手を以て撫流す意歟、善曰、漢書曰、朱博遷琅琊齊部舒緩、博奮髯抵几曰、觀齊貌欲以此爲俗耶【踑踞】注展足倚據而坐也、漢書曰、尉佗魋結箕踞、又郭解傳作箕踞、晉史本傳作箕踞、しりうたげすと讀り、又うずい共讀り、兩の足を伸て坐し、手を以て兩の膝を按へて居る也、其形箕に似たる故に、箕踞と云【藉鋪也言動髯—】此の註は、張銑也、各如此諫めつ叱つすれ共、伯倫其異見を不聽、彌々酒壺を捧げ、酒船に承、盃を含み、濁醪を啜り、飲こと自若たり、髯を動し、後に倚、兩足を伸はたけて坐し、麴を枕とし、糟を布て、醉て臥也【無思—】莊子、黃帝無思無慮始知道【陶陶】毛詩、君子——、向曰、和樂貌、何を思ふ事もなく、何を慮る事もなく、其樂陶陶たりと也、

兀然而醉、恍爾而醒、靜聽不聞

雷霆之聲、熟視不見泰山之形、不覺寒暑之切肌、嗜慾之感情、

【兀兀】韻會、不動貌、白樂天詩、所以劉阮輩、終朝醉兀兀、是はゆるがぬ義也、又東坡詩云、醉兀十里溪、是は酒に醉て、ふら〳〵とするを云、動く杌の如なる義也、兀と杌と通ずと云り、然れば兀々は、ゆるぐと、ゆるがぬと兩義也【恍爾】韻會、慌字註、慌惚、不分明也、又作怳、又作恍、ほのかなる義、六臣註文選には作豁爾、ほがらかなる貌、晉書本傳には作怳爾、無正體醉て兀々たり、又悅爾と醒て、うつかりとする也、思ふ事もなく、慮る事もなく、醉ては醒、醒ては又醉、靜にして聽とも、耳雷霆をも不聞、熟視れ共、目泰山をも不見、六臣註には、見字作覩、嗜字作利、本傳亦同、寒熱の肌にきびしく當る事をも覺へず、嗜慾の心に感ずる事をも不知、只醉て萬事を忘却する迄也、

俯觀萬物、擾擾焉如江漢之浮萍、（言見萬物如水中萍艸隨其風波）二豪侍側焉、如蜾

寡君之貴介弟也、司馬相如封禪書曰、因雜搢紳先生之略術、臣瓚曰、縉、赤白色、紳、大帶、應劭風俗通曰、處士者、隱居放言【貴介公子】在位公卿大夫を指て云、介は、大也、貴介は、貴く大なる輩を云公子は、公侯の子を云、春秋、及び左傳、國語、戰國策に多し【搢紳】衣冠裝束して、大なる帶をして、笏をさしはさむ、是衣服の飾也【處士】家に居て有道德者を云也、一說云、官人儒者を指て、搢紳處士と云也註呂向が註也、【聞吾—】銑曰、吾、則先生自稱也、言公子處士、風聞我好酒之聲、議論我所以得失也、羅山曰、劉伶が風と名とを聞て、劉伶が所以を評議する也、愚謂く、風聲は、猶風儀と云んが如し、只風一字の心也、

乃奮袂攘衿、怒目切齒、此公子處士、怒先生好酒

陳說禮法、是非鋒起、說禮經法制、以示先生、言其是非、如劍戟之鋒刃、相競逐而起、

【奮袂—】善曰、北征賦曰、遂奮袂而北征、戰國策、張儀說魏王曰、天下遊士、莫不瞋目切齒註劉良が註也、伯倫が風を聞者、袂を振ひ、襟を攘け、目を怒し、齒ぎしみをして、其酒を飮ばかりにて、無正體と怒ると也【陳說—】註呂延濟が註也【禮經】禮儀常經也、禮法の常に定れる理を云【法制】法式制度也、其作法の限制あるを云、諸人禮法を陳說て、伯倫に示す也、是は諫る方也【其是非】或は放禮にして、心を酒に寓するも是也と云、或は醉狂無正體と非る也、是は毀る方也【劍戟—】劍戟の鋒の尾花の簇る如くに競ひ起るを、鋒起と云、其如くに是非競逐て云也、善曰、春秋感精符曰、禍亂鋒起、又前漢高祖紀、盜賊——、註、或作蜂起、

先生於是方捧甖承槽、銜盃漱醪、先生不聽二人之說、飮酒自若也、醪、濁酒奮髯踑踞、枕麴籍糟、奮、動、髯、鬚也、踑踞、展足倚據而坐也、籍、鋪也、言動髯展足、倚據而坐、旋復枕麴鋪糟而臥

無思無慮、其樂陶陶、

【甖】酒器也、もたいと訓す【糟】五臣註從米、六臣註從木、善曰、劉熙孟子註曰、糟者、齊俗名之如酒糟也、韻會豪韻糟字註、說文、畜獸之食器、又李賀詩、小槽酒滴眞珠紅、一元、湖月、羅山、皆酒船と見る、萬里

註【以天地開闢已來爲一日】文選張銑註也、下同、天地初て開しより以來、幾億萬年の間を、一日とする也【萬歲之期爲少時】萬々年の期限を、暫時とする也、中庸曰、不可須臾離也【扃牖】銑曰、門也、外閉之關曰扃、在墻之窗曰牖【日月爲扃牖】とは、家には、窓より明りを取れば、日月を窓とすと云【八荒】八方の遙かに遠き所を云【庭】家の內にあり、又屋外の地前栽をも云【衢】四辻ちまた也、八荒を以て我庭とし、衢とする也、伯倫志廣大にして、氣槩恣まゝに、宇宙を狹とし、萬物を齊一にする心あれば、如此云也、已に大人と云を以て、其心を可知、

行無轍跡、居無室廬、幕天席地、縱意所如、

善曰、老子曰、善行無轍迹、翰曰、潛隱守愚、時人不見其行迹、人不知所居室、故云無也、專於飲酒、不知其餘事也、青松曰、無轍迹、則無徒可知、無室廬、則不爲身計又可知、天在上、視之爲帷幕、地在下、藉之爲薦席、人の行くには、車馬を用ふ、伯倫は足に任ずる程に、無轍迹也、人の居るには室廬あり、劉伶は、家業の有無を心に不係、我氣に合ば、竹林に入、鹿車に乘て、何くにも居て遊ぶ、是を居無室廬と云也、天を幕とし、地を席として、心の儘に酒を飲て醉也、心の所往は、我思ふまゝ也、

止則操卮執觚、動則挈榼提壺、

挈、執也、卮、觚、榼、壺、皆酒器也

唯酒是務、焉知其餘、

註【卮觚榼壺皆酒器也】何れも皆さかづき也、內榼は、たる也、壺は、つぼ也【操執】は、並にとると讀り【挈】は、ひこづらふと讀、ひつさぐる義、此註の心なれば、とる也【提】は—携、たづさふると訓ず、止り居る時は、手に盃を取、動はたらく時は、榼壺をひつさぐる也、行住坐臥、只酒を飲事を勤て、其餘の事は不知と也【唯酒】論語の字也、翰曰、專於飲酒、不知其餘事也、

有貴介公子、搢紳處士、

介、大也、搢紳、服飾也、處士、有德之稱

聞吾風聲、議其所以、

善曰、左氏傳曰、伯州犂謂鄭皇頡曰、夫子爲王子圍、

○酒德頌

劉伶、字伯倫、沛國人、貌甚醜悴而志氣放曠、以宇宙爲狹、性好酒、常攜酒自隨、使人荷鍤從之、云、死便埋我、故著此頌、頌酒德之美也、

晉の劉伶、酒を好て、酒の德を譽て、此頌を著はす〔注〕【沛國】綱鑑註、今徐州沛縣、劉伯倫形甚だ醜く瘦て、其志氣は放曠と大きに廣く、天地の間を以て狹しとす天性酒を嗜む、常に酒を攜へて、自ら身に從へ、一人に鍤を荷はせて後に隨ふ、云、我死せば、即ち其所に埋めと、是程の好物なる故に、此頌を著す○萬里曰、此篇四段、自篇首至其餘第一段、自有貴至鋒起第二段、自先生至陶陶第三段、自兀然至末第四段○方秋崖曰、前輩以文名、政不在多、伯倫只酒德一頌無他文、孤山處士所以傳後世、僅月香水影兩句耳、

劉伯倫

晉書列傳十九、劉伶、字伯倫、沛國人也、身長六尺、容貌甚陋、放情與志、常以細宇宙齊萬物爲心、澹默少言、不妄交游、與阮籍嵇康相遇、欣然神解、攜手入林、初不以家產有無介意、常乘鹿車、攜一壺酒、使人荷鍤而隨之、謂曰、死便埋我、其遺形骸如此、嘗渴甚求酒於其妻、妻捐酒毀器、涕泣諫曰、君酒太過、非攝生之道、必宜斷之、伶曰、善、我不能自禁、惟當祝鬼神自誓耳、便可具酒肉、妻從之、伶跪祝曰、天生劉伶、以酒爲名、一飲一斛、五斗解酲、婦兒之言、愼不可聽、仍引酒御肉、隗然復醉、嘗醉與俗人相忤、其人攘袂奮拳而往、伶徐曰、雞肋不足以安尊拳、其人笑而止、伶雖陶兀昏放、而機應不差、未嘗厝意文翰、惟著酒德頌一篇、嘗爲建威參軍、泰始初對策、盛言無爲之化、時輩皆以高第得調、伶獨以無用罷、竟以壽終○同卷嵇康傳曰、阮籍、山濤、向秀、劉伶、籍兄子咸、王戎、嵇康、爲竹林之游、世所謂竹林七賢也、

有大人先生、假託此辭、

伯倫自ら我身を稱する也、大人も、先生も、皆尊ひ稱するの辭〔注〕假に此辭を設て、かこつけ云也、

以天地爲一朝、萬期爲須臾、日月爲扃牖、八荒爲庭衢、以天地開闢已來爲一日、萬歲之期爲少時、言其志廣大也、

の起る事、山の高きが如く、日の初て升るが如く、彌〻進て、萬福來り當る也註唐の盛德ある故に、萬福を受る事を論ずと也、

論作頌之文、

能令大君、聲容沄沄、不在斯文、

易師卦、大君有命【大君】萬里曰、謂天子、靑松曰、謂肅宗、使是君聲名容象、如水沄沄、流轉而無涯、發揚敷暢、獨不在斯頌之文乎【沄沄】水轉流貌、張平子賦、水——涌濤、羅山曰、水流れて不止貌、肅宗の功名を、沄沄と永く傳ん事は、此頌に不在やと云り【聲容】は、芳聲の形容也、頌は、盛德の形容を譽れば、此に容字を用ひたり、愚按するに、禮記祭義篇曰、肅然必有聞乎其容聲、陳澔註、容聲、擧動容止之聲也、聞とあれば、聲字を重く見るべし、此頌の聲容も、名聲の義なれば、亦聲字重し、其聲を聞ば、其儀容を想像るゝ者なれば、名聲を云んとて、容字を付たる歟、前二說細味、則大不佳、

湘江東西、中直浯溪、石崖天齊、

論浯溪之石、

【湘江】弔屈原賦の註にあり【浯溪】在永州初陽縣南五里、流入湘江、水淸石峻、唐上元中、容管經略使元結家焉、陳衍題浯溪圖云、元氏始命之意、因水以爲浯溪、因山以爲峿山、作屋以爲𢈀亭、三吾之稱、我所自也、制字從水與山广、我所命也、三者之目、皆自吾焉、我所擅而有也、句解曰、其中直有浯溪焉、萬里曰、史記直樗里子墓之直也、羅山曰、浯溪は、湘江の東西の中にあり、浯溪の石壁高ふして、天と齊し、此石に此頌を刻み付る也、

可磨可鐫、刊此頌焉、何千萬年、

論刊頌之可永傳於後世、

此石磨くべく彫べし、今此頌を刻めり、後世に傳らん事、何ぞ只幾千萬年のみならんや、中興の功業の、久しく朽まじき事を云也、張文潛磨崖碑後詩水部胷中星斗文、太師筆下龍蛇字、水部は、次山が官也、太師は、顏眞卿を云也、又黃山谷詩云、春風吹船著浯溪、扶藜上讀中興碑、平生半世看墨本、摩挲石刻鬢如絲、

天地も開闢する様也、白樂天が長恨歌に、天旋地轉回龍馭と作るも、此義也【妖災】は、妖孽禍災皆わざはひ也【瑞慶】は、祥瑞嘉慶、皆めでたき、さいはひ也、言心は、天下の禍を蠲き除ふて、目出度到來する也、老杜洗兵馬行云、成王功大心轉小、郭相謀深古來少、司徒淸鑒懸明鏡、尙書氣與秋天杳、二三豪俊爲時出、整頓乾坤濟時了、又曰、寸地尺天皆入貢、奇祥異瑞爭來送、

兇徒逆儔、涵濡天休、死生堪羞、

歴敍中興恢復之後、兇逆可羞、

【兇徒逆儔】は、祿山思明が類を云【徒】も【儔】も、皆ともがらと讀り【涵濡】ひたし、うるほふ【天休】天のよき道也、案ずるに尙書湯誥曰、各守爾典、以承天休、蔡註、承天之休命也、又左傳宣公三年、用能協于上下、以承天休、杜預註、上下和而受天祐、句解曰、涵育濡沐唐天子之休德、天のさいはひを以て、肅宗の恩澤に比する也、逆賊の與黨、皆唐の天子の恩澤に涵し濡されて、張本人許り被誅、其劫かされて從ひ、或は心ならずして、賊に降參する者は被赦、天休に涵濡さるゝの義也、賊徒に隨ふて、戰ひ死する者も、或は生殘る者も、皆羞るに堪たり、骸の上にも耻を被り、生て無面目也㊟歷く肅宗中興して、天下を恢にし復するの後、逆徒自ら可耻事を敍ると也、

功勞位尊、忠烈名存、澤流子孫、

論功烈之可存、

勳功苦勞ある者は、官位を進られて尊く成、忠烈ある者は、死後に贈封贈官せらる、名傳り子孫恩を蒙る【烈】字彙、功之光且盛者曰—【功勞】は、郭子儀、李光弼、顏眞卿が類、今度の亂を治めたる輩也【忠烈】は、顏杲卿、許遠、張巡が類、賊と戰ひ、擒れて降せず、節義を守て死して、名を殘せる輩也㊟青松曰忠而烈者、其名萬古常存、

盛德之興、山高日昇、萬福是膺、

論唐盛德之福、

詩天保篇曰、如月之恒、如日之升、如南山之壽、青松曰、唐有盛德、復爾中興、如山之高而不可及、如日之升而不可躋、萬有之福、由是膺受、羅山曰、中興盛德

遂大潰、癸卯復京師、慶緒奔于陝郡、十月廣平王俶郭子儀等、及慶緒戰于新店敗之、克陝郡、壬子復東京、至德二年正月安慶緒其父祿山を殺して代る、又自ら大燕皇帝と號す、九月儲王俶、及び郭子儀諸國の軍勢を引具して、安慶緒を討、大に勝て、長安を取返す、十月又戰て慶緒を敗り、洛陽を復す、慶緒逃て河北に奔る、此に撫戎と云は是也【撫】字彙持也、循也、慰勉也、今は人衆を總て、なで安んじて、義戰をつとめしむる心也、【蕩攘】は、はらひしりぞくる也【群兇】むらがれる兇徒也、祿山、慶緒、史思明が類也、其後乾元二年三月、慶緒思明が爲に殺さる、思明亦自ら大燕皇帝と稱す、上元二年三月、史朝義其父思明を弑す、廣德元年春、朝義李懷仙が爲に被追て、自ら縊て死す然れば祿山、思明父子皆無程亡びぬ、老杜詩云、胡虜潛京縣、官軍擁賊壕、鼎魚猶假息、穴蟻欲何逃、又云、元帥歸龍種、司空握豹韜、又云、兵氣回飛鳥、威聲沒巨鼇、又云、天步艱方盡、時和運更遭、誰云遺毒螫已是沃腥臊、

復復指期、曾不踰時、有國無之、

事文類別集十八、中興頌跋曰、復復指期、或曰、以復西京故曰復復、非也、此兩字出漢書、按匡衡傳云、上扶又切、下扶自切【復復指期】又復經營恢復指定其時、復、上富又切、下音伏【曾不踰時】句解曰、曾不踰越所期之時【有國―】蓋自古有國之君、無如此成功之捷者、是は東京を復し、西京を復するを以て、復復と云には非ず、又復すると云義也、時刻を指たる如くに、兩京を取返すを云、昔より國を有ちて、如此早く功を成事は無之と也、

事有至難、宗廟再安、二聖重歡、

句解曰、天下有至難之事、於此可見、萬里曰、【至難】斥言下面宗廟二聖二句也、羅山曰、祿山が亂を平ぐるは、至下の至難也、唐の宗廟已に破れて、再び安く、玄宗肅宗已に遠く相別れ、今又蜀より回り、靈武より入て、父子相逢は、重て歡喜する也、

地闢天開、蠲除妖災、瑞慶大來、

句解曰、當其叛亂、天地閉矣、今天地重爲之開闢、羅山曰、亂の時には、天地塞る樣也しが、亂平ひで後は、

祿山、又閑厩使任沙門叛降祿山、此外范陽の將何千年も、亂を起して祿山に從ふ、又陳希烈、張均、張垍、令狐潮等、皆祿山に降る、是皆奉賊の臣也【竄】隱れ伏する也【奉】は、尊奉する也、

天將昌唐、繄睨我皇、匹馬北方、

靑松曰、天未絕唐之祚、乃欲昌我唐室【睨】斜視也、天眷顧我肅宗、玄宗幸蜀、肅宗獨留討賊、匹馬自北方而還、祿山都を攻破り、自ら大燕皇帝と稱し、史思明を大將として、諸方を打取、然るに天將に唐を盛にせんとする故に、天道より我皇を眷み愛し、官兵を催して、北方より出來る【我皇】は、肅宗也【北方】は、靈武鳳翔などを指なるべし、

獨立一呼、千麾萬旟、戎卒前驅、

肅宗獨り靈武に立、隴西の節度副使李嗣業に命じて、兵五千に將として、行在に赴かしむ、嗣業綏德府の折衝段秀實と共に行在に詣る、肅宗又安西の行軍司馬李栖筠に命じて、兵を召、栖筠兵七千を發して遣はす、平原の太守、河北の採訪使顏眞卿、表を靈武に達す、肅宗眞卿を以て、工部尙書御史大夫とし、并に赦書を致して報之、眞卿是を諸郡に頒ち、又河南江惟に頒つ、是に因て諸道始て肅宗の靈武に在て、卽位し給ふ事を知、國に殉ふの心彌々堅し、又郭子儀を以て靈武の長史とし、李光弼を北郡の留守とし、並に同平章事とす、子儀等兵五萬を將として、河北より靈武に至る、靈武の軍威始て盛也、人皆天下を興復するの望あり、又回紇吐蕃使を遣して、助けて賊を討ん事を請、肅宗一たび呼はり給へば、千麾萬旟悉くに集まり、兵卒前驅すると也【麾】も【旟】も旌旗也【戎卒】は、軍兵也【前驅】は、先手也、さきがけと讀り、

我師其東、儲皇撫戎、蕩攘羣兇、

【我師】は、唐の官軍也【其東】は、東に向て賊を討也【儲皇】は、まうけのきみと讀り、太子を云、今は肅宗の太子廣平郡王也名は俶、後に世を繼で、代宗と申す、唐書肅宗紀曰、至德元載九月、以廣平王俶爲天下兵馬元帥、李泌爲侍謀軍國元帥長史、二載九月、以俶爲元帥、郭子儀副之、以朔方、安西、回紇、南蠻、大食兵、討安慶緒、戰于灃水、自午至酉、斬首六萬級、賊

噫-嘻前-朝孽-臣姦-驕、爲レ昏爲レ妖、

此謂二孽臣一、

【噫嘻】は、嘆息の辭也【前朝】は、玄宗の天寶年中を指、前の朝廷也【孽臣】は、李林甫を云、林甫宰相と成て、君を欺き、民を苦む、機嫌よく笑顔あるかと思へば、人を讒殺す、故に口に蜜あり、腹に有レ劍と云也、賢を妬み、能を嫉み、諫言の路を絶て、君の聰明を蔽ひ、祿山を勸め、玄宗の三子を殺しめ、貴臣を逐、天下の亂を養ふ、如レ此姦しく驕て、世を昏まし、人を害ふ、是を爲レ昏爲レ妖と云【妖】は、怪き妖物也、又楊國忠相と成て、威を張、上を罔、公卿をば、頤にて指、氣にて使ふ、鮮于仲通を進めて、劍南の師を喪ふ事二十萬人、大に邊患を開き、屢祿山を激して叛せしめ、天下の亂を從湧する類也、

邊-將騁レ兵、毒-亂國-經、羣-生失レ寧、

此謂二逆臣一、

【邊將】は、邊塞の大將也、祿山媚諛ふて、玄宗の寵愛を受、范陽の節度使と成、范陽は、北方の所の名也、北國道の大將と成て、一方の固めと成故に、邊將と云、祿山十年許り謀叛の企有けるが、玄宗の重恩を蒙る故に、崩御の後謀反せんと思ふ處に、楊國忠其外人人頻りに祿山が事を申に依て、天寶十四年十五萬の兵を起し、都へ攻入、國家の法を破り亂て、天下の群生安き事なし【國經】は、國法也【羣生】は、一切の人を云、萬里曰、肆二其毒一以紊二亂君臣之大經一自二祿山反一蹂二踐河北二十四郡一以至レ陷二兩京一民生不レ寧矣【逆臣】は、安祿山を云、叛逆の臣也唐書逆臣傳に、祿山を載たり、

大-駕南-巡、百-僚竄レ身、奉レ賊稱レ臣、

此謂二從レ叛之臣一、

【大駕】は、天子の車駕也【南巡】は、玄宗蜀へ没落せるを云、蜀は長安より西南に當れり、國巡りすと云樣に、南巡と書り、次山其時の人なれば、出奔と不レ云して、南巡と云、上に幸レ蜀と云が如し【百僚】は、百官也、玄宗の群臣、亂に逢て身を隱し、或は賊に降參して臣と成【賊】は、祿山を云也、唐書玄宗紀曰、河南尹達奚珣叛降二祿山一、又蕃將火拔歸仁執二哥舒翰一叛降二于

明-年皇-帝移ス軍ヲ鳳翔ニ、（天子立、則稱二皇帝一、）其ノ年
復二兩-京一、上-皇還ル京-師ニ、（天子退レ位、則稱二上皇一、）

天寶十五年は、即ち肅宗の至德元年也、此に明年と云は、至德二年也、此に皇帝と云は、肅宗也、綱目、至德二年至二鳳翔一、旬日隴右河西安西西域之兵皆會、江淮庸調亦至、長安人聞二車駕至一、從二賊中一自拔而來者、日夜不レ絕云云、去年扶風を改て、鳳翔とす、祿山が子安慶緒、父を弑して自立す、肅宗鳳翔に至りしかば、諸方の兵共多集れり、又郭子儀李光弼等、謀を廻らし攻戰ふ、慶緒も亦遂に亡びぬ、又今年兩京を復す【復】は、取返す義也、上皇蜀より京師に還る、綱目、至德二年十二月、上皇還二西京一【上皇】は、玄宗也、天子の位をすべりて、院と成給ふを、上皇と申也、蜀より歸て後、興慶宮に居給ふ、後西内の甘露殿に移る、年七十八にて、神龍殿にて崩御し給ふ、

於-戲前-代ノ帝-王、有ル二盛-德大-業一者、
必見ハル二於歌-頌一、（前代帝王、有レ德有レ功者、見二於歌頌一、）

【於戲】は、嘆する辭也、詳に韻會に見へたり、帝王の盛なる德あり、大なる功業ある者は、必ず歌頌に現れて、名譽を末代に殘す也、商頌に、湯王の德を著し、周頌に、文王武王の德を著す類也、

若キレ今ノ歌-頌大-業、刻ム二之ヲ金-石一、（今日無二盛德一、有二大業一、而見二於歌頌一、）
非レ老ルニ二於文-學一、其レ誰カ宜キレ爲ル二頌ヲ一
曰、

【今】は、肅宗の時を云也、祿山が亂を平げて、唐の世を中興するは、大なる功業也、是を金石に刻て、後代に傳へんは、文學に老たる者に非んば、誰かすべきやと、次山自ら我にて無はと云也【註】無レ德して有レ業とは、玄宗よりの讓を受ざる前に、肅宗自ら即位するは、無二盛德一也、され共亂を平げて中興するは、大業也、此大業を歌頌すると也○梅花無盡藏曰、此篇九段、自レ首至レ爲レ妖第一段、自二邊將一至二失寧一第二段、自二大駕一至レ稱レ臣第三段、自二天將一至二堪羞一第四段、自二功勞一至二子孫一第五段、自二盛德一至二是膺一第六段、自二能分一至二斯文一第七段、自二湘江一至二天齊一第八段、自二可磨一至レ末第九段、

者別館、使還言曰、臣幾死、冬十一月反范陽、詭言奉密詔誅楊國忠、騰榜郡縣、兵凡十五萬、號二十萬云云凡七日反書聞、帝方在華清宮、中外失色、車駕還京師云云、

明年陷長安、天子幸蜀、（唐明皇）**太子即位於靈武、**（靈武、乃靈州、肅宗不受命於父而自立、與簒位同、）

玄宗本紀、天寶十五載六月、祿山陷潼關、甲午詔親征、京兆尹崔光遠爲西京留守、招討處置使、丙申行在望賢宮、丁酉次馬嵬、左龍武大將軍陳玄禮殺楊國忠、賜貴妃楊氏死、巳亥祿山陷京師、七月次普安郡、丁卯皇太子爲天下兵馬元帥、都統朔方河東河北平盧節度使、庚午次巴西郡、庚辰次蜀郡、通鑑曰、上將發馬嵬、父老皆遮道請留、上爲之按轡久之、乃命太子於後宣慰父老、父老因曰、至尊既不敢留、某等願帥子弟從殿下、東破賊、取長安、須臾聚至數千人、太子涕泣、跋馬欲西、建寧王倓與李輔國執鞚諫曰、逆胡犯闕、四海分崩、不因人情、何以興復、今殿下從至尊入蜀、若賊兵燒絕棧道、則中原之地、拱手授賊矣、不如收西北守邊之兵、召郭李河北、與之併力、東克復二京、削平四海、以逆至尊、豈非孝之大者乎、父老共擁太子馬不得行、上總轡待太子、久不至、使人偵之、還白狀、上曰、天也、乃命分後軍二千人、及飛龍厩馬從太子、且諭將士曰、太子仁孝、可奉宗廟、汝曹善輔佐之、云云、太子至靈武、裴冕杜鴻漸等、上太子牋、請遵馬嵬之命、即皇帝位、太子不許、牋五上、太子乃許之、八月癸巳、太子即皇帝位于靈武、群臣舞踏、上流涕歔欷、赦天下、改元至德、祿山攻入て洛陽を取、又長安を取、玄宗俄に蜀へ落給ふ、逃て出らるゝを此に幸すと云事は、次山其世の臣なれば、出奔と不云して、蜀へ行幸なると也、註に【明皇】と有は、即ち玄宗也、【太子】は、肅宗也、玄宗蜀の路次より、肅宗を返して、兵を集て討と云り、未だ位をば不讓、而るに肅宗自ら即位す【靈武】は、靈州也、肅宗父より不受位して、自ら帝と成れば、位を奪へると異ならずと也、通鑑綱目、太子即位、尊帝爲上皇天帝、華陽范氏曰、肅宗以太子討賊、遂自稱帝、此則太子叛父、何以討祿山也、致堂胡氏曰、玄宗既有傳位命、太子非眞叛也、其失在玄宗命不亟行、而裴冕諸人急於榮貴、是以致此咎也、

耳、有司得子是賴、果擢上第、復舉制科、會天下亂、沈浮人間、國子司業蘇源明見肅宗、問天下士、薦結可用、時史思明攻河陽、帝將幸河東、召結詣京師、問所欲言、結自以始見軒階、拘忌諱恐、言不悉情、乃上時議三篇、擢右金吾兵曹參軍、攝監察御史、爲山東西道節度參謀、募義士於唐鄧汝蔡、降劇賊五千、瘞戰死露骨於泌南、史思明亂帝將親征、結建言賊銳不可與爭、宜折以謀、帝善之、因命發宛葉控賊南鋒、結屯泌陽、守險全十五城、以討賊功、遷監察御史裏行、會代宗立、固辭丐侍親歸樊上、授著作郎、益著書作自釋曰河南元氏望也、結元子名也、次山結字也、世業載國史、世系在家譜、少居商餘山、著元子十篇、故以元子爲稱、天下兵興、逃亂入猗玕洞、始稱猗玕子、後家瀼濱、乃自稱浪士、及有官、人以爲浪者亦漫爲官乎、漫郎既客樊上、漫遂顯、樊左右皆漁者、少長相戲、更曰聱叟、彼誚以聱者、爲其不相從聽、不相鉤加、帶笭箸而盡船、獨聱齖而揮車、久之拜道州刺史、結爲民營舍給田、免徭役、流亡歸者萬餘、進授容管經略使、自諭蠻豪、綏定八州、會母喪、人皆詣節度府、節度府請留、加左金吾衛將軍、樂其致、至立石頌德、能還京師、卒年五十、贈禮部侍郎、

天寶十四年 玄宗年號 安祿山陷洛陽、

唐書玄宗本紀曰、天寶十四歲十一月、安祿山反、陷河北諸郡、十二月祿山陷靈昌、陷陳留、陷榮陽、丙申封常清、及安祿山戰于罌子谷敗績、丁酉陷東京云云【天寶】は、玄宗の年號也【陷】は、攻取義也【洛陽】即ち東京也、此下にある長安は、西京也、西都と云も、京師と云も、皆長安の事也、東京西京を、兩京と云也【安祿山】唐書列傳百五十云、營州柳城胡也、本姓康、母阿史德爲覡居突厥中、禱子於軋犖山、虜所謂鬪戰神者、既而妊、及生有光照穹廬、野獸盡鳴、望氣者言其祥、范陽節度使張仁愿遣搜廬帳、欲盡殺之、匿而免、母以神所命、遂字軋犖山、少孤隨母嫁虜將安延偃、乃冒姓安、更名祿山、及長忮忍多智、善億測人情、天寶元年、以平盧爲節度、祿山爲之使、兼柳城太守、押兩蕃渤海黑水四府經略使、明年入朝、奏對稱旨、進驃騎大將軍、又明年代裴寬爲范陽節度、河北採訪使、仍領平盧軍、十四載、帝賜書曰、爲卿別治一湯、可會、十月朕待卿華清宮、使至、祿山踞牀曰、天子安穩否、乃送使

也、次山が此頌は、春秋魯史の筆法を以て、詞を婉曲して譏諷を含り直に不指云して、辭を曲て中に譏を含を、婉辭と云、是孔子春秋を記し給ふ法也、左氏傳の序に見へたり、但し今所云は、玄宗蜀へ落て行と云共、未だ位を肅宗に不讓、然るに肅宗自ら恣まゝに祿山か亂に乘じて、靈武にして即位せらる、然れば祿山が謀反に非ずして、肅宗の謀反也と云心を以て、頌とは題すれ共、底心は譏れりと也、猶後に見へたり、其後の詩人、又此義を發明す、此碑は、即ち肅宗の罪案也、罪科を書付たる目安を、罪案と云也、此頌を石に雕、磨崖に立磨崖碑と云磨崖は浯溪にあり、統譜、范成大、字至能、呉縣人、紹興中進士、隆興中出使金國、竭節盡忠、累官參知政事、後制置四川、知明州、帥金陵、以資政殿大學士奉祠、成大素有文名、尤工於詩、所著有石湖集、攬轡錄、驂鸞錄、虞衡志、呉船錄、嘗題中興碑詩後云、頌者、美盛德之形容、以其成功、告於神明者也、商周魯之遺篇、可以槩見、今次山乃以魯史筆法、婉辭含譏、蓋之而章、後來詞人復發明呈露、則磨崖之碑、乃一罪案、何頌之有、竊以爲未安、題五十六字、刻之石傍、與來者共商略之云、三頌遺音和者希、丰容寧有剌譏辭、絶憐元子春秋法、卻寓唐家宗廟詩、歌詠當諧琴搏拊、筆書自管璧瑕疵、紛々健筆剛題破、從此磨崖不是碑、○歐陽公跋唐中興頌碑云、右大唐中興頌、元結撰、顏眞卿書、書字尤奇偉而文辭古雅、世多模以黃絹爲圖障、碑在永州磨崖石而刻之、模打既多、石亦殘闕、今世人所傳字畫完好者、多是傳模補足、非其眞者、此本得自故西京留臺御史李建中家、蓋十年前崖石眞本也、尤難得爾○方輿勝覽二十五、湖南路九州之中、永州部、浯溪、在祁陽縣南五里、流入湘江、水淸石峻、唐上元中、容管經略使元結家焉、結作大唐中興頌、顏眞卿大書刻于此崖、結又爲唔臺唐亭石室諸銘○萬里曰、此序二段、自首至京師第一段、自於戲至末第二段、

元次山

唐書列傳六十八、元結、後魏常山王遵十五代孫、字次山、武昌人魯山令德秀族弟、安祿山反、結曾祖仁基召結戒曰、而曹逢世多故、不得自安山林、勉樹名節、無近羞辱云、結少不羈、十七乃折節向學事德秀、天寶十二載擧進士、禮部侍郎陽俊見其文曰、一第慁子

也、皆養生家の引導の法也、華佗が五禽の戲の如し【煦】氣を吹て温むる也【嘘】吹也【呼】息をつく也【吸】息をすふ也、言心は、偃仰屈伸する事如彭祖、煦嘘呼吸する事喬松が如くにして、仙法を學び、高く遠く世俗を離れ絶んや、倘び慕ふに不足也、

詩曰、濟濟多士、文王以寧、【詩】文王之什云、濟濟、威儀之盛貌、多士、衆賢也、言濟濟之賢、以佐文王、此文王之所以安寧、○以上論臣主之相得如此、引援毛詩證結、尤有斷案、

蓋信乎其以寧也、

向曰、寧、安也、言此衆賢、文王得之以安、今信此言可以安也、言心は、威儀盛なる諸の賢人、文王を佐く、文王を得て安寧也【以上論ー】此より上は、君臣相得て後に、太平を成こと如此、毛詩を引て證し、結び括る、尤も斷案ありと也、斷案は、公事訴訟を決斷して、案驗とて推驗る也、又公事を聽て、其案驗を書付るを、公案と云、律に出たり【信乎ー】詩に所云信なる哉、如此すれば、必ず其安寧也、

○大唐中興頌

此篇句少意多、論盛衰興廢於數言之中、每三句一換韻、又是一體、前三句謂孽臣、次三句逆臣、又三句言降賊之臣、然後一轉數句論恢復中興之事、又三句論兇逆之可羞、又三句論功臣之世澤、又三句論王家盛德之福、然後數句論作頌刊頌之可傳、後來詞人留題者各有體、獨范石湖謂頌者、美盛德之形容、元次山以晉史筆法、婉辭以含譏、後詞人又發明之、則是碑乃一罪案耳、

唐の天寶十四年、安祿山亂を起して長安に入、玄宗蒙塵して蜀に赴く、太子亨兵を起し、位に即て亂を撥む、肅宗是也、唐已に覆沒するを、肅宗中興するに因て、元結頌を作て頌する也【註】此篇句少して意多し、數言の内に、世の盛衰興廢を論ず、三句每に一たび韻を換たり、又是文の一體也、前の三句は孽臣を云、孽は、わざはいと讀り、次の三句は逆臣を云、又次の三句は、賊に降參する臣を云、其次三轉の數句は、肅宗の國家を恢にし復して、中興する事を論ず、又其次の三句は、兇徒逆賊の可恥事を論ず、又其次の三句は、此度唐の中興の臣下の二心無して、賊に從はず、唐の恩を代々可受事を論ず、又次の三句は、唐室の帝王盛德の福を論す、其後の數句は、此頌を作り、石に雕て、世に可傳事を論ずる也、後來詩人文人、此頌を題して詞を留むる者、各其體あり、然るに獨り宋の石湖の范至能が云、頌は、本盛德のありさまを稱美する者

を云【恬淡―】心安靜にして無欲なるを、恬淡と云、心を著ず、手を動さずして、自然に治まるを、無爲之道と云、無爲の境界に安んじ樂しむと也、是皆老莊の道也、老子經曰、功成名遂、百姓皆曰我自然、又曰、人法地、地法天、天法道、道法自然、又曰、爲無爲則無不治、又曰、道常無爲而無不爲、又曰、上德無爲而無以爲、又曰、爲無爲事無事、

休徵自至、壽考無疆、雍容垂拱、永永萬年、

濟曰、雍容、閑和貌、言天子靜思乃閑和、垂衣拱手、天下自治、祿福萬年也、永、長也、善曰、尙書武成曰、垂拱而天下治【休徵】句解曰、洪範所謂休徵之類自至、而六氣百物皆順、尙書洪範曰、休徵曰肅時雨若、曰乂時暘若、曰晳時燠若、曰謀時寒若、曰聖時風若、註、休、美也、徵、驗也、めでたきしるし也【壽考無疆】詩國風七月篇、稱彼兕觥萬壽無疆、小雅天保篇、君曰卜爾、萬壽無疆、南山有臺篇、樂只君子、萬壽無疆、楚茨篇、報以介福萬壽無疆【垂拱】衣裳を垂、手を拱く也、拱は、叉手也、垂衣裳而天下治は、黄帝の事也、垂拱而天下治は、武王亂を撥るより後の事也、無爲而治は、舜の事也【萬年】國風鳲鳩篇、正是四國胡不萬年、言心は、天下恩德に感化し、自然無爲にして、瑞相至り現はれ、天子の壽考限りなく、其貌閑に和らぎ、垂拱して永く世を傳る事萬年也、

何必偃仰、屈信若彭祖、呴噓呼吸如喬松、眇然絶俗離世哉、

何必

羨彭祖七百之壽、喬松千年之仙、言不足尙也、

【仰】漢書作卬【屈】漢書及六臣註文選、作詘、師古曰、信、讀曰伸【呴噓】音吁虛、師古曰、皆開口出氣也【喬】漢書作僑、善曰、莊子曰、吹噓呼吸、吐故納新、熊經鳥伸、爲壽而已矣、彭祖、壽考者之所好也、漢書註如淳曰、五帝紀、彭祖、堯舜時人、列仙傳、彭祖、殷大夫也、歷夏至商末、年七百、又曰、王子喬好吹笙、道人浮丘公接、以上喬山、赤松子者、神農時雨師也、至崑崙山、常止西王母石室中【眇然】師古曰、高遠之意也【偃】伏也、のえふす、うつぶしに臥也【仰】あふぐ、あふのく也【屈】手足をかゞむる也【信】手足をのぶる

【如】漢書作若、濟曰、胡、曷、皆何也、如此君臣道合ふて、互に其意を得ば、何の禁制する事か止ざらん、何の命令する事が行はれざらんと也、

化溢四表、橫被無窮、遐夷貢獻、萬祥必臻、

【化】德―也【四表】書堯典、光被四表、格于上下、註、表外也、四海之外也、良曰、化滿四方、被于無窮、而遠方蠻夷、皈我君德、以貢獻土物、而萬善必至也、漢書、必作畢、臻作溱、註曰、溱與臻同、云心は、上の如なれば、其化四海の外に溢れ流れ、橫に無窮はての處迄に蒙り、遠き夷狄貢し獻つり、萬づの吉祥必ず現れ至ると也、

是以聖主不徧窺望而視已明、不殫傾耳而聽已聰、

漢書作聖王、翰曰、言賢臣爲君耳目、故君不徧盡視聽、己聰明矣、殫盡也、是を以て聖主は、遍く盡くに大小事を伺ひ見盡くに耳を傾け聞ざれ共、賢臣君の耳目として、萬事を埒明置故に、君の視る事は已に明かに、聽事は已に聰しと也、

恩從祥風翺、德與和氣游、太平之責塞、優游之望得、

善曰、爲君之道、冀太平而優游、今已太平、是責塞也、今已優游、是望得也、史記、泄公曰、今王已出吾責塞、尙書大傳曰、周公作樂、優游二年、呂向曰、天子恩德、與祥風和氣、翺游於四方、則太平之理、求充於天下、人人乃得優游之望也、責、求也、塞、充也、さいはひの風、やわらげる氣は、皆太平瑞相の物也、君の恩祥、風に從て現れ飄り、德和氣と共に浮み游ぶ、太平の求め克優游安樂の望得ると也、責を充るを塞と云、【優游】喜雨亭記の解にあり、

遵遊自然之勢、恬淡無爲之場、

銑曰、遵、法、場境也、言法自然之道、致心恬淡之義、游於無爲之境、以治其身而天下正也、善曰、莊子曰、夫恬淡寂寞、虛無無爲、此天地之平、而道德之至【恬淡】恬、安也、靜也、莊子以―養智、淡、說文、薄味也、【遵游自然―】は、天然自ら具はる理勢に遵ふて行ふ

逢門、善服射者也、呉越春秋、陳晋曰、黄帝作弓、後有楚狐父、以其道傳羿、羿傳逢蒙、漢書曰、黄帝鼎成龍迎、黄帝上騎、小臣持龍髯、龍髯拔墮、墮黄帝之弓、百姓仰望、黄帝龍髯號、故名其弓曰烏號、此段伯牙遞鍾の琴を調て、其音韻和合し、逢門子烏號の弓を引て矢必ず中ると云共、亦未だ上の聖君賢臣相和調するに喩るに不足事を云、上手が善器物を操れば、彌能者なれ共、其も此君臣には不及と也、

故聖主必待賢臣而弘功業、俊士亦俟明主以顯其德、

良曰、俟待也、此故に聖君は、必賢臣を得て、功業を弘め、英俊の臣も、亦必ず君を待て才德を顯はすと也【功】は勳―【業】は事―也、

上下俱欲、驩然交欣、千載一會、論說無疑、

翰曰、上下、謂君臣也、言君臣相欲也、向曰、君臣之道不疑、雖左右論說其非者不信也【一會】漢書作壹合、靑松曰、千載之間、方得一會合、相與論說皆無疑倩而彼此交孚也、君臣所思を同じふして、互に交ふ相喜ぶ、其上下相合て能こと、尤も希代にして、千歳の間に、只一度ある程の會合也、されば君臣論じ說こと、互に眞實に思て、少も疑ふ事なき也、案ずるに呂向が左右論說の義、蓋し誤也、靑松の辭甚だ好、

翼乎如鴻毛遇順風、沛乎若巨魚縱大壑、

銑曰、言君臣道合如鴻鵠遇風、一擧千里、如大魚游縱於大川、得其性也、翼、飛疾貌、沛、大水貌、善曰、春秋保乾圖曰、神明之應、疾於倍風吹鴻毛、【翼乎】鳥の羽の順風を得て、飛こと疾かなる貌【鴻】は、常には鳫の大なる者を云、菱食と訓ず、但し一擧千里と云へば別に大鳥の名にてもする歟【壑】水のある大なるたに也銑は即ち川とす、言心は、其君臣相合へば、翼乎として鴻毛の順風に遇が如く、沛乎として大魚の大なる川に、自由に游ぐが如しと也

其得意如此、則胡禁不止、曷令不行、

也、言思美衆賢生於此國【又】漢書作艾、字彙、俊乂、才也、才智ある人を云、書皐陶謨、俊乂在官、言ろは、大に才德ある諸の賢人、此王の國に生れん事を願ふと也【故世—】天下太平に、主上聖明なれば、才德の人自然に至り來る也、

若堯、舜、禹、湯、文、武之君、獲稷、契、皐陶、伊尹、呂望之臣、明明在朝、穆穆布列、聚精會神、相得益章、

堯舜禹皐陶伊尹事は、送孟東野序にあり、湯文武契稷呂望事は、史記及び通鑑前紀等に詳也、堯は陶唐氏、舜は有虞氏、禹は夏后氏、湯は殷の始君、文王武王は、皆周の聖、皐陶契稷は皆、舜の臣、伊尹は、湯の臣、太公望は、文武の臣也、善曰、尚書曰、厥后惟明明、又曰、則以穆穆在乃位、翰曰、明明穆穆、皆美也、列布、謂分布職位也、云心は、此聖君此賢臣得、明明とあきらかにして朝廷にあり、穆穆と和き美して、職位に布列れり、其精意を集め、神氣を會して、君臣相得て、其道彌顯るゝと也、

雖伯牙操遞鍾、逢門子彎烏號、猶未足以喩其意也、

伯牙操琴、逢門子彎弓、其音韻合和、弓矢必中、亦未足以喩君臣之意也、遞鍾、琴名、烏號、弓名、

善本、遞作遰、逢作逄、韻會、逢、皮江切、又姓、孟子逢蒙學射於羿、增韻、或作逄蒙、孫氏示兒編、字異而義同者逢蒙、荀子王佷篇作逢門、淮南子王褒頌作逢門、七略作蠭蒙、毛氏曰、案顏之推刋誤正俗曰、逢姓之逢、與逢遇之逢、要爲別字、又曰、逢逢之別、豈可雷同、尋顏氏之言、逄逢固異、然揚子淮南子、傳寫作逢、今並收入以示傳疑、良曰、聚精爽會其神理、君臣道合、加以相明、上下不疑、德義諧和、則雖伯牙操琴、逢門子彎弓、其音韻和合、弓矢必中、亦未足以喩此君臣之意也、伯牙善鼓琴者、逢門子善射者、號遞、琴名、烏號、弓名也、晉灼曰、遞音迭遞之遞、二十四鍾、各有節奏、擊之不常、故曰遞鍾、瓚以爲楚辭曰、奏伯牙之號鍾、馬融長笛賦曰、號鍾高調、號鍾、琴名也、謂伯牙以善鼓琴、不能擊鍾也、且漢書多借假、或以遞爲號、不得爲號、不得便以迭遞判其官也、善曰、孫卿子曰、羿

景雲屬、註、虎土物、谷風木風也、木生於土、故虎嘯而谷風至、雲、水氣、龍、水物、故龍擧而景雲會、

蟀蟋俟秋唫、蜉蝣出以陰、

喩賢人待明君而後仕

【俟】五臣註文選には作候、俟は、竢同、待也、候は伺也向曰、蟋蟀蜉蝣、皆蟲也、候時而鳴、知陰以出、言如賢人待明君而仕、知明時而見也、善曰通卦驗曰、立秋蜻蛚鳴、蔡邕月令章句曰、蟀蟋、蟲名、世謂之蜻蛚也、毛詩傳曰、蜉蝣、渠略也、又蟲魚疏曰、渠略、甲下有翅能飛、夏月陰時出地中【蟋蟀】きりぎりす秋月田舍の壁の下、藁堆の陰などに多し、黑して能鳴聲清し、十月頃迄もあり、今俗に五六七月にある、蝗に似て靑して鳴蟲を、きりぎりすと云は誤也、詳に本艸綱目、韻會等に見へたり【蜉蝣】音浮由、かげらふ共、ひをむし共讀り、爾雅字彙等に詳也、言心は、蟋蟀は秋を待て鳴、蜉蝣は天陰り雨氣なる時分に出て飛と也 注 此二句は、賢人の明君を待得て、後に時を見て出て仕るに喩る也、

易曰、飛龍在天、利見大人、

銑曰、初九潛龍勿用、今飛在天、則時以通泰、故大人起治萬物、而萬物利而見之、大人、則天子也、善曰、乾卦之辭也、龍以喩大人、言龍飛在天、喩聖人之德顯、故天下萬物而利見之、王肅曰、大人、在位之日也、朱子本義曰、九五、剛健中正、以居尊位、如以聖人之德、居聖人之位、故其象如此、而占法與九二同、特所利見者、在上之大人爾、若有其位、則爲利見九二在下之大人也、古註の義れば、龍地より飛上て天にあり、龍は、大人に喩ふ、大人は、天子也、龍の在天を、天子九五の位を正して在に喩ふ、天下の萬物大人を見るに利ありと也、物の爲に利德とせらる也、本義の意なれば、九二の利見大人は、古註の義也、九五飛龍在天の利見大人は、在上九五の大人の、九二の在下の大人を見るに利ある也、此頌にては、彼此何れにても不害歟、

詩曰、思皇多士、生此王國、故世平主聖、俊乂將自至、

善曰、毛詩大雅文也、毛萇曰、皇、大也、鄭玄曰、思、願也、願天多生賢人於邦、良曰、皇、美也、多士、謂衆賢

也、言賢人能立二太平之功一、入子乃分レ符賜レ士、以爲二諸侯一、光二其祖考一、傳二業子孫一、此則使三賢士有二所資益一而喜悦、勸二其將來一也、說、音悅、漢書師古註曰、談說之士、傳以爲レ資也、說、音悅、古文大全曰、下以傳二業子孫一、以世二其爵一、是可三資藉以感二動天下遊說之士一也、句解曰、符者、印也、天子封二諸侯一、必分レ符授レ之、各執二一契一、異時號令必合レ契、然后奉行、壤者、土地也、賢士得レ君、分二剖之一以二符契一、錫二予之一以二土壤一、則職爲二諸侯一、自可三以光二顯祖考一、不三特光二顯祖考一也、下以傳二業子孫一、以世二其爵一、使三天下賢士、覬望而景慕上、正是可三資藉以感二動天下喜悅之士一也【符】は、符契符信、本剖符也、竹の長さ六寸なるを以て分て相合せ、一片をば人に與へ、一片をば此方に留む、事あれば兩方相合せて驗む、王者諸侯は、金玉を用ふ、嚴先生祠堂記の註に詳也、句解の註なれば印とす、言心は賢人能太平の功を立れば、天子符印を分て、郡國を賜て諸侯をし、其父祖を光顯して、子孫世を繼しめ、以て遊說の士を資くと也、遊說の義は、送二孟東野一序の解にあり、張銑が註なれば賢士を助け益て、喜ばしむる義也、其にては、士を資け悅ばしむと可レ讀、愚謂く、銑が義は是なれ共、文章くだくしく、左は讀れまじき樣なれば、前說に可レ從、史記魯仲連傳、下養二百姓一、以資二說士一、

故世必有二聖知之君一、而後有二賢明之臣一、故虎嘯而風冽、龍興而致レ雲、喩四君之所三以感二召其臣一、

李善が本に、臣故の故字なし、風の上に谷字あり雲の下に氣字あり、翰曰、君聖然後可レ見二賢臣一、君暗則賢人皆隱、如下虎嘯感二風而清一、龍起感中雲而隨上也、冽、淸也、善曰、周易曰、雲從レ竜、風從レ虎、管輅別傳曰、龍者、陽精以潛二于陰幽一、靈上通、和氣感レ神、二物相扶故能興二雲虎者、陰精而居二于陽一、依二木長嘯一、動二於巽林一、二數相感、故能運レ風、虎は陰の精、風は陽の氣、虎嘯て風從ふ者は、陰を以て陽を感ずる故也、龍は陽の精、雲は陰の氣、龍起て雨を致し來す者は、陽を以て陰を感ずる故也、言ろは、世に必ず聖智の君有て、後に賢明の臣出、喩へば虎嘯て風冽しく、龍興て雲を致しむるが如し、注虎嘯龍興の二句は、君の臣を感じ招くに喩ると也、又淮南子天文訓曰、天地間氣候、虎嘯而谷風至、龍擧而

不レ合、今は萬章孟子に問る、百里奚自ら重んせずして、我と秦に賣て、穆公に要むと云說を可レ用、甯戚未だ齊の桓公に遇ざる時に、齊の門に往て牛を飯ふ、牛の角を扣て歌ふ、桓公非常の人なる事を察して、召て用ふ、此四賢人、皆初には此君に遭遇せざるの患に係て困なめられしと也、

及レ至三遇レ明-君一遭二聖-主一也運レ籌合二上意一諫-諍則見レ聽、進-退得レ関二其忠一、任レ職得レ行二其術一、関、猶レ用也、

【運籌】張良傳に出たり【諫諍】諫院題名記の註に詳也云心は、賢人明君に遇、聖主に遭に及で、籌策を運ば、上の意に合ひ、諫言を上つれば聽れ、進むにも退にも、忠節を用る事を得、官に在て職に任ずれば、其方術を行ふ事を得ると也【関】漢書文選、並に作レ闕是也、

去二卑-辱奥-渫一而升二本朝一、離レ蔬釋レ蹻而享二膏-粱一、言賢人既遇二聖主一、榮以二職位一、惠以二祿食一、故以二卑辱幽汙之事一以升二用於朝一、離二去蔬食一、釋二去蹻履一、而食二滋味一、衣二朝服一也、

向曰、奥、幽、渫、汙也、蔬菜食也、蹻、庶人之屨也、享、食也、膏、肉也、粱、精米也、此下に、眞寶所レ載の注を下す、去の下に、平生の二字あり、張晏曰、奥、幽也、渫、狎也、辱、汙也、如淳曰、奥、音郁、應劭逵、離二此蔬食一、釋二此木屩一、攢案屩、以レ繩爲レ屨也、善曰、國語欒伯請二公族太夫一、膏粱之性難レ正也、賈逵曰、膏肉之肥者、粱、食之精者、言其食肥美者、率驕放、其性難レ正也【辱】は困辱、たしなめられ、くるしめらるゝ也、【本朝】は、本宗の朝廷其所レ事の朝也【蔬】菜の可レ食物、くさびらと訓す、前の羹藜是也【膏】肥脂づける肉也、前の滋味是也【粱】精白なる米也、前の含レ糗と反す、言心は、賢人既に聖主に遇て、職位を以て榮寵し、祿食を以て恩惠す、故に卑しく辱しめられ、奥深く汙らはしき事共を去て、本朝に登用ひられ、蔬食を離去、艸履を脫捨て、滋味を食ひ朝衣を服すと也、

剖レ符錫レ壤而光二祖-考一、傳二之子-孫一以資二說-士一、以上論二人臣之遭遇一、

銑曰、剖、分也、符者、所二以諸侯與レ天-子分一レ之、各執二一契一、擧動所レ爲、必合二於契一、然後奉レ命而行レ之、錫レ壤、土

共、君是を尤とせず、進て仕れ共、功效を施し呈す事を不得、卻て又廢退せらるゝ事あり、而も亦皆讒問の所致にして、非其人の罪過下に伊尹太公百里奚甯戚を引て證とす、文選運命論曰、張良受黃石之符、誦三略之說以游於群雄、其言如以水投石莫之受也、及其遭漢祖也、其言也如以石投木、莫之逆也、史記屈原傳曰、屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人間之、可謂窮矣、信而見疑、忠而被謗、能無怨乎、

是故伊尹勤於鼎俎、太公困於鼓刀、百里自鬻、甯子飯牛、離此患也、伊尹未遇、勤勞於調鼎俎、太公未遇、困於屠牛鼓刀、百里奚爲晉虜而賣之、秦以五羖皮贖之、甯戚未逢桓公而於齊門飯牛、四賢皆罹此不遇之患、

此注は、延濟が註を裁て用ふ、勤字の上に、湯爲桀庖廚之人の七字あり、俎字の下に、以具其膳の四字あり、困字の上に、文王而の三字あり、刀字の上に、其字あり、贖之の下に、穆公用以爲相、鬻賣也の九字あり四字の上に、此字あり、患也の下に、離猶罹也の四字あり、善曰、魯連子曰、伊尹負鼎佩刀、以干湯得意、故尊宰舍、尉繚子曰、太公屠牛朝歌、文子曰、伊尹負鼎而干湯、呂望鼓刀而入周、孟子萬章問曰、或曰、百里奚自鬻於秦、要秦穆公、信乎、孟子曰、不然、好事者爲之也呂氏春秋曰、甯戚至齊、暮宿郭門之外、桓公郊迎客、夜至關門、甯戚飯牛望桓公而悲擊牛角疾歌、桓公聞之曰、歌者非常人也命後車載之、鄒子說梁王曰、甯戚扣轅而歌、桓公任之以國、伊尹初め未だ湯に遇ざる時に、桀が庖人として、鼎味を調和し、俎肉を宰割して、桀が膳を具る事に勤め勞す、太公望未だ文王に遇さる時に、牛を屠り、其庖刀を鼓き鳴すに困なめらる、切はやしゝて、庖丁の音ある事を云、百里奚初め虞に仕ふ、晉の獻公虞を滅して、百里奚を虜にす、公女を秦に嫁する時に、百里奚を媵臣として添遣す百里奚亡て宛に走る、楚の鄙人執之、秦の穆公、百里奚が賢なる事を聞て、重く贖ひ求んとす、恐らくは楚人與へざらん事を、乃ち人を遣して、楚に謂しめて云、我媵臣百里奚其許にあり、請五羖羊の皮を以て贖んと云、楚人與之時に百里奚年已に七十餘、穆公用て相とす、案するに此說は、自鬻の義に

註李周翰が注也、但し選註には、好賢の下に、賢人將見の四字あり、諸侯の下に、以爲盟王の四字あり、善曰、韓詩外傳曰、齊桓公設庭燎、爲士之欲造見者、朞年而士不至、於是東野人有以九九見者、桓公使戲之曰、九九足以見乎、鄙人曰臣不以九九足以見也、臣聞君設庭燎以待士、朞年而士不至、於是夫士之所以不至者、君天下之賢君也、四方之士、皆自以爲不及君、故不至也、夫九九薄能、而君猶禮之、況賢於九九者乎、桓公曰、善、乃禮之、朞月四方之士、相還而並至矣、論語、子曰、管仲相桓公、一匡天下、民到于今受其賜、又子曰、桓公九合諸侯不以兵車、管仲之力也、毛詩小雅庭燎篇曰、夜如何、其夜未央、庭燎之光、君子至止、鸞聲將將、朱子註、庭燎、大燭也、諸侯將朝、則司烜以物百枚幷而束之、設於門內也、齊の桓公賢人を好む、必す未明に興て、庭燎を門內に設け、早に朝する者は、禮を以て相見る、於是四方の士集り至る故に、能衰たる周室を匡し輔け、諸侯を會合して盟主と成、此句の上の伯迹の句に應す、

由此觀之君人者勤於求賢、而逸於得人、以上論聖主得賢臣之功

銑曰、逸、樂也、言君主勤於求賢、必樂得其賢人也爲人臣、亦助君勤求賢良、是以忠矣、善曰、呂氏春秋曰、賢主勞於求賢而逸於治事【逸】字彙曰、書游逸逸豫無逸、詩自逸、並與佚同、安佚不勞也、言ろは、前に所云に依て見れば、萬民に君たる者、賢を求る事を勤むれば、賢者、輔相として、亦人才を求て進む、故に人君人を得るに無勞と也注【已上一】分明、

人臣亦然、昔賢者之未遭遇也圖事揆策、則君不用其謀、陳見悃誠則上不然其信、進仕不得施効、斥逐又非其愆、

向曰、揆、度、悃、至也、善曰、郭璞三倉解詁曰、悃、誠信也、良曰、賢臣、不見信用、雖進仕於朝、不得施用其功效、而爲邪臣讒疾、已遭斥逐、又非其過、人の臣に在ても亦如此、昔し賢者の未た明君に遭遇せざる時に、事を計り策を謀れ共、君不用之、誠信を陳見はせ

內、是以嘔喩受之、開寬裕之路、
以延天下之英俊也、嘔喩、喜悦貌、受謂用賢臣也、
向曰、易、謂海內易理、孟子、深耕易耘、集註曰、易、治也、詛銑也、又曰、延、接也、應劭曰、嘔喩、和悦貌、嘔、一侯切、文選注、嘔、音吁、喩、音兪【英俊】英雄俊傑、皆百千萬人に勝れて賢才なるを云、言心は賢人君子は、亦聖主の海內を治むる所以の者也、是を以て人主喜て賢才を受用ひ、賢人君子を容る事、寛く裕かなる路を開て、天下の賢才を引用ふと也、

夫竭智附賢者、必建仁策、索遠
求士者、必樹伯迹、
良曰、爲人君當竭盡智力、託附賢臣、必立仁惠之策、故賢臣阪之擇人求士、必樹覇王之迹也、索、擇伯、覇也【遠】文選漢書、並作人是也、人の君として、智を盡して、賢臣に付ば、必す仁者の勳功を立、即ち王道也、人才を求め、有能士を擇み用る者は、必ず伯者の功迹を立ると也、

昔周公躬吐握之勞、故有圄空
之隆、周公吐握以禮賢士、故能太平、囹圄空虛、
史記魯世家曰、武王崩、周公相成王、而使其子伯禽代就封於魯、戒之曰、我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下亦不賤矣、然我一沐三握髮、一飯三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人、子之魯、愼無以國驕人、濟曰、周公一食三吐餐、一沐握髮以禮賢士、故能致太平之化、囹圄空虛以成盛業、握、捉、隆、盛也、善曰、韓詩外傳曰、成王封伯禽於魯、周公誡之曰、無以魯國驕士、吾一沐三握髮、一飯三吐哺、猶恐失天下之士也、文子曰、法寬刑緩囹圄空虛【囹圄】牢獄也、昔し周公旦一たび食する內に、三たび迄口に含める飯を吐出し、一たび沐ふ內に、三たび迄髮を握て出て、賢士を禮し、自ら其勞をし給ふ、故に太平無爲にして、爭鬪訟訴の事もなく、牢獄空く鎖せり、是德化の盛なる故也、上の仁策の句に應す、

齊桓設庭燎之禮、故有匡合之
功、桓公好賢、公必夙興、設庭燎之火、以禮見之、故能匡輔周室、會合諸侯、

也、馬の能是を追馳るは、至て速かなる者也【周流ー】向曰、八極、八方也、遼、遠也、此下に、言此良馬ーの註あり、通鑑前紀、周穆王得八駿馬、一驊騮、二騄駬、三赤驥、四白兎、五驍渠、六黄騟、七黒驪、八山子、又一説、曰絶地、曰翻羽、曰奔宵、曰超景、曰騟輝、曰超光、曰騰露、曰挾翼、有造父者、以善御得幸、王欲肆其心、周行天下、將必有車轍馬迹焉、列子曰、穆王命駕八駿、升崑崙之丘、以觀黄帝之宮、遂賓於西王母、觴於瑤池、乃觀日之所入、行萬里、言心は、八方の極界に周く流行し、萬里を一息の間に廻る、何ぞ如此遙かなる所を速かに行や、人と馬、皆良が相得たるの勢也、造父が八駿の馬に御するが如し、御は、車馬を使ふを云、大學章句の序の大全に詳也、聖主に賢臣を得て用ひしむれば、天下事調り功成こと、亦如此と也【已上ー】上の夫賢者と云より是迄は、賢者は國家の大用に當る器物なる事を論ず、

故服絺綌之涼者、不苦盛暑之鬱燠、襲狐貉之暖者、不憂至寒之凄愴、何則有其具者易其備、

服葛衣之涼、不苦盛暑之熱、衣狐裘之暖、不憂至寒之甚者、蓋有其具、而易爲備也、故國有賢臣、亦無憂也、

翰曰、絺綌、葛也、鬱燠、熱也、襲、衣也、狐貉、裘也、悽愴、寒之甚也、眞寶の注は、此下にあり、論語郷黨篇曰、當暑袗絺綌、必表而出之、集註、葛之精者曰絺、粗者曰綌、白雲許氏曰、古之服葛、絺以爲衣、綌以爲裳、亦貴賤之等也、又曰、狐貉之厚以居、集註、狐貉、毛深溫厚、詩豳風云、一之日于貉、取彼狐狸、爲公子裘【狐】きつね、こつね、くつに、けつね、皆古訓也【貉】本艸綱目、李時珍曰、貉、生山野間、狀如狸、頭鋭鼻尖班色、其毛深厚溫厚、滑可爲裘服、與貛同穴而異處、日伏夜出、捕食蟲物、出則貛隨之、其性好睡、人或畜之、以竹叩醒、已而復寐、故人好睡者、謂之貉睡【凄愴】善本從水、すさまじく冷かなる也、言心は、葛衣の涼きを著る者は、極暑その熱きを苦しまず、狐貉の裘の溫なるを著る者は、極寒のすさまじきを不愁、何となれば、夏は葛、冬は裘の道具有て、寒熱の爲に備る事を成易き故也、是は衣服を以て賢人に比して云、故に賢人あれば、緩急に備る所有て、亦無憂也、

賢人君子、亦聖主之所以易海

不進於行、胷喘膚汗、人極馬倦、

言人駕劣馬、則傷馬空勞鞭杖、而不進行、胷喘而膚汗、人亦困極、馬亦病倦、不肖之人理國則勞下人、繁國法、國既亂而身亦危矣、

【庸】凡—と云へば、常の人也、昏—愚—と云ば、昏愚の人也、向曰、御、駕也、駑劣馬也、吻、口、蹶、勞、策、鞭也、此下に眞寶の註を下す、但し字少き有異、空字誤れり、本文の吻字を、馬口と註すれば、口字是也、杖作策、病作疲、國法作刑法、而身之而作矣、並に皆文選本註好、不用一々辨之、言心は、庸人のをそむまに乘ば、馬の口を傷ひ鞭を折れ共、行歩を進めず、馬胸すたきあえいで肌に汗を流す、乘者も亦困れ極まり、馬も亦疲れ倦り、猶不肖のうつけて無才者、國家を治むれば、下民を苦勞せしめ法度刑罰を繁ふす、國已に亂れ、身も亦危し、

及至駕齧膝、參乘旦、王良執靶、

齧膝乘旦、良馬名、王良韓哀、古善御者、靶、轡也、

韓哀附輿、縱騁馳騖、忽如景靡、

靡、沒也、言良馬良御、縱騁奔馳、忽如日景之疾沒、

是よりは又好乘手の良馬に乘に喩て云也、上の註は、皆張銑が說也、又曰、驂、亦駕也、輿、車也、應劭曰、馬怒有餘氣、常齧膝而行也、張晏曰、駕則旦至、故以爲名、王良、郵無卹也、世本云、韓哀作御也、時已有御、此復言之、加其精巧、音義、或曰、靶音霸、謂轡也、乘去聲、下の註は、劉良也、云心は、齧膝に騎乘旦に乘王良轡を執、韓哀車に附に及で、縱まゝに馳、自由に驅しむれば、即時に疾行て、日光の早く入が如と也、

過都越國、蹶如歷塊、

言過都國、疾如行歷小塊之間、

追奔電、逐遺風、

電風皆曰疾急、

周流八極、萬里一息、何其遼哉、人馬相得也、

言此良馬良御、何其遼哉、此人馬相得之勢也、使聖主得賢臣而用之、亦如此也　已上論賢者國家之器用、

濟曰、越、過、蹶、疾也、此下に、言過都國—の註を下す、言心は、都國を過越して疾速なる事、一つの小き塊の間を經過るが如しと也【追奔—】註翰が義也、但し本註には、急字を作也、善曰、遺風、風之疾者也、師古曰、呂氏春秋云、遺風之乘、言馬行尤疾、毎在風前、故遺風於後、今此言逐遺風、則是風之遺逸在後者、馬能逐也、奔電、はやきいなびかり也、遺風は、はやきかせ

刀畫泥中、言其易也、善曰、韓非子曰、負長劍赴榛薄析兕豹、赴深淵斷蛟龍、字林曰、劙、截也、漢書音義曰、如淳曰、若以彗掃於氾灑之處也、塗、路也、彗、音遂【泛字】漢書文選皆作泥【塵】亦作畫、善本作盡案するに今此註は、句解と張銑が註とを裁て合用ふ、言ろは彼干將の利劍を以て、水にしては蛟龍を斷、陸にしては犀革を截倏忽とたちまちに手もなく、箒を以て路上の塵を拂去が如し、甚だ易き事を云、若國賢臣を用ふれば、惡を變化して善に反復する事、自ら此喩の如しと也、

如此則使離婁督繩、（离婁、古者明目人也、）**公輸削墨、**（公輸、古之巧匠也、）**雖崇臺五層、延袤百丈、而不溷者、工用相得、**

言巧拙之理、且使上之所述、則更使明目者正繩、巧工者度墨、雖高臺五層、長廣百丈、而規矩不亂者、工用之相得故也、國不亂者、得賢之效也【袤】音茂、

翰曰、離婁、古之明目人也、督正也、公輸、古之巧工人也、削、度也、延、長也、袤、廣也、溷、亂也、此下に、眞寶に所載の註あり、善曰、孟子曰、離婁之明、趙岐曰、古之明目者也、黃帝時人、鄭玄禮記注曰、公輸、若匠師也般若之族、多伎巧者也、史記曰、蒙恬築長城、延袤萬餘里、孟子集註公輸子、名班、魯之巧人也、四書人物考曰、公輸子、名班、又名般、魯之巧人也、爲母作木人爲御、機關一發、其車遂行、又爲木鳶、令之自飛、嘗爲楚設機、將以攻宋、墨翟聞之往見般曰、聞公作雲梯將以攻宋、敢問攻宋何義也、般不答、九設攻城之機變、墨子九距之乃不果【註】且使の使字誤也、本註作如是也、云心は、上手と下手との道理上に所云の如くにして、更に明目なる者をして、繩を正さしめ、巧工なる者をして、墨を度り削らしめば、五重の高臺を作り、長さも廣さも百丈なり共、方圓亂れざるべし、其工と器と二つ共に、善を相使ひ得る故也、彼國家の不亂者は、賢者を用ひ得るの功效也【繩】大工の墨也、尙書說命上、惟木從繩則正【削墨】句解曰、削墨、乃度其墨所畫處以爲斵鋸穿鑿、斧鑿にて墨打に從ふて、削つ穿つする也【規矩】ぶんまはしと、かねと也、孟子曰、不以規矩、不能成方員、集註、規、所以爲員之器也、矩者、所以爲方之器也、

庸人之御駑馬、亦傷吻敝策、而

故工人之用鈍器也勞筋苦骨
終日矻矻、五骨反、
翰曰、工人、匠人也、矻矻、勤作也、亦如國之用愚人、如淳曰、矻矻、健作貌、青松曰、勞極貌、文選苦骨切、上の器用利の句を承て云、大工鈍き道具を用れば、筋骨苦勞しながら、所爲の器物不成、終日勞極して勤作すれ共、功成難し、君の愚不肖の人を用て、國の事を謀らしむるに喩ふ、

及至巧冶鑄干將之樸、淸水淬　干將、劍名、樸、劍未理也、淬、燒劍令熱、漬於水中、
其鋒、越砥斂其鍔、　鋒、刃也、越砥、磨石名也、斂、謂磨也、鍔、刃也、良冶、鑄劍人也【淬】音倅【鍔】音蕚、
良曰、巧冶、善鑄人也、上手の鍛冶を云、漢土には刀劍を作るに鑄る歟、亦打作れ共、鑄と云歟、此眞寶の注に、巧作良不是、本文に作巧、文選の本註にも、亦作巧、蓋し良字を誤て書る歟、良冶の字勿論あれ共、本文本註の字に非ず【干將劍名】善曰、越絕書曰、召風胡子而問之曰、寡人聞吳有干將、越有甌冶、請此二人爲鐵劍、吳越春秋曰、干將者、吳人、造劍二枚、一曰干將、二曰莫耶、良曰、應劭曰、傅曰、得一寶劍、不如一甌冶、甌冶、即巧冶也【樸劍未理也】樸、善本作璞、あらかねと讀、未作劍者也、也字選註作者【淬燒劍一】淬は、劍を火に入燒赤して、水中に入るを云、にらぐと訓ず、劍字、選注作刃、やきばを付る也、郭璞三蒼解詁曰、焠作刀鑒也、鑒、工練切、越砥、磨石名也、晉灼曰、砥石出南昌、故曰越砥、といし也、斂、謂磨也、刃をとぐ也、【鍔刃也】説文曰、鍔、劍刃也、漢書に作咢、言ろは、巧冶良樸を以て、干將の劍を作るに及ては、淸水に其鋒を淬て刃を付、越州の砥にて其鍔を磨と也、

水斷蛟龍、陸剸犀革、忽若篲氾
塵塗、　氾、猶掃也、言以利劍斬斷蛟犀、忽若以篲掃於路塵、言甚易也、若國用賢臣、化惡反善、自如此也
【剸】國專二音、
【蛟】龍屬無角、似蛇細頸、頸上有白嬰、四脚、銑曰、剸、斬也、犀、獸名、革、皮也、篲、帚也、氾、氾灑地也、塗、泥也、言以利劍斬斷蛟犀、忽若以帚掃氾灑之地、以

以正朝廷與百官、而遠近莫不壹於正矣、春秋立文兼述作、按舜典紀元日、商訓稱元祀、此經書元年、所謂祖二帝、明三王、述而不作者也、正次王、王次春、乃立法創制、裁自聖心、無所述於人者、非史策之舊文矣、又曰、按左氏曰、王、周正月、周人以建子爲歲首、則冬十有一月是也、前乎周者、以丑爲正、其書始即位、曰惟元祀十有二月、則知月不易也、後乎周者、以亥爲正、其書建國、曰元年冬十月、則知時不易也、建子非春亦明矣、乃以夏時觀周月、何哉、聖人語顏回以爲邦、則曰行夏之時、作春秋以經世、則曰春王正月、此見諸行事之驗也【正令】文選註、作正教【公即位者一國之先也】胡傳又曰、即位者、告廟臨群臣也、國君嗣世、定於初喪、必逾年然後改元、書即位者、緣始終之義、一年不二君、緣民臣之心、不可曠年無君云云【先也】文選註、作始也【審己】身の上に事を行んとせば、我是非を審かに察して行ふ也【正統】呂向が註なれば、王者其位を正しふして、天下を總主どつて理むる也、按ずるに字彙に、統、總也、撫御也、人君天下の總統を正して、天下萬民を撫御する也、言心は、上に己に謙辭を成て、己れが身上の事を云、此に至て、始めて文の首を立、此篇の記を作て云、敬て春秋の法を思みれば、五始の要は、己を審にして行ひ、王統を正し治むるにありと也、

夫賢者、國家之器用也、所任賢、則趨舍省而功施普、器用利、則用力少而就效衆、（此二句、是比上二句、）

銑曰、國家所任得賢人、則進退所作者省、而太平之功畢施、賢人之德廣矣、趨進、舍、退、普、廣也、延濟曰、亦如賢人於國、則不費人力、而成功多也、就、成、效、功、衆、多也【趨】直離切、走也、漢書文選、並作趨、漢書註、趨讀曰趣、云心は、賢者は、國家の器用也、此器用無ければ事行れず、君の任用する所の人賢なれば、才を進め、不才を舍るの方省約にして、事功の施し布く事普く廣し、猶器用鋭利なれば、手の力を勞し用る事少ふして、效驗を成就する所多きが如しと也、器用の利は、小刀斧鑿の能切るを以て見よ、上の句は實、下の句は喩として見よ【註】所任―器用―の二句は、上の審己―賢者―の二句を承て云、

萬里曰、無復有名山大川之游觀廣覽四方以充其知識者、顧獨有至愚昏昧之見極陋膚淺之識、以累其明者、濟曰王襃奏襃有逸才、帝徵之故謙云、不充厚望明旨、謂宣帝命也、言雖不足充厚望敢不述愚心而申情素也、塞、充、抒申也、善曰、戰國策、蔡澤說應侯曰、公孫鞅事孝公、竭知謀示情素【游觀廣】萬里の説なれば、解し易けれ共、少し未安歟湖月は、書籍を目廣く見る事とす此説是歟、蓋し游觀至愚の二句、皆知識の上に云り、游觀は、水をおよぐ如くに、目を書の中に游ばしめ、優游と見る義也、纍は繫也【知】は、知識我知覺る所也【情素】は、素懷、即ち本心也、但し言心は、臣書を遍く見、廣く見るの知識なし、反て才至て愚に、極めて陋きの所拘あり、王襃は文才有て、何事をも可書者かと奥深く厚く御望あれ共其責を塞ぎ、御用に充るに不足、明なる勅旨を蒙つて召出さるれ共、其命に應じて奉仕するに不足然共何ぞ聊か臣か愚鈍なる心を陳て朴素の情實を伸ざらんやと也、其字善本無之、是也[註]【申】は、伸也、云たきと思ふて鬱するを、引伸る樣に云出す也、又重也、くれ〳〵云心也、

記曰、為此頌之記也 恭惟春秋法、五始之要在乎審己正統而已、五始、謂元年、春、王、正月、公即位也、元者、氣之始、春者、四時之始、王者、受命之始、正月者、正令之始、公即位者、一國之先也、此五者在乎君王審己而行之、正位以統理天下而已、

記曰[註]周翰註也、又曰、上為謙辭、此立文首也、向曰、恭、敬、惟、思也、言敬思春秋也【五始】[註]是亦向註也【元年春王正月公即位也】善曰、漢官解、故胡廣曰、五始、一曰元、二曰春、三曰王、四曰正月、五曰公即位【元者氣之始】易乾彖曰、大哉乾元、萬物資始、本義、乾元、天德之大始、故萬物之生、皆資之以為始也、又文言曰、元者、善之長也、本義、元者生物之始、天地之德、莫先於此、故於時為春、於人則為仁、而衆善之長也【春者四時之始王者受命之始正月者正令之始】胡安國春秋傳曰、即位之一年、必稱元年者、明人君之用也、大哉乾元、萬物資始、天之用也、至哉坤元、萬物資生、地之用也、成位乎其中、則與天地參、故體元者、人君之職、而調元者、宰相之事、元、即仁也、仁、人心也、春秋深明其用、當自貴者始、故治國先正其心、

は、おふと訓ず、【旃氈也】毛氈也、猩々皮羅紗も同類也、又周禮、通帛爲旃、郭璞曰、以帛練爲旃【被服也】衣服を身に著る也【毳】獸毛縟細者、獸の輭かに細き毛を、毳と云、にこげと訓ず、俗に云うぶけ也、多く取て絲麻に織雜へて、衣服とす、夷狄の所著也【純綿繒帛也】純は、いと、綿は、わた、繒は、かとり、帛は、きぬ也、今此註には、皆同く絹とす、漢書註師古曰、純、絲也、謂織爲繒帛之麗、絲纊之密也【麗】美麗也、うるはしと讀り【密】細密也、きびしと讀り、細かにして無透間を云【言夷狄—】言心は、氈を旃にし荷ひ、毳を服とし被る者には、共に繒帛の輕く麗しく、密しくして溫かなる事を、物語し難しと也、夷狄每に毛を被て、帛を未だ著て見ざる程に、信仰せぬ也【羹藜—】〔註〕是は翰が註也【羹】五味和羹、あつものと訓ず、五味を調和して汁とする也【藜野菜】あかざ、本草綱目に詳也【含食也】含は、口にふくむなれ共、今は、くらふ義也、【糗麥飯也】此註にては、むぎめし也、服虔曰、乾食也、ほしいひ也、漢書師古曰、糗、即今之熬米麥所爲者【太牢牛也】字彙牛曰太牢、羊曰小牢、天子諸侯の饗に所用也【滋】韻會、旨也、うましと讀り【言人食—】藜の羹、糗の飯を食るは、賤き者也、太牢の美味は、食つけぬ故に、不知之、其とは、此味を物語するに不足と也、史記太史公自序傳曰糲粱之食藜藿之羹、夏日葛衣、冬日鹿裘【此二句—】賤き者は、貴人の上さを不知程に、言ことを不能と也、

今臣僻在西蜀、生於窮巷之中、長於蓬茨之下、　蓬茨、所以覆屋者、

【僻】漢書作辟李善曰、戰國策張儀曰、蜀、西僻之國、而戎翟之長也、風賦曰、起於窮巷之間、列子曰、北宮子庇其蓬室、若廣廈之蔭、廣雅曰、茨、覆也【今臣】王褒自ら稱す、言心は、臣僻遠の西蜀に住居して、窮陋なる巷に生れ、蓬蒿棘茨の下に成長せりと也〔註〕銑が註也、よもぎ、うばらにて、屋を葺る也、賤き者の家也、

無有游觀廣覽之知、顧有至愚極陋之累、不足以塞厚望應明旨、雖然敢不略陳其愚心而抒情素、　言雖不足充厚望、敢不述愚心而申情素也【抒】神與反、

を論ず【第五節――】賢臣の聖主に値遇する事を論ず【第六節――】主と臣と上下相得て和合するの美を論ず【時上――】頌は、大半位の事を云、此時宣帝頗る仙道を好り、故に末段には、彭祖喬松が事を言て其道不足取事を叙つ、趙母袁了凡曰、王褒承詔作聖主得賢臣頌、詞旨休美、末乃嗤彭祖而陋喬松、頗箴人主務好神仙之失、可謂忠矣、夫事君者先賓其言而後拜獻其身以成其信、此非言之先賓者與、而晩乃爲上使祀金烏碧雞於益州、竟以道病死、有言不信、守道不終、哀哉○梅花無盡藏曰、此段六節、自篇首至情素第一節、自記曰至而已第二節、自夫賢至得也第三節、自故服至得人第四節、自人臣至說士第五節、自故世至末第六節、

王子淵

前漢書列傳三十四、王褒、字子淵、蜀人也、宣帝時修武帝故事、講論六藝群書、博盡奇異之好徵、能爲楚辭、王襄爲益州刺史、褒作中和樂職宣布詩、襄因奏褒有軼材、上廼徵褒、既至爲聖主得賢臣頌、上令褒與張子僑等並待詔、數從褒等放獵、所幸宮觀、輒爲歌頌、第其高下以差賜帛議者多以爲淫靡不急上曰、不有博奕者爲之猶賢乎已、方士言益州有金烏碧雞之寶可祭祀致也、宣帝使褒往祀焉、褒於道病死、上閔惜之○通鑑、宣帝神爵元年春正月、上始行幸甘泉郊泰時、幸河東祠后土、頗脩武帝故事、謹齋祀之禮、以方士言增置神祠、聞益州有金烏碧雞之神、可醮祭而致、於是遣諫大夫王褒、使持節往求之、綱目書法曰、書遣諫大夫何病帝也、雖病帝也亦病褒也、帝遣之則於褒乎何病、以方士言增置神祠帝之惑也而諫大夫何職焉不能諫則亦已矣、而又爲之持節求之、以是爲不職故病之也、

夫荷旃被毳者、難與道純綿之麗密、荷、負也、旃、氈也、被、服也、純綿、繒帛也、言夷狄服旃服毛者、則難與論繒帛之麗密也【毳】楚稅反、羹藜含糗者、不足與論太牢之滋味、藜、野菜、含、食也、糗、麥飯也、太牢、牛也言人食藜羹糗飯者、不足與論太牢之滋味也、此二句、謂賤者不足言貴【糗】去久反、

囲首句の註は、劉良が說也【荷負也】荷は、になふ、負

歳流亡する事は、吁其時節に當るや、又天命なるや、古より今に至る迄如此、是を箇樣にならぬ事、何としてか好るべきや、天子たる人、王道仁義を以て、中國を和同し、其上に德化遠方外夷に被らしめ、自ら感じ慕ふ樣にすれば、即ち天子の外の守り藩と成て、天下泰平也とぞ【注】守在四夷と云は、左傳の語なるを、一字も不改易用る故に、全句と云、

頌類

【頌】似用切、音誦、歌也、稱述也、徐鍇曰、此容儀字、歌頌者、美盛德之形容、故通作頌、後人因而亂之、以此爲歌誦字、朱子詩傳曰、頌者、宗廟之樂歌、大序所謂美盛德之形容、以其成功告于神明者也、蓋頌與容古字通用、故序以此言之、文選陸機文賦曰、頌優游以彬蔚、頌は、詩の六義の一也、盛德を美て作る、其體ゆたかにして、文章ある樣にする也、毛詩に周頌魯頌商頌あり、文選に頌類五篇あり、

○聖主得賢臣頌

此篇起句有兼體、蓋前漢王襃、字子淵、本蜀人、爲漢宣帝徵召、詔爲此頌、起四句設譬自叙、第一節且謙辭、叙應詔之意、第二節勉宣帝審已正統、第三節方論賢者、國家之器用、第四節論聖主得賢臣之功、第五節論人臣之遭遇、第六節總論臣主相得之美、時上頗好神仙、故末段不取彭祖喬松之事、

聖主は、漢の宣帝を指賢臣は、魏相、丙吉及び張安世、蕭望之、黄霸、韋玄成等を指、帝良臣を得給ふ事を稱美する頌也【註】【策體】漢書音義、作簡策難問列置案上、在試者意投射、取而答之、謂之射策、若夫錄政化得失、顯而問之、謂之對策、此篇の首の句、對策の體ある也、天子より及第する者を試みらるゝ時、簡策を作り、政事の善惡經義の疑難を書記して問るゝに、試者是を論釋して對へ上る、是を對策と云【前漢王襃—】漢の宣帝、王襃が俊才あるを以て召寄、勅詔して此得賢臣頌を作らしめ給ふ【起四句—】萬里曰、此四句と云は、譬を加て云也、湖月曰、自天荷旃至滋味を指、此四句は先喩を設て、自ら身の賤ふして、尊者の上を論ずるに不足事を述叙つ【第一節—】自ら謙退して、詔命に應じて、是を記する事を叙つ【第二節—】宣帝の其身を審にして、天下の統を正し理め給ん事を勉め勸む【第三節—】方て賢者は國家の器用なる事を論ず【第四節—】宣帝賢臣を得給ふの勳功手から

食、擧案齊眉、不敢正視、以禮脩身、敬而慕之、言ろは、誰やの者が兄弟無んや兄弟は、本より連枝なれば、左右の手足の樣に相思ふ者也、又誰が夫婦無んや、夫婦和合して相敬へは、賓客の如く、朋友の如し、然るに百姓生涯の間には、君王何の恩德を施されたるぞや、曾て憐愍をば不加して、征軍に催ふし從へて、敵の餌として、命を召るゝ事は、何の罪過にて、如此殺し給ふぞやと也、

其存其沒、家莫聞知、人或有言、

將信將疑、娟娟心目、寢寐見之、

奇英作悁悁、註曰、憂思貌、或作娟娟、其人今に存命するやらん、已に死沒するやらん、故鄉の妻子は曾て聞知事なし、人傳に存すと云、沒すると云、然れば其を信仰もしつ、亦無覺束疑もしつ、其人娟娟として、現に心に思し、目に見へて、寢ては夢中に見る迄也、

布奠傾觴、哭望天涯、天地爲愁、

艸木凄悲、

【奠】祭也、其人已に死ぬと聞傳る程に、無力其弔を成て、亡者の祭を布設け、供物を手向、觴を傾け進めて、泣哭して遙に北方の天末を望む、天地の鬼神も、是が爲に感じ愁へ、無情の艸木も是が爲に傷み悲むと也、

弔祭不至、精魂無依、必有凶年、

人其流離、

祭祀至極ならざれば、亡者の精神魂魄も、祭の壇に依附事なしと也【必有――】老子經曰、天道好還、大軍之後、必有凶年【流離】前漢書劉向傳、物故流離、以十萬數、師古――、謂其亡居處也、兵亂の後には、必曰、荒凶の年とて、五穀實のらざる事有て、人民飢饉し、在所を離れて、流牢迷惑すると也、

嗚呼噫嘻、時耶命耶、從古如斯、

爲之奈何、守在四夷、（左傳全句、）

昭公二十三年、古者天子、守在四夷、天子卑、守在諸侯、侯在四鄰、諸侯卑、守在四竟、杜註、古者天子德及遠方、藉四夷以爲守、守、音狩、此北を征伐し、防禦して、萬民の死傷數へ計るべからざるのみならず、荒

て、如朱如殷と也、

漢擊匈奴、雖得陰山、枕骸遍野、
功不補患、叶韻平聲、

前漢書匈奴傳曰、元帝以後宮良家子王嬙、字昭君、賜單于、單于驩喜、上書願保塞上谷以西至敦煌、傳之無窮、請罷邊吏卒、以休天子人民、天子令下有司議、議者皆以爲便、郎中侯應習邊事、以爲不可許、上問狀、應曰、周秦以來、匈奴暴桀、寇侵邊境、漢興尤被其害、臣聞北邊塞至遼東、外有陰山、東西千餘里、艸木茂盛多禽獸、本冒頓單于依阻其中、治作弓矢、來出爲寇、是其園囿也、至孝武世、出師征伐、斥奪此地、攘之於漠北、建塞徼、起亭隧、築外城、設屯戍以守之、然後邊境得用少安、漠北地平、少艸木、多大沙、匈奴來寇少所蔽隱、從塞以南、徑深山谷、往來差難、邊長老言匈奴失陰山之後、過之未嘗不哭也、如罷備塞戍卒、示夷狄之大利也云云、史記正義曰、陰山、在朔州北塞外、言ろは、漢より匈奴を打て、陰山をば得たれ共、士卒の死骸、枕を並て臥て、原野に遍く滿り、然れば人民の痛み患る事、陰山一つを取得たる功にては、補ひ足れぬと也【註】思字は、本去聲なれ共、今此に平聲に用ふ、是を韻に叶ると云、

蒼蒼烝民、誰無父母、提攜捧負、
畏其不壽、

唐書張說傳、蒼蒼群生民の頭の蒼黑なるが、艸木の蒼蒼然として生ずるが如しとて、蒼生と云、詩烝民註曰、烝、衆也、烝民は、衆多なる民と云義也【誰無―】詩、哀哀父母、生我劬勞、云心は、頭の蒼蒼たる衆の民、誰にても無父母者不有、父母其子を養育する時は、手を引攜へつ、抱きつ、背に負つなどして、其子の長命安穩ならざらん事を恐ると也、

誰無兄弟、如足如手、誰無夫婦、
如賓如友、生也何恩、殺之何咎、

毛詩、燕爾新婚、如兄如弟、晉書邵續傳曰、兄弟如左右手、左傳曰、冀缺耨、其妻饁之、相敬如賓、晉侯以爲下軍大夫、又後漢梁鴻、其妻孟光、避王莽亂、逃隱霸陵山中、後復至會稽、賃舂爲事、雖傭保之中、妻每進

吉甫、尹吉甫、此時大將也、非文無以附衆、非武無以威敵、能文能武、則万邦以之爲法矣【策勳】左傳桓公二年、凡公行告于宗廟、反行飲至舍爵焉、禮也、後漢光武紀、班勞策勳、註云、班、布也、謂徧布勞來之、其有功者、以策書紀其勳也注【左隱公一】杜預註曰、雖四時講武、猶復三年而太習、出曰治兵、始治其事、入曰振旅、治兵禮畢、整衆而還、振、整也、旅、衆也【歸而飲至以一】註、飲於廟、以數車徒器械及所獲也、云心は、昔し周の宣王の時、北狄中夏に入て、侵せしかば、尹吉甫大將として、伐て、勝まくり、逐て太原迄至り、拂に出して不入、朔方靈州夏州等の地に城を築き、師旅を皆全く引連て皈り、宗廟に至て爵を置、飲至の禮を行ひ、敵の車馬生虜、諸の分取々物を數へて、其功を紀し著はし、上下和き樂て、且閑なると也【治兵】は、兵を出す時に、其軍事を治むるを云【振旅】は、皈陣に人衆を整へそろふるを云【飲至】は、廟に至り、酒を飲也【軍實】は、取物也【和樂】小雅常棣篇曰、兄弟既具、和樂且孺【穆穆】文王篇、穆穆文王、註、穆穆深遠之意、吳程曰、無淺露迫切之意、陳櫟曰、以德容言、其容貌の物深く、をぐらふして、淺はかなる體ならぬを云【棣棣】邶風栢舟篇、威儀一一、註、棣棣、富而閑習之意、富て威儀有所習て、能仕習ひ見事なるを云、天子の容貌は、恭しく敬み、深遠にして淺迫ならず、宰相の威儀は、富て重々しく能習へり、君臣の間如此と也、

秦起長城、竟海爲關、荼毒生靈、萬里朱殷、

【左】成公二年、左輪朱殷、註、朱、血色、久則殷、

史記始皇紀、三十四年、適治獄吏不直者築長城、踐華爲城、因河爲池【荼毒】書湯誥曰、弗忍荼毒、蔡氏注、如荼之苦、如螫之毒、不可堪忍、荼は、大どちと訓す、有三荼、苦荼蓼荼英荼是也、毒は、蜂蝎蝮蛇の毒也【生靈】萬民を指て云【朱殷】成二年、張侯曰、自始合而矢貫余手及肘、余折以御、左輪朱殷、豈敢言病、註、朱、血色、血色久則殷殷、音近烟、今人謂赤黑爲殷色、言血多汚車輪、御猶不敢息、殷は、あかぐろく、うるむ也、秦に及て、始皇罪人戍卒を發して、塞上に長城を築き、北海の際迄至て關とす、是百姓を苦しめ痛むる事、如荼如毒、人の死亡する事亦無限、是萬里の長城は、死人を以て仕立たれば、血に塗れ

陳張左右翼擊之、大破殺匈奴十餘萬騎、滅襜襤、破東胡降林胡、單于奔、其後十餘歲、匈奴不敢近趙邊城、李華曾て謂り、昔し李牧趙の軍兵數十萬を用て、鴈門を守備し、大きに匈奴を破て、北の方地を開く事千里、匈奴を奔り逃しむと也、

漢傾天下、財殫力痛、任人而已、其在多矣、

漢文景より承平にして富饒也しも、武帝驕て、專ら四夷を征伐せられしかば、天下擧て調役に供し、財貨盡果て、人民力疲痛ぬ、詳に史記漢書に見へたり、顧廻瀾歷朝提錄曰、覩犀甲則建珠厓、聞葡萄則通大宛、欲善馬則遣貳師伐昆明則習水戰、大將軍五出師而匈奴服、驃騎將軍三出師而昆邪降、兵連而不解、饋運而不休、天下皆鍛甲砥劍、矯箭控弦、以從役而驅我元元、時聞塢笛、遙聽塞笳、以空幕南之王庭、自以爲威震百蠻、武暢四海矣、卒之瘡民而蝗國、川血而山骸、犀皮玳瑁不足珍、枸醬竹杖不足貴、夷歌巴舞不足多、而中國亦以虛耗、雖法繁於秋荼、利析於秋毫、百姓皆殫其地之出、竭其廬之入、不足以塡無限之欲壑、而天變盜興、不可救藥、乃作沈命法、遣直指使、以牢籠天下、芻狗萬民、而漢非文景之漢矣、好大而大不遂、喜功而不成、澤渴政寒、將誰之尤、宰相の善なるは、天下能無事平安也、然れば一人を擇で任ずるにあり、強ちに仕樣の多きに依にてはなし、一說、大將一人と云、

周逐獫狁、北至太原、旣城朔方、全師而還、飲至策勳、〔左〕隱公五年、三年而治兵、入而振旅、歸而飲至、以數軍實、**和樂且閒、穆穆棣棣、君臣之間、**

詩小雅出車篇、天子命我城彼朔方、赫赫南仲玁狁于襄、註、云、朔方今靈夏等州之地、又六月篇玁狁孔熾我是用急、王于出征、以匡王國、註、玁狁、卽獫狁、北人也、成康旣沒、周室寢衰、八世而厲王胡暴虐、周人逐之、出居于彘、玁狁內侵、逼近京邑、王崩、子宣王靖卽位、命尹吉甫帥師伐之、有功而皈、同篇又曰、薄伐玁狁至于大原、文武吉甫、万邦爲憲、註、至于大原、言逐出之而已、不窮追也、先生治戎狄之法如此、

寶‐理ニ地中、陵嘆曰、復得二數十矢一足二以脫一矣、今無二兵復
戰一天明坐受レ縛、是亦上の句は陵が事を用ひ、下の句
は廣等が事を云、於レ是其將たる者謂く、如レ此爲ん方
も無れば、敵に降服すべしと思へ共、若降參せば身を
夷狄に終ん、又或一將は謂く、如レ此打負て、進退已に
窮る、假令能逃皈る共、朝廷其律を失ふの罪を正すべ
し、亦若宥赦さるゝ共、我何の面目有てか、天子に見
へんやと、若し果して死すれば、骨を沙石の上に暴す
と也、

鳥無レ聲兮山寂‐寂、夜正長兮風淅‐淅、魂‐魄結兮天沉‐沉、鬼‐神聚兮雲冪‐冪、日‐光寒兮艸‐短、月‐色苦兮霜‐白、傷レ心慘レ目、有レ如レ是耶、

【鳥無聲―】王荊公詩、一鳥不レ啼山更幽と云の意【夜正長】陳伏知道從軍詩曰、二更愁未レ央、高城寒夜長【淅淅】淅淅は、本雨聲、今は風聲【魂魄結】上係辭曰、仰以觀二於天文一、俯以察二於地理一是故知二幽明之故一、原レ始反レ終、故知二死生之說一精氣爲レ物、游魂爲レ變、是故知二鬼神之情狀一、本義陰精陽氣、聚而成レ伸也、魂游魄降、散而爲レ變、鬼之皈也、朱子曰、死則謂二之魂魄一生則謂二之精氣一天地公共底、謂二之鬼神一、若是爲二妖孽一者、多是不レ得二其死一、其氣未レ散、故鬱結而成二妖孽一、若是尫羸病死底人、這氣耗盡了方死、豈得三更鬱結成二妖孽一、然不レ得二其死一者、久之亦散、又如其取レ精、多、其用レ物弘、如二伯有一者、亦是卒未レ散也【天沉沉】謂二沉寥一也、楚辭九辨曰、曰寥兮天高而氣淸、朱子註、沉寥、曠蕩空虛也、又一本に作二沈々一愁へたる氣色也【雲冪冪】冪說文、覆也、言心は、戰場鳥だにも無レ聲して、山さび〱と見へ、冬夜正に長して、風亦烈しく、亡卒の魂魄凝て不レ散、天空しく高して廣く、幽靈氣集り、雲掩て昏く、日光冷かにして艸長せず、日の色物悲ふして霜白し、心を傷ましめ、目を慘しむる事、如レ此なる事有やと也、

吾聞レ之、牧用二趙卒一大破二林胡一開レ地千‐里、遁‐逃匈奴一、

前漢匈奴傳曰、趙武靈王、亦變レ俗胡服、習二騎射一北破二林胡樓煩一自レ代並二陰山下一至二高闕一爲レ塞、而置二雲中鴈門代郡一史記李牧傳曰、匈奴大率レ衆來入二李牧多爲二奇

云云、兵卒衣糧無れば能はず、故に軍兵の後を斷て、是を奪ふ樣にする也、都尉は新たに匈奴に降參し、將軍は又沒すと也、愚案するに、都尉の句は、暗に李陵を指、將軍の句は、暗に李廣を指て云也、通鑑漢武帝天漢二年、以李陵拜騎都尉貳師擊匈奴、陵自請願得自當一隊、以少擊衆、上許之、於是將其步卒五千人、至浚稽山、與單于相擊、殺數千人、會陵軍候管敢亡降匈奴、具言陵軍無後救、射矢且盡、單于大喜、遂遮道急攻陵、陵居谷中、虜在山上、四面射矢如雨下、韓延年戰死、陵曰、無面目報陛下、遂降、綱目、武帝元狩四年、具粟馬十萬、令大將軍衞青、票騎將軍霍去病、各將五萬騎、青既出塞、捕虜知單于所居、乃以精兵走之、而令前將軍李廣、幷於右將軍軍出東道、廣自請曰、臣部爲前將軍、願居前先死云云、廣軍無導、惑失道後期、青使長史急責廣羞之、遂自剄、

屍塡巨港之岸、血滿長城之窟、無貴無賤、同爲枯骨、可勝言哉、

【巨】大也【港】水分派也、又水中行舟道、みなまた也、又みよ也、倭訓みなと【長城】史記始皇紀、三十二年、遣蒙恬發兵三十萬人、北伐匈奴、收河南地、爲四十四縣、築長城、因地形用制險塞、自臨洮至遼東、延袤萬餘里、威震匈奴、魏應瑒撰征賦曰、烈烈征師尋遐庭兮、悠悠萬里臨長城兮【窟】穴也【無貴無賤】中庸之語、言心は、中華の人、北胡を征伐するとて、散々に打負、死骸大港の岸を塡み、血は長城の穴に滿、貴も賤も、同く枯骨と成果ぬ、哀なる事不堪言と也、

鼓衰兮力盡、矢竭兮弦絕、白刃交兮寶刀折、兩軍蹙兮生死決、

左傳莊十年、曹劌曰、夫戰、勇氣也、一鼓作氣、再而衰、三而竭、文選、李陵答蘇武書曰、兵盡矢窮、人無尺鐵、註、窮、亦盡也、云心は、戰ひ已に酣にして、鼓衰へ力盡弦絕、重て相戰んとすれば刄折、軍迫て死を決するより無他と也、

降矣哉終身夷狄、戰矣哉骨暴沙礫、

李陵曰、公止、吾不死、非壯士也、於是盡斬旌旗及珍

寒、王巡三軍、拊而勉之、三軍之士、皆如挾纊、杜註、纊、綿也、言說以忘寒【墮指】漢高祖紀、七年冬十月、上自將擊韓王信於銅鞮、上從晉陽連戰、乘勝逐北至樓煩、會大寒、士卒墮指者什二三、言ろは、寒氣至て甚きが故に、鷙鳥も巢に息み、征行の馬も行かねて立もとふる、人は絹綿にても身溫ならず、指斷落、皮膚裂破ると也、

當此苦寒、天假强胡、憑陵殺氣、以相翦屠、

【苦寒】苦熱の若と同じ、太甚也、前漢晁錯傳曰、陛下絕匈奴不與和親、臣竊意其冬來南也、一大治則終身創矣、欲立威者、始於折膠、師古注、創音初亮切、懲艾也、蘇林曰、秋氣至、膠可折、弓弩可用、匈奴常以爲候而出軍【憑陵】左傳襄二十五年、恃楚衆――我敝邑、韻會、憑、通作馮、乘也、陵也、陵、犯侮也、【殺氣】陰氣は物を殺す故に、肅殺の氣と云【翦屠】漢高紀に出たり、きりほふる也、屠は、戮殺也、俗語に云撫切是也、言は、此苦はだ寒き時に當て、匈奴常に軍を出して、南方中國に侵し入、胡地は寒國なれば、常に寒に耐て、能弓を引、南方の人の寒を傷む比に、胡人は却て耐る也、且又弓の膠堅き時なれば、好で冬軍をする也、故に天冬寒を以て、强胡に假と云、寒氣の甚しきを陵て、入寇して殺戮すると也、

徑截輜重、橫攻士卒、都尉新降、將軍復沒、

前漢韓安國傳云、主擊輜重師古曰、輜、衣車也、重、謂載重物車也、故行者之資、總曰――、後漢光武紀曰、旌旗――、千里不絕、釋名曰、輜、廁也、謂軍糧什物、雜廁載之、以其累重故稱――、顏師古は、輕車重車二つとす、釋名には一つとす【都尉】漢文帝紀十四年曰、匈奴寇邊、殺北地――、通鑑秦二世元年七月、楚陳勝自立爲將軍、吳廣爲都尉註、都尉、秦官、職掌征伐事、漢武帝屬大司馬、都は、總也、尉は、平也、軍中に在て、人衆を總て、亂を平ぐる事を主るの義也、云心は、匈奴直ちに衣粮の車を斷、橫に士卒を攻、史記、廣武君李左車說成安君陳餘曰、今井陘之道、不得方軌、騎不得成列、糧食必在其後、願足下假臣奇兵三萬人、從間路絕其輜重、足下深溝高壘勿與戰、

一體也、事は詳に史記始皇本紀に見へたり、又略阿房宮賦の註にあり【暴露】史記項羽紀曰、身被堅執鋭、首事暴露於外三年、韓子初見秦篇曰、兵終身暴露於外、士民疲病於內、暴、字彙、蒲報切、晞也、又音僕、日乾也、言暴於日而宿於露也、云心は、李華曾て聞らく、昔し齋魏の兵役に征、番卒と成、荊韓の招き募る兵士、萬里に驅り廻り、累年野外に宿陣して、日に暴し、露に臥と也、

沙艸晨牧、河冰夜渡、地闊天長、不知歸路、寄身鋒刃、腷臆誰訴、

【沙艸―】沙原の草を馬に牧也、暗に匈奴河を渡て南に飲ふと云を、反して用るの心あり【河氷】項羽傳、河氷、後漢光武紀曰、晨夜兼行、蒙犯霜雪、天時寒、面皆破裂、至呼沱河無船、適遇冰合得過、亦暗に此事を用ふ、虞羲北伐詩、天長地自久、人道有盈虧【腷臆】意不泄也、云心は、軍に從ふの人、朝に沙草を牧、夜河氷を渡る、地浩浩として天悠悠たり、故郷は何れの方ぞ、歸路不可知、敵に逢時は、鋒刃に可係身也、恐れを懷て心不伸と也、

秦漢而還、多事四夷、中州耗斁、無世無之、

秦の始皇匈奴を征して、北の方萬里長城を築、漢の高祖、文帝、武帝、宣帝、後漢の光武、明帝、北を伐、西を擊、章帝大に匈奴を伐、羌胡を破り、安帝伐羌、桓帝征匈奴討諸羌、靈帝破鮮卑、魏の曹操伐烏桓、晉夷狄の禍を被りしより以來、慘毒不可勝計、南北朝の間、相互に侵寇し、死亡亦無限、隋の煬帝大に西北を征伐して、四夷悉く服す、詳に通鑑綱目綱鑑に見へたり【耗斁】詩雲漢篇、耗斁下土、註、斁、音妬、敗也、字彙、耗、虛也、云心は、秦漢より以來、四方の夷狄に、軍事多して、中國衰弊す、代々有之と也、

古稱戎夏、不抗王師、文教失宣、武臣用奇、奇兵有異於仁義、王道迂闊而莫爲、孟子題辭、

【戎夏】戎狄と、華夏と也【不抗―】過秦論曰、適戍之衆、不亢於九國之師、顏師古曰、適、讀曰謫、謂罪罰

停也、亭長、蓋今里長也、民有訟諍、吏留平辨、得成其政、後漢百官志、亭有亭長、以禁盜賊、註、亭長、主求捕盜賊、承望都尉、秦の法に、日本三十六町一里の一里半許りに、一つの亭を建、旅人休息宿食の爲にす、是に長吏一人を置、其下に卒父求盜とて、二人を差副る也【常】嘗と通用【覆】―沒也敗亡するを云【三軍】周禮、五師爲軍、萬二千五百人、天子六軍、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍、三軍は、三萬七千五百人也【往往】前漢揚雄甘泉賦、迢迢離宮、師古曰、迢、古往字、往往、言所往之處則有之、ところ〳〵と訓ず、行前にある義也、小學句解曰、猶常常、今は常々にある意【鬼哭】蒙求云、蒼頡觀鳥跡以作文字、鬼夜哭、此には幽靈亡魂の泣哭するを云【天陰―】杜詩、新鬼煩寃舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾、性理大全、南軒張氏曰向在淮上、宿一小寺中、夜聞小雞聲、以數萬計、起視之見彌望灯明滿地、問之寺僧云、此舊戰場也、遇天氣陰晦則有此、夫氣不散、則因陰陽蒸薄而有聲、氣自爲聲、於人何預、又曰、鬼神之說、須自窮究、眞是有疑、方得不然、他人說得分明、亦未濟事【秦漢】秦の始皇漢の高祖より以來、北胡西羌南越を征伐して、士卒の物故する事不可勝計【近代】南北朝幷に隋及び唐の初を可指、言ろは、亭長李華に語て云、此所は古の軍場也、前に曾て三軍を覆沒する事有と申傳へたり、常々に亡鬼の啼聲あり、天陰り雨夜などには、必ず聞ふ、物悲しきに不堪して、心を傷しむる許り也、但し其年代を何と記する者なし、秦漢の時か、又近代の事か、不知と也、

吾聞夫齊魏徭戍、荊韓召募、萬里奔走、連年暴露、

【徭】使也、役也、通作繇、漢宣帝紀、增興繇役、ゑだちと訓ず、公事科役に使はるゝ也、屋作道橋井溝川堤などの事迄にてもなく、軍陣卒徒の用にも使ふ也【戍】說文、守邊也、まほると訓ず、敵國の境、幷に要害の所に、番兵を置を云【召募】後漢光武紀、選練武衞、招募猛士、註、說文曰、募、廣求也、廣求兵也、又以財召兵也、廣く兵士を招き求る也、募、つのると讀り、又財を與へて、兵を招く也、古文奇英註曰、士卒死於戰場者、在齊魏則爲力役之征、在荊韓則爲召募之卒、六國の內、四つを擧て、燕趙二つを略せり、是文章の

人、少曠達、中進士博學宏詞科、累官吏部員外郎、嘗按劾宰相、宰相楊國忠姻婭橫暴、由是州郡肅然、玄宗入蜀、華母在鄴、欲間行輦母以逃、爲盜幷得、僞署鳳閣舍人、華自傷不能完節、屏居江南、大曆初卒、初華作含元殿賦成以示蕭穎士、穎士曰、景福之上、靈光之下、華文辭綿麗、少宏傑氣、穎士健爽自肆、而華自疑過之、因著弔古戰場文、極思研摧已成、汙爲故書雜梵書庋、它日與穎士讀之稱工、華問今誰可及、穎士曰、君加精志、便能至矣、華愕然而服、

浩浩乎平沙無垠、敻不見人、河水縈帶、羣山糺紛、

【浩浩】廣大貌【無垠】文鑑、或作如銀、言沙白也、旬子、守其銀、註、與垠同、守其分限也、韻會、垠、界也【敻】遠也【縈帶】廻纏也【糺紛】糺、繚戻也、紛、亂也、司馬相如子虛賦曰、其山盤紆、交錯——、云心は、原野廣大にして、平沙限りなし、遙かにして不見人、河水廻り纏ふて、群山紛れ交れり、

黯兮慘悴、風悲日曛、蓬斷艸枯、凜若霜晨、鳥飛不下、獸挺亡群、

【黯】韻會、乙咸切、深黑也、班固北征頌曰、雲黯長霓、鹿走黃磧【慘】七感切、愁也、痛也【悴】秦醉切、憂也、又憔悴【凜】力錦切、寒也【挺】說文、拔也、廣韻、挺出、此註此には不合、疑、鹿走貌、通作鋌、左傳文公十七年、其鹿也鋌而走險、急何能擇、杜預註、鋌、疾走貌、言鹿之避死、故疾走而趨於險也、鋌、音挺、此註にては通用歟、言ろは、野景何となふ氣黑して、愁へ悲める色あり、風の聲悲み、日亦暮ぬ、蓬だも荒斷、草已に枯、凜とすさまじふして、霜の晨の如し、鳥も可食物無ればにや、飛過て不下、野徒に廣ければ、獸走て其群類を失ふと也、

亭長告余曰、此古戰場也、常覆三軍、往往鬼哭、天陰則聞、傷心哉、秦歟、漢歟、將近代歟、

漢高祖初爲泗上亭長、袁了凡綱鑑補註云、亭者、亭留行旅宿食處所、猶今之館驛也、史記正義曰、秦法、十里一亭、十亭一鄉、亭長、主亭之吏、國語有寓室、即今之

輪、掃去其跡也、謝、去也、又言艸木爲山靈除去之、不許來、善曰、孔安國曰、逋、亡也、晋灼漢書註曰、以辭相告曰謝【穎】は、禾の穗、のぎ共、かひ共讀り【柯】は枝也【謝】は、謝絶辭を以て、告て去しむる也、言心は、山神の移命を聞て、集れる枝肝膽を怒らし、重れる穗魂魄を怒らして、或は枝を飛散して、頣が車輪を打折、或は枝を低、路に塞で、來迹を掃ひ去、猶請て如此の俗士、塵垢の車駕を引廻さしめ、山神の爲に、僞り詣れる逋客を謝絶せんと云と也、逋客は、即ち隱者也 注【剪截結掇】迂齋が評也萬文一統茅鹿門曰、剪裁結斷、更覺奇思逸趣、此末段の字句の、剪裁樣、結び綴る樣、秀逸なる事を稱する也【俗士—】良が註也、以上皆有韻、

○弔古戰場文

形容戰場悽慘之情、溢於言意表也、

【弔】字彙、問終也、傷也、弔生曰唁、弔死曰弔、古へ大合戰の有し場を見て、感じて弔へる文也 注【悽慘】悲痛貌【溢】滿溢也、水の餘る也、戰場を能形容して、かたどり寫し出す悲哀の情文字の外に餘れりと也、稱美して云、唐文粹、幷に古今文鑑に載之、數字有異、此篇皆韻を押す、可著心○萬里曰、此篇八段、自篇首至代歟第一段、自吾聞至莫爲第二段、自鳴呼至雷電第三段、自至若至言哉第四段、自鼓衰至是耶第五段、自吾聞至補患第六段、自蒼蒼至流離第七段、自鳴呼至末第八段○張侗初曰、讀此文者、只知其意慘辭悲、令人心動、而不知其行文之妙、在前段云、文敎失宣、武臣用奇、奇兵有異于仁義、王道迂濶而莫爲、末云、守在四夷、守者正仁義之用也、王道也、文武也、武臣用奇則有戰、戰則有民生流離之慘、文敎苟宣削有守、守削有策勳飲至之樂、說用武之害、而以文敎形言、弔戰場而以守四夷阪要、乃此篇妙處○事文類聚別集六云詩惡蹈襲古人之意、亦有襲而愈工、若出於己者、魏人章疏云、福不盈耳禍將溢世、韓愈則曰、歡華不滿眼、咎責塞兩儀、李華弔古戰場文云、其存其沒、家莫聞知、人或有言、將信將疑、娟娟心目、夢寐見之、陳陶則云、可憐無定河邊骨猶是春閨夢裏人、蓋工於前也、

李華

唐書列傳百二十八、文藝傳、李華、字遐叔、趙州贊皇

遊躅—】俗士の遊行の足を、我山中に容て、蘭蕙の路を塵さしめ、綠水の池を汚して、耳を洗はしむべからず【注】皇甫謐、萬姓統譜、字士安、嵩曾孫、居貧、躬稼穡、帶經而農、遂博綜典籍、以著述為務、後得風痺疾、猶手不釋卷、魏晉時屢徵擧、並不就、號玄晏先生、許由堯の天下を讓り與へんとし給へば、汚れたる事を聞る者哉とて、潁川に往て、其耳を洗ふ、巣父牛に水飮んとて、來りけるが、是を見て怪み、其事を問知て、左樣の汚れたる水を、我も牛には不可飮とて、引て皈る、莊子が寓言に出たり、高士傳には、巣父許由が事を聞て、汚たりとて耳を洗ふとあり、漁父辭の注に詳也、

宜扃岫幌、掩雲關、斂輕霧、藏鳴湍、截來轅於谷口、杜妄轡於郊端、下字、

濟曰、扃、門也、岫幌、山窓也、雲關、謂以雲為關鍵、藏斂湍霧、使無聞見也、來轅妄轡、謂周顒之車乘也、谷口郊端、山之外也、恐其親近故遠杜絕之【扃】關也、とざすと讀り【岫】字彙、山有穴曰岫、庾闡詩、峥嶸激清崖、濛朧蔭巖岫、山の洞也、くきと訓ず【幌】帷幔也、とはりと訓ず、倭俗に、ほろと云は誤也、岫幌、註に依ば、山の窻也、但し幌は、幔也とあれば、洞の戶口に、雲霧の幕の如くに張蓋ふなるべし【雲關】は、山門を雲の掩へる也、如此解すれば、岫幌雲關同意の樣なれ共、岫は山にあり、關は麓なれば、重複に非ず、【湍】は、川の瀨也【妄轡】は、妄浪にみだりなる者の、馬のくつは也【郊】は、邑外也、說文、距國百里為—、言ろは、此僞隱の士の過り來んには、かまへて〳〵、宜しく洞の口を扃し、麓の門を掩ひ、輕霧を收めて見せしめず、鳴瀨を藏して無所聞、來んとする轅を、谷の口にて截止め、妄なる轡を里外にて塞ぎ不可令入と也【注】下字、愚謂く、此下に當有缺字、

於是叢條瞋膽、疊穎怒魄、或飛柯以折輪、乍低枝而掃迹、請迴俗士駕、為君謝逋客、翦截結綴○俗士逋容、蓋謂周顒也、

良曰、條、木枝也、穎、艸穗也、言條穗瞋怒、擊折顒之

象也、魏、巍也、言其狀、巍巍然、高大也、使民觀之因謂之觀、兩觀雙植、中不爲門、爾雅疏云、觀與象魏闕、一物而三名也【促】は、もよふすと讀り、急ぐ義也【裝】旅一也、たびよそほひと訓ず、漢書曹參傳趣治行、師古曰、趣、讀曰促、謂速治行、謂脩裝也【下邑】下賤の郡邑也、弊邑と云同意也、山神山陰縣は、鍾山のある地なれば、卑下して云【浪栧】註に依ば、枻を鼓て、船を漕の義【魏闕】は、禁中の門外に、樓門を建て、法令を懸る者也、今は只朝廷を指也、云心は、顒山陰の役義、功秩已に滿て、旅裝して舟に乘て、帝都に赴く、其路次に就て、復鍾山に過り來んとす、其心情は朝廷に投じ、祿秩を貪りながら、外に山林を不忘頰を作て行步足跡を、山中に寄る眞似をすると也【扃】とぼそ、木戶也、

豈可使芳杜厚顏、薜荔無恥、碧嶺再辱、丹崖重滓、言山之艸木、且羞見周子、周子倘何面目復見山靈乎塵遊躅於蕙路、汚淥池以洗耳、皇甫謐高士傳、巢父聞許由爲堯所讓也、以爲汚、乃臨池而洗耳、

向曰、芳杜薜荔、皆香艸、言豈可使芳艸懷恥愧以相見、崖嶺再被滓穢、更以俗跡塵黷我蕙艸之路、汙濁我洗耳之池也【芳杜】芳は、香也、杜は、杜若也、甚だ香し、故に芳杜と云、倭俗に、杜若を訓じて、かきつばたとす、大に誤れり、かきつばたは、本艸に馬藺馬薤とある是也、陶隱居本艸註曰、葉似薑而有文理、根似高良薑而細、味辛、又絕似旋葍根、殆欲相亂、葉小異爾、楚辭云、山中人兮芳杜若、是矣、尙書五子之歌曰、顏厚有忸怩【薜荔】香艸、在屋曰昔邪、在墻曰垣衣、或蓋緣古木開花結實、謂之木饅頭案するに、垣衣の註なれば、こけ也、蓋緣古木の註なれば、つたの類也、但し香艸とあれば、別に一種也【碧嶺】は、艸木ある故也【丹崖】は、山の崖の缺口は、必ず赤き故に云、言ろは、山神の云、一度こそ出拔れて、面目を失ひつれ、又ざふらふや此者を容て、山中の芳艸をして、鐵面皮に頰を厚ふし、恥辱を愧る事を不知、嶺再び辱しめられ、崖重ねて汚されしめんや匡山の艸木だも、顒が頰を見る事を耻、然るに顒却て何の面目あつてか、山靈に見へんや、吳語、夫差將死、使人說於子胥曰、使死者無知、則已矣、若其有知、吾何面目以見員也【塵

逸議、馳東皐之素謁、

翰曰、風月以滋松桂之美、言今無人故遺龍之馳騁、宣布也、逸議、謂隱逸之議、皐、澤也。素、貧素之交、謁、告也、謂布告於人使知也、善曰、史記、伯夷叔齊詩曰、登彼西山兮採其薇矣、阮籍奏記曰、將耕東皐之陽、稚珪集訓張長史詩曰、同貧淸風館、共素白雲室、杜預左氏傳註曰、謁、告也、謂告語於人、亦談議之流、【蘿】爾雅翼曰女―正靑而細長無雜蔓、楚辭曰被薜荔兮帶女―、白玉蟾松岩序曰、松風說法蘿月談空【擺】文選一本作罷、字彙、擺、持而振之也、今は、うちはらふと讀て、拂ひ排くる意、桂の風を含み、蘿の月を帶るは、美景也【西山】は、首陽也、伯夷叔齊が隱れたる所也【逸義】文選の註に依れば、隱逸の謀議也、愚謂く、逸は、秀逸の―也、夷齊が隱を稱して、秀逸の謀議と云是あり【素謁】註に依ば貧素の交を人に告て知しむる義也、愚謂く謁は、字彙に、訪也、請見也、素―は、貧素の交の義、又朴素の交の義也【騁馳】は、皆はする也、註に依ば、宣布の意、云心は山神面目を失ふ程に、閣思君を起して、風景の 美好なるも無曲、面白氣も醒て、秋の桂に吹來る風をも遺廻し、春の蘿を照す月をも、拂ひ退く、西山に隱れし人の秀逸なる謀議東皐に游息せし人の貧素の交誼を宣布て、昔しの眞隱は、斯こそ有つれ此僞隱の類をば以來懲物にせよと云也、

今乃促裝下邑、浪栧上京、雖情投於魏闕、或假步於山扃、

【乃】文選作又銑曰、促、迫下邑、謂山陰也、浪、鼓也、栧、棹也、言山陰秩滿、因向京而過山也、上京、建業也魏闕、朝廷也、扃、山門也言顯情實在朝廷、而假跡於此山門、善曰、楚辭曰、漁父鼓栧而去、王逸曰、栧、舷也、浪猶鼓也、韋昭漢書注曰、栧、楫也、呂氏春秋曰、中山公子牟謂詹子曰、身在江海之上、心居魏闕之下、高誘曰、【魏闕】、象魏也、說文、扃外閉之關也、左傳定公二年疏、釋宮云、觀謂之闕、郭璞曰、宮門雙闕、周禮太宰、正月之吉、縣治象之法于象魏、使萬民觀治象、註、象魏、即雉門兩觀、以治法畫之于象、而縣于兩觀、使之觀治象而遵行之、韻會曰、爲二臺於門外、作樓觀於上、上圓下方、以其縣法、謂之象魏、象、治

朝因進見、太傅在前、少傅在後、父子並爲師傅、朝廷以爲榮、後廣謂受曰、吾曰知足不辱、知止不殆、功成身退、天之道也、豈如歸故鄕、以壽命終、父子遂乞骸骨、許之、上賜金二十斤、太子贈五十斤、公卿大夫故邑子、設祖道供帳東都門外、送者車數百兩、既歸鄕里、日具酒食、請族人故舊賓客相與娛樂、輙賣金以供具、或勸買田宅、廣曰、吾顧自有舊田盧、令子孫勤力其中、足以供衣食、此金、聖主所以惠養老臣也、故樂與鄕黨宗族共饗其賜、以盡吾餘日、族人悅服、皆以壽終、囯善註也言心は、昔し漢の疏廣、老を請て官を罷、簪を投ち、紳を解て、東海に皈て、逸樂する事をこそ聞しに、今は山人佩る所の蘭を解捨て、仕官して塵纓に覊るゝ事を見ること也【纓】は、冠の系也、游宦の者は、浮世の塵に奔走して、冠纓も其に塗れ染らるゝ故に云、

於是南嶽獻嘲、北隴騰笑、列壑爭譏、攢峯竦誚、

良曰、南嶽、謂南山也、嘲、調也、隴、亦山也、騰、起、竦上、誚、譏也、言皆識笑此山初容此人也、云心は鍾山の神、初め誤て此人を山中に容住しむるに因て、並びの南山嘲を進め、北山笑を起し、列れる壑我もくと爭ふて譏り集れる峯誚を上と也、

慨遊子之我欺、悲無人以赴弔、

故其林慙無盡、澗愧不歇、非林澗之愧、乃周子之愧、

良曰、慨、嘆也、游子、謂周顒也、欺、誑、弔、問也、言山爲周顒所誑、情懷所喪、而無人相問也、善曰、禮記曰、凡訃於其君之臣曰某死、鄭玄曰、訃、或作赴、赴至也【遊】文選作游、云心は、諸山壑嘲り誚る程に、鍾山の英靈も、周顒が我を欺き誑かす事を嘆き、人のあら笑止やとて、至り問らふ事なきを悲むと也【故其ー】翰曰、託林澗以申其愧也、云心は、誤て顒を容し程に、傍より笑ひ譏られて、林澗の耻辱永く不盡、止む事無と也囯本顒が耻辱なるを、態と嬲りて、林澗に託けて云妙也、

秋桂遣風、春蘿罷月、騁西山之

が如くに、美聲を天下に馳傳へしめんと思へる也、

使其高霞孤映、明月獨擧、青松落陰、白雲誰侶、（看他造語、）

其字、文選作我是也銑曰、我、謂鍾山神所稱也、言霞月徒擧映、無人賞玩也、善曰、成公綏鷹賦曰、陵高霞而輕擧、向曰、言山人之去、松蔭零落、白雲無與爲偶、是より顯出仕する後、英靈山中の事を說、云心は、此人去しより後、我山の高き霞、空しく孤り映照し、明なる月徒に獨り上る、松の蔭零落し、白雲も誰と共にか伴ふ事をせん、賞玩する人なき事を云【註】此文の作者の、能語を作る事を、眼を著て看よと也、萬文一統、劉辰翁曰、王介甫喜誦稚圭移文、愛其高霞孤映、明月獨擧、青松落陰、白雲誰侶之句以爲奇絕、

磵戸摧絕無與歸、石逕荒涼徒延佇、

向曰、摧絕、破壞、荒涼蕪穢也、言不復更歸、徒爲延望也【延】字彙、宛延、盤旋也、音寅【佇】文選作竚、久立也、又企也、楚辭、延佇乎吾將反、朱子註、延、引頸也、佇、跂立也、遠く望て、たゝずみ立也、言心は、此人去て後、澗の扉も摧け絕て、復更に歸り來らず、石の徑路も荒涼して、我空く此人を望て佇むと也、

至於還飆入幕、寫霧出楹、蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚、

還、音旋、廻也、善本、鶴作鵠、猿作猨、翰曰、飆風、寫、吐、楹、柱也蕙、香艸、山人葺以爲帳、此因山言之、故託猨鶴以驚怨也云心は、此人山を出し後、風景荒て冷しく、廻風のつぢかせ幕に入、吐寫ぐ烟霧柱より出蕙の帷無人して夜の鶴怨み、山人去て曉の猿驚くと也【山人】は、隱者を云、周顒を指也、

昔聞投簪逸海岸、今見解蘭縛塵纓、（投簪、疎廣也東海人、故曰海岸、蘭、蘭佩也、）

翰曰、投、棄也、謂疏廣棄官而歸東海也、幽人佩蘭、故云解蘭、縛、繫也、塵纓、世事也、善曰、摯虞徵士胡昭贊曰、投簪卷帶、韜聲匿迹、楚辭曰、紉秋蘭以爲佩、前漢書列傳四十一、疏廣、字仲翁、東海蘭陵人、兄子受、字公子、宣帝時廣爲太子太傅、受爲少傅、太子每

擧遷密令、敎化大行、道不拾遺、蝗不入境、光武即位、徵爲太傅封褒德侯、長子戎、太中大夫、次子崇、以中郎給事黃門【籠】字彙、包擧也、又―絡、つゝみこむる義【往圖】往代の圖籍也、張敞、漢の宣帝の時、甘泉の倉長と成、後に京兆尹と成こと九年、經術を以て自ら輔く、楊惲が事に坐せられて官を免ず、冀州に有賊、張敞其州の刺史と成、盜平ひて太原郡に守たり、趙廣漢陽、翟縣の令と成、政化治行、尤異とけやけく、ことに勝れたるを以て、京兆尹に遷る、威名流聞す、奸を發き、伏を摘ること如神、政淸平也、三輔は、即ち京兆也、都尉は、尹也、其事を都司どつて平治するの義也【註】尤字、倭本作有誤也【架】木を横に搆へ、棚を架する也、間架架棚など云類の如し、家屋の內に架するなれば、架は、家に對して下風にあり【籙】音錄、圖書也、卓茂寬仁にして人を愛す、密縣の令と成て、敎化大に行はる、去程に吏人卓茂を欺き僞る事をするにたへず、魯恭中牟縣の令に拜除せらる、政敎大に行る稻蟲其郡に不入、言心は、顒高く政治を建て、風化を厚ふし、張趙を往世の圖籍の中に包籠、卓魯を前代の記錄の中に結架んと思へる也、我籠中我家內に、架棚とするの義也舊解百說、皆不足取、

希蹤三輔豪、馳聲九州牧、〔漢書〕內史、武帝更名京兆尹、左內史更名左馮翊、主爵中尉、更名右扶風、是爲三輔〔左傳〕夏之方有德也、貢金九牧、九州之牧貢金也、

翰曰、蹤、跡也、渭城以西爲右扶風、長安以東爲京兆、長陵以北爲左馮翊、此爲三輔也、牧、長也、言希跡及之、馳聲譽以過之、此に所引の註は、漢書百官表之文也、曰、內史、周官、秦因之、掌治京師、景帝分置左內史云云、註、京、大也、兆者、命數、言大命所在、故云京兆也、馮、輔也、翊佐也、曰、主爵中尉、秦官、掌列侯、景帝更名都尉、武帝云云、註、扶助也、風化曰治、內史右地、與左馮翊、京兆尹云云【左傳―】宣公三年、王孫滿が語也、禹の有德時に當て、遠方の國、皆山川奇異の物を圖にして獻り、九州の牧守、皆其國の金を貢獻す、禹其金を以て、九つの鼎を鑄て、遠方の異物の形を、其上に圖し著す、是を傳へて周の鼎と云【九州】は、弔屈原賦の註に見へたり、言心は、顒政を成て、其治功の張敞趙廣漢等が三輔を治めて、英豪の稱あるに追及ん事を願ひ、卓茂魯恭等が、敎化大に行はるゝ

訓ず、かしましきを云【牒】は、文書也、又訴狀日安とも云り【訴】は、訴訟、公事うつたへ也【倥偬】事繁く、いそがはしきを云、言心は、公務に係つて道書長くしりぞけ棄られ、法席久しく廢し、只罪人を杖打するに就て、諠しく其思慮を犯し亂り、文書訴訟事繁して、其情懷を纏ひ飾ると也、本靜なる心情を、紛冗たる塵務にてまとひ縛ふ意あり、

琴歌既斷、酒賦無續、常綢繆於結課、每紛綸於折獄、

濟曰、琴歌酒賦、皆逸人之務、言今斷絕無續也、綢繆、親近也、紛綸、衆多之貌、課、考第也、折獄、謂審刑書也、善曰、董仲舒集、七言琴歌二首、西京雜記、鄒陽酒賦、廣雅曰、課、第也、然今考第爲課也、尙書、王曰、哀敬折獄、明啓刑書、詩豳風、綢繆牖戶、註、纏也、漢京房傳曰、房奏考功課吏法、論語顏淵篇、子曰、片言可以折獄者、其由也與、註、折、斷也【綢繆】延濟が註なれば近づく也、恐らくは誤也、詩の註に從て、纏ふ義是也【結課】は、考第也とあれば、吏人の功績を考へて、甲乙を次第する義也、京房傳の意可見古抄に、結解算用の事を云と云、恐らくは亦誤也【紛綸】は、事多して、絲の亂れたる樣なるを云、【折獄】は、訴訟うつたへを裁判するを云、言心は、公用に無暇程に、琴歌酒賦などの樂事は、既に斷果て不執行、只常に吏務を考第するに纏はれ、公事訟獄を決斷するに紛亂する許り也、

籠張趙於往圖、漢張敞稍遷至山陽太守、趙廣漢爲陽翟令、以化行尤異、遷京輔都尉

架卓魯於前籙、【後漢】卓茂遷密令、吏不忍欺、魯恭拜中牟令、螟不入境、

良曰、張敞、趙廣漢、俱爲京兆尹、有名望、魯恭、卓茂、咸善爲令、言將崇樹風猷、以籠架之、善曰、漢書曰、張敞、字子高云云、又曰、趙廣漢、字子都、涿郡人也云云、范曄後漢書曰、卓茂、字子康、南陽人也、遷密令、視人如子、吏人親愛而不忍欺、又曰、魯恭、字仲康、扶風人也、拜中牟令、螟傷稼、犬牙緣界、不入中牟、張敞、趙廣漢、魯恭三人は、又蒙求等にもあり、萬姓統譜、卓茂、宛人、父祖皆至郡守、茂寬仁恭愛、嘗乘車行、有人認其馬、解與之、性不好爭如此、後以儒術

を喪へる狀ありと也、

至其紐金章綰黑綬、金章、銅印也、漢書、秩六百石以上、皆銅印黑綬、跨屬城之雄冠百里之首、張英風於海甸馳妙譽於浙右、

良曰、紐、繫、綰、貫也、金章銅印也、銅章墨綬、縣令之章飾也、善曰、漢書曰、萬戶以上、爲令、秩千石至六百石、又曰秩六百石以上、皆銅印墨綬【紐】は、ひも也、かくると讀り【金章】は、銅の印也縣令に成時天子より給はる驗の印也【綰】わがぬと訓ず、今は貫く也【綬】は、絲を組て、印の系とする也、縣令の印の系也【跨屬城】銑曰、跨越也、管州之城爲屬城、言越衆城而爲縣宰之稱首也、英風妙譽皆美聲也、海甸、言所理邑近海而在浙江之右也、善曰、蔡邕陳留太守行縣頌曰、府君勸耕桑于屬縣、漢書曰、縣、大率百里、阮籍詠懷詩曰、英風截雲霓、字書曰、江水東至會稽山陰爲浙右【跨】あつとこふと訓ず、またがる也【屬城】は、本州の城に附縣の城也【雄】は、すぐれたる意【冠】は去聲、其主たるを云【百里】は、一縣の地方也【英風】は、美聲也、よきなを云【海甸】近海の邑を云、海鹽縣を指、禹貢、五百里甸服、王制、千里之內曰甸服、甸之爲言、治也、【妙譽】は、よきほまれ也【浙右】江水より東會稽に至るまでを云、是は顒が縣官に成たる事を說、言心は、已に令官に成て、金印を係、黑綬を貫き、屬城の雄壯なるに跨り據り百里の縣の內にて、甲首たるに冠主たり、美名を海國に張大にし、芳譽を浙西に馳傳ふと也、

道帙長擯法筵久埋、敲扑諠囂犯其慮牒訴倥傯裝其懷、

向曰、帙、書衣也、擯、斥也、敲扑、謂打人聲也、牒、文牒也、訴、告也、倥傯、繁偪貌、言道書講席、久從弃埋、而聽訟通於懷抱也、善曰、過秦論曰、執敲扑以鞭笞天下、楚辭曰、悲余生之無歡兮、愁倥傯於山陸、王逸曰、倥傯困苦也【道帙】は、道家の書を入たる帙也、道書と云んが爲也【法筵】は、呂向が註なれば、道書を講する席也、但し佛理に長ずる者なれば、上の句は道書、應上玄玄下の句は佛經の法筵、應上談空空【敲扑】は、罪人を打事を云【諠囂】は、皆かまびすしと

術を得て、風を使ふ事を能くす【比】は、たくらぶる也【儔】は類也、云心は顒が隱遁する體は、務光に比ぶるに不足、涓子も是に類する事を不得と也、

及其鳴騶入谷、鶴書赴隴、形馳魄散、志變神動、

向曰、騶、使乘也、鶴書、謂鶴頭書、古者用之以招隱士也、隴、山陵也、善曰、如淳漢書注曰、騶馬、以給騶使乘之臧榮緒晋書曰、騶六人、蕭子良古今篆隸文體曰、鶴頭書與偃波書、俱招板所用、在漢則謂之尺一簡、髣髴鵠頭、故有其稱、濟曰、言辟書既至、則神魄動散也【騶】は、使者の乘馬也、鳴―は、いなゝけるむま也【鶴書】鶴の頭の樣に文字を書る也、古文字の體也、隱士を招く時に用之【隴】は、大坂、さか也又呂向が註なれば、をか也、是より顒が志改まつて出仕する事を説、云心は勅使の鳴騶入谷、詔命の鶴書陵坂に赴き至るに及で、顒身馳廻り、魂氣散り、志變改し神動擾して日比の節操悉く換り果、遂に榮願を達して出て仕ふ、

爾乃眉軒席次、袂聳筵上、焚芰製而裂荷衣、抗塵容而走俗狀、

悤上後黷二字、

濟曰、軒擧也、擧眉、謂喜也、次側也、袂衣袖也、袂聳、謂掉臂也、芰製荷衣隱者之服、言皆焚裂之、擧騁塵俗之容狀、抗、擧、走、騁也、善曰、楚辭曰、製芰荷以爲衣、集芙蓉而爲裳、王逸曰、製、裁也、云心は、顒喜んで眉席の側に揚り、威きつて臂を筵の上に張、旅裝して、日比の隱者の衣服を焚裂、塵俗の容に換て世間の態を馳廻ると也、抗は、身を擧を云、

風雲悽其帶憤、石泉咽而下愴、望林巒而有失、顧艸木而如喪、

下字工

翰曰、悽愴憤咽、皆怨怒貌、言此等雖無情、見山人去亦如有喪失而怨怒也、云心は、顒にだまされて無面目、風雲も悽める氣色にて憤を含む聲あり、石泉も人の啼咽ぶが如にして、水底に愴める音を帶たり、林巒を望めば、心を失へる體あり、艸木を顧れば、亦物

故歌之、疾其不游、故怨之、言顯初至如此、善曰、周易曰、幽人貞吉西征賦曰、悼山潛之逸士、卓長往而不返、楚辭曰、王孫遊兮不飯、春艸生兮萋萋、歎字一作歌、言心は顯風流の心情を、高く日星に張大にし、氣象肅じく潔うして、霜の秋天に横はり蓋ふが如く、或時は昔の隱者の死して皈らざる事を歎慨し、或時は風騷の人の來り游ばざる事を怨むと也屈原は、楚の武王の後裔なれば、王孫と云、今此にては劉良が註に因て、隱者の稱とすべし、

談空空於釋部、覈玄玄於道流、

務光何足比、〔列仙傳〕務光、夏時人、湯伐桀因光而謀湯得天下已而讓光光遂負石沈河而自匿　涓子不能儔、涓子齊人餌木隱於宕山能風

翰曰、空空、以空明空也釋部、謂佛經也、覈、考也、玄玄、謂玄之又玄也道流、謂老子也、善曰、蕭子顯齊書曰、顯汎渉百家、長於佛理、著正宗論、兼老易釋部、內典也、漢書曰道家流者、出於史官、曆記成敗存亡禍福、古今之道也、佛氏は空寂を以て宗旨とす、萬物を皆幻として、空寂に皈す、金剛經云、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電應作如是觀、般若心經にも五蘊皆空と云、又は舍利子色不異空空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是、舍利子是諸法空相、不生不滅、不垢不淨不增不減と說【釋部】は、內典也【玄玄】は、老子經の語【道流】は、即老子の道也、老子は、玄妙不測を說て、虛無を本旨とす、道は天地の先に在、其時は空虛にして無一物只道のみ有て萬物の母と成、此道を取て世界の人物道理は、第二に落たりと云て不用、云心は顯佛法に皈して空理を談じ、老莊を好で玄敎を明すと也【務光―】銑曰、務光涓子、皆古之隱者、比方、儔匹也、善曰、列仙傳曰、務光者、夏時人也、耳長七寸、好琴服蒲韭根、殷湯伐桀、因光而謀、光曰、非吾事也云云、列仙傳曰、涓子者、齊人也云云、廣列仙傳曰、涓子著天地人經四十八篇、後釣魚于河澤、得鯉、腹中有符、能制風雨【注】務光は、夏の時の人也、殷の湯王、夏の桀を伐んとして、光に談合す、光世事は我預る事に非ずと云て不取合、湯桀を亡して天下を得たり、後に天下を光に讓る、光忌がりて逃れ、終に石を負て潁水に沈で自ら藏る、涓子は、齊の國の人也、蒼朮白朮を服食して、宕山に隱る、仙

で竽を吹者の眞似をして、祿を食ふて居れり、是より僞て名を盜る事を、竊吹とも、濫吹とも云、竊は、ぬすむ也、濫は、みだりにいつはるを云、幅巾とて、隱者の被る物あり、心は塵俗に汚れて、頭には隱者の巾を戴くを、濫巾と云、言心は顯隱者の眞似をして、艸堂に居り、隱巾を被て、北山に徘徊すと也、一說に莊子田子方篇、魯多儒服の故事を引て、上の學遁東魯の句を解す、左も可有なれ共、先可依本註歟、又南郭先生吹竽を以て、習隱南郭の句を解し、下の竊吹の句と、一つに連ねて註す、大に誤れり、習隱は、子綦が故事、竊吹は、南郭先生が故事、各別也、竊吹は、只字を借用て、盜名事を云迄也、

誘我松桂、欺我雲壑、雖假容於江皐、乃纓情於好爵、

濟曰、誘、謂引誘也、欺誑也、言雖假其容貌於江澤然纓情志於好爵祿也、善曰、楚辭曰、將馳騖兮江皐、周易曰、我有好爵、吾與爾縻之、揚雄反騷曰、違靈氛而不從兮、反湛河於江皐、註江皐水邊之游地也、青松曰、我字、我手山神也、言心は、山神の云、顯我山の松桂を誑らかし、我雲壑を詐つて、僞隱の住所とす、其外の容は江澤に住事を假託すと云共、內心は好爵祿を得んと云の望みありと也【纓】は、冠の系也、此にては心の利欲に纓るゝを也、

其始至也將欲排巢父、拉許由、

應上先貞二字、傲百世、蔑王侯、

良曰、排推也、巢父許由、隱者之最也、百氏、謂百家諸子也、王侯、爵之貴也、拉、折也傲、蔑皆輕也【百世】文選作百氏、言心は顯始て至る時は、巢父を推しりぞけ許由を折ひしぎ、百代を慢つて、我に並ぶ者なき樣にし、王侯をも輕んじ蔑しろにせんとすと也【注】此段は、始て山中に來れる時、貞操を守んとする由を說也、巢父許由が事は漁父辭の註にあり、

風情張日、霜氣橫秋、或歎幽人長往、或怨王孫不游、

良曰、張大、橫、蓋也、幽人王孫、隱者之稱、慕其長往、

此にて初て名を説出す、銑曰、周子、謂彥倫也、儁俗、俗中之儁士也、博、大通也、玄、謂莊老之道也、史、謂文多質少也【儁】後同、絕異也、老子經曰、玄之又玄衆妙之門、論語雍也篇曰、文勝質則史、言心は、世に周顒と云者あり、凡俗の中を超て、英俊の士也【註】【先奬】今先譽奬むる也、既に有文章博學也、又老子莊子が道を好み、文多して質少しと也、

然而學遁東魯、（莊子）魯君聞顏闔得道人也、使人以幣先焉、顏闔守陋閭、使者至曰、此顏闔之家歟、闔對曰、此闔之家、使者致幣、闔曰恐聽繆而遺使者罪、不若審之、使者反審之、復來求之則亦不可得也、

習隱南郭、莊子南郭子綦隱几而坐、仰天嗒然、似喪其偶、竊吹艸堂濫巾北岳、言顒盜名草堂、濫服幅巾、有如南郭濫吹竽也、

上には先奬て、此にて然而と卻て抑へて、儁隱を毀る也【註】莊子讓王篇也【幣】字彙帛也、財也、錢也、【閭】里門也、又周禮、二十五家曰閭、魯の君顏闔が道を得たる事を聞て、幣使を遣して先案內せしむ、闔陋き宅を守り、苴布の衣を著て牛を飯り、魯君の使者門に至る、闔自ら出て對す、使者是は顏闔が家かと問、闔是也と對ふ、使者幣物を致し入、闔對て云、恐らくは聽る事誤て、門違へにてや有ん、左あらば使者罪を得ん、能々審かにして尋ね致せと云、使者實もとて引返し、詳に問で復來る、闔已に去て行方を不知、使者求れ共不可得、闔が如なる者は、眞に富貴を惡む者也、得也の也字、莊子に作已【習隱—】【註】莊子齊物論也疏曰南郭子綦者、楚昭王之庶子司馬子綦也、居南郭故曰—【嗒然】郭象曰、解體若失其匹偶也、嗒、土合切、南郭子綦几に憑かゝりて坐し天に仰のひて嘘く、嗒然と身解て其婦を喪るに似たり、身心共に忘れたる貌也、言心は、周顒隱遯を學て、顏闔を慕ひ、隱几忘身心事を習て、子綦に似す、上つらは能言やうにて、底には二人と大きに相違したる事を含り、銑曰言顒無本性、但習學此二人之隱遁也【竊吹—】向曰、竊、盜、濫、僭也南郭處士盜居吹竽之位、巾隱者之服也、北岳、即北山也、言顒盜居艸堂、僭服幅巾、有如南郭濫吹竽也、善曰、東觀漢記曰、江革專心養母、幅巾屣履、又韓子十二、齊宣王好竽、必三百人以吹竽、南郭先生不竽者而之三百人之中、以竽食祿、宣王薨、後王曰、寡人好竽、欲一一吹之、南郭乃逃南郭先生と云者、本より竽をば不吹得して、齊王の樂人の中に雜り入

々にして、迷ふべしと也、道の天下に行はるゝ事、只一道なるべきに、末派紛々として人の迷ふに比する也【練絲】ねりたる白きいと也【爲其可一】絲本白し、而るを黄にも黒くも、五色樣々に染成事を、墨子歎く者は、人の心は本善にして惡なし、季世の俗變詐日日に生じて、本心亂るを以て也 延濟曰、參差、不一也、翻覆、不定也、言周子無一定之志、故擧此一人悲哭以譏之、淮南子、高誘曰、憫其本同而末異、

乍廻迹以心染、暗説周顒 或先貞而後黷、應在後 何其謬哉、

良曰、乍、蹔也、言周顒蹔廻跡向山中、而心猶染於俗、也、貞、正、黷、垢、謬誑也【乍廻一】周顒僞て暫時足迹を廻轉して、山中に入て隱る、而も其心は塵俗に汚れ染て、富貴を不忘と也 註 暗は、名をば說著さずして、底に周顒を指云義也【或先貞一】周顒初めは正しく節操を守る體をして、終には塵欲に汚されて出仕す、青松曰、此句借用易旅卦語勢、先笑後號咷、又借用蘇秦傳曰何前倨而后恭也 註【應在後】後の其始至也云云の下に云、應上先貞二字【何其一】何とて誑かし僞れるぞと也、

嗚呼、尙生不存、尙長、字子平 仲氏既往、仲長統 山阿寂寥、千載誰賞、

翰曰、嗚呼歎辭、尙長、字子平、男女嫁娶訖、便隱而不出、仲長統嘆曰、若得背山臨水游覽平原、此即足矣、何爲區區於帝王之門哉、言此二人無使山阿空虛、千載已來、無人當樂、善曰、范曄後漢書曰、仲長統、字公理、山陽人也、性俶儻默語無常、每州郡命召、輒稱疾不就、又英雄記曰、尙子平有道術、爲縣功曹、休歸自入山擔薪、賣以供食飮、後漢書列傳七十三逸民傳又曰、尙子平隱居不仕、性尙中和、好通老易、仲長統傳在列傳三十九、論語八佾篇、既往不咎、阿曲也、寂寥、謂無人也、言心は尙生仲氏二人は、皆眞隱なる者也、而も已に死して不在、山曲寂寥として、其跡を繼者なし、千載以來、誰有てか此人を追賞せんと也、

世有周子、謂周顒 雋俗之士、既文既博、亦玄亦史、

歌於延瀨、固亦有焉、

蘇門先生游於延瀨、見一人採薪謂曰、子以此終乎、薪人曰云云、遂爲歌二章而去、

註【周靈王—】呂向が注也、但し文選の註には、洛字の下に、之間の二字あり、周の靈王の太子晉、好て笙を吹て、鳳凰の鳴聲を作て、伊水洛水の邊に遊ぶ、後遂に仙と成、今此隱者太子晉が鳳鳴を成を、洛水の浦に聞と也【値薪歌—】註【蘇門—】此注も亦同前、但し彼には、謂の下に之字あり、此終を終此に作る也【云云】事を記さんとすれば多く、亦は指て切なる事にてもなき時に、略して書也、漢書汲黯傳に出たり、かくのごとしと讀り、呂向が注には、此云云の處に、吾聞聖人無懷、以道德爲心、何怪乎而爲哀也の十八字あり、蘇門先生、延瀨と云所に遊ぶ、一人樵する者あるを見て、問汝此樵にて一生を終んかと云、樵の云、我聞聖人は無念無想にして、只道德を以て心とす、何を怪てか、貧苦を悲む事をせん、遂に歌二首を作て去、今此隱者、薪を採て樂み歌ふ者に、延瀨に逢と也【固亦有焉】向曰、言有堅固如此、其隱遯の志固して移らざる事如此なること有と也、但し固又本然之辭、孟子曰、固所願也と云義に從て、鳳吹を聞、薪歌に遇ん事固より亦有之と云意に見ば如何、仍前說を正とすべし、

豈期始終參差、蒼黃反覆、淚翟子之悲、慟朱公之哭、

終始參差、岐路也、蒼黃反覆、素絲也翟墨翟、朱楊朱也、楊子見岐路而哭之、爲其可以南可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑、

言心は山神、此隱者の志操固く守て、富貴に淫せざらましとこそ思ひしに、何ぞ計らん、始と終と相同じからず、白き絲、蒼色に成、黃色に變ずるが如く改まらんとは、墨翟が白き絲を見て、其色々に染ん事を悲めるに感淚を流し、揚朱が四方八角に分れたる街に臨て哭泣せし事を、實もと感じて悲慟すると也註李善が注也【反字】文選には、本文幷に註中皆作翻【始終—】始は一筋の道なれ共、終に衢の分れて、參差と不齊也、參差は、毛詩關雎篇に出たり、岐は、分也、街の四方八角に分れたるを云【蒼黃—】反履は、打返す也、變じ改まるを云、素絲は、白絲也【爲其可—】道は本大路一筋なるべきに、彼此分れ通ずる者は、南北東西區

之業、文離騷曰、彼堯舜之耿介兮、王逸註、耿、光也、介大也、盡也【耿介】は、光明なる節介也節義高ふして明かに、衆群に秀、出ずるを云【拔俗】は、凡俗を拔出たるを云【標】は、標格、風姿也、風儀態度を云【蕭洒】塵垢を洗ひ立たる如くに、無欲恬淡なるを云、世話に、しやれたると云樣に、さび〳〵としたる義也【出塵】塵埃を超出る也浮世の汚らはしきに染らぬを云【想】は、心思也【度白ー】雪文選、一本作雲、善曰、孟子曰、白雪之白也、猶白玉之白也子虛賦、上干青雲、青雲、一作青霄、翰曰、隱者之志淸高也、潔淸、干、觸也、方知之、言有如此也言心は、隱者の體を云へば、節義高く、凡俗を拔出たる態あり、其操を云ば、洒落無欲にさび〳〵として、塵汚を離れ出たる思あり、其志潔白にして、雪を度て淸きが如く、其氣象高ふして、雲を凌て上るが如し、我始めは、此隱者如此なる人と知れりと也、

若其亭亭物表、皎皎霞外、芥千金而不盻、屣萬乘其如脫、〔淮南子曰〕堯年衰志閔舉天下而傳之舜、尤郤行而脫屣也、

銑曰、亭亭、高聳貌、表外也、物表霞外、言志高遠也、芥、艸也、千金萬乘、俗皆貴之、此高潔之人、視之如艸芥脫屣而已、言輕也、善曰、爾雅曰、史記曰、秦軍引去平原君乃置酒、酒酣起前以千金爲魯連壽魯連笑曰、所貴於天下之士者、爲人排患釋難解紛而不取也云云、淮南子、許愼曰言其易也、孟子盡心篇上曰、舜視棄天下猶棄敝蹝也、朱子註、蹝、艸履也【亭亭】高く聳る貌、又獨り立貌【物表】萬物の外也、塵俗の外を云【皎皎】は、潔白なる貌【霞外】雲烟の外也、天上を云【芥千金ー】千金の重きを、艸芥の如くに輕んじて顧みざる也【屣萬乘ー】萬乘は、天子の位也、車一乘に馬四疋を係る、天子は萬乘の車馬あり、是を屣を脫ぐが如くにして棄去也、言心は、隱者の志し高潔にして、物外に高く立塵表に超て汚れず、千金を芥にし萬乘て、を屣とすると也註堯年老志衰へて、天下を舉て舜に傳ふ、尤字誤也、淮南子作猶是也郤行は、後へ退く也、あとじさりして、艸履を脫棄る樣に、富貴を輕んずると也、

聞鳳吹於洛浦、〔周靈王太子晉、吹笙作鳳鳴、游於伊洛、〕値薪

端第九段、自於是叢至末第十段、

孔德璋

南史、孔珪、會稽山陰人、齊明帝時爲南郡太守、珪風韻清疎好文詠、飮酒七八斗、不樂世務、居家盛營山水、憑几獨酌、傍無雜事、門庭之內、艸萊不翦、中有蛙鳴、或問之曰、欲爲陳蕃乎、珪曰、我以此當兩部鼓吹、何必效蕃、王晏嘗鳴鼓吹候之、聞群蛙鳴曰、此殊聒人耳、珪曰、我聽鼓吹殆不及、晏有慙色、仕至散騎常侍、李善文選註、引齊書曰、州擧秀才、解褐宋安成王車騎法曹行參軍、稍遷至太子詹事卒、

鍾山之英、艸堂之靈、（二神〇假山靈而言）馳煙驛路、勒移山庭、

文選註、呂延濟曰、蔣子文自謂靑骨死當爲神後吳王爲立祠於鍾山下、因改山爲蔣山也、昔蜀有法師居艸堂寺、及東皈、至此玩彼林泉之美、乃於北山南作艸堂以擬焉、英靈、二神也、李善曰、梁簡文帝艸堂傳曰、汝南周顒、昔經在蜀艸堂寺、林壑可懷、乃於鍾嶺雷次宗學舘立寺、因名艸堂、亦號山茨【艸堂】を作るに二說あり、濟が義なれば、蜀の法師造れり、簡文の義なれば、周顒立る也【英】は精一【靈】神一、皆山神を指て云、劉良曰、驛、傳也謂山之英靈驅馳烟霧刻移文於山庭也、言心は、鍾山の精英、艸堂の神靈、周顒が復此山に過らんとする事を聞て、大きに恐れ忌て、箇樣の僞隱山中に往來するに依て、我神靈の浮名をも立る事なれ、急々に移書して、再び此邊へ近付べからずとて、煙霧を使として、山邊の驛路に馳廻らせ、移文を山の庭中に刻みて立、周顒が經過を禁制すると也【驛】傳舍也、むまやどりと訓ず【勒】刻也、えりきさむ也、しるすと訓す、萬文一統、茅坤曰、首假山靈勒移之意、泛論夫先處而後出者、尚未說入事實、

夫以耿介拔俗之標、蕭洒出塵之想、度白雪以方潔、干靑雲而直上、吾方知之矣、

良曰、耿介、謂執節之士也、拔、出也、蕭灑、脫落也、善曰楚辭曰、獨耿介而不隨、孫盛晉陽秋曰、呂安志量開廣有拔俗風氣、莊子曰、孔子彷徨塵垢之外、逍遙無

○北山移文

孔稚圭、字德璋、會稽人也、少涉學有美譽、仕至太子詹事、鍾山、在郡北、其先周彥倫隱於北山、后應詔出爲海鹽縣令、欲郤適北山、孔生乃假山靈之意移之使不許再至、故云北山移文〔迂云〕建康蔣山是也、

題註は、文選呂向が註也、此上に本有蕭子顯齊書云六字【孔稚圭】本名の下に詳也【會稽】春夜宴桃李園序に見へたり【少】幼少、年弱きを云【涉】漢書賈誼傳曰、涉獵書記、不能爲醇儒、顏師古註、涉、若涉水、獵、若獵獸、言歷覽之不專精也、涉は、水を渡也、博く書籍を覽る事、水を涉るが如くなる也【美譽】よきほまれ也、李善が註には作善譽【太子詹事】事物紀原曰、秦官、掌太子家、應劭曰、詹省也、給也太子の家事を省察し、諸用を資給する官也【鍾山】方輿勝覽十四、江東路建康府、鍾山註曰、在上元縣東北十八里、輿地志云、古曰金陵山、縣名因此、又名蔣山、漢末秣稜尉蔣子文封討賊死事於此、吳太帝爲立廟、子文祖諱鍾、因改曰蔣山、此山本無艸木、東晉時刺史還任者栽松三千株、下至郡守各有差、一名北山、齊周顒隱於此【在郡北】此山會稽郡の北に在故に、北山と云、六臣文選註、郡作都、誤也、六家文選註作郡【周彥倫】蕭子顯齊書曰、周顒、字彥倫、汝南人也釋褐海陵國侍郎、元徽中出爲剡令、建元中爲長沙王後軍參軍、山陰令、音辭辯麗、長於佛理、著三宗論、言空假義、終國子博士、兼著作郎、初隱鍾山、王儉曰、卿山中何有曰、赤米白鹽綠葵紫蓼、文惠太子問菜有何味勝、曰、春初早韭、秋末晚菘【海鹽縣】在秀州【適】誤也、文選註作過是也【移】文選劉子駿移書註、銑曰、易也、謂以我情移易彼意、此より彼へ觸て廻す文也、周顒初め北山に隱居して、世に出まじきとの事なるが、後に宋の後廢帝の朝に、勅詔を蒙て出で仕へ、海鹽縣の令と成、却て復北山に過り入んとす、孔德璋是を惡て、即ち北山の神靈の心を假、觸流しの文を作て、禁止して再び入事を不許、故に北山移文と云、張侗初曰、凡想頭高者、行文自然靈異也、此篇意極孤高、句多獨創、轉接迎送、固屬天成、點綴吟咏、尤有夫巧、愈玩愈作○青松曰、此篇十段、自篇首至有焉第一段自豈期至誰賞第二段、自世有至好爵第三段、自其始至能儔第四段、自及其至如喪第五段、自至其至猿驚第六段、自昔聞至塵纓第七段、自於是至素謁第八段、自今乃至郊

天より定れる限あるを云、孟子曰、夭壽不貳、又曰莫非命也、壽も天も、本來定れる數あれば、鈍靜にてもあれ、鋭動にてもあれ、養生にて生延る事も成まじ、命促まる事も有まじ【制】裁也、造也、つくり、するを云【借令—】縱ひ筆の頭尖らず動かず共、其命硯と共に久遠なる事能はじ、人の壽命も亦限數あれば、養生にて延つ促つを制作する事は成まじと也、

雖然寧爲此、勿爲彼也、

此二句、子西が對也、或人の論は尤もなれ共、我は願くは、此鈍と靜とをせん、彼鋭と動とをば爲まじと也、孟子盡心上篇曰、脩身以俟之又曰、知命者、不立乎巖墻之下、盡其道而死者、正命也、

銘曰、不能鋭、因以鈍爲體、不能動、因以靜爲用、惟其然是以能永年、

硯本より鋭利なる事成らず、故に頑鈍を以て體とす、又擧動する事不能、故に安靜を以て用とす【惟其然】とは、鈍靜なるを以ての故に、能長命也とぞ、書畢命曰、資富能訓、惟以永年、羅山曰、永年の二字は、古硯の古字に應ず、愚謂く、能吟味するに不然、可謂鑿哉、鋭と體と同韻、動と用と同韻、然と年と同韻也、

文類

韻會、說文叙曰、倉頡之初、作書、依類象形、故謂之文、其後形聲相益、卽謂之字、孟子、不以文害辭、註、文、謂一字、辭、謂一句、廣韻、文、章也、美也、華川王褘文訓曰、文有大體、文有要理、執其理則可以折衷乎群言、據其體則可以劃裁乎衆製、然必用之以才、主之以氣、才以爲之先驅、氣以爲之内衞、推而致之、一本於道、無雜而無蔽、惟能有是、則統宗會元、出神入天、惟其意之所欲言、而言之靡不如其意、斯其爲文至乎、文は、文章の一體也、文選に文類あり、陸機が文賦あり、王褘が文訓あり、其外文苑英華、古今文鑑、文章正宗、文體明辨章に詳也、

者也、豈非鈍者壽而鋭者夭乎、

三物の體を論ずれば、筆は尤も頭尖り鋭也、墨は少し尖稜ある程に、筆に次と云也、硯は尖らずして鈍き物也、然れば鈍き物は壽ふして、鋭なる者は夭き道理ならずや、人も利發に見ゆる者は、性を煎て早く死し、愚鈍に見ゆる者は、何の心を勞する事無れば、長命也、老子の挫其鋭と云、揣而鋭之、不可長保と云、知其雄守其雌と云は其義に通ずべし、

其爲用也、筆最動、墨次之、硯静、者也、豈非静者壽而動者夭乎、

註云、無人如此發明、

三物の用の行はるゝ所を論ずれば、筆は尤も動きはたらく者也、人も心の静なる者は長命にして、躁しくあがき走る者は短命なるべし、論語に仁者静、仁者壽と有も、此理に通ずべし、智仁の上さを論ずる深き理ありと云共、此に借用て云はゞ、左も有べし註他人此道理を如此に發明する者なし、

吾於是而得養生焉、此方轉入正意、歸本身上、以鈍爲體、以静爲用、

此三物の壽夭を見て、我生命を養ふ事を悟り得たり、莊子には、庖丁が解牛事を以て、養生の理を論じ、子西は古硯を以て、養生を覺悟す註養生の二字は、此篇の本意也、此にて方めて一轉して、本意に説入、我身の上に歸著すと也【以鈍━】硯の鈍を以て體とする如くに、我身も鈍を以て體とす、硯の静なるを以て用とする如くに、我身も静なるを以て用とす、養生は只身體の無病なるのみを云には非ず、人の心もち正ふして、身を治むる事亦尤も切要也、身をしぶとく、無病鋭利だてをせず、静に身をあつかふて、妄に躁しく動かぬは、身の養生也、心を愚鈍にして利發だてをせず安恬にして名利を競はず、喜怒を節して妄に不動ば、心の養生也、

或曰、壽夭數也、非鈍鋭動静所制、借令筆不鋭不動、吾知其不能與硯久遠也、

或人の問を設て云、人の壽夭は數也、命數運數とて、

之、有文集二十卷、子文若、又翰墨全書唐子西工詩、號魯國先生、

硯與筆墨蓋氣類也、出處相近、任用寵遇相近也、獨壽夭不相近也、

此三つの器物は、同じ氣類也、假令は、鳥の喙と羽と脚との如し、物は三つなれ共、畢竟鳥の用を成所は一體也、此硯筆墨合せ用て、文書の用を成故に、氣類と云、同氣同類の字は、易の繫辭に出たり【出處】は、進退去就の義也、硯出れば筆墨も同く出、硯退けば筆墨も投うたるゝ、是を出るも引籠て處るも、相近ふして遠からずと云也【任用】は、其事の役に當て用ひらるゝ也、任、廣韻、堪也、當也、又負擔也、羅山曰、事をさばき用る也、此解不快【寵遇】は、人に愛せられて能用らるゝ也、羅山曰、硯を用るにも、硯を秘藏して玩ぶにも、筆墨は必ず少し出る者也、是を任用寵遇相近と云也、愚案するに、此説甚だ誤る、只此三物の用ひられ愛せらるゝ事、一同なるを云【獨壽—】然れ共、只三物の短命長壽なる事は有不同と也、硯の命は長く、筆墨の命は短し、是を壽夭不近と云、論語陽貨篇曰、性相近也、

筆之壽以日計、墨之壽以月計、硯之壽以世計、其故何也、

筆は毎日多く使へば、頓て尖が禿る程に、其命日を以て計ふと云、墨は日日磨れば、月を經て、減る程に、月を以て計ふと云、筆よりは亦壽し、硯は瓦や石を以て作る故に、年久しくあり、大に命長し、故に世を以て計ふと云【世】は、代々久きを經る事を云、假令は後漢の建安年中に、曹操鄴と云處に都を建て、銅雀臺を作れり、臺毀れて後、人其瓦を取て硯とす、是を鄴瓦と名づけ、銅雀瓦と名づく、其硯近代迄殘り傳つてあれば、代々數百千年もある也、莊子庚桑楚篇曰、日計之而不足、歳計之而有餘【其故—】三物の命の長短不同なるは、何故ぞと不審を設て下句にて云辨ずる也、

其爲體也、筆最鋭、墨次之、硯鈍、

○古硯銘

此文主意在レ養レ生、以レ鈍爲レ體、以レ靜爲レ用、因レ硯以發レ之、首一句謂ニ氣類之同一、次郤表ニ其壽夭不一レ同、第三段品ニ量三物之壽夭一、第四段發ニ明體用一、第五段轉ニ養生意一、第六段設ニ或人之難一、第七段二句、斷ニ盡本意一、

事文類聚別集十四硯部ニ載レ之云、家藏古硯銘、幷序、古き硯の銘を書とて、養生の道を論ず、此文の本主とする意趣は、人の生命を保養するにあり【鈍】は、不利也、頑也、物の稜あり、乃有て、切つ突つする類は、必ず折易く、碎け易し、石は本頑鈍にして、さへ／＼と鋭利なる物に非ず、故に損傷する事少し、硯は以レ鈍爲ニ本體一、動く物は轉て危し、靜なる物は止って安し、硯は靜なるを以て行用とす、是養生の道也、硯に因て其道を發明す、首の二句は、硯筆墨の同氣同類なる事を論ず、此三つの物、つきもなき各別の物を取合せて用るに非ず、皆一所に集て、一事の用を成故に、氣類同と云、次には三の物の壽と夭と異なる事を表章す、あらはし示す也、三段には、三の物の壽と夭を品評商量す、種々に評論する也、四段には、體と用とを發明す、道理昏く埋れて有を、奮ひ發して分明に云出すを、發明と云、五段には、一轉して養生の心に入、轉は、轉換也、六段には、或人の問難不審を擧て、自問答をする也、七段の二句には、鈍と靜とに歸著して、鋭と動とを忌避る、是養生の道也、此本意を決斷し述盡す、汪齋古文訣曰、眉山唐子西家藏古硯銘文見ニ於此一、寄レ興在レ彼、蓋不ニ特爲ニ硯銘一作上、中含ニ譏諷一、硯を陶泓と名づけ、筆を毛穎と名け、墨を陳玄と名け、紙を楮先生と名付る事、韓文に見へたり、後人此四つの物を、文房四友と號す、此銘には、三の物を云て、紙を不レ云、又硯字六經に見へず、漢の世より出けるかと云事、百川學海に見へたり○萬里曰、此篇七段、自ニ篇首一至ニ寵遇相近也一第一段、自ニ獨壽一至ニ不相近也一第二段、自ニ筆之至一至ニ世計一第三段、自ニ其故一至ニ天乎一第四段、自ニ吾於至一至ニ爲用一第五段、自ニ或曰一至ニ遠也一第六段、自ニ雖然一至レ末第七段、

唐子西

東都事略百十六、唐庚、字子西、眉州丹稜人也、善屬文、擧ニ進士一、稍用爲ニ宗子博士一、張商英薦ニ其才一、除ニ提擧京畿常平一、商英罷レ相、庚亦坐レ貶安ニ置惠州一、會レ赦復レ官提ニ擧上淸太平宮一、歸レ蜀道病卒、年五十一、庚爲レ文精密、通ニ於世務一、作ニ名治、察言、閔俗、存舊等篇一、學者稱

かぬるを云、既に過を改むるに憚り恐てせず、卻て自ら誤たず、是本心也と誣、又他人に虚を云たる事を、其人實に思ひ、我云所に從ん事を願ふは、人を誣る也、論語に、小人之過也必文と有は是也、君子は過つ事あれば、則ち過として速かに改む、小人は過ちながら、其を蔽ひ藏さんと色々に品を付て非を飾る也、是は子夏の語にて、子張篇にあり、此に夫子之所謂と引は誤也、又孟子に過則順之、又從而爲之辭と云も、此心也、公孫丑下篇の辭也、過を改むべきに、即ち其に順ひ、彌々我は過たぬと云ことはるを、爲辭と云也、

或者謂出於心者、歸咎爲己戲、失於思者、自誣爲己誠、不知戒其出汝者、反歸咎其不出汝者、長傲且遂非、不知孰甚焉、

戯謔出於心思、乃故爲也、不知所當戒、徒歸咎以爲戲、則長傲而慢愈滋矣、過誤不出於心思、乃偶失耳、不過歸咎於偶失、反自誣以爲實然、則遂非而過不改矣、

此段にて、戯言戯動と、過言過動とを、合せて云也【出心】とは、戯言戯動を云【歸咎】とは、罪咎を歸著して、咎をかづくる也【失思】とは、過言過動を云【出汝】孟子梁惠王篇下、曾子曰、戒之戒之、出乎爾者、反乎爾者也【長傲】曲禮、敖不可長、傲は、慢也、ほこると訓ず、じだらくなるを云、羅山をごりと訓ずるは誤也【遂非】孟子公孫丑下篇に出たり、事文類聚には、下に有則字、萬里曰、不知戒其言之出於汝心者、反歸咎戯言之非眞出於汝戯者、長養其傲慢、且遂成其非心【注】謔も、亦戯也、言心は、戯言戯動は、心思より出れば、故らに態と戯を成、然れば其汝の心より出る所の戯を戒むべき事を不知して、徒に是は戯なれば苦しからず云かづくるは傲慢を長じ育て、じだらく彌々甚し、過言過動は、心より不出、只偶然とまぐりあたりに、たま〳〵怪我をする也【不過】近思錄の註に作不知是也、咎を不意に誤るに歸して、有樣に怪我と云べき事を不知、卻て實に本心より出ぬ所に、自ら誣て我心の誠也とする也、彌々其非を遂果して過を改めず、其不智なること、至て甚しと也、

に現る丶故に、見二四肢一と云、四肢は、四つのゑだと讀り、兩の手、兩の足を云也、此戲言戲動本より心に計て、口に出、形に現る丶者なるを、己が心に本づくに非ず、出る儘に言、不圖爲ると云は、己が心暗く惑へる也、我心に本づきて、言動きながら、是は戲れ也と、人の我を疑はず、信仰せん事を欲す共、得難き事也、不能は、あたはずと讀て、得難く成難きを云、戲は聖賢の上にも有こと也、毛詩に、善戲謔兮不レ爲レ虐とあり、論語陽貨篇にも、孔子曰、前言戲レ之耳とあり、聖人の謔は、理に合ふ、常人の戲は、時に因て理に乖き、僻事あり、

過レ言非レ心也、過レ動非レ誠也、失二於聲一、繆二迷其四體一、謂二己當然一、自誣也、欲二他人己從一、誣レ人也、言之過者、非二其心之本然一也、動之過者、非二其誠之實然一也、失二於聲一而爲二過言一、繆二迷其四體一而爲二過動一、謂二之過一者、皆誤而非レ故也、或者吝二於改一レ過、遂以爲二己之當然一、是自誣二其心一也、既憚レ改而自誣、又欲二人之從一レ之、是誣レ人也、此夫子所謂小人之過也必文、孟子所謂過則順レ之、又從而爲二之辭一、

【注】【過言】は失言、あやまちのことば也、何心もなく、不慮に誤るを云【過動】は過擧、不圖怪我をするを云【失聲】は、亦言ぞこなひ也【繆】音謬、戾也、あやまり、繆二迷四體一は、亦心ならず、手足を過つて、しぞこなひをするを云【當然】は、如レ此に可レ有事を云【注】音無、詐也、罔也、以レ無爲レ有也、無實に云かけをするを云【注】言の過誤する者は、其心の本然に非ず、心の根本如レ此思ひ設けて云には非ずと也、動の過失する者は、企て謀て、心の誠より出るに非ず、實然は眞實如レ此を云、誠字を註す、口より聲に云過つて過言を出し、身に不レ計しそこなふて過動をするは、皆是不慮の過失と云べし、故さらに巧み、設て云爲るに非ざれば、有樣に過と云て人に謝し、自ら速かに改め、重て過らぬ樣に愼むべき事也、書大禹謨曰宥レ過無レ大、刑レ故無レ小、孔氏註、過誤所レ犯雖レ大、必宥不レ忌、故犯雖レ小必刑す、過は心ならぬ誤也、故は、態と巧てするを云【吝於改過】書仲虺之誥、改レ過不レ吝、吝は、嗇也、物惜みをして、しはきを云、或は過ちながら、改る事をしかねて、物惜をする者の樣にし、遂に是を我身の當然と云は、己れが心に、自ら云掛をし、虛をつく也【憚改】論語學而篇、改則勿レ憚レ改、憚は、惧也、物恐をして、其事をし

無ればゞ、父母死沒せる時に、子固に其父母の神靈を安寧せしむる事あり、我身生る時に、天に事へて、順にして其理に逆ふ事無ければ、我死る時に固に正命を得る事有て、他に求めず、是孝子仁人の親に事へ、天に事るの心、一生の間怠たらす、死して後に所止の者也、故に張子の此銘に、以是終とす、此二句は、天に事るの一代の事を總結る也○性理大全第四に、西銘を載、其註眞寶と一字も不差乃ち朱子の所作也、只結尾の二句の註、全く眞寶と同からず、案ずるに分註に、朱子曰、二句所論甚當、舊說誤矣云云、眞寶の註は、疑らくは朱子の所謂舊說也、性理の註明白也、今取て此に記す、孝子之身存則事親者不違其志而已、沒則安而無所愧於親也、仁人の身存、則其事天者不逆其理而已、沒則安而無所愧於天也、蓋所謂朝聞夕死、吾得正而斃者、故張子之銘、以是終焉、

○東銘　解見前篇、依平岩葉采注解　張子厚

題號の解、前西銘題註の下に見へたり、東西銘共に、同時の作也、然共朱子東銘をば註せず、事は亦前に詳也、後に朱子の門人陳北溪が弟子葉采、近思錄を註する時に、此銘を註す、萬姓統譜、葉采、字仲圭、邵武人、初從蔡淵受易學、已而往見陳淳、淳以其好蹴高妙、而循序就實工夫、痛折而痛砭之、采自是屛歛鋒鋩、俛意信向、駸趨著實、淳深喜之、寶慶初爲秘書監○梅花無盡藏曰、此篇者、發明學者修身樞要、謂言動不可不謹、分爲三段、第一段論戲思之失、第二段申過言過動之戒、第三段貶惑者以所長傲遂非、其詞語有箴規作、又曰、自篇首至能也第一段、自過言至人也第二段、自或者至末第三段、

戲言出於思也、戲動作於謀也、發於聲、見乎四支、謂非己心、不明也、欲人無己疑、不能也、言雖戲、必以思、而出也、動雖戲、必以謀而作也、戲言發於聲、戲動見乎四肢、謂非本於吾之心、是惑也、本於吾意、而欲人之不我疑、不可得也、

【戲言】は、左禮言也【思】は思慮、心の發する所也【戲動】は、左禮たる擧動也【謀】は謀計、心に分別して工み計る也注言は戲るゝと云共、必ず心に思て出づ、身の動きはたらく事戲ると云共、必ず工み謀るを以て作る也、戲言は口より出る故に、發聲と云、戲動は形

憂戚、所以拂亂於我、而使吾之爲志也篤、天地之於人、父母之於子、其設心豈有異哉、故君子之事天也、以周公之富而不至於驕、於顏子之貧而不改其樂、其事親也、愛之則喜而弗忘、惡之則懼而無怨、其心亦一而已矣○此四句總論事天之道、

【富】は、多財也【貴】は、重位也【福】祜也、詳也、百順之名也【澤】潤澤、又恩澤也注富貴福澤は、天より我に奉與して、樂み悅ばしめ、我生涯を厚する所以也、然れ共、我富貴なれば、善を爲る事、或は勤ること輕し、是天却て我を怠たらしむる也【貧】無財也【賤】無位也【憂】うれひ【戚】悲痛也、いたむ【玉女】詩大雅民勞篇曰、王欲玉女、是用大諫注【貧賤憂戚―】孟子告子下篇曰、天將降大任於是人也、必先苦其志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能云云、又盡心上篇曰、獨孤臣孽子、其操心也危、其慮患也深、故達、貧賤憂戚は、天より我に逆ひ拂り打亂して、困め苦むる者也、然其我をして志を篤して、其志行玉を琢磨し成す樣にせしむる事、却て天の賜物と云つべし、【設心】は、天地父母の所思を云、天地の於人も、父母の於子も、皆是を能成たきと思ふ心は不同なしと也、故に君子の天に事ること、周公の富を以ても、驕るに不至、顏子の貧を以ても、樂を改めず、其父母に事ること、我を愛すれば喜で不忘、我を惡めば恐て不怨、其事天事親の心も、亦一にして不同なし、論語泰伯篇、子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已、雍也篇、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也禮記祭義篇、曾子曰、父母愛之、喜而弗忘、父母惡之、懼而無怨、父母有過、諫而不逆、周公旦、顏回、富貴貧賤各別の事を引て、天命の所至は、人の私を容、又驕つ憂つすべき事に非ず、只天道の儘に隨ふて、志を可守と云事を說、此四句は、總て事天の理を論ず○案ずるに羅山富貴貧賤の二句の解、甚だ誤る、又玉女の字を珍奇として、孫玉女が事、幷に容齋隨筆を引、皆未深思者也、今不載之、

存吾順事、沒吾寧也、

父母存而事之順焉、則其沒也、吾固有寧、其神矣、吾身存而事天順焉、則其沒也、固有以得其正而無求矣、孝子仁人事親事天之心、所以終沒吾世而后已者、故張子之銘、以是終焉○此二句總結事天之終身、

注父母存生の時に、子事へて、順にして少しも違ふ事

疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手、詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷、而今而後、吾知免夫、小子父母子を生めるに、全ふして不足なる所なし、子身を傷らず、全ふして死す、是を父母に皈すと云、曾子の死んとする時に、門人を呼て、被を啓き我足を見よ、我手を見よ、少しも傷ふ事なし、父母より受得たる形を、其儘に違へずと也【體】體行と云意、我身を以て、其事に置て其道理の儘に踐行ふ義也、亦かたどる義と云說あり、孝經曰、身體髮膚、受之於父母、不敢毀傷、者孝之始也、天より我に與る所の性の中に、萬理を具足して、一善も不足し欠る事なし、是をも父母全ふして生り、故に天に事る者、能我天より受たる所の性理を、體し行ふて、孝道を全ふして、天に皈せば、即ち亦天の爲に、孝行の曾子なるべしと也、論語に、孔子門人の名を稱じ給ふ時は、回也賜也、商也などあり、此に參也と不云して、參乎と云は、里仁篇に、參乎吾道一以貫之と有に倣ふ、參は、曾子の名也、又先進篇には參也魯とあり、曾子は、能孝道を盡して、名を被得たり、孝經も、曾子の爲に孔子說給へる也【勇於從—】注子として父母の命に於ては、東西南北萬方萬事、只其云樣に從ふ、伯奇が霜を野外に履が如くするは、親の命に隨ふに勇み進める者也、況や天より人に命令する所の者、吉凶も禍福も、皆定れる理にして、人欲の私しに巧て、附つ避つすべき事有に非ず、故に天に事る者、能理に從ふに勇て、順に正命を受れば、是亦天の孝子伯奇也、孟子盡心上曰、莫非命也、順受其正、集註、人物之生、吉凶禍福皆天所命、然惟莫之致而至者、乃爲正命、故君子脩身以俟之所以順受乎此也【伯奇—】伯奇は、尹吉甫が子也、吉甫は、周の宣王の臣也、賢人の名を得たりしが、如何ありけん、後妻に云され惑て、伯奇を惡む、伯奇冬衣もなく、履も無して、父の命に順ひ、霜を踐て車を引、伯奇敢て辭退せずして、親の命令に順へり、說苑に見へたり【說苑】は、漢の劉向が著はせし書也【已上十—】崇伯子、穎封人、舜、申生、曾參、伯奇、六人の孝を云述て、天理に順ふ引證とす、皆天に事る者の鏡とす、

富貴福澤、將厚吾之生、貧賤憂戚、庸玉女於成也、富貴福澤、所以大奉於我、而使吾之爲善也輕、貧賤

欲立其子云云、僖公四年、姬謂太子曰、君夢齊姜、必速祭之、太子祭于曲沃、歸胙于公、公田、姬寘諸宮六日、公至、毒而獻之云云、公祭之地、地墳、與犬、犬斃、與小臣、小臣亦斃、姬泣曰、賊由太子、太子奔新城、或謂太子、子辭、君必辯焉、太子曰、君非姬君不安食不飽、我辭、姬必有罪、君老矣吾又不樂、曰子其行乎、太子曰、君實不察其罪、被此名也、以出、人誰納我、十二月縊于新城、姬遂譖二公子曰皆知之、重耳奔蒲夷吾奔屈、註、生戎其君姬姓、其爵男也、胙祭之酒肉、毒酒經宿輒毀、而經六日、明公之惑、辯謂以六日之狀自理、申生は、晉の獻公の太子也驪姬己が子を立て國を繼せん事を謀て、申生を讒し毀る、或時申生に謂て、獻公其方の母齊姜を夢に見給ふに、祭を請望めり、速に祭り給へと云、申生實と思ふて、齋姜の廟を祭り、其神前に供たる肉や酒を、獻公に進る、折節公狩に出られける、驪姬其胙の中へ、鴆と菫とを入、公六日を過て皈る、姬件の胙を進る、公食んとす、姬外より來る物は、容易く食ふべからずと云ければ、公是を地に祭る、土高くむくやぎ上る、犬に食はしむ、犬斃れて死す、小臣に食はしむ、小臣亦死す、公大きに怒る、姬涕を流して、色々に讒を盡しければ、遂に申生に死を給ふ、其時或人申生に謂て其方無罪事を訴へ明らめ給へと云、申生聞て、我無罪事を明さば、姬可受罪、姬は、公の寵愛也、姬無んば、公居を安んせじ、只我無罪事を不明して死んとて、自ら頸を縊て死す、時の人是を恭世子と云、恭は、恭敬、世子は、太子也、西銘に其恭也と書るは、此義也恭世子は、禮記檀弓上篇に見へたり、其外左傳國語史記に、申生の事詳也、何れも自縊と有て烹殺れたりとはなし、此に待烹と云は、其自害せる事を指て云なるべし、

體其受而歸全者參乎、勇於從而順令者伯奇也、

父母全而生之、子全而歸之、若曾子之啟手啟足、則體其所受乎親者而歸其全也、況天之所以與我者、無一善之不備、亦全而生之也故事天者、能體其所受於天者而全歸之、則亦天之曾子矣、於父母東西南北惟令之從、若伯奇之履霜中野、則勇於從而順令也、況天之所以命我者、吉凶禍福非有人欲之私、故事天者、能勇於從而順受其正、則亦天之伯奇矣○伯奇、尹吉甫之子也、尹吉甫惑於后妻、其子無衣無履而使踐霜挽車、伯奇從父之命而順父之命、不敢有辭焉、詳見說苑○已上六者、皆可爲事天者之鑑、

注禮記祭義篇曰、父母全而生之、論語泰伯篇、曾子有

之故、且告之悔、對曰、君何患焉、若闕地及泉、隧而相見、其誰曰不然、公從之、遂爲母子如初、君子曰、潁考叔純孝也、愛其母施及莊公、詩曰、孝子不匱、永錫爾類、其是之謂乎、杜預註、城潁、鄭地名、潁谷即城潁之谷也、時潁考叔爲典封疆之官、詩、大雅既醉篇言孝子之心、篤於愛親、無窮匱也、又能以己之孝感君之孝、是能錫及其疇類也、潁封人は、鄭の莊公の臣潁考叔也、潁谷の封人なる故に云、封人は、境目を主どる官の名也注性は萬物同く一源也、一人の私する物に非ず、故に天下の英才を育する事、潁封人が孝行を莊公に及すが如くなれば、長く孝子の同類を賜ふ所廣しと也【潁考叔―】上に詳也、

不弛勞而底豫舜其功也、舜盡事親之道、而瞽叟底豫、其功大矣、故事天者、盡事天之道、不弛怠其勞役、而天心悅豫焉則亦天之舜也、

無所逃而待烹者申生其恭也、申生無所逃而待烹、其恭至矣、故事天者、天壽不二、而修身以俟之、則亦天之申生也○申生晉太子也、遭驪姬者讒毀而死、

【弛】字彙、弓解去弦也、漢武帝紀、師古曰、弛者、弛廢不遵禮度也【底豫】孟子離婁上篇曰、舜盡事親之道、而瞽瞍底豫、瞽瞍底豫而天下化、集註、底、致也豫、悅樂也、舜の父瞽瞍は、目盲て頑也、繼母は嚚、弟象は傲れり、父母共に舜を惡で殺んとす、舜孝道を盡して、辛勞を不弛して能事へられたれば、後には姦をも不成、遂に瞽瞍も感じて悅べり、是を底豫と云、是舜の勳功也注天に事る者は、天に事るの道を盡し、其勞役を弛へ怠らずして、天帝の心悅ぶに至れば、是亦天の爲に孝行の舜也【怠】諸本作忘は誤也、舜の事は、孟子史記に詳也【無所逃―】申生驪姬が讒に因て殺されんとするに、少しも不逃して、父の云まゝに順ふて烹殺さるゝを待は、其恭敬の至也注孟子盡心上篇云、存其心、養其性、所以事天也、殀壽不貳、脩身以俟死、所以立命也、朱子註、殀壽、命之短長也、貳疑也、不貳者、知天之至、脩身以俟死、則事天以終身也天に事る者、短命ならんも、長壽ならんも、天に任せて疑はず、我身に無過惡樣に能治めて、自然の天命を待ば、亦天の爲の孝子申生ならんと也、左傳莊公二十八年、晉獻公娶于賈無子、烝於齊姜生大子申生、又娶二女於戎大戎狐姬生重耳、小戎子生夷吾、晉伐驪戎驪戎男女以驪姬歸生奚齊、其娣生卓子、驪姬嬖、

るには、惟此誠心にあり、誠を盡して獨處に愧ざれば、天を恐るの道に不恥也【存心—】孟子盡心上云、存其心、養其性、所以事天也集註、存、謂操而不舍、養、謂順而不害、本心を失はぬを存心と云、心理を守て害はざるを養性と云、天道に承順ふて乖ざるを事天と云、存心養性は、天に事る事に怠らざると也注詩大雅韓奕篇、夙夜匪懈、以事一人、晝夜怠らずして、其心を操存し、其性に順ひ奉して害せざるは、天に事るに無懈怠者也【已上皆—】不愧屋漏、存心養性は、皆天道を畏るの事也、而して君子如此なる事は、形を踐行ふ所以を求る也、

惡旨酒、崇伯子之顧養、好飲酒而不顧父母之養者不孝也、故過人欲如禹之惡旨酒、則所以事天者至矣○禹爲伯鯀之子、初鯀爲崇伯、故指爲崇伯子育英才、潁封人之錫類、性者、萬物一原、非有我之得私、故育英才如潁考叔之及莊公、則所以永錫爾類者廣矣○潁考叔、爲潁谷封人、請遺母羹、以起莊公之孝矣、

詩鹿鳴篇曰、我有旨酒、孟子離婁下篇曰、禹惡旨酒、好善言、戰國策曰、儀狄作酒、禹飲而甘、遂疏儀狄、絕甘酒注禹爲伯鯀之子、初鯀爲崇伯、故指爲崇伯子

【顧養】又離婁下篇、好飲酒、不顧父母之養、不孝也注酒を飲ことを好て父母の養を顧ざる者、不孝也、故に天理に順て人欲を止むること夏の禹の旨き酒を惡むが如くすれば、天に事る所以の道至極せり【崇伯】は、禹の父鯀也、崇は、國の名、伯は、爵也萬里曰、此文不言夏后及夏禹、而稱崇伯子者、西銘全篇據乾父坤母以論子道、故曰崇伯子羅山曰、春秋に仍叔か子武氏か子、論語に鄹人之子と云類多し【育英才】孟子盡心上云、得天下英才而敎育之、集註、盡得一世明睿之才、而以所樂乎己者、敎而養之【潁封人—】左傳隱公元年、初鄭武公娶于申曰武姜、生莊公及共叔段、莊公寤生、驚姜氏、遂惡之、愛共叔段、欲立之、亟請於武公、公弗許、及莊公即位、請京、使居之、謂之京城大叔、大叔命西鄙北鄙貳於己、又收貳以爲己邑、至廩延、又完聚繕甲兵、具卒乘、夫人將啓之、公命子封伐京、京叛、大叔入鄢、公伐鄢、大叔出奔共、遂寘姜氏于城潁、而誓之曰、不及黃泉、無相見也、既而悔之、潁考叔爲潁谷封人、聞之有獻於公、公賜之食、食舍肉、公問之、對曰、小人有母、未嘗君之羹、請以遺之、公曰、爾有母遺、繄我獨無、潁考叔曰、敢問何故、公語

るは、天と似たる事、子の父に似たると云義に取也、青松曰、踐履天地之形、以貌言視聽思之形爲恭從聽明睿智之用、是克肖天地之德也、

知化則善述其事、孝子善述人之事、惟聖人知變化之道、則所行者、無非天地之事矣、此所以善述其事、窮神則善繼其志、孝子善繼人之志、惟聖人通神明之德、則所存者、無非天地之心矣、此所謂善繼其志、○此二者皆樂天踐形之事也、

下繫辭曰、窮神知化、德之盛也、張子曰、氣有陰陽、推行有漸爲化、合一不測爲神、又上繫辭曰、知變化之道者、其知神之所爲乎、中庸十九章曰、夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也、陳氏曰、祖父有欲爲之志而不爲、子孫善繼其志而成就之、祖父有已爲之事而可法、子孫善因其事而遵述之、眞氏曰、當持守而持守、固繼述也、當變通而變通、亦繼述也、[注]孝子は能親の事迹行ふ者也、聖人は天地變化之道を知、故其所行の者、皆天地變化の事に非ることなし、是子として親の所作を、能遵ひ述る者也【窮神―】[注]孝子は能親の爲んと思ふ志を繼行ふ、只聖人は天地神明の德に通じ知、故に其心に存主する所の者即ち天地の心也、是能其父祖の志を繼者也、孟子盡心上篇云、君子所過者化、所存者神、註、所存者、神、心所存主處、便神妙不測【此二者―】知化て述事、窮神て繼志は、皆樂天踐形の事也、知化窮神は、樂天也、述事繼志は、踐形也、

不愧屋漏爲無忝、【孝經】引詩曰、無忝爾所生、故事天惟此誠、不愧屋漏、則不忝於畏天矣、存心養性爲匪懈、【孝經】又嘗引詩曰、夙夜匪懈、故事天者存其心、養其性、則不懈怠於事天矣○已上皆畏天之事也、而君子求所以踐形云、

詩抑篇曰、相在爾室、尙不愧于屋漏、朱子註、屋漏、室西南隅也、張子詔曰、天地之心、無幽明之間、止不欺而已、故不愧屋漏之隱者、乃無忝於天地也、屋漏は、室の西南の角、主人の所住にして、他人の伺ひ見ざる處也、此にして私も僻事も無れば、天地神明にも耻る事なし、[注]詩小雅小宛篇曰、夙興夜寐、無忝爾所生、近思錄註、朱子曰、孝經引詩曰、無忝爾所生、故事天者、仰不愧、俯不怍、則不忝乎天地矣、言心は、晝夜怠らず孝を勤れば、親を辱しめぬと也【所生】は、父母を云【忝】は、恥辱也【事天―】天地の神明に事

焉、是子之敬也【樂且―】上係辭曰、樂天知命、故不憂、天理を樂て窮困すれ共、憂へざる也【純乎孝】左傳隱公元年、君子曰、潁考叔純孝也、杜預註、純、猶篤也注天を樂て憂ざるは、親を愛する事、純一にして無他念也、青松曰、樂天之命、雖患難不憂、此天地純孝之子也、

違曰悖德、不循天理而循人欲者、不愛其親而愛他人也、故謂之悖德 害仁曰賊、戕滅天理自絶本根者、賊殺其親大逆無道也、故謂之賊

孝經曰、不愛其親而愛他人者、謂之悖德、不敬其親而敬他人者、謂之悖禮、註、言盡愛敬之道、然後施敎於人、違此則於德禮爲悖也【悖】字彙、詩同、亂也、乖也、さかふ共、もとる共讀り注天理に違て、人欲に循ふ者は、吾親を愛せずして、他人を愛する也、故に悖德と云、私欲にて明德蔽はるゝに因て如此と也【害仁―】孟子曰、賊仁者謂之賊、賊、害也、そこなふと訓す注【戕】字彙、傷也、殘也、そこなふと訓す、天理は人心の根本也、是を仁とす、其天理を戕ひ滅して、自ら其本心を斷絶する者は、其親を賊殺して、大逆無道也、故に賊と云、子韶曰、違天地之心、是不愛其親者云云、害天地之仁、是父母賊、

濟惡者不才、長惡不悛、不可敎訓者、世濟其凶、增其惡名也、故謂之不才、○以上二者、不能事天、故謂之不才 其踐形者惟肖也、若夫盡人之性而有以克人之形、則與天地相似而不違矣、故謂之肖○此乃能事天者

左傳文公十八年、昔帝鴻氏有不才子云云、少皡氏有不才子云云、世濟其凶、增其惡名【濟】字彙、事遂也、なすと訓す、韻會、益也、ますと讀、惡を長じて改めず敎訓に隨はず、世世其凶惡を濟て、其惡名を益故に、不才の子と云注以上悖德害仁濟惡の三の者は、天道に事ること能はす、大無器用の子と云也【踐形―】孟子盡心上篇曰、形色、天性也、惟聖人然後可以踐形、程子曰、賢人踐之而未盡、能充其形、惟聖人也注人の心の理を盡して、形に具る道理を充廣めて、能其々に踐行ふ事あれば、人と天地と相似て違はず、故に惟肖と云、目には見る道理、耳には聽道理、口に言道理、肢體の動く道理、其々の道理の儘に行ふて違はぬを、踐形と云【惟肖】は、尚書說命上篇に出たり、人物の形の似たるを云、此には其字を借用て、人の能天に事

【疲】注勞乏之人、つかるゝと訓ず、くたびれ、とぼしき者也【癃】注罷病之人、史記平原君傳、罷癃之病、索隱曰、罷、音皮、癃、音呂宮反、罷癃、背疾、言腰曲而背癃高也、癃は、背蟲の病なるべし、醫書にては、癃淋とて、淋病也、此には不レ合【殘疾】殘は、增韻、周傷也、疾は、急病也、形神憔悴したる病也、又張子詔が註の如なれば、廢れて不レ可レ治の病也【惸】注憂也、字彙、無二兄弟之可一レ依也、詩小雅、哀二此惸獨一、孟子作レ煢うれひ共、ひとり共讀り兄弟の依賴むべき無を云【獨】注老而無レ子、孟子梁惠王下篇の語也、年老て無レ子、獨身なるを云【鰥】注老而無妻、亦孟子の語也、やもめ共、やもを共讀り【寡】注老而無レ夫者、亦孟子の語也、やもめと讀り【顚連】句解曰、綿延之疾也、文選句解曰、有二顚沛連綿之疾一、古解云、連、去聲、不レ進貌、易蹇卦、往蹇來連、羅山曰、くつがへり、たふれつらなるを云、愚謂、顚は顚倒、たふるゝ也、連は蹇連、進み難き也、進退迷惑の義也【無告】書大禹謨曰、不レ虐二無告一、孟子曰、天下之窮民而無レ告者也、瀛洲渡曰、是無二父母妻子一可レ告、誰に此憂へ苦む事を、告訴ふべき者も無を云也【凡天下—】天下の人は、總て皆天地の子也、此數多の迷惑なる者は、我兄弟の顚連して、告る事なき者に非ずやと也、子詔曰、疲癃、老疾也、殘疾、廢疾也、惸獨鰥寡、幼而無二父母一者、老而無レ子者、老無レ夫者、皆天民之窮者也、然數等無レ告者、與レ吾同生二於天地一、其困苦如レ此、是乃吾兄弟顚沛而無二告訴一也吾其可レ不レ恤乎【以上皆—】天地を父母として出生する道理無二不同一を、理一と云、然れ共、人に種々の品あるを分殊と云、本は一つなれ共、末分るゝの義也、朱子曰、西銘自レ首至レ末、皆是理一分殊、乾父坤母、固是一理、分而言レ之、便見二乾坤自乾坤、父母自父母一、

明理一分殊之義一

于レ時保レ之、子之翼也、（畏レ天以自保者、尤其敬レ親之至也、）**樂且不レ憂、純乎孝者也、**（樂レ天而不レ憂者、尤其愛レ親之純也、）

詩周頌我將之篇曰、畏二天之威一、于レ時保レ之、天理を恐れて、自ら身を保つを云【子之翼—】大雅文王有聲篇曰、貽二厥孫謀一、以燕二翼子一、句解翼者、敬也注天を恐て自ら保つは、子として愼みて、親を敬ふの至極也、子詔曰、畏二天之威一、若レ畏二父母之嚴一、保二其心一而不二敢少肆一

尊高年所以長其長、天下之老一也、故凡尊天下之高年、乃所以長吾之長、慈孤弱所以幼吾幼、天下之幼一也、故凡慈天下之孤弱、乃所以幼吾幼、

【高年】揚子曰、年高德卲、宿老年よりの事也【長其長】年の長する人をば、其禮を以て尊ふ也、孟子梁惠王上篇曰、老吾老以及人之老、註、老、以老事之也、張子韶曰、高年、先我生於天地之間者也、有若吾兄然、吾尊之是長天地之長也、年老たるを尊ふは、其年長ぜるを長ぜりとする義也〔注〕【天下之老】孟子離婁上篇云、二老者、天下之大老也、天下の老人は、何れも我老人と不同なし、故に凡そ天下の高年を尊ふは、我家の長老を尊ふと一理也【慈孤弱―】【慈】は慈愛、いつくしむと讀り【孤】は、幼ふして無父の稱、みなしごと訓ず【弱】は、若字と通ず、わかしと讀り、幼少なる義也、孤弱二字、尚書盤庚出たり、梁惠王篇曰、幼吾幼、以及人之幼、註、幼、以幼畜之也、張子韶曰、孤兒弱子、後吾生於天地之間者也、有若吾弟然後吾慈之、是幼天下之幼也、天下の幼少孤獨は、我家のをさなき者と一理也、故に一切の孤弱を愛し憐れむは、吾家の幼少なる者を慈む道理也、

聖其合德、聖人與天地合其德、是兄弟之合德乎父母者也 賢其秀也、賢者才德過於常人、必是兄弟之秀出乎等夷者也、

文言曰、夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、張子韶曰、聖人合天地之德者也〔注〕聖人は、天地と德を合せ陰陽と理を同す、然れば天地を父母とする、所有兄弟の内にて、德を父母と合せたる人は、聖人也【賢其秀】子韶曰、賢人特天地之秀者也、禮記禮運篇曰、人者、天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也〔注〕賢人は、才も德も、常の人に過たり、然ば天地を父母とする兄弟の内にて、等類を拔出たる者也【夷】韻會、等也、禮記、在醜夷不爭、鄭註、醜、衆、夷、儕也、詩、貪人敗類、箋云、類、等夷也、

凡天下疲癃殘疾、惸獨鰥寡、皆吾兄弟顚連而無告也、疲者、勞乏之人、癃者、罷病之人、惸者、憂也、獨者、老而無子、鰥者、老而無妻、寡則老而無夫者、凡天下之人、皆爲天地之子、非吾兄弟而無告者而何哉○以上皆發

子註、賛、猶助也、與天地參、謂與天地並立而爲三也、又曰、賛天地之化育、人在天地間、雖只是一理、然天人所爲、各自有分、人做得底、卻有天做不得底、如天能生物而耕必用人、水能潤物而灌必用人、火能熯物而爨必用人、財成輔相皆人非賛而何、董仲舒策曰、爲人君者、正心以正朝廷、正朝廷以正百官、正百官以正萬民、正萬民以正四方、四方正、遠近莫敢不一於正、而亡有邪氣奸其間者、是以陰陽調風雨時、群生和而萬物殖、諸福之物可致之祥、莫不畢至、而王道終矣、中庸首章曰、致中和、天地位焉、萬物育焉、朱子註、育、遂其生也【化育】は、天地の物を化生し、育ひ長ずる也、如此天地と並て、造化を助るに至て、其性分の功と用と、全ふし遂て、少しも缺る所なし、但し吾性分の外なる事を、無理に強て行ふには非す、天然吾に具る所を行ふ也、

大君者吾父母宗子、乾父坤母而人生其中、則凡天下之人、皆天地之子也、然繼承天地、統理人物、則大君而已、故爲宗子○宗子、猶長子也 其大臣宗子之家相也 輔佐大君、紀綱衆事、則大臣而已、故爲宗子之家相○家相、猶宰相也、

易履卦六三曰、武人爲于大君、張子詔曰、大君、謂人主、吾爲天地之子、人主主天地之家事、是大君吾父母宗子也【大君】は、王者を云【宗子】は、嫡子也注乾を父とし、坤を母として、人其中間に生るれば、天下の人は、悉く天地の子也、其中にて、天地の德を受繼て、人物を總て、不殘是を治め、國家を安ずる者は、只大君也、故に宗子とす、又長子とも云、假令は家の內に子多くあれ共、其內に嫡子一人總領となれば、其庶子兄弟は、皆臣也、其如く天下の人多けれ共、聰明睿智の君と成て、天下を治め、天子と成、國君と成は、即ち天地の總領也【其大臣—】は、三公宰相などを云、賢人にして、君を輔け、政をする者也【家相】は注猶宰相也、宰相の義は、待漏院記に見へたり、張子詔曰、大臣、相天子以繼天地之業、是大臣者、宗子之家相也【紀綱】朱子學的曰、張之爲綱、理之爲紀、字彙、大曰綱、小曰紀、總之曰綱、周之曰紀、紀は、本綱の目の縷也、細わりの周ふして缺ざるを曰、政の小結り也、綱は、網の大綱也、政事の大結りを云【衆事】は、諸事也、大君を助け、政事に紀綱として總治むるは、天子の宰相也、

氣の純なるを得れば、質正しく行全し、【駁】は、ぶちと讀り、斑らに雜る也、氣の駁なるを受れば、質偏にして行惡し、氣清明に質純粹なるは、聖賢君子善人也、氣濁塞し質偏駁なるは、愚不肖小人惡人也、是氣の往來聚散する所に、亦不同ある故也、此氣の不同ある故に、受る所の性理は一つなれ共、生質に明暗純駁あり、性に明暗あるには非ず、水精の玉の、清水にあると、濁水にあるとの如く也、性は玉に比し、水は氣に喩ふ、性は善也と云るは、此故也、人正氣を受れは、其心尤も靈明にして、性命の本體に通ず、天地の內に、同く並び生ずる物の中に於て、只人を貴しとす、人は萬物の靈長と云るは是也、人と人とは同類なる故に、同胞と云也、然れば我より人を見る事、兄弟の如しと也、天地の間、人皆同胞なれば、天下を一家とし、中國を人として、少も彼我の隔なく思ふと也【間然】論語泰伯篇曰、禹吾無間然矣、論語にては、そしる義、此にては、へだつる也、張子韶曰、既爲天地生成則凡與我同生於天地者、皆同胞也【物吾與—】物は、鳥獸艸木を指、是は偏氣を得て、性命の正き理に通ずる事能はず、假令は鳥獸も、寒熱を知、飢飽を知、痛痒を知て、動きはたらく事はあれ共、人の如くに義理を知明むる事なし、其中に烏の反哺するは孝也、羊の跪て乳を飮は禮也、虎狼も子を育するは仁也、鴻雁の時を知は信也、蜂蟻の君臣あるは義也、又犬の夜を守り、雞の時を報じ、獺の魚を祭り、牛の耕すの類はあれ共、只其一つのみを知て、萬づの道に通する事能はず、是人と物との不同也、然れ共其體性を受出る所を本づき原ぬれば、元來天地の理氣より出て、同く生を得る所以は、人と不同なし、故に吾與と云也、去程に人物を視る事、我友達の如くする理ある也【與】は、與黨友達の義也【儕輩】も、亦我並の人、友達を云、既同處於天地間、則凡森森而生、蠢蠢而植者、皆我黨也【凡有形—】摠じて形を天地の間に受たる者或は鳥獸も或は艸木も、有情非情共に、悉く其理に從ふて、其宜きを不遂と云事なし、是人より天地の間の物を視るの仁道也、故に儒者の道は、人を以て天地に參はり其化育の功を賛け導く、中庸二十二章曰、惟天下至誠、爲能盡其性、能盡其性、則能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則可以賛天地之化育、可以賛天地之化育、則可以與天地參矣、朱

體に充滿して、動きはたらく所は、是氣なり、其帥は性也、故に天地之帥吾其性と云、張子韶曰、吾性、不止吾視聽言貌思、凡天地之間、若動作、若流峙、若生植飛翔潛泳、必有造之者、皆吾性也、問天地之塞、如何是塞、朱子曰、塞與帥字、皆張子用字之妙處、塞、乃孟子塞天地之間、體、乃孟子氣體之充者、有一毫不滿不足之處、則非塞矣、帥、即志氣之帥、而有主宰之意、西銘之一篇、正在天地之塞吾其體、天地之帥吾其性兩句、乾爲父、坤爲母、便是理一而分殊、予茲藐焉、混然中處、便是分殊而理一、西銘有箇劈下來底道理、有箇横截斷底道理註【深察乎此ー】人能深く此天地之塞、天地之帥の句を體認察識せば人物乾坤を父母として、天地之間に生じ、其理氣混合して、兩間に居るの實理を見著べしと也、

民吾同胞、人物並生於天地之間、其所資以爲體者、皆天地之塞、其所得以爲性者、皆天地之帥也、然體有偏正之殊、故其於性也、不無明暗之異、惟人也、得其形氣之正、是以其心最靈而有以通乎性命之全體、於並生之中、又爲同類最貴者焉、故曰同胞、則其視之也、亦如己之兄弟矣、惟此同胞之人、故以天下爲一家、中國爲一人、無間然也、

物吾與也、物、則得夫形氣之偏、而不能通乎性命之正、故與我不同類、而不若人之貴、然原其體性之處、自是亦本之天地、而未嘗不同也、故曰吾與、則其視之也、亦如己之儕輩矣、故凡有形於天地之間者、若動若植、有情無性、莫不有以若其性、遂其宜焉、此儒者之道、所以必至於參天地、贊化育、然後爲功用之全、而非有所强於外也、

【民】は我に對するの詞、人物を指也、農民を云には非ず【同胞】えなをおなじふすと讀り胞を同するは孖也一腹の兄弟の義也白孔六帖十九云兄弟曰同胞、胞、胎也注人と物と、天地の間に相並び生ず、其資用て、氣體とする所は、皆天地の氣也、其受得を性とする所は、皆天地の理也【體有偏正ー】天地の氣に、正あり偏あり、又通あり塞あり、又清あり濁あり、正しく通ずるあり純あり駁あり正氣を受たる者は、人と成、頭圓なるは天に象り、足方なるは地に象り、兩眼は日月に象り、百會は北辰に象り、鼻は山に象り、毛髮は艸木に象り、便溺は江河に象り、五藏は五行に象る、是人天地と同氣同德の驗也、偏にかたくなる氣を受たる者は、鳥獸蟲魚と成頭横に著て、俯て行、故に横生と云也、塞る氣を受る者は、艸木と成、非情の物にて、首を根とし、肢體を枝葉とす、故に逆生と云、人淸る氣を受れば、知識明か也、濁れる氣を得れば、心鑑昏し、【純】は、一色にして雜はらぬ也、もつはらと讀り、

天、蓋父母生我也者、而所以生之者、天地也、天賦以氣、地賦以形、父母固我父母也、天地亦我之父母也朱子荅陸子美書曰、西銘之説、猶更分明、今亦且以首句論之、一身固是父母所生、然父母之所以爲父母者、即是乾坤、若以父母而言、則一物各一父母、若以乾坤而言、則萬物同一父母矣、萬物既同一父母、則吾體之所以爲體者、豈非天地之塞、吾性之所以爲性者、豈非天地之帥哉、古君子惟其見得道理眞實如此、所以親親而仁民、仁民而愛物云云〇日本記に、陰神陽神の、日月山川を產と云も、此義に可通、

子兹藐焉、乃混然中處、（人稟氣於天、賦形於地、藐然之身、混合無間、而位乎中、子道也、）

子は、子厚自ら一人を云に非ず、一切の人を指也、句解【藐】音眇、韻會、小也、すこしきなる貌【混然】水の濁たる如に、打合せ雜はるを云【中處】人は天と地との中間に居る也、張子韶曰、乾吾父、坤吾母、吾乃乾坤之子、與人物混然處于中間者也【注】【稟】受也【賦】字彙發施也、給與也、分畀也、稟受也、人たる者、氣を天より受、形を地より受て、以て生ず、其身は僅かに小さしと云共、天地の廣大なると、理氣混同して無隔、二儀の間に位し居る、然れば乾父坤母に對して、人其間に生るゝは、子の道也、

故天地之塞吾其體、（乾陽坤陰、此天地之氣、塞乎兩間、而人物之所資以爲體者也、故曰天地之塞吾其體、）天地之帥吾其性、（乾健坤順、此天地之性、爲氣之帥、而人物之所得以爲性者也、故曰天地之帥吾其性〇深察乎此、則父乾母坤、混然中處之實可見矣、）

孟子公孫丑上篇曰、敢問何謂浩然之氣、曰、難言也、其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間、又曰、夫志、氣之帥也、氣、體之充也【注】乾は陽也、坤は陰也、陰陽の氣、天地の間に盈塞る、其氣を資受て、人物體質を成故に、天地の間に塞れる氣は、我此體也と云【兩間】は、天と地との間也、此【吾】字も、亦一切の人物を指也、張子韶曰、吾之體、不止吾形體、塞天地之間、如人物、如山川、如艸木、如禽獸昆蟲、皆吾體也【天地之帥―】【注】乾は健にして、坤は順也、健順は、天地の性也、人生れて、心に此健順五常の理を具足するを、性と名付、此性氣の帥と成、帥は、大將也、大將の士卒を使ふ如く、性は、人心の主人公也、我

長安、皆此所也、子厚は、此地の人也、宋朝の諸儒、濂洛關閩と云時は、濂は周茂叔、洛は二程子、關は子厚、閩は朱文公を指也、二程子、邵康節、子厚、相伴ふて、互に道を論ぜり、子厚一書を著はして、理窟と名付、又西蒙をも作れり、

乾稱父、坤稱母、天、陽也、以至健而位乎上、父道也、地、陰也、以至順而位乎下、母道也、然不曰天地而曰乾坤者、天地、形體也、乾坤、其性情也、乾者、健而無息之謂、萬物所資以始者也、坤者、順而有常之謂、萬物所資以生者也、是乃天地之所以爲天地而父母乎萬物者、故指而言之、

易說卦曰、乾、天也、故稱乎父、坤、地也、故稱乎母、又乾卦象曰、天行健、又繫辭下曰、夫乾、天下之至健也、德行恒易以知險、夫坤、天下之至順也、德行恒簡以知阻、天は陽の積て成者也、陽は健かにして强し、天至て健なるを以て上に位す、故に父の道也と云、地は陰の積て成者也、陰は順にして陽に不逆、地至て順なるを以て下に位す、故に母の道也と云【然不曰天地—】易、乾元亨利貞註疏曰、天者、定體之名、乾者體用之稱、言天之體以健爲用、又天行健、注疏曰、天是體名、乾是用名、健是其訓、天地とは不云して、乾坤と云事は何故ぞや、天地は、形を指て云時の名也、乾坤は、天地の心理を指て云時の名也、天の健にして不息、地の順にして不逆は、其用其德にして、即亦其訓義也【乾者健—】乾字の義は、健也、易文言曰、大哉乾乎、剛健中正、純粹精也、乾は、健にして息こと無を云也、周天三百六十五度四分度之一、天地開闢より以來、少も無懈怠毎日毎夜運行する事は、是至て健かなるに非ずば、能此の如くならんや、天は氣を以て施す、萬物是を受得て生ず、彖曰、大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形【坤者順—】文言曰、坤道其順乎、承天而時行、象曰、地勢坤、坤の義は、順にして有常也、順は、不逆也、常は、不變也、地は天の道に順ひ、其氣を受て以て形を成す、萬物是に資て現れ成、此道天地位を定めしより、古今少も變せず、彖曰、至哉坤元、萬物資生、乃順承天、坤厚載物、德合無疆、含弘光大、品物咸亨【天地之所以—】天地の天地たる故は、即ち乾坤の性情あり、健順の用德ある是也、萬物の父母たる故は、天上に在て、陽氣を施して發生し、地下に在て、陰氣を行ふて化成する是也、尙書泰誓上云、惟天地、萬物父母、眞西山曰、西銘推事親之心以事

我之同類矣、此自其一身之父母者言之、所謂分殊者也又況其曰同胞、曰吾與、曰宗子、曰宗相、曰老曰幼、曰聖曰賢、曰顚連而無告、則於其間只有如是等差之殊哉、但其所謂理一者、貫乎分殊之中、而未始相離耳、此天地自然古今不易之理、夫子始發明之、非一時救弊之言、姑以強此而弱彼也【此篇全係一】今此眞實の註者、晦菴の註の儘に隨て、其所所に分析して發明する也○程明道曰、訂頑之言、極醇無雜、秦漢以來、學者所未到、又曰、訂頑一篇、意極完備、乃仁之體也學者其體此意、令有諸己、其地位已高、到此地位、自別有見處、不可窮高極遠、恐於道無補也、朱子語錄、劉子澄言本朝只有四篇文字好、大極圖、西銘、易傳序、春秋傳序○萬里曰、此篇七段、自篇首至中道第一段、自故天至秀也第二段、自凡夫至告也第三段、自于時至不才第四段、自其踐至匪懈第五段、自惡旨至奇也第六段、自富貴至末第七段、

張子厚

東都事略一百十四、儒學傳五十七、張載、字子厚、長安人也、學古力行、篤志好禮、爲關中士人所宗、世所謂橫渠先生者也、少時喜談兵、十八以書謁范仲淹、仲淹責之曰、儒者自有名敎可學、何事於兵、因勸學中庸、載感其言、益窮六經、至釋老書無不讀、與程顥程頤講學、學進士、爲祁州司法參軍、以疾求去、遂築室南山下、敝衣疏食、專精治學、著正蒙書、行于世、大明一統志鳳翔府、張載、郿人、學進士、爲祁州司法、歷渭州簽判、召爲崇文殿校書、同知太常禮院、神宗立、召問治道、以漸復三代爲對、與執政不合、告皈居橫渠、危坐一室、潛心精思、敎人以禮、卒謚曰明、淳祐初封郿伯、從祀孔子廟庭、言行錄外集四、張載橫渠先生明公、字子厚、先世大梁人、後寓鳳翔、嘉祐二年、登進士第、卒年五十八、呂與叔作行狀、尹焞云、先生昔在京坐虎皮說易、聽徒甚衆、一夕二程至論易、次日先生撤去虎皮曰、吾平生爲諸公說者皆亂道、有二程近到、深明易道、吾所弗及、汝輩可師之、朱晦翁贊之曰、蚤說孫吳、晩逃佛老、勇撤皐比、一變至道、精思力踐、妙契疾書、訂頑之訓、示我廣居、橫渠先生張子厚は、宋朝關中の大儒也、關中は長安の都を云也、東に函谷關あり、南に嶢關武關あり、西に散關あり、北に蕭關あり、此四關の內を關中とす、秦の咸陽、漢唐の

錄第二、性理大全第四にも載たり、朱子答汪尙書書曰、東西銘、雖同出於一時之作、然其詞義之所指、氣象之所及、淺深廣狹、迥然不同、是以程門專以西銘開示學者、而於東銘則未之嘗言、蓋學者誠於西銘之言、反復玩味而有以自得之【晦菴】朱熹、字元晦、亦云仲晦、居紫陽山下、從學於屛山藉溪、初居崇安、扁讀書堂、曰紫陽書堂、號紫陽先生、後築室建陽、號雲谷老人、其艸堂曰晦菴、自號晦翁、晩居考亭精舍、號滄洲病叟、最後號遯翁、宋紹熙中、除煥章待制、登第五十年、任于外者僅九考、立朝纔四十六日、宋寧宗慶元六年庚申三月甲子卒年七十一、謚文公、理宗朝贈太師、封徽國公、晦菴先生は、朱松の子、李延平の高弟、宋朝の大儒也、聖人道統の傳を云時は、孔子、曾子、子思、孟子、周子、程子、楊龜山、羅豫章、李延平、朱文公と次第する也、文公此銘を註せり【天地之間―】天地之間、古今の理、只一つにして二つに非ず、然れ共、天の道は男と成、地の道は女と成、易係辭上曰、乾道成男、坤道成女、乾知大始、坤作成物【二氣―】易咸卦彖曰、二氣感應以相與、又曰、天地感而萬物化生、陰陽の二氣交り感じて、木火土金水の五行と成、五行變化して、萬物を生ず【化】字彙、造化、天地寒暑晝夜、皆造化所爲也、造化中有變化、變者、化之漸、化者、變之成、又因形而易謂之化、又天道陰陽運行爲化、春生冬落爲變、又自少而壯、壯而老爲變、自無而有、自有而無爲化【其大小―】物の大小の差別、親疎の不同、十より百に分れ、百より千萬に分れて、齊同なる事能はず、帝王と臣民とは、大小有分限也、人と人とは親しく、人と物とは疎か也、又父子兄弟は親しく、他人は疎か也、如此次第あるを等と云【不有聖賢―】聖人賢人出で、大小親疎、千萬異なる品に因て、其本源一理の同き所に復て、親より疎に及ぼし、近より遠に至らしむる事不有は、誰やの者が是を能せんやと也、此銘の本意如此、按ずるに此論は、朱子荅張南軒書中の語也、問西銘專爲理言、不爲分設、朱子曰、西銘書、横渠所以示人、至爲深切、而伊川又以理一分殊贊之、言雖至約、而理則無餘、蓋乾之爲父、坤之爲母、所謂理一者也、然乾坤者、天下之父母也、父母者、一身之父母、則其分不得不殊矣、故以民爲同胞、物爲吾與也、自其天下之父母者言之、則所謂理一者也、然謂之民、則非眞以爲吾之同胞、謂之物、則非眞以爲

合ふて無私、慈悲親愛するを仁と云也、無之は不可爲人、果實の仁無れば、腐て生せざるが如し、人を愛せざるは、中風の不仁也、人を愛するは、無病の者の癢痾を身に覺るが如し【註】【照起句】此第七段、首段の均氣同體と云句に相應照して、人物一體同理なる事を云也、

一日至焉、莫非吾事、顏何人哉、晞之則是、【揚子學行篇】晞顏之人、亦顏之徒也○第八節、因顏之克己以自勵、

論語、一日克己復禮又雍也篇、子曰、回也其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已、言心は、一日克己して仁に至るは、皆我可爲事也【顏何人哉】孟子滕文公上篇顏淵曰、舜何人也、予何人也、有爲者、亦若是【晞之】之字は、顏子を指、昔し顏子克己して、其心不違仁、與叔が意、其顏は何人ぞや、我も亦是を晞はゝ、即ち顏が如なるべしと也【註】【揚子】漢の揚雄が著はす所の書也、顏淵を晞ふの人は、亦顏淵之徒也、孟子の孳孳爲善者、舜之徒也と云の意也、

○西銘、

横渠先生銘其書室之兩牖、東曰砭愚、西曰訂頑、伊川先生曰、是起爭端、不若止謂之東西銘、晦庵先生曰、天地之間、理一而已、然乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物、則其大小之分、親疎之等、至於十百千萬、而不能齊也、不有聖賢者出、孰能因其異而反其同哉、西銘之作、意如此○此篇全係晦庵先生舊註、今析而明之、

【張横渠】我室二つの窓に、銘を著て、東をば砭愚と名付、西をば訂頑と名付【書室】は、學問所也、今の書院の類也【砭愚】は、愚痴の病に砭を刺て賢く成る樣に療治する義也【砭】字彙、以石鍼刺病【訂頑】は、かたくなゝるをたゞすと讀り、是も愚頑を敎て正す義也【頑】癡也、鈍也、葉采曰、頑者、暴忍而不仁、愚者、昏塞而不智、訂頑主仁而義在其中、砭愚主智而禮在其中【程伊川】此二つの名を見て、是は爭ひの端を起す、東西の銘と云へしと被申に依て、横渠其に隨ふて、西銘東銘と題せられし也、砭愚訂頑の名は、怪しく人の耳に立故に、爭の端を引起すと云義なるべし、愚謂く、此二つの名、皆我身の愚頑なるを療し救へば、他人の上には預らぬ事なれ共、指出たる事をば、人砭議したがる者なれば、只西銘東銘と云平易なる名に從ふべしとある義也、二つの銘同く一時の作なれ共、西銘は義理深く廣し、東銘は淺く狹し、故に程子の門人に被示にも、西銘を擧用て、東銘をば不云、西銘は、近思

内に盛ならば其行事に少し取べきこと有共、何ぞ言に足んやと也、羅山曰、心底私欲ばかりにて、其外の餘を可取様もなき也、

亦既克之、皇皇四達、洞然八荒、皆在我闥、

【皇皇】廣大貌【四達】老子經曰、明白四達、莊子曰、四達皇皇、四方に通過する也【洞然】廣豁貌、ほがからかに開けて、無礙の義也【八荒】韻府八表也、八方の遠き末を指、揚雄傳、陟西岳以望八荒、爾雅釋地曰、觚竹、北戶、西王母、日下、謂之四荒、註皆四方昏荒之國也、淮南子曰、九州之外、乃有八殥、八殥之外有八紘、八紘之外有八極云云、八紘も、八荒と同し【闥】字彙漢號禁門曰—、師古曰宮中小門、詩齊風、在我—兮羅山曰、小戶也、妻戶の事也、字書の註とは相違せり、只今は門闥と可見、言心は、既に敵に勝時は、廣大にして四方に通達し、八方の果の國迄も塞りなく遠く開て、皆我一家と成也、能己に克時は、亦如此、心內廣明にして、天下我仁に皈服するの喩也、朱子此洞然八荒、皆在我闥の句、心は好と云共、高遠に馳て、實を失んかとて、天下皈仁を、克己の驗として、洞然八荒の語を不取、

孰曰天下不歸吾仁、第六節、言克己以爲仁

癢痾疾痛、擧切吾身、此第七節、論人物一體、照起句、

論語顏淵篇曰、一日克己復禮、天下皈仁焉、此段上を承て云、既に能克己復禮すれば、天下皆我仁に皈服する也【癢痾—】癢、皮痒也、事文類聚、作痒痾、萬里曰、痾病也、羅山曰、二字は、かゆき病也、疾痛、羅山曰病て痛む也、青松曰、言其病之甚者、孟子告子上篇曰、今有無名之指、屈而不信、非疾痛害事也、又曰、無尺寸之膚不愛焉、萬里曰、凡此大人、以中國爲一人、蓋其有一體之病者、莫不切痛於吾身、一日克仁之功、苟至於仁焉、彼視人猶己之事、莫非吾身分內之事也、痒痛も寒熱も、吾身に覺る事は切也、人物盡く一氣同體なれば、我身の痒痛を患るが如く、人の孤獨凍餒をも不便に思ひ遣て、仁政を施し行ふべし、不然は不仁也、【不仁】は、醫書にて、ひとはたゞならず共、身ともおぼへず共讀り、中風痿痺を病る者の、身に覺へなきが如し、仁は、人の生理、心の苗根也、理に

篇、今此下民、或敢侮予、天より辭命を受て行へば、誰人か我を欺き侮る者有んや、道理のまゝなれば、我に障はる者なしと云義也、

且戰且徠、勝私窒慾、此第三節、論存誠可以閑邪　昔爲寇讎、今則臣僕、

萬里曰、徠字、與來義同、或通用、青松曰、戰則伐其不庭、猶克去己私也、徠、則懷來其己服之人、猶存誠以還其本然之天、羅山曰、【且戰】とは、天理と私欲と、胸中にて戰ふ也、常の人は、天理負て私欲可勝、有志者は、能學ふ故に、私欲に戰ひ勝て、天理を守る也【且徠】とは、敵強して順はざるを、我戰ふ時は、降參して來るが如し、氣は志に從ひ、私は負て理に返るを、徠と云也、愚謂く、且戰且徠とは、戰ひもしつ、徠しもしつする也、戰て未勝得、招ひて未徠得の意、兩の且字可著眼、歐陽永叔讀書詩、是非自相攻、去取在勇斷、初如兩軍交、乘勝方酣戰、當其旗鼓催、不覺人馬汗云云【勝私】は、即ち克己也【窒慾】は、欲心萌す所を止むるを云也、易損卦象曰、懲忿窒慾【昔爲寇―】未勝前は怨敵なれ共、已に勝亡して後は、皆我に順ふて、所從と成也、

方其未克、窘吾室廬、婦姑勃磎、安取厥餘、婦、媳婦也、姑、宅母也、勃者、爭也、磎者、石之礙也、事出莊子、〇一心之中、私意起伏　此第五節未克之私、

未だ敵に勝さる時は、我家に逼入て迷惑せしむ、未た己に克ざる時は、心に礙り亂る事、喩へば我家の狹くせはしき内に、よめしうとめ中惡くて、爭ひ鬩ぐが如し【室廬】は、心に喩へ、【婦姑】は天理私欲に譬ふ、心の躁がしきを比して、窘室廬と云諺【媳婦】は、よめ也、字彙、俗謂子婦爲媳【宅母】は、しうとめ也【勃磎】は、あらそひ、からかひ、摑み合、打き合義也【莊子】外物篇、室無空虛、則婦姑勃磎、希逸曰、勃磎、爭鬩也、窄小之屋、婦姑常在面前、則易至於爭鬩、此即不虛曠之喩【起伏】起りつ、止つする也、一心如此私欲起伏す、少間伏する事あれ共、眞實に斷絕し止に非ずして、時に又起り出るを云也、瘧を病者の、間日に發せざれ共、亦必ず發作するが如し、我家内にて、婦姑爭鬩せば、其餘少し善事有とも、不足以取也、私欲

心—】人に勝んとする心の、横さまに動き出、擾擾と亂れて、齊一にそろはず、勝心の勝は、克己の克に非ず、我便によき樣に、人に勝んと思ふは、私より出、此彼より發動する程に、如此亂て、一心齊はざる也、

大人存誠、心見帝則、初無吝驕、作我蟊賊、（蟲食根曰蟊、食禾節曰賊、）

【大人】聖賢君子を指也【存誠】心に實理を不失也、【帝則】詩皇矣篇、不識不知、順帝之則、註天理也、形を以て云へば天と云、主宰を以て云は帝と云、上帝天帝是也、法則は理に合ふ、然れば、帝は天也、則は理也、帝則は、即ち天理也【吝驕】論語泰伯篇、子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已、註、驕、矜夸、吝鄙嗇、吝は、やぶさかると訓ず、易にては、やつさしと讀り、しはく惜む義也、驕は、をごり也、肆まゝに高ぶり、いたかなる義也、氣の乏しきを吝とし、氣の滿るを驕とす、各別の樣なれ共、心に在て、吝は驕の根也、驕は吝の枝葉也、假令は、物を惜てきたなきは、驕にては無れ共、此物を人は持ね共、我は多く持たりと、ひけらかす、是根本枝葉の喩見つべし、【蟊賊】いなごの蟲の、禾の根を食ふを蟊とし、節を食ふを賊とする也、爾雅毛詩に見へたり、心を傷ふ譬に云也、大人は天理を見る故に、心に吝驕の蟊賊なき也、

志以爲帥、氣爲卒徒、（【孟子】夫志、氣之帥也）奉辭于天、誰敢侮予、

註孟子公孫丑上篇の語也【志】は義理の志也、志字は、士心に從ふ、士は、說文に儒者、漢書に學以居位曰士とあり、士の心に從ふは、義理の志なる事勿論也、又士字从十从一、說文、數始於一終於十、孔氏曰、推十合一爲士、蓋し士は、志行十分無不足の意歟【帥】將帥也、羅山曰、ひきふと讀り、大將の事也、一人して千萬人をひきふるを云【氣】は、形に充滿して動く者也、血氣とも可云【卒徒】は、諸軍勢也天理に從ふ志を以て將帥とし、氣をば卒徒とす、本心より氣を使ふを本正とす、朱子中庸序に、道心常爲一身之主、而人心每聽命焉とあるも此段の心也、若血氣に犯されて、本心を亂るは、卒徒より大將を下知するが如し、逆なる事也【奉辭—】書仲虺之誥曰、玆率厥典、奉若天命、萬里曰、言奉受上天之命辭【誰敢—】詩鴟鴞

心體昭昭具在、伊川不破此說、克己銘、不合以己與物對說、不曾說著本意、

凡厥有生均氣同體、此兩句、起謂人生同一本原、胡

爲不仁、我則有己、

【有生】は、一切の生あるを云也、天地の間、生とし生る者、皆乾坤を父母とし、一氣同體なれば、天地同根、萬物一體の理也、此二句は、人の生れ出る本原、無不同事を云也【胡爲―】人物一理なれば、天下盡く仁心なるべきに、何故に不仁なるぞと云へば、己と云私を有ちて、物我の隔あり彼此の不同出來する也、

物我既立、私爲町畦、町、田區也畦、田隴也勝心

橫發、擾擾不齊、此第二節、論私心之擾擾、

物と我と別別に立故に、私其隔と成也【町畦隴】三字共に田の界、うね也【田區】とは、田のうねの、一切一切に界ふたるを云也此にて皆借用て、差別分隔ある事を云、克私は、物我同理也、私を立れば、物我二つに成て、我を善とし、物を非として、私欲をする也【勝

立、物我並觀、則天下之大、莫不皆在吾仁中、說來恁地大、故人皆喜其快、殊不知未是如此、間與叔之意與下文克己之目全不干涉、此只是自修之事、未說著外面在曰、須是恁地思之、私未克云云、與叔克己詩克己工夫未肯加吝驕封閉縮如蝸、試於清夜深思省、割破藩籬即大家、

呂與叔

宋史列傳九十九、呂大臨、字與叔、京兆藍田人也、兄弟四人、大忠、大防、大鈞、大臨云云、東都事略列傳七十二通六經尤深於禮富弼致政于家、爲佛氏之學、大臨奏記于弼曰、大臨聞之古老三公無職事、惟有德者居之云云、今大道未明入趨異學不入于莊、則入于釋疑聖人爲未盡輕禮義爲不足學、人倫不明、萬物憔悴云云、弼謝之、大臨、元祐中爲大學博士、遷秘書省正字卒、士君子惜之、言行錄外集六大臨學於橫渠橫渠卒、乃東見二程而卒業云云一統志西安府、呂大臨、大忠弟、學於程頤與謝良佐、游酢、楊時、在程門號四先生、又見于伊洛淵源錄、與叔號藍田先生、朱子語錄云、與叔論顏子等處極好、又曰、未發之前、

【諸葛亮】字は孔明、三國の時、南陽の隆中と云所に、艸廬を結で隱居し、自ら隴畝の間に耕す、蜀の帝劉備三度迄尋行て遂に以て相とす、詳に出師表の題下に記す【揚雄】字は子雲、前漢の蜀郡成都の人也、居岷山之陽、有田一廛、有宅一區、方輿勝覽、成都有艸玄臺載酒亭、已に進學解の註に詳也、此陋室をば、何れにか擬すべきぞ、孔明が廬、子雲が亭を以て比せんと也

孔子云、何陋之有、〔語〕子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之何陋之有、

[注]論語子罕篇之語也、集註曰東方之夷有九種、欲居之者、亦乘桴浮海之意、君子所居則化、何陋之有、後漢書東夷傳、夷有九種、曰、畎夷、于夷、方夷、黃夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷、孔子世衰へ君暗して、道の行れぬ事を歎き、九夷に往て居んと宣ふ、九夷は、東方九種の夷國也、朝鮮日本なども、其内にありと也、或人九夷陋しかるべしと云ければ、孔子答て、君子居之何の陋き事の有んと宣へり、此語を引て、室は陋しく共、主人君子ならば、陋しかるまじきと云收めて、此一篇の結句とせり、

○克己銘

勝己之私之謂克、蓋謂克去己私、復還天理也、篇中多用將帥卒徒寇讎臣僕等字、分八節、毎四句一換韻、

克己二字の義は、視箴の註に詳也[註]己が私欲に勝去を克と云、己が私に克去は、仁の方也天理に復還るは、復禮の義也、克は本敵に勝の謂なる故、此一篇の中に、將帥卒徒寇讎臣僕等の字を用ふ委く本文の註に記す、此篇八段に分つ、毎に四字を一句とし、四句毎に韻を換る也、梅花無盡藏曰、此文一篇舊說八段、新說九段、自篇首至有己新舊同第一段、自物我至不齊新舊同第二段、自大人至蟊賊四句、新說第三段、舊說自大人至室慾十句爲第三段、自志以至侮予新說第四段自且戰至臣僕新說第五段、舊說自昔爲至臣僕二十句爲第四段、自方其至厥餘新說爲第六段、舊說爲第五段、自亦既至我闥新說爲第七段、舊說自亦既至吾仁六句、爲第六段、自孰曰至吾身四句、新說爲第八段、舊說自痒痾至吾身二十句、爲第七段、自一日至末、新說爲第九段、舊說爲第八段、

○朱子語錄曰、克己、之己、未是對人物言、只是對公字說、猶曰私爾、呂與叔極口稱揚、遂以爲己既不

此二句は、陋室の景氣を云、目に所見也、苔の痕は、階まで草上りて緑也、艸の色は、庭より簾に移て青やか也、宋處士が林亭に、青苔日厚自無塵の意も、此にありくと云出せり此室靜にして人氣稀なる故に苔も艸も一入亭主の興を添る也、艸色入簾は、周濂溪の庭艸交翠の語と相似たれ共、禹錫と茂叔との心は、大きに不同あり、

談笑有鴻儒、往來無白丁、

此室にて談笑するには、鴻儒の賓客あり益友に逢且つ懐を遣也【鴻】は、洪と通ず、大也、大儒の事也、一說、鴻字有紅音、故以對白丁、未知所據、不必如此鑿、蓋妄說也、此室に往來する者は、無益の雜人なし【白丁】は、賤き者を云、丁字よほろ共、さくさめ共讀り、人に被使者を仕丁と云、白衣の義なるべし、古解に、猶言白徒、白地の凡夫と云義也、白地の西施と云事あり、其白字の意也、綱鑑全史、唐高祖紀註、丁者、當强壯之時也、四歲爲小、十六爲中、二十爲丁、六十爲老、

可以調素琴、閱金經、

【素琴】素朴琴、木なりにして、彩どり飾らざる琴也、梁の昭明太子の淵明が傳に、蓄無絃素琴一張、姚揆が詩に、素琴孤劔自閑遊、孫明復が詩に、淸樽素瑟宜先賞と云も是也【金經】一說、金玉は重寶の物なれば、聖人の經を比して云、金鑑金鏡、又は金章玉文と云是也、一說金字に書たる經也、一說、金を以て軸を飾り、表紙に塗る經書歟、又金櫃金縢の類にて、金を鏤めたる箱に入たる經也、案するに四說の內、第一義を可取、言心は、素琴を調べて、幽趣を消遣し、金經を開て、聖賢に對すべしと也、耳に聞、目に見る所を兼て云、

無絲竹之亂耳、無案牘之勞形、

【絲竹】管絃也【案牘】公案官牘也、公事訴訟の目安也、富貴なる者は、妓女を集め、管絃して奢れ共、此陋室には、左樣の絲竹の我耳を亂る事なき也、官職に在者は、奉行役人と成て、公事訴訟を斷はりさばけ共、此室には左樣のむつかしき公務の、我形を苦勞する事も無と也、安閑無事なる事を云、

南陽諸葛廬、西蜀子雲亭、

今不必取之故不載、

劉禹錫

新唐書列傳九十三有傳、劉禹錫、字夢得、擢進士第、登博學宏詞科、工文章、王叔文得幸太子、禹錫以名重一時與之交、叔文每稱有宰相器云云、憲宗立、叔文等敗、禹錫貶朗州司馬、始坐叔文貶者八人云云、禹錫久落魄、久之召還、宰相欲任南省郎、而禹錫作玄都觀看花君子詩、語譏忿、當路者不喜、出爲播州刺史云云、乃易夔州云云、由和州刺史入爲主客郎中、復作游玄都詩、且言始謫十年還京師道士植桃甚盛若霞、又十四年過之、無復一存、惟兎葵燕麥動搖春風耳、以詆權近、聞者益薄其行、禹錫恃才而廢、褊心不能無怨望、年益晏僂蹇寡所合、乃以文書自適、素善詩、晩節尤精、與白居易酬復頗多、居易嘗推爲詩豪、又言其詩在處應有神物護持、會昌初加檢校禮部郎尙書卒、羅山曰、禹錫は、洛陽の人也、貞元元和の間白樂天元稹柳宗元など〻相交て文友たり又王叔文と親く交りしが叔文罪に因て誅せられし時宗元禹錫等皆遠流せらる禹錫後に召還されて卒す年七十二、

山不在高、有僊則名、水不在深、有龍則靈、四句設譬、

文選句解云、蓋謂山水以仙龍而重、居室以君子而重、此證最爲的當、言心は、山は必ずしも高を以て貴しとせず、有名仙人栖居すれば、則ち名を得る也、水は必しも深を以て好とせず、神龍あれば即ち靈名を得る也、此四句は、陋室の譬也、如何なる朱門碧戶、玉樓金殿も、主人惡くば荒屋なるべし、禹錫我室陋く共、主人賢ならば、陋かるべからずと云心也、會稽山は、王羲之來て、名を知れ、盤谷は李愿に依て世に傳ふ、

斯是陋室、惟吾德馨、

今此陋室は、我德香しき程に、名は假令陋也とも、主人何ぞ陋しからん、家語に、與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣と云、心を承て、室馨と云也、又尙書君陳篇曰、黍稷非馨、明德惟馨、

苔痕上堦綠、艸色入簾靑、

與性成者、程子引用此句、則言習於善而與性成者也、覺軒蔡氏曰聖性之也謂哲人賢習之也謂志士、及其成功一也、故曰同歸【歸】歸趣也、をもむきと訓す、又歸入する所也註同歸一揆、揆は、はかりことゝ讀り、是も心に量る所を云、孟子離婁下篇云、先聖後聖其揆一也、註、揆、度也其揆一者、言度之而其道無不同也、陳抱沖曰、趙註、揆度也、言聖人之度量不是度量聖人、羅山曰、論語に性相近、習相遠と有に依て、此に習と性との字を用ふ、尋常の人も、天理に合ふ時は、聖人賢人と無不同、是を同歸と云也、

銘類

說文曰、銘、記也、又志也、釋名云、名也、記銘其功、左傳、銘天子令德、禮記檀弓曰、銘明旌也、鄭康成註、銘之言、名也、又警戒之辭曰銘、湯盤銘註、刻戒盤事文類聚續集、載堯舜銘盤盂下引墨子曰、堯舜湯、書其事於竹帛、琢之盤盂、魯語曰、故銘其栝註、刻曰銘、祭統曰、銘之義、稱美而不稱惡、揭子修身篇、或問銘曰、銘哉銘哉、文選陸機文賦曰、銘博約而溫潤、銑曰、博、謂意深、約、謂文省、羅山曰、金石に文を刻み記して、後の戒とするを銘と云、故に金偏に名の字を書り、殷の湯王の盤銘を始とす、其後周の武王弓矢机等に有銘、盤銘は在大學、武王の銘は、大戴禮に載たり、後世の文人、多く銘を作て、文章の一體とす、尋到源頭云、銘之所作、乃黃帝作巾几之銘、後之作、

○陋室銘

此篇不上百字、曲盡陋室之氣象、起用譬喩、尤的切、

禹錫吾室を陋と名付て、卑下する也、此銘の末句に、孔子の何の陋き事有んと宣ふ語を引て、一篇の基本とす、表むきは謙退する樣なれ共、孔子の何陋、顏子の陋巷の陋字の意あれば、底心は卑下せず、銘の辭も結構に云成也注の心は、此篇文字八十一字にして、百字より内なれ共、陋室の有樣を委曲に云盡す、殊更發端の山水の喩、尤も的切也、的は、明也、又矢のまと也、切は、剴切也、身を切が如に、密しく近ふして、其道理疎かならず、親切大切と云是也○萬里曰此篇四段自篇首至德馨第一段、自苔痕至白丁第二段、自可以至勞形第三段、自南陽至末第四段○孤山智圓閒居編、以此銘為非禹錫所作、有雪劉禹錫耻辨說、

見得、雖是兩般、大抵順理便安裕、從欲便危險、又曰、思是動之微、爲是動之著、這箇是該動之精粗、蓋思於內、不可不誠、爲於外、不可不守、看文字須得箇骨子、【志士】は、羅山曰、志有て學問する人也、愚謂く、有志て道を立、行を勵さんとする士也、論語に志士仁人と云語あり、有志の士は、行迹を勉め勵して、何にても爲る事あれば、正理を守て失はずと也、

順理則裕、順於理而有餘　**從欲惟危、**從欲而動必至於危、

葉氏曰、順理而動則安裕、從欲而動則危殆、守於爲也、陳氏曰、循理之公、則皆無餒於中、故裕、逐人欲之私、則易陷於下、故危【裕】此註には有餘とし、近思錄の註には安裕とす、有餘なれば、寛裕也、道理に順て動けば、方寸寛かにして疚しからず、人欲に從ふて行へば、心危く身も亦亡る也、

造次克念、造次、倉卒、亦念此理　**戰兢自持、**戰戰兢兢當以自持、

論語里仁篇、子曰、無終食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是、註、造次急遽苟且之時【註】造次、倉卒、火急にいそがはしき義也、苟且は、かりそめなる意、羅山曰、かりそめ、あからさまに、いそがはしき時也、【戰兢—】詩、戰戰兢兢、註云、戰戰、恐懼、兢兢、戒謹、暫時急遽の時も我心に道理を不忘、克念慮して、惡事や出來んかと深く恐れ愼みて、自ら持守すべしと也、覺軒蔡氏曰、造次克念以誠於思、言凡學者動於心、不可不存克念之誠、戰兢自持以守於爲、言凡學者動於身、不可不加自持之念、葉氏曰、造次俄頃而克念不忘、戰兢恐懼而自持不失、誠於思也、

習與性成、習慣自然合於天理　**聖賢同歸、**與聖賢人同歸一揆、

尙書、大甲上篇、伊尹曰、玆乃不義、習與性成、葉氏曰、習、謂修於己、性謂得於天、習與性合、則全其本然之善、而與聖賢一矣【注】【習慣—】克念ひ自持する事を、不斷に身心に習はせば、久しく功を積で純熟すれば、假令本性は左なく共、自ら化して、性も共に成也、此註には、性を以て天理とす、新安陳氏曰、此性字、蓋以氣質之性言與上文本乎天性之性不同、天性、乃以天地之性言也、又曰、伊尹之言、本謂習於惡而

己肆まゝに言へば、必ず人に逆ひ違ふ也、言を出すこと道理に背けば、荅來る者亦違ひ背く也、假令は人を惡く言へば、人も亦惡口を云返すが如し、大學曰、言悖而出者、亦悖而入、

非法不道、欽哉訓辭、

【非法不道】孝經の語【欽哉】堯典の語、非法なる事を云べからず、愼で此教訓を守るべし、

○動箴　程正叔

朱子曰、克己復禮一章、乃傳授心法、切要之言、非至明不能察其幾、非至健不能致其決、故惟顏子得聞之、凡學者不可不勉也、程子之箴、發明親切、學者尤宜深玩、四箴指意精密、所謂一棒一條痕、一摑一掌血、蓋欲學者循其可見易守之法、以養其不可見、不繫之心、至於久而不懈、則表裏如一而私意自無所容也、諸公且道動箴、那箇是緊要、答曰順理則裕、曰、要連從欲惟危、都是這生死路頭、羅山曰、視聽言の三つは、眼耳口に限れり、此動の一字は、一身に亘て、言行皆盡く在此也、

哲人知幾、（幾者、動之微、）誠之於思、（思誠者、人之道、則斯誠矣、）

說文、哲、知也、書云、知之曰明哲、又與悊同、漢書、明悊通天地之心、刑法志、聖人既躬明悊之性、羅山曰、【哲】は、ものしると讀り、哲人は、聖人賢人を指也【知幾】易の語、註幾者、動之微、羅山曰、きざし也、動んとする前方を云、其時は善惡眞僞是より分る也、哲人は知之、故に不思惡して善を思ふ、其思ふ事を少も僞らぬを誠之於思と云也、其所思より、人の言行は動く故也、葉氏曰明哲之人、知其幾微、故於所思而誠之、一念之動不敢妄也、註則字、一作明是也、中庸二十一章曰、誠則明矣、明則誠、朱子註先明乎善而後能實其善者、賢人之學、誠則無不明矣、明則可以至於誠矣、

志士勵行、（有志之士、其行不可不勵、）守之於爲、（有爲必守其正理也、）

葉氏曰、立志之士、勉勵其行、故於所爲而守之、一事之動不敢忽也、朱子曰、哲人志士、說兩般人、哲人只於思慮間便見得合做與不做、志士便於做出了方

牙ありて、弦を引掛る鐵砲の掛金を懸る疣の如く也、是にて弩を張つ弛つする者也、武備志などに有二弩圖一可レ考、物の萌し、心の動んとするを、機微と云【興レ戎】書大禹謨曰、惟口出レ好興レ戎、蔡氏註、好善也、戎、兵也、言發二於口一、則有二二者之分一、葉氏曰、發レ言、乃吾身之樞機、故一言之惡、或至二於興一レ師、一言之善、或可二以合一レ好、一言の違まで云事になれば、鬪諍合戰も出來し、一言の和き善なる事あれば、兩家好みを合せ、兩國和睦する也註分明不レ及二再釋一、

吉凶榮辱、惟其所レ召、

蔡氏曰、出レ好、則吉則榮、興レ戎則凶則辱、發二於口一者甚微、而召二於彼一者甚捷、可レ不レ畏哉、吉凶も榮辱も、言語より召く也、言語理に當れば、吉と成榮と成、理に乖けば凶と成、辱と成、

傷レ易則誕、言語輕易、則流二於虛誕一　傷レ煩則支、言語太多、則支離不レ可レ曉、

註【輕易】は、皆かろぐしふする也、羅山曰、易は、たやすしと讀り、胡氏曰、易、是輕言【虛誕】は、皆いつはる也【煩】は、くだぐしく、しげきを云、羅山曰、わづらはしと讀り、事しげき義也、胡氏曰、煩、是多言註に太多と云是也【支】は支分、わかれて、はなれぐに成を云註に支離と云是也、周易曰、其辭支、羅山曰、分散してしまりなき義也、輔氏曰、易、則心不レ管攝、故必至二於妄誕一、煩、則心不二精一、故必至二於支離一、葉氏曰、躁而傷二於易一則誕肆而不レ審、妄而傷二於煩一則支離而遠レ實、蔡氏曰、易則誕、由二其妄而不一レ專也、煩則支、由二其躁一而不レ靜也【傷】は、しそこなふ義也、人の言語を發するに、誤て輕易なれば、虛僞に至り、煩多なれば、支離するに至る、

己肆物忤、於レ己則縱肆、於レ物則違忤、　出悖來違、其出レ言悖逆而背二於理一、故答者亦違二背之一、

註【己】は、自身也【縱肆】は、皆ほしいまゝなる也、胡氏曰、肆、是放言、葉氏曰、縱レ情也、肆二於己一者必忤二於物一躁之致也、【物】は、他人也【違忤】は、たがひ、さかふ也【悖逆】は、皆さかふ也、葉氏曰、悖、乖レ理也、悖而出者、必悖而反、妄之致也、胡氏曰、悖則純二乎不善一矣、蔡氏曰、內不レ靜、故己肆而物忤、內不レ專、故出悖而來違、

實理誠心を內に存主して、非禮の事をば聽こと勿れと也、

○言箴

程正叔

朱子曰言箴說許多病痛、從頭起至吉凶榮辱、惟其所召、是就身上謹、傷易則誕、至出悖來違、是當謹於接物間、都說得周徧、又曰、上四句是說身上最緊切處、須是不躁妄、方始靜專、自家這心自做主不成、如何去接物、下云矧是樞機、興戎出好、四句、是說謹言底道理、下四句卻說四項病痛、傷易則誕、傷煩則支、已肆則物忤、出悖則來違、

人心之動因言以宣、

句解曰、人心本靜而動有由焉、每因言語而宣布於外、人の心は、活て働く者なれば、動かでは叶はぬ者也心に思ふ事は、其所動也其を言語に因て宣顯す也、

發禁躁妄、（躁者、急也、妄者、誕也、言發而在所禁）內斯靜專、

【發】は發動、うごき出る也【躁】注急也、さはがしき也、葉采曰、輕肆也、かろ〲しく、ほしひまゝなる也【妄】注誕也、葉氏曰、虛謬也、みだりに分もなきを妄と云、註の心なれば、いつはり也【言發―】云まじき言語の發し出るは、禁制する所に在と也、葉氏曰、言語之發禁其輕肆、則內靜定也、禁其虛謬、則內專一也陳氏曰此一篇關要處、言語の外に發し出るにかろ〲しく躁しきを禁じ、妄りに謟る事を禁ずれば、心內靜に定り、少しも雜念無して、理を照し、事を處すること明かに當る也、

矧是樞機、（言行君子之樞機）興戎出好、（或言出而興兵戎、言出而兩國好結、）

周易係辭曰、言行、君子樞機、樞機之發、榮辱之主也、葉氏曰、樞、扉臼也、機、弩牙也、戶之闔闢、射之中否、皆由之、陳氏曰、門之闔闢、所係在樞、弩之弛張、所係在機、人心之動有善惡、由言以宣之而後見於外、是亦人之樞機也、羅山曰【樞】はくろゝ也【機】は弓括也、門戶のくろゝ、弓のはづは、簡要の處也、人の言語も、樞機の如し、愚按するに、樞は、開戶の後へ、上下に臍あり、此心木にて開闔をする也、機は、弩の牙也、弩は、鐵砲の如くなる物を、弓の眞中に横へ、手本に

毛詩烝民篇曰、天生烝民、有物有則、民之秉彝、好是懿德、朱子註、秉、執、彝、常也、如視之明、聽之聰、貌之恭、言之順、君臣有義、父子有親之類、是乃民所執之常性云云、句解曰、人稟固有彝常之理、本出乎天命之謂性、樂記曰、人生而靜、天之性也、感於物而動、性之欲也、物至知知、然後好惡形焉、好惡無節於內、知誘於外、不能反躬、天理滅矣、慶源輔氏曰、人心所稟之常性、乃得之於天、而聽其所當聽、不聽其所不當聽者、即秉彝之性也、人心本善を好て、惡を惡む、故に其禮をば可聽、非禮をば不可聽、是人人同して異なる事なく、常の理にして、人の天性なれば、秉彝と云、常の道理を心に執持する也、

知誘物化、（知、猶欲也、誘、猶導也、引也、欲心導引、而物至則人化爲物、）**遂亡其正、**

註【知猶―】聲耳に入て心に感じ、知覺動く故に、知猶欲也と云、人心知覺して、欲念動く、其より終に引れ去て、天理に不返也物我前に到來れば、其欲に引れ奪れて、物に許り心ある程に、我遂に物の爲に化されて、物我の間なく、其天性の正きを失ふ也、陳氏曰、知、指形氣之感而言物欲感而知覺萠、遂爲之引去矣、化、則與之相忘如一、而無彼我之間也胡氏曰、不言聽而言知者、聽者、知之初、知者、聽之後、因知而此心爲之動、故以知言、其實一也、朱子曰、物至則智足以知之、而有好惡、這是自然如此、到好惡無節於內、知誘於外、方始不好去、蔡虛齋曰、正、即秉彝之性也、

卓彼先覺、知止有定、（知止於善、有所安定、）

【卓】高也、毛詩、卓彼雲漢【先覺】孟子萬章篇上云、伊尹曰、天之生此民也、使先覺覺後覺、予天民之先覺者也、我より先に生れて、覺れる人也、古の聖賢を指、【知止―】大學曰、大學之道云云、在止於至善、知止而後有定云云、言心は彼卓然と高明なる先覺は、其善に止る事を知て、心安んじ定まる事ある也、

閑邪存誠、（閑其外邪、存其誠心、）**非禮勿聽、**

易文言曰、閑邪存其誠、朱子曰、防閑其邪妄於外、而存其實理於內也、近思錄註云、閑邪於外、所以存誠於中也、言心は、邪まに妄なる事を、外に防ぎ退け、

制之於外、以安其內、

許氏曰、制、是於天理人欲之界上截然限斷、使不正之書、非禮之色不得以接於吾目、克己、即制之於外、復禮、即以安其內、陳氏曰、物欲克去於外、則無以侵撓吾內而天理寧矣【制】は、禁制也【外】は、眼【內】は、心也【之】は、非禮也【安】は、安穩、やすらかに靜かなる也、非禮の事を、眼に不見樣に戒めて、其心を安からしむる也、儒者の內外交養と云、工夫是也、

克己復禮、久而誠矣、克去己私、復還天理、而見本心之誠矣、

蔡氏曰、始而克復、有以用吾力、久而誠、則私欲淨盡、表裏一貫、自無所容其力矣、胡氏曰、久而誠矣者、非禮勿視、未是仁、眞積日久、自然誠實、則可謂之仁也、近思錄葉采註云、苟物欲之蔽、交乎吾前惑於所見中必移矣、惟能制之於外、自不妄視、則神識泰定、內斯以安、久而誠、則實理流行動容周旋中禮矣、羅山曰、左傳に、得儁曰克と云は、敵の主將を擒るを云也、胡傳に、克力勝也と云は、力を出して、大に勝を云也、外の敵には勝易かるべくして、己が私欲には勝難き者也、大敵に打勝て、其根本から拔亡す如くに、大力量を出して、私欲に勝亡すを、克己と云也、己に克は、自然に私欲なき故に、本心の天理に還るを、復禮と云也、此工夫一日二日の間に成ことに非ず、平生勤勵て久くすれば、克己復禮眞實にして、毛頭の僞なきを誠と云也、愚案ずるに註【克去己私】は、克己を釋す【復還天理】は、復禮を解す【見本心之誠】は、久而誠を註す、

○聽箴　程正叔

雲峯胡氏曰、眼在前、不正之色、只是前一面來、故蔽交於前、其中則遷耳在兩旁、不正之聲在左右前後皆可來、故曰知誘物化、遂亡其正、目之明在外、故當制之外以安其內、耳之明在內、故惟在內者、知止有定、乃可爾、問視箴何以特說心、聽箴何以特說性、朱子曰、互換說也得、然誘云、開眼便錯、視所以就心上說、人有秉彝、本乎天性、道理本自在這裏、卻因雜得外面言語來誘之、聽所以就性上說、

人有秉彝、本乎天性、

論語大全、葉氏曰、目者、一身之昭鑒、五行精華之所聚、於心尤切、目動則心必隨、心動則目必注、心之虚靈、千變萬化、欲加檢防、先以視爲準則、陳氏曰、心虚靈知覺、事物纔觸則卽動而應、無蹤迹可尋捉處、胡氏曰、心兮本虚者、體也、應物無迹者、用也、體無所窒、則用無所滯、此其本然也羅山曰、兮字は、助辭也、毛詩楚詞に、多く此字を用ひたり、人の心は、無形無色無聲臭、無れば本虚也と云、虚なれ共一身に具つて主たる故に、大學の註には、虚靈不昧と云り、如此形無れ共、其理明かにある故に、仁義禮智の性を備へて、君に對しては忠をし、父に對しては孝をするも、一心也耳目の交はる所物物千萬多しと云共、心の感應する處、自然の理にして、而も其形もなく迹もなき也、

操之有要、（操存亦有其要）**視爲之則、**（目之所視凡有準則）

慶源輔氏曰、人心出入無時、莫知其鄕、何有形迹可見、然操則存舍則亡、而操之之要、則以視爲之則、而已、蓋人之視最在先、遇不當視者、才起一念要視他便是非禮、故當以視爲操心之則、句解曰、操守此心、亦有要務【操】は、持也、心に敬を存するは、持守するの法也、羅山曰、孟子に操則存すと有は、本心を操れば存ずと也、心を失はぬを存と云也、無形心を、何としてか可操と云に、是を操に簡要の仕様ある也、人の形の中にて、先上にあり、表にある物は、眼也、故に聽言動より首めに云也、心は本虚ふして、明鏡の形を不留か如し、又秤の衡の平かに直なるが如し、一念も起らざる時、如何ぞ動ぜんや、先指當て物を見る時に、心に通ずる時、其理に合ふ物を見れば、所見法に不違鏡に影を寫すが如し、此則字は、毛詩に、有物有則と云句に本づけり、形に眼あるは、物也、其に有理を則とす、理の法則に叶ふ也、

蔽交於前、其中則遷、（物欲交蔽、變亂此心）

陳氏曰、蔽、指物欲之私而言、中指心之體而言、卽天理之謂也、物欲之蔽接於前、則心體遂之而遷矣【蔽】は、かくす共、おほふ共讀り、眼の明を妨ぐる義也、視る所に惑ふ事は、有私欲故也、私欲に蔽れて、視る理を昏ます時は、心則動移る也【中】は、心を指也、眼は、外にあり、外より内を妨る也、愚謂く、眼を蔽ひ昏ます物、眼前に交り集れは、其中心移り亂る也、

に就て一變して用る時は、何事を視聽言ぬも、又苦しからずと云て、恣まゝに惡事をも視聽言て、耳目口の生付てある役也と云、達磨在レ眼曰レ見、在レ耳曰レ聞、在レ口談論すなと云句りて、是を見性成佛とす、箇條の事は、四句の理と相違す、右の刀火の喩の如し、此義を以て儒道と異端との所用を校へ知べし、

程正叔

宋史列傳百八十六、東都事略百十四、言行錄外集三、伊洛淵源錄一、有レ傳、太明一統志、河南府、程頤、顥弟、少有二高識一、非レ禮不レ動、仁宗時上レ疏、欲レ黜二世俗之論一、以二王道一爲レ心、大臣屢薦不レ起、哲宗初詔授二西京國子敎授一、力辭、召見擢二崇政殿說書一、文彥博稱爲二眞侍講一、後入二元祐黨籍一、頤與二兄顥一倡二明道學一、出二其門一者最多、世稱二伊川先生一、後諡二正公一、封二伊陽伯一、兄弟倶從二祀孔子廟庭一、綱鑑、宋大觀元年九月、故直秘閣程頤卒、年七十五、頤於レ書無レ所レ不レ讀、其學本二於誠一、以二大學論語孟子中庸一爲二標指一、而達二于六經一、動止語默、一以二聖人一爲レ師、其不レ至二於聖人一不レ止也、嘗言今農夫祁寒暑雨、深耕易耨、播二種五穀一、吾得而食レ之、百工伎藝作二爲器物一、吾得而用レ之、介胄之士、披レ堅執レ銳以守二土宇一、吾得而安レ之、無二功澤及一レ人而浪度二歲月一、晏然爲二天地間一蠹一、唯綴二緝聖人遺書一、庶幾有レ補爾、卒得二孔孟不傳之學一、爲二諸儒倡一、著二易春秋傳一、平生誨レ人不レ倦、故學者出二其門一最多、淵源所レ漸、皆爲二名士一云云、周德恭曰、程子兄弟、鳴二道河南一、繼二正學之統宗一、振二斯文之墜緒一、誠一代之賢人也、惜其弗二果大用一爲レ慽矣、雖然其學雖レ屈二於一時一、其業實伸二於後世一、夫豈因二其弗一レ果大用一而遂貶二其道一哉、羅山曰、正叔、名は頤、伊川先生と號す、其兄程顥、字は伯淳、明道先生と號す、是を二程と云、宋朝河南の人也、父を程珦と云、此時に、濂溪先生周茂叔と云人、孔子顏子より千歲以後、絕たる道を得たり、程珦二子を連て、茂叔に往見へしめて學ばしむ、時に二程年僅に十五六の比也、二程能學びて、孟子以來斷絕したる儒道の宗統を承續て、聖人の心を會得して、宋朝一代の大賢也、二程の詩文、其外語錄を集めて、二程全書と號し、盛に世に行はる、二程の道を能傳て、楊龜山、羅豫章、季廷平、朱晦菴と次第し續來る也、

心兮本虛、應レ物無レ迹、（泛應二之物一、亦無二形迹一、）

旋無不中禮、而日用之間、莫非天理之流行矣、程子曰、顏淵問克己復禮之目、子曰、非禮勿視云云、四者身之用也、由乎中而應乎外、制於外所以養其中也顏淵事斯語、所以進於聖人、後之學聖人者、宜服膺而勿失也因箴以自警、大全、朱子曰、說文謂勿字似旗脚、此旗一麾、三軍盡退、工夫只在勿字上、纔見非禮來、便禁止之、便克去、雲峰胡氏曰、蓋心爲一身之主、即將爲三軍之主、一身耳目口體惟心所令、猶大將之旗一麾、而三軍坐作進退、惟其所令也、新安陳氏曰、非禮者、己之私、禮者、天理之公、非禮勿視聽言動、即所以克己而所視聽言動皆合禮、即所以復禮也、能如是則日用間、莫非天理之流行、而仁在其中矣、羅山曰、顏淵問仁時に、孔子荅て克己復禮爲仁と宣へり、顏淵其條目を問ければ、孔子非禮勿視勿聽勿言勿動と宣へり、是を四勿と申也、禮は、天理の節文也、節は、限制節度也、文は、儀章脈理也、己が私に克て禮に復るは、仁をする也、仁は、本心の全德也、視聽言動の四の者皆有禮、其理に非んは、視聽言動する事勿れと也、人の生質耳目口手足具足すれば、何れをか視聽言動せざらんやと云て、是非善惡を擇ばず、視聽言動するは、皆非禮也、假令ば、刀は物を切者也とて、父母を殺し、無罪人を切んは、其理に非ず、切べき道理に叶ふ者を可切、火は物を燒者也とて故も無て屋を燒んは、理に非ず、其理に合ふ者を、煮つ燒つすべき事也、人生れて形あれば、耳も目も口も、手足も具はるは、古今定る道理也、其定る形に、又自ら目には視る道理、耳には聽く道理、口には言ふ道理、手足には動く道理あり、非と惡とを視聽言動するは、是非禮也、此理に合ふて四ながら宜きは、仁をするの條件目錄也と可知、若異端老佛より云はゞ、老子の五色は目を亂り、五音は耳を亂り五味は口を亂ると云、莊子が黜聰明と云は、是非善惡共に、視るな聽な言な、只心を虛無にせよと敎る也、禪家に三種病人と云るは、盲聾啞也、佛法を聽てこそ悟るべきに、聾ならば如何して悟ん、佛を拜見し、或は看經し、讀誦念佛してこそ悟るべきに、盲啞ならば其便なし、然れば、三種病人は、不成佛の者也、但し一切の罪業は、眼耳舌より出入する事多し、右の三種は罪を可作緣なし、卻て自ら佛也とも云べき也、三種の病有とて、心法なきに非ず、心は本來空にして佛體なるが故也、是

集傳云、茲、指皐陶也禹遂言念之而不忘、固在於皐陶、舍之而他求、亦惟在於皐陶、言心は、此人を思ふべし、是に過たる人無れは、思ふ事此人に在也、此人を除て、別に無人と云ん爲に、釋茲在茲と云也、此箴に所引は、其詞を借て、君の德と政とを思ふて、忘る事勿れと云なるべし、

惟人所召【老子】禍福無門、惟人所召 自天祐之、【易曰】自天祐之、吉無不利、

註【老子—】此語は、左傳に見へたり、老子と云は誤也言心は、禍福は定れる門戸なし、善をする處へは福來り、惡をする處へは禍來る、然れば禍も福も、人の召くに依て到來する也【易曰—】周易大有の卦、上九の辭也、人能愼て善をすれば、自ら天道より祐を蒙て、吉にして利ありと也、上は勸戒を兼含み、下は專ら勸る心あり、

諍臣司直、敢告前疑、

【諍臣】は、諫爭の臣下也、此時張蘊古直中書省の官にて、君を諍る官なる故に、自ら云也、諫る者は正直に言ほどに【司直】と云、事物紀原曰、漢武初置司直之官、屬丞相府、謂之丞相司直、淮南子曰、湯有司直之人、許愼注云、司直、官名、詩鄭風、邦之司直【前疑】孔叢子第一論書篇云、王者前有疑、後有丞、左有輔、右有弼、謂之四近、言前後左右近臣、當畏敬之、不可以非其人也、又禮記謂之四鄰、鄰親近也、亦謂之四輔、王の疑しき事あれば、前にある者に問尋る義を以て、前疑と云也【敢告—】青松曰、猶今人言敢申告於左右執事者、臣として訴狀を上つり、諫を進むる時、君の身を直に指て云べからず、故に近臣に云告て披露せよと云義也、天子に陛下と云、三公に殿下と云、父母に膝下と云も、此類也、蘊古此箴を作て、前疑まで申ほどに、太宗皇帝へ奏聞し給はれと也、

○視箴

論語顏淵篇云、顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁、云云、顏淵曰、請問其目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣、集註云、非禮者、己之私也、勿者、禁止之辭、是人心之所以爲主、而勝私復禮之機也、勝私、則動容周

開羅起祝、【史】外紀、湯初造商、見野有張網四面、乃去其三面而祝之曰、欲左左、欲右右、不用命者入吾網、

援琴命詩、舜作五絃之琴以歌南風之詩、

註【史外紀―】通鑑外紀也、劉向新序曰、湯見祝網者置四面祝曰、從四方來者、皆罹吾網、湯曰、嘻、盡之矣、乃解三面存一面曰、欲左者左、欲右者右、高者高、下者下、吾取其犯命者、於是四十國歸之、殷の湯王野外に出られけるに、鳥を捕者、四方に網を張て、鳥の洩ぬ樣に捕んとするを見給ひて、否々其にては皆取盡さんと云、其三方を解去、只一面に張て、祝して宣はく左右上下己か儘に飛行べし、我は其天命を犯して、死に當る者許りを取ん、其業を感ずる鳥あらば、來て我網に掛れと也、漢南の諸侯此事を聞て、湯の仁鳥獸に及へり、况や人に於てをやと云て、歸服する者四十國と也【舜作五―】禮記樂記、及ひ家語に出たり、舜帝位に卽て、五絃の琴を引、南風の詩を作て歌ひ給ふ、其詩云、南風之薰兮可以解吾民之慍、南風とは、夏吹風は、南方より來る故也、薰風と云も亦是也、夏は暖に、南方は明かにして陽の方、萬物長ずる時也、舜の德も亦如此、故に民の慍を解て悅ばしむる也、言ろは殷の湯は、羅を開き祈り言を起して、仁心物に及ひ、虞舜は琴を彈じ、南風の詩を歌ふて、聖德民の慍を解、今太宗も如此し給へと云心也、

一日二日【書曰】一日二日萬幾

念茲在茲【書】帝念哉在茲、釋茲在茲、

尙書皐陶謨曰、一日二日萬幾、無曠庶官、蔡氏集傳、一日二日者、言其日之至淺、萬幾者、言其幾事之至多也、蓋一日二日之間、事幾之來、且至萬焉、是可一日而縱欲乎【幾】字彙、微也、易繫辭、幾者、動之微、吉之先見者也、幾は事機機會とて、事の見はれんとして、未だ見はれざる也、物の兆しを云、天子は一日二日僅の間に、千万の事機差集へり、然れは人君心を操る事を能謹み、內鑑明かならずんば、政事に臨て過失有ざらんや、羅山曰、幾は、心の兆也、言行に現はるれは、或は善と成、或は惡と成、其現れぬ先に、心にて惡を改め、善をする事を、政の本とす、是を萬幾の政と申也【書帝―】太禹謨也、帝は、舜を云、舜位を禹に讓んと宣ひしかば、禹朕德罔克、民不依と自謙して、只皐陶種德、黎民懷之ほどに帝思ふて忘れ給ふなと也、

爰述金鏡、窮神盡聖、

太宗嘗撰金鏡錄、以授令狐綯使讀之、見十九史略、句解曰、於是乃述憲言以示鑑、若金鏡瞭然而明也、金鏡は、尙書大傳の語、戒の義也我形の曲直は自ら知難し、鏡に向て見る時は知如く、此書を作て自ら警むる也、後に張九齡千秋金鑑錄を撰して、玄宗に獻るも、此心也、太宗此錄を撰述して、神聖を窮め盡せり、孟子盡心下曰、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神、又窮神の二字、係辭に出たり、今は太宗の書を美稱して云、句解曰、以爲人主窮極入神之精義、盡性作聖之梯級、皆在於此、羅山曰、太宗精神を窮め、聖德を盡し給へと云也、愚謂此二說皆誤、唐書張九齡傳曰、玄宗千秋節、王公並獻寶鑑、九齡上事鑑十章、號千秋金鑑錄、以伸諷諭、

使人以心、應言以行、

靑松曰、言使人必順其心而不强役、羅山曰、人人の身に成代つて、我心にて想像て使へと也、霞谷主人曰、謂如身之使臂、臂之使指也、愚謂く、周の文王靈臺を作り給ふに、庶民是を攻めて、不日に出來る故、文王亟かにする事勿れと宣ふ、是等は、心を以て人を使ふの類也【應言―】行を以て其言に應して違はぬ也、羅山曰、如言に行ひ、如行に言て、言と行と能そろふ樣にせよと也、中庸曰、言顧言とある也、

包括治體、抑揚詞令、

靑松曰、惣攬爲治之體統而把握在我、裁制立言之詞令而翕張在我、愚謂人君國家を治る法を總持し、詔誥命令を裁抑宣揚する也、潤色するを云、羅山曰、包括は、つゝみくゝる也、治體は、國を治むる政の大體也、其總括る所を包括と云、抑揚は、をさふると、あぐると也、善を揚、功を揚、惡を抑へ、不肖を抑る也、詞令は、詔勅號令也、法度定めを出す事も、綸旨宣旨を下す時、人の善惡を知て、抑揚褒貶せよと也、

天下爲公、一人有慶、

禮記禮運篇曰、大道之行也、天下爲公、尙書呂刑篇曰、一人有慶、兆民賴之、秦誓篇曰、邦之榮懷、亦尙一人之慶、聖王道行はれて、天下私しなければ、人君亦嘉慶ある也、

化成、豈知帝力而天下和平、

論語陽貨篇、子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天道言はねども、四季代々次第し、萬物自然に生成す、是人君至德あれば、自言付、自ら苦勞せざれ共、天地陰陽時を違へず、天下能治まる事亦如此【化】字の義は、皈去來辭の解にあり、董仲舒曰、天者、群物之祖也、故偏覆包含而無所殊、建日月風雨以和之、經陰陽寒暑以成之、故聖人法天而立道、亦博而無私、布德施仁以厚之、設義存禮以道之、春者天之所以生也、仁者、君之所以愛也、夏者、天之所以長也、秋者、天之所以養也、霜者、天之所以殺也、刑者、君之所以罰也、由是言之、天人之徵、古今之道也【豈知帝―】通志曰、陶唐之世、俗熈民泰、有老人撃壤而歌於路曰、吾日出而作、日入而息、鑿井而飮、耕田而食、帝力何有於我哉、四時行れ、萬物生れ共、人是を天地の德なる事を不知が如く、天下和平なれ共、人皆君の德なる事を不知、其德至て大なるが故也、堯の時民壤を撃て、帝力於我何有哉と云るが如し、

吾王撥亂、戡以智力、民懼其威、未懷其德、

【吾王】は、太宗を指【撥亂】毛詩の序字、句解曰、謂唐太宗爲秦王時、撥去殘隋之亂政【戡】勝也、商書、西伯戡黎、太宗隋の亂を打平るに、智と力とを以てする也【民懼―】書武成曰、大邦畏力、小邦懷其德、太宗智略武勇を以て、天下を治めらるれ共、民其威勢を恐る迄にて、未其恩德に懷かざると也、

我皇撫運扇以淳風、民懷其始、未保其終、

上に吾王と云は、太宗昨今迄秦王なる故に云、此にて即位し給ふ故に吾皇と云歟、句解曰、謂唐太宗即皇帝位時、撫一世之休運【撫】字彙、摩也、持也、循也、愚案するに、今は持也の註を用て、天運を掌に握るの心とすべし、太宗天運に膺て、淳素の風化を扇揚して、天下を治むる也【民懷―】句解曰、懷、念也、然民方懷念其德於始初、民今太宗の初政に懷け共、以後如何有んをも不知ほどに、未た其終の善政を蒙る事を保つことを必せずと也、

語に出ぬ前に聞給へと也、曲禮曰、聽於無聲、又此冕旒黈纊の語は、本大戴禮、并に家語入官篇に出たり、

縱心乎湛然之域、遊神於至道之精、

句解曰、縱心於湛然不動之域而知止有定、遊神於至道無爲之精妙而恭思玄默、淵の澄て一波も起らざるを湛と云、人の一念も起らず、至て靜なる處を湛然の境域と云、人主心を無念無想の靜なる境界に栖しめ縱まゝにして、神魂を至要の道の精妙なるに遊しめ給へと也、

知之者應洪纖而效響、酌之者隨淺深而皆盈、

禮記學記篇曰、善待問者如撞鐘、叩之以小者則小鳴、叩之以大者則大鳴、【洪纖】は、巨細也大小の義也【效】は、報效也、前を承て云、人に依物に因て、應答する事は、鐘の大なる杵を以て撞時は大に響き、小なる杵を以て撞時は小きに響くが如し【酌之―】青松曰、斟酌庶事、如瓶之酌水、隨其器之淺深也、水を酌者、器淺小なれば、水亦淺小に滿、深大なれば、亦深大に盈、皆其器のまゝ也、韓非子曰盂方水方、盂圓水圓、鐘と水とを人の心に比し、撞と酌とを事物に應答するに比す、

故曰、天之經、地之寧、王之貞、

孝經傳之三章曰、夫孝、天之經、地之義、民之行、董鼎註、天以生覆爲常、故曰經云云、句解曰、天之常經不可紊也、老子經三十九章曰、天得一以淸、地得一以寧、王侯得一以爲天下之貞、林希逸註、一者、道也、天之所以淸明而垂象、地之所以安靜載物、皆此道也、侯王之所以保正萬邦、亦此道也、句解曰、地得一以寧、不可擾也、王中心無爲以守至正、不可偏倚也、上を承て故曰と云、言ろは人主無心にして物を待、無爲にして政を行ふは、天の經、地の寧、王の貞也、天道萬古變せずして常あり、地靜にして安く、帝王貞正にして泰平也、天地人三才の道、皆同しき理を云、

四時不言而代序、萬物無言而

【渾渾】濁貌、詳に集韻昌黎文序に見へたり、老子經十五章曰、渾兮其若濁、孰能濁以靜之徐淸【皎皎】淸白貌、句解曰勿渾渾然如水之濁則宜淸、勿皎皎而淸水太淸則無魚、失之太淸也、東方朔客難曰、水至淸則無魚人至察則無徒、言心は、人君心濁て黑なく汚る事勿れ、亦太だ淸潔過て、他人少しの濁をも容ぬ樣には不可有と也、儒者より云は、伯夷か淸は隘也、人君の垢を含み、穢を容て、廣く德化を布には用ひられぬ所なり、陳仲子か無欲は、蚯蚓に異ならず丈人の己を潔して、大倫を亂るは、鳥獸に等し、是皆淸に過たる者也、若異端より云は、老子の和光同塵、般若心經の不垢不淨、此義なるべし、今此篇の意は、和光同塵を思ふて云なるべし【汶汶察察】漁父辭の註に詳也、亂れて昏き事勿れ、顯はに察し過て明なる事勿れ、小智小明を以て、物を察し過るは、善事に非す、假令は吹毛求瑕は、虎豹の皮、無痕は稀なるべし、人も亦如此也、太宗本より淸察の君なれば、其過ぬ樣にと諫て淸濁明暗の中間、能程にし行ひ給へと云ん爲なるべし、

雖冕旒蔽目而視於未形、雖黈（紞口反）纊（音曠）塞耳而聽於無聲、【選東方朔答客難】冕而前旒、所以蔽明、黈纊充耳、所以塞聰、

注【選東方ー】禮玉藻曰、十有二旒、前後邃延、禮器曰、天子麻冕朱綠藻垂十有二旒者、法四時十二月、諸侯九旒、大夫七旒、士爵弁無旒委貌、麻冕者、何、周宗廟之冠也、十一月陽氣冕仰黃泉之下、萬物被施、前冕而後仰、故謂之冕絶、所以用麻爲之者、女功之始、亦未忘本也、尙書曰、王麻冕、冕所以前後邃延者何、示進賢退不能也、垂旒者、示不見邪、纊塞耳、示不聽讒也、詳于白虎通文選註曰、冕、冠也、旒、冠前垂者、以蔽目前之明察、冕は、冠の類、板を以て作る、前に瓔珞を垂る、是を旒と云也、天子の冕に、珠を乘て、目を蔽て、ちやつと物を見付ぬ樣にすれ共、形未だ現れぬ前に見給へと也、曲禮曰、視於無形【雖黈纊ー】註【黈纊ー】文選註曰、黈纊、以黃綿爲丸、懸冠兩邊當耳、不欲聞不急之言也、隋書註曰、黈纊、黃綿爲之、其大如橘、黃色なる綿にて、蜜柑ほどに作り、冠の左右に垂て、耳の竅に當、人の小過を早く聞まじき爲にする也、如此耳を塞くとは云共、人の言

弱其強而治其亂、伸其屈而直其枉、

句解曰、強者俾之使柔、是弱其強者也、亂者反之使正、是治其亂者也、此抑其太過、屈者扶之使奮、是伸其屈者也、枉者揉之使平、是直其枉者也、此濟其不及也強き者は、必ず上を凌き、傍輩を犯し、下を暴虐する事多し、向後を慮て、是が權勢を損し弱むべし、亂て恣まゝなるは、平け治て正に反す【屈】は無罪して讒に遇、其寃上に聞へずして、抑へらるゝ者也、是を召直し、屈る物の伸る樣にすべし【枉】は、邪曲也、邪まに曲れる者をは、直にせよと也、論語顏淵篇曰、擧直錯諸枉、能使枉者直、

故曰、如衡如石、不定物以限、物之懸者、輕重自見、

月令、仲春日夜分、則同度量、鈞衡石、註、秤上曰衡、百二十斤曰石、衡は、秤の竿也、石は、秤の錘也、今の分銅の類也【限】は、限量、兩目の分限也、秤の衡を平にして、物を掛れば、其輕重石に應じて、其兩目自ら見ゆる也、是我心の平かにして、他の是非善惡見易きに喩る也、孟子梁惠王篇上曰、權然後知輕重、度然後知長短、物皆然、心爲甚、

如水如鏡、不示物以情、物之鑒者、姸蚩自生、

莊子德充符篇曰、人莫鑑於流水而鑑於止水、貞觀政要、大宗曰、以銅爲鑑、可正衣冠、程子曰、心如明鏡止水、又以心鑒容衡平に比喩する事あり、句解曰、如水之清、如鏡無塵、文選陸機文賦曰、姸蚩好惡【姸】字彙、美好也、かほよし【蚩】本作媸、增韻、醜也、みにくし、言心は、人君心を止水の靜にして物を寫し、明鏡の無塵して能物を照すが如くなるべし、止水明鏡は、寫り來る物を見せ示すに、私の情を用ひず、有のまゝに見する也、其前へ來て照し鑑むる物、美姸醜媸自ら現れ生して、紛るゝ事なし、

勿渾渾而濁、勿皎皎而清、勿汶汶(音問)而闇、勿察察而明、

篇云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷、人君政事を執行ふことは、誠に大事也と謹て、若一念も僻事あらば、惡に陷らんと恐れて、薄き氷を蹈、深き淵に臨むが如くせよと也【戰戰慄慄】小旻註、戰戰、恐也、句解、書曰、小大戰戰、をのゝきふるふ貌、又曰、慄慄危懼、言憂驚也、をそるゝ貌【詩——】大明篇也、註、小心翼翼、恭愼之貌、小心は、古註にては、むねをせむと讀り、心を恣まゝにせずして愼むを云、此にては、小心を以て大度に對せり、小きにして取廣げざる心と云義也、物を大事にすれば、心小さく成者也、翼翼は、つゝしむ貌、一念も無惡事樣にと、大事に愼み、をぢをのゝきて、周の文王の小心にし給ふ事を用ひ給ふべしと也、

詩之不識不知、書之無偏無黨、

大雅皇矣篇曰、不識不知、順帝之則、句解云、謂不識古、不知今、順天之法而行之者也【帝】は、上帝也、天道を云【則】は、法式也、文王私しに知こと無して、只天理に順ひ給ふと也【書之無——】洪範の辭也、句解云、宏節篇曰、無偏無黨、謂無偏徇於己、無黨與於人、行乎大公也、偏は、偏頗也、かた〲に依怙をするを云、黨は徒黨也、私にかたうとを立る也、偏頗徒黨する事なく、中正公平の理に順ふべしと也、

一彼此於胸臆、損好惡於心想、

王者は萬人を一人と見、天下を一家の如くに思ふ故に、胸中に彼此物我の隔なく、心に所想、私しの好み惡む事を損し滅してせぬ樣にすへき也、

衆棄而後加刑、衆悅而後行賞、

孟子梁惠王下篇曰、左右皆曰賢、未可也、諸大夫皆曰賢、未可也、國人皆曰賢、然後察之見賢焉、然後用之、左右皆曰可殺勿聽、諸大夫皆曰可殺勿聽、國人皆曰可殺、然後察之、見可殺焉、然後殺之、句解曰、刑人於市、與衆棄、是必衆人之所棄而後加其刑、賞一人而千萬人悅、是衆人所共悅者而後行賞以勸之、惡人罪人を棄るも、諸人皆尤と同心して後に、刑罰を加ふべし、賢人君子を用る時も、亦諸人何れも此人を悅ひて後に、恩賞を行ふべし、然れば刑も賞も、天下古今定れる法にて、私しの行に非す、

すして內に入【註】魏志は、三國志の一也、辛毘、字は佐治、潁川人也、文帝即位して侍中に遷る、文帝冀州の士民十万戸を、河南へ移さんとす、時に連年田苗を食へる蝗と云蟲有て、民飢饉す、郡司不可なる由を申せ共聽入られず、辛毘群臣と共に見ん事を求む、文帝怒れる色有ければ、群臣敢て言ふ者なし、辛毘理を盡して申ければ、文帝不答して、座を起て內に入、辛毘後より其裾を引けれ共、文帝顧みず、良久して出て云、卿我を持する事、何ぞ甚だ急なるや、辛毘今移さは、民の心を失ひ、又彌〻飢んと申す、文帝遂に其半を移さる、辛毘が傳は、魏志列傳二十五にあり、

安彼反側、如春陽秋露、巍巍蕩蕩、恢漢高大度、【前高祖紀】常有大度、不事家人生產作業

句解曰、撫安反側不定之人、當有恩愛如春日之陽和、秋天之露澤焉、尚書洪範曰、無反無側、王道蕩々【反側】不安居貌、言心は、民の反側して安居得せぬを、天子德澤を施して、安居させらるゝ事は、春陽の和らいで物を生し、秋露の潤して、物を成すか如くならば、宜かるべき也、漢の高帝の時、諸將謀反を企る說ありて、軍中靜ならざれば、張良が計事に隨ひ、帝の日比より惡み給へる雍齒と云者を、俄に封して所領を與へられける程に、人々雍齒さへ如此なれば、他人は無憂と云て、皆案堵しけり、又後漢の光武、王郎と云者を攻て、其城を取給る時、內々諸人光武を背て、王郎に內通一味の書狀を多く得たり、光武是を不見して、諸將の前にて盡く燒捨らる、是皆反側の士をして安からしむる也【巍巍—】論語泰伯篇、子曰大哉堯之爲君也、巍々乎唯天爲大、堯則之、蕩蕩乎民無能名焉、集註、巍巍、高大之貌、蕩蕩、廣遠之稱也【恢】大也【大度】大なる度量也、氣槩の大なるを云、言心は、人君の心高大廣遠にして細小ならず、漢の高祖の意豁如として、大度あるを慕て、彌々大にし給へと也【註】【前高祖—】高帝常に氣象大にして、凡夫の時にも、家人の生產作業とて、度世すぎはひを、事とし務めざる也、

撫茲庶事、如履薄臨深、戰戰慄慄、用周文小心、【詩】惟此文王、小心翼翼、

【撫茲庶事】萬づの政事をさばく義也【履薄—】詩小旻

延濮水に身を投て死す、其靈久く在て、琴の聲濮水に響く、其後衛の靈公、其聲を聞て、師涓と云る樂人に命じて、曲に寫し、晉の平公の爲に奏しければ、師曠と云樂人、是を聞知て、云樣は、是は殷の紂が靡靡の樂と云て、淫亂の聲也と云、然れば桑間濮上共に、淫風の曲也、淫風を以て、身を失ひ國を亡す、故に亡國の音と云、今言心は、此等の音樂を聞給ふべからずと也、

內荒伐人性、外荒蕩人心、

文選枚乘七發曰、皓齒蛾眉、命曰伐性之斧、色に荒めば、人の精神を耗散し、性情を傷害して、病を受、命を損する故に、內荒伐人性と云也、東坡詩、鬢雪未易拂、眉斧親自伐【外荒―】左傳莊公四年、楚武王以伐隋將齋、人告夫人鄧曼曰、余心蕩、註、心如蕩散也、田獵を好めば、人の心を蕩し亂る也、

難得之貨侈、亡國之音淫、

珍寶を欲すれば、志意侈り、淫亂亡國の樂を好めは、情淫して不止也、以上の四句は前の句を再釋して、云述る也、

勿謂我尊而傲賢慢士、勿謂我智而拒諫矜己、

我を位尊しと云て、賢人に無禮をし、天下の士を輕んし慢る事勿れ、【傲】は、隨意に在たき儘に居るを云、大學の敖惰是也【慢】は、人をあなどる也、漢の高祖の嫚士と云是也、我を有智慧と云て、諫を拒ぎ、異見を不聽己が能を伐る事勿れ殷の紂智足以拒諫、

聞之夏后據饋頻起、亦有魏帝牽裾不止、

【淮南子氾論訓】禹當此之時、一饋而十起〇【魏志辛毗傳】文帝欲徙冀州十萬戶實河南、毗諫止、帝不答、起入內、毗隨而引其裾、帝奮衣不還、久乃出、

論語八佾篇、夏后氏以松、程復心云、禹本揖遜而得天下、且承虞氏之後、故曰夏后氏、羅山曰、夏の代の君と云義也、夏の禹天下の士を得ん事を思ひ、諫を聽ん爲に、一度食する時に、十度座を起て、士を待せらる【註】淮南子は、前漢の淮南王劉安所著也、氾論訓は、篇の名也、廣く物を論する義也【饋】前に見へたり、一說、食也【亦有魏―】魏帝は諫を怒て、裾を引とも止まら

也、禮註曰、取牛羊麋鹿麕之肉、必脄、毎物與牛若一揺之、然後去其筋也、牛羊鹿の肉を取て、擣て其筋を去煮調る也【漬熬】取牛肉新殺者、薄切湛諸美酒、期朝而食之、禮記、漬、音自、新しき牛肉を薄く切て、其筋を去、酒に浸すこと一日一夜して食ふ也【肝膋】肝、駒肝也、獸の肝を食ふ、膋、音聊、腸間脂也、青松曰炙肉也、禮記膟膋燔燎、一說、八珍謂牛麋鹿麕豕狗狼、但し是は出處慥かならず【唯狂─】書多方曰、惟罔念作狂、惟克念作聖、蔡沈註、聖、通明之稱、言聖而罔念、則爲狂矣、愚而能念、則爲聖矣、言心は、紂か如く狂亂して、道を念ふ事無れば、糟丘酒池を作て、醉迷ふて亡る也〔注〕吳志は、陳壽が所作、三國志の其一也【孫權】は、吳主字は仲謀、太帝とす孫策が弟也、武昌に都す【長夜─】紂爲淫樂、以一百二十日爲一夜、謂之長夜飲、長夜は、終夜の義なれ共、晝も闇籠り、火を立て酒宴するを云、吳の孫權、武昌にて、釣殿に臨み、大に醉て、水を以て群臣の面に灑き懸、今日大酒盛して樂んと云けるが、誤て釣殿の下に落、是に因て酒宴を止、孫權が臣張昭と云者、怒て云樣は、昔し殷の紂、糟を以て丘を作り、酒を以て池とし、長夜の酒宴を成て、晝夜となく淫樂を事とす、此時人皆樂むと云て、紂か愚也と不云と諫めければ、孫權默然として、物をも不云、吳志第七張昭が傳に見へたり、

勿內荒於色、勿外荒於禽、

書五子之歌曰、內作色荒、外作禽荒、註、迷亂曰荒、內女色に迷亂し、外田獵に耽り遊て、迷亂する事勿れと也、

勿貴難得貨、（老子）不貴難得之貨、使民不爲盜 **勿聽亡國音、**（禮樂記）桑間濮上之音、亡國之音也、

〔注〕【老子─】容易難得珍寶を、上たる人貴ひざれば、世淳朴に成て、民自ら求めずして、盜賊の心なし、人君欲深く貪るべからずと也【禮樂─】桑間濮上は、皆衛の國の地の名也、桑間を、桑林共、森中とも云也、毛詩にも、桑中の詩あり、是男女淫亂の事を云り、禮記註曰、史記言衛靈公適晉、舍濮上、夜聞琴聲、召師涓聽而寫之、至晉命涓爲平公奏之、師曠曰、此師延靡靡之樂、武王伐紂、延投濮水死、故聞此聲、必於濮水之上也、師延は、殷の紂が伶人也、紂が亡る時に、師

壯九重於內、所居不過容膝、彼昏不知、瑤其臺而瓊其室、【通鑑外紀】紂作鹿臺、爲瓊室玉門、

九重の鳳闕を、內裏に廣大にすれ共、天子の居給ふ所は、只其膝を容て安するに不過、餘は皆威靈壯觀を示し、百司千官の爲也、容膝は、歸去來辭に見へたり【彼昏―】句解曰、彼昏庸之主、無所知識也、暗君は何の分をも不知して、驕奢の餘りに、玉の樓臺、玉の宮室を作ると也、註【通鑑外紀】は、宋の道源劉恕が所編也、鹿臺は、紂が臺の名也、世史類編云、殷紂造鹿臺、爲瓊室玉門、大三里、高千尺、七年乃成、爲鉅橋倉、厚賦稅、以實鹿臺之財、盈鉅橋之粟、燎焚天下之財、罷苦萬民之力、收狗馬奇物、充牣宮室云云、綱鑑補註には、以此夏桀が事とす、又世史云、夏桀爲瓊宮瑤臺、殫百姓之財、肉山脯林、酒池可以運船、糟堤可以望十里云云、文選東京賦曰、夏癸之瑤臺、殷辛之瓊室、註、夏癸、桀也、殷辛、紂也、皆以瑤瓊飾之故名焉、

羅八珍於前、所食不過適口、【禮天官膳夫】凡王之饋、珍用八物、注珍、謂淳熬淳母炮豚炮牂擣珍漬熬肝膋也

唯狂罔念、丘其糟而池其酒、【吳志】孫權於武昌臨釣臺飲、醉以水酒群臣面曰、今日酣飲、檻醉墮臺下乃止、張昭怒曰昔紂爲糟丘酒池長夜之飲、當時亦以爲樂、不以爲愚、權默然、

八珍は、天下の美き物也、是を天子の前に列ね具れ共、喫食し給ふ所は、口に適ふ物ばかりを用ひて、腹に滿るに不過と也、注禮天官は、周禮の天官の內、膳夫の掌る所也、膳夫は、臺所人也【饋】は、禮疏云、進物於尊者曰饋、御膳也【珍】は、美味也、八珍の事、亦禮記內則篇にもあり【淳熬】通鑑綱目集覽、八珍註曰、淳、沃也、熬、煎也、煎醢加淕稻上、沃之以膏、煎成之、肉の醢を煎て、米に雜へ、牛の膏にて煮成を云【淳母】母、讀曰模、模、象也、作此象淳熬、內則註煎醢加于黍食上、沃之以膏曰淳母、疏曰、法象淳熬而爲之、但用黍飯爲異耳、肉醢を用て、粟飯に加へて、膏にて煎し成也【炮豚】取豚若牂、刲之實棗於其腹中、編萑以苴之、塗之以墐、塗炮之、豚の肉を土にて包み、熱灰の內に入、燒熟するを云【炮牂】牝羊を包燒にする也【擣珍】取肉必脄、々、音梅、脊肉、擣捶之

政之得失、謂如春秋所書日食月食隕星之類是也、君の德正しければ、日月星常の如くにして無變、或は日食なども、定數に當りながら、其蝕の無ことあり、若君の政失して亂るゝ時は、三光祟を成、日食月食、或は定數の外に數りに見へ、客星妖星出る類あり、是三光君の政道の得失を同ふするに非ずや、

故身爲之度、而聲爲之律、【史記夏紀禹聲爲律、身爲度】

註夏の禹王の言語の聲は、自ら呂律の調子に合ひ、其身の擧動は、自然に法度と成也、羅山曰、度は定規、かねなどの、物の手本になるを云、禹の身の形、自ら度と成也、是亦人君の、天下の爲に手本と可成と云義也、

勿謂無知、居高聽卑、

晉書郭攸傳、天道無知云云、句解曰、勿謂天道之無所知也、蜀志、秦宓曰、天處高而聽卑、書泰誓曰、天聽自我民聽、天道冥々にして、物知こと無と云事勿れ、天下の耳を以て耳とする時は、天道能聞知也、

勿謂何害、積小就大、

【勿謂何害】曲禮語也【積小―】繫辭下云、善不積、不足以成名、惡不積、不足以滅身、小人以小善爲無益而弗爲也、以小惡爲無傷而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解、小罪をする共、無害と不可云、小を積は大と成也、愚謂く、羅山の說の罪字を、惡字に改めて見るべし、必しも罪に不可當、古解云、小の惡よりして大惡を生ず、微塵を積て、須彌山と成が如し、

樂不可極、樂極生哀、欲不可縱、縱欲成災、

曲禮曰、敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極、列女傳云、樂極必哀生、漢武秋風辭云歡樂極兮哀情多、安樂をば餘りに極め過すべからず、樂が至極すれば、必す哀傷を生する者也、夏の桀、殷の紂、周の幽王秦の始皇、吳の孫皓、陳の後主、隋の煬帝などの類是也、貪欲をば恣まゝにすべからず、必ず禍災を成者也、周の靈王、後漢の靈帝獻帝などの類是也、

語を記し、右の方に居る史は、王の行事を書付る也【事爲春—】君の行へる事を記せるをば、春秋とし、君の言語を書せるをば尙書とす、春秋は、年の下に時を書、時の下に月を書、月の下に日を書て、某年某時某月某日に、有何事と記し付る也、尙書には、堯舜禹湯文武の宣へる事を記せり、後世の王言にて云はゞ、勅詔綸旨の類是也、其外亦諸臣の事をも載たり、周禮には、大史小史內史外史有て、左右史なし、漢書に左史を云に依て、此に左言右事と書たり、又禮記玉藻篇曰、動則左史書之、言則右史書之【出警—】【註】孫伏伽】唐書列傳二十八、貝州武城人、武德始爲侍御史、太宗即位、封樂安縣男、遷大理少卿、帝數出馳射、伏伽諫曰、臣聞天子之居禁衞九重、出也警、入也蹕、非直尊其居處、爲社稷生人計也云云【警蹕】は、さきをおふと讀り、前呵と云も此事也【警者戒肅】いましめつゝしむ也、【蹕止行人】人を拂て、前を開かしむるを云、天子行幸出入する時に、路次の狼藉妨げ無ん爲に、供奉の前驅警蹕を呼ばる也、執柄將軍の出入に、をなり〳〵と云も是也、警蹕、此註に、伏伽が傳に引と云共、已に周禮に出たり、又史記梁孝王世家曰、出言蹕、入言警、索隱曰、漢舊儀云、皇帝輦動稱警、出殿則傳蹕、止人淸道、言出入者、通文耳入亦有蹕、又案ずるに漢書には、出稱警、入言蹕とあり、蹕と字同、然れば警も蹕も、出入共に係て云也【禁衞—】天子所居曰禁、內裏の門へは、妄に人を出入せしめず、非常の者を禁制する故に、禁中と云、衞は、守衞也、百官天子を守護し奉るを云、九重の義は、待漏院記に見へたり、天子の在ます禁中には、百臣千官守衞し奉る事九重也、出入し給へば、警蹕して行人を拂ひ止む、是至尊なる故也、

四時調其慘舒、三光同其得失、

句解曰、春夏秋冬四時之間、調和其慘舒之氣、以示人主之明時、謂春東作、夏南訛、秋西成、冬朔易之類、自當對時育物、文選西京賦曰、夫人在陽時則舒、在陰時則慘、此擧乎天者也、陽は物を生する故に舒和らく、陰は肅殺する故に慘み憂る也、慘舒は、陰陽と云んが如し、君德脩まり政正しければ、四時陰陽調和して、造化生成の功不遂と云事なし【三光—】句解曰、日月星辰、謂之三光、其常變應人主之所爲、每同其

倖幸、及び親愛する者許りを、私しに取分て、秘藏がる事有べからず【至公―】書太甲上篇曰、惟天無親、克敬惟親、公は、無私を云、至極おほやけに、依怙贔負し、誰ぞ取分て親愛する事なき也、只善人德ある人を親みて、政事を計はせ、天下の人尤とある樣なるべき也、

故以一人治天下、不以天下奉一人、

湯誥曰、俾予一人輯寧爾邦家、泰誓下曰、爾其孜孜奉予一人、靑松曰、不必竭天下之財力、以奉一人之用、文六韜曰、天下非一人之天下、乃天下之天下也、同天下之利者、則得天下、擅天下之利者則失天下、人君一人を以て天下を治むるは、萬民亂れざる樣にとの爲也、天下の財力を取盡して、君一人を尊奉し戴んとには非す、太公が六韜の辭能會得すべし、

禮以禁其奢、樂以防其佚、

句解曰、聖人脩禮以治躬、予以節之而禁約其用度之奢侈、論語八佾篇、子曰、禮與其奢也寧儉【禮】は、本心の敬より出て、其分際相應の宜きに隨ひ、品節法度ある也【奢】は、分に過て、非禮なるを云、君も臣も、其分に合ふて作法あれば、非禮の事なし、是禮以て其奢を禁じ止むる也【樂以―】句解云、設樂以治心、予以和之而防閑其流連荒亡之佚心焉【樂】は、音樂にて、鐘鼓歌舞を云、但し今は本心の和より出て、正しき者を云【佚】は、放逸逸樂とて、ほしひまゝに、徒らに遊ぶを云心の和より出る樂を以て、佚欲を防ぎ止る也、

左言而右事、【前藝文志】古之王者、世有史官、君擧必書、所以謹言行、昭法式也、左史記言、右史記事、事爲春秋、言爲尙書、出警而入蹕、【孫伏伽傳】天子之居、禁衞九重、出也警、入也蹕、警者、戒肅蹕、止行人、

註前漢書を前と云、後漢書を後と云、諸書の註に、多く如此略して云也、古の帝王は、代代史官あり【史】は、ふんびとゝ讀り、王者の右筆也、亦書籍を治むる事を司る【君擧必書】とは、君の擧動をば、必ず書付ると也、左傳莊公二十三年に出たり、擧は、身の行ひを云【言】は、口に所云【行】は、身の所行也、王者の苟且に言行ふ事を謹ましめ、善を勸め、惡を懲す法度を昭に戒し爲也【左史―】王の左の方に侍る史は、王の言

管子曰、風者漂物者、風之所漂、不避貴賤美惡、雨濡物者也、雨之所墮、不避大小强弱、事起乎而所忽、所行無常云云、大凡事は、敬まずして、忽せにするより起る、忽は、由斷して怠る義也【無妄】本易の卦の名也、易には無字を无に作る、朱子本義云、无妄、實理自然之謂、史記作无望、謂无所期望而有得焉者、其義亦通、句解云、易无妄之災、謂不測之禍也、妄と望と通ず、無妄は、不慮の義也、禍は思ひ寄ざるより生ずと也、又無妄を、みだりなしと讀て、眞實の義と云説は、今此に不叶、

固以聖人受命、拯溺亨屯、

書咸有一德曰、受天明命、以有九有之師、聖人受命とは、天の命令を受得て、帝王の位に備るを云【拯溺】家語、子路拯溺、其人拜之以牛、袁了凡綱鑑註、拯溺謂拯救天下之沒溺也、溺は、水に陷る也民の苦みて、水に溺るが如くなるを、救ひ擧て助け活す也【亨屯】易屯卦、屯、元亨利貞、本義曰、屯難也、物始生而未申通之意、其卦以震遇坎、乾坤始交而遇險陷、故其名爲屯、綱鑑註曰、亨屯、謂亨通天下之屯難也屯は、險しく陷る所に行迫りたる如く、艱難なる義也、亨は、通ずる也、亨屯とは、前の塞りたるを開き通する樣に、天下の難義迷惑を止るを云、

歸罪於己、因心於民、

尙書湯誥曰、萬方有罪、在予一人、盤庚上篇曰、邦之臧惟汝衆、邦之不臧、惟予一人有佚罰、君の過ちをは、他人にかづけすして、萬民の罪をば、君の政の惡く、德の至らぬ所に歸するを、歸罪於己と云【因心―】老子經曰、聖人無常心、以百姓心爲心、註、百姓之心所便、因而從也、言民之所好好之、民之所惡惡之、而好惡必因乎民之心、君の心は、民の心に因て、彼が好み惡むに順ふて、政道を行ふを云也、

大明無私照、至公無私親、

禮記曰、天無私覆、地無私載、日月無私照、是を三無私と云、文選句解曰、大明、生於東、謂日也、日照四海、無私其明、又曰、日者、君象也、日光遍く照して、私しに曲り、一物一所を取分ては照さぬ也、人君の萬民の上に居て、德化を施し行ふも、亦如此なるべし、我近習

君は天下を有つ、富貴なる故に、作ㇾ福と云ふ、大寶を題とする故に、福の字を用ひたり【語】子路篇孔子の言也、羅山曰、今日まで君たれ共、政悪く無道なれば、位を失ふ故に、危き者なれば、能慎まれよと戒ん爲に、爲ㇾ君難と云也、臣下も慎無れば、義を失ふ故に、其身を危ふす、是を爲ㇾ臣不ㇾ易と云也、此文は専ら君の位を戒る箴なれは、只爲ㇾ君實難と書り、尚書の大禹謨曰、后克難ニ厥后一臣克難ニ厥臣一政乃乂黎民敏ㇾ徳、

土ニ普天之下一處ニ王公之上一

事文類聚には、主を作ㇾ宅、毛詩北山篇曰普天之下、莫ㇾ非ニ王土一普は、遍也、一天下と云義也【處王公—】前漢嚴助傳に、景帝曰、朕奉ニ先帝之休徳一處ニ以眇々之身一託ニ于王侯之上一天下に主として、王公の上に在は、天子一人也、夏の禹商周の代には、天子一人を王と云、周の世衰て、春秋の時に至て、楚呉越皆恣まゝに僭上して、己か國中にて、王號を犯せり、戰國に至て、七雄皆王と稱す、秦の始皇に及て、海内を混一し、初て皇帝と稱す、是に因て漢の世には、天子一人を皇帝と稱し、親王諸侯を封して、其國々の王とす、故に此に王公と云も、諸侯王三公を云也、

任ニ土貢一其所ㇾ求、具ニ寮陳一其所ㇾ倡

禹貢、任ニ土作ㇾ貢、註、任ニ其土所ㇾ有、以ニ其貢賦之差一貢は、みつきものと讀り、諸國の土産に任せて、君より求る所を、貢物に具る也、是に因て土産を、土貢とも、土宜とも云也、其土地の宜く所ㇾ有を進る故に云也、毎年の貢を、年貢と云も是也、愚謂く【任土】は、土地に封せられ任する也【具寮】文選句解曰、具ニ備官僚之屬一上唱則下和、凡所ニ陳布一皆應ニ其上之所一ㇾ唱、寮は、官也百官を具て、役役の奉行ある故に、君の言出す事を承て、天下に布行ふ也、

是故恐懼之心日弛、邪僻之情轉放、

上に云如く、人君は天下の富貴を極め、威福を大にして、萬づ自由なる故に、慎み恐る心、日日に弛り怠つて、邪まに僻る心彌ゝ放恣なる也、

豈知事起ニ乎所一ㇾ忽、禍生ニ乎無妄

内、所居不過容膝、云、其文大抵不凡、既不爲史所書、故學者亦罕傳誦、蘊古爲丞四年、以無罪受戮、太宗尋悔之、乃有覆奏之旨、傳亦不書、而以爲坐事誅、皆失之矣、舊唐書今載此箴、仍專立傳不知宋景文何爲削之也、貞觀政要曰、張蘊古、貞元二年、自幽州總管府記室兼直中書省、表上大寶箴、文義甚美、可爲規戒、太宗嘉之、賜帛三百段、乃援授以大理寺丞、五年、李好德素有風疾、言涉妖妄、詔令鞠其獄、蘊古言好德癲病有徵、法不當坐、太宗許將寛宥、蘊古密報其旨、仍與博戲、侍御史權萬紀劾奏之、太宗怒令斬於東市、既而悔之、今通鑑綱目を按すれば、武德九年八月、太宗即位、九月、張蘊古太寶箴を上つる、南湖下奉曰、予讀唐史、惜乎張蘊古之無傳而大寶箴之不録也、至少微與綱目録之、則蘊古之忠賢得白矣、又惜乎箴内諸詞、太宗多不能實踐、若於所謂衆怒而後加刑、伸其屈而直其杜者、乃即於蘊古而反之、不待衆怒、特以權萬紀一言、遂怒殺之、而屈枉之甚、嗚乎蘊古之箴、能庇萬人、而不能庇一己、可勝慨哉、

今來古往、俯察仰觀、

古往今來の義は、滕王閣序の解に見へたり、羅山曰、說文に、古往今來曰宇とあり、古より今に至る迄と云義也、此に今來古往と云も、今の間を云也【俯察曰】易係辭上篇曰、仰以觀於天文、俯以察於地理、朱子本義曰、天文、則有晝夜上下、地理、則有南北高深、又下篇曰古者包犠氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、言心は仰て天の日星を觀、陰陽變化の道を推、俯て地の宜を察し、萬物生殺の理を考る也、羅山曰、仰觀俯察は、天地の間を見る義也、然れば此八字は、古今天地の間と云義也、靑松曰、上句竪說、下句橫說、萬里曰、非也、上句橫、下句竪也、

惟辟作福、【書】洪範、惟辟作福、惟辟作威 **爲君實難、**【語】爲君難、爲臣不易、

註【洪範】は、尙書の篇の名、箕子が所作也【惟】は、維と通用也【辟】は、君也【福】は、恩賞也【威】は、刑殺也、人君は天下を有つて、慶賞賜予、撫育仁愛、心のまゝに行ふ、是を惟辟作福と云也、又殺すも奪ふも、皆君のまゝにて威勢を立らる、是を惟辟作威と云、羅山曰、福と威とを人に奪はるゝれば、君の位衰る也、人

聖人之大寶曰位、潘安仁西征賦曰、化一氣而甄三才、此三才者、天地人道、唯生與位謂之大寶云云、天子の位を大寶と云、故に亦寶祚とも云、此篇專ら人君の位を守る事、易からざることを述て、箴めとする故に、此題に名つく【唐太宗—】太宗、名は世民、唐の高祖の次子也、始め年十八にして、高祖を勸め、隋の亂を平げて、唐の代とし、高祖の末年に讓位して、太宗登祚し給ひ、貞觀と改元す【直中書—】事文要玄曰、唐制、序末至而他官權攝者爲直官、凡他官入院、學士謂之直院學士、直は、直宿、とのゐと讀て、官人番をして、其役所に宿する義也、中書は、天子の書記を司る官也、省は、禁中官人の役所也、張蘊古中書の官省に番直して在しか、此箴を書て上つる、事物紀原曰、舜納言、周內史、皆中書之任也、漢武游宴後庭、始宦者典事、尚書謂之中書謁者、置令、不言謁者、省文也、通典云、唐百官志則曰、秦始置中書謁者、漢元帝去謁者字、漢魏品卑而任重、隋文帝廢三公府寮、令中書令與侍中知政事、遂有爲宰相、宋史官職云、中書省、掌進擬庶務、宣奉命令、行臺諫章疏、唐書百官志、中書省、唐中書省中書令二人、掌佐天子、執太政、總判省事、後改曰西臺、紀原曰、中書之官、雖起自漢武、而所治之府、魏晉始有之、謂之中書省、太宗張蘊古が箴を賞じて、絹三百段を賜り、大理寺丞と云官を被授此官は、日本の判官に當れり、貞觀政要第八卷、及び唐書の刑法志に見へたり【其辭—】此文委曲と、くはしく、つまびらかにして、天子の鑑戒めに備へ示すべしと也、句解曰、大寶箴、其辭委曲、可示鑑戒、一論古今聖主處位之難、二詳述其可戒之事、三述古今納諫、與用心之公正、四戒聰明之過退、五指吾皇以仲諍臣之直、前後五段、隱然有節奏在其中〇梅花無盡藏曰、此篇五段、自篇首至之律第一段、自勿謂至矜己第二段、自聞之至小心第三段、自詩之至和平第四段、自吾皇至末第五段、

張蘊古

容齋五筆云、唐太宗初即位、直中書省張蘊古上太寶箴、凡六百餘言、遂擢大理丞、新唐史附其姓名於文藝謝偃傳末、又不載此文、但云諷帝以民畏而未懷、其辭挺切而已、資治通鑑僅載其略曰、聖人受命、亟溺亨屯、故以一人治天下、不以天下奉一人、壯九重於

又まだ左樣にても無と抑る也 注【百尺竿―】書言故事曰、能增添工夫向上進一步、曰百尺竿頭進歩、上面にて義窮り理屈したる處を、后山又一重云上せたるは、假令は、十丈高き竿の上に上り、進み難き所に至て、又一歩を進むる樣なる文の書き樣也、至極の上手哉と批判する也【吾爲子―】后山甄君の爲に、此事を記すべし、君の子孫此文を讀ん者は、其善を視て勸とせん、暗に有忘有不與の二句を含めり、其惡を見て戒とせん、暗に望木視榛棘發所藏の三句を含り【其可―】如此あるならば、子孫末末迄も、不孝の罪を免れんかと也、

君攬涕而謝曰、免矣、遂爲之記、

第六節進歩、云勸戒之意、

甄君后山云る事を聞て、涙を抑へて謝禮して、誠に如此ならば、可免と云て、同心せり、后山終に甄君が爲に記之 注【第六節―】義窮り理屈したる上に、又一歩を進めて、善を勸め、惡を戒るの心をと也、

箴類

文選陸機文賦、箴頓挫而淸壯、銑曰、箴、所以刺前事之失者、故須抑折前人之心、使文淸理壯也、頓挫、抑折也、文心雕籠註云、箴、所以攻疾、說文、箴、與鍼同、韻會曰、箴、綴衣箴也、一曰、誡也、詩、因以箴之、註、諫誨之辭、醫者以鍼石刺病、故有所諷刺而救其失者、謂之鍼、古者以石爲鍼、左傳、美疢不如惡石、尋到源頭云、箴之所作、乃夏禹作、蓋箴者、取規諷之義、若鍼之療病也、後人有箴始此、左傳有虞人箴、荀子有箴文、揚雄有酒箴、張華有女史箴、皮日休亦有酒箴、又東坡詩、淸詩似庭燎、雖美未忘箴、【箴】は、いましむと讀、文を作て、敎へ誡るの義也、本鍼と同字、砭鍼の病を療治する如に、人の過失を誡め去を云、

○大寶箴

聖人之大寶曰位、此篇寄箴人主以守位之難、蓋自唐太宗初即位時、張蘊古直中書省、乃上大寶箴、其辭委曲、可示鑑戒、

註【聖人之位―】易係辭下云、天下之大德曰生、聖人之大寶曰位、註、夫無用則無所寶、有用則寶也、無用而常足者、莫妙乎道、有用而弘道、莫大乎位、故曰

我親より玄孫迄は、服をも著て悲む故に、不忘、玄孫
より末は、遠き故に忘る者也、今其末末迄も、忘れし
めざらんとて、此亭を作れる也、曾子曰、愼終追遠、
則民德皈厚矣〔注〕分明、

凡君之子孫、登斯亭者、其有忘
乎、因其親以廣其思其有不興
乎、

如此亭を作置るゝからは、甄君の子孫、向後此亭に
上ん者は、先祖の事を思出ざらんや、其親を思ふに依
て、其思を推廣めたらましかば、父祖を思ひ、又其よ
り曾高を思出すべき程に、孝の心興さひでは、有まじ
きと也、

君曰、博哉子之言也、吾其庶乎、

甄君后山を稱美して云、所被申、扨々廣ひ事哉、後山
の被云如くに、願はしくこそ存ずれと也、

曰、未也、賢不肖異思、後豈不有
望其木思以爲材、視其榛棘思
以爲薪、登其丘墓思發其所藏
者乎、

后山云、否まだ左樣にてなし、賢と不肖とは、所思各
別なる者也、甄君の子孫に、若不肖なる者有て、墓の
上なる木を見ては、材木にせんと思ひ、墓の上の榛棘
を見ては、薪にせんと思ひ、墓の上に上ては、此墓を
掘開て、先祖を葬る時に、何ぞ重寶なる物を添て、埋
みかしつらんに、取んと思ふ樣なる者、有ざらんやと
也、【榛】も【棘】も、皆うばら也、

於是遽然流涕以泣、

甄君后山が云事を聞て、俄かに肝を消て、淚を流して
泣也、

曰、未也、（百尺竿頭更進一步、）吾爲子記之、使
君之子孫誦斯文者、視其美以
爲勸、視其惡以爲戒、（說作記之意、）其可
免乎、

有主月朔必薦新、時祭用仲月、冬至祭始祖、立春祭先祖、季秋祭禰、忌日遷主祭於正寢、晦菴曰、君子將營宮、先立祠堂於正寢之東、爲四龕以奉先世神主、旁親之無後者以其班附【嘗禘】中庸十九章曰、明乎郊社之禮、禘嘗之義、朱子註、禘、天子宗廟之大祭、嘗秋祭四時皆祭、擧其一耳周禮註、五歲一禘、禘者、祭祖之所自出、以其祖配之、審禘昭穆而配於太祖、禘異於祫者、毀廟之主、陳於太祖廟、與祫同、未毀廟之主、各就其廟祭、此其異也、樂書註、禘以諦昭穆之尊卑、必於四月、以陽上陰下、有尊卑之義、祫、以合群祖必於十月、以萬物歸根、有合木之義、嘗は、四時の祭の名、何にても食物あれば、先親の靈前に進め供ふ、すゝめてなめしむるの義也、新嘗會などゝ云も、秋の稻の初穗を先獻ずる故、にいなめと云も是也、禘は、父昭子穆とて、親と子とを次第して祭る事をも云、又は先祖を取合て祭るをも云、君子は親を忘れざる故に、墓を郊野に築て封溝し、宗廟を家の內に作て嘗禘する也【衰】又作縗、亦作褑、斬—齊—大紅小紅細麻、謂之五等服、縗喪衣、長六寸、博四寸、上曰縗、下曰裳、說文、縗之言、摧也、言中摧痛、杜預註、縗在胸前、禮記、斬—父服、齊—母服、喪服小記註、方氏曰、當心曰—、當背曰負版、左右曰壁、通謂之—、衰は、喪服、俗に、ぶく、又いろと云是也、心に當、背に負、兩脇に當、其制法は文公家禮などに見へたり、日本には衣裳の如くにして、所々をあくる事は、愁て筋骨も離散する心と也【忌】は年忌、月忌也、喪服を著、年忌に祭て、悲哀する事は、其親を思ふの心を存せん爲也、何ぞ忘るべきや　註分明、

雖然、自親而下、至于服盡、服盡則情盡、情盡則忘之矣、

上高　曾　祖　父、下は子孫曾玄、旁は兄弟姉妹、從兄弟、從姉妹、再從兄弟再從姉妹、三從兄弟三從姉妹是は皆其々の服ある也、此外は其親も盡、情も盡れば、服も盡る也、我親より以下、玄孫の子に至て、喪服をも不著、服を著ざれば、悲の情もなく、其情無れば末に成て忘ると也、

夫自吾之親而至于忘之者、遠故也、此亭之所以作也、四節論下因親易忘而作亭

は見へず、字彙、音故、堅牢也、執滯也、又陋也、又本然之辭、孟子固所願也、如此にあり、余諸經史に訓點するに固有固然固願固知など〻ある類は、皆もとより と讀本然之辭と云の義を取用て也、

今夫（喚起過思親處）升高以望松梓、下丘壠而行墟墓之間、荊棘莽然、狐兎之迹交道、其有不思其親者乎、請名之曰思亭、（第二節論思親故以名亭、）

註 親を思ふ處を云出さんとて、上の喩を述、此にて呼起し過すと也、過は、猶來字【梓】楸也、あづさと訓ず、楸は、ひさき也、俗には、ひしやげと云【丘壠】冢也、楊子法言、秦晉之間、冢謂之壟、曲禮、適墓不登壟【墟墓】二字にてつかと訓ず、ふるくあれたるつかと云心も有歟【荊棘】うばら、をどろ【莽然】あを〳〵としげる也【狐兎―】孟子滕文公上篇曰、獸蹄鳥跡之道、交於中國、言心は、高處に上り、墓に植たる松や梓やを望み見、又丘壟の所在を過て、荒たる墓の間の道を行に、荊棘茂り塞て狐兎の通路と、成たる處を見て は、何なる者も、死たる親の事を思出さゞるは有まじき程に此亭をば、思亭と名付べしと乞云也 註 分明、

親者、人之所不忘也、而君子愼之、故爲墓於郊而封溝之、爲廟於家而嘗禘之、爲衰爲忌而悲哀之、所以存其思也、其可忘乎、（第三節論親不可忘、）

親は人の忘るまじき者也、而して君子仁人は、愼て親を不忘孝心を存する也、不忘は、即ち思也【郊】郭外也、又郊野【封溝】周禮地官、大司徒之職、掌建邦之土地之圖云云、制其封彊而封彊之、註、溝、穿地爲阻固也、封、起土界也、文選句解曰、爲之墳墓於郊原、而封土爲壠以泄水、封は、土を高くし、土居などを築を云、溝は、墓の廻りに、掘を掘て、水を通ずる也【廟】通鑑綱目、唐太宗貞觀十三年 集覽曰、家廟者、尊嚴之名、崔豹古今註、廟、貌也、所以彷彿先人容貌、庶人則立影堂、伊川曰、嘗修六禮大略、家必有廟、廟必

曰、何不以麥舟與之、堯夫曰、已付之矣、

既葬、益樹以木、作室其旁、而問名於余、　序事○第一節叙其人來求名亭之由

甄君已に父母昆弟を一度に葬て、墳墓に益て驗の木を植、又其傍に亭を作て、此亭を何と名を可付ぞと、師道に問也、父母の沒後に、墳の傍に廬を作て、三年服を送る者數多あり、死後迄も、孝を厚く行ふ也、孔子卒去し給ひて、何れもの弟子衆、皆心喪三年にして去、獨り子貢墓の邊に廬を建て、喪を持して、六年迄在じ也【注】【序事】是迄甄君父母昆弟を送葬して、墳墓の邊に亭を造りたる事を、次第して書也【第一節叙—】此段甄君來て、師道に此亭に名を付て給はれと云事を述る也、

余以爲目之所視而思從之、　且說思之所始詳言所思不同、

師道思はくに、目に所見あれば、必ず思ふ事其に隨て出來る者也【注】【且說—】思ひと云者は、目に見る處、より始まる事を云、又此下に思ふ所の不同ある事を云、

視干戈則思鬪、視刀鋸則思懼、視廟社則思敬、視第家則思安、

【干】干楯、たて也【戈】戈矛、ほこ也、今のやり也【刀】鋸刀【鋸】のこぎり、罪人を殺すに用ふ【廟】祭先之處【社】書錦堂記の註にあり【第】字彙、—宅、有甲乙次—、故曰—、初學記、出不由里門、面大道者、名曰—、爵雖列侯、食邑不滿萬戶、不得作—、言心は、干戈を見れば、戰ん事を思ひ、刀鋸を見れば、法を恐る事を思ひ、廟社神位の所在を見れば、自然に敬を思ひ、結構なる家作を見れば、安坐したく思ふ、是皆所視に依て、思念生ずるの證據也、

夫人存好惡喜懼之心、物至而思、固其理也、　又出一思字、泛論人之所思

【好】このむ又よみんずる也【惡】去聲、にくむ也、言ろは、人內に好み惡み、喜び恐るの心を存する故に、外より事物到り來れば、必ず思念生ず、是本より其理也、事は千萬替れ共、其を思ふ所は同じと也【固】古よりまことゝ訓ず、愚案するに字書には、まことゝ云義

以明經教授、鄉稱善人、

【甄】音眞、翰墨全書眞韻甄字部云、舜陶甄河濱、因以爲氏、注【其人無名—】發端に、甄はと書出したるは、只今亭の名所望せらるゝ甄君の先祖の姓也、其人の名も聞へず、名も知ぬ故に、姓ばかりを云【標】は、表也、揭げ顯す義也【徐】今直隸邳州、此人本は徐州の人にて、財貨に富る人也、今此亭の名を請るゝ甄君に至て始て六經の道に明なる故に、人に教へ授て、其一鄉の人に、善人と稱せらるゝ也、後漢の揚震、少して學を好て、經に明か也博覽にして窮究せざることなし、蒙求に詳也、又案ずるに明經は、鄉貢の科の目也、教授は儒者の官也、唐選擧志曰、唐制、取士之科、多因隋舊、其大要有二、由學館曰生徒、由州縣曰鄉貢、皆升于有司而進退之、其科之目、有秀才、有明經、有進士【鄉稱善人】後漢馬援傳之語、又論語鄉人之善者好之、

而家益貧、更數十歲不克葬、

本は富家也しが、近年衰へて、父母兄弟をも、久しく葬禮する事成ざる也【更】は、かへて共、へて共可讀【數】は、三より上七迄を云、大唐には、葬禮に過分に造作の入故に、貧しければ葬る事不能也、

乞貸邑里、葬其父母昆弟、凡幾喪、邑人憐之、多助之者、

【乞貸】乞は、請也、又借也、貸は、施也、借也甄君其父母兄弟を、久く葬らざる事を悲みて、其里の人に物を請借などして、幾たりの葬禮をせらるゝ也【喪】死也、又中陰をも云、字彙去聲、死也、又音桑、持服曰喪、論語、三年之喪、天下之通喪也【邑】周禮、四縣曰都、四井曰邑、左傳、凡有宗廟先君之主曰都、無曰邑、都曰城、邑曰築、甄君が父母兄弟を、數十年送葬せざる事を、邑里の人も亦憐で、助成する者數多有しと也、范文正公在睢陽、遣子純仁字堯夫於姑蘇、取麥五百斛、堯夫時尙少、既還、舟次丹陽、見石曼卿、問寄此久近、曼卿曰、兩月矣、三喪在淺土、欲葬之西北、皈無可與謀者、堯夫以所載舟付之、單騎自長蘆捷徑而去、到家拜侍之、良久、文正曰、東吳見舊乎、曰、曼卿爲三葬未擧、留滯丹陽、時無郭元振、莫可告者、文正

て、斷る事無か如し、窮り限りもなき意、言詞の外に現れ見ゆると也○梅華無盡藏云、此篇六段、自篇首至於余第一段、自余以至思亭第二段、自親者至忘乎第三段、自雖然至作也第四段、自凡君至未也第五段、自吾爲至末第六段、

陳師道

東都事略一百十六、文藝傳九十九、陳師道、字無已、徐州彭城人也、少刻苦問學、以文謁曾鞏、鞏奇之、元祐中、蘇軾、傅堯俞、孫覺、薦于朝、爲徐州教授、除太學博士、初師道在官、嘗私至南京、謁蘇軾、至是言者彈冒法越境、出爲潁州教授、紹聖初言者復論師道進非科第、罷皈、久之爲橚州教授、除秘書省正字、以卒、師道家素貧、自罷皈彭城、或累日不炊、妻子慍見、不恤也諸經皆有訓傳、於詩禮尤邃、爲文師曾鞏、爲詩宗黄庭堅、然平淡雅奥、自成一家云云、現行錄後集十四、陳師道無已、一字履常、以侍從合薦、爲徐州教授、官至秘書正字、無已苦節厲志、自其少時、蚤以文謁南豐曾舍人、曾一見奇之、許其必以文著、時人未之知也在潁賦六一堂詩、有向來一瓣香、敬爲曾南豐之句、傅公欽之、初爲吏部侍郎、聞師道遊京師、欲與相見、先以問秦觀、觀曰、師道非持刺字俛理色、伺候乎公卿之門者、殆難致也、公曰、非所望也、吾將見之、愼其不吾見也、子能介於陳君乎、公知其貧甚、因懷金餽之、及覩其貌、聽其論議、竟不敢以出口、詳見師道詩集三序及跋、陳は姓、師道は名、字を無已と云、后山と號す、名譽の詩人にて、山谷と友也、山谷が詩に、吾友陳師道、白髮三徑艸と作れり、東坡とも知音也、貧苦にして學を勤む、文は曾南豐を宗とし、詩は黄庭堅を宗とす、后山絶句に、此生精力盡於詩、末歳心存力已疲と作れり、淸廉無欲にして、不求利達、館職と成し時、天子郊丘を祠るに侍すべし、裘を重るに非されば、寒を防く事不能、後山只一裘なれば、其內趙挺之が內親と姉妹也、即ち趙挺之に一裘を借て、後山に著す、後山何くより來ると問しかば、內以實荅之、後山怒て、汝何ぞ我他人の衣裳を著ざる事を知ざらんやと云て、是を郤け去、只一裘を著る、遂に寒疾を感じて死す、

甄、其人無名位、標其姓、　故徐富家、至甄君始

行を専として死すべし、此八字は古今の名句也、孟子梁惠王上云、未有仁而遺其親者也、未有義而後其君者也と云心なるべし【謝云此等一】此天下治の句、一有不幸の句などは、天下の教化に預る事大き也、千萬世後迄も、亡ぶべからずと也、古人の忠孝一生心と云如くに、學校の教は、此外に不有【磨】は、石などをすりへらす義、【滅】は、火のきゆる義、

使人有所賴、且有所法是惟朝家教學之意、

人たる者、此教に依賴み且又法り效ふ所あらしむ、青松曰、使人賴此忠孝之道以自存、因循此忠孝之道而爲法式、羅山曰、袁州の人のみならず、天下の人をして、此教を賴み、此道を手本にせしめん、是朝廷學校を立るの本意也【朝家】は、仁宗の朝廷を指也、

若其弄筆以徼利達而已、豈徒二三子之羞、抑亦爲國者之憂、

收拾得好、

【弄筆】筆を取て、文を自由三昧に書也、弄は、玩弄とて、なぶり物にし、もてあそぶ義也、筆のきいたる儘に、奇巧に書成を云、羅山曰、六經を寫し、文章を作るを云【徼】は求也、中庸徼幸、左傳徼福、論語先進篇云、非我也、夫二三子也二三子は門人也、此にては諸生を云、羅山曰、學校にすはる師匠博士等を指也、若筆を弄びて、利欲榮達を求め及第科擧の望のみならば、是二三子の耻辱のみならず、國家を治る者の憂なるべしと也【注】【收拾一】物の散たるを取收め、遺たるを拾ひ入る樣に、文をばらりと書散して置を、終にひし／＼と結び收る事好と也、

○思亭記

〔迂齋云〕節奏相生、血脈相續、無窮之意、見於言外、

文選句解曰、此篇叙人子思親之義、羅山曰、甄氏の人、親の葬禮をして、其墓の傍に亭を立て、陳師道に記を賴て書しむ、師道此の亭を思亭と名付て、記を書也【注】【迂齋一】韻會【節奏】音樂作止高下緩急之度、ふしあや調子を云、羅山曰、節は音樂のふし也、奏は、能和して揃ふ義也【血脈】又曰、人の身の經絡の續く如くに、文の段々能通ずる也、湖月曰、文章の語路次第也、此篇節奏の相生じて、能相應和する如く、血脈の相續

云り、箇樣の事は、上に云如く、孝武世祖の儒學を好で、學校を設け、仁義の道を敎られしかば、其餘風人の心を結び固むる故に、惡逆なる者も、少は耻恐るゝ事有て、俄に位を奪はざる也注【此學之脩】とは是學道の脩れる故と也【一句結】敎道之結二人心一如レ此と云一句にて、學校の脩りたる事を云結ぶ【有筆力】文章簡古にして、亦柔弱ならずと也、

今代遭二聖神一、爾袁得二聖君一、句法 俾二爾由二庠序一、踐二古人之迹一、

【今代遭二聖神一】とは、當代の仁宗皇帝を指也、孟子盡心下篇曰、大而化レ之謂二之聖一、聖而不レ可レ知之謂二之神一、今は時君を稱美して云【爾袁】とは、そこの袁州と云心也、愚案ふるに爾字は、本爾、汝の爾にてなんぢと訓ずれ共、汝は、慥に人物を指、爾は、時に因て事を指て、虛なる心あり、故に以て無レ體事を指云時に書こと多し、書の大誥爾多邦、詩の蠢爾蠻荊、及此段の爾袁の類是也、又以て然字の義とする者あり、詩の嗟爾君子、及び率爾遽爾の類是也、以て其字とする者あり、書の惟爾有レ神、詩の既作二爾歌一、各奏二爾能一、及び爾時爾事の類是也、今此段は、書と詩との例に任せて、此國と云義に可レ見也【聖君】句解に作二賢君一、祖無擇を指て云時は、作二賢君一を爲レ是、聖字は、過稱也、上に祖君無擇とある程に、賢君とは可レ云、代は聖君仁宗に逢、國は守祖君を得たりと也【庠序】學校の名、上に見へたり、言は爾袁州の人をして、學校に由循ふて、古の聖賢仁義の行迹を踐行はしむと也、論語先進篇、不レ踐レ迹、

天下治、則譚二禮樂一、以陶二吾民一、一有二不幸一、尤當下仗二大節一爲レ臣死レ忠、爲レ子死上レ孝、〔謝云〕此等文章、關二涉世敎一、萬世不二磨滅一、

天下太平なる時は、此學校にて、禮樂を談論して我袁州の士民を陶冶すべし【禮樂】上の誦絃聲の字に相應ず【陶】竹樓記に見へたり、陶冶とて、瓦師や鑄物師の、能物を作り、成せる樣に、人民を能治め化して、道に從はしむるを云【一有不幸—】萬一に不仕合にて、天下亂る事あらば、大なる節義に倚仗て、道を守り命を惜べからず、臣としては忠節を立て死し、子としは孝

術を勸られたり【皆】とは、武帝も光武も共にと也【孳孳】說文、汲汲也、勤貌、與孜同じ、孟子曰、孳孳爲善【術】法也、訓道、

俗化之厚、延于靈獻、艸茅危言者。折首而不悔、功烈震王者、聞命而釋兵、

【俗】風俗【化】敎化【靈帝】後漢の第十二主、名は宏、極惡の人也、治二十一年【獻帝】靈帝の中子、少帝の弟、名は協、董卓に刧かされ、曹操に被壓て、徒に空位を保つ事三十一年、曹丕に被簒、廢せられて、山陽公と成壽五十四にして薨ず、武帝光武學術を好まるゝ故に、天下の風化厚く長く引て靈獻迄に及び、前後漢合せて四百九年治まる【艸茅】孟子萬章下篇、在野曰艸莽之臣、茅と莽と字は異なれ共、義は同し、賤き臣と云心也【危言】論語憲問篇、子曰、邦有道、危言危行、註、危、高峻也、危言は、言語を高く峻しくする也又師古曰、危言直言也、有のまゝに申て諫正す也【折首】易の離の卦に出、句解曰、漢中有白衣上書、言甚激切忤主、遂殺之、勇士不忘喪其元、未嘗悔也、後漢の永昌の太守曹鸞上書して、黨人を禁錮する事を諫め、靈帝に殺るゝ類也【功烈】書錦堂記の解にあり【震主】天子を動し恐れしむるを云、是は後漢の末に君を憂へ、國を憂へ、笑止かりて、無官の賤き者、或は正直なる者、異見を申し上る故に、忠言耳に逆ふて、其身を殺さるれ共、君を大切に思ふ故に、悔ざる也、又大臣たる者、或は大將たる者、多の功業有て、國郡に封ぜられたる者、其勢君を動し恐しむる程なれ共、勅命を聞ては兵を起さゞる也、

群雄相視、不敢去臣位、尙數十年、敎道之結人心如此、此學之脩、一句結有筆力、

句解曰、曹操袁紹之徒云云、不敢去臣位、尙數十年、間、操方敢自立爲魏公云云、及操死、子丕襲位、始受禪稱天子【群雄】は、曹操、孫策、袁紹、袁術、劉表などが類は、皆後漢の末の雄武なる者也、何れも世の衰たるを伺ふて、天子と成らん志はあれ共、猶君臣の名分を恐る故に、未だ位に卽こと能はずして、始は漢の臣と成て居る也、如此なる事年久き故に、數十年と

人より後れば、如何有んと恐る也、如此なる事は、何故ぞなれば、始皇詩書百家の書を燒て、聖人孔子の道を廢る故に、時の人、只利欲のみを見て、義理を聞ざれば也、是は古四代の學校にて、人倫の道を敎へ、義理を知しむる事なるを秦是を廢たる故に、萬世に帝たらんと云しは妄言にて、僅に二世にて滅びたり秦の早く亡びたるは、學校の廢れたる故也、見利而不聞義と云語、尤も好き戒め也、秦以山西と云より、詩書之道廢と云迄、史記の始皇本紀、李斯傳、項羽本紀に詳也注分明、

孝武、乘豐富、世祖出戎行、皆學學術、

孝武紀贊曰、漢承百王之弊、高祖撥亂反正、文景務在養民、至于稽古禮文之事、猶多闕焉、孝文初立、卓然罷黜百家、表章六經、遂疇咨海內、擧其俊茂、與之立功、興大學、修郊祀、改正朔、定曆數、協音律、作詩樂、建封壇、禮百神、紹周后號令、文章煥焉可述、后嗣得遵洪業、而有三代之風、如武帝之雄材大略、不改文景之恭儉、以濟斯民、雖詩書所稱、何有加焉、顧廻瀾

歷朝捷錄曰、王莽卽眞、窮凶極逆、卯金鼎絶、人民改代、天下之謳吟、思漢非一日矣、文叔自以劉秀當爲天子、而興兵白水、以捕不道、于時盜名字者、不可勝數、而秀乃除莽苛政、一時攀龍附鳳之輩、鱗集響至、莫不研精殫慮、被甲躍馬、以共噓死灰於復燃、攻邯鄲而王郎授首、命馮異而盆子歸降、擊銅馬而關西投死、委吳漢而江淮悉平、遣耿弇而張步躬欵、征隴西而隗囂穴破、攻巴蜀而公孫隕首、天戈所指、乾淸坤夷、日月所照、皆爲臣妾、且其恢廓大度、同符高祖、手不持珠玉之玩、耳不聽鄭衛之音、夢想賢士、側席幽人、物色嚴光、茅土卓茂、閉玉關、謝西域、視大學、投戈講藝、息馬論道、東都之業、炳炳麟麟、繼盛於西【孝武】は、景帝の子、文帝の孫、高祖の曾孫也、文景の代に、天下能治りて、豐に富り、故に太倉の粟、陳陳として食ふべからず、錢の貫朽て、校ふべからずと、漢書にあり、是程富貴なる天子の子孫なれ共、孝武帝儒學を好て、孔子を尊べり【世祖】は、後漢の光武也、少き時に、尙書を習ひ、卽位以後にも夜半迄學問し給へり【戎行】は、軍旅の行列也、兵戎の間より出給ふと云義也、世祖久く處處の合戰に隙無りけれ共、儒

句道破、筆力高古、

【覩】は、太伯が名也【四代】虞夏商周也【學】禮記王制曰、有虞氏養國老於上庠、養庶老於下庠、夏后氏養國老於東序、養庶老於西序、殷人養國老於右學、養庶老於左學、周人養國老於東膠、養庶老於虞庠、虞庠在國之西郊、孟子滕文公上、夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之云云【經】六經幷周禮等也、釋奠やう〳〵近日なれば、泰伯衆人に告て云、四代の學校の敎は、六經を考て見るべき事なれば、詳に云に不及〔注〕【謝云—】學校の記を作て、四代を云ざれば、根本の起りを忘る程に、自ら是大に事を欠也、然共長長と說は、下手くろしかるべきに、今此に只一句を以て總て云盡すは、筆力高上簡古也とぞ、卑く今めかしく無を云、

秦以山西鏖六國、欲帝萬世、劉氏一呼而關門不守、語壯、

【秦】は、雍州に都して、崤山函谷を固めとす、此山より西なる故に、山西と云、東をば山東の國と云也【六國】は、韓魏燕趙齊楚、詳に阿房宮賦の注に見へたり

【鏖】は、盡死殺人也、みなころすと讀り、漢書霍去病傳に、合短兵鏖皐蘭下と云語あり、秦も戰國七雄の內なれ共、始皇六國を滅して、天下を取、朕を始て皇帝とし、二世三世より傳へて、萬世迄帝たらんと思へり、然を劉氏兵を舉て、一度呼つて秦を攻ければ、函谷關を守る者なき程に、打破て咸陽宮へ攻入也、劉氏は、漢の高祖、姓は劉、名は季也〔注〕語壯とは、文章の語、壯んに健なる也、

武夫健將賣降恐後、何邪、詩書之道廢、人惟見利、而不聞義焉耳、此學之廢、

【武夫】は、兵士也【健將】は、勇なる大將也、高祖項羽入秦時に秦の久き大將軍章邯、其外數多の兵、皆我先に降參する也【賣】羅山曰、人をたらす義也、酈寄賣友と云も朋友をたらす事也、君をたらし諸卒をたらし、人人後れじと、高祖項羽に降參する也、愚謂く、賣降は、商人の物を賣て、利を貪る樣に、敵へ降參すれば、身命を續、又は事に因て知行をも取ほどに、降を賣て、我利とする也、秦檜賣國と云是也【恐後】とは、

篇上、使舜完廩、羅山曰、文庫也、疑誤、庖も廩も有次第にて作る【百爾器備】萬つの道具皆備て、何に乏き事なしと也、毛詩雄雉篇、百爾君子、不知德行、朱子註、百、猶凡也、言凡爾君子、豈不知德行乎、百は、大數を云、爾は、其字の心、百爾は、多の義【並手一】諸人手を並て、此道具を作ると也、大工諸細工人、皆上手にして善、奉行も無懈怠能勤て、朝夕精力を展布てする也、

越明年成、舍音釋采音菜且有日、

越字の註は、喜雨亭記に詳也、明年は、仁宗至和二年也、此年に州學の造營成就する也【舍采】韻會陌韻釋字註曰、周禮禮記舍菜舍奠與釋同陳設也、蓋し祭るの義、采は、蓋し蘋蘩蘊藻の采、與菜同じ、然れば舍采は、野菜を置の義也、釋奠は、菜を置て祭るの義也、二月中の丁の日八月中の丁の日、一年に兩度孔子を祭る、是を舍采釋奠と申也【且有日】とは、追付に釋奠を執行ん事、日あるべしと也、句解曰、月令曰、釋菜學記曰、祭菜、皆所謂禮先聖以芹藻之屬、今且有定日矣○周禮春官・大胥掌學士之版、以待致諸子、春入學舍采合舞、註、鄭云、學士、謂卿大夫諸子學舞者、版籍也春始以學士入學宮而學之、合舞、等其進退、使應節奏、舍米、謂舞者皆持芬香之采、或曰、古者士見於君、以雉爲贄見於師、以菜爲贄、菜、直謂疏食菜羹之菜、或曰、學者、皆人君卿大夫之子、衣服采飾、舍采者、減損解釋盛服、以下其師也、月令、仲春之月、上丁命樂正習舞釋采、仲丁又命樂正入學習樂、鄭玄曰、舍、即釋也、采、讀爲菜、始入學、必釋菜禮先師也、菜蘋蘩之屬、又記の文王世子學記に見へたり、袁了凡綱鑑補、宋哲宗元祐六年十月、帝臨國子監釋奠于孔子、註、凡釋奠者、設薦饌酌奠也、或曰、釋、散也、散饌具而安設之也、宋以儒立國、獨先聖之祭曰釋奠、所以別群祀也、日用上丁者、丁陰火也、火象文敎宣明、又宋史新編志二十八、文宣王廟、塑先聖十哲像、畫七十二賢先儒二十二人像于東西廡、春秋一丁、及仲冬上丁、貢擧人謁先聖先師、命官釋奠、毎歳貢士始入辟雍、並以元日釋菜、

盱江李覯諗于衆曰、惟四代之學、考諸經可見已、【謝云】作學說、不記唐虞夏商周、自是欠事、今只以二

通判、掌倅貳郡政、所部官得刺擧以聞、大郡二人、餘一人、不及萬戶不置、武臣知州、雖小郡亦置【潁川】綱鑑註、今河南許州是【陳侁】東都事略、言行錄萬姓統譜等の書に無傳、宜博考焉、潁川の人陳侁來て、袁州の通判たり、此時祖無擇が學宮を造營せんとある言を聞て、一段善とし、相談じて兩人の心能相合と也【是】は、善也惡き事をば、非と云、羅山曰、是は、善事なれば、是之と云也、此を字法とす、

相舊夫子廟陿隘、不足改爲、乃營治之東、

是より前に袁州に有孔子廟、其地甚だ狹ふして、改め造るに足ぬ所なる故に、即ち州の政治を課る堂の東に空地あるを見立、孔子の廟を移し、學校を立る也【陿隘】は、皆せばき也【營】は經營、いとなむと訓ず、作爲也【治】は廳也、政治を出す所也、

厥土燥剛、厥位面陽、厥材孔良、殿堂門廡、黝堊烏洛切丹漆、擧以法、故、

今新たに學校を建立する所の地、高して土燥き、堅く剛き也、地低くして土濕ひ、脆く碎け易ければ、所建基頗み居傾く者也、東南は陽、西北は陰の方也、天地の正位、北を背にして南を前にす、故に天子の座、宗廟の位、皆南方に向ふ、廟は、亦東向にも作る也、日月の東南に行つて、皆陽の方なるに象る、今此孔廟も、亦位陽に向しめて作る、其材木甚だ好と也【殿】孔子の像を祀る處を大成殿と名付、亦曰先聖殿【堂】は、講堂【門】は、廟門【廡】は、堂下周屋、ひさし也【黝】於糾切、玄黑微青也【堊】烏洛切、白飾墻也、しらつち【丹】丹土【漆】木漿、可飾物、うるし、殿堂門廡あり、黝ぬり堊ぬり、丹ぬり漆塗て、色々に彩る、何れも、昔よりの法制故事に隨ふ也、奇英、以法爲句、以故字屬下句、蓋し誤也、

生師有舍、庖廩有次、百爾器備、竝手偕作、工善吏勤、晨夜展力、

句解、師作徒【生】は、諸生を云【師】は、國子博士を云、各所居の屋舍あり【庖】は、庖廚、くりやとて、臺所也、孟子梁惠王篇上庖有肥肉【廩】は米倉也、萬章

太常博士云云、與王安石同爲知制誥云云、安石得政、乃詘監司求無擇罪、遂責忠正軍節度副使、士大夫寃之、元豐中復秘書監集賢院學士、判西京留守御史臺、移知信陽軍、以卒、詳于東都事略七十六、通鑑綱目、宋神宗熙寧二年十二月、下龍圖閣學士祖無擇秀州獄、貶爲忠正軍節度副使、初無擇與王安石同知制誥、安石嘗辭一人所餽潤筆物不獲、取置諸院梁上、安石憂去、無擇用爲公費、安石聞而惡之、及安石得政、乃諷諫司求無擇罪無所得、遂誣以他事、謫爲忠正軍節度使、安石因言于帝曰、陛下遣一御史出、即得無擇罪、乃知朝廷於事但不爲、未有爲之而無効者、無擇以言語政事爲時名卿、被誣棄、士論惜之、

始至進諸生知學官闕狀、字法、

祖君始て袁州に至て、諸の學生を進め見て、學校の官職の缺たる有樣を知也【生】は、生員とて、學校に居る諸生學徒を云、宋史新編百九、祖無擇、字擇之、上蔡人、進士高第、歷直集賢院、出知袁州、首建學宮、置生徒、郡國弦誦之風、由此始盛、歷龍圖閣學士、知鄭杭州、神宗立、知通進銀臺司云云○進諸生知學官闕狀八字古文句解、古今文海、並無之、古文集成、古文訣、並有之、

大懼人材放失、儒效闊疎、亡以稱上意旨、

祖君學校の廢れ、人の材能放散遺失し、儒道の上效へ下效ふの風俗、濶疎とむなしくおろそかにして、天子の叡慮に叶ふまじき事を恐る也【濶】は、だゞひろく、むなしき意【疎】は、をろそかに、すいて有隙の義、密の對也董仲舒對策曰、夫不素養士而欲求賢、譬猶不琢玉而求文采也、故養士莫大乎大學、大學者、賢士之所關也、敎化之本原也、願興大學、置明師、以養天下之士、數考問以盡其材、則英俊宜可得矣、郡守縣令民之師帥、所使承流而宣化也、師帥不賢、則主德不宣恩澤不流、

通判潁川陳君侁、聞而是之、字法

議以克合、

宋史三十八、職官志曰、太祖始置諸州通判、以郎官以上入則貳政、出則按縣、有軍則專糧餉之責、又曰、

不レ當して假物也、是を假レ官と云、按是以二宮字一作二官字一、如何借レ師とは師匠博士と成て、學校に居れ共、人の師と成まじき俗儒なれば、分際に過て、師の名を犯す、故に借レ師と云、禮記に、記問之學、不レ足三以爲二人師一とあるの類也、古文珠璣には、借字を借字に可レ作、借は非也と云り、按二古文奇英註一亦同 然れば上の假字に對して佳也、師と成まじき者の、師の名を借たる義也、如レ此して、文書を貯へ具へたる迄也、如レ此なれば、守令も博士も有名無實にして、有ども無か如くなる 體無レ益故に苟具と云也、

或連二數城一、亡二誦弦聲一、倡而不レ和、敎尼不レ行、 句法、

論語陽貨篇に、子游爲二武城宰一、以二禮樂一治レ之、孔子過行給ふとて、其絃歌の聲を聞とあり、又禮記文王世子篇曰、春誦夏絃、大師詔レ之、註、弦、以二琴瑟一播二被詩章一之音節也、又王制曰、春秋敎以二禮樂一、冬夏敎以二詩書一、註、文王世子與レ此不二同者、古人之敎、雖レ曰二四時各有一レ所レ習、其實亦未二必截然棄一レ彼而習レ此、恐亦互言耳、言心は、或は數多の郡縣數城を連ねて、禮樂の敎なき故に、絃歌の聲不レ有也、學校にては、詩を歌ひ管絃に合せて人の心を和げ敎る事有に依て、如レ此云也【亡】は無と同し、漢書に、無字を皆作二亡字一、是亦古文也【倡】本作レ唱、字彙、唱、尺亮切、導也、又發レ歌謂二之唱一【和】去聲、應和也、唱は、歌を先發する也、和は、其に付て、應じ歌ふ也、詩に和韻あり【尼】女乙切、止也、靑松曰、上唱立レ學、下人不レ和、道止不レ行二於明時一也言 心は、上より學問をせよと唱ひ導け共、下應和して是をする者なく聲敎泥み止つて、行はれざると也、羅山曰、倡和する事なき故に、絃歌の聲もなく、倡和する事もなき故に、敎絶て行れざる所あり、大誤不二全解得一、萬里以二三十有二年五字一、付二此下一點レ句、偶誤耳、

三十有二年 范陽祖君無擇知二袁州一、

是も仁宗即位より三十二年 自至和元年甲午に當れり、此時祖無擇詔を受て、袁州の事を知行する也【君字】は、尊で書る也、下の陳君も亦同じ【知】は、州の事をつかさどり行ふ義也【祖無擇】字擇之、蔡州人、少從二穆脩一爲二古文一、又從二孫復一受二春秋一、擧二進士甲科一、稍遷二

九祖無擇知袁州、李太伯入學講說、建韓公祠、修鄭都官墓○晦菴語錄曰、李太伯文、得之經中、雖淺皆自大處起議論、文章氣象好甚、使人愛之、如老蘇父子、自史中戰國策得之、故皆自小處起議論、

皇帝二十有三年、制詔州縣立學、

【皇帝】は、宋の仁宗皇帝也【二十有三年】乾興元年、壬戌二月、眞宗崩す、仁宗遺詔を受て、柩の前にして即位、明年天聖と改元す、元年癸亥より、慶曆五年乙酉に至て、凡て二十三年也、有は、又字と同し、二十年の上、又三年と云義也、春秋に、冬十有一月、十有二月など、書る心也、年號は、漢の武帝より始まる、古文には不記年號、此に年號を不書も、古文の法也、尙書洪範曰、惟十有三祀、王訪于箕子、秦の李斯、泰山の碑に、皇帝臨位、作制明法臣下脩飭、二十有六年、初幷天下、罔不賓服云云、瑯邪の碑に、維二十六年、皇帝作云云【制詔】天子の勑命也、史記李斯傳曰、王爲秦皇、命爲詔、蔡邕曰、制書、帝者制度之命也、其文曰制詔詔書詔告、正義曰、制詔、三代無文、秦始有之、漢書に王言爲詔と云り、仁宗天下の州郡縣邑に、勑詔して學校を建させ給へり、

惟時守令、有哲有愚、有屈力殫慮、祇順德意、句法 有假宮借師、苟具文書、句法、

【守令】綱鑑秦始皇紀註、守、郡守、爲天子守土治民者也、字彙、縣令、漢法、縣萬戶以上爲令、以下爲長言心は、其時郡守縣令に、賢哲に才かしこき者あり、愚痴にをろかなる者あり、又其精力を屈めて勤め、思慮を盡して謀り、謹て、天子の德意に順ひ守る者あり註句法の佳と也【有假宮—】句解曰、有無學宮而假仙道之宮、且以非賢德而借處師位、苟備文辭書卷以塞責者、又仙道の宮觀を借て學校とし、僞り借して師と成、妄りに文書を備る者あり、屈力の二句は、善假宮の二句を惡【借】は、借犯也、己が分に過る事を、言行ひするを云【苟】は苟且、かりそめの心、但し此にてはみたりにする義也、羅山曰、眞實ならずして、萬つ輕薄なる義也、守令の宮と、成とも、其才德無れば、實に

方輿勝覽十九、江西路共十一州、袁州部曰、州學唐天寶五載太守房琯始立夫子廟於城北門外五十步、國朝皇祐五年、郡守祖無擇、以舊居陿隘乃改營於州治之東、今學是也、學成、盱江李泰伯爲記、京兆章友直篆額、河東柳淇書、世號三絕、熙豐間第天下學記以袁州爲冠、禮記學記曰、古之敎者、家有塾、黨有庠、術有序、國有學、註、術當作州、萬二千五百家爲州、州之學曰序、我家の內にての學問所を塾と云、五百人許りある黨にては、庠と云、術にては序と云、一國にては學と云、其所の相應に依て、學問所を建る也、日本にても、大學寮は、天子の學問所也東宮學は、太子の學問所也、國學は、國國の博士の居て敎る所也、延喜式に見へたり、中世より斷絕ず、千萬遺恨の事也、袁州に學校を新造するに因て、李太伯其記を書也、古文訣、及句解、並作袁州學記註【迂云―】此記の議論正大にして、世の敎に關り涉る、其上筆力文勢老ひねて、健かに壯なる也【謝云―】宋の代の大儒、多く學校の記を作る、然共三百年以來、人人只此記を喜で誦する也、筆の端に勢力あり、光焰有て、諸人の作に超て、人並ならずと云にてはなし、其議論を立る事、高遠にして卑近ならず、宏く大にして狹小ならず、其本意人心天理を不離して、虛遠空濶に不馳、讀者の樂で倦厭ふ事なきは、道理ぞと也【關】は、關係【涉】は、干涉【光焰】韓文公詩、李杜文章在、光焰萬丈高〇萬里曰此篇七段自首篇至二第一段、自范陽至意旨第二段自通判至有日第三段、自盱江至見已第四段、自秦以至焉耳第五段、自孝武至如此第六段自今代至末第七段、

李太伯

東都事略百十四、儒學傳九十七、李覯、字太伯、盱江人也、以文章知名、通經術、四方從學者、常數百人、素不喜孟子、以爲孔子尊王、孟子敎諸侯爲王、嘗試制科、六論不得其一、曰、吾書未嘗不讀、必孟子註疏也、擲筆而出、人爲檢視之、果然、終不中第、太伯有富國强兵之學、著禮論、易論、明堂書、行于世、范仲淹余靖薦補將仕郎、海門簿、召赴大學說書、以卒、葬鳳凰山下、無子孫云云、其所爲文十七卷、號退居類藁、嘗自述曰、天將專我與、所爲固未足也、不然斯亦足以籍手見古人矣、時以其言爲然〇事文類聚別集十

其職事、

天禧元年丁巳也【眞宗】は、宋の太祖の姪、太宗の子也、眞宗天禧の初に勅詔有て諫官を六人置て、其職事を責らる、責とは、人に物を借て今返せと責はたるを云、其如くに諫を云へ、何とて云ぬと責る也、責成と云事あり、其成功を責る也、書畢命に、嘉績多于先王、子小子垂拱仰成と云是也、

慶曆中、錢君始書其名於版、光恐久而漫滅、嘉祐八年刻著于石、

【慶曆】は、宋の第四主仁宗の年號也【錢君】東都事略四十八、錢昆字裕之、吳越王涼子也、隨俶朝、諸從子皆授官、獨昆與其弟易、願從科擧、遂登進士第、累遷至三司度支判官、仁宗時知廬濠泉亳梓壽許七州、爲治尙寬簡、官至右諫議大夫、以秘書監致仕、卒年七十六、昆善爲詩賦、又喜艸隷、有文集十卷、翰墨全書氏族門云錢昆性嗜蟹求補外郎、曰但得有蟹無監州足矣【錢】は、姓【君】は、尊之也、名は昆、字は裕之、慶曆中に諫官たりしが、始て諫官の人人の名を板に記して、諫院に被置也【嘉祐】も、亦仁宗の年號也【光】は、溫公の名也【漫滅】は、文字のつぶれきゆる也、溫公錢昆の板に被記たるが、久くして文字漫滅せん事を恐て嘉祐八年癸卯の歳、石に雕著ると也

後之人將歷指其名而議之、曰某也忠、某也詐、某也直、某也曲、嗚呼可不懼哉、〔迂齋云〕結句三四語凜凜乎秋霜烈日、

此石に雕付たる名を、後世の人、片端に指されて許ずべし、其の人は、有忠功諫議也、某の人は、詐りてうそつき也、某の人は、正直也、某の人は、曲れる人也と、嗚呼恐れ愼まさるべきや、論語に、某在斯、某在斯と云文法也【註】此結び止の某也忠と云より、可不懼哉と云迄の三四語、凜凜とすさまじく、秋の霜の、身の毛よだつ程に思ひ、烈しき夏の日の如に、恐れ思ふと也

○袁州州學記

〔迂云〕議論關涉世教、筆力老健○〔謝云〕宋朝大儒作學記多矣、三百年來、人獨喜誦袁州學記、非曰筆端有氣力、有光焰、超然不群、其立論高遠宏大不離乎人心天理、宜乎讀者樂而忘倦也、

內、咸仰朕德、咸有一德曰、受天明命以有九有之師【德失】大學曰、善則得之、不善則失之【利病】後漢羊續傳、候人病利、註云、損於人曰病、益於人曰利、是より諫議の官の不易事を云、天下の政事善惡得失、四海の萬民利病苦樂、皆諫官一人に集めて、能知能言しむ、然れば其職に任する所輕からずと也【任】は、負任とて、物を負荷ふ也、其官に成て、其役を勤る事を負荷ふ也、

居是官者、當志其大捨其細、先其急後其緩、專利國家而不爲身謀、

諫官に居る者は、天下の政事の大なることをせんと志し、小く細かなる事をば捨置、急にすべき事をば先にし、緩くすべき事をば後にして專一に國家を宜しくする爲にして、我身の榮辱損得の爲に謀らざるべし、是諫官の本職也、是は好方也

彼汲汲於名者、猶汲汲於利也、

此一幹尤奇、非溫公不及此

其間相去何遠哉、

【汲汲】禮記に出たり、增韻、不休息貌、公羊傳、己所欲曰及及、は、汲汲の義也、好名を取んと欲して休ざる者は、何とぞして利を求んと欲して止ざる者と相似たり、是は惡き方也【注】【此一幹―】此にて一轉して、名と利との無大異事を云、尤も奇妙也、是溫公の自己名利に無心、任職怠らざる人にて非んば、此理を云及す事能はじと也【其間相―】湖月曰、名と利とは、遙に遠と也羅山曰、名に汲汲たると、利に汲汲たるとの間、天地隔れりと也、愚謂く名を欲ると利を欲るとは、其間相去事遠からず、我は利の爲にはせず、功名を立んとすると云人あるべし、名はきやしやに聞へ、利はきたなく見ゆれ共、畢竟己が爲にする所は、替りなし、只須く利國家而不爲身謀を、君に仕る本意とすべしと也、當字と彼字とを能味ひ見るべし、羅山又曰、利欲に拘る心に云へば、利にかゝづらふ物の欲に耽る如くに、名に汲汲たるを、好諫議と可云と也、尤も大に誤る、

天禧初、眞宗詔置諫官六員、責

規、親戚補察、瞽史教誨、耆艾修之、而後王斟酌焉、是以事行而不悖、孝經曰、天子有諍臣七人、雖無道不失其天下、諸侯有諍臣五人、雖無道不失其國、大夫有諍臣三人、雖無道不失其家、士有諍友、則身不離於令名、父有諍子、則身不陷於不義、劉絢上崔相書云齊桓公有坐友三人諫臣五人、舉過者三十人云云、又白虎通等の書に詳也、言心は、古には君を諫るに、定て官職を設る事なし、上公卿大夫より、下細工人、商人迄も、惡き政道あれば、天子へ異見を申上る也、堯舜の時は、諫の鼓を置て、誰にても諫めたきと思ふ事あらば、來て此鼓を打と云、謗の木を立て、政道の訕るべき事あらば、此木に書付よと有に依て、大臣などは不及申、諸臣より萬民迄も、諫めずと云事なし、去程に諫官を別に置ことは無と也【注】【此句―】此段天下の政をする者の上に預り渡ること小の事には非ず大なると也、

漢興以來、始置官、

何解曰、自漢文帝始詔舉賢良方正直言極諫至宣帝時有諫議大夫云云、事文類聚新集二十二云、左右諫議太夫、秦郎中令屬官、有諫議大夫、無常員、多至數人、漢武帝元狩五年、初置諫大夫、秩比八百石、後漢光武諫議大夫六百石云云、宋承五代之弊、官失其守、官職差違、纔以定俸入而不親職、諫議大夫司諫正言皆須別降勅許赴諫院供職者、方爲諫官、眞宗天禧元年、詔兩省置諫官六員、不兼職務、二年以李虛己爲諫議大夫充職、其後員闕不補、前漢の文帝より始めて賢人の正直なる者を舉て、異見諫を申す者に定め、賢良方正直言極諫を建置るゝ也、其後宣帝の時に、大夫たる者を諫官に備へて、諫議大夫とせらるゝ也、愚案するに、事文類聚の說なれば、秦の郎中令の屬官に、已に諫議大夫あり、漢の武帝初て置諫大夫、宣帝諫議大夫を被置と見へたり、

夫以天下之政、四海之衆、得失利病、萃于一官使言之、其爲任亦重、

【天下之政】書皐陶謨曰一日二日、萬幾、無曠庶官、【四海之衆】禹貢曰、聲教訖于四海、說命下曰、四海之

得皐陶爲大理、舜時爲士官、秦爲廷尉、漢景帝更名大理、蓋復古號也、舊唐書志曰、取天官貴人之牢曰大理之義、卽用禮士師之職、字彙曰、寺司也宮吏之所止也、說文、从寸之聲、徐曰、寸法度也、故謂官府曰寺、又一說に寺は一寸土と書り、內裏の狹き內に、官舍をひしと建並る故也、九棘は、九卿、九寺は、九卿の所居也、棘寺は、大理寺也、獄官を云、日本の檢非違使、判事判官、囚獄正など此類なるべし、小吏は、小奉行の義、此文を作り奏請して、待漏院の壁に記し付用て執政たる者の戒とする也、執政は卽ち宰相也[汪]末に王元之自名を記して結びくゝる、箴の文體に似たりと也、箴は、戒て書文、是又文章の一體也、

○諫院題名記

〔汪齋云〕首尾二百來字、而包括無餘、識治體、明職守、筆力高簡如此可以想見其人、

司馬君實

天子へ諫諍異見を申す官を諫議諫正司諫補闕拾遺など云也、其官に成る人を、內裏に舍を建設て置、是を諫院と云、今其諫官に備る人の名を、板に書付て揭置故に題名記と云、事文類聚新集二十一云、諫院、秦始置、宋明道元年、陳執中爲諫官、屢請置院、於是以門下省爲諫院、徙舊省於尤掖之西、置諫院自此始云云

[汪]【汪云—】此記始終一百六十八字にて、天下の事を包み括て無餘と也【來字】は、二百以來にて、其より內と云義也舊解に皈去來などの來字の心にて、助語とするは非也【識治體】は、天下國家を治る體本を知を云【明職守】は、諫官の職とし、守る所を明かにするを云【筆力—】知治體明職守事を云のみならず、筆力まで如此に高して卑からず、簡要にして煩碎ならずと也【可以想—】此文を以て、司馬公の人がらを想像見るべしと也、君實は、溫公の字也、事は獨樂園記の下に見へたり○萬里曰此篇二段、自篇首至遠哉第一段、自天禧至末第二段、青松以爲五段、

古者諫無官、自公卿大夫、至于工商、無不得諫者、 此句闊涉大、

淮南子曰、堯置敢諫之鼓、舜立誹謗之木、書胤征曰、每歲孟春、遒人以木鐸徇于路、官師相規、工執藝事以諫、其或不恭邦有常刑、周語、召公曰、爲民者、宣之使言、故天子聽政、使公卿至於列士獻詩、瞽獻典、史獻書、師箴、瞍賦、矇誦、百工諫、庶人傳語、近臣盡

復有無毀無譽、此一轉尤切、旅進旅退竊位而苟祿、備員而全身者、亦無所取焉、戒此樣人、尤有意味、

【復有—】注此復有と一轉して、人の毒にも藥にも成らぬ宰相の事を說、尤も親切也とぞ、切は、剴切とて身を切が如く、痛く其道理に當る也【無毀—】惡き宰相と云毀もなく、善宰相と云譽もなき也【旅進—】旅は衆也、もろ〳〵と訓ず、靑松曰、群然而進、群然而進也、人並に成て、默默として進退する也【竊位】其位に在て、土佛木佛の不言樣にして、賢を進め、不肖を退け、君を致し、民を澤す事不能、其職を不務者を云、所謂尸位素餐、論語子曰、臧文仲、其竊位者與【苟祿】苟は、すまじき事をする意あり、俸祿を妄に取を云【備員—】官職の員數に備り居て、貶黜の辱めに遇ぬ樣に、身を全ふし保つを云、宰相の職に居り、毀譽を免る樣に構へ、諸人と同じく出つ入つして、何事も面從し一言諫諍ふ事なく只官祿を剝れぬを本とし、竊位祿を貪り、官の員に備る迄にて、一生を全ふし、無怪我樣にする者あり、此等は取處なき無用の宰相也、漢の杜欽、谷永、劉歆、孔光、張禹が類是也注此樣なる宰相を戒る事、尤も有意有味と也可能吟味、

棘寺小吏王禹偁、爲文請誌院壁、用規于執政者、末直記其名、以結之、似箴體、

禮記王制曰、司寇聽之棘木之下、鄭玄註、植棘以爲位者、取其赤心而外刺也、句解云、棘寺大理寺用棘爲防小吏者、謙辭也、當時禹偁居是官、爲此文也、請朝廷誌于待漏院之壁、又九棘三槐、詳于周禮夏官【棘】字書如棗而多刺木堅色赤、叢白色爲白棘、實酸者爲樲棘、陸佃云、大者棗、小者棘、酸棗、棘也、棗性重喬、棘則低矣、棘は、うばら共、をどろ共讀り、うばらは、內赤く外に刺有て、人の恐惧ると云義を以て、大理寺の庭に、棘を植る故に、棗寺と云也、棘心の赤は、人の心の淸明にして、無二心に象る、外に有刺は、形儀正しく嚴なるに象る、周禮にある事也、元之此時大理官にてあり、小吏とは、自謙して云り、愚案するに、棘は、酸棗とあれば、棗の類にて、木低く刺多して、實小く味酸、木心赤し、事物紀原春秋元命包曰、堯爲天子、

私心ばかり久く積て、假寐して塊然として坐すると也【注】是惡き宰相の待漏の意あり、

九門既開、重瞳屢囘、相君言焉、時君惑焉、政柄于是乎隳哉、帝位以之而危矣、

舜の目重瞳とて睛が二つ有し也、故に以て指時君、史記、舜蓋重瞳子、淮南子作二瞳、又項羽王莽、皆有重瞳、猶如駑駘有驥之一毛也、今は取前說、言心は、金門已に開け天子出御有て、幾度も御目を回らし給ふ時に、惡き宰相待漏院にて巧み思たる、右の品々の惡事共を奏聞すれば、實らしく巧に申す程に、時の君惑ひて、左も有んと被思也、日月欲明則浮雲蔽之、王者欲正、則讒人毀之が如し、如此なる程に、政道も破れ帝位も危しと也、周禮天官冢宰、政有八柄、爵祿予置生奪廢誅【柄】は、かひと訓す、杓に柄のある如く、王者政事をするに、此八の柄ありて、臣庶を制御す【隳】毀也、墮字とは不同、羅山は、尚書益稷篇の萬事墮哉と云を引り、

若然則死下獄、投遠方、非不幸也亦宜也、以上說反意、

如此の宰相を、死下獄とて、牢下しに死しもし、遠方に投ち流せりとても、不運には非す、勿論其理也となり、章惇蔡京が輩是也、羅山曰、下獄は、逼牢也、投は、流罪の義也【注】【已上一】此節には、正に反ける宰相の意を說也、

是知一國之政萬人之命、懸于宰相、可不愼歟、此四句結上二段、

於此一國の政道、萬人の生命、皆宰相の善惡に係る事を知、然れば宰相たる者、大事と愼み思ふべき事ならずやと也、玄宗の宋璟を相として治り、李林甫を得て亂、哲宗の司馬光を相として治り、蔡京章惇を得て亂るが如し、又王安石か毒、蔡京に傳はり、其より次第に、秦檜、韓侂冑、賈似道へ流れて、遂に宋の天下亡びぬ、去は、宰相の任は、國脈民命の所係なる事可見【注】上の一正一反の二段を、此四句にて引結ると也、

冀、宋の王荊公、呂惠卿、蔡京、蔡卞、秦檜、丁謂、韓侂胄が類是也、

三時告災、上有憂色構巧詞以悅之、

【三時】春夏秋也、春は耕し、夏は耘り秋は穫る、蓋し冬は農の隙なれば、除て不云也、三時に水旱蝗の災あれば、農を害して民苦しむ、歲豐ならざる由を奏聞申て、天子憂へ給ふ色あれば、彼宰相巧に詐れる詞を構作て、天子御機嫌を直し悅はしむる樣にする也、唐書、天寶十四載、霖雨六十日禾不實、楊國忠居相位、取禾之好者獻天子曰、天下雖霖雨、不害禾、

群吏弄法、君聞怨言、進諂容以媚之、

【群吏】は、其其の奉行也、愚謂く、是は法吏とて、目付公事聽の輩也、史記漢書の內に、酷吏と云の吏也【弄法】天子より出る法度を弄ひ物にして、人を恐して物を取也、假令は、有罪者を無罪とし、無罪者を有罪とし、理非を云紛かすを、弄と云、如此なれば、無實の咎に逢者、君を恨る故に、怨言と云、然れば法をば弄物にする理也、愚案ずるに、法は、法令法律也、史記に舞文弄法と云、又深文巧法と云り、文は、律の文也、法は、律の法也、舞文深文とは、刀筆の吏とて小刀と筆とを持て、當座に律の文を書、又時宜ならねば削つりて、此罪は此文に當るなど云て小過をも大罪とし、毛を吹て疵を求るの類也弄法巧法とは、法を撓て罪を赦し、法を構て人を陷れ、巧に似せつこしく誣り誣つなどするの類也、到都、張湯王溫舒、杜周、義縱が屬也、如此の酷吏共が、暴逆を振ひ、無實の人を多く殺し、猛威を逞ふする程に、上下怨み果る、君是を聞給へば、彼宰相己が方人なる故に、種々に諂へる容をし、輕薄を盡して、御氣色の直る樣に媚を成也、

私心慆慆、假寐而坐、（有待漏意）

詩東山篇、慆慆不皈、註、慆慆、言久也【假寐】詩小弁篇、心之憂、不遑――、左傳宣公二年、晉稍盾盛服將朝、早坐――、杜註、不解衣冠而睡、前の私訾未復より、進諂容以媚之までは、皆惡き宰相の私心也、

若然則總百官食萬錢、非幸也、

宜也、以上説正意、

書説命中云、惟説命總百官、論語憲問篇、百官總己、聽於冢宰、宰相の百官を總司るを云、晉書何曾傳、日食萬錢、今は毎日萬錢の俸祿を食を云、言心は、宰相如此ならば、百官の上司に成て、日日に萬錢を食も、勿論の義にて、不圖こぼれ幸など云の類には非す注以上は正き宰相の意を説と也、

其或私讎未復、思所逐之、舊恩未報、思所榮之、

是より惡き宰相の事を云【私讎】史記范雎傳の字、日比に怨恨あるを未た復ひ遂ざる也【舊恩—】昔し我に有恩を未報也、惡き宰相の待漏院にて思ひ計り、内内有宿恨者には、何とぞして惡く申上て逐失ん、恩德ある者には、何とぞして善樣に申上て、榮へさせ度とする也、

子女玉帛、何以致之、車馬器玩、

何以取之、

子女玉帛は、左傳の語【子女】は、未だ嫁せざる美女也【玉帛】は、珠玉絹帛也【器玩】は、うつくしき器物賞玩すべき貨物也、子女玉帛をば、何としてか我方へ至る樣にせん、馬車器玩をば、何としてか取んと思ふ也、

姦人附勢、我將陟之、直士抗言、我將黜之、

【姦】は、邪也、曲也、かだましと訓ず、姦人は、邪曲の惡人也書仲虺之誥曰、簡賢附勢、寇萊公參知政事たり、或時羹を食て、鬚に付たれば、丁謂媚諂ふ餘りに、其鬚なる羹を取ける程に、公爲參政拂相鬚哉と被云から、御鬚の塵と云語始れり【直士】正直の人、漢の汲黯王章が類是也【抗言】抗、通作亢、漢書註、上下相當、無所卑屈曰亢、人と對して不負能言を云、言心は、姦佞の人我威勢に付をは、何とぞして官を進めんと思ひ、正直の人、政道の惡きを論じ、善言を以て強く爭へば、我に敵對して追從せぬとて、讒言して其人を退け逐んと思ふ、漢の石顯董賢、王莽、後漢の梁

鞭にて打也、杖は、棒などにて打也、徒は、奴婢とて、しもべ、やつこと成て使ふ也、流は、遠く流す也、死は、大罪の人を殺す也、唐の太宗又囚人の背を打事を哀み給て、尻の肉處を打せ給ふ【未措】成康之間、天下太平、刑措四十餘年不用、漢文帝紀贊曰、幾致刑措、應劭註、措、置也、刑罰を用ひぬを云【欺】は、人をだます也【詐】は、いつはり也【釐】は、治也、言ろは、天下を治るに、文德少き故から、人を罪する事多して、未だ透と刑を打置て不用こと能はず、君心學實行無れば、世の風俗惡くして、欺詐日日にはやり生ず、箇樣なる事を見ば、君を諫て仁政を施さしめ、文德を修め行ふて、天下を調へ治んことを請申へし、毛詩艸蟲篇曰、未見君子、【憂心忡忡】註、忡忡、心不寧也上面の兆民未安より是迄の事を、宰相我身の上に引懸て君も民も、何とかして能樣にせんと心に愁也、

待旦而入、九門既啓、四聰甚邇、相君言焉、時君納焉、皇風于是乎清夷、蒼生以之而富庶、

書太甲上篇曰、先王昧爽、丕顯坐以待旦、旁求俊彥、楚辭招魂曰、君無上天些、虎豹九關、啄害下人些、又九辯曰、豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重、註、天子九門、謂關門遠郊門近郊門城門皇門庫門雉門應門路門是也、羅山曰、內裏には、一方に門三つ宛あれば、四方には十二門なれ共、九門と書たるは、九重の門と云心也、重重に門門の有を云、天は一つなれ共、九天と云が如し【四聰】舜典、闢四門、明四目、達四聰、蔡氏註、開四方之門、以來天下之賢俊、廣四方之視聽、以決天下之壅蔽、羅山曰、四聰甚邇とは、天子は、坐ながら四方の事を、早く聞給ふ故に、聽字を用ふ、聰は、みゝとしと訓ず、達四聰とは、天下の耳を以て聞の義也【皇風清夷】皇王の風化清平なる也【蒼生】益稷篇曰、帝光天之下、至海隅蒼生、註、蒼生者、蒼蒼然而生、視遠之義也、あをひとくさと訓ず、民を云、句解曰、蒼然而生、衆人生艸木百穀而言此說未審【富庶】論語子路篇に出たり、財富人衆也、宰相平旦を待て、九門開るまゝに出仕して、近く天子に朝謁す、待漏院にて思ひし事共を奏聞すれば、時の君能聽納給ふ、於是皇風清く平かに、萬民富て盛也、

く荒たれば、如何して逋亡の民を召返し、開田を開き作らしめんと思ふ也、

賢人在野、我將進之、佞臣立朝、我將斥之、

書大禹謨曰、君子在野、小人在位、又曰、野無遺賢、【佞】字彙、巧諂捷給、辯口にて黒白を云亂り、媚諛ひつ、又能讒言するを佞人と云、祝鮀之佞と云是也言ろは才德ある賢人、不遇時して在所に引籠て居ば、我是を朝廷に進め擧て用ん事を思ひ、佞人廷に仕官せば、我是を退け去ん事を思ふと也、

六氣不和、災眚荐至、願避位以禳之、

【六氣】左傳昭公元年云、天有六氣、謂陰陽風雨晦明也、支道林曰、天地四時是也醫家には風寒暑濕燥熱を云【災眚】皆わざはいと訓ず、災は、天より降す災也、韻會に、妖病曰眚、大選句解、災病迭來【禳】祈て災を除ふを云、言心は、天の陰陽風雨晦明和順せずして、水旱を成、五穀不登、人病物傷れ、禍災妖病數く至るは、宰相政事不順の故也、漢丙吉傳、三公調陰陽時氣失節、職當憂、然れば是を恐れ愼て其位を避去て、天神地祇に祈て、災難を禳んと思也、

五刑未措、欺詐日生、請修德以釐之、憂心忡忡、

書舜典曰、象以典刑、流宥五刑、鞭作官刑、朴作敎刑、金作贖刑、眚災肆赦、怙終賊刑、呂刑曰惟敬五刑、以成三德、所謂五刑、墨劓剕宮辟大辟是也、蔡仲默註云、墨、刻額而涅之也、劓、割鼻也、剕、刖足也、宮、淫刑也、男子割勢、婦人幽閉、太辟、處刑也、墨は、亦曰黥額を刻て入墨をする也、いれずみと訓す、劓は、鼻を切去也、はなきると訓ず、剕は、亦曰刖、足を切去也、あしたつと訓す、宮刑は、陰處の刑也、腐刑とも云男は勢を去女は幽暗の所に閉籠る也、羅山曰、是も斷去也、かくしところのつみと讀、太辟は、死罪也、縊り殺し首を斬、腰を斬より種種あり、漢の文帝の時に、人の肉を斷事を憐み給て、笞杖徒流死と代らる、笞は、

時に、車の鈴の聲、鸞の鳴聲に似たると也、愚謂く、噦噦鸞聲とは、車靜に行て、噦噦として節ある鈴の聲ありと也、

金門未闢、玉漏猶滴、撤蓋下車、于焉以息、待漏之際相君其有思乎、（說二相君待レ漏之意一○此一句引二下一正一反意一、）

【金門】禁門を稱美して云、又金を鏤むる故也【玉漏猶滴】は、夜まだ明ぬ故に、漏水滴り盡ざる也【撤蓋】撤は、去也、蓋は、車蓋、きぬがさと訓ず、車の上に指懸る傘也、官人路を行時にも用ふと見へたり、華蓋曲蓋などの類也、今も朝鮮來聘の時、三使に用ふ、日本にかさぼこと云樣に、傘を青き絹にて張、軒に氷引したる物也、靑松曰、撤二去靑蓋一下二車而坐也、金門未闢、玉漏猶滴て、夜まだ明離れぬ程に、蓋をすぼめて、車より下り、待漏院に入て休み門の開を待也、其漏刻の盡るを待の間に、相君思ひ謀る事可レ有歟と也、其所レ思は、次に段段說是也【注】【此一句―】一正は、善宰相の事、一反は、其にそふきて惡き宰相也、此相君其有レ思乎と云一句を說て、下の一正一反の意を、すびき出す也、

其或兆民未安、思所泰之、四夷未附、思所來之、

【兆民】億兆之民也、無量の民生を云、書伊訓篇曰代レ虐以レ寬兆民允懷【泰】安泰也、安寧なるを云【四夷】東夷西戎、南蠻北狄也【附】內附とて、中國に皈服するを云【來之】致來とて、自ら德を慕て來る樣にするを云、論語季氏篇曰、遠人不レ服、則脩二文德一以來レ之、是より善宰相漏を待の間に思謀る事を說、言ろは萬民未安からざれば、如何して是を安穩にすべきと思も、四夷來貢せざれば、如何して是を懷け來さん事を思ふ、

兵革未息、何以弭之、田疇多蕪、何以闢之、

【兵】五兵、弓殳矛戈戟也【革】甲、冑也、唐土には、革を寶として鎧を作る故に、革をよろひとす、言ろは兵亂未だ止ずんば、如何して是を鎭めん事を思ひ、田地多

代の時の舊き制法に因隨て、宰相の待漏院を丹鳳門の右の腋に建設く、宰相來て朝見する時、此院に至て、漏刻の盡るを待、平晨に及で、朝廷に出仕する也、是朝廷政事を勤ることを示すと也【註】【接上―】前の務手勤と云勤字に接續して、文章工に佳と也、

至若北闕向曙、東方未明、相君啓行、煌煌火城、相君至止、噦噦鸞聲、

【北闕】説文、闕、門觀也、徐曰、中央闕而爲道、故謂之闕、釋名曰、闕、闕也、在門兩傍、中央闕然爲道也、漢高帝紀曰、蕭何治未央宮、立東闕北闕前殿、註、未央宮雖南面、而上奏事謁見之徒、皆詣北闕、是以、北闕爲正門、三輔舊事曰、未央宮、東有蒼龍闕、北有玄武闕、漢書枚皐傳、皐至長安、上書北闕、孟浩然詩、北闕休上書、南山皈弊廬、闕は、禁中の樓門也、漢の未央宮の北に在故に、北闕と云、百官朝見出入の門なる故に、朝廷を指て北闕と云【向曙】夜明の前と云義也【東方未明】毛詩齊風に、――――篇あり【相君】は、卽ち宰相也【啓行】詩大雅公劉篇、爰方啓行、宿を立出て、行を發する也、此にては出仕に赴くを云【煌煌】明也【火城】李肇國史補曰、每元日冬至、大朝會、百官已集、而宰相方至、珂傘列燭、多至數百、炬謂之火城、宰相火城至、則衆皆滅燭以避之、李綽秦中歲時記、正月一日曉漏以前、宰相三司、金吾以樺燭數百炬擁馬如城、謂之火城、卽燭騎事也、言ろは禁中は、漸に曙の時分に成んと思て、ただ東雲の開かぬに、宰相我家を出て行に、元日冬至の未明には、禁中に松炬を數百立列するが、宰相の出仕には、一段多く燒して、馬の左右に守護し隨ふ故に、煌煌とかゞやき、炎高く揚る事城の如し、故に火城と云【相君至止―】詩庭燎篇曰、君子至止、鸞聲噦噦、韓詩內傳云、鸞在衡、和在軾前、升車馬動、馬動則鸞鳴、鸞鳴則和應、漢書五行志註云、以金爲鸞鳥而銜鈴焉、施於鑣上、動皆有聲以爲舒疾之節也、噦、火外呼會二切、鳥聲也、集傳、噦噦、近而聞其徐行聲有節也、羅山曰【至止】止字は、付字なるべし【噦噦】は、鸞の鳴聲也、鸞の鑾と、音通す、金にて鸞を作り、口に鈴を含ましめて、轡の上に付る故に、鸞字を、すゞと讀り、相君出仕して、待漏院迄至る

便見待漏意、其善宰相は只其德ある許りにてもなし、其可勤道を怠らず務る故也[註]務勤の二字を以て、待漏の意を見ると云、

況夙興夜寐、以事一人、卿大夫猶然、況宰相乎、以上論古者宰相

【夙興夜寢】詩氓篇、夙興夜寐、靡有朝矣、朱子註曰、早起夜臥、無有朝旦之暇、又小宛篇、夙興夜寐、無忝爾所生、又抑篇、夙興夜寐、洒掃廷內、夙興は、早天に起るを云、夜寢は、夜半時分に寐るを【一人】は、天子を指、湯誓、爾尙輔予一人【卿】九卿也、送李愿歸盤谷序の註に見へたり、詳于群書拾唾卷六【大夫】白虎通曰、大夫之爲言、大扶、進人者也、故傳曰、進賢達能謂之大夫也、禮記曰、天子立六官三公九卿、二十七大夫八十一元士、以聽天下之外治、以明章天下之男敎、尙書大傳曰、古者天子三公、每一公三卿佐之、每一卿三大夫佐之、每一大夫三元士佐之【宰相】事物紀原曰、昔周公位冢宰、正百工以相成王、故有宰相之稱、其事自秦漢始、陳平言宰相上佐天子是也、通典曰、春秋之義、尊上公謂之宰、言海內無不統也、故亦謂上相、夙に興、夜に寢て、上一人に仕へて、其勤を怠らざる事、卿大夫だにも猶左樣なれば、勿論宰相は百官の上に在て、天子を佐け、天下の事を裁判處治するをや、

朝廷自國初、因舊制、設宰臣待漏院于丹鳳門之右、凡宰相來朝至此、待玉漏及晨而后趍朝示勤政也、按上勤字有工、

【朝廷】韻會云、人臣於此朝也、周禮太宗伯註、朝、猶朝也、欲其來之早也、釋名曰、廷、停也、人所停集之處、禁中にて政事を所聽、人臣の朝見する處を云【國初】宋の太祖の時を指【因舊制】五代の時より內裏に待漏院を建設らるゝと也【丹鳳門】赤き鳳凰を作り飾れる門なるべし、又丹凰橋と云橋もあり、趙閑閑が雪の詩に、船移忽碎瓊瑤影、丹鳳橋邊駐馬看[註]【玉漏】珠玉を飾れる漏刻也、言心は、宋の朝廷、太祖の天下を取給へる時より、五

寇、冬官司空、是爲六卿、師古曰冢宰掌邦治、司徒掌邦敎、宗伯掌邦禮、司馬掌邦政、司寇掌邦禁、司空掌邦土、【張其敎】青松曰、恢張敎化之具、言心は、聖人も亦不言して、方民上を親み、萬國安寧なる者は、何故ぞなれば、三公の官、坐して道を論じ、六卿の官、各司職を分つて、敎化を張大にすれば也、此聖人は、天子を指註聖人不言を、天道不言に對し、三公六卿の相けと成を、四時五行の佐と成に對して云、

是知君逸於上、臣勞於下、法乎天也、此三句繳上二段、

云心は、如此あれば、君たる人は、上に安逸にして居り、臣たる者は、下に在て苦勞するは、即ち天の道に倣ひ法ると云事を知と也【逸】は、安逸とて、何をもせずして居るを云、勞の對也註【繳】羅山曰、いぐるみに絲を付て放て共、其矢は不失、云散す樣なれ共、結りを不失云結ぶ文法也、鷹にへをゝ付て放が如し、見師說註此三句は、上の天道聖人二段を結ぶ也、

古之善相天下者、自咎夔至房魏、可數也、此一句包數代相臣、

【咎】咎繇、舜臣、尙書論語孟子並作皐陶、其言行當於三書考之、尙書有皐陶謨【夔】舜典樂、當於尙書舜典益稷考之【房】—玄齡、字喬幼、臨淄人、統譜曰、幼警敏、貫綜墳典、善屬文書、兼艸隷、太守狗渭北、杖策上謁、一見如舊、爲府記室、從征伐、獨收景物、置幕府、累官尙書左僕射、居相位十五年、任公竭節世稱其賢、卒贈太尉、諡文昭【魏】徵、字玄成、下曲陽人、統譜曰、太宗時拜諫議大夫、凡上二百餘奏、無不凱切當帝心者、後以秘書監參預朝政、及卒帝嘆曰、以銅爲鑑、可正衣冠、以古爲鑑、可知興替、以人爲鑑、可知得失、徵歿、朕亾一鑑矣、登凌煙閣、觀畫像賦詩痛悼、古の能天下を相けたる者、皐陶夔より房玄齡魏徵に至る迄を、數へ見るべしと也註此一句にて、虞舜の時より、唐の太宗の朝迄の、善宰相を兼含めりと也、愚案するに、古之善—一句、自咎—一句ならん歟、然らば註の一句の一字を、二字に可作、

是不獨有其德、亦皆務于勤耳、

成】乾文言、本義曰、貞者、生物之成、實理具備、隨在各足、故於時爲冬、冬は萬物成就し、年中生長する所の功終る、言心は、天道言ふ事は無れ共、萬物の生亨通し、春夏秋冬と推移て、一歳の功成就するは何故ぞや、

四時之吏、五行之佐、宣其氣矣、

已上論天道之助、以天比君、以四時之吏比相、

【四時】は、春夏秋冬也【吏】は、上の命を受て奉行する者也、又見送薛存義序、春は生じ、夏は長じ、秋は實のり、冬は藏す、四時は、天の奉行主吏也、淮南子曰、天之陰陽之專精爲四時、四時之散精爲萬物、四時者、天之吏也【五行】は、木火金水土也、春は木東方、夏は火南方、秋は金西方、冬は水北方、四季の土用は土中央とする也【佐】は、輔佐、君の宰相也、五行は、天の宰相輔佐也、家語五行帝篇、孔子曰、天有五行、水火金木土、分時化育、以成萬物云云、凡五行之官名五行、佐成上帝、而稱五常云云、白虎通曰、五行者何謂、金木水火土、言行者、欲言爲天行氣之義也、四時五行が天の吏と成故に、天言はざれ共、其氣化を宣行すれば也

【宣】字彙、布也、宣陰陽也【宣其氣】、漢書の註此より以上は、四時五行は、天道の助なる事を論ず、以天君に比喩し、四時の吏、五行の佐を以て、宰相に比す、

聖人不言而百姓親、萬邦寧者、何謂也、三公論道、六卿分職、張其教矣、

對言論聖道之助、

【百姓―】舜典、百姓不親【萬邦―】大禹謨、萬邦咸寧【三公】事文類聚新集一云、周成王立太師太傅太保爲三公、秦不師古、以丞相御史大夫太尉爲三公、漢襲秦舊、哀平間以太司馬太司徒太司空爲三公、復置太師太傅太保、始尊師傅、位在三公上、謂之上公、後漢魏晉江左因之、後魏時尊太師太傅太保爲三師、唐復依魏晉之法、置三師三公、宋初無所改、政和二年詔司徒司空、周六卿之官云云【論道】漢書百官表曰、三公無官、言有其人、然後充之、舜之於堯、伊尹於湯、周公召公於周是也、事物紀原曰、周始有三公、坐而論道、尙書周官、茲惟三公、論道經邦、燮理陰陽【六卿分職】叹天官冢宰地官司徒、春官宗伯、夏官司馬、秋官司

寒暑之氣候自正也、熙寧中、沈括著書四卷、事物紀原、梁刻漏記曰、肇於軒轅之日、宣乎夏商之代、至周挈壺氏掌之、國史補云、唐元和中、方置待漏院於朝門外令百官朝以避風霜、文選句解云、國初設待漏院于丹鳳門之右、宰相昧爽入朝、君門未開、至此待玉漏之及晨、而趍于朝、此記記相君至此有思、一正一反、甚切事情、文雖稍俳、辭氣嚴肅、末寓箴體、內裏の丹鳳門の右に、官舍を作り、大臣宰相、未明に我館を出、彼所に至て、金門の開を待居る故に、待漏院と云也、元之此記を書て、其院の壁に張示す【注】【迂齋云――】此記每句に漏刻を待の意を見す【是時――】唐の後に五代あり、後梁後唐後晉後漢後周是也【氣習】神氣習俗、猶言習氣風氣、文章は其人の氣より出ると云共、時代の習しに依て、氣も亦習に隨て化す、故に文章には亦時代を論ず【俳】說文、戲也、徐曰、今言俳優是也、漢書、談笑類俳優、呂與叔詩、文似相如反類俳、王荊公詩、筆墨雖巧終類俳、老杜が詩に、有俳諧體、ざれたる體の文章を云、王元之が時分には、猶五代の文章の習氣風俗未だ除き不去、故に對語などを多く用て、少少俳諧めきたる事を不免、虎關濟北集曰、漢末以降、三國兩晉用偶語、至南北朝尤盛焉、唐興而改南北之弊、故斥楊王盧駱之儷語、而復韓柳之古文、古文者、雅言也、雅言者、散語也、唐亡而爲五代、又用偶語焉、宋興而救五代之弊、故又斥西崑之儷語、而復歐蘇之古文云云【然詞嚴――】され共此記は、詞嚴密に義理正し、故に其人の賢なる事を想像べし【亦自――】文章常の人に非ず、自ら一體を得て流派を成り、萬里曰、此篇八段、自篇首至氣矣第一段、自聖人至敘矣第二段、自是知至相乎第三段、自朝廷至思乎第四段、自其或至宜也第五段、自其或至亦宜也第六段、自是知至愼歟第七段、自復有至末第八段、

天道不言而品物亨、歲功成者、何謂也、

論語陽貨篇、子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、易坤卦彖辭、含弘光大、品物咸亨【品物】は、群品萬物也【亨】乾卦文言、亨者嘉之會也、本義曰、亨者、生物之通、物至於此、莫不嘉美、故於時爲夏、亨は、通也とて、夏に成て、萬物の生、通達して盛なるを云【歲功

掖門、殿旁垣門曰ニ掖垣一、禁中の西の腋に有ニ官舍西掖ト云、知制誥の官に成たる人居レ之、綸旨を書事を司る役を、知制誥と云也、句解、復知制誥【戊戌】去年三月、太宗崩ニ于萬歲殿一、第三子眞宗卽レ位、今年改元咸平元年也【除日】十二月晦は、一年の除き盡る日なれば、除日とも、歲除とも云也、羅山曰、是は大晦の日には非ず、除目の行はるゝ日を云也、又十二月晦の義ならば、歲除の日と可レ讀【齊安】句解、是爲ニ黃州一謫ニ居于此一齊安に被レ遷の勅命あり【己亥】咸平二年也【到郡】齊安郡に來て代官する也【四年—】暗用ニ左氏田公巫臣之語一【未知—】張籍詩、明年各自東西去、此地看レ花是別人、暗合ニ此句一、有ニ感慨一、元之自ら云、吁我四年の間、如レ此東西南北に奔走して、少も閑なる隙なし、又未た明年は何れの處へか往べきをも知ざる程に、何ぞ竹瓦の朽易き事を嫌んやと也、

後之人與レ我同レ志、嗣而葺レ之、庶斯樓之不レ朽也、第八節論ニ竹樓未ニ遽朽一、且期ニ后人一嗣而葺ニ治之一、

此後に我と志を同ふしたる人有て、相嗣で此樓を修理し葺ば、庶幾は此樓久く在て、朽ざらん事をと也【注】【第六—】六字を、諸本に八字に作るは誤也、此段には竹樓の未だ俄に不レ朽、且又後來の人、相續して修復せん事を論す、

咸平二年、八月十五日記、

元之今年閏三月、此郡に來て、八月望日、此記を書也、

○待漏院記

【迂齋云】句句見ニ待レ漏意一、是時五代氣習未レ除、未レ免ニ稱俳一、然詞嚴義正、可ニ以想ニ見其人一、亦自得レ體、

王元之

【漏】說文、以ニ銅壺一受レ水、刻レ節晝夜百刻、亦取ニ漏下之義一、漏は、壺に水を入、矢に刻を百著て、其中に立、壺の底に穴を穿ち、少づゝ水の漏る樣にする也、其水一晝一夜に漏れば、矢の刻も盡る也、晝夜十二時に、百刻を配分すれば、一時に八刻三分つゝ也、是刻限を知ん爲也、宋史新編天文志曰、宋漏刻、仍ニ唐五代之制一、極精巧、司天挈壺掌レ之、所ニ以定ニ辰刻一也、元祐中、蘇頌上ニ渾儀法要一、於ニ渾天儀銅候儀、渾天儀等象、三器之外一、又置ニ刻漏四幅一、一曰浮箭、二曰稱漏、三曰沈箭、四曰不息、漏與ニ儀象一相參考、以驗ニ天數一與ニ天運一爲レ不レ差、則

鬼篇、魏有麗譙、――、高城樓也、陳兵列於其間、白孔六帖云、魏武有麗譙樓、羅山曰、麗譙は、指て樓の名とは見へず、門の上に高く樓などの有を、譙と云、然れば麗譙は、華麗なる樓と云義也、此齊雲落星井幹麗譙などを、華麗に結構したるは何用ぞと云へば、皆妓女を集め置、歌舞遊宴の事を、内に藏め入ん爲ばかりに、拵へたれば、元之などの騷人のする所に非る程に、我所不取也とぞ、騷人は、岳陽樓記の註にあり【注】此段は、他の齊雲などの樓の、華美遊宴を事とするをば、元之無同心、不足取事を論ず、

吾聞竹工云、竹之爲瓦僅十稔、若重覆之、得二十稔、

元之竹を用る大工に聞たれば、竹瓦は僅に十年耐る者也、若重ねて葺なをしたらば、二十年は可有と云愚謂く、二重かさねふく也覆音副、蓋也、をほふ共、ふく共讀り檀弓曰、見若覆夏屋者矣【稔】音飪、廣韻、年也、古人謂一年爲一稔、取穀一熟也、

噫吾以至道乙未歲、（宋太宗年號）自翰林出滁上、丙申移廣陵、丁酉又入西掖、戊戌歲除日、有齊安之命、已亥閏三月到郡、四年之間、奔走不暇、未知明年又在何處、豈懼竹樓之易朽乎、

【噫】嘆息也【至道】【注】宋太宗年號【乙未】至道元年也【翰林】事物紀原曰、唐太宗時名儒、時時召以艸制待詔、常於北門候進止、號北門學士、明皇改曰翰林待詔、已而改爲供奉、開元二十六年、乃爲翰林學士、此蓋其始也、職林云、至德後、天子召集賢學士於禁中艸書詔、因在翰林、待進止、遂以爲名、書言故事曰、沈存中筆談、翰林院、在禁中、乃人主燕居之所、玉堂承明金鑾皆在焉、應供奉人、自學士以下工伎、皆隸籍其間、皆稱翰林【滁上】滁水の上也、即ち滁州、醉翁亭記の註に見へたり【廣陵】在揚州、句解、移知揚州【丁酉】同三年也【西掖】書言故事云、中書稱西掖、劉公幹詩、誰謂相去遠、隔此西掖垣、宮旁舍曰掖庭、門旁小門曰

竹樹而已、

此樓にて遠見すれば、少も他念なく、江山の外に、只風に隨て帆懸舟の通ふと、沙洲に栖水島、烟雲や竹樹やなどを見る迄也、

待其酒力醒、茶煙歇、送夕陽、迎素月、亦謫居之勝槩也、（第四節論登樓之勝）

此樓にて酒を飲が、其酒氣も醒、茶を飲が、其茶烟も止時を待て、夕日を見送り、明月を迎て見る、是左遷の間の、勝れたる樂也とぞ【勝槩】羅山曰、樂む事の勝れたる大槩也、愚謂く、槩は、氣槩節槩の槩字の如し、勝槩は、勝事勝興を云【注】此段は樓に上ての、勝れて面白き處を論ずると也、

彼齊雲落星高則高矣、井幹麗譙、華則華矣、止于貯妓女、藏歌舞、非騷人之事、吾所不取、（第五節論他樓之不足取）

此段は故事を用ふ、方輿勝覽二、平江府蘇州府部、齊雲樓、在郡圃子城上、宏敞壯麗、白居易齊雲樓晚望詩云、重複江山壯、平舒井邑寬、齊雲樓北面終日凭欄干、白孔六帖曰、昭宗幸其鎮、登樓云云、其後五代の時に、韓浦と云者、又齊雲樓と云を立、今此篇に所云は、何れを指や、其樓高して、雲に齊き程也と云意【落星樓】は、魏の曹操所作也、是も高き故に名付、流星の近く落る程、至て高と也、文選左太冲吳都賦曰、數軍實乎桂林之苑、饗戎旅乎落星之樓、置酒若淮泗、積肴若山丘、劉淵材註、樓在建業東北十里【井幹】漢書郊祀志、武帝立井幹樓、高五十丈、師古曰、積木而高、於樓若井幹之形也、井幹、其井上木欄也、字亦作韓、其形四角八角、謂之銀床、皆井欄也、張衡西京賦云、井幹疊而百層、即謂此樓也、井幹の如くに木を積上たる故に、井幹樓と云、幹字、ゐげたと訓ず【麗譙】漢書陳勝傳云、勝攻陳、陳守令皆不在、獨守丞與戰譙門中、晉灼曰、譙門義闕、師古曰、譙門、謂門上爲高樓以望耳、樓一名譙故、謂美麗之樓、爲麗譙、譙、亦呼爲巢、所謂巢車者、亦於兵車之上爲樓以望敵、譙巢聲相近、本一物也、又書言故事、稱鼓角樓曰麗譙譙門、莊子徐無

宜圍碁、子聲丁丁然、宜投壺、矢聲錚錚然、皆竹樓之所助也、第三節論竹樓景物、

此樓にて碁を打ば、碁石の盤に當る音丁丁として、竹瓦に響て面白程に、宜き也【子】は、碁子【丁丁】毛詩、伐木丁丁、老杜詩、伐木――山更幽、註、伐木聲、今は碁子の音を云【投壺】壺を置て矢を投入、賓客の遊に備る也、禮記に投壺篇あり、可別考、客人を得たる時に、投壺の遊をすれば、矢の音錚錚として、竹瓦に響て宜也、錚錚は、秋聲賦の註にあり、東坡此六の宜を取て、六宜樓とす、是皆竹樓の景物を助くる所也とぞ汪分明、

公退之暇、披鶴氅音敞衣、戴華陽巾、手執周易一卷、焚香默坐、消遣世慮、

【公退】朝廷に仕へねとも、此にては公儀の用を仕廻て、政所より退出するを云【鶴氅】鶴の毛にて織たる衣也、仙人の服也、晉謝方爲簡文帝從事、著白綸巾鶴氅裘而前共語、又王恭、字孝伯、美姿儀、人目之曰、濯濯如春月柳、嘗披鶴氅裘涉雪而行、孟昶見而嘆曰、眞仙中人、白樂天詩、雪似鵝毛飛散亂、人披鶴氅立徘徊【華陽巾】梁陶弘景、華山の陽に隱居して在しが、常に異なる頭巾を被る、後人是を似せ用る程に、華陽巾と名付、隱者の服也、陸龜蒙華陽巾詩、蓮華峯下得佳名、雲褐相兼上鶴翎【周易】朱子本義云、周、代名也、易書名也、其卦本伏羲所畫、有交易變易之義、故謂之易、其辭則文王周公所繫、故繫之周、句解曰、手執周易性命之書一卷、以養心性、周易は亦仙道を學び、隱者たる人の玩ふ書なるに因て云爾、高駢歩虛詞、清溪道士人不識、上天下天鶴一隻、洞門深鎖碧窓寒、滴露研朱點周易【默坐】は、不言して坐する也【消遣】けしやる、消し去を云、增韻、遣、祛也、羅山曰、消て外へ遣也、言心は、公用を埒明ての隙には、鶴氅を著、華陽巾を戴き、手に周易一卷を持て、此樓に上り、香を燒て默坐し、浮世の思慮を消去と也、

江山之外、第見風帆沙鳥、煙雲

與の月波に非る也、諸抄に月波樓は、在黄州郡廳後と云、但し王元之竹樓を作て、與月波樓通と云は、其時には必ず有也、勝覽に不載は、不審也、重て考るに皇輿考六、黄州府下、月波樓在府城上王禹偁建、如此なれば必ず有之、羅山曰、王元之城内に荒廢する所有に因て、小樓を二つ作りて、月波樓と續くる也
[注]此一段は、竹の工手間造作を省き減じ、幷に竹樓の立所以を說一字一本作二、

遠呑山光、平挹江瀨、幽闃（竹具反）遼夐（休正反）不可具狀、

【挹】說文、酌也、抒也、徐曰、從上酌之也、又與揖同、拱挹也【闃】韻會、苦具切、靜也、さびしと讀【遼】遠也【夐】亦遠也、此樓遠く山の光を含み、平かに江の瀨に拱き向て揖する樣也とぞ、湖月曰、山を此方が呑の意、挹は、引寄る意、羅山曰、此樓に上て見れば、山の色を呑が如にあり、江の水などを引寄て、平かに見ゆる也、青松曰、平望可挹江瀨之勝、細に考れば、此說佳歟【幽闃一】青松曰、幽深闃靜、湖月曰、無數の景なる程に、一一狀らん樣も無と也、羅山曰、此樓より四方を遠見すれば、幽かに靜に、遙かに遠き景有て、面白事喩へ狀るべき樣も無ぞと也、

夏宜急雨、有瀑布聲、冬宜密雪、有碎玉聲、

【急雨】は、むらさめと讀り【瀑布】は、たき也、此竹樓にて夏急雨の音を聞けば、瀑布の落る聲ある樣なる程に、宜と云【密雪】は、繁細なる雪を云、冬密雪の降を聽けば、玉を碎く聲有と也、此所に四時を可云を、夏を擧て春を含み、冬を擧て秋を含む也、孔子の春秋は、年中の事を記し給へ共、春を以て夏を兼、秋を以て冬を兼たり、此文には引替て、夏冬を云、文章の一體也、

宜鼓琴、琴調和暢、宜詠詩、詩韻清絶、

此樓に上て琴を彈ば、竹瓦に響て、琴の調和ぎ暢る程に、宜き也、詩を吟詠すれば、竹瓦に響て、淸絶とすぐれてきよき程に、宜也、

曰、明聖之世、國多賢人、故唐虞之時、可比屋而封と云るも、每屋と云義也【皆然】とは、皆如此と也【以其價一】此地竹多き故に、其直賤し、是を廉と云、竹は工手間も不入して、使ふ所も無造作なる故に、竹瓦を用ふ、是を省と云、

子城西北隅雉堞圮毀、蓁莽荒穢、因作小樓二間、與月波樓通、

此一節論竹之省貲、及樓之所由建、

括地志曰、子城、在渭州華城縣、今は是を用ひず、句解曰、子城者、黃州內小城、西北一隅之地【子城】は、黃州の黃岡の內の小城也、城の名には非ず、黃州府の本城の外、砦の樣なる子城幾つも可有、日本にて端城と云類也【雉堞】左傳隱公元年、祭仲曰、都城過百雉、國之害也、杜註、祭仲、鄭大夫、方丈曰堵、三堵曰雉、一雉之墻、長三丈、高一丈、堞者、城上短墻、胡氏曰、雉飛不過三丈、羅山曰、其子城の西北の隅に、雉堞とて、高さ三丈許りの石垣あり、雉の飛上る事、一飛に三丈とあり、自此高さ何程と云に、雉字を用ふ、三丈程の石垣の上に、塀を懸たるを、雉堞と云也、愚左傳の註疏を案ずるに、一雉の墻、長三丈、高一丈とあれば、橫へ三丈、高さ一丈也、且又堞は、城上の短墻とあれば、壁の事也、短墻ひめがきと讀て、卑き壁也、必定石垣には非ず【圮毀】圮、亦毀也壁破ると也【蓁莽】蓁艸盛貌、莽、亦義同、艸茂り塞る也【荒穢】荒は、あるゝ、穢は、けがるゝ也、今は、二字にて荒果たる事を云【因作小樓一】小樓は、ちいさきたかどの也、日本にて六尺三寸を一間と云、一說に、是は倭朝にての事也、又家內を分畫して、幾間と云事あり、唐土の一間二間は是也と云り、羅山は二間を二つと見られたり、間字、韻會字彙などに、此心不見、韓文公詩、一間茅屋祭昭王、簡齋詩、瓦屋三間寬有餘、幷に此記の二間、如何未詳【月波樓】方輿勝覽五十、黃州の部に、竹樓月波樓共に無之、月波樓は、嘉興府にあり、嘉興府は、古の秀州也、元祐中、令狐挺立、後守毛滂重修、記云、秀、澤國也、水濱之人、起居飲食、與月波接、意將覽承二者於一樓之上也、嘉興府は在浙西路、黃州府は在淮西路、王禹偁は、太宗眞宗の時の人、令狐挺は、哲宗の代の人、其相去事九十餘年なれば、黃州の月波は、嘉

雖巧不如蚕、公曰、經綸才也、太宗聞其賢、召拜右拾遺、賜緋、特命文犀帶寵之、太宗幸瓊林苑、召至御榻前顧問、語宰相曰、禹偁文章、獨步當世、其寵愛如此、禹偁嘗艸李繼遷制、送馬五十疋、爲潤筆、禹偁卻之、及出閤人鄭褒徒步來謁、禹偁愛其儒雅、及別去爲買一疋、或言買虧價者、太宗曰、彼能卻繼遷五十疋、顧肯虧一馬價哉、至道元年、自翰林學士出守滁州、滁上、蓋滁州郡名、二年移知楊州、三年眞宗卽位、公上疏陳五事、一曰、謹邊防、通盟好、二曰、減冗兵、併冗吏、三曰、難選擧、四曰、澄汰僧尼、五曰、親大臣、遠小人、召還復知制誥、脩太祖實錄、公直書其事、執政以禹偁爲輕重眞宗、咸平元年歲除、出知黃州、州境有二虎鬪、其一死而食其半、又羣雞夜鳴、經月不止、禹偁上疏、引洪範傳申戒、且自劾、眞宗遣使乘馹問勞、醮禳之、詢日官、則云、守臣當其咎、眞宗亟命移知蘄州、禹偁表謝云、宣室鬼神之問、不望生還、茂陵封禪之書、正期身後、至郡未踰月而卒、年四十八、有小畜集三十卷、子嘉祐、嘉言、倶知名○詩人玉屑曰、王元之本學樂天詩、在商州嘗賦春日雜興云、兩株桃李映籬斜、裝點商州刺史家、何事春風容不得、和鶯吹折數枝花、其子嘉祐云、老杜嘗有恰似春風相欺得、夜來吹折數枝花之句、語頗相似、因請易之、元之忻然曰、吾詩精詣、遂能暗合子美耶、更爲詩云、本與樂天爲後進、敢期杜甫是前身、東坡文集、王元之畫像贊曰、公猶不容於中、耿然如秋霜夏日云云、

黃岡之地多竹、大者如椽、

【黃岡】黃州府の郡の名、東坡黃州詩云、長江遶郭知魚美、好竹連山覺筍香、此地に竹多し、大きなるは椽に用る程也、

竹工破之、刳〔音枯〕去其節、用代陶瓦、比〔音皮〕屋皆然、以其價廉而工省也、

竹を使ふ大工、是を割て其節を刳去り、用て瓦の代にして、屋を葺也【陶】は、すえものつくりと讀、瓦をして、瓦を燒を、陶瓦と云也【比屋】屋を比ぶる共、又は並ぶ家共、同義、每屋と云心也、古註云、堯舜之民、比屋可封、桀紂之民、比屋可誅、又前漢王莽傳、莽上奏

○黄州竹樓記

（東萊曰）嘗聞之、山谷云、或傳王荊公稱竹樓記、勝歐陽公醉翁亭記、或曰、此非荊公之言也、某亦謂荊公出此言、未失也、荊公論文章、常先體制、而後文之工拙、蓋嘗觀蘇子瞻醉白堂記、戲曰、文辭雖極工、然不是醉白堂、乃是韓白優劣論耳、以此考之、優竹樓記而劣醉翁亭記、是荊公之言不疑也、

此記は、宋の王禹偁、字は元之、黄州に謫せられて守護たりし時に、竹樓を作て書る者也注（東萊―）呂東萊日比に聞傳られたるは、山谷與何靜翁書云、或人の傳云樣には、王荊公稱く、此竹樓記は、歐陽公醉翁亭記よりも勝れりと、又或人の云、此は荊公が言には非ずと、山谷二人の說を聞て思へるは、荊公是を云出せりと云も、未だ僻事とはせず、其故は、荊公文章を評論するを見るに、常に體格法制とて、文のすがた作法を先にして、文の巧にして上手なると、拙して下手なるをば、後にせり、但し嘗て東坡醉白堂記を見て、戲れて云樣には、文辭は至て巧なれ共、而も是醉白堂記には非ず、其子細は、韓魏公の堂を建、白樂天を慕て、醉たる白樂天と云心に、其堂を醉白堂と名付、額を揭げ、其堂の記を東坡に書せられしに、記は其事許りを直に記する者なれば、樂天が醉たる體、醉吟先生と云し事など迄を書たらば、記と云べし、而るに此記は、即是韓魏公と白樂天との優劣の論と云べしと也、山谷荊公が醉白堂記を評ずる心を以て見れば、竹樓記を優れりとし、醉翁亭記を劣れりと評ぜしと云は、必定荊公が言ならん事無疑と也、文選句解曰、此篇分六節、狀景最妙、體製甚新、末段自叙、亦大而非誇者也、第一節論竹之省費、第二論作樓之所、第三論竹樓之景物、第四言登臨之勝、第五論他樓之陋、第六以樓而托之後人、○萬里曰、此篇八段、自篇首至省也第一段、自子城至樓通第二段、自遠呑至助也第三段、自公退至槩也第四段、自彼齊至不取第五段、自吾聞至十稔第六段、自噫吾至朽乎第七段、自後之至末第八段、

王元之

東都事略三十九云、王禹偁字元之、濟州鉅野人也、家世爲農、九歲能爲歌詩、畢文簡爲郡從事、始知之、問其家、爲磨麪爲生、因令作磨詩、元之不思以對、但存心裏正、莫愁眼下遲、若人輕著力、便是轉身時、文簡奇之、留於子弟中講學、一日太守席上出詩云、鸚鵡能言爭似鳳、文簡書之屏間、元之書其下云、蜘蛛

仲淹來守是邦、緣此所以立祠始構堂而奠焉、
文正公嚴州の太守と成て來り治む【注】此州に來るに因て、祠堂を立て、子陵を祭る所以也【始構—】構堂は、尚書より出、此州子陵が本國にして、祭祀の儀無れは、文正公始て堂を立て、奠薦の禮を備る也、

乃復爲其後者四家、以奉祠事、復者、漢法、免租賦科役也○此段説處置祠堂之事
【乃復】【注】復は、漢の時の法に、田より租税を取、市より貢賦を取諸科役を免許する也、科は、品也、役は、土木軍戍也、漢書刑法志曰、幾方千里、有税有賦、税以足兵、是にては田租と軍役と也、小學句讀云、復、謂除其家之役也【爲其後—】子陵が後胤たる者四家也【奉】奉守也、文正公已に祠堂を創建して、又其末裔四家を呼出し、諸役年貢を免し、其祭祀の事を奉じ守らしむる也【此段—】此段は、祠堂ををきをくの事を説也、

又從而歌曰、雲山蒼蒼、江水泱泱、先生之風、山高水長、〔謝云〕范文正公作此記、李太伯在坐間、先生之德、不如以風字代德字、公欣然改之、蓋太伯因記中有貪夫廉懦夫立六字、遂思聞伯夷柳下惠之風一段、因得一字也〔迂云〕含無限意、
【蒼蒼】説文、艸色也、又深青色、爾雅、天形穹窿、其色蒼蒼【泱泱】韻會、水深廣也、詩、維水泱泱、文正公已に堂を立、祠を奉せしめ、又是に隨て歌作て歌ふ、白雲靉ける高山、樹茂て深青也、萬里の江水深廣にして、測り難し、子陵が風、雲山の高が如く、江水の長が如しと也【注】【謝云范—】希文此記を作る時に、李太伯其坐に在しが、此歌初は先生之德と有しを見て、德字を改て、風字とするに不如と云、希文欣然とよろこびて、即ち改之、但し此記の中に、貪夫廉、懦夫立と云六字あるに依て、太伯孟子の聞伯夷柳下惠之風と云一段を思ひ當て、風の一字を得、如此云る也【李太伯】李覯、字泰伯、南城人、爲文白成一家、又宋史新編百六十四、李覯建陽人、俊辯能文章、擧茂才、皇祐初范仲淹薦爲試大學助敎云云、詳に袁州州學記の下に見へたり【迂云—】末の山高水長の句、不盡の意を含りと也、

云ぞなれば、光武も德を盡し、子陵も志節を屈せず、各其道を盡す事を指なるべし、

蓋先生之心、出乎日月之上、光武之量、包乎天地之外、

子陵が志節の高き事は、日月よりも上に出たり、光武の心の量の廣き事は、天地の外を包み籠たると也、二人共に至極稱美するの辭【量】は器量、心の内に受容る所を云、子陵が官を辭退して皈るを、是非と云て理不盡に不留して、其志に隨て許容するは、光武の量廣しと云義也、文正公の子陵釣臺の詩、前に見へたり、

微先生不能成光武之大、微光武、豈能遂先生之高哉、結上段意

子陵有てこそ、光武の量の大なる事をば成たれ、若子陵無んば、光武の量の是程迄に大なる事をば知れまじ、光武有てこそ子陵が節義の高き事をば遂させたれ、若光武無んば、子陵を無理ずくめにせんほどに、其高節折くべしと也、曹操が禰衡を殺し、司馬昭が嵇康を殺すの類は、皆度量の狹小なる故也【注】蠱屯兩段の意を引結る也、

而使貪夫廉、懦夫立、是大有功於名教也、幹歸立祠意

孟子萬章下篇、孟子曰、伯夷目不視惡色、耳不聽惡聲、非其君不事、非其民不使、治則進、亂則退云云故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志、註、頑、貪、懦、弱【貪夫】は貪欲深き者也【廉】は淸廉、無欲なるを云【懦夫】は、志不立、ぐにや〱としたる者也【立】は、其志屹かと立つを云、子陵が風采を聞けば、貪れる者も欲を離れ、懦弱なる者も志立、然れば子陵が風節は、禮義の道に於て有功と也、綱鑑補、晉王戎曰、聖人貴名敎、注云、躬行禮義人倫名實敎世説、樂廣曰、名敎中、自有樂地【注】幹は旋轉也、前に事を說て、畢竟立祠堂の意に、廻らし皈する也、何とて祠堂を建立するぞとなれば、此風俗を矯す所有て、尊ふと云ん爲の張本也、

之】易の明夷の卦に曰、内文明而外柔順、以蒙大難、文王以之、内難而能正其志、箕子以之、今此文法を學べり、言心は、蠱の卦の上九に在て、事を論ずれば、天下方めて治つて、諸人出て仕へ、政道を助けて、事を行ふべき時に當れり、而るに獨り王侯に不仕して、其身の行事を高ふし尙ふする者に似たり、去程に易に是を取て論ず、子陵が志節を高ふし、無欲清潔なるは、又是と同じ、故に先生此道を用ふと云也注「此段說易―】此段易の卦を以て、子陵が行事の清高なることを證じ徵す、

在屯之初九、陽德方亨、而能以貴下賤、大得民也、光武以之、此段援易

卦証光武事、引兩卦、大造地設、

屯卦䷂震下坎上、初九曰、初九盤桓、利居貞、利建侯、以貴下賤、大得民也、程傳曰、初九當屯難之時、以陽而來居陰下、爲以貴下賤之象、方屯時、陰柔不能自存、有一剛陽之才、衆所歸從也、更能自處卑下、所以大得民也、震は、陽也、東也、坎は、陰也、北也、震は在下、坎は在上、是以貴下賤之義也、靑松之說、此辭未盡【陽德方亨而能】の六字は、易の辭にてはなし【以貴下賤大得民也】の八字は、易の屯の卦、初九の爻の辭也、屯の卦の初爻は、陽爻也、陽を以て群陰の下に居るは、屯難にして進み難きの象也、故に盤桓すと云、盤桓すと云共、貞に居るに利あり、貞に居れば遂に能亨通す、故に陽德方めて亨ると云、陽は君子にして、陰は小人也此卦陽を以て九五に居るは、君子天下の正位に居て、萬民に君とし臨むの象也、而して又一陽群陰の下に在は、能以貴下賤の象也、能萬乘の貴を屈して、蚩蚩たる百姓に下るは、大に得民の義也、今光武天子を以て子陵に下るは、屯の卦の以貴下賤、大得民也と云の義に通ず、故に光武此道を用ふと云注此段は易の卦を引て、光武の事を明し證す【引兩卦―】古解に蠱の卦を陰とし、屯の卦を陽とし、天とし君とす、光武と子陵と、君臣道合す、故に天造地設と云、愚謂く、天造は、天萬物を造化するを云、地設は、地施し設るを云、地の德を布行ふ義也、陽德方亨は、天造也、衆方有爲は、地設也、但し今は專ら光武の以貴下賤、子陵が不事王侯を

【聖人之淸】は、孟子伯夷を賛美するの語也、今子陵を稱じて云【泥塗軒冕】は、莊子に出たり、泥塗は、皆ひぢりこと讀、どろ也、軒は、大夫の車、冕は冠冕、但し冕は、板にて作り、瓔珞を垂、圖は別に可レ考、子陵操行淸潔にして、衣冠車馬の富貴を、泥土の如に見る、天下誰やの人か、此淸操に加へ過る事有んと也【注】句法好と譽る也【惟光武―】斯る節義の高き人に、誰か又並び有んぞと思ひたれば、獨り光武禮を以て尊び、謙退して是に下るは、去とては亦賢君ぞと云義也【注】【謝云―】帝握二赤符一と云より、先生以レ節高レ之と云までの一段と、既而動二星象一と云より、光武以レ禮下レ之と云迄の一段と、兩段同じ樣に並べ說て、少しも無二抑揚一、光武にても、子陵にても、何れに抑るか揚るか、褒貶する事可レ有に、左なきは何故ぞや【便見―】子陵も節を屈めて、光武に不レ仕、光武も子陵を無理に臣とせざるの意を見ると也、

在二蠱之上九一、衆方有レ爲、而獨不レ事二王侯一、高二尙其事一、先生以レ之、此段說二易卦一証二嚴先生所レ爲一、

蠱卦【䷑】巽下艮上、山下有レ風蠱、蠱之上九、不レ事二王侯一、高二尙其事一、象曰、不レ事二王侯一志可レ則也、程傳曰、蠱、事也、蠱非レ訓レ事、蠱乃有レ事云云、上九居二蠱之終一、無レ係二應於下一、處二事之外一、無レ所レ事之地也、以二剛明之才一、無レ應援一而處二無事地一、是賢人君子不レ偶二於時一、而高潔自守、不レ累二於世務一者也、故云レ不レ事二王侯一、高二尙其事一、古之人有レ行レ之者、伊尹太公望之始、曾子子思之徒是也、不レ屈レ道以狥レ時云云、守二其志節一而已、易の蠱の卦、下は巽、上は艮也、卦を數るには、下より上る、易は、陰陽變易の道にして、卦爻是に象て作れり、天地の陰陽は、皆下より生ず、一陽生じて、井水溫かに、一陰生じて、井水冷なるを見て可レ知、故に卦は下より始まる、最下を初と云、最上を上と云、陽爻は奇にして一也、陰爻は偶にして一也、初は民、二は士、三は大夫、四は大臣、五は天子の位に取て、上は虛位也、蠱の卦の最上虛位にして陽爻なれば、賢人君子の時に無レ位、事に預らぬ象に取て、不レ事二王族一、高二尙其事一と云、今又其を取て、子陵賢にして不レ仕の義に當つる也【衆方有爲而獨】の六字は、易の辭にてはなし【不事王侯高尙其事】の八字は、易の蠱の卦、上九の爻の辭也【先生以

卦は陰陽各六爻あり、下より數へて、五つ目に當るを、天子の位とす、六つ目は空位とす、今は六爻皆陽なるの義を取、陽は君子とす、乘二六龍一とは、天子の尊位にて、天下に臨て御むるの義也【聖人之時】孟子萬章下篇より出、光武微賤より起て、漢室を中興し、赤伏符を握り、尊位に上るに至て、聖人の時に當る事を得る者也、

臣妾億兆（謝云）好二句法一 天下孰加焉、惟先生以レ節高レ之、

【臣】は、君の役使する所の者【妾】は、侍御の女、本婦の外なる者也【億兆】風俗通曰、千生レ萬、萬生レ億、億生レ兆、十萬を億と云、十億を兆と云、注「謝云―」此四字にて、萬事を包、簡古にして又句法好と也【天下―】光武億兆の君として、天下其尊に並び加る者不レ有、獨り子陵節義を以て高尚して、其臣庶たらず、

既而動二星象一、（本傳）帝引レ光入論二道舊故一、因共偃臥、光以レ足加二帝腹一、明日太史奏客星犯二帝座一甚急、帝笑曰朕故人嚴子陵共臥耳 歸二江湖一、

【象】は天象、日月星辰は、天の象を垂て所レ示也注【本傳―】光武子陵を召寄給へ共、參內せざる程に、其旅邸へ臨幸有て、臥居たる處に入て、昔物語をせらるゝ也、重て又禁中に召入て、道を論談し、直に留宿せしめ、帝も一所に臥給ふ、子陵足を以て帝の腹に上す、明日太史の天文を見る者、奏聞して申く、客星とて常になき星出來て、天帝の座所を犯す事、甚だ急近也、是天子を凌ぎ侮るの象也、帝打笑て宣く、昨夕朕が舊友嚴子陵と共に臥耳、別に餘人そ謀叛する事は不レ有と也【歸江―】已に被二召出一たれ共、奉公は是非に否と申ければ、力及び給はず、せめて昔馴かしく思ひ給ひて、禁中に引入、一所に臥て物語をし給へば、子陵足を帝の腹の上に加へたる程に、客星犯二帝座一の形象を動かし現はしたり、終に御暇申て、富春の山中に皈りぬ、鶴林玉露に、古今隱者の次第を云とて、第一伊尹、第二傅說、第三太公、第四嚴子陵、第五諸葛孔明、第六李泌と置り、

得二聖人之清一、泥二塗軒冕一、（句法）天下孰加焉、惟光武以レ禮下レ之、（謝云）兩段並說、略無二抑揚一、便見下先生不レ屈二光武一、光武不レ臣二先生一之意上、

盡二至以之一第四段、自二在屯一至二光武以之一第五段、自二蓋先一至二敎也一第六段、自二仲淹一至二祠事一第七段、自二又從一至レ末第八段、

先生、光武之故人也、相尚以レ道、

此是一篇大綱領、

子陵は、光武と同學の舊文也、其レ尙ハ友誼、互に道を以して知音たり【尙】は、尊也、相尊尙して友たる也注【綱】は、綱の綱、綱を擧れば、目皆張【領】は、衣の袵の、頸に當る所也、領を提れば、衣隨レ之、其如くに、此二句が、此篇の大千要なると也、

及帝握赤符、乘六龍、

漢爲二火德一中微、光武中興、重掌二赤符一

得聖人之時、

黃繼善史學提要曰、赤伏獻レ符、四七爲レ輔、註、儒生彊華獻二赤伏符一、蓋讖書也、符曰、劉秀發レ兵捕二不道一、四夷雲集龍鬪レ野、四七之際火爲レ主、讖記之書曰レ符、赤伏、其符之名、師古曰、漢德尙レ火、赤、火色、伏、藏也、此河圖文、四夷雲集龍鬪レ野、謂二群雄角一レ力也【赤符】は、即ち赤伏符也、敵を降伏する御符にして、色赤き故に、此名とす、漢は火の德として、色赤を尙ふ也注【漢爲火──】漢の高祖、秦を滅し、項羽を平げて、天下を有つ、第十代元帝より、政道衰へて、十四代孺子嬰に至て、王莽に被レ簒、故に中微と云、光武王莽を誅して、漢復中興し、重ねて赤符を握掌る、潁人彊華と云者儒生なるが、關中より使を以て、赤伏符を光武に奉る、再び漢を興して、天子と成給はんとの義也、符の文は上に見へたり、其文の內に、四七之際火爲レ主と云を、青松曰、四七、二十八也、自二高祖一至二光武初起一、合二百二十八年、即四七之際也、或謂光武以二二十八歲一起レ兵、又二十八將也、愚案ずるに、前漢十四主、後漢十四主、合て二十八代の間、漢天下を保守すべしと云義なるべし、二百の上の二十八年許りを取は如何、又四七之際とあれば、二十八歲と云も、文理如何、二十八將、別して誤也【乘六龍】易乾卦、時──、以御レ天也、雲行雨施、天下平、天子の車には、六つの馬を繫る、四疋は轅の內、二疋は轅の外にあり、馬八尺以上曰レ龍、王建宮詞詩、太平天子朝元日、五色雲車駕二六龍一、但し今は、六爻の義也、周易に、龍を以て陽に喩す乾の卦の潛龍見龍の類の如し、六龍は、即ち六陽也、

第十四年劉秀並に從兄劉玄、字は聖公、共に義兵を起して、大に莽が軍を破る、十七年に劉秀天子の位に卽給ふ、是を光武皇帝と申す、廟號を世祖とす、事物紀原曰、秦置諫天夫、後漢光武增爲諫議太夫、歷代不改、唐龍朔中、屬中書、開元後皈門下、正元四年五月、分左右、以右隷中書、君の過ちあれば、諫る官也、光武嚴子陵と舊知なる故に、尋ね給ひけれ共、子陵逃隱れて不出、其形を圖畫して、天下を搜し給へは、齊の國に漁人と成て居たるを召出し、諫議太夫の官に除せらる、子陵不受、達て辭退し、遂に富春山に歸て田を耕し、魚を釣て居、壽を以て家に終る【釣臺】方輿勝覽五、建德府、古睦州、七里灘、距州四十里、與嚴陵瀨相接、諺云、有風七里、無風七十里、釣臺、在桐廬西南二十九里、東西二臺、各高百丈【祠堂】又曰、今有釣臺祠堂、又作九隴寺、以奉香火、今宋の代迄も、猶子陵が釣せし臺、子陵を祭る堂あり【在嚴州―】建德府にあり、西征記曰、自桐君祠而西有群山、蜿蜒如龍蛇、上有東漢故人嚴子陵釣臺、孤峯特操、聳立千仞、奔走名利、汨沒爲塵埃客、一過其下、淸風襲人、毛髮堅立、使人有芥視功名之意【迂云―】此記文字の數は少ふして、其辭は嚴正にをごそか也、又其筆力老びねて徤かに、嫩嫩しく弱びれたる事無と也、深く稱美するの評也、謝疊山文章軌範云、嚴先生祠堂記、字少意多、文簡理詳、有關世敎、非徒文也、古文奇英鼇頭評曰、胡文定父子、最不輕下人、獨服文正公祠堂記、又公嘗詠釣臺詩云云、子陵釣臺、賦者甚衆、如文正公此詩、眞實以廉頑立懦、與祠堂記並垂不朽○子陵釣臺、許渾詩、湖去潮來洲渚春、山花如綵艸如茵嚴陵臺下桐江水、解釣鱸魚有幾人、范希文詩、漢包六合網英豪、一箇冥鴻惜羽毛、世祖功臣三十六、雲臺爭似釣臺高、黄魯直詩、平生久要劉文叔、不肯爲渠作三公、能令漢家重九鼎、桐江波上一絲風、○呂伯恭記曰、明道二年、范文正公自右司諫守是邦、始築屋祠先生、而爲之記、瀨之旁白雲源、乃唐方處士胡盧公之遊釣臺也、嘗絕江訪其遺蹟、公詩云、風雅先生舊宅存、子陵臺下白雲村、唐朝三百年冠蓋、誰聚詩書教子孫、其子孫登科知名者相繼、公以其象寘祠之左、公沒、郡人思之、遂侑食於右坐、

梅花無盡藏曰、此篇八段自篇首至以道第一段、自及帝至高之第二段、自既而至下之第三段、自在

自ら唱へ誦して云、士たる者は、天下の憂を、人の憂へぬ前に憂へ、天下の樂を、人の已に樂める後に樂むべしと、是平生の志也、今此文にて書著はす、禮記檀弓云、吾將安歸、文選句解曰、如此川意者、其仁人得憂樂之正者乎、世無斯人、吾將安皈、文正公嘆息して云、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂、如此なる人無んば、我誰やの人と共にか歸依せん、依皈する所有まじと也【註】此終の二句、筆力文勢、萬鈞の重さ也とぞ、三十斤曰鈞、鶴林玉露、或問范文正公謂先憂後樂、卻是如何、曰、聖賢憂樂二字、並行不悖、切不可泥先後字、故魏鶴山詩云、須知陋巷憂中樂、又識耕莘樂處憂、古詩人有識見者、如陶彭澤、杜少陵、亦皆有憂樂、如採菊東籬、揮杯勸影、樂矣、而有平陵成江之憂、步屧春風、泥飲田父、樂矣、而有眉攢萬國之憂、蓋惟賢者而後有眞憂、亦惟賢者而後有眞樂、樂不以憂而廢、憂不以樂忘、必如此始識希文之心、

○嚴先生祠堂記　　范希文

按本傳、子陵、本姓莊、避明帝諱、改姓嚴、光武拜諫議、不受、耕釣於富春山、今有釣臺祠堂、在嚴州桐廬縣【汪云】字少辭嚴、筆力老健

【嚴先生】は、嚴子陵也【祠堂】は、位牌を立て祭る所也、朱文公家禮第一註云、古之廟制、不見於經、且今士庶人之賤、有死不得爲者、故特以祠堂名之、而其制度多用俗禮云、文公先生云、祠堂者、蓋以伊川不可用影、故改影堂曰祠堂云云、范文正公嚴州の太守として被治し時、嚴光が祠堂を艸創して、其後胤を召出し、其祭祀を主とらしめ、次でに此記を書り【汪】【按本傳】後漢書列傳七十三逸民傳に載之【子陵―】萬姓統譜、嚴光、字子陵、餘杭姚人、少有高名、與光武同遊學、及光武卽位、乃變名姓、隱身不見、帝思其賢、乃令以物色訪之、後齊國上言有一男子、披羊裘釣澤中、帝疑其光、乃備安車玄纁、遣使聘之、三反而後至、車駕卽日幸其舘、光臥不起、帝卽其臥所、撫光腹曰、咄咄子陵、不可相助爲理邪、後引入內論道、因共偃臥、光以足加帝腹、明日太史奏客星犯帝座、歎曰、與故人嚴子陵共臥耳、除諫議太夫、不屈耕於富春山【本姓莊―】本の姓は、莊也、明帝、諱は莊なる故に、姓を改て嚴とす、明帝は、後漢の第二主顯宗皇帝、光武第四の子也【光武―】劉秀、字は文叔、南陽蔡陽人也、漢の景帝の子長沙定王發六代の孫、南頓の令欽が子、漢の末に、王莽天下を奪て、國を新と號す、

以レ己悲、人情所レ感、不レ過二上面二端一、而仁人之心、出處只是一致、憂樂不レ在レ己則在レ物、故一致耳居二
廟堂之高一、則憂二其民一、處二江湖之
遠一則憂二其君一、是進亦憂、退亦憂、
然則何時而樂耶、

是より仁人君子の上を云【嗟夫】は、嘆息の辭、文正公嘗て古の仁人君子の心如何と求め考るに、若は又上の悲喜する所の二つの者に同しからざるは、何としたる事ぞや 注 【綴上】とは、上の二端、綴、一作レ緻【生下】とは、下の不三以レ物喜一より以、下を云、外可レ喜事ありとても、强ちに不レ喜、内可レ愁事有て、己迷惑すれ共、さして悲まず、假令は、舜天下を有て不レ喜、父母に順ずるを以て樂とし、倉廩二女を以て樂とせすして、百姓不レ親を以て憂とするが如し 註 人情の感ずる所は、前段の二種に不レ過、而るに仁人君子の心は、出て仕るも、家に居るも、其節操を不レ改、同し事とす、故に其憂る所、樂む所、己に無ければ、在レ物也、己と物と一致にして、彼是隔る事をせず、致は、旨思也、易係辭上云、君子之道、或出或處、或默或語【居廟堂一】廟は宗廟、祭二先祖一の處也、堂は朝堂、政事評議する處也、禁中を指、青松曰、進而得レ君、則憂二其民一、仁人進て宰相と成、朝廷の上に居る時は、萬民を治め、惠を施して、苦しまざる樣にす、是憂レ民也【江湖】は、隱者の居處、或は遷謫の地也、青松曰、退而在レ下、則憂二其君一、退て奉公をせぬとても、君を憂へ、朝廷を正ん事を思ふ、然らば仁人君子は、何の時にか能樂む事を得んやと也、

其必曰下先二天下之憂一而憂、後二天
下之樂一而樂上歟、按二言行錄一、希文少有二大志一、常自誦曰、士當下先二天下之憂一而憂、后二天下之樂一而樂上、此其志也、今於レ此發レ之
噫微二斯人一、吾誰與歸、結句有レ力、勢重萬鈞、

孟子曰、樂二其樂一、憂二其憂一、大學曰、樂二其樂一、利二其利一、文正公自ら云心は、憂ふべき事は、必ず天下に先立て憂へ、樂むべき事は、天下に後れて樂まんと也、迂齋云、夫子自道也、元闕子辭詩、梁公獨擅二斗南譽一、老范長懷二天下憂一 註 宋朝名臣言行錄に、范希文少き時より、大なる志あり、宰相と成て、天下を救ん事を思ふ、常に

芷】岸の邊にある白芷也、香艸、一名澤芳【汀蘭】汀の上の蘭艸也【郁郁】香貌【靑靑】葉色を云、沙鷗飛翔て集り居無數の魚逆游ぎ、岸の芷、汀の蘭、香深く色靑し【長煙】は、雲烟が天に長く亘るを云【皓】は、白也【浮光―】靑松曰、月照水間、流處如浮光、急處如躍金、又曰、月影澄靜、如沈白璧、梅花無盡藏曰、浮光躍金比日、靜影沈璧比月、愚案するに、春和と云より下、靑靑と云迄は、晝の景を云、長煙と云より下四句は、夜の景を云、然れば浮光靜影は、皆月に云へし、月の波面に照すを、横に見渡せば、金を躍すが如し、杜甫月詩、委波金不定、又曰、金波耿玉繩、又動金蛇とも作る是也、水面靜なる時、上より月影を見れば、水中に珠を沈たる樣也、白香山詩、月點波心一顆珠と云是也、言心は、薄く掃たる樣に、長長と煙一天にそびき、明月千里も晴渡り、其波面に浮る光金を動し、或は影澄て玉を沈るか如し、折節漁舟の往來するが、歐を歌ふて互に相應答す、此時の面白さは、亦何の極り有ん、此樂は春和より下を、皆兼て云、

登斯樓也、則有心曠神怡、寵辱皆忘、把酒臨風、其喜洋洋者矣、

此亦一柱、樓之變態萬狀、而人情所感、不過二端〇〔后山詩話云〕文正爲岳陽樓記、用對語說時景、世以爲奇、

靑松曰、騷人覩此景、則心氣淸曠、神色怡悅、言ろは、晴天の時に此樓に上れば、千里を見渡して、心目曠遠にして、神思怡悅し、朝廷に在て榮華なるをも羨まず、遷謫せられて困辱するをも不愁、兩ながら皆打忘て無他念、酒を酌、風景に臨めば、其喜ひ樂む事、洋洋と盛なる也註【此亦―】上の一柱は、陰雨の景、此一柱は、晴天の景、風雨陰晴に因て、樓上の風景、變化の態狀千萬なれ共、人の情の感ずる所は、悲と喜との二端に不過也【后山―】陳師道が評に、此記多く配對の語を以て、時の風景を說、世に奇妙とすると也、對語は、假如は、銜遠山、呑長江、北通巫峽、南極瀟湘、日星隱曜、山岳潛形、去國懷鄉、憂讒畏譏、沙鷗翔集、錦鱗游泳、長烟一空、皓月千里、浮光躍金、靜影沈璧是也、

嗟夫予嘗求古仁人之心、或異二者之爲何哉、（綴上生下）不以物喜、不

也、廣布を云、言心は、若其長雨降連つて、月を越て不レ晴、陰て風吹強く鳴濁浪盛にして天に吹上、空に布が如なる時は、日月星辰も見へず、山岳の形も潜み藏て見へず、商人旅客も逗留して不レ行、風強き程に帆柱も傾き、檝も折る、周易復卦象傳、商旅不レ行【薄暮】くれにせまる、黄昏の時也【冥冥】は、くらきを云、陰雨の時也【虎嘯】易曰、虎嘯風生【猿啼】建安祝穆、岳州四六部曰、啼猿嘯虎聊尋二駭異之觀一、翳鳳騎鱗行慶二清華之召一、老杜詩、聽レ猿實下三聲涙一、奉レ使虚隨八月槎、盧綸詩、巫峽啼猿數行涙、衡陽皈鴈幾封書、洞庭は、巫峽の近所なれば、たそかれ時に陰雨の昏きに、虎も號び、猿も啼也、

登二斯樓一也則有下去レ國懷レ郷、憂レ讒畏レ譏滿目蕭然感極而悲者上矣、

立二二柱一〇此一段狀二陰雨景象一、

陳簡齋詩、士衡去レ國三間屋、子美登レ臺七字詩、陰雨の折節此樓の上に登れば、旅客故郷を思ひ、遷客讒言を愁へ、譏らるゝ事を恐れ、見る所皆蕭然と物冷しく、感慨至極して悲み泣者あり【注】立二二柱一とは、陰雨の時には、愁ると、晴景の時は喜ふとの、二つの柱礎を立て論する也、

至下若二春和景明一、波瀾不レ驚、上下天光、一碧萬頃、沙鷗翔集、錦鱗游泳、岸芷汀蘭、郁郁青青、而或長煙一空、皓月千里、浮光躍レ金、靜影沈レ璧、漁歌互答、此樂何極、

是よりは天氣の長閑なる事を云、莊子桑庚楚篇曰、泰宇定者、發二乎天光一、李白詩、何日王道平、開レ顔發二天光一、春二三月の時分、天氣和暖に、風景分明にして、風も無ほどに、波も不驚起、天の光上下に映發し、湖の色一つに碧なる事萬頃なる也、田百畝爲レ頃【沙鷗】洲沙に集る鷗也、列子には、海鷗と云【翔集】論語鄉黨篇【錦鱗】魚を美稱する也、金魚紅鬣魚などは、尤も可レ有二此稱一、李白詩、魯國若二琥珀一、汶魚紫錦鱗【游泳】は、潜行、をよぐ也、詩谷風篇、就二其淺一矣、泳之游之【岸

るを云【呑長江】とは、萬里長江の、此に流入を云、韓文公岳陽樓詩、瀦爲七百里、呑納各殊狀【浩浩】水廣大貌、老杜過南嶽入洞庭湖詩、洪波忽爭道、岸轉異江湖、鄂渚分雲樹、衡山引舳艫云云【湯湯】堯典、湯湯洪水、註、水盛貌【横】東西曰從、南北曰横【際涯】皆みぎは也【氣象】即形氣也、言心は、洞庭七八百里もある湖水なれば、遠山も多く寫り見へて、水山を含むが如く、大江を受入て、廣く盛んに、南北に通じて限もなく、朝日の光、晩景の陰り、形氣千萬變也、此則此樓の大なる觀もの也、前代の人備に其風景を詠じ盡せり、

然則北通巫峽、南極瀟湘、遷客騷人、多會于此、覽物之情、得無異乎、

【巫峽】荆州記、峽長七百里、兩岸連山、略無絶處、重巖疊嶂、隱天蔽日、常有高猿長嘯、屬引淸遠、漁者歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳、巫峽は、夔州府にあり、巫山の谷の間を流る、兩山一水を挾むを峽と云【瀟湘】湘水源出廣西陽海山、流出分水嶺、分派北流、入長沙界、湘猶相、言有所合也、永州與瀟永合曰瀟湘、衡陽與蒸水合曰蒸流、沅州與沅水合曰沅湘、會衆流以達於洞庭【遷客】流罪の人を云【騷人】有愁人也【極】廣韻、至也、洞庭北は巫峽に通じ、南は瀟湘までも續き極まる、遷客騷人、多くは、此間に會聚す、然れば、此樓に上て、風景を望見て、時により人により、其情を感ずる所、皆異なるへしと也、其景其情の不同は、次に見へたり、王鏊曰、覽物之情、爲下文二段張本、

若夫霪雨霏霏、連月不開、陰風怒號、濁浪排空、日星隱曜、山岳潛形、商旅不行、檣傾檝摧、薄暮冥冥、虎嘯猿啼、

【霪】韻會、久雨爲霪、通作淫、左傳、天作淫雨、ながあめと訓ず【霏霏】詩、雨雪霏霏、註、甚也【連月ー】月を重て、雨不晴也【陰風ー】萬里曰、莊子齊物論語勢、陰風は陰雲して風吹也、怒號は、風強く怒り號て、有聲也【濁浪】雨の後にて波濁る也【排空】虚空に排列する

越明年、政通人和、百廢具興、乃重修岳陽樓、增其舊制、

越字の義、喜雨亭記の註にあり、滕子京甲申の歲、當地に左遷せられ、代官として居らるゝが、明る乙酉の年に至て、政道通達し、人民和合して、元來百色も廢れたる事共、盡くに擧興す、於是又重ねて此樓を修復して、新しく取立、古の制度を大きにし增也、

刻唐賢今人詩賦于其上、屬予作文以記之、

唐朝の名人、今代の上手の詩賦を、此樓の上に書刻み、其上に范文正に付屬し賴て、文を作て、其脩復したる事、並に景象をも記さしむと也、唐の孟浩然岳陽樓詩、八月湖水平、含虛混太淸、氣蒸雲夢澤、波動岳陽樓、杜工部詩、昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南拆、乾坤日夜浮、唐より以後、諸賢の著述多けれ共、先此二人の詩、其壯觀を極盡す、瀛奎律髓の註に見へたり、

予觀夫巴陵勝狀、在洞庭一湖、

方輿勝覽二十九、岳州洞庭湖註、在巴陵西、西呑赤沙、南連靑艸、横亘七八百里、日月出沒其中、云云、李白詩、樓觀滄海盡、川迥洞庭開、鴈引愁心去、江銜好月來、又云洞庭西望楚江分、水盡天南不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君、杜子美詩、鮫室圍靑艸、龍堆隱白沙、護堤盤古木、迎棹舞神鴉、破浪南風正、回檣畏日斜、湖光與天遠、直欲泛仙槎、范公巴陵の勝れたる形狀を何ぞと見れば、洞庭湖の一つにありと也、

銜遠山、呑長江、浩浩湯湯(音商)、横無際涯、朝暉夕陰、氣象萬千、此則岳陽樓之大觀也、前人之述備矣、

文選句解曰、上數句布景已得其大綱、郤指言此爲岳陽樓大觀、靑艸湖、一名巴丘湖、北洞庭、南瀟湘、赤沙湖與洞庭通、【銜遠山】とは、遠山の此水面に寫り見ゆ

諫、極論時政、歷州、所至有惠政、以龍圖學士知延州、西賊大懼、召拜樞密副使、進參知政事、未竟所施卒、諡文正、追封楚國公、事畧曰、初居長白山僧舍、習讀、日煮粟米二升、作一器、刀畫爲四塊、早晚以斷虀數莖啖之、其清苦如此、其舉進士、試金在鎔賦云、如令區別妍媸、願爲金鑑、若使削平禍亂、請就于將、將相器業可見矣、呂夷簡復相、用韓琦范仲淹爲邊師、仲淹嘗兼知延州、夏人相戒曰、毋以延州爲意、小范老子胸中、自有數萬甲兵、不比大范老子可欺也云云、趙元昊之不得大逞、蓋藉琦仲淹之宣力居多、慶曆中參大政、仁宗召見開天章閣賜坐、公輕財好施、尤厚於旅人、於姑蘇買良田數千畝爲義莊、以養群族之貧者、嫁娶喪葬、皆有贍給、子純祐、純仁、純禮、純粹、范希文は、宋朝の名臣にして、天下を治る事、如引車、如推舟とて、慶曆車元祐舟と云れし輩也、山谷が詩にも、其三代相傳れる事を譽て、艸木識威名と作れり、

慶曆四年春、（仁宗年號）滕子京謫守巴陵郡、

（藤宗諒、字子京、謫守岳州、）

【慶曆】宋仁宗年號【四年】は甲申の歲也【春】文選句解云、倣繫時法、杜預左傳序曰、記事者、以事繫日、以日繫月、以月繫時、以時繫年、所以紀遠近、別同異也【滕子京】統譜、滕宗諒、字子京、河南人、舉進士、累官刑部員外郎、知涇州、范仲淹薦以自代、擢天章閣待制、徙慶州、終知蘇州、宗諒尚氣、倜儻自任、好施與、及卒家無餘財、所蒞喜建學、而湖州最盛、所著有諫疏二十餘篇、事文類聚續集七云、滕宗諒子京、左官遠守巴陵、重建岳陽樓、極雄偉、范文正公爲之記、郡僚稟落成之日、子京云、落其成、待痛飲一場、凭欄大慟十數聲而已、子京果死於岳州【謫】責也、罪に坐せられて、遷謫せられて巴陵郡の太守と成也、有罪て配流する時、公方より衣食を與へされば、其人飢死ぬ、又徒飼も不爲して、配所にて代官をさする也、巴陵郡は、即ち岳州、尋江記曰、羿射巴蛇於洞庭、其骨若陵、故謂之巴陵、韻會曰、巴字、下蟲也、或曰、食象蛇、博物志、巴蛇天象、三歲出其骨、山海經云、玄蛇食麂鹿、又州名、秦漢屬巴郡、元魏立巴州、三巴記、閬白水東南流、曲折三廻如巴字、文選句解云、直書之、以起後意、

冥冥と高く昏ふして形もなく、何共名付云事を不可得、此方彼方とぬりまはる程に、東坡遂に以て其亭に名付て喜雨と云【注】【四者—】太守天子造物太空四つながら皆其功を不受、歸すべき所無れば、東坡取て是を亭の名に歸すと也【此一—】此一段は、此亭の名を得たる故を詠し歌ふて、決斷して結び留たり、文選句解曰、歸之造化萬物者造物又不自以爲功、又歸之於天上太空、太空冥漠、無形可名、上面四者、皆不受其名、則卒歸於此亭之名、轉換結束健而有力、以文爲戲、端有妙趣、萬文一統、林希元曰、說喜雨處、當人情、末雖似戲然自太守歸功天子造化、亦是實理非虛美也、文字通徹流動、如珠走盤而不離乎盤、他人雖有此意思、未必有此筆力、

○岳陽樓記

【迂云】首末布置、與中間狀物之妙、不可及矣、然最妙處、在臨了斷遺一轉語、乃知此老胸襟度量、直與岳陽洞庭同其廣、

杜詩分類註曰、岳州也、居天岳山陽、故曰岳陽、方輿勝覽、岳州部曰、岳陽樓、在郡治西南、西面洞庭、左顧君山、不知創始爲誰、唐開元四年、中書令張說、出守是邦、日與才士登臨賦詠、自爾名著、滕宗諒作而新之、范希文爲記、蘇子美書其丹、邵疎篆其首、時稱四絕【迂云首末—】此篇の始終文字を布置と中の間に風景を述る、次に若夫霪雨霏霏と云より下、其喜洋洋者と云迄に、種種物を狀るの妙と、皆他人の所不可及也、其最も妙なる處は、文の終る前に、嗟夫予嘗求古仁人之心と云出し、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂と云て、一轉して、噫微斯人、吾誰與歸せんと決斷し遣了る語にあり、此老は、即范文正公也、胸襟は、胸中也、度量は、胸中にはかりはかる所也、此文を見れば、文正公の胸中に度量する所、至て大にして、岳陽洞底の廣さと同じと也○梅花無盡藏曰、此篇五段、自篇首至記之第一段、自予觀至異乎第二段、自若夫至者矣第三段、自至若至洋洋者矣第四段、自嗟夫至末第五段、

范希文

東都事略列傳四十二有傳、又見名臣言行錄、萬姓統譜曰、范仲淹、字希文、吳縣人、刻苦讀書、大通六經之旨、大中祥符間第進士、慨然有志於當世、嘗曰、士當先天下之憂而憂、後天下之樂而樂、仁宗時爲右司

而雨玉、飢者不得以為粟、一雨三日、伊誰之力、此句已包太守天子造物大空于一

雨を喜るが為に、已に以て亭の名とし、且又随て是を歌ふ、其歌に云心は、假令天より珠を雨さしむ共寒く凍たる者、衣服とする事を得まじ、又玉を雨さしむ共、飢かつえたる者、米とする事を得ざらまし、通鑑漢文帝十二年鼂錯曰、明君貴五穀而賤金玉珠玉ほと重寳にする物なれ共、其は榮耀の上の賞玩にてこそあれ、畢竟食も著も不成者也、只此雨が萬民満足して、五穀にも七珍萬寳にも成也、今一たび雨降て、三日にして止、是は誰が功ぞやと也【襦】短衣也【注】【此句已—】伊誰之力と云句の内に、已に後の太守天子造物大空と云を含む、次第に不審をしまふて、遂に太空に皈せん為也、王世貞曰、讀此歌可見蘇公心腸盡玉珠錦綉、

民曰太守、太守不有、歸之天子、天子曰不然、歸之造物、造物不自以為功、歸之太空、太空冥冥、不可得而名、吾以名吾亭、四者既皆無所得、則歸之於亭名〇此一截、則詠歌此亭之所以名而斷結之、

【太守】東都事略七十五陳希亮字公弼、眉州青神人、知長沙、民訛言有緋衣三老人行火、希亮焚之、民不敢犯、火亦不作、毀淫祠百區、勒巫為農者七十餘家、及罷去、父老送之出境、遣去不可、皆泣曰、公捨我去、緋衣老人復出矣云云、知鳳翔府、分司西京、遂致仕、卒年六十四、聞見後錄曰、趙宋陳希亮、知鳳翔府、吏呼東坡為蘇賢良、陳怒曰、府判官何賢良也、杖其吏、至東坡作凌虚臺記、不易一字、希亮曰、吾不假以辭色、以其年少暴得大名、懼夭滿而不勝也、方輿勝覽五十三、眉州部、陳希亮早孤、其兄使治息錢三十餘萬、希亮悉召逋家焚券、從文登天聖第、後知鳳翔府、時東坡為僉書、子慥、字季常、孫與義、字去非、號簡齋、有簡齋集行于世、民は太守陳公弼の政道正しき故に雨降候と申す、陳公弼も其功を自ら有せずして、是を天子の德沢故也と云て、其功を天子に皈す、天子も亦左様にてはなし、只陰陽造化の功也と宣ふ、造物の神も自ら是を功とせずして、是を虚空に皈す、虚空は

批語の回護の字の意【此一截―】此一段は、作亭亭に名を付るの由緒を云、

於是舉酒於亭上以屬客而告之曰、五日不雨可乎、曰、五日不雨則無麥、十日不雨可乎、曰十日不雨則無禾、

亭も出來し、雨も降て田畠を潤す程に、東坡喜悦して同僚を招請し、亭の上に酒を舉て賓客に進む、因て客に物語して問て云、此雨か今五日遲く降らば、何とか有ん、客の云、五日雨降ずんば、春田に麥枯て有まじ、坡又問て云今十日雨遲んば可ならんや、客答て云、十日無雨ば、苗代枯て、秋に成てから、稻有まじと也、

無麥無禾、歲且荐飢、獄訟繁興而盜賊滋熾、則吾與二三子、雖欲優游以樂於此亭、其可得耶、

【荐】數也【飢】本集作饑【茲】作滋、但相通用、漢書五行志云、賦斂茲重、師古註、茲益也【優游】毛詩卷阿、伴奐爾游矣、優游爾休矣、韻會、自如貌、東坡云、若雨不降して、無麥無禾は、歲混らに飢饉して公事訟繁く興り、盜賊彌盛ならん、左あらば我各と箇樣に緩緩と此亭上に酒宴し樂ん事を思ふ共、其政道に係て忽しく、何とて隙有て、如此事を得んやと也、

今天不遺斯民、始旱而賜之以雨、使吾與二三子、得相與優游而樂於此亭者、皆雨之賜也、其又可忘耶、（此一截說得雨之喜不可忘、）

【遺】は、棄也、東坡云、今天斯民を不棄始は旱すれ共、終に賜ふに、甘雨を以す、我と各とに相共に緩緩と此亭に樂む事を得せしむるは、皆雨より我等に施す恩德也、是亦其賜を忘るべきや【註】【此一―】分明、

既以名亭、又從而歌之曰、使天而雨珠、寒者不得以爲襦、使天

淮飢饉、人相食天雨穀三日、述異記夏禹時天雨稻、古詩安得天雨稻、飼我天下民、春秋、宣公十六年、大有年、

既而彌月不雨、民方以爲憂、

一月はかり雨ふらざる程に、麥可枯とて民大に愁とす【彌】滿也、

越三月乙卯乃雨、甲子又雨、民以爲未足、丁卯大雨、三日乃止、似春秋書法、

尙書武成篇、惟一月壬辰旁死魄、越翼日癸巳王朝、步自周于征伐商又曰、越三日庚戌、召誥曰、惟二月既望、越六日乙未、越は、粤と通す、發語の辭、こゝにおいてと訓す、三月乙卯に雨降、十日の後甲子に又雨降、百姓此分にては、まだ不足也とする處に、四日有て丁卯に大雨して、三日降て止程に、民大に滿足する也【注】【春秋―】僖公三年春王正月不雨、夏四月不雨、六月雨胡氏傳曰、雨云者喜雨也閔雨與民同其憂喜雨與民同其樂、此君國子民之道也、春秋事を記すに有法是を書法と云、今此筆法も、春秋を手本にして書也〇朝野僉載云、唐俚語曰、春雨甲子、赤地千里夏雨甲子乘船入市秋雨甲子、禾頭生耳、冬雨甲子牛羊凍死、

官吏相與慶於庭、商賈相與歌於市、農夫相與抃於野、憂者以喜、病者以愈、而吾亭適成、只一句斡上作亭、接得甚有法度〇此一截說作亭名亭之由、

【官吏】太守より下小代官諸奉行迄を云べし【慶】は、賀也、目出度と稱賀する也【商賈】行賣曰商、居賣曰賈、守護代官は、此雨を喜て相共に公庭に慶賀し、商賈は相共に市中に頌歌し、耕民は相共に田野に手を拊て嬉しがり、憂ある者も解て喜ひ、病ある者も頓に愈、而て折節我亭の造作方に成就すると也【注】【只一句―】而吾亭適成と一句にて上の爲亭於堂之北と云を斡轉し接續し得て文章甚た法度あり【斡】は、旋轉也、めぐると讀、車の轉る樣に、上に爲亭と云て此にて亭成と轉り來承接て、首尾を合する義也、晝錦堂記の

して、珍しく目出度事なれば、嘉と名付、是を成王に獻る、周子成王の詔命を旅陳して、嘉禾篇を作る、其書逸脱して、今所傳の尚書には無之【漢武—】漢の武帝は、寶の鼎を得て、年號とせらるゝ也注漢の武帝元狩元年夏六月、汾水の上、后土の祠の旁にて、寶鼎を得たり、即ち改元して元鼎元年とす【叔孫—】魯の叔孫得臣、長狄と戰て、其大將僑如を打取、其功を記さん爲に、其子の名とす、勝敵、本集作勝狄注左傳文公十一年、鄋瞞侵齊、遂伐我、【魯】公卜使得臣追之、吉、冬十月甲午、敗狄于鹹、獲長狄僑如、註、得臣、莊叔也、最善射僑如、鄋瞞國之君、蓋長三丈、大夫生死曰獲、得臣射其目、斷首截之眉見於軾、因名宣伯曰僑如、以旌其功【文字—】發頭三句に繼て、此三句無んば、文勢承得難んに、文字能布置したりと稱美する也、

其喜之大小不齊、其示不忘一也、此節且說志喜之意

三つの引證は、皆大なる事也、得雨の喜は小也、其喜の大小は不同なれ共、其喜を忘るまじき爲に、記し示す事は一同也注分明、

予至扶風之明年、扶風、在長安左、即郿地

嘉祐七年東坡二十七歲鳳翔府有寶雞虢郿盩厔四縣、扶風、即在郿縣、時陳希亮守鳳翔、嘉祐六年東坡扶風に來て陳希亮が幕下にあり、明年に喜雨亭を作る、

始治官舍爲亭於堂之北而鑿池其南、引流種樹以爲休息之所、

【官舍】は、守護の居所也破損したる故に東坡修理して、亭を公堂の北に造り、其南に池を掘、水流を引來し、樹木を種などして、公用の暇休息所とする也、

是歲之春、雨麥於岐山之陽、其占爲有年、

嘉祐七年の春岐山の南に麥を雨す、占ふて見れば、豐年の兆也とぞ、句解曰、岐山種麥雨以潤之【雨麥】漢呂后三年、秦中大雨粟武帝時廣陽縣雨麥、宣帝時江

宴し、相共に慶賀して此記を作る事もなく、亭の記の題にして、名は小きなれ共、其所言生民に預つて、旨趣大ひ也、張侗初曰、此篇議論、有關于民生休戚、非徒流連光景之文也、末皈太空處、尤脱化爲千古宗匠、其議論する所、國家の政事に預り渡て、生民の大本體也、文章清潔にして、一點も塵俗けがれいやしき氣なしと也【張子韶】張九成、字子韶、錢塘人、年十四郷貢辟雍、從楊時學、紹興初以直言對策、仕至禮部侍郎、以與秦檜議論不合、謫居南安軍、後起知溫州、贈太師崇國公、諡文忠【陳伯脩】陳師錫字伯脩、建陽人、擢進士第三、蘇軾薦其德行文章、以爲校書郎、徽宗立、拜殿中侍御史、錫與陳瓘同論蔡京蔡卞、時號二陳、張子韶陳伯脩が物語を聞に云、喜雨亭記は、道理を知眼を具足せずんば、此記の理致を知る事易からずと也○萬里曰、此篇五段、自篇首至一也第一段自予至至之所第二段、自是歲至適成第三段自於是至忘耶第四段、自既以至末第五段、

亭以雨名、志喜也、古者有喜則以名物、示不忘也、 解所以志喜之意

此亭雨を以て名る事は、旱に雨を得たるの喜を記すと也、古には何にても喜ばしき事あれば、其事を以て物に名付其喜を忘れざらん事を示して也 注 雨を喜て、亭に名付たる所以の意趣を解釈する也、

周公得禾、以名其書、 【書】唐叔得禾異畝同穎、獻之天子、周公旅天子之命作嘉禾

漢武得鼎以名其年、 【漢】武帝元狩六年夏、得寶鼎汾水上、改元爲元鼎元年

叔孫勝敵以名其子、 【左】文公十一年、叔孫得臣獲長狄僑如、名其子曰僑如○文字不可無此等句、

是より古者有喜則以名物と云の證據を引也、周公旦は、嘉禾を得て、書を作て是を名とす 注【書―】尚書註疏十三、唐叔得禾、異畝同穎、獻諸天子、王命唐叔、歸周公于東、作皈禾、注 唐叔、成王同母弟、食邑內得異禾也、禾各生一壟、而合爲一穗、異畝同穎、天下和同之象、周公之德所致、周公東征未還、故命唐叔以禾皈周公、唐叔後封晉、周公既得命禾、旅天子之命云云、唐叔虞は、成王の弟也、其知行の內に異しき禾を得たり、其禾二壟に並て、畝を隔て生し、末の穗相合て一つに成、是を異畝同穎と云、即ち連理の禾に

云注【語壯】此數句語勢壯に强しと也、

其豐功盛烈、所以銘彝鼎而被絃歌者、乃邦家之光、非閭里之榮也、占地歩、

魏公の豐なる勳功、盛なる功烈を、宗廟の器に銘し、琴瑟に合せ、詩歌に作て歌ふ所以は、即ち天下國家の光輝にして、閭里の榮づれにては無と也【豐】大也、盛也【烈】功之光且盛者曰烈周書、不承哉武王烈【銘】志也【彝鼎】書益稷篇 宗彝、蔡沈集傳云、虎蜼取其孝也、古文奇英註曰、彝宗彝、虎蜼也、所盛鬱鬯、鼎、宗廟祭器、和五味之寶器、三代時、人臣有功德、必銘彝鼎、以酬功也、青松曰、所以銘記其庶績於宗彝祭器、與夫鑄鼎之文者、可賀之神明先王而無愧、【邦家―】易曰、觀國之光注【占地歩】羅山曰、此段一篇の地盤と云義也、前の送孟東野序の注に見へたり、

余雖不獲登公之堂、幸嘗竊誦公之詩、樂公之志有成、而喜爲天下道也、於是乎書、

【余】は、歐陽也、未た相州の書錦堂には上らね共、幸に嘗て竊に韓公の晝錦堂の詩を誦て、公の志の成就する事有を樂て、天下の爲に此事を云を喜ふ、故に此記を作ると也、一元曰、此人致君救民、其志廣大、功成名遂而身退、其志願成就也、奇英評云、不以公之寵遇爲公榮、而以公之志爲公頌、志字凡三見、見公之志不在榮○漁隱叢話前集二十七、迂叟詩話云、韓魏公罷相守北京、新進多陵慢之、魏公鬱鬱不得志、嘗爲詩云、風定曉枝胡蝶鬧、雨匀春圃桔槹閒、時人稱其微婉、

○喜雨亭記

此篇題小而語大、議論干涉國政民生大體、無一點塵俗氣、張子韶云、予聞陳

蘇子瞻

伯修云喜雨亭記自非具眼目者未易知也、

必讀古文評曰、旱而得雨坡公與同僚飮于亭上、共慶而志之東坡年譜曰、仁宗嘉祐七年壬寅先生年二十七歳、作喜雨亭記、久しく旱して、吏民愁嘆する時に、打續き雨降事を得て、大に喜ふ、折節東坡亭を建て成就しけれは、其喜を取て亭に名付、諸官を招て亭上に酒

名譽に矜るをは、卻て德の薄き事と、魏公被レ思也、詩は題註の下にあり、

蓋不下以二昔-人所レ夸者一爲上レ榮而以爲レ戒、韓公之戒卻如レ此、

魏公は古の蘇秦買臣等が榮華と所レ夸を以て、卻て戒とせらるゝ也【註】分明なれば不レ及レ解、

於レ此見三公之視二富-貴一爲二何-如一、而其志豈易レ量哉、

如レ此なる時は、韓魏公の富貴を見らるゝ事を、歐陽公が見て、何如とか思ふと也、底心に魏公富貴を薄んじ輕んずる事を知と云ん爲也、其志廣深なる事、何ぞ計り易らんやと也、

故能出二入將-相一、勤二勞王-家一、而夷-險一-節、

慶曆二年用二韓琦范仲淹一爲二邊帥一、是外に出て將と成也嘉祐三年、韓琦入相、進曰、皇嗣者、天下安危之所レ係、陛下何不下擇二宗室之賢者一以爲中宗廟社稷之計上、是內に入て相と成也【勤勞王家】尙書金縢篇の語、天下の事を勤て、功勞あるを云【夷險一】夷は平夷、太平の時を云、險は艱難、亂世を云、節は節操、みさほと讀、所レ守の貞信なるを云、上の文を承て云、此故に能出ては名將たり、入ては宰相として、天下に勳功あり、太平にも亂世にも、其所レ守の節同して、少も不レ易也、

至下於臨二大-事一、決二大-議一、垂レ紳正レ笏、不レ動二聲-色一、而措中天-下於泰-山之安上、可レ謂二社-稷之臣一矣、語壯

【紳】事文要玄朝服部、前郊祀志、搢レ紳、揷二笏於紳一、紳、大帶也、論語書二紳一【聲色】聲は音聲言語、色は顏色【泰山安】漢書嚴助傳、天下之安、猶二泰山一、而四維レ之【社稷臣】左傳に出たり、又、孟子告子篇、又漢書汲黯傳、言心は、或は天下の大事ある時に臨み、又は大なる議定決斷しさばく時は、石の帶を垂、笏を持て、威儀を正し、少も聲をあらゝげず、色を變ぜずして、天下を太平にしなし置事、泰山の安らかに不レ動が如し、誠に社稷の臣と云つべし、國家と安危を共にする大臣を

德を報ん事を思ふ、故に王者百姓の爲に、社稷を立て祭之、其國存すれば、社稷存ず、若其國亡れば、社稷も亦亡ふ、國家存亡の所係なれば、天下を總て社稷と云、云心は、魏公我德澤を生民に蒙らしめ、動功を社稷に施して、其を金にも石にも、雕付、是を詩に作て、音樂に播し、名を後世に輝し、永劫末代無窮までも、垂示されんと思ふ、是魏公の志にして、天下の士民も亦如此あれかしと、魏公に望み思ふ、蘇秦買臣が類の、只其時に夸り、故鄉の者共に榮華と、ひけらかすつれにては無と也、

公在至和中、嘗以武康之節、來治於相、乃作晝錦之堂于後圃、

【至和】仁宗の年號【武康】郡名【節】事物紀原、周禮地官之屬掌節、有玉角虎人龍符璽旌等節、漢文有旄節之制、漢人有持節、乃古旄也、然則節自周始、而旄節則起於漢也、又曰、後漢公孫瓚討烏桓、詔令受劉虞節度、唐室名使蓋取此義、唐制緣邊戎寇之地則加以旌節、謂之節度使云云、事文類聚曰、節度使、古方伯連帥之職、大將一人曰大總管、已而又曰大都督、至太宗時行軍征討曰大總管、在其本道曰大都督、自高宗永徽以後、都督帶任持節者謂之節度使、猶未名官、景靈開元天寶以後名官、唐百官志、節度使、掌總軍政、節は本符節わりふ也、玉角金銀等種種あり、漢の文帝始て旄節を作らる、龍首を作たる竿に、犛牛の尾を付て飾り、天子の御使たる者賜て持せ行也、節度の名は、後漢の公孫瓚より起る、節は品節、度は法度、物の定規指圖を云、唐の世に、戎狄寇亂を成ことあれば、大將を遣し、征討せらるゝに、旌節を賜る、是を節度使と云、勅を奉て下知するの驗也、日本にても、大將軍に、天子の錦の旗を給て、朝敵を退治するを節度使と云也、魏公至和元年に、仁宗より武康の節度使と云を賜て、相州に來て守護と成、仍て治宅の後の圃に、晝錦堂を作られし也、

既又刻詩於石、以遺相人、其言以快恩讎、矜名譽爲可薄、

魏公自ら晝錦堂の詩を作て、石に、雕刻み、相州の人に被遺也、歐陽公其詩を見るに、昔有恩德者には報謝し、怨讎ある者には報復する事を快くせんと思ひ、

行則建節樹纛、如此なる車に乗て行くは、魏公に於て、差て榮華とも不思、恩でも無ことなる故也、

桓圭袞裳（桓圭、三公所執、袞裳、三公所服、）**不足爲公貴、**

詩【桓圭―】字彙、圭、上圓下方、瑞玉爲之、周禮四圭、王執鎭圭、公執桓圭、侯執信圭、伯執躬圭、說文、桓圭九寸、信圭躬圭皆七寸、又曰、圭以封諸侯、故从重土、又周禮春官、以玉作六瑞、以等邦國、王執鎭圭、公執桓圭、侯執信圭、伯執躬圭、子執穀璧、男執蒲璧、註、公二王之後、及王之上公、雙植謂之桓、桓、宮室之象、所以安其上也、桓圭、蓋亦以桓爲瑑飾、圭長九寸、公侯伯子男とて、五等の爵あり、天子へ見ゆる時に、各所執の圭五品あり、三公の所持の玉を桓圭と云、長九寸ある圭を、二つ並立る也【三公】周には、太師太傅太保を云、漢の末には、大司徒大司馬大司空を云、後漢より後は、大尉司徒司空を云【袞裳】事始曰、黄帝作畫、象日月星辰於衣上、以似天、故有袞龍之頌、說文、袞天子享先王、卷龍繡於下幅、一龍蟠阿上向徐按、周禮、袞龍衣也、衣五章、裳四章、凡九、皆稀繡而畫以爲袞、阿、曲也、謂繡龍蟠曲也、王之卿、六命公、自袞冕而下、如王之服云云、袞裳は、袞龍衣とて、裳に龍を繡にしたるを云、天子のは、龍の頭を下へ成、三公のは、龍の頭を上へ成也、愚案するに、天子の御服には、二龍ありと見へたり、一龍は頭下に向ひ、一龍は頭上に向ふ、但し衣には無之、如此桓圭を持、袞裳を服する事は、人臣の極榮なれ共、魏公の爲には、强ちに貴とするに不足、本より此位に可成人なる程に斯云也、其魏公の榮とし貴とする事は、次の句に云、

惟德被生民而功施社稷、勒之金石播之聲詩、以耀後世而垂無窮、此公之志、而士以此望於公也、豈止夸一時、榮一鄕哉、

毛詩に有生民篇、其生生して不絕故に、生民と云【社稷】禮記曰、社、祭土而主陰氣、左氏曰、共工氏有子曰勾龍、爲后土、實始爲社、又禮曰、稷、爲五穀之長、昔烈山氏之子曰柱、夏以上祀之、實始爲稷、周棄爲唐虞稷官、湯既勝夏、建社祀棄、故自商以來祀之、詳在白虎通、及事物紀原、土は穀を生す、穀は、人を養ふ、其恩

所謂將相而富貴、皆公所宜素有、回護、

將軍宰相を相兼て富貴なるべき事は、魏公の本來より所可有也、智勇兼備りたる人なれば也、宰相として朝廷に居られし時、久く旱したるに、雨降て天下喜ふ、又慶曆車、元祐舟と云事もあり 註【回護】羅山曰、文法に其人を助けたる辭を云也、湖月云、前の句を此で合するを云、愚謂く、回護は、かへしまもる也、前に在事を、再ひ言回して、首尾能守り合するを云、

非如窮阨之人、僥倖得志於一時、出於庸夫愚婦之不意、以驚駭而夸耀之也、

【僥倖】李愿皈盤谷序に見へたり、彼蘇秦朱買臣が、閭里に貧窮困阨して居、不圖仕合能て、志を時に得、庸夫愚婦の賤き者の、思ひ懸もなき樣に成て、扨扨俄に世に出たりと驚き、其人も故鄕の人に、威勢を夸り耀す類の、魏公にては非ずと也、是も亦回護の語也、

然則高牙大纛、牙者、車輪輻牙也、纛者、車上羽葆幢也 不足爲公榮、

註【牙者―】文選東京賦牙旗繽紛、註、天子出、建大牙旗竿、飾之以象牙、事物紀原三、宋朝會要曰、古者天子出、建大牙、今制錯綵爲神人象云云、如此說なれは、色絹にて旗を作り、竿を象牙にて飾る、高大にしたるを、高牙とも、大牙とも云也、今は此義を可用、字彙牙、上聲、車輮謂輪牙、韻會又曰、車輞也、考工記輪人、牙也者、以爲固抱也、言牙包轂輻而外輮、故取于固抱、車輪外圍曰輞、案ずるに此說の如なれば、牙は、車輪の外に、人の牙齒の如く、轄に似たる物を、ひしと打付て、輪の地を直に轢て、碎け傷れぬ樣にしたる物歟、但し其にては、大牙高牙と云に如何有ん、羅山曰、高牙は、車の內に高くそりたる物あり、象の牙の如なる者也、此說恐らくは亦誤也【纛者―】韻會、纛、以旄牛尾爲之在左騑馬首、亦名羽葆幢、幢、幡幢、合聚五采羽爲幢曰羽葆、纛は、車の上に指懸る旗也、鳥の羽にて作る、事文要玄曰、唐節度使入境、州縣築樓迎以鼓角衙仗居前旌幡中、唐百官志節度使賜雙節、

國公言ろは、惟韓魏公は、前の俄に成たる人とは違
ふたるぞと也、是は本より大名なる故に、如此云、是
より始て魏公の事を云、惟字たゞと讀時は、上の俄大
名に替て、魏公は只獨り如此なると也【註】韓は姓、魏
公は封爵、琦は名【至和】宋の第四主仁宗の年號、時に
魏公武康軍の節度使の官に成て、來て相州を知行す
る也【初封】萬里曰、初當作後註誤也、

公相人也、先著此一句、世有令德爲時名卿、

魏公は相州安陽の人也【相】去聲、秦邯鄲郡地、魏曹操
所都、後魏置相州【註】【先著一】先此人の故郷を云出
す、後の來治於相と云ん爲の張本也【世有令一】続
譜、韓國華、字光弼、安陽人、太平興國初進士、累官左
司諫、性純直有時譽、毎歳後苑、賞花、國華以直昭文
館陪宴、後以右諫議太夫知泉州、子琬賜出身、琚璩
琦並進士及第、代代有美德て、當時名譽の公卿也、

自公少時已擢高科登顯仕、

天聖五年、仁宗初臨軒試進士、公時年二十、大史奏曰
下五色雲見、左右從官皆賀於殿上【高科】事物紀原
三、漢之取士、其射策中者、謂之高第、隋唐以來、進士
諸科、遂有及第之名、袁了凡綱鑑、唐代宗廣德元年註
賦曰進士、謂所試一大經、併爾雅帖皆通、而後試文試
賦各一篇、文賦通而後試策、凡五條三試皆通者爲第、
書言故事八、甲科釋文云、射策者爲難問疑義書之於
策、量其大小署爲甲乙之科、列而署之、不使彰顯、有
射者隨其所取得而釋之、以知優劣、射之爲言、投也
【顯仕】結構なる官に成て仕るを云、魏公弱年の時に
及第の首に擢てられ、高官に登て仕へらるゝと也、

海內之士、聞下風而望餘光者、蓋亦有年矣、

四海の內を、海內と云、天下の謂也、漢文帝紀曰海內
殷富興於禮樂【下風】左傳云羣臣敢在下風、漢鄒陽傳
云、竊高下風之行、莊子曰、白鶂相視、眸子不運而風
化、雄鳴於上風、雌鳴於下風【餘光】あまりの威光也、天下
の人、魏公の風化を聞て、威光の餘を望み慕ふ事年久
し、只一朝一夕に非ずと也、

窮にして、後俄に大名に成たる也、

一旦高車駟馬、旗旄導前而騎卒擁後、夾道之人、相與駢肩累迹瞻望咨嗟、

とこその程に一朝俄に尊位高官に成て、高き車に四つの馬を繋乘て、旌を建て前に導き、騎馬の從卒後に數多連て、故郷へ返る也【駟馬】漢于定國傳、于公曰、少高大閭門、令容駟馬高蓋車、又滕王閣序の註に見へたり【旗旄】李愿歸盤谷序の註にあり【擁】字彙、衛也、群從也、大勢後に隨ふ也【夾道ー】道の兩旁に立て、相共に肩を並べ、踵を次て、彼大名に成人を望み見て、箇樣にも成者かとて、嘆息し羨む也、

而所謂庸夫愚婦者、奔走駭汗、羞愧俯伏、以自悔罪於車塵馬足之間、

常の人、愚なる婦は、彼人を見て、走り廻り、驚て汗をかき、彼は富貴に成に、我は本の貧窶なるを耻、首を低ひれふして、自ら前かどむさと相しらひたる事を、悔しく思ひ、車の塵、馬の足の間に、恐れ屈まりて、罪を請也、

此一介之士、得志當時、而意氣之盛、昔人比之衣錦之榮者也、

【一介】滕王閣序の註に見へたり、是は獨り男も、不慮に志を當代に得て、俄に大名に成、意氣の盛なる人の事、昔の人是を錦を衣て故郷に歸るの榮華に喩へたると也【意氣】史記晏嬰傳、意氣揚揚自得也、

惟大丞相衛國公則不然、韓魏公琦、相州人、初封魏國公、至和中公以武康軍節度、來知相州、歸故郷也、

【大丞相】事物紀原曰、史記秦本紀悼王二年初置丞相、蓋三代三公之任也、今侍中令僕射、皆其職爾、故今亦以爲稱、應劭曰、丞者、承也、相、助也、商鞅書定分篇云、秦孝公問法令於鞅、鞅有丞相置一法官之語、則丞相之置、已見於孝公時、非悼武王始特置之也、大抵秦所建官云【衛國公】東都事略、韓琦傳曰、仁宗崩、英宗即位、加琦門下侍郎、兼兵部尚書、追封衛國公、又封魏

臣笑曰、汝苦日久待ニ我富貴ニ報ニ汝功ー妻恚怒曰、
如ニ公等ー終餓ニ死溝中ー耳、買臣不レ能レ留、卽听レ去、

注【史】【蘇秦―】史記列傳第九有レ傳、蘇秦、字は季子と云者鬼谷先生とて、鬼谷と云所に居る者に合從連衡の道を學て、久く居たりしが、故郷へ歸りたれば、形も瘦衰たる體にて有しを見て、季子が妻機を織て居たりしが、其機を不レ下、嫂も居けれ共、飯をも炊かざりし也、季子無念に思て、彼鬼谷子に習たる道を彌勤め、睡たければ、錐にて股を刺、其法を研き究て、齊の國に仕へ、又趙に仕ふ、此時天下七つに分れて有程に、方方を行きて、趙の相と成て、六國の印を帶て、故鄕へ歸たれば、兄弟も妻嫂も、目を傍へ側て、眞向に季子を不レ見得、其時季子打笑て、何ぞ前に鬼谷が所より歸し時は、倨て相しらはずして、今は崇敬するぞと云ければ、嫂其方の今富貴にして、金銀多きを見る故也と云、倨居御切、説文、不レ遜也、史記曰、秦爲ニ從約長ー、幷相ニ六國ー、註に史に有と あれ共、史記とは少相違あり、戰國策に在と似たり【買臣―】漢書列傳三十四上、買臣、字翁子、吳人也、家貧好レ讀レ書、不レ治ニ生業ー云云、朱買臣は、吳の會稽の人也、家貧ふして常に薪を取て、賣て衣食を供給す、艾、師古註、讀曰レ刈、給は、用を足す也買臣學文ずきにて薪を賣片手にも、書を見て行く也、或時は夫婦共に市に出て、妻に薪を賣して、我は書を讀て同道す、是を妻恥かしく思て、去んと云けるを、買臣が云、汝貧苦を忍て、我に隨ふ事久し、吾富貴に成んを待、其時汝が日比の功を報ずべしと云其妻怒て云、其方は富貴をば不レ得して終に餓て溝湟の中に倒れ死すべき也と云程に、買臣强て留むる事不レ能して、妻の去事を許して離別する也【恚】も、亦怒也、其後買臣、漢の武帝に仕へて、我故郷の會稽の大守と成て返るに、先人をば不レ連、昔の知音の家へ往、其人買臣を見て、汝は今に其體にて居るこそ不便なれとて、食などをくれければ、其を食て居る處へ、天子よりの迸の使者、幷に買臣が所從、馬車に乘連て來る、買臣内より出ければ、各馬車より下り、ひれふして崇敬するを見て、扨は古の買臣こそ、此處の守護に成給へとて、侮りし者共肝を消、昔の妻の後の夫も妻も、迷惑して有しを、買臣其夫婦共に呼出して扶持しければ、彼妻耻て縊て死にけると也、蘇秦は嫂に禮せられず、買臣は妻に被レ捨、二人共に初は貧

記之由○韓琦忠獻魏國公、東都事畧六十九、名臣言行錄後集二有傳、韓琦字稚圭、相州人、年二十登進士第唱名第一甲終大史奏日下五色雲見、爲相十年、歐公心服其徳量、嘗曰、累百歐陽脩何敢望韓公、英宗朝拜魏國公、薨謚忠獻、上曰、侍中國之龜鑑云云、東都事畧、范仲淹傳曰、與韓琦俱有威名軍中爲之語曰、軍中有一韓西賊聞之心骨寒、軍中有一范西賊聞之驚破膽、公嘗謂保初節易、保晩節難、故晩年事事著力、在北門時、有九日詩云、不羞老圃秋容淡、且看黄花晩節香、宋元通鑑、神宗熙寧八年乙卯六月、司徒兼侍中判相州魏國公韓琦卒、前一夕、大星隕州治、櫪馬驚、帝自爲碑文、載琦大節、篆其首曰兩朝顧命定策元勳之碑、王荊公集四十九、有韓忠獻公挽詞二首、徽宗朝追封魏王、

仕宦而至將相、富貴而歸故鄕、此人情之所榮、而今昔之所同也、（此四句、乃一篇大意、）

【仕宦】宦、胡慣切、說文、仕也、二字皆奉公みやづかえ也【將】軍左大將右大將也【相】宰相天下の執權也、天子に奉仕して如此將軍と宰相とを相兼高官に成、厚祿を取、富貴にして故鄕に皈るは、人間の榮華なれば、昔も今も人の同く欲る所也、註【此四句―】此記の大綱を云と也、

蓋士方窮時、困阨閭里、庸人孺子皆得易而侮之、

【士】有志士也【窮】貧窮、まどしくつまりたるを云、【困阨】くるしみたしなめらる、困迫迷惑するを云【閭里】里門曰閭、又二十五家爲閭、五家爲軌、十軌爲里五十家共居止也、小き村也【庸人】凡庸常底の人也【孺子】史記留侯世家云孺子可敎、註、孺子猶言小童、わらはべ也、士たる者貧にして、在所に居て迷惑する時節には常人童子迄も輕んじ侮ると也、

若季子不禮於其嫂、（【史】蘇秦字季子、從鬼谷先生游、憔悴而歸、妻不下機、嫂不爲炊、後爲秦相、佩六國印歸、昆弟妻嫂側目不敢視、秦笑曰、何前倨而后恭也、嫂謝云、見季子位高金多也、）

買臣見棄於其妻、（朱買臣家貧、常艾薪樵賣以給食、妻羞之求去、買

至將相、富貴而歸故鄉下云、此人情之所榮而今昔之所同也、非此兩句、莫能承上句、此爲文之法也【迂曰】文字委曲、善於形容、

歐陽永叔

史記項羽本紀、羽曰、富貴不歸故鄉、如衣繡夜行、誰知之者漢書、繡作錦、師古曰、無人見之、不榮顯矣、又漢書朱買臣傳、上拜買臣會稽太守、上謂買臣曰、富貴不歸故鄉、如衣繡夜行、又魏張禹爲雍州刺史、太祖曰、還鄉本州、可謂衣錦晝行、又唐張士貴、虢州盧人、授虢州刺史、高祖曰、令卿衣錦晝游爾、宋の韓琦、字は稚圭と云人、仁宗に事へらる、相州の人なるが、即ち相州の太守と成て居る時に、吾園の內に堂を作て、其を晝錦堂と名付て、自ら詩を作れり、其詩に云、古人之富貴、歸於本郡縣、譬如衣錦遊、白晝自光絢、不則如夜行、雖麗胡由見云云、玆予來舊邦、意弗在務衒云云、公餘新此堂、夫豈事飲燕云云此詩の意は、古より榮とする所は、富貴にして故鄉に皈るが、人情の榮華也、假令ば錦を衣て白晝に遊ぶが如く也、富貴にして不歸故鄉は、夜の錦也、結構なれ共顯れざると也、是に因て此堂を建る也、然れ共誇衒て閭里にて奢るべき爲には非ず、此堂にて酒盛をして可遊と思ふにも非す、我故鄉に皈るのみに非す、剩へ守護と成て皈る程に、是は晝の錦也とて、堂に名付ると云り、歐陽永叔、韓魏公と知音なる故に、此堂の記を書り 注【唐子西】統譜唐庚、字子西、丹稜人、善屬文擧進士、累官承議郎、卒庚爲文精密、學者稱之、有文集二十卷、兄伯虎治易春秋、皆有家法、元祐初其父游瀘南、伯虎夜夢收父書、有丞來二字、明日即裹根趨瀘南、父果病甚、見伯虎大驚、是日疾少間、具舟、侍父皈、宋の唐子西語錄に、凡そ文を作るに、上の句重く云出して下の句の輕きは上の句に壓倒さるゝ樣にて、文も健ならず、此記の發端に、仕宦而至將相、富貴而皈故鄉と云出して、下の句に、此人情之所榮、而今昔之所同也と書たり、下の句足强くして、能上に承て甚た好、此下の兩句に非んば、上の句を承る事は有まじ、是文を書の法ぞと也【迂曰―】文字委く曲さにして、物の形どり樣善と也○靑松曰、此篇七段、首篇以下第一段、起兩句表人情之榮、蓋士以下第二段、論一介士蒙衣錦之榮、惟大以下第三段、論韓公素富貴、然則以下第四段、論公之功德之隆、公在以下第五段、論作晝錦堂之由、故能以下第六段、論公成就之大、余雖以下第七段、論作

不レ知二人之樂一、

然而注【應上】とは、如レ此はあれ共と云て、上の禽鳥の樂を承たり、決前生後の辭也、古文奇英註、然而禽鳥知二山林之樂一四句、應二上醉翁之意不一レ在レ酒【三轉收拾】萬里曰、滁人遊也、衆賓歡也、大守醉也、轉二此三一而收拾以飯二禽鳥一也三段に轉換し來て、此にて取收る也【禽鳥知―】鳥は山林の樂をば知れ共、人間の樂をば不レ知と也、

人知三從二太-守一遊而樂一、而不レ知二太-守之樂一レ其樂一也、此一截說二太守所レ樂之眞一【迂齋曰】無二此數語一、則前面許多鋪張、都無二合湊一矣、

人は太守に從て遊て樂める事をば知れ共太守の所レ樂の樂をば不レ知也、鳥の人の樂を知まじきと云たるは、是を云ん爲也、大學の小人樂二其樂一而利二其利一と云語に本づいて書り注【此一―】此段にて太守所レ樂の眞實を說出す也【迂曰無此―】此然而と云より下の數語を說ずは、前かど許多鋪張くばり置たる事、合湊とあはせあつめ、引結りあるまじきに、能收拾し了る也、

醉能同二其樂一、醒能述以レ文者、太-守也、

醉る時は、衆賓と樂を同ふし、醒ては能文章を書述る者は、太守也、

太-守謂レ誰、到レ此方說出 廬陵歐陽脩也、

注【到此―】此結句に至て、始て太守の姓名を云出す也【廬陵―】本國廬陵の人、歐陽脩ぞと也、廬陵は、在二江西吉州一、脩は名、字は永叔、詳に秋聲賦の註にあり、羅山曰、柳子厚梓人傳に、全篇梓人とはかり書て、結句にて其姓名楊潛と云、此篇其文體也、鶴林玉露云、江西自二歐陽子以二古文一起一レ於廬陵、遂爲二一代冠冕一、後來者莫二能與レ之抗一、其次莫レ如二曾子固、王介甫一、皆出二歐門一、亦皆江西人云云、如二歐公之文、山谷之詩一、皆所謂不レ向二如來行處一行者也、容齋隨筆曰、歐陽醉翁亭記、東坡公酒經、皆也字爲二絕句一、歐用二二十一也字一、坡用二十六也字一、歐記、人人能讀、至二於酒經一、知レ之者無レ幾云云、羅山曰、孫子行軍篇に、多く也字を書出せり今此文孫子に本けり、

○晝錦堂記

【唐子西語錄云】凡爲レ文上句重、下句輕、則或爲二上句一壓倒、晝錦堂記云、仕宦而

どの琴琵琶を彈、簫笛を吹事もある故也【射者ー】射は、弓を射る也、一説に、投壺也、其法禮記に詳也、奕は博奕、圍碁也、能射る者は的に中り能奕する者は勝也【觥】韻會、周禮小胥職云、觥其不敬者、註、罰爵也、韓詩云、觥、五升、所以罰不敬也、奇英註、觥、酒爵也、唐人會飲違酒令者、以籌記罰【籌】記輸贏之數者、一罰一籌【交錯】勝負相易故云、史記淳于髡傳履舃交錯射にも奕にも、負たる者には、罰盃を飲せ、其數を取が、互に勝負易れば、入交て起つ坐つして、聲高く言ひ笑てかしましきは、衆賓の醉て歡へる故也【諠譁】は、かしましきを云、

蒼顏白髮、頽乎其中間者、太守醉也、　此一截説下太守與衆賓同遊而醉上

【蒼顏】すゝけたる色也、愚謂く、老顏のあをぐろく成を云【頽乎】檀弓上云、拜而后稽顙、頽乎其順也、是は此に不合晉の稽康が醉如玉山頽と云を承て、此に書る也、蒼顏白髮なる人の、めたと醉て、其座中に打倒れたるは、太守の酩酊する也、蒼顏白髮は、翁字より云、實に年老て如此なるに非す、宋の仁宗慶曆五年乙酉、歐公三十九歲、杜韓范富以黨議罷、公上疏言之爲言事者所誣詔獄、坐左遷知滁州在任三年、同八年戊子去滁四十三知揚州、

已而夕陽在山、人影散亂、太守歸而賓客從也、

終日宴をして、漸く暮んとする時分にて、日か山の端に掛るほどに、人影も散亂し、ちろ〳〵とする也、大守も去來と云て、我家指て皈れば、賓客も相隨て返ると也、

樹林陰翳、鳴聲上下、遊人去而禽鳥樂也、　生下

【陰翳】青松曰、日暮林木陰翳日巳に暮れば、林木も次第に昏く成、鳥も栖宿する時分なれば、來り集つて、鳴聲上下に聞へ、遊人去しかば、鳥己が儘に宿して、人恐しひ共不思樂むと也【注】【生下】此段下の句を引起す也、

然而　應上〇三轉收拾　禽鳥知山林之樂而

前者呼、後者應、傴僂提攜、往來而不絕者、滁人遊也、

此一截說下滁人同樂ニ於此亭ニ意上【迂云】狀シ物之妙、無シ以復加ニ

【負者】とは、薪や米やなどを背に負る者也【行者】は、ありき行往來の人也、背に物を負る者は、道すがら歌を歌ひ、通り行者は、樹の下に息む也【前者—】前に立て行者呼れば、後に行者相應る也、莊子齊物論曰前者唱于而隨者唱喁【傴僂】青松曰、背屈伏行也、せゝぐまると讀り、背蟲と云病あり、其樣にあるを云、老たる人も亦背曲り行也、今は負者を云べし【提攜】青松曰、相牽相執也、ひつさげたづさふる也、手を引れつ、手を取相て行を云、今は行者、及び前呼後應に係て可看【往來不絕】とは、往來る者の斷間も無を云、羅山曰、是は滁州の人の遊山して、此亭へ往來する體を云也、愚案するに、負者行者の類は、必しも遊山の人に非す、蓋し此山中往來の人を、推籠て遊と云也【迂【此一—】滁州中の人、同く此亭へ往來して樂むと也、愚案するに、同樂於此亭とは、或は此亭に來て遊ひ、又上り遊ばね共、此を往來して、亭を望て喜ふ者多ければ、人と共に樂むの意ある也【迂云—】物を狀り出す妙處、此上に一點も加る事無と也、

臨溪而漁、溪深而魚肥、釀泉爲酒、泉香而酒冽、山肴野蔌、雜然而前陳者、太守宴也、

琅琊の溪川に臨て漁をするに、溪深して魚も肥たる也、釀泉を汲て酒に醞し作れば、泉甘香にして酒清冽也【山肴】山より出る肴也【野蔌】爾雅、菜謂之蔌、詩、其蔌維何、註、謂菜殽、野より出る可食艸菌の類也【雜然】打雜はりたるを云【前陳】は、客人の前に並へ置也、云心は、大守結構なる物を不用して、箇樣の物共を取雜へ、酒宴をする也、

宴酣之樂、非絲非竹、射者中、弈者勝、觥籌交錯、起坐而諠譁者、衆賓歡也、

【宴酣—】如此酒宴をすれ共、管絃などはせぬと也、管絃は音樂なれば、男の玩ふべき物なれ共、亦妓女な

若夫日出而林霏開、雲歸而巖穴暝、晦明變化者山間之朝暮也、

霏は雰也、朝霧を云、又雨の後などに、霧の樣に靉く氣也、羅山曰【林霏】とは、山や森やなどに懸るそびき物を云、其か日出て暖になれば、散ずる程に、開と云也、是は朝の景也【雲皈】とは、夕陽の時分に、雲が岩穴や洞谷へ皈り入程に、岩穴昏く成也、是は晩景を云、然れば此亭より山間の朝暮の景、一日の內に明なる時あり、暗き時あり、變化すると也、愚謂く、日出の句は、明也、雲皈の句は、晦也、朝暮に變化する也、但し又朝昏く夕明なる時もあり、晝晴る事も陰る事も有べし、山間の朝暮晦明變化不常義もある歟、

野芳發而幽香、佳木秀而繁陰、風霜高潔、水落而石出者、山間之四時也、

【野芳】は、山野に花開つれて香ふ程に、幽香ありと云也、是は春の景也【佳木】は、青葉茂り、高く秀て、木陰も多き程に、繁陰ありと云、是は夏の景也【風霜―】風高く吹、霜冷じく潔き程に、高潔と云、是は秋の景也【水落―】溪水減涸る程に、石現れ出と云、是は冬の景也、以上此山の間の、四時の風景、面白事を云也、宋景濂文集第三、琅琊遊記、云云因取醉翁亭記中語、風露高潔、水落石出字、爲韻、各賦一詩、授王僧紹廣刻詩山石云云、又東坡後赤壁賦にも、此水落石出の四字を取用て書り、

朝而往、暮而歸、四時之景不同、而樂亦無窮也、

此一截說朝暮四時景象、前開說、后總說歸於樂處、

【朝而往暮而歸】とは、上の山間之朝暮の句を承て云【四時之景不同】とは、上の山間之四時の句を承て云也【樂亦―】とは、如此朝暮四時の景色に變化する故、其樂み窮り無と也、注【此一―】此段朝暮四時の風景形象を云也、前には朝暮四時の景を分て云立、此には引結りて云、畢竟我樂む處に皈入すると也、

至於負者歌于塗、行者休于樹、

【回】は繞也、取廻したるを云、又廻轉也、路の羊腸なるを云【轉】は折轉也、道の九折なるを云、古詩に、路轉山腰三百曲と云是也【翼然】は、鳥の羽を張たる様なると也、琅琊山の峯回り路轉て、上り行けば有亭、其亭翼然として、釀泉の上に懸作にして有は、即ち翁醉亭也注【此一—】此段は亭を云、

作亭者誰、山之僧智僊也、

此亭をば、誰か建たるぞと云へば、此山の僧智僊也、臨濟六世汾陽善昭、其嗣琅琊惠覺、其嗣琅琊智遷、詳見五燈會元十二、僊と遷と通す、

名之者誰、太守自謂也、【迂曰】未說破姓名、

此亭を誰か醉翁亭と名付たるぞと云へば、此處の太守の自號を以て、直に名付たると也注【迂曰—】太守の姓名を誰共未云、是文の妙處也、

太守與客來飲于此、飲少輙醉、而年又最高、故自號曰醉翁也、

此一截說作亭名亭之由、

太守と諸方の客人と、此亭に會して飲酒也、太守下戶にて、少飲ども即ち醉、其中にて年又最も老たる故に、自ら醉翁と名付と也【年高】は、齡のたけたるを云、白樂天始て我事を醉翁と云り、歐陽公取て自稱とす、公が詩に、我昔被謫居滁州、名雖爲翁實少年【注】【此一—】此段には作亭と、亭に名づけたるの由來を說也、

醉翁之意不在酒、在乎山水之間也、山水之樂、得之心而寓之酒也、此一截說其樂在山水、與前面相應、

太守醉翁とは云共、意は强ちに酒ばかりに不在、意は山水風景の間にあり、酒はかこつけ物に飲までにて、只山水を玩ふ爲也【得之心】とは、山水之樂を我に會得する也【寓之酒】酒に事よせかこつくる也、論語に、知者樂水、仁者樂山と云を、底心に含て書り、莊子の輪扁が輪を斲る時に、得之心而應之手と云句法也注【此一—】此段には山水を樂む事を云、上の文と相照映すと也、

何方なり共、何を環て皆山と云へば、四方に有山と知也、蘇伯衡が皆山樓記楊誠齋が皆山閣記の類是也、朱子語錄曰、六一之文、一唱三嘆、今人是如何作文、有人見歐陽公醉翁亭記艸、前有數十字、序滁州之山忽大圈了、一邊注環滁皆山也一句、此發端に、初は字多く有しを、歐陽淸書の時に、削て此五字許りを殘されしと也【注】【一句—】此一句に、許多の理を包み入たる事ありと也、

其西南諸峯林壑尤美、望之蔚然而深秀者琅琊也、此一截說山、

滁の西南に諸の峯や林岳や有て、一段景の佳處あり、其方を望見れば、蔚然としげりて、深く秀たる山あり即ち琅琊山也、【蔚】字彙茂也、詩曹風、薈兮蔚兮、方輿勝覽曰、琅琊山、在淸流縣南十里、有琅琊洞、舊經曰、晉元帝爲琅琊王、避地于此、曾子開滁州集序、泉石林亭之勝、至聞天下、顧況詩、東晉王家在此溪、南山樹色隔窻低、碑沈字滅昔人遠、谷鳥猶向塞花啼【注】【此一—】此段には、滁州の山の體を云也、

山行六七里、漸聞水聲潺潺而瀉出于兩峯之間者、釀泉也、此一截說水、

呂元中記曰、歐陽文忠公、以右正言知制誥、謫守滁上、明年得釀泉於醉翁亭之東南隅、一日會僚屬於州廨、有以新茶獻者、公勅吏汲泉、未至而汲者仆出水、且慮後期、遂酌他泉以進、而公已知其非釀泉、窮問之、得紫微泉於幽谷下、文忠博學多識而又好奇、既得是泉、乃作亭以臨泉上、名之曰豐樂、當時名公宿儒、皆爲賦詩以紀其事、由是紫微泉始盛聞於天下、琅琊の山六七里行けば次第に水の聲を聞、唐土の六里、日本の三十六町一里許り也【潺潺】は、水聲也、淸潔なる泉、琅琊の二つの峯の間より瀉出るあり【釀泉】釀は、かもするとて、酒を作る事也、此水酒を作るに、佳故に名付る也【注】【此段—】此段には、水を云也、

峯回路轉有亭、翼然臨于泉上者、醉翁亭也、此一截說亭、

亭と名付て、其に書る記也、年譜、仁宗慶暦五年、公年三十九歳、出知滁州、西淸詩話曰、歐公守滁陽、築醒心醉翁兩亭於琅琊幽谷。〔注〕【陳后山】萬姓統譜、陳師道字無已、彭城人、少刻苦問學、高介有節、安貧樂道、諸經皆有訓傳、於詩禮尤邃、其爲文師曾鞏、爲詩宗黃庭黃、平淡雅奥、自成一家、元祐中蘇軾薦其文行、除本州教授、累遷秘書省正字、陳后山は、名譽の人也、山谷と智音也【記者—】陳后山此文を評して云、記は、其事を有の儘に記する故に、記と云、然るに、今時の人の記を書は、中に問答などを書程に、論と云べきぞと也【歐公此記—】此醉翁亭の記は、只其事を有のまゝに書れたる程に、自然の文法にて有ぞと也、案ずるに、是は后山談叢の說也【少游】統譜秦觀、字少游、高郵人、長於議論、文麗而思深、元祐初蘇軾薦于朝、除大學博士、遷國史院編修官、坐貶、有淮海閒居集【醉翁—】宋の秦少游と云人此記を評して云、此記は賦の體を用て被書たると云り【信矣】とは、能見れば、信に賦の體も有と也〇迂齋古文訣十八、醉翁亭記評云、此記所謂筆端有畫、又如累疊階級、一層高一層、逐旋上去、都不覺、黃氏日抄曰、醉翁亭記、以文爲戲者也、文選句解曰、此篇直記其事而文出自然、一筆揮就、全無斧鑿、源流至論曰、醉翁亭記未免有賦體之累、歐公此記特戲筆耳、蓋不自以爲奇也、滁陽郡志曰、記成刻石、遠近爭傳、疲於模打、山僧云、寺庫有氈、打碑用盡、至取僧堂臥氈給用、凡商賈來供施亦多求其本、所過關征、以贈監官、可以免稅、呂氏童蒙訓曰、老杜詩云、新詩改罷自長吟、文章頻改、工夫自出、近世歐陽公爲文、先貼於壁、時加竄定、有終篇不留一字者、宋景濂張翠屏集序曰、歐陽氏之文、如澄湖萬頃、波濤不興、魚鼈潛伏而不動、淵然之色、自不可犯、萬里曰、此篇十一段、自篇首至琊也第一段、自山行至泉也第二段、自峯回至亭也第三段、自作亭至翁也第四段、自醉翁至酒也第五段、自若夫至窮也第六段、自至於至遊也第七段、自臨溪至醉也第八段、自已而至樂也第九段、自然而至樂也第十段、自醉能至末第十一段、

環滁皆山也、（一句包容有之、）

慶暦前集跋云、滁陽、古名郡、群峯環於西南、清溪注於東北、滁州は、四方に大山取廻したる處也、此文より

明月時至、淸風自來、

明月有時て至り、淸風も自ら吹來る、隱君子の面白き樂也、

行無所牽、止無所柅、女履反 耳目肺腸、卷爲己有、踽踽焉、洋洋焉、

孟子梁惠王下篇曰、行或使之、止或尼之、行止非人所能也、集註、尼、女乙反、柅通、此註には、柅、女履反、我行たふもなき處へ行は、牽れて行也、止りたふもなき處に留るは、止められて留まる也、溫公は否な處へは不行程に、行も引るゝ所なき也、止りたき處に止る、人に止らるゝには非ずと也【耳目―】體をも總て我物にして有ぞと也、耳目は屬形、肺腸は屬心、愚謂く、四字不可分別、猶言一身、論語衞靈公篇、可卷而懷之、集註、卷、收也、云心は、一身全體取放たずして、卷收て我所有とする也【踽踽】毛詩、獨行――、註、獨行貌【洋洋】論語、洋洋乎盈耳哉、註、盛大貌、萬里曰、踽踽二字、在獨字上、洋洋二字、在樂字上、羅山曰、獨り園中を行くは、至大の樂也とぞ、愚謂く、踽踽と獨行て、顧み憚る所なく、洋洋と心廣して無所礙也、

不知天壤之間、復有何樂、可以代此也、

【天壤】天地也、溫公意らく、天地の間に、復何の樂か、我此園中の樂に代べき事有ことを不知、恐らくは有まじきと也、

因合而命之曰獨樂、

是に因て、前の樂共を取合せて、園の名を獨樂と云也、此樂を他人は不知して、溫公獨り樂む程に云也、獨樂と云字は、孟子に出たり、其は君一人安樂を極めて、民を苦しむるは、滅亡の基也、此溫公の獨樂は、道を悟り得て、心に樂み有は、人は知ねども、我獨り悅ひ樂む處を云也、

○醉翁亭記　歐陽永叔

【陳后山云】記者、記其事耳、今之記、乃論也、歐公此記、直記其事、而文出自然、少游謂醉翁亭記、亦用賦體、信矣、

是は歐陽永叔滁州に守護たりし時に、亭を建て、醉翁

可者學之末、至夫可何求於人、何待於外哉、

可は、佳也、よき事を云、可事をば學て我物とし、其未だ可に至らぬをば、何ぞ人に求て學ん、又何ぞ不自知して、外に向て問んや、待は、人を待也、羅山曰、よき程に至らぬをば不學、心の樂は深き程に、何事をか人に求め、此外に何事をか樂み有と思て、外の事を求め待べきや、是に易る樂は有まじきぞと也、是迄は溫公讀書の樂を云述る也、

志倦體疲、則投竿取魚、執衽采藥、決渠灌花、操斧剖竹、濯熱盥水、

志氣倦怠、支體、疲勞、退屈し困るゝを云、何にても退屈してくたびるれば、園中の水邊に遊び、釣竿を水中に投出して魚を取て樂とする也、釣魚菴を指云【執衽―】詩芣苢篇、采采芣苢、薄言袺之、傳、袺、執衽也、疏、衽者、裳之下也、集傳、袺、以衣貯之而執其衽也、衣のもすそに藥を采入て、衽を執持也、羅山曰、衣のすそを褰て、藥を作たる圃へ出て、藥を取て樂む時もある也、青松曰、暗謂採藥圃也【決渠―】決は、塞る所をさぐり通ずるを云、渠をさらへ通じて、水を圃へ引、花に灌て樂とする時もあり、青松曰、謂澆花亭也【操斧―】をのまさかりを持て出、竹藪の邊へ行て、竹の茂り過て、山などを蔽す處をば、透して樂む時もあり、愚謂く剖とあれば、竹をわりて、筧の樣なる事に用る歟、種竹齋を指云【濯熱―】濯熱は、毛詩の語也、萬里曰、濯熱は、濯足也、盥水は、洗手也、暑き時分には、川の邊に出て、顏を洗ひ、手水鵜飼などして樂むと也、指弄水軒、

臨高縱目、逍遙徜徉、惟意所適、

【臨高―】園の內の小高き處に上て、低きに臨み、縱まゝに見渡す也、指見山堂【逍遙】詩小雅、於焉逍遙、字彙、翺翔自適貌、心任せに行き廻るを云【徜徉】猶徘徊便旋也、たちやすらふ、たちもとをる、彼方此方を靜に慰み行きて、優游自在、只意の安んずるまゝに隨ふ也、

在陂澤、其與民相忘也久矣、而名震天下、如雷霆、如河漢云云、山谷跋司馬温公與文潞公書云、司馬公天下士也、嘗觀温公資治通鑑草、雖數百卷、顛倒塗抹、訖無一字作艸、其行己之度蓋如此、温公は、宋の英宗神宗に事へ、宰相として天下の政務を執行はる、王荊公が悪き政まで、天下困窮したる所に、哲宗の初に、温公復出て、百姓死して甦る心あり、久旱に甘霖を得たる如くなれば、人參甘艸とも、藥師とも云て喜びたり、名譽の人也、涑水先生と號す、門下侍郎左僕射として、政をする事一年、元祐元年に薨せり、

迂叟平日讀書、上師聖人、下友群賢、窺仁義之原、探禮樂之緒、

温公不斷書を讀て、獨り樂む也此文は前後に辭長く有しを切て除、獨樂の理を書たる所ばかりを載る也、是此文の見様也、今讀書と云は、讀書堂なるべし【上師—】堯舜禹湯文武周公孔子の如きの聖人を師匠とする也【下友—】顔子曾子など、孔門の群賢、及び子思孟子などの類を、書中に於て友とする也【窺仁—】書を讀て、仁義の根源を窺ひ視、禮樂の端緒を探尋ると也、唐の狄仁傑誦書不置、曰、黃卷中方與聖賢對、何暇遇俗吏語耶、仁義禮樂の義は、論語孟子、幷に禮記大全に詳也、【原】は源と通す、水の所出也、みなもとゝ訓す、【緒】は端倪、蚕の絲の小口初頭を云、羅山曰、仁義は、心に所具の仁義也、禮は、心の敬より形に現はるゝ所の禮也、樂は、和の理の現るゝ所也、緒は、次第の筋目也、此道を窺ひ探て知ほどに、師聖人友群賢ぞと也、

自未始有形之前、曁四達無窮之外、事物之理、擧集目前、

莊子曰、有始也者、有未始有始也者、有未始有夫未始有始也者【自未始—】は、是太極而無極、混沌未分の時、萬物未生の前也【四達—】は、四方通達して、廣大無邊の外を云、言心は、廣く古今の書を見れば、天地未開、萬物未生の前より、四方に通達して、無窮の外迄、萬事、萬物の道理、悉く目の前に集まる、

第四段、擧獨與衆樂幷焉○事文類聚續集、載獨樂園記云、孟子曰、獨樂樂不如與人樂樂、與少樂樂、不如與衆樂樂、此王公大人之樂、非貧賤者所及也、孔子曰、飯蔬食飲水、曲肱而枕之、樂已在其中矣、顏子一簞食、一瓢飮、不改其樂、此聖賢之樂、非愚者所及也、若夫鷦鷯巢林、不過一枝、偃鼠飮河、不過滿腹、各盡其分而安之、此乃迂叟之所樂也、迂叟始家洛五年、爲園其中、爲堂聚書五十卷、命之曰讀書堂、迂叟平日多處堂中讀書云云、命之曰獨樂、或咎迂叟曰、吾聞君子所樂必與人共之、今吾子獨取於已、不以及人、其可乎、迂叟謝曰、叟愚何德比君子、自樂恐不足、安能及人、況叟之所樂者、薄陋鄙野、皆世之所棄也、雖推以與人、人且不取、豈得强之乎、必也有人肯同此迂、則再拜而獻之矣、安敢專之哉、漁隱叢話後集二十二、余讀迂書、見溫公自於書中或稱迂夫、或稱迂叟、蓋通稱之也、釋迂云或謂迂夫曰、子之言太迂、於世無益也、迂夫曰、子知迂之無益、而不知迂之爲益、且大也、子知迂之有益、而不知其爲損亦大也、子不見夫樹木者乎、樹之一年而伐之、則足以給薪蘇、二年而伐之、則足以爲桷、五年而伐之、則足以爲楹、十年而伐之、則足以爲棟云云、東坡司馬溫公獨樂園詩、見眞寶前集、山谷集有司馬君實挽詞、

司馬溫公

宋史列傳九十五有傳、東都事略列傳七十上之下、司馬光、字君實、陝州夏縣人也、父池有傳、光爲兒童時、凜然如成人、七歲聞講左氏春秋、大愛之、退爲家人講云云、詔肩輿至內東門、子康挾入對小殿、薨于位、年六十八、贈太師溫國公、謚曰文正、御篆其碑曰、淸心粹德、言行錄後集第七、司馬光、溫國文正公、字君實、文詞醇深、有西漢風、神宗卽位、首擢公爲翰林學士、公乃辭不受、上面諭公、古之君子、或學而不文、或文而不學、惟董仲舒、揚雄兼之、卿有文學、何辭爲、公曰、臣不能四六、上曰、如兩漢制詔可也、公嘗問康節曰、光何如人、曰、君實、脚踏實地人也、公深以爲知言、康節又曰、君實九分人也、蘇內翰軾作公神道碑銘曰、公如麟鳳、不摯不搏、事林廣記後集、程明道嘗曰、君實之言、如人參甘艸、東坡司馬公神道碑曰、方其退居於洛、眇然如顏子之在陋巷、累然如屈原之

云、此宴に集る人の名を列ね敘て、各其所述の詩を錄すと也、王羲之、謝安、謝萬、孫綽、孫緒、孫統、徐豐之、王彬之、王凝之、王肅之、王徽之、袁嶠、已上十二人、各賦詩二首、郄曇、王、豐之、華茂、庾友、虞說、魏滂、謝繹、庾蘊、曹茂之、曹華、桓偉、王玄之、王蘊之、王渙之、孫嗣、已上十五人、各賦詩一首、謝瑰、卞迪、丘旄、王獻之、楊模、孔熾、劉密、虞谷、勞夷、后綿、華耆、任凝、謝藤、呂系、呂本、曹禮、已上十六人、賦詩不成、罰酒三觥、合四十三人、羅山解大誤、恐惑觀者、故除去之、

雖世殊事異、所以興懷、其致一也、

靑松曰、其今之興懷於古、與後之興懷於今者、致一也、致字、勝覽作揆、世こそ替れ、事こそ別なれども、今日古を想て感を成も、後代今を思て懷を興すも、其旨致は一同也とぞ、

後之覽者、亦將有感於斯文、此一截極言死生之變、使後人觀此文之終、而意愈無窮也、

後世の人、此記の見ば、亦必ず此心を感ずる事有んとて也註【此一截】此段至極生死の變化を言て、人をして此文の終を見て、意思愈盡窮る事無らしむると也、句解曰、亦必有感慨於斯文之所云者、嘆傷之甚也、靑松曰、嗚呼世人之凡享其樂事、誰復思其變處、今逸少嘗蘭亭樂事之集而感慨、如其胸襟夷曠、發而爲文、至今使人興懷、豈特死生猶夢幻乎、

○獨樂園記

司馬溫公、自號迂叟、其退居適意於園圃、眞樂如此、

此獨樂園は、司馬溫公洛陽に在て、天子に仕へ、奉公の際に園を作て、其名を獨樂と云り、朝廷より退て、園圃の內を廻りて遊び樂むは、眞實の樂ぞとて、斯名付らるゝ也註【自號迂叟】史記孟軻列傳云、迂遠濶於事情、迂は、迂曲迂遠とて、道の曲て遠き義、近路に早き事を不好とて、白樂天迂叟と云事を云、溫公其に本ついて自號とせり【退居】朝廷より退き罷て、家に居る也【適意】は、心を安んし自得する也○讀書堂、弄水軒、釣魚菴、種竹齋、採藥園、澆花亭、見山堂、在獨樂園中○萬里曰、此篇四段、自篇首至之緒第一段、擧獨樂總論、自自末至外哉第二段、擧獨之事也、自志倦至已有第三段、擧樂之事也、自踽踽至末

羲之昔の人の感慨を興すの所由を見る毎に、我心と無二相違一事、割符を合せたるが如しと也、昔人興レ感を、湖月、羅山、共に上の古人云、死生亦大矣と云に係て見る、恐らくは誤也、只何事に付ても、感の興るを云べし、曲禮、執二右契一註、兩書一札、同而別レ之【未嘗不臨―】上の句に因て看る、言ろは、古人の感を興して書置たるを見て、能我心に合ふ程に、其文に臨は毎に、嘆息せざる事なし、嗟き悼みても無レ由事なれ共、其を心に曉喩して、異見し止る事能はずと也、羅山曰、文を書とて、今嘆き痛まぬと云事は有まじき也、今昔變化の移り易きを嘆く也、是を我心に曉らざらんやと也、愚謂如二湖月等一不レ足二深辨一、羅山則博覽强記、有レ時亦如レ此、可レ惜、

固知一死生一爲二虛誕一、齊二彭殤一爲二妄作一、【莊子】齊物論、天下莫レ大二於秋毫之末一、而泰山爲レ小、莫レ壽二於殤子一、而彭祖爲レ夭〇殤、未レ成レ人而死者也、

【虛誕】は、皆いつはり也【彭殤】彭祖が長生、殤子の短命也【妄作】俗に云むだこと也、羲之云心は、生死不二と云、短長不異と云は、皆僞り妄なる事也、生は死に勝り、長は短に勝れり、只生る間喜び有て、老の至るをも知らぬこそ、大きに勝れりと云義也注【莊子―】天下に兎の毛の尖ほど大きなる物はなく、泰山ほど小き物はなし、何となれば、至極微きなる者は、一向に無レ名、已に秋毫と云あれば、兎の毛にても、微塵にても大也、泰山は至て大なる山也と云共、天地の廣大に比べて見れば小きと也、彭祖は八百歳迄長生すと云共、其も不レ變者より見れば、短命也、殤子は幼少にて死る者を云、殤子命短しと云共、蜉蝣槿花などより見れば、亦命長しと云也【殤未成―】年自二十九一至二十六一死爲二長殤一、十五至二十二一爲二中殤一、十一至二八歲一爲二下殤一、已下爲二無服之殤一、生未二三月一不レ爲レ殤、

後之視レ今、亦猶二今之視一レ昔、悲夫、

前漢儒林傳、京房傳云、后之視レ今、猶二今之視一レ前、云心は、後の世の人、今日の蘭亭記を見る事、今我古文を見て、感慨を興すが如くなるべしと也【悲夫】は、歎ずる辭也、

故列二敍時人一、錄二其所一レ述、

靑松曰、列二敍一時蘭亭所レ集之人一、錄下就二其所レ作之詩一

及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣、

青松曰、及人之所樂已厭也、羅山曰、其志の往處に饜心出來て困るれば、少の事に隨て、人の情移り易き也、然れば今迄したる事、早過去て、昔に成と思ふ程に卻て感慨起る也、愚謂く、王子猷か乘興而往、興盡而還るの類、否と思ふ所に感慨係る也、羅山の昔今の義、下の句に能相應する樣なれ共、其にては、下の尤不能不以之興懷の句に重複せり、必しも其に不拘して、只情隨事遷に因て、感じ慨く事起るとすらりと可見歟、能可味看、

向之所欣、俛仰之間、以爲陳迹、尤不能不以之興懷、

【向】は、向往也、前事過去を云【俛仰之間】俛、美辨切、說文、俯也、前漢晁錯傳、在俛卬之間耳、師古曰、俛、亦俯字、卬、讀曰仰、頭を俯仰ぐの間は、暫時を云【以】勝覽作已【陳迹】ふるきあと也、出莊子、前に喜て所爲の事、首を回すの間に、已に昔に成、是を思へば、感懷を興さゞる事能はずと也、尤字、文選句解作猶、

況脩短隨化、終期於盡、古人云、死生亦大矣、豈不痛哉、

【脩短】壽夭也【化】字彙、天地寒暑晝夜、皆造化所爲也、又自少而壯、壯而老爲變、自無而有、自有而無爲化【期】期必也、又限也【盡】謂死也、況や老少不定にして、造化のする所に隨て、遂に皆必ず命盡るに期するをや、誰か取外しても活殘る者有んや、莊子德充符篇曰、死生亦大矣、而不得與之變、林希逸註、言死生之變大也、古の人も、人の生死ほど大なる事は無ぞと云し、何ぞ是を痛み悲まざらんやと也、佛書に生死事大、無常迅速と云も、同意也、

每覽昔人興感之由、若合一契、未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懷、

之內、老子の不出戸、知天下の義也、愚謂く、俗本に晤字を悟とする故に、句解の註大に誤る、羅山も亦襲其誤、案ずるに詩の陳風に、可與晤語、毛傳、晤、遇也、鄭箋、對也、アヒカタル也、言心は、或は我心に抱く所に取て、一室の內に對語する也、勝覽及び萬里の說可爲是【因寄所託】句解云、寄興托物之所寓、湖月云、興を物に託する也、羅山曰、何なり共、己か所作を事に寄る也、愚謂く、山水艸木、鳥獸魚蟲、琴碁書畫等に、心を託し、興を寄る也【放浪―】句解、放縱流浪、不拘形骸、湖月云、興を物に託して、形を忘れた意也、羅山曰、我身をほしひまゝにして、世を經る也、形骸之外と云字、莊子に出たり、形を云也、形骸之內と云時は、心を云、此にても、上の句は心を指、下の句は形を指也、愚謂く、云心は、其すき好む所に貪著して、心を身外に忘る也、放浪は、ほしひまゝにみだりなる也、形骸は、かたちかばね也、

雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、曾不知老之將至、

趣は、趨と同し、史記伯夷傳、岩穴之士、趨舍有時、正義曰、趨、向也、捨、廢也、王褒聖主得賢臣頌註銑曰、趨、進、舍、退、羅山曰、人人の心、取事あり、捨る事あり、愚謂く、心の趨き奔り向ひ進むは、皆我好む所なれば也、舍は、否なる也【萬殊】は、種種に異なるを云、陸機文賦曰、體有萬殊、物無一量【靜躁―】人の心靜なるあり、躁かしき有て、其等同からず、躁は、動の心也【當其欣―】句解曰、正說人之樂事方當情與物會、適然有得、心思と事物と相合ふ事を喜ひ、聊も我に自得するに當ては、快然と心よく自ら滿足して、身事を打忘て、曾て老の至るをも不知と也、夫人之相與と云より是迄、人間の所思所爲、萬殊不同なれ共、喜ばしき事に遇ては、心足て何をも不覺也、碁を圍者の、首に火の著たるを不覺が如し、不知老之將至は、論語述而篇、孔子の語也、曾字、義之か正筆にはなし、大事の手本なる故に、續目に印を推たるを、見誤て曾字落たるかと思ひ、寫す者書入たる也、曾字の無か、文も勝たると也、

竹管絃之句、語衍而爲逸少之累耶、

是日也、天朗氣清、惠風和暢、

今日天氣好、清明に晴度り、春風和らかに吹、舒暢とのび〱として、嚴く寒からざる也、青松曰、春風施惠萬物、和而且暢、愚謂く、惠は、惠順、和かに順ふて吹風なるべき歟、張燧千百年眼曰、文選不收蘭亭、議者謂天朗氣清、自是秋景云云、不知天朗氣清、固有所本、三春之季、天氣肅清、見蔡邕終南山賦、熙春寒往、微雨新晴、六合清朗、見潘安仁閒居賦、仲春令月時和氣清、見張平子歸田賦、安可謂春間無天朗氣清之時耶、又董份曰、天朗、謂天氣晴朗、春秋皆有之、以暮春清明節、謂氣清可也、春を清和の節、清明の節など丶云事あれば、天朗氣清は、只今日の景氣なるべし、

仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以遊目騁懷、足以極視聽之娛、信可樂也、巳上言蘭亭景物之美、

仰觀俯察の四字は、易の上繫辭に出たり【宇宙】は、天地古今を云、詳に滕王閣序の註に見へたり【品類】は、艸木鳥獸を始め、萬物を指て云、打仰ひて天地古今の廣大なるを見、打俯て萬物の多を見れば、天地より人の目を遊し喜ばしめ、思を馳行しめん爲の樣也、春は其其の色聲を現して、面白き程に、耳に聞鳥の聲、目に見る花の色、艸木の綠、山水の體、皆我視聽の樂を極むるに足れり、大方に玩ぶべき事に非ず、信實に娛むべき事ぞと也、信字可著心也注【巳上言一】此地と云より是迄、此處の景物の見事なる事を云、

夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外、

是より人の一生涯、世間に俯て見、仰て見、與に乘じ、懷を暢る事を云【取諸懷抱】羅山曰、萬事を心に通ず、愚謂く、心中に思ふ所より、取出す也【悟言】句解曰、覺悟而言、不過一室、方輿勝覽に載此序、悟字作晤、萬里曰、晤言、蓋晤語之義而熟、悟字似不熟歟、羅山曰、不出我家して、天下の事を悟るに、不出一室

四十餘人、何れも皆賢人也、或は年少きものあり、或は年老たるもあり、親子づれ、兄弟づれで出るもある故也、宋景濂文集第三、蘭亭觴詠圖一卷、相傳爲李公麟所畫、觀其運意狀物、極有思致、似非公麟所能云云、

此地有崇山峻嶺、茂林脩竹、又有清流激湍、映帶左右、引以爲流觴曲水、【晉】武帝問三月曲水之義、東晳對曰、昔周公城邑、因流水以汎酒、逸詩云、羽觴隨波、

【此地】は、蘭亭の地也【崇山】は、高山也【峻嶺】は、さかしきみね也【茂林】は、しげるはやし也【脩竹】は、ながきたけ也【清流】は、よき流水也【激湍】は、みなぎる瀬也、此蘭亭の地は、山水の境致如此なる處、左右に遶りて有ほどに、此流にて曲水の宴をすべき處ぞと地景を云立る也【映】は相映照する也、互にうつろひ合也【帶】は、引連る意【流觴――】曲れる溪水に觴を浮べ流して、詩を作て、酒を飲遊ぶ也【注】【晉武帝】名は炎、西晉の第一主、廟號を世祖と云、司馬懿が孫、昭が子也、武帝三月三日、曲水の宴は、何の子細より始つてする事ぞと被問ければ、東晳と云臣申す樣には、昔し周公旦、洛陽に都邑を立、渭水を引て曲水の宴をし給ひしより、此事起れりと答ふ【逸詩】逸は、脱也、はづるゝ義也、毛詩三百十一篇の外を云【羽觴】文選班婕妤賦、酌羽觴兮消憂、孟康曰、羽觴、作生爵形、有頸尾羽翼、觴を雀の形に作り、頸尾羽翼具はる故に羽觴と云也、

列坐其次、雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敍幽情、

【列坐】は、つらなり居る也【其次】とは、位次を正して坐する也、昔の遊宴には、妓女を集め、琴を彈、笛を吹などしたると云共、此會には管絃の盛なる事なし、然れ共酒を飲み、詩を作て、幽靜にふかくしづかなる情思を、暢敍とのぶる程に、不足も無ぞと也【一觴一詠】一詩を作て、一觴を飲也、前漢書列傳五十一、張禹身居大第後堂、理絲竹管絃、句解曰、遯齋云、絲竹管絃、語亦重複、愚謂一句之中、錯文見意、非重複、王羲之蘭亭敍、世言昭明不入文選者、以其天朗氣清、或曰、楚辭云、秋之爲氣、天高而氣淸、似非清明之時、然絲

亭、脩禊事也、〔韻語陽秋云〕上巳於流水上洗濯祓除去宿垢、謂之祓禊、禊者、潔也、
論語先進篇曰、莫春者、春服既成、集註、莫春、和煦之時【暮春】は、三月なる故に云【初】は、三日なる故に云、晋書束晳傳、武帝問尚書郎摯虞曰、三日曲水、其義何指、答曰、漢章帝時、平原徐肇、以三月初生三女、別傳云、後漢有郭虞、三月上巳產二女、至三日俱亡、一村以爲怪、乃相攜之水濱盥洗、遂因水以泛觴、曲水之義、起於此、帝曰、若如所談、便非好事、尚書郎束晳曰、仲治小生、不足以知此、臣請說其始、昔周公城洛邑、因流水以汎酒、故逸詩云、羽觴隨流、又秦昭王以三日置酒河曲、見金人奉水心之劒、曰、令君制有西夏、覇諸侯、因此立爲曲水、帝大悅【會于―】王右軍會稽の守にて有し程に、三月三日に、山陰の蘭亭に往集つて、禊の事を修し行ふたる也【會稽】方輿勝覽第六、浙東路紹興府會稽郡註、史記、會計也、吳越春秋、會計脩國之道、因以名山、綱鑑補註云、會稽、山名、在紹興府城東南、本は越の國也、其山にて、國を治るの道を會して計る故に、會稽と名付る也【山陰】勝覽云、秦始皇移在會稽之北、故曰山陰、會稽山の北にある所なれば、山陰と云、陰は、北也【蘭亭】勝覽、在山陰縣二十五里、越絕書、勾踐種蘭渚山、舊經曰、蘭渚山、勾踐種蘭之地云云、天章寺有曲水【修】字彙、飾也、理也、修行とて、其事を善やうに修め行ふを云【禊事】周禮、女巫掌歲時以祓除病、禊事とは、流水の邊にて、身を清めて祓をする也注【韻語―】三月上の巳の日に、流水の邊にて洗濯すとて、身を清め、垢を洗ひ落して、禊の事を修し行ふ也、巳は、祉也、邪疾已去、祈介祉也、沈約宋書曰、魏已後、但用三日、不復用巳也、祓は、拂也、廣韻に、除災求福也、禊は、潔也、水上に於て、盥て潔くする也、宿垢は、昨日一昨日よりの垢を云、羅山曰、此註に上巳と云を、上のみの日と云は誤也、上のみの日と云なれば、二月の晦に巳午の日あれば、三月上の十日の內に巳の日はなし、是は上のつちのとの日也、是を上代には、幾日迄も、上十日の內のつちのとの日にしたりけれ共、魏文帝の時より、三月三日に定りけると也、曲水の宴をして會する也、

羣賢畢至、少長咸集、此截說蘭亭禊會之時、

此段には、蘭亭へ集りたる體を云也、今日の會合の衆

りければ、安安と彼正眞の本を盜み、我所借の本をも同く取て、速に出、走て永安驛と云所へ入、其代官を呼て我は是御史なるが、勅命を奉て來れりとて墨勅を宣示し、頓て辯才を召寄、辯才來て見れば、蕭翼也、彼帖を被取事を聞て、魂を消驚き倒て絶入す、久して甦る、蕭翼先、急き飛脚を以て、彼帖を奉る太宗大いに悦びて、蕭翼を員外郎に擢て、金縷の瓶、瑪瑙の枕などを賜る、又太宗始めは老僧深く吝みけるを逆鱗し給ひけれ共、數日の後、帛三千段、穀三千斛を給ふ、智永は、智果か弟子也、今羲之が蘭亭記とて、諸方に在は、太宗の時、褚遂良と云者に、すきうつしにし、石摺なとにして、諸王子大臣等に賜ふ、正本は太宗崩御の時に、遺言有て陵の內へ葬に殉へ埋めり、孫莘老求墨妙亭詩云、蘭亭匭紙入昭陵、世間遺蹟猶龍騰と作るも、此事也、匭紙は、日本にて昔より引合の紙の事と云り、昭陵は、太宗の御墓の名也、

萬里曰、此篇四段、自篇首至咸集第一段、自此地至幽情第二段、自是日至樂也第三段至末第四段、

王逸少

晉書列傳第五十、王羲之、字逸少、祖正尙書郎、父曠淮南太守、司徒導從子、年十三謁周顗、顗異之、時重牛心炙、坐客未啗、顗先割啗之、於是始知名、及長辯贍、以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠、論者稱其筆勢若游雲、矯若驚龍、深爲從伯敦導所器重、時陳留阮裕有重名、爲敦主簿、敦嘗謂羲之曰、汝是吾家佳子弟、當不減阮主簿、裕亦目羲之與王承王悅、爲王氏三少、仕至右軍將軍、會稽內史、卒年五十九、有七子、凝之、徽之、獻之、遂居會稽、並有盛名、

永和九年、晉穆帝年號 歲在癸丑、

永和〔注〕【晉穆帝年號】穆帝は、東晉の第五主、名は珊、康帝の子也【歲在癸丑】承和九年の星の宿りは、癸丑に在と也、東方の蒼龍星、癸丑の方に宿る也、九年と云て、又歲と云、五穀の一度熟するを年と云、歲は、星の宿にて有故に、重言に非す、又載字を用るは、一年中の事を書載ると云心にて用る也、歲舍歲次歲在、龍集龍輯皆同義也、

暮春之初、會于會稽山陰之蘭

將去、遂以玉匣貯藏昭陵、後溫韜 朱梁耀州節度使 發昭陵、復入人間、漁隱叢話後集二十七、歐陽永叔云、蘭亭修禊序、世所傳本尤多而皆不同、蓋唐數家所臨也、其轉相傳模失眞彌遠、然時時猶有可喜處、豈其筆法或傳其一二邪、想其眞蹟宜如何也哉、世言眞本葬在昭陵、唐末之亂、昭陵爲溫韜所發、其所藏書畫、皆剔取其裝軸金玉而棄之、於是魏晉以來、諸集墨蹟、遂復流落人間、太宗時搜訪所得、集以爲十卷、俾模傳之、數以分賜近臣、今公卿家有法帖是也、然蘭亭獨眞本亡矣、故不得列於法帖以傳、王羲之は、名譽の手書にて古今無雙の人也、此時筆を取て、此記を書たるが、名物にて、一入見事にて有しと也、其後何程も書たれ共、其程に不出來間、彼時の本を家の寶として、子子孫孫秘藏して持し也、然るを王右軍より七代過て唐の太宗の時、此手本を所望に思召て被尋たれば、右軍が末孫に智永と云僧あり、其僧の所に、彼蘭亭に書たる記有しを、御もらひあれ共、智永家の什物なれは進上仕る事ふつと成まじき由申切程に、太宗力不及、何とぞして盗出したきと云謀を廻されしに、蕭翼と云臣、さらば御前にある羲之が手本共を、

彼所へ持參して、誑かして取來可申とて、幾らも持て、形を替、京師より遙遙と越の國へ下り、水欣寺に往、徘徊して智永か住る院に過り門に休息しければ、智永は死して其弟子辯才と云僧、何方より被來候やと問、蕭翼我は北方の牢人也とて、打解物語をしければ、辯才引入て碁を圍み、琴を彈、文を談し、酒を飲、數日逗留して、或時右軍が事を語出す、蕭翼我は王右軍が蘭亭にて書たる記、天下の名物なるが、其を持たりと云ければ、辯才其時の自筆は、天下に持たる者なし、我こそ實に持たれと云、蕭翼さらば我持たると比べて見んと云ければ、辯才梁の上より箱を取出して、幾重も包みて有を解て示し見す、蕭翼熟と見て、佯て是は、其時書たるにては非ず、今我持來るが眞筆也と云、辯才は是こそ先師智永が、先祖より代代秘藏し來て、紛れもなく其時の筆跡なれと云て、種種問答す、辯才蕭翼が持來る本をも借留て彼正眞の手本と共に、机の上に置て見る、辯才時に年八十餘、數日有て辯才偶齋に赴て、内に不居を伺ひ蕭翼寺に往、留守の弟子に云樣は我淨巾を忘て、辯才が居間に在と云、奥に入、弟子此間毎日來る人なればとて、咎る事も無

かにして、好旨致ありと也【遯齋閒覽】陳正敏が作也、此評は、其季父虚中が語也、王右軍蘭亭記、其文其麗以天朗氣清、春言秋景、以此不入選、然絲竹管絃、語亦重複、王羲之右將軍の官に成たる人なる故に、王右軍と云、此蘭亭記、文章は甚た美麗にうるはし、但し天朗氣清と云事を書たるは、春の文章に秋の景氣を云たる故に、有病とて不入文選と云り、又此文の內絲竹管絃と云語を重言也と云て、不入と云說もあり

【愚謂】是より眞實詮者の辭也、羅山遯齋が說と云は非也、學齋佔筆第二、余謂陳氏之說陋矣、周公作時訓以二十四氣定七十二候、三月爲清明、朗、即明也、言氣候當辰爲出火、淸且明也、非天朗氣清而何、且張平子歸田賦曰、仲春令月、時和氣清、蕭統取歸田入選而遺蘭亭、正東坡所謂小兒强作解事者、而陳氏又附和以絲竹管絃重複之語不知張禹傳云、後堂理絲竹管絃孟堅注、已作四義、又舜有白玉琯、唐賀懷智琵琶以鵾雞爲絃之類非必絲竹而後可以爲絃管也豈足以病右軍之文、故識之以一洗蕭陳之陋羅山曰、天朗氣清と云て春に成まじきに非す、其故は、清和の節と云は、二月也、清明の節と云も、三月の事なれば、秋の景氣のみに限るべからず、又絲竹管絃は、重言也とて、不入と云も、此文より以前に書たる例あれば、是も病に非す、皆撰者の僻事也とぞ【當時—】當時は其時に、當ての義也云心は、右軍會宴の時に、天氣も晴て明かにして、陰り晦き景象に非ず、山陰の林下の氣も淸して爽なるに依て、如此に書たり、必定淸肅の秋の景を云には非すと也○事文類聚別集十二、何延之蘭亭記云、蘭亭者晉右軍將軍會稽內史琅琊王羲之字逸少、所書之詩序也、右軍蟬聯美胄、蕭散名賢、雅好山水、尤善草隸、晉穆帝永和九年、暮春三月三日、嘗遊山陰、與大原孫綽興公、廣漢王彬之、幷逸少、凝之、徽之、操之等四十有一人、修祓禊之禮、揮毫製序、興樂而書、用蠶繭紙鼠鬚筆、遒媚勁健、絕代更無、凡二十八行、三百二十四字、字有重者、皆構別體、就中之字最多、乃有二十許箇、變轉悉異、遂無同者、其時廼有神助、及醒後他日更書數百千本、終無如祓禊所書者、右軍亦自珍愛寶重此書留付子孫、傳掌至七代孫智永、永即第五子徽之之孫、掌其書、尙書故事曰、太宗有大王眞蹟三千六百紙、率以一丈二尺爲軸、寶惜者、蘭亭爲最、嘗附耳詔高宗曰、吾千秋萬歲後、與吾蘭亭

帶其上形容氣象之廣也、云心は朱簾晩に向として捲上れば西山の雨、朱簾に映じて新奇也とぞ羅山曰朱の簾を夕に捲ば西山の雨夕日に映ひ降り來る也、

閑雲潭影日悠悠、物換星移度幾秋、

閒雲停停然閣外下映深潭水中有影相照、日常悠悠然而自在、此則形容意味之淸也【悠悠】字彙、渺邈、又長貌、云心は天に度れる閒雲潭中に見へて、水面影あり、日光悠悠と長閑にして、景象更に靜なる事を覺ふ、元嬰此閣を被建しより以來人物換り、星霜移て、幾春秋をか度過つらんと也、

閣中帝子今何在、檻外長江空自流、

閣中の帝子元嬰、今は何れの處にか、御在やらん、已に卒去して、閣ばかり殘ると也、物換の句是也【檻外—】奇英註曰、欄檻之外、長江空自流、傷其物是而人非也、云心は、今に在物とては、欄檻の外の江水、空く昔に不替、自ら流る計り也とぞ城郭雖是人民非と云の意、羅山曰、此七八の句にて、歎息して感慨を起す、江流は本の如なれ共、滕王は御坐さずと感す、中に無窮の感意あり、

記類、

萬里居士曰【記】居吏切、去聲、說文、疏也、疏、謂一一分別記之、羅山曰、記は、史記日記の類、有事を其儘に記し述るを云、盧曰、記者、以備不忘、蓋敘事如書史法也、如尚書顧命篇是也、敘事之後、略作議論以結之、然不可多、

○蘭亭記、

此篇敘景感懷、綽有佳致（遯齋閑覽云）王右軍蘭亭記、其文甚麗、但天朗氣淸春言秋景、愚謂當時天色晴朗、非陰晦之象、而山陰林下之氣、淸而爽者、決非謂淸秋也、

蘭亭に會遊して、風景を詠し、情思を暢る事を、記し著す也註【此篇敘景——】羅山曰、此記全篇の評也、言心は此篇は、蘭亭の景氣を云、又右軍が心に感する事を記す、故に感懷と云也【綽】齒灼切、廣韻、寬也、孟子公孫丑下篇云、綽綽然有餘裕、物の餘有て寛かなるを云【佳致】好趣也、云心は此文せは〱しからずゆた

四韻倶成、

句解註曰、恭肅以踈布簡短之序引、如前所作之文、時群公又莫有賦詩者、於是勃又足成之、故曰申一言以均此意而賦之【敢】說文、進取也、思切てするを云ふ【鄙誠】勃謙退していやしきことゝ云也【引】亦文の一體、文選に班固が典引あり、賦に近き樣に見ゆ、又杜子美畫馬引の類は、詩歌の體に近し、此引は序也【踈】字彙に、條陳也、又記注也、言心は、敢て我鄙き丹誠を盡して、恭て短き序引を條に陳ると也【一言―】一言は、此詩を云、均賦とは、序と詩と倶に一度に作るを云、四韻は、此詩の舞雨秋流の四韻を云、言心は、此序の外に、又一言を添て同く作り、八句四韻の詩倶に成也、羅山曰、八句の詩を四韻と云也、

滕王高閣臨江渚、佩玉鳴鑾罷歌舞、

茅瓚曰、此詩字字奇絕、方輿勝覽、洪州有章江投書渚、云心は、滕王の作置給ひし高閣、江渚の上に臨立と也【佩玉―】句解云、工歌妓舞多佩玉衡牙之屬、又有鑾鈴雜珮、於身周旋曲折、鏘然有聲、宴闌罷歌舞此則見富貴之氣象也、古今文鑑註曰、謂當時佩玉鳴鑾、又歌舞者、今皆罷休矣、佩玉は、官人身に佩る所の玉也、事は禮記論語等の註に見へたり、鳴鑾は、車に係て、車の行を節するの鈴也、大學大全の序註に詳也、句解の註、恐くは誤也、云心は、滕王已に薨せられしより、此閣に參候する士大夫も、皆散し盡て、佩玉鳴鑾も空く不見聞、伎女の多く歌舞せしも、今は罷畢て無之と也、羅山曰、其時の體を想像て云也、

畫棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨、

【畫棟】ゑかけるむなぎ也、序の雕甍是也【南浦】勝覽洪州部云、南浦、在廣潤門外、有南浦亭、往來艤舟之所唐已有之、必讀註云、朝來飛南浦水氣之雲、依繞其間、形容氣象之高也、云心は、畫棟朝朝南浦の雲氣を飛來らしむ、閣の至て高き故也、日月轉朱欄の心也【朱簾】亦すだれ也【西山】勝覽又云、余安道記、在縣西四十里、岩栖四出、千峯北來、嵐光染空高一千丈、屬連三百里、必讀註曰、朱簾向晚捲、西山夕陽之雨、映

閻公亦尊之之詞、

嗚呼、勝地不常、盛筵難再、蘭亭已矣、（蘭亭、王逸少宴集之地）梓澤丘墟、（梓澤、即金谷園也、）

已下詠嘆取捨、有寄思滕王之意、即詩所謂閣中帝子今何在之意【勝地】絶勝の地景也【盛筵】結構なる宴席也、言心は此閣の如なる勝地は、尋常不多在、箇様の盛筵には難再逢也【蘭亭—】【注】蘭亭は、晉の王羲之、字は逸少、酒宴會集する所也、此次の巻首に詳也【梓澤—】【注】梓澤は、即ち金谷園也、晉の石崇が歡樂する處也、前の宴桃李園序に見へたり、言心は、蘭亭の勝會も、已に陳迹と成て、事已ぬ、金谷園は、聚蚊會と云しが、是も亦亡て、丘墟の跡ばかり殘れりと也、丘墟は、をか也、野原と成たりと云が如し、蘭亭梓澤を引て、人の心を感じ傷ましめて、今日閣上の會を感する也、

臨別贈言、幸承恩於偉餞、登高作賦、是所望於羣公、

必讀註曰、閣中之序、王勃作此、故曰臨別而贈之、以記中之意、言、如宇文新州之類、皆蒙其餞禮、王勃與其所餞之列、故曰幸承閻公之恩於偉餞、云心は、王勃離別に臨て、此一篇を作て贈る、幸に閻公盛餞の恩を蒙る故也【偉】大也、餞別の宴禮盛なるを以て云、前の勝餞も同し、叢林の僧、此序を解するとて、理義は不説得して、只所所に伯輿が贈五百縑事のみを、心に存して解する程に、此所にて別して贈物を悦て、偉餞と云と説、陋哉見乎【登高—】左思三都賦序曰、升高能賦者、頌其所見也、萬里曰、登高能賦、亦才人之一技、今登高閣而作爲賦記也、按ずるに登高は、九月九日の故事、今日閣上の宴會も亦重陽也、事は蒙求桓景登高の註に詳也、是所望於同宴之群賢公子、勃意不能、且遜于他人也、云心は、今日登高の佳節にして、幸に此高閣の上に登て、此序を作る、同宴の群公達詩賦を作り、此景情を被述候へ、是我望む所也とぞ、勃此序を作と云共、自ら卑下して、他人に讓る心持を云也、舊抄云、主人閻伯輿、賓客宇文鈞等、言勃爲此序、各賜改削、是所望也、甚誤れり、

敢竭鄙誠、恭疏短引、一言均賦、

此宴に陪座し、龍門の會に付托する事を喜ふと也、伯嶼を龍門に比し、我身を魚に比する也【註】【唐李膺—】唐字誤れり、當作漢字、後漢書列傳五十七、李膺、字元禮潁川襄城人、性簡亢無所交接、擧孝廉高第、遷河南尹、桓帝時拜司隸校尉、是時朝廷綱紀頽弛、膺獨持風裁、以聲名自高、士有被其容接者、名登龍門、註以魚爲喩也、龍門、河水所下之口、在今絳州龍門縣、水險不通、魚鱉之屬莫能上、江海大魚薄集龍門下、數千不得上、上則爲龍、李膺聲聞名譽を、自ら高ぶつて、漫に人に交はらず、若士大夫其面禮揖接するに預れば、皆珍しく羨しがりて、大魚の龍門に登り得たる樣に云て、登龍門と稱する也、

楊意不逢、撫凌雲而自惜、楊得意嘗薦司馬相如、後相如逢顯○勃不逢楊得意之薦、但誦相如凌雲之賦、而自惜其不遇耳 **鍾期既遇、奏流水以何慙、**列子、伯牙鼓琴、志在流水、子期曰、洋洋乎若江河○勃謂遇知音、奏流水何以愧、

【撫】摩也、循也、なづる也、又撫景撫時などゝある時は、弄ずる心もある歟【注】【楊得意—】史記司馬相如傳、蜀人楊得意爲狗監、郭璞曰、主獵犬也、侍上、上讀子虛賦而善之曰、朕獨不得與此人同時哉、得意曰、臣邑人司馬相如自言爲此賦、上驚、乃召問相如、相如曰、有是云云、楊得意は、前漢武帝の時、獵犬を主る官にて居たるが、武帝相如が子虛賦を讀て、此作者と時を同ふせざる事を嘆息し給ふを聞て、相如同國の人にて、內內友達なれば、得意薦て謁見せしむ、後に相如郎と成、夏夷に名を顯せり【不得楊—】勃楊得意が相如を薦たるが如きに不逢、只空く相如が凌雲賦を誦讀して、自其時に遇はざる事を嘆惜する而已【鍾期—】【注】列子湯問篇の文也、伯牙善鼓琴、鍾子期善聽、伯牙鼓琴、志在高山、子期曰、善哉峨峨乎若泰山、志在流水、子期曰、善哉洋洋兮若江河、伯牙所念、子期必得之【洋洋】論語泰伯篇集註、美盛意、此にては大に盛なる貌、伯牙琴を鼓、其志流水にあり、鍾子期其志を知て云、琴の調、江河の大盛なるが如し、是を知音と云也【勃謂—】勃云心は、閻公が我を知こと、伯牙が子期に遇が如し、苟も知音に遇ば、流水の調を奏して、何ぞ愧んや、此文を書事を云、伯嶼を鍾期に比し、伯牙を自比す、此言遇不遇之異、以明己之得遇、

接孟氏之芳鄰、（孟母三徙、爲子擇鄰、）

勃自ら云、我は謝氏の家の子の、寶玉の樹と云れし屬に非すと也【注】【謝玄—】謝玄、字は幼度、叔父謝安、字は安石、並に晉書に有傳【所器—】結構なる器物を秘藏し、寶玉を珍重する如くに、謝安姪の謝玄を貴ひ重する也【玄曰—】或時、謝安子弟亦何預人事、而正欲使其佳と云たれば、玄答て云樣は、喩ば芝蘭玉樹を庭中階下に生せしめんと欲するが如なる而已と也、我一門中に佳美の人を出來し度との念願也【接孟氏—】青松曰、勃謂幸得接孟氏之好鄰、必里有賢人也、勃言く、今南交へ徃なは、定て隣里に賢才の人有べし、孟母の其子の爲に、居處を擇れたる樣に、我も彼地にて芳好の隣家に近付て、交接せんと也【注】【孟母—】孟子の母なれば曰孟母、三度迄、居處を移し易て、孟子の爲に隣里を擇はる、劉向列女傳曰、孟軻之母其舍近墓、孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋、孟母曰、此非所以居子也、乃去舍市、其嬉戲爲賈衒、孟母曰、此非所以居子也、乃徙舍學宮之旁、其嬉戲乃設俎豆、揖讓進退、孟母曰、此眞可以居子矣、遂居之、既長就學、遂成大儒、孟母の初め住れし鄕里墓所に近かりければ、孟子幼少にして、是を見習、葬禮の體を眞似て、戲れ遊へり、次に市中に遷られければ、又商買人の眞似をせらる、三度めに學問所の邊に移り居られければ、禮儀の作法を見て、俎豆揖讓の眞似をして戲とせり、既に成長して學問し、遂に大儒と成、

他日趨庭、叨陪鯉對、（事見論語）今晨捧袂、喜託龍門、（【唐】李膺以聲名自高、士有被其容接者、名爲登龍門、）

勃謂他日亦嘗承父之敎、趍庭學詩學禮、恭陪侍孔鯉之對、以比父爲孔庭、勃日比父の家庭に趨り過て、伯魚の孔子に對られし樣に、父の前に陪り對しと也、自ら我事を云程に叨にと卑下して書也、論語季氏篇、陳亢問於伯魚曰、亦有異問乎、對曰、未也、嘗獨立、鯉趨而過庭、曰、學詩乎、對曰、未也、不學詩、無以言、鯉退而學詩、他日又獨立、鯉趨而過庭、曰、學禮乎、對曰、未也、不學禮、無以立、鯉退而學禮、聞斯二者、陳亢退而喜曰、問一得三、聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也【今日—】勃今日袂を捧け、威儀を刷ふて、

ゝ程に、纓を乞べき路絶たりと也囯【南越王―】元鼎四年、武帝遣レ使諭ニ南越一入朝、南越與レ漢和睦して屬附す時に終軍二十餘歳、長纓を給らは、必定南越王を羈し縛て、禁闕の下へ引來り致んと請也、軍が心は、南越一旦和睦すとも、又可レ反ほどに、和親せん事不レ可レ然とて、如レ此云也、勃が心は、君に退けられたれば、纓を朝廷に請の路なしと云共、志は終軍が弱冠に齊しと也、羅山の說、前漢書列傳三十四、終軍、字子雲、濟南人、辨博能レ文、武帝朝年十八選爲ニ博士弟子一、初軍步入レ關、關吏與レ繻、軍曰、大丈夫西遊、終不ニ復還一、弃レ繻而去、後爲ニ謁者給事中一、建レ節東出レ關、關吏曰、此前弃レ繻生也、累擢ニ諫議大夫一、後使ニ南越一、卒時年二十餘、世號ニ終童一【有懷―】班超、か大志を懷き、筆を投て嘆息し、功を異國に立て、封侯を取ん事を願ひ、宗慤が大志を懷き、大風の勢に乘して、万里の大波を凌き破んと願し事を、勃慕ふと也、後漢書列傳三十七、班超、字仲叔、彪之少子、固之弟也、爲レ人有ニ大志一、傭書養レ母、嘗輟レ業投レ筆嘆曰、大丈夫無ニ它志略一、猶當レ效ニ傅介子張騫一、立ニ功異域一、以取ニ封侯一、安能久事ニ筆硯間一乎、明章兩朝、出ニ征西域一、安ニ集五十餘國一、封ニ定遠侯一、和帝時召還

囯【宗慤―】萬姓統譜、宗慤、字元幹、南陽人、少時其叔父嘗問ニ其所一レ志、慤答曰、願從ニ乘長風一、破ニ萬里浪一、仕ニ劉宋一爲ニ振武將軍一、伐ニ林邑國一剋レ之、珍寶山積、一毫無レ犯、後封ニ洮陽侯一、

舍ニ簪-笏於百-齡一、奉ニ晨-昏於萬-里一、

【簪】首笄、釋名曰、連ニ冠於髮一也、かんざし【笏】字彙、音忽、手版、公及ニ士所一レ搢也、廣韻、品官所レ執、天子以レ玉、諸侯以レ象、大夫魚須文竹、士木貊文、釋名、笏、忽也、君有ニ敎命一、及所ニ啓白一則書ニ其上一、備ニ忽忘一也、官人の手に持しやく、云心は、勃今遷謫の身と成れば、百歲任官の途を捨ると也【奉晨―】曲禮、凡爲ニ人子之禮一、冬溫而夏凊、昏定而晨省、註曰、定、安ニ其床衽一也、省、問ニ其安否如何一、青松曰、謂ニ勃去レ官而不レ顧ニ終身之計一、父爲ニ交趾令一、勃往省、故曰レ奉ニ昏定晨省之禮於萬里外一、云心は、勃父に萬里の外に隨て、晨には其安否を省問し、昏には其臥床を安定する禮養を、供奉せんと也、

非ニ謝-家之寶-樹一、

謝玄爲ニ叔父安一所ニ器重一、玄曰、譬如ニ芝蘭玉樹一、使ニ其生一於庭階一耳

行高潔なるも、顯達せずして、空く國家に恩を報んと思ふ心を懷て果たり、我父の忠心を抱け共、小罪に座せられて、徒らに南方へ移さるゝに比す、古說に、齊の田文號孟嘗君、雖有報國之心而終不能遂焉故曰空也此解非是【阮籍―】晉書列傳十九、阮籍、字嗣宗、任情不羈、或閉戶讀書、累月不出、或登山臨水、竟日忘皈、尤好老莊、能嘯能琴、嗜酒放曠、人謂之痴、竹林七賢の一人也【猖狂】は、謂不拘禮法也、物狂はしきを云、卽本傳放曠之義、出莊子注【率爾】率爾の意、輕輕しき義也、但し本傳及び蒙求に、並に作率意、心に任するの義、言ろは、阮籍猖狂とほしひまゝにして、時に率爾にふと、獨り車に駕て、入山、人の往來の徑路、車跡の通ぜざる處にして、卽ち痛悼泣哭して皈る、是を窮途の哭と云、人の我と値遇する事無れば、行路の窮り盡る迄行て、嘆息して返れば也、世の無道なる事を痛める故歟、他人の目には猖狂に見ゆる也、勃自ら云、國に許して忠を効すの心不可捨、何ぞ阮籍に效ひ似せんや、

勃三尺微命、一介書生、

【微命】は、微弱の身命也、羅山曰、輕微の運命也、賤を云韻會【介】音戒、一夫曰介、左傳云、一介之使書云、如有一介臣、又箇字注、居賀切、或作个、或作介、左傳云、不使一介、杜預曰、單使、禮記大學、若有一介臣、注、古賀切、勃今十三歲なれば、三尺の微身と云、已に左遷の人にして、官職も無れば、一箇の書生と云、書生は、書を讀人也、儒者學者を云、摭遺新說には、此時勃十三歲とあり、瑯邪代醉編には、十四歲とあり、靑松は十二歲と云說も有と云れけれ共、出處不詳、羅山曰、此勃の一字に無對語、三尺以下八字は、自身の上を稱する也、

無路請纓、等終軍之弱冠、南越與漢和親、終軍年二十餘、自願受長纓、必羈南越王而致之闕下、**有懷投筆、慕宗愨之長風、**【宗愨曰】願乘長風破萬里浪、

【纓】冠系也【弱冠】曲禮上云、二十曰弱冠、弱は、わかしと讀、二十歲にして元服す、故に弱冠と云、言心は、終軍弱齡にして、武帝に冠纓を請南越王を縛て、致し獻んと云き、勃今其と年弱は同しけれ共、左遷せらる

く逝者を、勃自ら再び歸て、青雲の路に登んと云に比す、萬里曰、勃が北方より南方に往を云【註】【莊―】莊子逍遙遊篇の語也、溟は、海也、鯤は、大魚の名、變化して鵬と云大鳥と成、【摶扶搖】希逸口義、飛翔也、一のしに上る事九萬里なると也【東隅―】奇英注曰、言雖東隅之失已往、而桑楡之得未遲、萬里曰、言勃少年雖以鬪鷄檄文、得罪、而失東隅少壯之時、尚庶幾得達許國忠義之志、東隅、指少壯之時、桑楡、指將老之際也、言心は、勃少年にして得罪、日出東隅の時を失ふと云共、老年未來らざれば、桑楡將暮の日、再び世に出で、其志を達せん事、晩きに非ずと也【註】【漢馮異―】後漢書列傳七、馮異、字公孫、潁川父城人、好讀書、通左氏春秋、孫子兵法、漢兵起、以郡椽守父城、光武爲司隸、道經父城、即開門迎光武、署爲主簿、後拜征西將軍、嘗破赤眉、帝璽書勞之曰、始雖垂翅回溪、終能奮翼澠池、可謂失之東隅、收之桑楡、異爲人謙退居樹下、號爲大樹將軍、綱鑑註曰、回谿、在澠池之北、異與鄧禹共攻赤眉、大戰於回谿敗績、隅、陬也、東隅、日出處也、桑楡、木名、謂晩也或作日入處也、淮南子曰、西日垂景在樹端、謂之桑楡也、馮異初に赤眉と回谿にて合戰し、大きに敗北したるは、鳥の疲て翅を垂るに似たり、後に又赤眉と澠池にて戰ひ、大きに打勝て、赤眉降參するは、鳥の再び勇み競て、翼を奮張が如し、東隅日出の所にて、仕損したれ共、日入桑楡の處にて、功を收めすましたる也、羅山曰、日中を隅中と云、然れば東隅と云は、晝より前也、桑楡は、日晩也晝失ふと云共、晩に收め得たると云は、始に負て、後に勝たるに譬る也、

孟嘗高潔空懷報國之心阮藉猖狂、豈效窮途之哭、晉阮籍、時率易獨駕入山徑路車跡所窮、輒痛哭而返、

後漢書列傳六十六、孟嘗、字伯周、會稽人也、少修操行、仕郡爲戶曹吏、順帝朝爲合浦大守、郡不產穀實、而海出珠寶、前主宰貪穢、詭民採求、不知紀極、珠漸徙於交阯界、嘗革前弊、去珠復還、百姓蒙利、商賈流通、稱爲神明、桓帝の時、陽喬と云人、書を上つて、孟嘗を薦て、孟嘗清行出俗、能翰絕群と申けれ共、終に不被用して、年七十にして家に卒しぬ、言心は、孟嘗性

後漢書列傳十四、馬援傳云、援少有大志、嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯、句解曰、安知白首尚致君澤民之心、凡そ人老年にして、志力衰ふ程に、自ら勵て彌志を壯にすべし、何ぞ今後來白首に成ての心、如何可有事を知んやと也【窮且―】困窮しては、志移り易き者也、大丈夫たる者は、彌堅固に保ち守て、再ひ青雲の路を蹈て、君を致し、民を澤するの志を落し失ふへからすと也、史記伯夷傳云、非附青雲之士、惡能施於後世哉、是より朝廷を指て青雲と云、山林を指て白雲と云也、青雲爭似白雲高など云詩も是也、

酌貪泉而覺爽、〔貪泉見前吳隱之貪泉詩〕處涸轍以猶懽、〔莊〕轍中有鮒魚、激西江之水、不足以活之、

【酌貪―】註【貪泉―】即ち此前集に、吳隱之酌貪泉の詩あり、晉書列傳六十、吳隱之、字處默、濮陽鄄城人、博涉文史、以儒雅標名、弱冠而介立有清操、爲廣州刺史、州有水曰貪泉、飲者懷無厭之欲、隱之至泉所、酌而飲之、因賦詩曰、古人云此水、一歃懷千金、試使夷齊飲、終當不易心、及在州、清操愈厲、及歸妻劉氏齎沈香一斤、隱之見之、投于湖亭之水、爲度支尚書、以竹篷爲屏風、座無氈席、有女將遣嫁、使婢牽一犬賣之、此外蕭然無辨、後致仕、授光祿大夫、金章紫綬、言心は、貪泉を飲めば、欲心生ずと云共、我心だに貪らずんば、卻て清爽なる事を覺んと也【處涸―】涸は、玉篇、乎各切、水竭也、盡也、轍、車迹也、云心は、鮒魚の涸ける車轍の中に居るは、命幾程かある、今勃父子邊鄙に謫黜せられて、轍魚の如くなれ共、少も憂戚せすして、猶懽悅すと也註【轍中―】鮒、ふな也、西江の大水を漲らせ懸れ共、此鮒已に涸轍の中にいきづけば、遂に活し得るに不足、莊子外物篇に詳也、

北海雖賒、扶搖可接、〔莊〕北溟有魚、其名爲鯤、化而爲鵬、搏扶搖而上者九萬里

東隅已逝、桑榆非晚、〔漢馮異曰〕始雖垂翅回溪、終能奮翼澠池、可謂失之東隅、收之桑榆、

【賒】遠也【扶搖】林希逸云、風勢也【接】字彙、相續也、連也、奇英註、言北海雖賒遠而扶搖可至、言心は、北海遠しと云共、鵬の飛翔し、風勢に乘て、越て至る樣にすべしと也、北海は、朝廷に比し、鵬の扶搖して高

小則方寸、千言甚矜、其能或時不持錢、詣酒家飲、因書其壁、雇觀者以酬酒、計錢足而滅之、每書輒削而焚其樹、梁鵠乃益爲版而飲之酒、候其醉而竊其柎、鵠卒以書至選部尚書、宣官後爲袁術將、今鉅鹿宋子有耿球碑、是術所立、其書甚工、云是宣官也、梁鵠奔荊州、魏武帝破荊州、募求鵠、鵠之爲選部也、魏武欲爲洛陽令、而以爲北部尉、故懼而自縛詣門、署軍假司馬、在秘書以勤書自效、是以今者多有鵠手跡、魏武帝懸著帳中、及以釘壁玩之、以爲勝宣官、今宮殿題署、多是鵠象也、鵠宜爲大字、邯鄲淳宜爲小字、鵠謂淳得次仲法、然鵠用筆盡其勢矣、鵠弟子毛弘教於秘書、今八分皆弘法也、又案ずるに、梁鴻、字伯鸞、後漢の肅宗の時の人也、後漢列傳七十三に見へたり、五噫の歌を作るを、肅宗聞て、譏として、鴻を求られけれ共不得、姓名を易て、妻子と逃れて、齊魯の間に居る、其後又吳國に行時、詩を作る、其句に云、遇季札兮延陵、求魯連兮海隅と云り、死して吳地に葬むる、齊國は、東海邊へ續く國なれば、海隅共、海曲共云べし、此義を取ば、古文の註の說、如何侍らん、肅宗の淸明の時代なれ共、梁鴻は海曲へ放たるゝ也、是も明時を今の高宗の時代に比する也、

所賴君子安貧、達人知命、

【君子—】君子安貧而不憂、勃自謂知此達人知天命而自得、言ろは、君子達人の不遇なる事は、今に始めざる習ひ也、君子は貧賤を安して、戚戚と憂へず、達人は能運命を知て、何とも苦にせぬと也、是勃自ら所賴也、上の句は、暗に顏子の一簞食、一瓢飲、在陋巷、不改其樂の心を用て自比す、陸隱曰、此段大意謂士君子際會之難、唯有安貧知命、可以勝之、庶幾不遇於今者、猶遇於後、不效阮籍之猖狂而哭也【達人】は、道理に通達する人也、下の句は、孔子の五十而知天命の心を用て、父に比す、賈誼服鳥賦曰、達人大觀、亡物不可、羅山曰、君子達人の二句對にして、所賴の二字不對、是四六の內の助辭也、此一篇の內、嗚呼の二字、二處にあり、此所賴の二字を合て三つ也、四六の內のあやつり也、

老當益壯、寧知白首之心、窮且益堅、不墜靑雲之志、

王福時に比す【李廣】漢書列傳二十四、隴西成紀人、材氣天下無雙、文帝時擊匈奴、以功爲散騎常侍、數從獵、格殺猛獸、文帝曰、惜廣不逢時、當高祖世、萬戶侯何足道哉、歷上谷、隴西、北鴈門、雲中太守、武帝時爲北平太守、匈奴畏之、號飛虎將軍、結髮與匈奴大小七十餘戰、然廣不得爵邑、官不過九卿、廣之軍吏及士卒、或取封侯、言ろは、李廣數十度の戰功有つれ共、數奇不遇にして遂に諸侯に封ぜらるゝ事を不得と也、萬里曰、勃自比す、羅山曰、此に馮唐李廣梁鵠を引て、勃と父とが身上に比する也、

屈賈誼於長沙、非無聖主、竄梁鴻於海曲、梁鴻善八分書、魏武帝重之、其後爲佞臣所毀、逐於北海 **豈乏明時、**

賈誼が、賢才なるも、遷謫に屈辱せられて、長沙にして死たり、文帝の如なる聖帝なきには非す、只誼が不運也とぞ、萬里曰、勃自比す、羅山曰、文帝は、漢の聖主なれ共、誼が流さるゝ時は、時運不齊也、今の高宗も聖主なれ共、勃が被流たるは、此類也となり、時の君なれば、聖人ならね共、褒て聖主と云也此上に宣室と云も、誼が事也、又此に誼を云は、重複の故事にて、好らぬ事也、勃が時までは、晉宋齊梁魏隋の六朝の餘風殘りて、文章大かた駢儷に書のみならず、如此同し故事を用たる事あり、此序も、衡廬、衡陽、五湖、彭蠡、休暇、暇日、宣室、長沙なんと云句あり、是を此序類排語と難ずるは是也【竄】驅逐也、配流を云【梁鴻】鴻は誤也、三國志及通鑑綱目、作梁鵠、三國志云、梁鵠、字孟皇、安定人、梁鵠が魏武に重ぜられたるも、北海の隅曲に貶竄せらる【注】【善八分書】事物紀原曰、秦丞相李斯、作八分書、又李陽氷云、秦始皇時、王次仲作八分、佩觿集曰、八分篆法、二分隸文、一云、如八字有偃波之文、又云、二說皆非、書有八體、蔡伯喈於八體之後、又分此法、故曰八分、蔡姬列傳曰、臣父邕割程邈隸字法、去八法、謂去八分取二分也、李斯小篆、去二分取八分、故云八分、韓文公詩、阿買不識字、頗知書八分【豈乏――】何ぞ清明の時代少からんや、鵠か不遇也とぞ、勃父福時に比す、文帝武帝は、高宗に比す、晉書列傳六、衛恒傳云、上谷王次仲、始作楷法、至靈帝好書、時多能者、而師宣官爲最、大則一字徑丈、

けられて、如此南方へ來れば、望め共不見也【奉宣ー】註【漢賈ー】前漢書列傳十八、賈誼傳云、以誼爲長沙王太傅、誼已以謫去、心不自得、後歳餘文帝思誼徵之、至入見、上方受釐坐宣室、上因感鬼神事、而問鬼神之本、誼具道所以然之故、云云、蘇林曰、宣室、未央宮前正室、昔し賈誼絳灌等が讒を以て貶謫せられて、長沙王の太傅とて、かしづき御守の官に成、後に文帝其才を思出して召寄らる、賈誼參內しけるに、折節文帝、宣室とて、正殿に齋して御坐ければ、其座へ直に呼給ふ、齋せる故に、先宗廟鬼神の事を問給ふ、鬼神は陰陽造化の良能、萬物生殺の迹に就て云へば、天地の鬼神也、又人の生は神、死は鬼、又人死して、魂の天に伸るは、神也、魄の地に皈るは、鬼也、神は伸也、鬼は皈也、此所は人死して、魂魄の皈宿する所の鬼神と可見、誼具さに其道理を物語しければ、文帝面白がり給て、夜半に至て坐席を前め、誼と近く依て、相問答せらる【奉】は、供奉也、言心は、勃誼が如く被召還て、宣室に奉仕せん事は、何れの年にか可在と也、羅山曰、此帝閽宣室の一聯、己が被退たるを感じて嘆息する故に、下の句に嗚呼の字を用ひ、又馮唐李廣が事をも多く云續けたる也、勃少年の氣ざし口惜と思ふ心現れたり、

嗚呼、時運不齊、命途多舛、

古義に、時と運と、吾命と仕途と見る、愚謂く【時運】は、天時運行の會數也【命途】は、賦命窮達の道途也、勃嘆息して云、天時の運數同じからずして、吉凶事異也、賦命の逢違ふ事多して、窮達途背く、萬里曰、此兩句言不遇也、湖月曰、勃自言也、

馮唐易老、李廣難封、

【馮唐】漢書列傳二十、趙人、爲中郎署長、嘗言雲中守魏尚有功而削、其爵、文帝納之、使唐持節、封尚復爲雲中守、拜唐爲車騎都尉、馮唐白首までに、郎官にて、居たりけるが、武帝或時郎署に幸して見給ひ、何者なれば、其年迄小官にて暮しけるぞやと問給ひければ、馮唐對て、文帝は文を好み給ふに、臣は武を好み、景帝は姸を好み給ふに、臣は醜し、陛下は少を好み給へば、臣は巳に老たりと申す、武帝擢て賢良に擧給ふ、唐時に年九十餘、言ろは、馮唐が如なる者あれ共、三代不遇にして、空く老易しと也、古抄に、勃其父

中間界分、言心は、洪州より北方を仰望めば、天柱尤も高して、北辰彌遠しと也、地勢と天柱と對し、南溟と北辰と對す、天柱は峯の名に非る事可見、上の句は、指吳會の句に係り、下の句は、望長安の句に係る也、

關山難越、誰悲失路之人、萍水相逢、盡是他鄉之客、

江總詩、分手關山長、杜審言詩、雨雪關山暗、風霜艸木稀、李白詩、白雪關山遠、黃雲海樹迷、王昌齡詩、更吹羌笛關山月、無那金閨萬里愁、高適詩、岐路風將遠、關山月共愁、杜甫詩、戎馬關山北、憑軒涕泗流、又三年笛裏關山月、萬國兵前艸木風、邵寶集註、周王褒燕歌行、無復漢地關山月、關山者、家鄉所在也、聯珠詩格註云、樂府有關山月曲、故離別多用關山、爲遠別之限阻也、青松曰、關險山狹、隔遠難以度越、言心は、關塞山險、過越し易からず、誰が行路を失ひ迷へる我を、憐み悲める者有んやと也、勃自ら云【萍水―】奇英註、今人稱邂逅、曰萍水相逢、萬里曰、萍元無定止、隨風水而離合無期者也、空同集五十二、萍會圖序云、萍之未水也、萍知水平、水知萍平、及飄風過焉、縈花絮於漣漪之曲、於是萍者布淸而根深、泛精以化神、綽約嫂、婷、嬉波上下、始與水一矣、故有寤寐其求、而終身無邂逅之遇、而傾蓋於塗路者、非素相聞也斯所謂偶然之合也、其合未有不散者、故君子同也、必聚而酒食相樂、於是乎有會、會者、所以繫情防散者也、有類乎萍、故稱萍會焉、萍は浮―、うきくさ、細にして葉の背紫色也、風水に隨て、或は分れ、或は合、故に人の邂逅に逢て、離合無期に喩る也、言心は、此座中不期約して相逢は、萍水の偶合するが如し、盡く他鄉の賓客也とぞ、

懷帝閽而不見、奉宣室以何年、

漢賈誼謫爲長沙王太傅、後召見宣室、

楚辭曰、吾令帝閽開關兮、揚雄甘泉賦曰、選巫咸兮叫帝閽、張平子思玄賦曰、叫―使闢扉兮、覿天皇于瓊宮、【閽】說文、常以昏閉門隸也、門番を云、羅山曰、天に九重の門あり、至て高遠也、故に是を思へ共、見る事を不得、天門を內裏に喩ふ、言心は、勃帝王の門を扣て、閽者に開通せしめん事を思へ共、身已に黜

極まれば、興盡、愁有れば悲來る、是定れる事なれば、識盈虚之有數と云、數は、定れる事也、此句を起して、下の句共の運命不遇なる事を多云て、勃が身上に喩る也、

望長安於日下、指吳會於雲間、

晉書帝紀六、明帝、諱紹、字道畿、元帝長子也、幼而聰哲、爲元帝所寵異、年數歲、嘗坐置膝前、屬長安使來、因問帝曰、汝謂日與長安孰近、對曰、長安近、不聞人從日邊來、居然可知也、元帝異之、明日宴群僚、又問之、對曰、日近、元帝失色曰、何乃異昨日之言乎、對曰、擧目則見日、不見長安、由是益奇之、言心は、王勃鬪雞の檄文を書て、高宗の怒に逢、父子共に交趾へ行程に、北の方長安の都を、遠く日の下に望み遺也【指吳—】吳會の字は、吳都賦に出たり、通鑑綱目註、吳都曰吳會、今蘇州圖經云、吳東南一都會也、正義曰、吳地爲荊揚交會之都會、方輿勝覽、洪州部、南豐門記、其境屬于閩荊、南粤方數千里、其田宜秔稌、其賦粟輸于京師、爲天下最、在江湖間、東南一都會、晉書列傳二十四、陸雲、字士龍、少與兄機齊名、號二陸、吳都人也、吳平入洛、雲與荀隱未相識、嘗會張華坐、華曰、今日相遇、可勿爲常談、雲因抗聲曰、雲間陸士龍、隱曰、日下荀鳴鶴、鳴鶴、隱字也、杭州は、四方の所聚、百貨の所交、物盛に人衆して、又兼て有山水之美、故に吳の都會の地とす、言心は、吳會を遙に雲霧の間に指望むと也、

地勢極而南溟深、天柱高而北辰遠、

地は不滿于東南とて、不足して缺る也、洪州は、東南にて、地の形勢極り盡て、溟海彌深く廣しと也、南溟、海也、見莊子【天柱】古説に、皆以爲天柱峯、誤也、羅山曰、只天の軸を云、愚案ずるに、史記三皇本紀曰、共工氏與祝融戰不勝、而怒乃頭觸不周山崩、天柱折、地維缺、天の葢の張が如くに、上に覆るは、柱にて拄るに似たれば、天柱と云、又天軸と云、天は傾于西北、北極星常に現れて、南極星常に見へず、天の西北方高き事可知【北辰】論語集註曰、北辰、北極、天之樞也、大全曰、北辰、是天之樞紐、中間些子不動處、史記載北辰有五星、太乙常居中、是極星也、辰非星、只是

【睇】達計切、説文、目小視也【眄】莫典切、邪視也、窮睇眄とは、遠望の義也、羅山曰、睇眄を分て云時は、睇は、少し見る也、眄は、斜に見る也、かへりみると讀り、此にては、只觀覽の義也、目を極て半天を見上る也【中天】一説、中天之上下、一説、上宇下宙之間、愚謂く、半天の義、なかぞらと可訓、言ろは、瞻望を遠く半天に極むる也【極娛―】歡娛遊尋を、休暇の日辰に極る也、即今日を指云、上に十旬休暇とあるも是也、

天高地迥、覺宇宙之無窮、（上天下地曰宇、古往今來曰宙）

興盡悲來、識盈虛之有數、

九月の比は、天の限り迄晴切程に、天高く見ゆる者也、雲霧不殘、川河涸減すれば、地も迥かに遠き者也、然れば、天地の間、限りもなく、廣き事を覺ると也

註【上天―】尸子曰、天地四方曰宇、説文、宇、屋邊也、陸德明曰、屋四垂也、釋名云、羽也如鳥羽翼自覆蔽也、宇は、やかすと讀で、屋ののき也、天の垂て地際迄蓋ふは、屋宇の四方に垂下るが如し、故に天地の間を、其に比して、宇と云也、羅山曰、天地の間所有物をば、皆天覆ひ地載る也、故に宇字を、あめがしたと讀り、御宇と書て、あめがしたしろしめすと讀も、此心也、尸子又曰、往古來今曰宙、説文、宙、舟輿所極覆也、徐曰、凡天地之居萬物、猶室居之遷貿而不覺、宙は舟や輿の上の蓋也、天下を蓋ふ、其中に、古の過往、今の到來するは、舟輿の內に、人の出入するが如し、故に古今を宙と云也、羅山曰、昔より今迄を宙と云へば、又今より後の世迄をも宙と可云、古今の間也、然れば宇宙は、天地古今と云義也、此句は、天高地迥にして、本より其無窮事を覺ふと云也、宋史云、陸九淵、生而穎異、年三四歲、問其父賀曰、天地何所窮際、父笑而不答、遂深思至忘寢食、及總角舉止異常兒、見者敬之、他日讀書、至四方上下曰宇、往古來今曰宙、大省悟曰、宇宙內事、乃己分內事、己分內事、乃宇宙內事也、九淵、字子靜、象山先生是也、

【興】詩詁曰、―者、感物而發、增韻、興况意思也、物に感じて、面白き心の起るを興と云、乘興而往、興盡而歸と云は、晋の王子猷が語也【盈虛―】月に盈虧の定數あるに比す、言ろは、興盡れば、亦哀來る、盛衰定數有て、相廻轉する事を知と也、羅山曰、盈虛は、みちかく也世の治亂、人の盛衰、月の盈虧る事有が如し、樂

明が菊を賞玩して居る處へ、王弘酒を送る、此閣の會も九日なれは、此故事を引用る也、羅山曰、又酒に竹葉の名あるにも通ずへし【鄴水—】必讀註曰、鄴乃曹操與王之地、陳思王詩、朱華冒綠池、陳思王は、魏の武帝曹操が次子、文帝丕が弟、名は植、字は子建、統譜曰、十餘歳善屬文、操視其文曰、汝倩人邪、植跪曰、言出爲論、下筆成章、固當面試、奈何倩人、操甚異之、朱華は、荷花也、一說に亭の名【光照—】方輿勝覽、江西路凡十一州、其內撫州に有五縣、臨川其一也、有臨川山、有臨川水、右軍故宅註曰、荀伯子臨川記、羲之爲臨川內史、置宅於郡城東、名曰新城云云、又右軍墨池註曰、在臨川學宮、曾子固記云、王羲之嘗慕張芝、臨池學書、池水盡黑教授王君書右軍墨池以揭、韓子蒼雜記、池中忽時水黑、謂之墨龍、此物每見士之試于有司者、得人必多、率以此爲驗、晉の王羲之、右將軍として、又臨川の內史の官と成、筆墨古今無雙、言心は、鄴水の蓮花其光彩羲之が筆墨を照映すと也、古說に、曹子建は、文帝の弟、滕王は、太宗の弟なる故に、相比並す、青松曰、臨川、在撫州、撫州、屬江西路、洪州、亦江西路也、是以言之歟、舊解に又云、衆賓の文章を羲之に比して云たる歟、羅山曰、今日閣上の事に比する也、

四美具、（良辰美景賞心樂事）**二難并、**（賢主嘉賓）

【四美—】は、四つの美事具備する也、文選謝靈運云、良辰美景賞心樂事四者難并、註【良辰】は、佳辰佳節の義、目出度辰日也、此にては、今日重陽なるを云べし【美景】は、見事なる風景也、此にては、今日晴天にして、風景一入見事なるを云べし【賞心】は、賞玩する心意也、風景見事なれ共、賞する心無れば、千萬遺恨也、今は此閣に衆賓を招請して、賞心不淺也【樂事】は、歡樂の事態也、酒食詩歌絲竹等の、面白き事共有を云【二難—】は、二つの難有事、兼併する也註【賢主】は、賢才なる亭主也、伯嶼を指【嘉賓】は、嘉好のよき賓客也、衆賓を指、羅山曰、以上時維九月と云より是迄は、閣上の山水風景を述たり、古文珠璣、羅大經曰、趙季仁云、觀山水、亦如讀書、隨其見趣之上下、余謂讀滕王閣序、亦如登山臨水、足以觸發道機、開豁心志、爲益不少、

窮睇眄於中天、極娛遊於暇日、

吟詠、首を俯て舒暢し、飄逸の興況、早く移り易しと也、

爽籟發而清風生、纖歌凝而白雲遏、

秋晩之爽氣、發於萬籟之鳴、故其清風颯颯而生【爽】廣韻、烈也、猛也【籟】說文、三孔、龠大者謂之笙、其中謂之籟、小者謂之箹、樂書云、郭璞謂簫、一名籟廣雅、籟謂之簫、又凡孔竅機括、皆曰籟、莊子、人籟則比竹是已、地籟則衆竅是已、天籟則人心之自動者是已、見韻會小補、秋の末に、猛烈の風起りて、萬物を鼓動するを、爽籟と云、爽籟發動して、清風生すと也【纖歌】聲細く歌ふ歌也、女樂を云、薛譚學歌於秦青、自謂盡之矣、辭去、秦餞於郊、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、譚乃謝、終身不敢言歸列子楊朱篇に出たり、又博物志にもあり、青松註云、女樂之纖歌、時凝止於侍宴之側、故白雲爲之遏留、言心は、座中に美人纖歌を唱るが、時時聲を凝せば天を行雲も、其に連て留ると也、羅山曰、昔滕王の此閣にて酒宴し給ふ時の事を、勃今想像也、

睢園綠竹、氣凌彭澤之樽、鄴水朱花、光照臨川之筆、

【睢】千餘切、水名、春秋時屬楚、左傳曰、江漢睢漳、楚之望也、睢園、漢文帝子、梁孝王所築、方三百里、植竹或云脩竹園、詳に史記漢書に見へたり【綠竹】毛詩淇澳篇云、瞻彼淇澳、綠竹猗猗、枚乘梁王兎園賦曰、脩竹團欒夾池水、必讀註曰、睢園綠竹者、意其用淇澳綠竹事、以美閻公之德也、羅山曰、孝王梁に封ぜられて、睢陽に都を立、其園に有竹、故に睢園綠竹と云也、孝王は文帝の子にて、景帝の弟なれば、日本にて、親王を竹園共、平臺共云は、此故事也、今此序に、孝王を以て滕王に比す、或說に、毛詩衞風の淇澳綠竹の故事を引て、閻伯嶼を譽たり云は、不可也、睢園は、淇澳に非ず【氣凌—】陶淵明嘗爲彭澤令、南史曰、淵明九月九日無酒、坐籬邊叢中、摘菊盈把而坐、久之望見白衣人至、太守王弘送酒也、飮醉而皈、言陶潛之樽清矣、而此竹之清氣與此凌厲、言心は、楚の睢園の綠竹、其氣清して、彭澤が樽を凌厲すべしと也【凌】陵と通用、犯侮也、竹氣か清樽に勝りて、潔しと云義也、九日に淵

飛、秋水共長天一色之句、世率以爲警聯、然而落霞者、乃飛蛾也、即非雲霞之霞、土人呼爲霞蛾、至若鶩者、乃野鴨飛逐蛾蟲而欲食之故也、所以齊飛、若霞則不能飛也、見呉獼事始、瑯邪代醉編同之、文選句解云、霞蛾、丹鳥也、劉基覆瓿集、養志軒記曰、翠霞晨飛、玄鶴宵警、東坡四望亭詩云、敢請使君重起廢、落霞孤鶩換新銘、註云、落霞、鳥名、又蒲室詩云、翡翠巢空秋浦淨、落霞飛盡暮江寒、葉樵雲詩曰、駐目碧天烟水外、笑看孤鶩落霞紅【秋水共―】秋の末なれば、江も清て、遠く見度せは、長天の碧なると共に色を同ふす、尋常江海を望めば、遠き末は茫茫として、天と接續して見ゆる者也、註【作此兩―】閻伯嶼此二句を見て、手を打て嘆息して、奇絶玄妙也と云て喜て、内より出て、王勃を尊敬する也、瑯郭代醉三十四、文選褚淵碑、風儀與秋月齊明、音徽共春雲等潤、庾信馬射賦、落花與芝蓋齊飛、楊柳共春旗一色、隋長壽寺舍利碑、浮雲共嶺松張蓋、明月與巖桂分叢、王勃落霞二句本此、然勃之語、何啻青出於藍、雖曰前無古人可也、邵氏聞見錄曰、王勃滕王閣記、落霞孤鶩之句、一時之人共稱之、歐陽公以爲類俳可鄙也、然天高地迥覺宇宙之無窮、樂極哀來、識盈虛之有數、亦記其意義甚遠蓋勃、文中子之孫、尙世其大學、一時之人不識耳、

漁舟唱晚、響窮彭蠡之濱、鴈陣驚寒、聲斷衡陽之浦、

必讀註云、彭蠡、鄱陽湖也、句解曰、彭蠡澤、屬揚州之境、近在洪州、令漁唱之音響、直窮於此澤濱、漁をする舟、晩景に歌を唱るが、其響彭蠡の濱中に、不殘聞へ渡ると也【鴈陣】鴈は群飛時は、行列を成、止る時は、隊伍を成、故に鴈陣と云【衡陽】此地に衡山あり、故に其縣を衡陽と名づく、亦洪州に近し、前に地接衡廬と云是也、衡山の南に有一峯、名回鴈峯、鴈不過此月令云、季秋之月、鴻鴈來賓、言心は、鴈の隊陣を成て止宿するも、風霜の寒冷なるに驚て、飛起叫ぶが、其聲衡陽の浦に斷絕す、浦が廣長なる程に、鴈聲不續也、

遙吟俯暢、逸興遄飛、

【遙吟―】遙吟其思、俯暢其情、飄逸之興、遄速而飛、羅山は此註に本づく、愚謂く、此一篇皆四六の文也、遙吟と逸興と對し、俯暢と遄飛と對す、言心は、遙望の

けて、眼中に充滿し、川澤大ひにして、視矚の驚すと也、羅山曰、盈視は、滿目と云んが如し【盱】大也又文選、睢盱、註云、張目望遠也【矚】視也、

閭閻撲地、鐘鳴鼎食之家、舸艦迷津、靑雀黃龍之軸、

周禮、五家爲比、五比爲閭、註、閭、侶也、二十五家相群侶也、說文【閭】里門也、【閻】里中門也、文選閭閻且千、又蕪城賦、廛閈撲地、歌吹沸天【撲】盡也、謂無空地也、此謂門閭多也、必讀古文註云、撲地、猶拂地也、又排也、猶排比於地勢相軋也、言心は、里門の中、民家多して、地を盡して無餘地也【鐘鳴—】必讀古文註曰、大家將食、必鳴鐘爲號、皆列鼎而食、言ろは、大家には、食時に鐘を鳴して、人を呼集め、鍋鼎を多く列て食ふ也、鼎字の註は、弔屈原賦に見へたり、漢書主父偃傳、五鼎食、文選西京賦、翁伯濁質張里之家、擊鐘鼎食、連騎相過、此文も是を學べり【舸艦—】必讀註云、舸、大船、艦、戰船、迷塞水津、皆彩畫靑雀水馬黃龍靈物於船軸之上、言ろは、大船戰船多く津泊に塞り迷ふ、羅山曰、迷津とは、津津湊湊に滿塞りて多き故に、何れの處にか船を繫んと、疑ひ迷ふ也、其船に靑雀黃龍などを畫かける舳艫あり、是の水神を恐れしめん爲也、

虹銷雨霽、彩徹雲衢、

虹氣已消滅、而新霽光采、始徹散雲衢間、大凡虹は雨と日と相射て生ずる者なれば、朝には西にあり、夕には東にあり、必す雨降んとし晴んとして、ある物也、言心は、虹銷雨晴て、其虹の光彩雲間に映じ徹ると也、羅山曰、虛空は雲の往來する道なれば、雲衢と云也、易に天之衢と云語あり、雲衢の類也、

落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色、作此兩句、閻公撫掌嘆曰、奇哉、

羅山曰、此一對古今の名句也【落霞】一說鳥名、一說飛蛾、愚謂く、落と孤と對し、霞と鶩と對すれば、落霞は、消かゝる霞なるべし、鶩は、あひるなれ共、今はかもと可見、言ろは、霞の消かゝつて天外に在は、一つの鶩と相共に同く飛ひらめくと也、百川學海載子兪子螢雪叢說曰、王勃作滕王閣序、中間有落霞與孤鶩齊

山重れる峯、翠色を高く聳して、上九重の清霄に撐へ出ると也、唐宋詩話に載詩僧詩、洪州太白方、積翠倚穹蒼、萬古遮新月、半江無夕陽【飛閣】は、至て高き樓閣也、東坡詩曰、飛樓湧殿壓山破、朝鐘暮鼓驚龍眠、羅山曰、此閣の勢、聳て飛が如し【流丹】は、閣を丹土にて塗たるが、江水に映り流るを云【無地】は、古義に、閣高して、下に臨て地を見れ共、無か如く也、朱閣之映江流、勢若飛丹、下臨於江上無地之處、言皆水也、言ろは、高閣の丹色江流に落て、丹を流すが如く、下千尋に臨て不見地、至て高きを云、

鶴汀鳧渚、窮島嶼之縈廻、桂殿蘭宮、列岡巒之體勢、

文選句解、白鶴泛汀洲、羣鳧聚淺渚、鶴の止る沙洲、鳧の泛へる洲渚也【汀】を、みきは【渚】を、なきさと訓して、水邊に用るは、大なる誤也、皆水中の沙洲、すと讀べし、野鴨曰鳧、家鴨曰鶩【島嶼】は、皆海中のしま也、鶴汀鳧渚幾らも有て、島嶼をくる〳〵と縈り廻て、一方も無所不足、窮め盡す也【桂殿―】江神之祠宇列桂於殿庭植蘭於宮闕、分列于山岡峯巒之間、各依其體勢、是ば桂蘭を植ると見たり、愚謂く、桂櫂蘭槳と云事あれば、蓋し此所も桂木にて作れる殿、木蘭にて造れる宮にては非すや、體勢は、山岡の形勢也、言ろは、桂殿蘭宮、山の地なりに隨て、列り立と也、羅山曰、此處の水神の祠を、山間に作る、桂を其殿に列ね、蘭を其宮に植て、山の形勢に因て、宮殿を列ぬる也、桂と蘭とは、香しき艸木なれば、神宮の潔を表す、又桂蘭皆秋の景物なれば、重陽の節に取合ても云なるべし、

披繡闥、俯雕甍、山原曠其盈視、川澤盱其駭矚、

【繡】ぬひもの【闥】字彙、門也、漢號禁門曰―、師古曰、宮中小門曰―、羅山曰、闥は、小戸にて、妻戸の類也、とぼそ共讀り、繡にて此を飾れり【雕】ゑりちりばむ、雕物をする事也【甍】謨盲切、說文、屋棟也、徐曰、所以承瓦、いらかと訓す、屋の峯木也、杜工部詩、碧瓦朱甍照城郭、言ろは、門の杜扉などに、種種結構を盡して、繡したるが如なるを開き、雕物をしたる甍の上に俯してのそみ見るそ【山原―】山も原も、廣く開

盡て、水も冷かに、潭清潔也、雲烟の光暉も輕く籠て、夕陽に照映し、山色紫也、羅山曰、春夏より雨降て、溜たる潦水、秋に及て已に涸き盡て、陰氣盛なる故に、寒潭清く澄也、又夕陽に烟横はつて、日光より集る故に、夕の山紫の色に見ゆる也、此兩句秋の景氣也、秋は夕日も如此ある者也、

儼驂騑於上路、訪風景於崇阿、

【儼】説文、昂頭也、又恭也、をごそかと訓ず、又のぞむ義、羅山曰、いかめしき儀式を譽たる辭也、古文奇英註曰、儼、望也、驂騑、馬行不止、謂賓主所來之多也、句解云、驂、馬多也、騑、馬行不止、儼然行馬於道路之上、謂賓主所來之途也【驂】車に四馬を繋る時、轅の内に二疋、外に二疋あり、其外の馬を、驂と云【騑】は、行不止貌【崇阿】大陵也【上路】路上也、毛詩に、谷中を中谷と云が如し、言心は、驂馬騑騑と斜に行て、路上に多來を見れば、威儀儼然とをごそか也、今日登高の佳節なれば、賓主風景を尋て、高岡に遊ぶと也、

臨帝子之長洲（帝子、謂滕王也）得仙人之舊館、

帝子は、滕王元嬰を云、洪州の都督として、此閣を長洲の上に搆建す、長洲は、長き洲崎也、羅山曰、又王の女を帝子と云事もあり、樂天が詩に、帝子吹簫逐鳳凰と云、東坡が詩に、帝子傳聞李と云は、皆娘宮の事也、此にては王の男子也、今山上より是を見下すと也、閣之左右舊館、猶今之官廳也、前後止息其中者、皆在路仙人神也、羅山曰、此閣の左右に、舊き館あり、閣に上んとする者、先休息の爲に館へ來る也、其人は仙人の如しと譽たり、一説には、此州昔し仙人洪崖に住る故に、州の名とする時は、此館も洪崖が舊迹也と云り、必讀古文註曰、閣之左右舊館、猶今皇華館之類、仙人必有所指、句解曰、旁有神仙之遺所、

層巒聳翠、上出重霄、飛閣流丹、下臨無地、

【層巒】は、重なれる峯也、羅山曰、巒は、峯の細く尖なるを云【聳】は、高也【霄】は、霄漢、そらと讀、峯巒層疊、聳其翠色、上出于重重霄漢之表、言ろは、洪州の西

人なれば、天子の武具の入たる倉の中に、何物も具て、用次第に無レ所レ不レ有が如し、故に杜武庫と稱す、今借て王將軍が才具りたるに用ふ、言心は、戟如二紫電一戈如二清霜一なるを列ぬる王將軍は、才用具て、武庫の無レ所レ不レ有樣也とぞ、羅山曰、以上發端より此迄は、洪州の地形と、賓客參會の事とを述たり○瑯邪代醉編三十四、三國典略曰、蕭明與二王僧辨一書、霜戈電戟、無レ非二武庫之兵一、龍用犀渠、蓋是雲臺之仗、王勃紫電清霜王將軍之武庫、正用二此事一、以二十四歲之童子一、胸中萬卷、千歲之下、宿儒猶不レ能レ知二其出處一、豈非二間世奇材一、杜子美、韓退之、極二其推服一、良有レ以也、

家君作レ宰、（勃父福時爲二交趾令一）路出二名區一、童子何知、躬逢二勝餞一、

易曰、家有二嚴君一、家君は、父を稱する也【注】勃父福時爲二交趾令一【宰】は、主宰、つかさ也、令官と成を云【名區】名ある區域也、洪州を稱美して云、言心は、我父交趾の令に成て赴かるゝが、其路次なれば、此地を經過して、今日の宴會に逢と也【童子】增韻、十五以下、謂二之童子一、論語憲問篇、闕黨童子、疏曰、未レ冠者之稱、句解曰、勃自稱也、曰、我何處見レ知乎、四字は左傳鄭產が故事也【餞】說文、送レ去也、徐曰、以二酒食一送也、又飲二酒其側一曰レ餞、言心は、我少年にして、何の所レ知もなし、卻て我結構なる餞別に逢と也、

時維九月、序屬二三秋一、

【時】は、四時此會時分いつぞと云ば、九月也【序】は、時序【三秋】亦五月也、四時の次序いつぞと云ば、三秋に當る也、即九月也、萬文一統薰份曰、時維九月以下描二寫當時光景一、恍若レ入二眼珠璣一侵レ眸花柳一、即五尺童子、亦知レ爲二綺室之上珍、名園之奇品一也、

潦水盡而寒潭淸、煙光凝而暮山紫、

【潦】字彙、行潦、路上流水、左傳、潢汙行潦之水、又雨水大貌、月令丘濕水潦、にわたづみと訓ず、雨後に、道路に溜たる水也、梅雨を、梅潦と云も是也、韓昌黎詩云、潢潦無二根源一、朝滿夕已除【潭】音彙、水深處、ふちと讀、八月の時分には、秋潦とて長雨降事ありて、川潭皆濁る者なるが、九月なれば、打續き天氣晴て、潦水

の高に喩へ、起鳳は、詞華に譬ふ、羅山曰、躍り騰る蛟龍の光、飛起樣なる鳳凰の五色の翼照耀くを、孟學士が文章に喩る也【孟學士】註孟浩然也、句解も亦同じ、萬里曰、王勃、唐第三主高宗時人、孟浩然、同第七主玄宗朝人、自高宗即位永徽元年庚戌至玄宗即位開元元年癸丑、凡六十四年、勃之此序、豈言孟浩然乎、是註誤耳、爲孟嘉可也、字萬年、江夏人、桓溫甚重之、九月九日、溫燕龍山、僚佐畢集、時佐吏並著戎服、有風至吹嘉帽落、嘉不之覺、溫命孫盛作文嘲嘉、嘉即答之、其文甚美、此勃之序、九月九日所作、宜用孟嘉之事也、羅山曰、此時座中に、孟を姓として、學士の官に成たる人、文章の宗匠あるを云也、此註に孟浩然と有は、誤也、王勃は、高宗の時の人、浩然は、玄宗の時の人なれば、六十餘年隔れり、別に孟浩然と云者、不有兩人は、此學士は、非浩然、其上浩然學士の官と成たる事なし、又一說に、孟嘉を指と云り、是は晉の孟嘉、九月九日、龍山にて桓溫に會せし事あれは、今の重陽に引合て云共、曾て慥かならず、嘉も亦學士の官と成事なし、凌稚隆曰、孟學士、舊註謂孟浩然非也、序作於高宗時浩然方生、且足跡未嘗到江西、亦

未嘗爲學士、必當時座中人、王將軍、舊註謂王濬者亦非、皆當時人也【詞宗】は、文章の宗匠也、言心は、高才天に騰る蛟龍の如く、文章飛起つ凰鳳の如くなる賓客は、孟學士が文章の宗師たる也尤も可喜尙之【紫電】いなびかりの紫赤色に光り度るを云ふ、句解曰、紫電喩光暉、淸霜喩節操也、愚謂く、紫電を戟に譬へ、淸霜を戈に喩ふ、說は後に見へたり【王將軍注】王濬金吾將軍、句解云、晉王濬金吾將軍、平呉者、可比杜預之武庫無所不有、晉書列傳十二、字士治、王濬は、晉の武帝の臣也、羅山曰、此註に、晉王濬金吾將軍と有は、誤也、濬は、晉の大將軍として、呉を平げたる人也、然共紫電淸霜の故事なし、是も今日座中に、王を姓として、將軍と成たる人有を云也、又代醉編には、王僧辨を云とあり【將軍】事物紀原曰、秦有中尉、漢武帝太初元年、更名執金吾、蓋取執金革以禦非常也、又曰、自晉獻公作二軍而公將上軍、故將軍之名、特出於此【武庫】晉書列傳四、杜預傳云、預任內七年、損益萬機、不可勝數、朝野稱美、號曰杜武庫、言其無所不有也、杜預も、亦晉の武帝の臣也、儒者にて大將と成、又政務を執行ふ、文章才能勇武相兼たる

油戟、柳文、侯其門有亞夫之棨戟焉、棨は、木にて戟の如に造り、赤色の桐油を以て包み、しほくひに小旛を付ると也、戟は、兩邊横刃と云て、十文字の鎗也、言心は、閻伯嶼威儀正しき人なるが、此州の守護として、棨戟を列て、京師より遠く來臨せり【宇文】南單于之後、有晉廻因獵得玉璽以爲天授、鮮卑謂天爲宇、因號宇文、併以爲氏【注】宇文鈞新除澧州牧、道經于此、宇文鈞新に州牧と成故に、新州と云【懿範】古文奇英註、懿美之儀範、見事なる威儀と云意也【襜帷】文選句解、蓋座車馬者蔽前之衣、猶今之蔽膝也、在旁曰帷、猶幔之垂也、後漢郭賀、勑行部去襜帷使百姓見其容服、襜は、まへだれ、衣裳の上に垂る也、帷は、かたびら共、たれぬの共讀て、車上の幕也、言心は、宇文鈞新たに澧州の守護に拜除せられて、威儀を刷ひ、任所へ赴が路次此を經過して、暫時車を留て、此會に被預と也【除】字彙拜官曰除、謂去故官就新官也、除は、のぞくと讀、先に官に成たる人を除て、後の人其代りに成故に、除と云【澧州】水出衡山、因爲州、

十旬休暇、勝友如雲、千里逢迎高朋滿座、

何晦夫曰、時九月登高、若十旬而休息、且少暇者【旬】十日也、十旬は、百日也、十日に二日づゝ、君より暇を被下て、休息するが、幸に今日隙日にて、好友如雲に集まると也【休暇】は、天子より暇を給りて休息せしむる也、漢書高祖紀注、孟康曰、古者名吏休假曰告、假と暇と通用【勝友】は、すぐれたるとも也【逢迎】むかへむかふる也、王維詩云、主人能愛客、終日有逢迎、又逢は會、迎は逆也【高朋】志高き朋友也、言心は、十旬許り休暇の間に、勝友如雲多集り、千里も外なるを招き迎て、高朋座席に充滿する也、羅山曰、此時九月九日、此閣に上るは、宮仕する者、十旬許の休息の暇あるが如し、

騰蛟起鳳、孟學士之詞宗、（孟浩然也）**紫電清霜、王將軍之武庫、**（晉王濬金吾將軍）

晦夫註曰、蛟氣之騰、光彩奪日、鳳毛之起、文采暉空、喩才華也【蛟】は、龍の無角者也、古義に、騰蛟は、才

かんにすぐれたる州郡、霧の多きが如くに、並び列なると云心也、句解又云、俊抜光彩之人物、如星之環拱以奔馳、俊秀とすぐれたる人、文章光彩ある輩星の多きが如く馳廻ると也、皆此地の勝れたる事を云、

臺隍枕夷夏之交、賓主盡東南之美、

字彙、觀四方而高者曰臺、隍、城下池也、無水曰隍、句解曰、夏、謂東南揚州之地、夷、謂正南荊楚之方、而洪之亭臺城隍、實枕藉于此夷夏之交【臺】うてな【隍】ほり【枕】まくら、猶言依臥也、維山曰、以頭物を枕するを云、此にては、のぞむ共、よる共可讀、赤壁賦枕藉も、此義也、言ろは、此國の亭臺城隍、夷夏の間に枕藉する也【夷】ゑびす、荊楚は、本蠻夷也【夏】大也、明也、中國の大にして、文明なるを云、都の義也、論語に諸夏と云も是也、中國九州の內、東南揚州の域を指【交】あはひ、交加は、參錯也、今は交間を云、言心は、此洪州の臺隍、南夷と中夏との交間に據て在也、猶人の其處に依臥が如し【賓主】句解云、主謂此州都督、而州之主者也、賓者、他州之賓客、本州之賓僚、會此閣者、皆東南人物之美也【賓】まらふと【主】あるじ【東南】洪州は、中國の巽の方也【美】佳士也、言心は、此閣に會する賓客も、主人の閻伯嶼も、皆東南州の佳士也、爾雅曰、東南方之美者、有會稽之竹箭焉、又淮南子にもあり、

都督閻公之雅望、（閻伯嶼爲洪州刺史）棨戟遙臨、宇文新州之懿範、（宇文鈞新除澧州牧、道經于此）襜帷暫駐、

【都督】すべたゞす、大將として、軍事を總て督すの官也、事物紀原曰、魏文黃初三年、初置都督諸軍事、然魏初受漢禪時、已有持節都督、則非三年初置也、大抵魏所建官耳、維山曰、都督は、刺史の職、太守の事也、日本にては帥と云是也【閻公】註閻伯嶼爲洪州刺史、伯嶼都督の官を兼て、此州の守護に成と見へたり、【雅望】雅正之聞望、謂威儀可望法也、たゞしきのぞみ、世に聞へたる也、毛詩に、令聞令望と云が如し【棨戟】古今註云、前驅之器、以木爲之、一說、棨形如戟有幡、漢制、假棨戟以代斧鉞、以赤油韜之、亦謂之

目、遣使送一劍並土與華、留一自佩、或謂煥曰、得二送一、張公豈可欺乎、煥曰、本朝將亂、張公當受其禍、此劍當繫徐君墓樹耳、靈異之物、終可化去、不永爲人服也、華得寶劍愛之、常置坐側、華以南昌土不如華陰之赤土、報煥書曰、吾觀劍文、乃干將也、莫邪何復不至、雖然天生神物、終當合耳、因以華陰土一斤致煥、煥更以拭劍、倍益精明、華誅失劍所在、煥卒、子華爲州從事、持劍行經延平津、劍忽於腰間躍出墮水、使人沒水取之、不見劍、但見兩龍各長數丈、蟠縈有文章、沒者懼而反、須臾光彩照水、波浪驚疑於是失劍、華嘆曰、先君化去之言、張公終合之論、此其驗乎、豫章の豐城は、洪州の地也舊牢獄の跡に、石の函埋みてあり、其中に二劒あり、雄を干將と云、雌を莫邪と云、鍛冶の名人干將、其妻莫邪、二人として作れる劒なれば、即其夫婦の名を、直に劒の號とす、其精氣斗牛を衝射る、雷煥は掘出して、雄劍を張華に分ち與へ、雌劍を自ら佩り【斗牛】は、揚州吳越の分野星也、古説に、北斗牽牛と云は、誤也【人傑】漢書、張良、蕭何、韓信、謂之人傑、古文奇英註云、人之英傑、傑は、萬人に勝る者を云、今は徐孺子を指、羅山曰、是は人中の豪傑と云義也、此にては、人の勝れたるは、洪州の地の靈なるに因と云心也【地靈】奇英註曰、由地之發靈、靈は、靈異、常の所に替て、奇異の地を云、亦徐孺子が此地の產なるを指、三體詩註、徐孺子宅、在洪州【徐孺下―】後漢書列傳四十三、徐穉、字孺子、豫章南昌人也、家貧常自耕稼、非其力不食、恭儉義讓、所居服其德、屢辟公府不起、時陳蕃爲太守、以禮請署功曹、穉不免之、既謁而退、蕃在郡不接賓客、唯穉來、特設一榻、去則懸之、後擧有道家、拜大原太守、皆不就云云、注、豫章郡、本後漢洪州之南昌縣、即今豫章縣、徐孺子は、洪州の人にて、才德名譽の者なれば、此所靈異不思議の地にて、箇樣の人傑を出せり、陳蕃本より有名人也、洪州の太守と成て、郡を治しが、妄に賓客を接待せす、只徐孺子來れば、別して一つの榻を設て、是に坐せしめ、對談せし也、其榻を常に縋懸て置、孺子が來るを待て、下し坐せしむる故に、下榻と云【榻】字彙、音塔、牀狹而長者、

雄州霧列、俊彩星馳、

句解曰、雄壯之州、鬱葱氣浮、加氤氳之霧列於上、さ

江の首に當る程に如此云と也【五湖】も、亦註に詳也、句解、此據其中、若帶之垂而相爲貫穿焉、五湖、洪都の腰を廻れば如帶也、古義に云、洪都五湖の眞中に當る程に如帶也、是にて能句解の心に合へ共、葢し洪都五湖の中に取廻さるゝにては有まじき歟、上の洪都三江の上流に在と云註の心なれば、五湖の中に在ながら又三江の首に據也文勢地形如何、未詳、宜考【控蠻荆—】句解云、荆楚、本南蠻之區、此則控扼之、閩越連東甌之彊、此則引接之、謂其往來于此、道理之所通也【控】字彙、引也、南蠻荆楚に引連り、甌越に引接の、境土接續とて、往來道路の相通ずる所也、羅山曰、荆も、楚國也、昔は南蠻の内なれば、蠻荆と云也、此處へ引寄來也、越は、部類多き故に、百越と云、甌も、南越の内也、故に曰甌越、此處へ引接る也、荆へ往にも、越へ往にも、洪州は、其往來の路次也、

物華天寶、龍光射牛斗之墟、豐城有劍、曰干將莫耶、其光射斗牛、雷煥得之、張華分其一焉 人傑地靈、徐孺下陳蕃之榻、徐穉、字孺子、洪州人、陳蕃爲豫章太守、特設榻以待之、

句解曰、物之光華、乃天之瑞寶也、此地靈異なる故に、物の光華ありて、天の瑞寶なる者を出す、其を何ぞと云ば、龍泉の劔也、龍光は、劔の光也、劔を龍泉と云、且又其劔化して龍と成故に、龍光と云、其劔土中に埋まれて有しが、夜に成れば、其光氣天に衝上り、斗牛二星の在處を射ると也、墟は、大丘也、此にては、只其星の在處と可見【豐城有劍—】晉書列傳六、張華傳曰、初呉之未滅也、斗牛之間、常有紫氣、道術者皆以呉方强盛、未可圖也、惟華以爲不然、及呉平之後、紫氣愈明、華聞豫章人雷煥妙達緯象、乃要煥宿、屏人曰、可共尋天文知將來吉凶、因登樓仰觀、煥曰、僕察之久矣、惟斗牛之間、頗有異氣、華曰、是何祥也、煥曰、寶劔之精、上徹於天耳、華曰、君言得之、吾小時有相者言吾出六十、位登三公、當得寶劔佩之、斯言豈效與、因問曰、在何郡、煥曰、在豫章豐城、華曰、欲屈君爲宰、密共尋之可乎、煥許之、華大喜、即補煥爲豐城令、煥到縣、掘獄屋基、入地四丈餘、得一石函、光氣非常、中有雙劔、並刻題、一曰龍泉、一曰大阿、其夕斗牛之間、氣不復見焉、煥以南昌西山北巖下土以拭劔、光芒豔發、太盆盛水、置劔其上、視之者精芒炫

世に改めて、洪州府を置、昔洪崖と云仙人、此處に居たりし故に、洪州と名付と云り、下の句に仙人舊館とあるも是を指也、方輿勝覧曰、洪都、隋文帝以洪崖所居、遂以名州、禹貢揚州之域、言心は、此滕王閣の地は、昔の南昌の郡、今の洪都の府也、府は、國府とて、州郡の守護治所の所在也【註】【在隆興府】宋の時に、洪州を又改て此名とす、

星分翼軫、（以星之分野觀之、南方楚荊州之域、翼軫之宿直焉）地接衡廬、

【註】【以星―】星の九州の地を分て司る所を、分野と云、文選魏都賦、列宿分其野、註曰、九州分野、各有星紀【翼軫】は、二十八宿の內の二星、南方荊楚の域を司る【域】字彙、區域也、界局也、其國の分內を云、東方の七星、角亢氐房心尾箕、北方の七星、斗牛女虛危室壁西方の七星、奎婁胃昴畢觜參、南方七星、井鬼柳星張翼軫、合て二十八宿、一方に七つ宛ある也、淮南子天文訓云、星部地名、角亢鄭、氐房心宋、尾箕燕、斗牽牛越、須女吳、虛危齊、營室東壁衞、奎婁魯、胃昴畢魏、觜嶲參趙、東井輿鬼秦、柳七星張周翼軫楚と云り、史記正義云、楚地翼軫之分野、今之南郡、江夏、零陵、桂陽、武陵、長沙、及漢中汝南郡、後陳魯屬焉【宿】は、星也【直】は、當也、言心は、此南昌洪都は、星の分野を以て云ば、二十八宿の內、南方七宿の中の、翼軫の二星、分つて是に當る、禹貢の九州にては、楊州の區域戰國の時は楚に屬す、荊州も、亦楚の地也楊誠齋錦綉策曰、滕王閣記、乃一段錦而或議其星分翼軫、爲分野之誤、阿房宮賦乃一尺璧而或譏其言未雲何龍爲用事之失、嗚呼饒舌如此【地接―】句解云、以言其地勢之所接、則衡山峙立於西南、廬山近聯於北境、言心は、此洪州の地は、衡山廬山に接續する也、

襟三江而帶五湖、（三江者、荊江在荊州、松江在蘇州、浙江在杭州、五湖者、太湖在蘇州、鄱陽湖在饒州、青艸湖在岳州、丹陽湖在潤州、洞庭湖在鄂州）控蠻荊而引甌越、

【襟】字彙、衣之交衽處、えりと讀【三江】は、註に見へたり、句解云、此據其上流如三江之衣襟焉、三江は、洪都の上を遶れば、人の衣の襟の如し、但し句解の註なれば、洪都は、三江の上邊にあり、古義に、洪都、三

敎以不敏、勃欲躬修年醴、進於廟下、以答神賜、叟俛首而笑曰、玆常禮、不須用也、子就席、吾復語子、既久、勃告曰、某之壽夭窮通可得而知否、叟曰、壽夭事係陰府、言之泄陰機而有陰禍、子之窮通、言之亦無患、子之軀、神强而骨弱、氣淸體羸、況腦骨虧陷目睛不全、子雖有不羈之才、高世之俊、終不貴矣、況富貴自有神主之、孔子所謂秀而不實者也、請與子別、叟去數步、復還曰、子過長蘆、祠以紙錢十萬焚之、吾有博債未償也、勃曰、諾、叟冉冉沒水際、勃以叟言其終弗貴、忽忽不樂、過長蘆忘叟之言、有群烏飛舟前、或栖桅檣上、舟亦不進、舟人驚駭、勃問此何處、曰、長蘆也、遽取紙焚之、則烏去舟行、后勃竟無位、如叟所言耳、羅隱有詩曰、江神有意怜才子、倏忽威靈助去程、一席淸風雷電疾、滿碑佳句雪冰淸、不惟麗藻傳千古、隨手雄名動兩京、若匪明靈佐辭客、至今佳景絕無聲、容齋隨筆曰、唐人詩文、或於一句中自成對偶、謂之當句對、蓋起於楚辭蕙烝蘭藉桂酒椒漿、桂櫂蘭枻、斲冰積雪、自齊梁以來、江文通庾子山諸人亦如此、如王勃宴滕王閣序一篇皆然皆然、

王勃

唐書列傳一百二十六文藝傳上、王勃、字子安、絳州龍門人、六歲善文辭、九歲得顏師古注漢書讀之、作指瑕以擿其失、麟德初劉祥道巡行關內、勃上書自陳、祥道表於朝、對策高第、年不及冠、授朝散郎、數獻頌闕下、沛王聞其名、召署府修撰、論次平臺秘略、書成、王愛重之云云、才子傳曰、王勃、太原人、王通之諸孫也客於劍南、登山曠望、慨然思諸葛之功、賦詩見情、又嘗匿死罪官奴、恐事洩殺之、事覺當誅、會赦除名、父福時坐是左遷交趾令、勃往省覲、途過南昌、時都督閻公、新修滕王閣成、九月九日大會賓客、將令其壻作記以誇盛事、勃至入謁、師知其才、因請爲之云云、文不加點、滿座大驚、酒酣辭別、師賜百縑、卽舉帆去至炎方、舟入洋海溺死、時年二十九、勃屬文綺麗、心織而衣、筆耕而食、先磨墨數升、則酣飲引被覆面而臥、及寤援筆成篇、不易一字、人謂之腹藁、異人相之曰、秀而不實云云、

南昌故郡、洪都新府、（在隆興府）

【南昌】古文奇英註、卽洪都、漢の時の南昌郡を、隋の

自所賴至之哭第八段、自勃三至萬里第九段、自非謝至何慙第十段、自嗚呼至末第十一段○何晦夫句解曰愚謂此序四長、一長於張大形勢、二長於體狀景物、三長於頓挫言辭、四長賦詩而未免有三短、全用四六駢儷、一短也中間語意重複、二短也、鋪敘無倫自敘太多、三短也、其所以爲文之初變、晚學妄議、識者鑑之、

撫遺新說所載羅隱中源水府傳、唐王勃襟虛秀發宿鍾英氣、童齡之年、辭藻雄麗、爲倫輩所心服、嘗隨舅江左、舟艤馬大王廟前、勃乃登岸獨遊一處、時年十三歲矣、望山半危欄沉水飛閣架巖、勃征、乃古神祠也、勃謂神、稽首而去、復遊故路還舟、水次見一叟、雖年齡高邁、然容服純古、勃異之、因就而揖焉、叟曰、可於石磯就坐、叟曰、君非王勃乎、勃曰、與丈人昔非親舊、素昧平生、何知勃之姓名也、叟曰、知之久矣、勃知其異人、正容虛己、危坐拱手以待之、叟曰、滕王閣作記、子知乎、勃曰、知之、叟謂勃曰、子有清才、何不爲之也、亦足以垂名後世、勃曰、此去洪幾何程、曰、水陸七百里、今晚安可至也、叟曰、子登舟矣、吾助汝清風一席、勃再拜敢問叟、仙也神也、以拙末悟、叟曰、適往遊祠、乃中源水府、吾主此祠、笑曰、子回幸復過此所得濡毫、可均有也、勃遽登舟以順風發帆擊鼓、舟去如飛、未晚、舟抵岸、勃彈冠整衣、躬詣府下、府帥閻公以召江左帥名賢畢集堂上、酒未行、乃命朱衣吏以筆硯授衆賢、遞相推讓、迤邐辭揖、至勃則留筆硯、絕不推拒、閻公大怒而起歸內閣、顧謂左右曰、吾新帝子之舊閣、乃洪都之絕景是以悉集江東西英俊、俾爲萬古名、是何小子輙當之也、命數吏曰、得句即誦來、勃引紙方書兩句、則一吏入報曰、南昌故郡、洪都新府、公曰、此先儒之常談、一吏又報曰、星分翼軫、地接衡廬、公曰、故事也、一吏復報曰、襟三江而帶五湖、控荊蠻而引甌越、公即不語、自此吏往反來報、公但頷頤而已、至落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色、不覺引手鳴几曰、此天才也、忻躍復主席、勃文成、閻閱之曰、子落筆、似有神助、令遍示群英、皆面若土鐵、貼然心服、俱不敢指一字擬議、公乃召勃上位、語左右曰、令帝子聲流千古、吾之名聞後世、使洪都風月江山無價、俱子之力也、方圖報德、自茲公日給以讌私、勃告行贈之五百縑、旋舟再過向遇神處、登岸則臾已坐前石磯上、勃再拜曰、神既借以好風、又

遍く座中の客人に請たれ共、何れも思切て、我こそ書んと云て、其所」請に承當する者なき也【勃在席―】王勃父と作ふて、長安より南方へ往とて、洪州を通り、折節此會席に在し也、座中にて最も少年也けるが、其所請を受取て、少とも辭退せず【都督怒―】伯嶼殊に我婿に艸稿を書せて、恐らくは誇んと思へるに、王勃か少年にして、大膽なる者哉と、大きに怒て、内に入て不」出、奉行を遣して、王勃が所」書の文を伺ひ見せしむる也【輒報―】吏王勃が作る文を、一句書付る毎に、左右を申し來るに、發端より段段に書ほと、語句彌々奇絶也【乃矍然―】矍、厥縛切、說文、鳥欲」逸走」徐曰、左右驚顧、伯嶼肝をつぶして、驚き視て、王勃は天然の奇才也と云【請遂―】此上は、全篇作られ候へと請て、此文を成就せしめたる也【極歡―】此文を賞玩して酒宴をし、歡樂を極めて退出すると也【勃字―】名は實名、なのり也、字は、假名也、勃は文中子王通が孫也、少年より秀逸とすぐれたる才能ある也【高宗召―】高宗聞及び召寄られて、博士の官に被」成、博士の註は、進學解の下にあり【因作―】此時諸親王雞合を好まれけれは、王勃闘雞檄文を作れり、雞合の事を、

合戰に喩て書也、高宗叡覽して大に怒り、彼勝り此劣ると褒貶するは、何れに行末王子達を勝劣して、彼此交女互に禍を搆る事のもよふし也とて、黜罰して流さるゝ也【檄】は、軍中の注進狀也、王勃其文體に似せて雞の勝負を書たる也【漸】事之端先覩之始也、羅山曰、此檄文にて、諸王連枝の中惡く成て、雞を搆る兆し、漸く進來んと云義也、句解曰、乾符中、沛主聞」其才名」辟入」府、時諸王闘」雞、勃戲爲」檄」雞文、高宗怒曰、此即交構之漸、乃黜」虢州參軍」【後到―】呂東萊唐書文藝傳曰、王勃祖通、隋末居」白牛溪」敎」授門人」甚多父福時繇」雍州司功參軍」坐」勃故」左」遷交趾令」勃往省云云、王勃後に父福時を交趾に見廻とて、路次鍾離を過て通る、因て此宴會に預つて、此序を作ると也、愚謂く、本文に家君作」宰、路出」名區」童子何知、躬逢」勝餞」と云は、父と同道して、南方へ往と見へたり、如何【任所】は、交趾の令に任して居る所を云【省侍】曲禮曰、昏定而晨省見廻を云○萬里曰、此篇十一段、自」篇首」至」之表」第一段、自」都督」至」武庫」第二段、自」家君」至」勝餞」第三段、自」時維」至」一色」第四段、自」漁舟」至」之客」第五段、自」懷帝」至」何年」第六段、自」鳴呼」至」明時」第七段、

往―】存義が永州を去て往ほどに、日比の政道の善を賞し、餞送して酒食を持參し、其上に重て此一篇の序を書て遣す也、羅山曰、事文類聚云、孔子適周、見老子辭去、老子曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言と云から、辭を以て送る也、

○滕王閣序　幷詩

○唐高祖子元嬰爲洪州刺史、置此閣、時封滕王、故曰滕王閣、咸亨二年、閻伯嶼爲洪州牧、大宴于此、宿命其壻爲序以誇客、因出紙筆偏請客、莫敢當、勃在席最少、受之不辭、都督怒遣吏伺其文、輙報一再報、語益奇、乃矍然曰、天才也、請遂成文、極歡而罷、勃、字子安、少有逸才、高宗召爲博士、因作鬪雞檄文、高宗怒謂有交構之漸、乃黜後到父任所省侍道過鍾離、九月九日會此而作此序、

羅山曰、序を本に書て、其次てに作詩、故に如此云、若詩を本と書て、其上に序を作らば、滕王閣詩幷序と題すべし、執筆者可有此心得也【注】【唐高祖】姓は李、名淵、西凉王李暠七世之孫、唐の第一代の王なる故に、其廟號を高祖と云【子元嬰―】唐書列傳第四、元嬰者、高祖二十二子、柳寶林所生云云、方輿勝覽十九、滕王閣在郡城西、唐高祖之子嬰所建、夾以二亭、南曰壓江、北曰挹秀【刺史】事物紀原曰、先秦以御史監郡、漢文帝十三年、遣丞相史出刺、幷督察御史、武帝元封五年、又置部刺史察州云云、袁了凡綱鑑、漢宣帝地節二年注、刺史、漢官名、秦以御史監郡、漢初省之、文帝時遣丞相史出刺諸州、省察御史、謂之刺史、唐改大守、今因之、此官、御史として横目などの如の職を兼て、州郡を督し察する事を主る、故に刺史と名つく、唐の高祖の子元嬰、洪州の刺史と成る時に、此閣を作る、其時元嬰滕王に封爵せらるゝ故に、其閣を滕王閣と云也【封】は、封建也、國郡の守護に成を云、其土に往て、其制度を守る義也【咸亨―】唐の第三主高宗の年號也【閻伯嶼】排韻、唐時爲豫章都督、洪州の守護に成を牧と云、字彙曰、古者州長謂之牧、亦取守養之義、民を養ひ守る義也、牧は、養也、太守は、民を養ふ事を職とする故に、牧と云、尙書に十有二牧、又孟子に、天下之人牧と有も、皆是也【大宴―】大客人を此閣に會して、酒宴する也【宿命其婿―】前かどより、內內に其婿に云付て、序文を作らせて、客人に誇りふけらかさんとする也、宿命は豫じめ命令する也閻伯嶼婿吳子章、隨婦翁守洪都、時滕王閣落成閻俾作記、欲於席上出以誇客、王勃爲之、閻意不悅【因出紙―】伯嶼紙筆を出して、此閣の記を作られ候へと、

過、史略曰宋趙抃日所為、夜必焚香告于天、

訟者平、賦者均、老弱無懐詐暴
憎、其為不虚取直也的矣、其知
恐而畏也審也、〔謝云〕應前關鎖、

【訟】爭辯也、うつたえと訓ず、公事訴訟也【平】韻會、皮命切、平其不平曰平、綱鑑補註、謂録囚覆奏使從輕也、漢書張釋之傳、廷尉天下平云云、民の公事うつたへ有れば、平反して理非を正し、愁冤なき様にする也【賦】貢賦也、年貢出物を云、民より賦斂して取物をば、平均にして依怙むらなき様にする也【老弱】民の老たるも弱きも、存義が信明なるに服して、詐を懐て、上を不欺、徳に懐て暴虐を不成、上を憎む事なしと也、昔し吏民鄭の子産を欺く事不能、宓子賤を、欺くに不忍、西門豹を敢て不欺、及び韓延壽劉寛を、吏民不忍欺の類是也【其為不虚―】存義が所務如此なれば、徒に空く直を取て、事を怠たるに非る者明白也、能理に達して、恐れ畏て、大事にかくる事、亦審かにして紛なしと也〔謝云―〕前の受直怠事、達理恐畏等の數語に相應じて、關鎖としめくゝり有と也、

吾賤且辱、不得與考績幽明之
説、〔書舜典、三載考績三考黜陟幽明〕於其往也、故賞以
酒肉、而重之以辭、

是より子厚自ら云、我本より賤ふして、不得顯仕之列、且又王叔文が與黨に坐せられて、此永州に遠流せらる、是辱めらるゝ也、我在朝廷て、三年に一度、其民を治むる功績を考へて、惡き者を罰し、善者を賞するの沙汰に預る事を不得、故に其方能仕置法度をする人ぞと云事を奏聞せず、心に思ふ許ぞと也【注】【書舜典三載―】正義曰、三年一閏、天道之成、人亦可以成功、故以三年考校其功之成否也、九年三考、則久之能否可知、幽明有別、黜退其幽者、或奪其官爵、或徙之遠方、升進其明者、或益其土地、或進其爵位也【績】功也、いさをしと訓す、政の效也【黜】は、しりぞくる也【陟】は、のぼす也【幽】は、惡也【明】は、善也、三年毎に其功效を考へ、惡を罰して官を削り、知行を貶し奪ひ、善を賞して官位を進め、所領を加増する也【於其

向使傭一夫於家、受若直、怠若事、又盜若貨器、則必甚怒而黜罰之矣、譬得切、

譬を設て云、是より前に薛存義が家に、何者ぞを一人傭ひ、何にても仕事をせん時、其方の日用賃を取ながら、其すべき所作を怠り、其上に又其方の財貨道具を盜みたらば、必定甚しく怒て、黜け貶し、罰を行はんと也【註】譬得切とは、吏の俸祿を取て、其務を怠り、且又貪虐をするに、此譬を引事、親切にして能的當したりと也、

以今天下多類此、而民莫敢肆其怒與黜罰、何哉、勢不同也、勢不同而理同、如吾民何、一篇骨力、

今天下に、此喩に似たる事甚だ多けれ共、民思切て、其吏を怒り黜罰する事を、仕度まゝにせざるは、何故ぞや、民は下、吏は上にして、其形勢が違ふて、思ふまゝに成ぬ也、され共其上下の勢こそ替れ、道理は一同なれば、黜罰せぬは無念也【如吾民何】とは、あら不便の民や、何とせうぞと嘆息する也【註】【一篇骨力】人の骨力と成處、此段干要ぞと也、

有達于理者、得不恐而畏乎、

能物の道理に通達したる者あらば、箇樣の事を、うろりとは心得まじ、深く恐れ畏りて、其事務を勤勵すべしと也、

存義假令零陵二年矣、蚤作而夜思、勤力而勞心、

【假】は、權官とて、實の守護にては無也【令】は、守令とて、守護職也【零陵】本集註、韓曰、永州縣名、存義此二年の間、零陵に假の令と成れり【蚤作】早旦に興て、吏務を勤め、夜は亦民を治ん所以を思案する也【勤力】精力を勤て、其職を怠たらず、心思を勞して、事を謀る、勤力は蚤作に係り、勞心は夜思に係る、書冏命篇曰、予嗣先人宅丕后、怵惕惟厲、中夜以興、思免厥愆、論語學而篇、曾子曰省吾身、爲人謀而不忠乎、黄山谷書曰、士朝而肄業、晝而服習、夕而計

職、吏曰役、ゑだちと訓す、諸役に被使を云、凡そ人、代官守護職に成れば、百姓を使ひ者とすると思へり、子厚は一向左樣にては無し、蓋し民の爲に守護し、無亂暴盜賊樣にせんと謀る事なれば、郤て民の爲に役使せらる、民を役使するのみを吏の務とせず、民を治め、能愛養し、橫道に聚斂せず、公事訴訟を分明に取さばき其上にて、農の隙には、兵法を講習し、河堤道橋の修理、家屋破損の普請をも、少少さすべき事也、然れば吏たる者、民を役せざるにてもなし、亦事に依て可用程に、民を役使するばかりにも非すと云也註【文老意佳】文章老成とひねて、嫩弱なる事なく、意趣佳絶なる也、羅山曰、人の年老たる如く、文に功の入たるを云、

凡民之食於土者、出其十一、傭乎吏、使司平於我也、（呂云）下得的當

【食於土】とは、五穀百菜は、皆土地より生ず、民其を作て、食物とする故に云也【出其十一】孟子滕文公上篇曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實什一也（詳于大全）民の作り出す所を、十分一年貢に取也【傭】韻會、餘封切、雇作謂之傭、賃を出してやとふ也【司平】とは、民より吏を雇て平治する事を主どらしむる也、言心は、民の耕作して、土地に食者、其內十分の物一つを、公義へ出し奉て、年貢とす、君より代官を置て治めさせらる、然れば民賃をかひて雇ふて、平治を主らしめ、我等を能治めて給れと云樣也とぞ註【呂云—】文字を書下し得て、義理的かに當ると也、

今受其直、怠其事者、天下皆然、豈惟怠之、又從而盜之、（下的當）

【受直】は、賃を取て傭はるゝ也、上の傭乎吏と云是也、【怠事】は、吏が民を治る事を荒み怠る也、上の司平に應ず、言心は、代官民より出す貢賦を受取ながら、民を守護する役儀を怠る者、一人二人にてもなく、天下皆如此、せめて事を怠る迄にてもなく、剩へ又其權勢に從て、民をむごく虐げ、貢物の外に、諸役を課て、財貨を貪るは、是盜賊をする也、注【下的當】前と同じ、

于俎崇酒于觴追而送之江之滸飲食之、

薛存義は、河東の人也、永州の零陵の令官に成て二年政を行ひ、今其役を滿て、去て帝都に赴んとする也、一説に、之他任也、行は、零陵を去也註【起句】は、發端の句也【緊切】緊密ときびしく、親切にしつかとして、透間あらず、ぬらくと疎かに云出したる句にて無と也、古説に、鄕里姓名を云立て、又將行と書たるを云とあるは、誤也、蓋し薛存義が去んとするに就て、柳子厚酒肉を以て餞別し、送行の文を贈る、此篇に此句無んば誰を送る共不知、又假令此一句を書出したり共、下に所承段段相應せずんば、ぶらりと贅を見る樣に可有、此一句頭腦なる故に、起句緊切と譽る也但し他の任に成て行に就て此句を書出し、下に民の吏と成る法を說也、故に此四字の註を下す、此義爲當【柳子―】子厚同鄕の人なる故に、肉を俎に載、酒を樽に充て、追驅て江水の邊にて餞別し、行厨を開き、飲食せしむると也、羅山曰肉は、肴也、俎は、文選にて、つきゑと訓すつくえの事也、まないたとも訓す【崇酒于觴】は、儀禮の語也【崇】韻會、充也、柳文注、韓曰、詩、在河之滸【滸】水涯【飲食之】柳文註、張曰、詩、飲之食之、音蔭飼、

且告曰、凡吏于土者、若知其職乎、

一篇筋骨、

【吏】說文治人者也、又所使者曰吏、又府吏之屬、亦曰吏、今は說文の義を可用、日本に云代官奉行也、羅山曰、吏は、總て何にても、役を差たる奉行を云共、此にては、地頭守護を指【土】は、郡縣鄕邑也【若】柳文注、汝也、下受若、怠若、盜若、並同義、其方と云義也【職】主也、業也、しわざ、又つかさどると訓す、言心は、餞別に臨で、酒食を勸め、且又物語し告て云樣は、大凡土地に任して、代官守吏と成者は、職業あり、其方其法を知やと也註【一篇筋骨】此二句此篇の干要柱と也、人の身の、骨にて立、筋にて纏へる樣に、是無ればば不成を云、

蓋民之役、非以役民而已也、

文老意佳、

【盖】疑辭、又發語辭【役】字彙、使也、傜役也又官曰

て、吏の俸祿を受て、民を治めぬに喩ふ【且云勢―】吏と民とは、上下の勢分不同なれ共、吏の事を怠り、剩へ盜をするを、黜罰すべき道理は、上も下も皆同じ、子厚が此知識見解最も高し【至於結―】結句に、存義が能零陵を治めたる事を賞ずるに、酒肉を以てし、其上に重ねて行を送るに、辭を以てすと云、發端に載肉崇酒且告曰と云數語と相照應す、學者宜しく是を賞玩吟味すべしと也【東萊云―】此序句は少けれ共、至極反覆と打返し〳〵議論して、不盡の心あり【謝云―】積字爲句、積句爲章、積章爲篇、積篇爲卷、積卷爲部、章を作る法、句を作る法、字を用る法、盡く皆好と也【轉換多】文章趣向をうつしかふる事多き也【關鎖緊】羅山曰、くゝり〳〵の緊しく、文の强きを云、文意放埓なる事なくきびしく結て、意外に溢れず、凡そ文を書に、種種轉換すれば、取外して、本意を失ふ事ある者なるが、是少も左なくして、至極好也【謹嚴】つゝしみをごそかなる也、前の進學解に見へたり【優柔】杜預左傳序云、優而柔之、使自求之、註、言左氏富博其文、以寬舒學者之心、羅山曰、緊しけれ共、いかにも柔なる處有也、ゆたかに廣ふして、ゆるく舒やかなる也【理長―】道理悠長にして、意味雋永なる也○萬里曰、此篇四段、自篇首至已也第一段、自凡民至畏乎第二段、自存義至審矣第三段、自吾賤至末第四段、但し句解には作七段○萬文一統、韓愈曰、子厚送薛存義序、雄深雅健、似司馬子長崔蔡不足多也、

柳子厚

本傳は、唐書列傳九十三にあり、萬姓統譜曰、柳宗元字子厚、解人、從曾祖奭中書令、父鎭殿中侍御史、宗元文章卓偉、第進士中博學宏詞科、拜監察御史、座王叔文黨貶永州司馬、徙柳州刺史、爲文益進、與韓愈齊名、世號柳柳州、有文集傳世○東坡曰、唐末司空圖崎嶇兵亂之間、而得詩人高雅、猶有承平之遺風、其論詩曰梅止於酸、鹽止於鹹、飲食不可無鹽梅、而其美常在於酸鹹之外、可以一唱三嘆也、子厚詩在陶淵明下、韋蘇州上、退之豪放奇險則過之、而溫麗靖深不及也○韻府曰、柳子厚得昌黎文、先以薔薇露浣手、然後讀、

河東薛存義將行、（起句緊切）柳子載肉

飲且食兮、且一作則壽而康、無不足兮奚所望、

泉を飲、且又稼に食む、壽命も永して、身康寧とやすし、壽而康韓文註、一作既壽而康、尚書洪範、五福、一曰壽、註、百二十年也、二曰富、財豊備也、三曰康寧、無疾病、四曰攸好德、神之道、五曰考終命、各成其長短之命以自不横天、【無不足―】上に云如く、何の不足も無れば、外に別の望は不有と也、

膏吾車兮秣吾馬從子于盤兮終吾生以徜徉、徜、音常、徉、音羊、猶徘徊也、

詩邶風泉水云、載脂載舝、還車言邁、註、以脂膏塗其舝使滑澤也、車に脂をさし、馬に草を飼は、旅立のこしらへ也、退之盤谷の樂を聞て、羨しや我も伴ひ行んほどに、車馬を催せと也、杜詩、我車已載脂、羅山曰、膏輪秣馬と云語は、毛詩に出たり【從子于―】退之盤谷の中に愿に隨て吾生涯を終る迄、徘徊して遊歴せんと也【徜徉】韓曰、徘徊也、孫曰、戯蕩也、本註幷に韓が註の心なれは、たちもとをる、其邊を經行也、孫か註の心なれば、戯れ遊ふ義也、

○送薛存義序

此篇文、勢圓轉、如珠走盤、略無滯論、吏者乃民之役、非以役民、議論過人遠甚、中間以庸夫受直怠事爲譬、且云、勢不同而理同、此識見最高、至於結句、用賞以酒肉而重之以辭、亦與發端數語相應、學者宜玩味之〔東萊云〕句雖少、極有反覆〔謝云〕章法句法字法皆好、轉換多、關鎖緊、謹嚴優柔、理長而味永

柳文二十三載之、作薛存義之任序、注、韓曰、存義令永州之零陵、其去也公序而送之、一本無之任二字、句解云、薛存義、河東人、將行、不詳所往、必爲郡守令、是は柳子厚永州に在し時、零陵の令薛存義、去て河東へ歸るを送て作れる序也、羅山曰、存義零陵の令を勤て、都へ返り上ると、又別所へ吏と成て行と、古來二說也、然共本集の題號に送薛存義之任序とある時は、零陵より又任に差れて、他方へ往時の事なるべき歟註【此篇文勢―】此序文章の勢ひ、圓轉とまとかに無圭角する〳〵とすぐりまろふ事、珠の盤の上に走るが如く、少しも滯りたる言論不有と也【吏者乃―】本文に、吏は民の爲に使はれて、民を使ふ者には非すと云るは、議論至當極切にして、他人の所難及也【中間以―】次に常人の貨直を取ながら、事役を怠るを以

云に應す、

窈而深、廓其有容、

【窈】深幽貌、盤谷の奥深幽なるを云【廓】は、空也【有容】古文奇英註云、可容其居、羅山曰、口から見れは奥深く狹さうにて、谷中空豁とほがらかに、開け廣ふして、人を容て住居せしむべしと也、前の宅幽と云に應ず、

繚而曲、如往而復、

【繚】朗鳥切、說文、纏也、或作繆【曲】迂曲也【如往―】萬文一統註曰、如往前而復至其後也、谷の形、蛇ののたくる樣に、まとひめぐり、曲りたる體、前へ行て、後へ立廻るに似たりと也、前の盤谷環兩山之間と云に應す、羅山曰、路は廻り曲て、九折なる谷を行ほどに往ども還る樣に有也、

嗟盤之樂兮、樂且無央、

句解曰、央、今本作殃、言樂無已無殃咎、考異作殃蜀本皆作央、王逸離騷註曰、央、盡也、已也、嘆息して云、盤谷の樂如此、而して其樂且又極り盡る事なしと也、且は、語助、

虎豹遠跡兮、蛟龍遁藏、鬼神守護兮呵禁不祥、不祥、魑魅之屬、禁、一作禦、

句解云、德人所居、惡獸遠避、水中之作害者、亦避、德ある人の住所には、虎豹も跡を遠て逃れ、蛟龍も邊へ不近して遁藏ると也、孟子滕文公上篇曰、舜使益掌火、益烈山澤而焚之、禽獸逃匿、韓文公至潮州、惡溪有鰐魚爲民害、乃爲文投溪水中祝之、是夕暴風震電起溪中、數日水盡涸、西徙六十里、自是潮無鰐魚患【鬼神―】程子曰、鬼神者、造化之迹、張子曰、鬼神者、二氣之良能、陰陽造化の屈伸往來し、萬物を生殺して、良能を現す者を、鬼神と云、言心は天地の鬼神も、此人を守護して、魑魅などの樣なる不祥の惡き者を、呵責禁禦して、近所へ寄付ぬと也、【祥】は、吉祥、さいはひとて、目出度事也不祥は、わざはい也註【魑魅】左傳宣公三年魑魅罔兩、莫能逢之、注、魑魅人面鬼身、四足、好惑人、山林異氣所生、山神也、日本に云天狗妖物などの類【禦】ふせぐ也、

云【三百―】此篇三百字ばかり有て、三様の人を寫し出して、卻て只此其於爲人―と云一句にて、畢竟の意趣を結ひ止たり、是其妙處也【自此―】此下昌黎と云より以下、方めて退之自語とす【此節―】【汲汲】増韻、不休息貌、伺候と云より是迄の一節は、利欲を求て不止人を說、

昌黎韓愈聞其言而壯之、與之酒而爲之歌曰、

退之、李愿か物語とて、長長と書下し、此にて其言を聞て、其志を壯也とすと云て、愿に酒を進め、其上にて送行の詠歌を作る、

盤之中、維子之宮、

盤谷の中は、李愿が居處と也、子は、愿を指、

盤之土、維子之稼、

盤谷之土地は、愿が耕耘して、稼穡を收め可食所也、前の土肥と云に相應す、稼字の註、稼說の註に見へたり、土字、韓文作上、註曰、一作下、維子之稼、註又曰、一作可稼可穡、一作可稼可食、黃氏日抄五十九、李愿盤谷序、按李少卿音義序謂得王仲至家善本、盤之土、一土爲下、窈而深、深爲空、今讀盤之土、維子之稼、韻不叶、下與稼則協矣、又下與中字對用有義也窈而深、廓其有容、韻亦不協、空與容則協矣、又空則有容、比深字義尤精也、合從李少卿之說而讀之、徜徉之徜字、音常、

盤之泉、可濯可湘、【湘、烹也、作可沿、】

盤谷の泉は、纓を洗ひ、茶を可烹也、面手をも洗ひ、食物をも可煮也、前の泉甘と云に應す【註】【湘烹也】烹は、煑也、韓文註、祝曰、釋文、湘、烹也、詩采蘋、于以湘之【一作可沿】本集注、又一作而沿、一作可遊、沿は、隨也、泉と湘とは叶韻、沿は先韻、羅山曰、沿は、そふと讀り、泉に隨て遊ふ義也、又流に隨て下るを沿と云、流に逆ふて上るを泝と云、

盤之阻、【阻、屈折也】**誰爭子所、**

阻【註】屈折也、險阻とて、山のけはしき義也、屈折は、阪の曲折なるを云、盤谷險阻なれば、他人來て、愿が居所を、我住んと爭ひ奪ふ者は有まじきと也、前の勢と

して、分明に不レ云也、無欲正直の人は、進むべき時はするくと進み、可レ言時はさらくと云也註【看它形容—】依栖は、依依栖栖也【依】は、倚也、依レ東依レ西の義【栖】は、鳥宿也、鳥の樹に宿する樣に、長へに人に傍の義、論語憲問篇、微生畝謂二孔子一曰、丘何爲、是栖栖者與、集註、栖栖、依依也【態度】形容ありさまを云、此二句能伺候奔走する者の、依栖と此方彼方へうとつき人にしなだれ懸る有樣を、かたどり寫すと也、

處二汚穢一而不レ羞、觸二刑辟一而誅戮、僥二倖於萬一一、老死而後止者、其於二爲レ人賢不肖一何如也、 看二它形容三樣態度一、各是三樣人、如二身親爲レ之者一、此狀レ物之妙、宛轉反覆三百字、只一句結了、自レ此以下、方是退之自說〇此節說二汲汲求レ進之人一、

【汚穢】は、皆けがらはしき也、利欲の深き者は、馬屋の樣なるむさき所に匍僂り居ても、耻辱とせず、揚雄が王莽に仕る類是也、又推て云ば、鄧通が癰疽の膿を吸、郭覇が糞を嘗る類もあり【刑辟】大欲を抱て、刑罰罪辟を觸犯して、誅戮せらる、李斯趙高梁冀祖約が類是也【僥倖】萬文一統註云、覬非望之福于萬分之一、漢儀註云、民臣被二其德一、以爲二—一、徼倖に通ず、得まじき所にして得るを云、世話に、こぼれざいはいと云是也、又作二徼幸一、中庸曰、小人行レ險以徼レ幸、若萬が一も、好目にか逢ん事を願て、人に媚諂ひ、肥馬の塵を冒し、老死する迄うとつきて、生涯の間には、小利をも不レ得、死してやうく其念止者は、比興千萬の心立也梁の何思澄終日造謁、每レ出作二名紙一束一投レ入、遇レ晚必盡也【其於爲人—】上は時に逢る人、次は才を抱て世に用られぬ隱者、又次は阿諛の人、此三樣の人からの內、賢と不肖と如何と見るべしと也【賢】は、賢才、かしこしと讀、隱者に係る【不肖】韻會、不レ似二其先一故曰二不肖一也師古曰、庸妄之人、謂二其不肖一言二其狀貌無一所二象似一也、父にも祖にも不レ似、才智のうつけたる者を云、羅山曰、不肖は、人に不レ似と讀り、人でなしと云義也注【看它—】三樣の人がら有樣を、象り寫す所の妙なるを看よと也【各是—】何れも皆めいくに、三樣の人がらを、退之自ら此體を爲者の樣に、ありくと書り、是文章物を寫し形どる、絶妙の筆也【宛轉】は、くるくとめぐつて、玉の轉ぶ樣なる文章也とぞ【反覆】は、打返しくする也、詳に其形容を盡を

故に、治の音を借て讀也【黜】は、しりぞくと讀、官を貶す也【陟】は、のぼると讀、官を進むるを云、隱者は世の外に逍遙すれば、天下の治まるも亂る事も不知、人の官を剝れ黜けらるゝも、昇進するも曾て不聞、車服に維かるれば、亦刀鋸も被加、是は有樂於身に係る、理亂黜陟に預らざるは、無憂於心に係る、

大丈夫不遇於時者之所爲也、我則行之、（承上接下不斷○此一節、說隱居退遁之人、）

穷居と云より是迄は、大丈夫の時代に値遇せず、隱遁して居る者の所作也、李愿是を行はんと也注【承上一】上の時に逢者の一段を承て、又下の利欲を貪る者の上に接續して、文理斷絕せず【此一節一】【隱居】は世に不出して家居する者を云【退遁】浮世をしりぞきのがれて、耕民となる人也、以上は、是時に用ひられざる人の事を說也、

伺候於公卿之門、奔走於形勢之途、足將進而趦趄、口將言而囁嚅、（看宅形容許多伺候依栖態度、）

【伺候】は、皆うかゞふと讀、人の機嫌を伺ひ候ふ也【公卿】は、三公九卿也、事物紀原四、尙書周官曰、乃立太師太傅太保、茲惟三公、又曰、周始有三公、座而論道、後漢始以大尉司徒司空爲三公、又曰、禮記曰、夏后氏百官始置九卿、漢九卿、俱不以卿名官、梁武天監七年、始加卿字、大常光祿衞尉太僕廷尉鴻臚宗正司農少府是也【奔走】走廻也【形勢】威勢權柄ある人を云、形、一作刑非也、世に媚諂ふて、利欲を求る者は、公卿の門に伺候して、機嫌を計り、形勢威力のある者の所へ驅廻ると也【趦趄】韓文注云、行不進貌、孫曰、趑踖也、上七思切下七餘切たちもとをると訓す、周易姤九三曰、其行次且、しさると讀【囁嚅】祝曰、楚辭、喜囁嚅而安作、註、囁嚅、小兒私謀貌、孫曰、不敢出口也、上之舌切、下女居切、口うじつく也、唐竇羣言若不出口、世號囁嚅翁、又李林宗嘗謂白樂天爲囁嚅翁、人に諂ふ者は、威勢のある前にて、足を進んとすれ共、若卒爾に被叱やせんと、危みを懷て、出かぬる程に、たちもとをりしさつて機嫌を伺ふ口物を云んとして若し氣に當る事もや有んかと猶豫て、口うだくと

山中にて蕨などを摘採が、甘く美して食ふべしと也、韓文註、茹、食也【釣於水―】句解云、垂釣水中鮮可食、新鮮之魚、皆可食者、韓文註、孫曰、老子、治大國若烹小鮮、鮮、小魚、水中に釣を垂て、小魚を取食ふべしと也、鮮を、あざらけきと訓ずれば、新しき魚也【起居無―】仕宦する者、時に遇て用らるれば、夙夜無暇者也、毛詩曰、肅肅宵征、夙夜在公、又曰、東方未明、顛倒衣裳、又曰、王事靡盬、不遑啓處、隱遁の人は、起居も、寢興何時なり共、我隨意自由なれば、只其心安き所に適てする也、所安、韓文註、今本作之安、

與其譽於前、孰若無毀於其後、與其樂於身、孰若無憂於其心、分別輕重妙甚、

世に用ひらるゝ者、初に善人と譽られて、終に惡人と毀らるゝ事あり、初に譽有んよりは、何ぞ終りに毀無に如んやと也、古說に、人の面前にて譽られず共、背後にて毀られぬが好と云、是は尙書益稷篇の、汝無面從、退有後言と云に通ず、但し前說優歟、考異譽字上、有有字【與其樂―】我身に榮耀の樂み有る者は、亦其心に有憂、然れば身に樂有んよりは、何ぞ其心に無憂に如んやと也、隱者は樂もなく憂もなき程に、一段眞樂とすべし、考異樂字上有有字〔注〕【分別―】有譽於前、有樂於身は、輕也、無毀於後、無憂於心は、重也、輕重を分ち別つ事、甚だ妙也とぞ、

車服不維、刀鋸不加、看它用字理亂不知、黜陟不聞、

尙書舜典曰、明試以功車服以庸、車は、輿車也、服は、服御とて、衣裳器物皆是也、韓文註、維、繫也、肥馬輕裘に身を繫ぎ絆さるゝを云、結構なる態を貪れば、其身は榮耀に見ゆれ共、卻て繫ぎ縛へられたる樣に、自由ならざる所あり、羅山曰富貴の人は、假初に行くも、馬の車のと云て、六借き程に、係れたる者也【刀鋸―】國語曰、中刑用刀鋸也、隱者は何の罪を犯す事無れば、刀にて被斬、鋸にて被曳事なし、是を身に加へられずと云〔注〕【看他―】文字の用ひ樣の好を見よと也【理亂―】說文、理、治玉也、をさむと訓す、羅山曰、理亂を、ちらんと讀ことは、唐は李氏、理と李と職同き

大丈夫之遇知於天子、用力於當世者之所爲也、吾非惡此而逃之、是有命焉〔承上〕不可幸而致也、〔接下○此一節、説得志當世之人〕

是皆大丈夫たる者、天子に我才能を被知、待遇とて、能くあひしらはれて、功力を其當世に用る者の所作也、又遇は、値遇、あふと讀、時に遇て被用、仕合好を云、韓文註、天子、今本作主上【吾非―】李愿上に所云の大丈夫の事を、惡み否がりて、其を逃て、故郷へ引歸るにてはなし、是天命ありて、人力の及ぶ所に非ず、孟子曰、莫非命也【承上】上に大丈夫の時に遇たる事を説て、此にて其を承て、吾非惡―と云也【不可幸―】幸は、願也願て致し來すべからずと也、又不慮に仕合て求致す事ならぬ義も有べし【接下】此一句、下の窮居の者に接續すると也、接は、つゞくと訓す、連り係る義、羅山曰、如上なる事は、願ても、天命に非れば、成らぬと云て、下の文を起す也【此一節―】以上は大丈夫の當代に其志を行ひ得、意滿足する事を遯る也、

窮居而野處、升高而遠望、坐茂樹以終日、濯清泉以自潔、採於山、美可茹、釣於水、鮮可食、〔看宅形容閑居之態〕起居無時、惟適所安、

是より隱者の事を説、孟子盡心上篇曰、君子所性、雖大行不加焉、雖窮居不損焉、分定故也、易係辭下篇云、上古穴居而野處、後世聖人、易之以宮室、羅山曰、卑しき體にて居る也、言心は、窮困して家に居、郊野に居住するは、世に不遇者の體也、窮居考異作閑居、一本野字作閑【升高―】山に登て遠見する也隱者の隙なる儘に、遊び行きて、四方を詠め望む也、遠望、韓文注、今作望遠、古文奇英註云、作遠望者非【坐茂―】茂は、繁也、しげりたる木陰に座して日を終、暮に及ぶ迄遊ぶ也【濯清―】清潔なる泉に面を洗ひ、口を漱ぎ、手足を洗などして、自身を奇麗にする也羅山曰、潔字は泉に係て云共、心を潔白にする事を含めり【採於山―】句解曰、採摘山上美可茹、蕨薇之甘美可食、

心根は、惠順としたがひやさしきを云、是は眉の美しく、面相の妍く、聲の清亮にすみ、身の品やかなる體、貌の秀てふり好、心立の尋常に不逆物、愛らしき事を説也註【迂云看他〳〵】佗とは、退之を指、許多と色色の意のまゝにに自得したる態をかたどりて云、筆の自由に奇妙なるを看よと也【飄輕裾—】裾、説文、後裾、衣裳を裝束したる後に、長く引一幅なる帛あり、是を裾と云、もすそと訓す【翳】字彙、蔽也、おほふ共、まがくし共、さしかざす共訓す、輕き裙をひらめかし、長き袖をさしかざすは舞時の態也【粉白—】粉は、輕粉胡粉也【黛】は、眉墨也、輕粉にて假粧し、黛にて眉を刷ひ作りて、面も一入艶かに白く、眉も一段黒く綠りに見ゆ【列屋—】箇樣なる美人、屋を列ね並て、幽閒と物靜なる所に居宿する也、句解云、不得寵幸者、羅列滿屋而閒居、唐詩所謂王顏不及寒鴉色、是にては、閑は、閑隙、棄られて、いたづらにして居る也、又同註曰、不事女工、羅列習閑、此義なれば閑はならふ也、如何、羅山曰、女は靜なる者なれば、閑居の字を用容齋四筆云、退之爲文章、不肯蹈襲前人一言一句、故其語曰、惟陳言之務去、戛戛乎其難哉、獨粉白黛綠四

字、似有因、列子、周穆王築中天之臺、簡鄭衞之處子、娥媌靡曼者、粉白黛黑以滿之、戰國策、張儀謂楚王曰、鄭國之女、粉白黛黑、立於衢閭、見者以爲神、屈原大招、粉白黛黑、施芳澤只、司馬相如靚妝刻飾、郭璞曰、粉白黛黑也、淮南子、毛嬙西施、施芳澤云云、粉白黛黑笑目流眺、韓公以黑爲綠、其旨則同【妬寵—】句解曰、已得寵幸者、人則嫉妬其寵、己則負恃自驕、唐詩所謂承恩不在貌、又曰彼得寵愛、此則妬嫉之、而恃其所寵者、自負其美、人の寵愛を得たるを見て羨み妬み、已が美なる形を自滿し、人に負まじき者をと負恃也、賢女の外は、何れの女も皆然故に、如此云也誠齋集百十四、退之盤谷序云、妬寵而負恃、張文潛云、妬寵二字、負恃二字非句律乎、與下句爭妍而取憐不類、又既曰恃、又曰憐、爲複、恃、當作特、特、敵德切、韻會特、獨也、但也、又專也【爭妍—】句解云、未得寵幸者、爭爲妍美、以冀取寵憐云 心は、我美質を不負不劣と相爭ふて、君の愛憐して、寵幸せらるゝ樣にする也取とは、我君を引取の義註【模寫之妙】美人の自負妬嫉の體をあり〳〵とかたどりうつす事の妙絕なると也、

列ね、軍兵前に立て、しつ〳〵と云て人を拂ひ、後に從ふ伴の者、路を狹く塞げて行也【樹】植也、韓文註、孫曰、【旄】旗類、以犛牛尾注於竿首故因以爲名、今の世に、はぐまと云毛あり、即髦牛の尾也、唐の首共云、其を龍頭を作りたる、長き竿の首に結て、小旄をも下に付る、是を旄と云、亦節と云、大將の戰場に赴く時、天子より賜て、軍前に先立て行也【羅】は、建並る義也【武夫】もの〻ふと讀、兵士也羅山曰、前驅の武士也【呵】は、字彙に、與訶同、責也、漢志、縱而弗呵、狠藉なる者慮外なき樣に、大將の被通ほどに傍へ近づくべからずとして、しつ〳〵と云て人を拂ふ也、羅山曰、【從者】は、供の乘也【塞路】は、多人衆なる程に、路が狹ぞと也【供給—】居家必用註云、以物輸用曰供給、供、陳設、給、相足也、手廻りにて、用を足す者を、供給の人と云、此にては、大將に隨順する諸卒を指、各何れも其其の道具を執持て大將の通る道の兩旁を挾みて、足疾に馳行也【喜有賞—】大將の氣に入て喜らるれば、恩賞を被り氣に逆て怒らるれば、刑罰に係る【才俊—】才智俊傑の勝れたる者、大將の前に滿居て、古往今來の事を引、物語して、大將の盛なる德を譽手柄を云立る程に、大將耳に入て、やかましく聞たふも無ことは、一つもなき也【煩】は、煩擾也、やかましき義也、韓文、俊字作峻、註、今本作俊而字今本作以、

曲眉豐頰、淸聲而便體、秀外而惠中（汪云、看宅形容許多得意之態）、飄輕裾、翳長袖、粉白黛綠者、列屋而閑居、妬寵而負恃、爭妍而取憐（橫寫之妙）、

是よりは、美女の大將に侍坐供給する事を述【曲眉】は、曲りたる眉毛也、女は、先眉の美しきが本なる故に、毛詩にも螓首蛾眉と云り【豐頰】頰の肥たる也、をもぶくらなる美人也、左傳、文公元年、穀也豐下、必有後於魯國、杜預註曰豐下、蓋面方、東坡詩云、不見豐盈犀額兒【淸聲—】句解曰、淸聲善歌、便體善舞、文選句解云、歌唱則其聲淵亮、擧動則其身輕便韓文註曰便、安也、毘連切便體は、體勢の便安なる也、身の自在に品の好を云【秀外—】句解曰、外貌秀而不浩、中心惠順聰敏、外のなりすがたは、秀逸に勝れて好、中の

我知之矣、

註【托愿之辭】前にも云如く、全篇退之自語なれ共、李愿が物語にかこつけて云也、托は、屬託、其人に付云也【人之稱—】黄氏日抄五十七、讀諸子部云、人壽以百歲爲正、形以一丈爲正、故名男子爲丈夫、尊公嫗爲丈人、韻會曰、周制以八寸爲尺、十尺爲丈、人長八尺、故曰丈夫、詩甫田註疏、夫有傳相之德而可倚仗、謂之丈夫【大丈夫】は、才器優長なる眞の男を云、孟子滕文公下篇に、其人がらを說り、羅山曰長に足る人を云、丈夫と書て、ますらをと訓す、善人の事也、云心は當代の人の大丈夫と稱譽して、仰き尊ふ者を、愿能知たりと也、

利澤施于人、名聲昭于時、坐于廟堂、進退百官、而佐天子出令、

【利】字彙、宜也、吉也、又財利也、かゞと訓す、人の爲に利德有て宜しき也【澤】潤也、うるほふと訓す、恩澤德澤の類、人の利潤ある樣にする也、羅山曰、利澤は、俸祿の惠を云【名聲】名譽聞也、手柄なるほまれを云、其運命好して、時に用られ、人に利德恩澤を施し、名譽當代に顯れ稱せらるゝ也【廟】は、宗廟、先祖を祭る所也、本集には、朝字に作る、朝は、朝廷、禁中政を聽の所也【堂】は、朝堂是も政事堂にて、政を聽所也天下國家の大事ある時は、天子宗廟にて謀り、朝堂にて評議し給ふ也其庭上に座して、謀議に預るは、執政大臣也【進退百—】宰相百官の賢不肖を選て、或は昇進とて、官位をあけすゝめ或は退黜とて官位をしりぞけをとす也【佐天子—】執權天子を輔佐して、其所不及を助けて、命令を出し行ふ也、下知法度を云、以上大丈夫の朝に在て宰相として、大なる政事を行ふを云、

其在外則樹旗旄、羅弓矢、武夫前呵、從者塞塗、供給之人、各執其物、夾道而疾馳、喜有賞、怒有刑、才俊滿前、道古今而譽盛德、入耳而不煩、

數萬の大將と成て、都の外に在れば、旗を建、弓矢を

且放教退之獨歩、又漁隱叢話前集十八、東坡曰、退之尋常詩、自謂不逮李杜、於昔尋李愿向盤谷一篇、獨不減子美、

太行之陽有盤谷、（盤谷、地名、在孟州濟原縣）盤谷之間、泉甘而土肥、艸木叢茂、居民鮮少、

【太行】は、山の名、在懷州、古詩に、太行千里送征鞍、とある程に、如形の大山と可知、【陽】は、南也、陽は、火に取、火は南に位す、故に山の南の方を陽と云、但し渭南の時は、渭水の北也、此一句は、盤谷の太行山の南の方にある事を云【盤谷之―】此谷の間は、湧出る泉も甘美にして、土も肥饒也、甘泉は、人の口に可にして、養生の爲にも一段宜し、肥土に生ずる穀菜は、甘美にして、亦能人を養ふ【艸木―】土肥る故に、艸木も叢り茂り、人其中に住で、見る心地も好、材木薪柴も無不足也、人多ければ、紛冗してやかましき者なるに、此谷に住居の民少ければ、物靜にして、俗塵の擾亂するなし、是隱者の居るべき佳處也、

或曰、謂其環兩山之間、故曰盤、或曰、是谷也、宅幽而勢阻、隱者之所盤旋、友人李愿居之、（此一節且説盤谷大體、李愿所居、）

盤谷と名を付たるに、有兩義事を云、一説には、太行山の南に、山の尾崎二つあり、其二つの間を環り廻りたる谷なる故に、盤と名づくと也【盤】は、字彙曰、盤曲也、又一説に、此谷は、人家谷底の幽深なる處に在て、地勢險阻にして、隱者の住居すべき所なる故に、名くと也、此義なれば、盤は、蟠字の意也、韓文の註に【宅】處也、人の居るべき地を云【幽】は、奥深きを云、一説、幽靜なるを云、一鳥不啼山更幽と云樣なる地也【勢】は、其地形を云【阻】は、險阻さかしき也地險ふして、世俗の到り易からざる所と也【盤旋】は、めぐりめぐると讀、其所に徘徊徜徉して居住するを云、退之か友李愿此谷に居住せり　註【此一節―】此段は、聊且李愿が居る所の盤谷の地形、物景の大槩を述也、

愿之言曰、（托愿之辭）人之稱大丈夫者、

節度使、陸長源爲行軍司馬とあれば、三十九歲也、宣武軍は、即ち汴京也、又韓文註、樊曰、按正元十七年歲在辛巳とあれば、四十四歲也、又本集上張僕射書註、張建封貞元四年、爲徐州刺史、韓公以十五年二月、脫汴州之亂、依建封于徐とあれば、四十二歲也、是を正とすべし【脫汴京之亂―】李翺作文公行狀云、汴州亂、詔以舊相東都留守董晉、爲平章事、宣武軍節度使、以平汴州、晉辟公以行、遂入汴州、得試秘書省校書郎、爲觀察推官、晉卒、公從晉喪以出、四日而汴州亂、凡從事之居者皆殺死、退之汴京の兵亂を脫れて、洛陽の京師に來居れり、官職を求て奉仕せんと思へる時なれば、文思胸中に鬱積して、詞華言外に現れ出、故に其文字奇妙なる事如此と也【迂云】一節是形容得意人とは、人之稱―と云より、不可幸而致也と云迄の一節は、富貴の身と成て、志を逞ふし、意を得たる人の有樣をかたどる說也【一節是形容閒居人】とは、窮居而―より、我則行之と云迄の一節は、隱遁閑居の人の有樣をかたどりて述る也【一節是形容奔走伺候人】とは、此方彼方と、富貴の人の門戸に奔走伺候し、追從する者の有樣を云也【卻結在人賢不肖何如也一句上】とは、如此三段に說出して、卻て其於爲人賢不肖何如也と云句にて引結ぶを云【終篇全擧―】此一篇の始終、全く皆李愿が物語を擧述て、退之自ら所說は、昌黎韓愈、聞其言而壯之と云數語一句ばかり也【其實非―】此文に愿之言曰と書て、全篇李愿が說話の樣に書成たれ共、眞實は李愿が言には非ず、皆退之が文章也【此又―】自ら思ふ所を、書述るは、文章の常式也、今退之、我所思を、愿が所言の樣に書述るは、又別格に文章の一體也、【格式】は、法度也○萬里曰、此篇五段、自篇首至居之第一段、自愿之至致也、第二段自窮居至行之第三段、自伺候至如也第四段、自昌黎至末第五段、今按ずるに、此截段の分樣不是只迂齋が分別に可從○韓文補註云、此序孟州濟原有石本、其閒異同、當以石本爲正、今又註其下○歐陽集古錄曰、當時退之、官尙未顯其道未爲當時所宗師、故但云昌黎韓愈知名士、然當時送愿者爲不少、而獨刻此序、蓋其文章已重於時、韓文註、東坡云歐陽公言、晉無文章、惟陶淵明歸去來一篇而已、余亦謂唐無文章、惟韓退之送李愿皈盤谷序一篇而已、平生欲效此作、每執筆輒罷因自笑曰、不若

實理實學如此、人の心術、是を體とすべし、只三子者を慰るのみに非ず、故に此二句一篇の本意地位を據有つと也、

東野之役於江南也、有若不懌然者、故吾道其命於天者以解之、應前〔謝云〕序因送孟東野作、結歸東野本身上只兩句、此文章之妙、

本集註、嚴曰、蓋爲溧陽時也、溧陽は、在江南、其尉に成て行故に、役と云【役】は、往て使るゝ義也、案するに、字彙に、官曰職、吏曰役、吏務の役に成て往を云、又行也と云注も可合歟【懌】喜也【命於天】は、上の命則懸乎天の義也、云心は、東野が南方へ往とて、機嫌惡く喜ばぬ貌あり、故に退之人の天より命ぜられて、我儘に去就すべからざる事を云て、其恨を解ほどく也、羅山曰、東野が朝廷に居て富貴ならんも、江南へ被遣て貧賤ならんも、皆天命なれば、何を以てか悲ん、我其理を云解て聞するを能聽て、機嫌を直し、莞爾と笑て往けと也註【應前】とは、懸乎天、命於天を指也【謝云序因——】此序は、東野を送るが爲に作れり、故に始より種種の鳴物を云、古今の人人の鳴ことを云、其後に東野が鳴ことを云、又翺と籍とを兼幷せて、三子者の鳴ことを云、末句に至て、東野一人が身上に歸宿し、引懸て只二句にて書止む、是送東野序なる故也、眞に文章の妙也、

○送李愿歸盤谷序　韓退之

公年三十四、脫汴京之亂、來居洛、方且求官京師、鬱於中而見於外、故其辭如此〔迂云〕一節是形容得意人、二節是形容閑居人、三節是形容奔走伺候人、卻結在人賢不肖何如也一句上、終篇全擧李愿說話、自說只數語、其實非李愿言、此又別是一格式、

萬姓統譜、李晟、字良器、洮州臨潭人、年十八從王忠嗣征吐蕃、稱萬人敵、克平朱泚、收復京師、號令嚴明、公私按堵、其露布云、臣已肅淸宮禁、祇謁寢園、鐘簴不移、廟貌如故、德宗覽之泣曰、天生李晟、以爲社稷、非爲朕也、以功累官、至司徒、兼中書令、封西平郡王、子十五人、知名者、愿、憲、愬、聽、李愿は、李晟が子にして賢才の人也退之其故鄕に歸るに依りて此送行の序を作て贈る也註【公年三十四】退之は代宗大曆三年戊申に生れるば德宗貞元七年辛未に至て、三十四歲也但し通鑑に貞元十二年秋七月宣武軍亂以董晉爲

知と疑ふ也註【前面許多―】是より以前に、許多古人の事を引て、鳴事共を鋪叙たる内に、此國家の盛を鳴さしむると、其不幸を鳴さしむるとの二段の意を、兼て含み了る也、林希元が評には、古よりの能鳴者を數多連ね擧て今の三子者を又能鳴と云は、東野を古人の列に並べて、同く鳴者と譽たる也、必しも不平にて鳴と許り見れば、國家の盛を鳴と云處相違して、卻て此序の妙をも難知と也、是も面白き評也、

抑將窮餓其身、思愁其心腸、而使自鳴其不幸耶、當時必先有此兩句、

亦疑て云く、但し又天より三子者の身思を窮しつめて餓し、心も腸も愁へ苦しめて、貧困迷惑の餘り、詩に文に、其不幸を鳴さしめんとする爲歟、不知と云也、老杜が詩に、秀句傳寒餓と云類也、孟郊が詩に、愁與髮相形、一愁白數莖、又云、四時不在家、弊服斷綿多、東野が貧窮なる事を可知、然れば、國家の盛を鳴すには非ず、詩を作り、文を書しめ、寒く飢さしめて、貧賤の不幸を鳴すかと也、孟子告子下篇曰、天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身行、拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能、退之が此の句法、孟子の語に本づけり註【當時必―】退之が此序を作る時に、先此窮餓―の句、愁其―の句を作て、一篇の柱として、書出せる者也とぞ、鳴其不幸と云に依て、物不平なる時は、鳴と云事を多く出す也、

三子者之命、則懸乎天矣、其在上也奚以喜、其在下也奚以悲、此二句占地歩、

郊翺籍三人の命は、本より天に係る、富貴なるも、貧賤なるも、己が儘に非ず、皆自然に生れ得て、天命也【在上―】高官尊位にして上に在とも、人命なれば、富貴の外に超て、強ちに喜ぶべきに非ず【在下―】時に不遇、用ひられずして、下官卑位に在とも、是亦命なれば、貧賤を不守して、聊も嘆恨べきに非ず註【此二句―】語錄解義曰、地步、地頭也、地位也、占は、據有也、占地歩とは、其柱礎地位に據有つ也、其心術の基本、在此句事を云、後の晝錦堂記にもあり、云心は、

益なし、又不解の下の而字、難置字也、退之ならでは用る事能はじ、可著心、及於古の字も、上の不及於古の字に映應す【其他―】相如が喩巴蜀檄云、六合之内、八方之外、浸淫衍溢とあり、【浸淫】ひたしうるほふて有餘義也、古文句解、古文珠璣の注、並に謂く東野より外の他人は、流て漢氏に浸淫せん、大に誤り、文選句解曰、其高於晉魏二代文士一等、不懈而企及於古人、雖不及古、比之於漢世善鳴如遷雄者、亦其流亞也、萬里亦曰、退之意謂東野詩、則將及於古、其他文章乃高出晉魏、而浸淫漢氏之間、此兩説、愚案ずるに甚是也、東野が詩は、已に魏晉の上に出たり、其外の文章は、前漢の作者に肩を並ぶべしと也、浸淫は、水の浸し淫る心なれ共、此にては溢て進み上る義あり 註 上三句は重、下二句は輕、

從吾遊者、李翺、張籍、其尤也、三子者之鳴、信善鳴矣、

唐書列傳百二、李翺、字習之、趙郡人、文章見推於當時、中進士、元和初爲國士博士、又除史館修撰、後拜諫議大夫、性峭鯁、常面折初より退之に從て、文章を作る事を學ぶ、故其文渾厚にして、當時に有名、復性書を著はして、異論を破る、又宰相李逢吉が過失を指て、論して屈せず、逢吉僞て報ひざる故に、翺恐て稱病と云り【張籍】同列傳百一、韓愈同傳、張籍字文昌、和州烏江人善古詩及書翰行艸、登進士第、韓愈以文衡輕重天下士、而籍爲愈客、且薦于朝、爲國士博士、自是名播人口、韓文の内にも、答張籍書を載たり、翺も籍も、皆退之に就て學ふ故に、從吾遊と云【尤】は、勝れたる義也、けやけしと讀り、拔尤と云字もあり【三子者】は、論語に數所あり、此所は、郊翺籍を指、

抑不知天將和其聲而使鳴國家之盛邪、前面許多鋪叙、亦兼有此二段意了、

【抑】左傳の註に、疑詞、朱子四書集註に、或は語辭と云、或は反語辭と云、又發語辭と云、今此所は、反語の辭也、上の語を取て、反して下を起すの義也、愚謂く疑の詞と云注、宜當せん歟、此所は論語の求之歟、抑與之歟と云とは、語勢各別也、此三子者をば、天より其聲韻を和平にさせしめて、唐朝の國家太平の政、文章の盛なる事を、唱へ鳴さしめんとするか、如何不

詩に、其意自ら見はる、唐書列傳百二十六本傳云、杜甫數嘗ニ寇亂ニ挺ニ節無レ所レ汚、爲ニ歌詩ニ傷レ時、撓ニ弱情ニ不レ忘レ君、人憐ニ其忠ニ云云、古今詩人魁也、韓文公唐朝の文章に於て、推可する所なし、而るに毎に漢唐を論ずれば、必ず李杜を以て稱首とす、元稹も亦詩人以來、子美が如なる者不レ有と譽たり、是も一生有レ愁者なれば、不平の者也【李觀】韓文二十四云、李觀、字元賓、隴西人也、年二十四擧ニ進士ニ、二十九死ニ於京師ニ云云、註、時貞元十年也、觀屬レ文不レ旁ニ沿前人ニ、時謂ニ與レ愈相上下ニ云云、又六十卷に、答ニ李師錫ニ書あり、師錫は、觀が舊友也、其書の内に云、元賓行峻潔清、其中狹隘、不レ能ニ包ニ容於尋常人ニ、不ニ肯苟有ニ論說ニ、又曰、元賓既沒、其文益可ニ貴重ニと云り、觀少しより文章人に勝れて、退之に惜まるゝ程の人なれば、推量すべし、其時も觀長命せば、退之が文章と、互に上と成、下と成程なるべき也と云り、短命にて死ぬれば、是も不幸の者也、此六人詩文を能するのみならず皆多能の人なれば、所レ能を以て鳴と云也註【見前數子—】數子は、子昂より以下六人を指す【達者】とは、所レ能の勝れたるを云【此六句】は、唐有ニ天下ニと陳子昂と、蘇源明と、元結李白と、杜甫李觀と、皆以ニ其所レ能鳴ニを云なるべし【包括多】古抄に、唐興て以來、當代迄の詩人文人を包括すると云義歟、愚謂く此外にも可レ有を、一一に不レ說、六句の内へ包み籠、引括る所多しと也、

其存而在レ下者、孟郊東野、始以ニ其詩ニ鳴、其高出ニ晉魏ニ、不レ懈而及ニ於古ニ、其他浸ニ淫乎漢氏ニ矣、語有ニ輕重ニ

此にて東野が身上を云出して、此序の題號の心を現す也、子昂以下の六人は、唐人なれ共、皆沒したる人也、東野は、今日生て居て、尉と云下官に成故に、存して下に在と云也、東野詩作て名を得たる故に、以レ詩鳴と云【其高出—】東野が詩の格の高き事は、晉魏の上に出たり、上に下ニ魏晉氏ニはと云に映應せり【不懈—】東野が作高しと云共、即ち古人と同じとは不レ云、今より彌勤めて懈怠せずんば、古人に可レ及と云は、退之が東野を進め敎たる辭也、朋友の間、此心殊勝也、不レ懈の二字、能味ふべし、然れば、其人の實に當らずして、無レ差と譽る時は、譽る者も被レ譽者も、共に

結、李白、杜甫、李觀、皆以其所能鳴、見前數子、是達者〔謝云〕此六句包括多、

是より上には、六朝の鳴者の、古の如に無ことを云述て、此にて唐の代の盛にして、鳴者多き事を云也【陳子昂】唐書列傳三十二曰、陳子昂、字伯玉、梓州射洪人也、高宗中宗時人、唐興、文章承徐庾餘風、天下祖尚、子昂始變雅正、初爲感遇詩三十八章、王適曰、是必爲海內文宗、乃請交、子昂所論著、當世以爲法、朱子も此感遇の詩を戀て、感興の詩を作れり、隱もなき事也、子昂能詩を作るのみに非ず、時の政の諫をも上つり、又卜筮をも習へり、然共不慮の難に逢て、拘へられて、獄中にして死しぬ、是亦不平の者也【蘇源明】同書列傳百二十七云、蘇源明、京兆武功人、初名預、字弱夫、少孤寓居徐兗、工文辭有名、天寶間及進士第、更試集賢院、累遷太子諭德、出爲東平大守、安祿山京師に入時、源明を呼で從へんとせしか共源明不從、後に肅宗の時、考功郎中の官と成て、政の得失を諫む、是も祿山史思明が亂に逢る者なれば、亦不平の者也【元結】同列傳は十八曰、元結が父仁基、祿山が亂の時に、結を戒て、勤て名節を立て、恥る事勿れと云、結、字は次山、天寶十二年、結進士に擧らる、時に、時議三篇を上つる、金吾將軍に擢らる、書十篇を著す、元子と號す、安史が亂に遇て、猗玗洞と云所に入て、自ら猗玗子と稱す、又後に瀼濱に居て、自ら浪士と稱す、又漫郎と號す、忠義の人にて、大唐中興頌、賊退篇を作れり、賊は、安史を指、杜子美が賊退篇を見れば結也國楨と云り、其後代宗の時に、辭し去て、樊上に遊て親に侍す、改めて聱叟と號す、如此彼方漂泊する者なれば是も不平の者也、詳に大唐中興頌の注に記す【李白】字は太白、桃李園序の注に見へたり、名譽の詩人にて、杜子美と名を等しくする故に、世に李杜と稱する也、玄宗の時、官を進めんと有しを、高力士、楊貴妃に讒言させて放出す、後に永王璘に仕ふ、璘謀反し、戰敗れて殺さる、李白も其緣坐に因て、夜郎へ被流、是も不平の者也【杜甫】審言が孫、閑が子字は子美、襄州襄陽の人、少ふして吳越齊趙の間を行きて、旅人と成、玄宗の時、祿山が亂に逢て、杜甫蜀の國に奔れり、肅宗の時、仕へて左拾遺の官に擧らる、本より忠義の人にて、君を憂へ國家を思ふ、故其所作の

に淸にして浮也と可レ云晉の王衍が淸談も亦是也、韓文の註に、浮を可レ作レ淳とあり、淳字に成て見る時は、淳朴の義にて、淳也と云共、仁義を棄禮法に拘らずして、淳ならんとするは、能事に非ず、是晉の代の風也【其節數―】其音聲の節奏ふしあや、數急にせは〱しくて、舒ろに和らかざる也、羅山曰、晉の武帝、人を忌心あるに因て、竹林の七賢なども、出て位に備り、政をも執行はゞ、罪を被り、刑に遇ん歟と思ひ恐れて、武帝を避、世を遁れたる也、世のせは〱しき事を、聲の急なるに喩る也、又劉琨祖逖などは、文武の者なれば、軍を率る内にても、詩文を作れり、太平の聲に非れば、數にして急也と云べし、此外宋齊の間にも、此類の人多かるべし【其辭淫―】關雎は、樂而不淫、哀而不レ傷を、詩の正風とする事なるに、今淫亂にたはむれ、哀傷とかなしみやぶるは、已に正和を傷て、風雅の本意を失へり、齊の東昏侯は、玉奴と云る美女を愛し、陳の後主は、玉樹後庭花の曲を作て、宮女に歌はしむ、兩主共に殘暴にして、天下を失ふ程に、皆亡國の聲なれば、淫にして哀しと云なるべし【其志弛―】志は、心之所レ之也弛は、おこたり、たゆむ義也、肆は、隨意の義也、志高して肆まゝなるは、責ての事なれ共、志怠りて放埓なるは、無二正體一無禮に成也、陳隋の間の人の詩文、大略如レ此也【亂雜―】みだれまじはりて、分もなく、文章の風體を失ふ也羅山曰、六朝の間は、道德もなく、文章も廢れて、鳴物亂れ、混雜して埓なき也、古人の評に、齊梁陳隋、蛙鳴蟬噪とあるは、此時代の詩は、蛙の鳴蟬の噪ぐが如く也と誚るも、此義に可レ通註【此數語―】鳴者不レ及二於古一、然亦未二嘗絕一は、褒也、就二其善鳴一と云より下は、皆貶也、羅山曰、淸數哀肆は、事に依て、褒にも成浮急淫弛は、皆貶する辭也、亦亂雜も、文の內にある事なれば、貶するに非ず、無レ章は、貶也、

將天醜二其德一、莫二之顧一邪、何爲乎不レ鳴二其善鳴者一也、

六朝の君、德汚はしき故に、天是を惡で、顧み思ふ事も無歟、何故に善鳴者を出して、鳴さゞるぞと也、愚謂く莫レ顧とは、目にも不レ係、笑止がりもせぬ義也、

唐之有二天下一、陳子昂、蘇源明、元

の事共は、皆儒道の正しき眞實の論に非ずと也【皆以其―】以上十四人ある故に、皆字を用ふ、術には有善悪、有邪正、故に孟軻には、以道鳴と云、此にては以術鳴と云、

秦之興、李斯鳴之、

史記列傳二十七、李斯は、楚國上蔡の人也秦の始皇に仕へて、宰相と成、政事を行ふ、始皇の功德を譽て、石に刻み、所所の山に立、又始皇を勸て、古の經書を讀故に、古を譽て、今を毀る、是不可然、只詩書百家の記録を燒捨べしと申ければ、始皇尤も也とて、天下の書を燒、儒者を埋み殺す、此李斯は、荀卿が門人也、然共箇様の悪事ある故に、後に其身も滅たり、李斯又古文を改めて、小篆の字を作り始めたる事もあり、又文章をも能書り、

漢之時、司馬遷、相如、揚雄、最其善鳴者也、

三人の事は、進學解に詳也、三人共に、前漢にて文章の達者なる故に、其名後世まで無隱、故に最善鳴と云也、

其下魏晉氏、鳴者不及於古、然亦未嘗絶也、就其善鳴者、其聲清以浮、其節數以急、其辭淫以哀、其志弛以肆、其爲言也亂雜而無章、此數語、褒貶相錯、

後漢の末に、天下分れて三つと成、是を三國と云、魏呉蜀是也、三國亡びて、晉の代と成、故に魏晉氏と云也、是より前に、上古よりの鳴人の名を擧て、漢の世迄にて云終り、魏晉より以下、六朝の宋齊梁陳隋を經て、唐より以前には、鳴人の名を不云、只其時代の上さを云述たり、此心は、六朝にも鳴者あれ共、古人には不及、然共鳴者斷絶する事は無と也【就其善―】六朝の内にて、假令善鳴者ありと云共、其文章聲韻清麗浮靡にして、眞實正和ならず、羅山曰、人の名を指て當ば、何晏王弼が徒は、天地萬物無を爲本と云て、老子莊子が風を慕ひ、自ら清淨を好め共、眞實のなき故

と也【孫武】史記列傳第五、孫武子者、齊人也、以兵法見於呉王闔廬、闔廬曰、子之十三篇、吾盡觀之矣、孫子、名は武、兵法を以て、闔廬が大將と成、楚を破り、齊晋を威し、名を諸侯に著せり、其兵法十三篇、今の七書の內の孫子是也、宋の元豐年中に、孫子、呉子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、太宗問對、七部を以て、兵法の七書と定むと云共、古今孫子に過たる兵書無之【張儀】魏人學鬼谷子之術、以遊說顯名、楚相誣以盜璧掠笞數百、飯謂其妻曰、視吾舌尚在否、曰在、曰、舌在足矣、後爲秦相、史記列傳第十に有傳【蘇秦】東周雒陽人也、字季子、事鬼谷先生、讀陰符書、得揣摩術、說秦王書十二篇、上而說不行、黑貂裘弊、黃金盡、後從說相六國、曰、使我有洛陽二頃田、豈能佩六國相印乎、史記列傳第九有傳、一說に陰符は、太公望が書也、揣摩は、人の心をはかりて、能あてがひ當るを云、此時天下七つに分れ、齊、楚、韓、魏、燕、趙、秦、是を戰國の七雄と云、蘇は六國の王に勸て、六國の兵を合せて、一味に大擧して、秦を破る樣に、種種云廻り、果して六國の相の印を帶たり、是を合從と云也、張は、秦王に勸て兵を出し、六國を打亡すべしと云、是を連衡

と云也、六國は皆縱と成る國也、是を皆合體同心して中好するを合從とす、縱を合する義也、秦は少し西方へ依て、天下の腹に當り橫たはりてある國也、秦を强して、六國を弱むるを連衡とす、橫を連る義也、是に依て蘇張を縱橫家と云也、兩人共に勝れたる辯舌のうそこき也、靑松曰、二十子者、其外更有說不盡、故下之屬二字註【己上數—】數人は、楊朱より蘇秦まで、合て十四人を指【功利】は、管晏に係る【邪說】は、楊墨に係る、田駢鄒衍なども、邪說の內也【淸淨寂滅】は、老聃に係る、淸淨は、老子の淸淨無爲の敎也、寂滅は、佛法に云事なれ共、佛と老との術は、大方同き故に、淸淨寂滅と續けて云也【刑名慘刻】は、申韓尸佼等に係る、刑名は、刑罰を宗として、法度の名を立其を少も背く者をば、道理を破ても、法を違へぬ樣に、罰を行ふ也、僅の罪にても、人を殺す事、きつく痛痛しく切刻むが如なるを、慘刻とす、むごきを不知、きぶきを云也【兵書】は、孫武に係る、能兵を用る故に、戰を好めば、國も危く、人をも傷ふ、是殺伐の計也【縱橫】は、蘇張に係る、七國を口たゝき行きて、是非を云亂り、烏を鷺と云成は、蘇張が遊說也、以上此等

たり【老聃ー】史記の列傳第三に、老子莊子申不害韓非四人を合て同傳とす、老子は、楚國の人也、姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡を聃と云、周の守藏室の史と成、是は文書を司る官也、道德無爲を本として五千言を著し關の令尹喜に被授、道德經是也、後の世に、道家を立る者、皆老子に本づく【申不害】は、京人也、故鄭の賤臣也學術以干韓昭侯、用爲相、內修政敎、外應諸侯十五年、終申子之身、國治兵强、無侵韓者、申子之學、本於黃老而主刑名、著書二篇、號曰申子【韓非】韓之諸公子也、喜刑名法術之學、而其皈本於黃老、作孤憤、五蠹內外儲、說林、說難、十餘万言、云心は、此申韓兩人、國を治るに、多法度を立、功名を建る事を專にして、老子の道德無爲と殊なる樣なれ共、其畢竟の本意は、黃老の學に本づく也、黃老は、黃帝老子也、黃帝の書は傳はらね共、道家を學ぶ者、黃帝にかこつけて我道は黃帝老子の流也と云、假令は、醫者の素問靈樞を黃帝の書也と云が如し、周の末戰國の時に、學術者多く己が家家を立て、人に信ぜられんが爲に、古人の名を假て云也、され共其內に、十に一二は、古より云傳たる事も無には非ず、此に老申韓の三人を云續るも、史記の同傳に載るに因て也、程子の楊墨が害は、申韓よりも甚しと云るは、共に異端とする故也、二程全書に見へたり【愼到】史記列傳十四云、趙人也、田駢接子、齊人、環淵楚人、皆學黃老道德之術、周發明序其指意、故愼到著十二論、環淵著上下篇而田駢接子、皆有所論焉、韓文注、祝云、愼到在申韓前、申韓稱之、有書四十六篇、又云、愼到、韓大夫、務刑名之學【田駢】韓文注云、齊人、著書二十五篇、居稷下、號天口駢【鄒衍】史記云、鄒衍後孟子、衍觀陰陽消息、而作怪迂之變、終始大聖之篇、十餘萬言、其語閎大不經、韓文注云、衍居稷下、著書四十九篇、號談天衍、又曰、事燕惠王、被譖繋獄、仰天而哭、六月霜下【尸佼】晉人、史記曰、楚有尸子、註、尸子、晉人也、名佼、秦相衞鞅客也、商君謀事畫計、立法理民、未嘗不與佼規、商君被刑佼恐幷誅、乃亡逃入蜀、自爲此二十篇、書凡萬餘言、卒因葬蜀戰國の時分、人人家家を建て、論辨して書を著す、此內に、愼到、田駢は、黃老の學術に本づく、鄒衍は、莊子、列子が論に相似たり尸佼は、申韓が法に異ならず、衞鞅が客也とは、秦の孝公の相商君衞鞅が臣にてあれ共、客人の如に持成されたる

刑名慘刻、或尙ニ兵書ニ以敵ニ殺伐之計ト、或尙ニ縱橫ニ以行ニ遊說之謀ニ皆非ニ吾道之正ニ

皆以ニ其術ヲ鳴、

【楊朱】は、楊子居也、老子の流を慕へる者也、莊子に見へたり、又列子にも、楊朱が事多く記して、楊朱篇あり、淮南子曰、楊朱見ニ岐路ニ而泣レ之、爲ニ其可ニ以南ニ可ニ以北ニ【墨翟】は、孔子同時の人也、或は孔子より後の人也と、史記列傳十四にあり、其著はせる書を、墨子と云、十五卷あり、淮南子曰、墨子見ニ練絲ニ而泣レ之、爲ニ其可ニ以黃ニ可ニ以黑ニ高誘注、憫ニ其本同而末異ニ楊朱は、義を見誤て、爲我の道を立たり、我身を損ずるならば、一毛を拔ても、天下を救ふことをすまじきと也、如レ此なれば、父をも蔑ろにする也、墨翟は、仁を見誤て、兼愛の道を立たり、人を愛する爲にするは、仁なれ共、先父母を愛し、次に子弟を愛し、次第に二族を愛し、扨他人を愛し、其上にて、鳥獸をも愛し、又艸木をも愛す、是聖人の仁を推廣むる、次第の道也、墨翟が如く兼愛するならば、父母を愛するも、他人を愛すると同じ樣に成て、卻て畜類をば助け、人をば殺す事に可レ成故に、果しては、君をも父をも、何共思はぬ樣に成也、若佛道に喩て云はゞ、兼愛は平等利益と云に似て、慈悲をも殺生戒も持て共、卻て多く人を費し害ふ也、爲我は、世に拘らず、人にも構はず、寺を立んともせず、檀那に善せん共思はず、只己獨り閑にして、心を安んぜんと云に似たる故に、傘一本を我身上の物也とばかり思ふに成也、故に孟子は、楊朱墨翟は、君父を無がしろにすれば禽獸也と論じ、程子は、楊墨に佛法を合せて、皆異端也と云り【管夷吾】は、管仲也、齊の桓公の臣也、其著はす所の書を、管子と名づく、有ニ十八篇ニ桓公を佐け、諸侯の首として、齊の國を能治めたれ共、只損得を考へて、得をする事を本とし、功利を先として、仁義を後にす、王道の大きなる事を知ざる故に、管仲が器は小なる哉と、孔子宣へり、器は器量、胸中に容る所を云【晏嬰】は、晏平仲也、齊の靈公莊公景公三代に仕へて、專ら儉約を宗とし、務め行ふ事を本として、聖人賢人を能用る事を不レ爲、故に景公の孔子を用んとせしか共、晏嬰不レ可レ事あり、史記の孔子世家に見へたり、孟子にも、管仲晏平が功の事を論ずる時に、嫌へる事あり、是も其功の卑きを以て也、史記の列傳第二に、管晏二人同傳に載

谷、東坡が才の大なる事を稱して贈れる詩に、我詩如曹鄶、淺陋不成邦、公如大國楚、呑五湖三江と云も、退之が此語に本づけり、屈原讒に逢て、江南に被流、離騷九歌九章等の篇を作て、君を憂へ、國を憂ふれ共、其君懷王暗く迷て、屈原が賢なる事を不知、小人に被欺、秦の昭王に誑されて被生捉、果して武關と云所にて死してより、楚國遂に秦の爲に滅さる、故に楚亡とは云也、屈原賢なれ共、憂に沈る故を以て、不幸に鳴とは云也、

臧孫辰、孟軻、荀卿、以道鳴者也、

〔謝云〕以荀卿儕孟子、非其倫、臧孫辰何人、亦未見其有道、又與孟子並立、豈可謂之以道鳴、此文公學問偏駁處、

【臧孫辰】は、魯の太夫臧文仲也、論語の疏に云、魯孝公生僖伯彄、彄生哀伯達、達生伯氏瓶、瓶生文仲辰、則辰、是公子彄曾孫也、彄、字子臧、公孫之子以王父字爲氏、故姓曰臧也、文は、謚也、魯の僖公の臣也、韓文の註に、臧孫辰は、臧武仲也と有は、誤也、武仲が名は、紇と云也、辰には非す【孟軻】は、孟子也、名は軻、字は子輿、一の字は子車、魯の鄒と云所の人、魯の公族孟孫が後也、史記列傳十四に有傳【荀卿】名は况、趙人、後に楚の蘭陵にして死す、進學解の注に詳也〔謝云―〕荀卿は、性惡の論をする故に、道の本源を不知、孟子は、孔子の孫子思より道を傳て、命世亞聖の大才也荀子を孟子に齊しく並言は、不似合事也、故に非其倫と云、儕は、ならぶる也、倫は、同類の義也【臧孫―】辰と云者誰ぞや、若臧文仲ならば、是も有道の人には非ず、文仲が居蔡、又竊位事を、孔子譏り給ふこと、論語に見へり、時の人文仲を智者と云を孔子は亦不仁不智の者也と宣へり、然れば、爭でか孟子と立並べて、同じ樣に以道鳴と云んや、是退之が學問偏駁の處也【偏駁】とは、正しからず純一ならざるを云、偏は、ひとへと讀、かたくくと讀、不正の義也、駁はぶち共、まだら共讀、一色ならずして、斑に雜りたるを云、不純一の義也、退之は隨分儒道を受得たりと云共、今少し不足の所は、箇樣の處也と評せり、

楊朱、墨翟、管夷吾、晏嬰、老聃、申不害、韓非、愼到、田駢、鄒衍、尸佼、孫武、張儀、蘇秦之屬、已上數人、或功利、或邪說、或淸淨寂滅、或

也、孔子の不得位して、衛の國へ赴ける時、路次にて、儀と云所の封人の官なる人、孔子に見へて、出て孔子の弟子衆に向て、各孔子の位を失ひ給へる事を、患へらるべからず、天下久しく道無れば、今天より孔子を木鐸とせんとする也、木鐸は、金口木舌とて金の鈴に、木を以て舌を作り、政を行ふ時、是を振て、諸人を教へ戒る者也、亂極つては、必ず治まる道理あれば、天より孔子に位を得せしめて、下知號令を施さしむべしと云義也、一説には、木鐸は、道路に振行きて、萬人に政令を示す物なれば、孔子の無位して、諸國を行き玉ふは、卻て道の行はるゝ教無れば、道路に木鐸を振が如く也とも云り、此にては鳴事を云ん爲に、木鐸を引出して、孔子の徒の鳴と云證據とする也、是論語に有ことなれば、誠の驗也とて云也、故に注に見鳴字と云り、

其末也、莊周以其荒唐之辭鳴於楚、

其字、周に係る、上に周之衰と有に依て也、然れば、其末に共可讀、孔子生於周末と云古語あれば、周の末の義なるべし、又のちと讀は、文選の雪賦に相如末至とあり、後來の義也、莊子、字は子休、宋人也、睢陽蒙縣と云所に生る、戰國の始の人なれば、周の末に當れり、老子の心に本づいて、書を著はす、三十二篇あり、其内の天下篇、謬悠之説、荒唐之言とあり、林希逸が口義に、荒唐は、廣大而無極也、一説に、唐は、兎絲也、女蘿也、一名蒙蔦ねなしかづなれば、廣く大きに、根も無ことを、荒唐と云也【鳴於楚】の於楚の二字衍文也と、宋朝の周必大と云人評して、莊子本より楚國に鳴こと無と云り、是は面白珍しき説也、楚王より莊子を召共、否と云て不仕事、莊子の書にも、史記にも見へたり、然共戰國の時に、楚より宋を取て合せたれば莊子が生國の宋も、楚の内也、左あれば、鳴於楚と云ても無妨、韓文考異、方曰、莊子、蒙人、蒙、梁地也、且辭楚威王之聘、未嘗仕於楚、又云、莊子、宋人何謂楚乎、周之漆園在楚、故曰鳴於楚、

楚大國也、其亡也以屈原鳴、亦自鳴其不幸、

楚人屈原が事は、漁父辭、弔屈原賦の注に詳也、黃山

るに似たる歟、伊尹は、太甲の不順なるを諫て、禮儀に從はしむ、又其君を堯舜の如にせざるをば、我恥辱と思ひ一夫も其所を得されば、我自ら推て堀溝に陷る樣に思ふ事は、是も不平有に似たる歟、周公殷の遺民共の頑なるを敎へ道引、又其兄弟管叔蔡叔謀反するを誅し、其身流言に逢て、成王に疑はるゝも、不平ある也、又國家の盛を鳴さしめんとするかと云へ共、其をば不鳴して、不幸を鳴さしむる時は、是も不平也、然れば韓文の疵也と批判すれ共、熟助けて見れば、一旦有疵樣なれ共、果して疵とすべからず、

周之衰、孔子之徒鳴之、其聲大而遠、（含自鳴其不幸一句意）傳曰、天將以夫子爲木鐸、（見鳴字）其弗信矣乎、

周の天下は、八百年の間也、文王武王より、五百年以後に、孔子出玉ふ、魯の襄公二十二年に誕生、哀公十六年に、七十三歳にして、卒去し玉ふ、又襄公は、周の靈王景王の代に當れり、故に周の末にて衰へたる時也、孔子一人のみに非ず、門徒三千人有て、其內達者七十餘人あれば、孔子之徒と云也、古今文海曰、孔夫子之徒出、而鳴先王之道、孔子弟子、更有七十子、故下之徒二字、又云、周道衰而孔子與其徒鳴其道于時、是不得已也、含後面鳴其不幸之意【鳴之】鳴字の下に、之字あるは、此下の李斯鳴之と有ばかり也、之字を助辭也と云はゞ、只鳴と可讀、其道を鳴し、其術を鳴すとならば、孔子の道、李斯が術に、之字は係るべし【其聲大―】孔子の道德文章廣大久遠也と也、樂記に、其聲直以廉、其聲和以柔此等の句法に本づいて書り【註】云心は、孔子の徒、時に不遇して、道行はれず、故に書を著して後世の敎とすれは、鳴聲の大にして遠しと云へ共、當時に道行れざるは、是不幸也、顏回も不幸短命にして死るの類也、下に東野自鳴其不幸と云に應じて、此に注せり【傳曰】前漢書宣帝紀、傳曰、孝弟は也者、其爲仁之本歟とあるは、論語を引て、傳曰と云り、聖人の書をば經と云、賢人の述る所をば傳と云、論語は、五經の外なれば、傳と云也、此に論語の語を引て、傳曰と云も、漢書に本づけり、又一切の古書を指て、傳曰と云事もあり、孟子梁惠王下篇に、於傳有之と云是也【天將以―】論語八佾篇の語

窮后羿、因民弗忍、距于河、厥弟五人御其母以從、傒于洛之汭、五子咸怨、述大禹之戒以作歌、云心は、大康は、禹の孫、啓の子也、畋獵の遊を好て無功德、無法度、洛水の外に出て、百日迄不返、其間に有窮の國の君羿と云者謀反して、河北に拒ければ、大康國に皈る事を不得、大康の弟五人、其母と共に、洛水の邊に待迎て恨み歎き、禹の戒を重て述て、歌を作る、是を五子之歌と云、是も詠歌する故に、鳴とは云り【伊尹―】伊尹は、始め有莘の野に耕して、堯舜の道を樂み居たりしを、殷の湯王三たび召給ひければ、伊尹さらば出て仕へて、湯王を今日の堯舜に可成と思て、即ち湯王の臣と成夏の桀を打亡して、湯王天下を有てり、此事孟子に見へたり、伊尹湯王の大臣と成て、阿衡と云官に昇れり、阿衡は、後世の攝政宰相也、湯王の孫太甲の時迄居て、太甲を能守立、殷の代長久也、尙書の、伊訓篇と、太甲篇、咸有一德篇は、皆伊尹が事を記せり、是を殷に鳴と云【周公―】周公旦は、文王の子、武王の弟也、謚して文公と云、本より聖人也、武王崩御し給ひて、其子成王幼少也ければ、周公攝政し給ふ、是攝政の始也、其間に周の禮、樂を制作せり、周禮儀禮是也、又易の爻の辭、及ひ大誥無逸等の書を作り玉ふ、殷の紂亡て後、幾程も無て、武王崩し玉ひければ、周の天下危かりしを、周公御坐し故に、能太平を致して、成王長て、子孫長久也、周公又詩を作り、頌を作て、文王武王を祭らる、是を周に鳴と云、古說に周公は無不平、若不平を以て云は金縢の書、七月の詩を取ん歟、今案するに、管蔡流言して、周公東に居給ふは、亦不平の證也【凡載於―】詩は、毛詩、書は、尙書也、六藝は、前の師說の註に詳也、前漢藝文志曰、凡六藝一百三家三千一百二十三篇五經は、皆孔子の手に觸たる書なれば、其に載られたる人人は、何れも聖賢の徒、皆善鳴者也〇羅山曰、事文類聚に、禹と皐陶と夔と、伊尹周公などは、不平の人に非ず、又國家の盛を鳴すと云も、不平の聲に非ず、然れば、物不得其平則鳴と云と相違す、是韓文の疵也と云り、然れ共皐陶は、舜を敎訓して、天下の事を愁へ、又刑官と成て、罪の有無を明かにせん事を思ふ、禹も亦其父鯀が水を治むる事能はずして、被流たるを憂ふへし、吾身水土に苦勞し、又舜を諫て、丹朱が如に非らん樣に思ふ、夔も亦樂を以て胄子を能敎へ立んと思ふは、不平あ

擇其善鳴者而假之鳴、

上に人の上さを云、其内に天時を云て、又此に返て人の上さを云、是則ち上の注の錯綜也【人聲之―】毛詩序曰、在心爲志、發言爲詩、情動於中而形於言、人の口より出す聲の内にて、精粹なる者を、言語とす、言語の内にて、又至て精き者は、文章詩賦の類也、故に言語文章の中にて、又善者を假て鳴也、

其在於唐虞、皐陶禹、其善鳴者也、而假之以鳴、夔弗能以文辭鳴、又自假於韶以鳴、將無作有、

【唐】は、堯の世の號【虞】は、舜の世の號也【皐陶】も【禹】も、皆堯舜の臣也、舜の時に、皐陶も禹も、多の格言を奉て、問答せる事あり、尚書に、大禹謨、皐陶謨など云あるは、皆其事を記せり、聖の言語は、其儘道理に合へる文章なれば、是を假て鳴と云也、是より上の鳴字は、萬の聲に就て云へば、只鳴と云義也、此にて皐陶禹の善鳴と云は、音聲言語のみに不限功も德も名譽も遠く聞ふる處を係て、善鳴とは云なるべし【夔弗―】尚書舜典、帝曰、夔命女典樂敎冑子、又益稷篇、夔曰、簫韶九成、鳳凰來儀、舜の時、夔に命して、音樂を司どらしむ、夔は、能呂律を知故に、舜の作り給ふ簫韶の樂を、九たび奏せしかば、鳳凰も來儀し、百獸も引い舞と云り、夔は上にある禹皐陶の如く、文辭を以て鳴事能はざる故に、假韶樂鳴と云也謹【將無爲有】とは、禹皐陶夔は、皆舜の臣にて、聖賢の徒なれば、或は道德を以て身を治め、文辭を以て君を諫め、音樂を以て風俗を善する也、然を鳴と云事は無に、文辭を以て鳴、韶樂を假て鳴と云、是以無爲有也、是則文法也、無を以て有とし、有を以て無とするは、莊子が文體也、曲を以て直とし、直を以て曲とするは、戰國策の文體也此法を得たる者は、退之東坡兩人而已也、

夏之時、五子以其歌鳴、伊尹鳴殷、周公鳴周、凡載於詩書六藝、皆鳴之善者也、

尚書五子之歌篇曰、大康畋于有洛之表、十旬弗反、有

底、揰之令左右擊、敔、狀如伏虎、背上有二十七鉏鋙刻、以籈櫟之、籈長一尺、以木爲之、此說を見れば、柷は別に一器也、通曆曰、帝嚳作鞀控揭、即柷敔也、以上八の者は、樂器の能鳴物也、委く禮記注疏、爾雅、白虎通等に見へたり、

維天之於時也亦然、【此又以天時引入人來、錯綜妙甚】擇其善鳴者而假之鳴、是故以鳥鳴春、以雷鳴夏、以蟲鳴秋、以風鳴冬、四時之相推奪、其必有不得其平者乎、【無人推原及此、】

天道は言はね共、四時行はれ、萬物生す、其萬物の內の、有聲物を假て鳴也、故に此上に擇其善鳴者假之鳴と云也、上の人之於言也亦然と云、又下の其於人也亦然と云に、相應ずる句也 註 云心は、天の時を以て、人の上を云內へ、引入て論ず、搔雜たる文法也とぞ【是故以鳥―】是は四季の鳴物を擧て云、春は黃鸝を先として、百鳥囀る也、月令にも、仲春倉庚鳴季春鳴鳩拂其羽とあり、倉庚は、雲雀也、一說に、鸎とも云【以雷―】雷は、冬地中に在て、春夏天上に鳴はためく也、故に月令に仲春雷乃發聲と云、春二月より、雷初て聲を出して、夏に至て盛也、月令に亦云、仲秋雷始收聲【以蟲―】秋は蛩を先として、一切の蟲鳴也、王子淵か頌に、蟋蟀俟秋吟とあり、月令に、孟秋寒蟬鳴と云り【以風―】風は常に吹物なれ共陰氣に本づく故に、冬に鳴と云也、書の洪範に、雨暘燠寒風の五の者を論する時に、風は陰にて、冬に屬する也【四時之―】四季の相推移り易る事は、自然の次第なれ共、此に推奪と云は、夏より春を奪ひ秋より夏を奪ひ冬より秋を奪ひ、春より冬を奪取樣に云成は、不平を云ん爲に、奪字を用ふ、人の物を推て取を、奪と云 註 云心は、天道本より言はね共、四季に鳴物の有は、即ち天の時の不平なる歟と云り、如此天道四季も、物を借て鳴と、不言物を、言語を出す樣に、遠く尋原けて云事は、退之に非んば、別人難及と也、

其於人也亦然、人聲之精者爲言、文辭之於言、又其精者也、尤

字を下す也、凡そ人の心に和き有を、外に發して歌ひ唱るを、樂と云、然共愁て歌ふもあり、哀傷して歌ふもあり、皆心中に鬱積して、外に泄露す事なれば、不平の鳴に用ひたり【註】【善下語】とは、此一句、能文字を作出せると也、樂也者の三字は、禮記に此文法多し、叢林家には、漢書高祖紀に、意豁如也と有を、音にて讀とて、其を例にして、がくやしやと讀にや【擇其善─】論語に、樂云樂云、鐘鼓云乎哉と有は、樂は心の和を本とす、必しも鐘鼓を鳴すを云のみには非ず、然るを此には、心より泄出る樂を拍し立んとて、鐘鼓等の能鳴樂器を擇て、鳴すと云也【註】【又生出─】此句に、善字と假字とを、始て云出して、此より下に、此二字を多書也【金石─】【金】は、上古には、黄金のみを不云、一切の金銀銅鐵等を、皆曰金也、此にては鐘鉦鈴鐃の類を云【石】は、磬也、白氏文集に、華原磬、泗濱石とあるは、華原と云所にて、磬を作り、又泗濱の石を以て、磬にも作る也、事物紀原、說文曰、無勾氏作磬、世本亦云、又曰、叔所造、不知何代人、古史考曰、堯時人也、皇圖要紀曰、帝嚳造鐘磬、通禮義纂曰、黄帝使伶倫造磬也書の舜典に、擊石拊石、百獸率舞【絲】は、

絃を繫て引物を云、琴瑟箏琵琶の類也、琴、西都賦、世本、廣雅、皆云、伏犧所作、說文曰、神農所造、瑟、世本、拾遺記、帝王紀等皆云、伏犧作、西都賦曰、神農造箏、陸法言切韻曰、秦蒙恬所造、琵琶、樂府雜錄曰、始自烏孫公主造、馬上彈之【竹】は、竹管を以て造る、簫篳篥笛笙の類也、簫、通禮義纂曰、伏羲作、事始云、女媧造、風俗通曰、舜作、篳篥、徐景山曰、本胡人牧馬、截骨爲筒、用蘆貫首、吹之以驚群馬、因而爲竅以成音律、太平御覽曰、黄帝使伶倫作笛、吹之作鳳鳴、笙女媧作【匏】は、ひさこと讀り、ふくべの事也、ふくべを笛にして、穴をあけ、竹を挿み舌を著て吹物、笙の類也、爾雅翼曰、匏在八音之一、笙十三簧竿三十六簧、皆列管匏內、施簧管端【土】は、塤也、土を摶め、中を空にして、吹物也、毛詩に伯氏吹塤と云は是也、隋音樂志曰、塤六孔、拾遺記云、庖犧灼土爲塤【革】は、皮を張て打叩く、鼓羯鼓の類也、帝王世紀曰、黄帝殺夔、以其皮爲鼓、羯鼓錄曰、以戎羯之鼓、故曰羯鼓【木】は、柷敔也、木を以て獸の形に作り、腹を空にして、背に多く刻をし、其を竹節にて摺て鳴す也郭璞曰、柷、如漆桶、方二尺四寸、深一尺八寸、中有椎柄連

不可拘看、

人之於言也亦然、此以金石艸木引入人來有不得已而後言、不平其謌也、聲有思、不平其哭也、聲有懷、不平凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎、活、

艸木と水と金石と、何れも不平なれば鳴如くに、人の言ふも、心に不平あるに因て、詞を現す也【亦然】とは、亦如此と云意也 註【此以金石―】上に金石艸木を云て、此に人の上さを云を、引入と云也【有不得―】人生れて靜なるは、自然の性なれ共、思ふ事あれば、得忍へぬ故に言語を出す、是心の不平なるに依て也 註不平【其歌也―】毛詩序云、言之不足、故嗟嘆之、嗟嘆之不足、故咏歌之言語と歌とは、二つに非ず、言語を永するを、詠歌と云、詠歌には有聲、聲あれば鳴者也、故に註に聲字を記す、人たる者必ず有心心あれば思あり、思ふ事あれば、詞に現れて歌ふ也、有思は不平なる故に、亦不平と註す【其哭―】愁あれば啼哭す、啼哭にも亦聲あれば、鳴故に、聲字を註す、湖月曰、心に懷く事が有て愁る故に、聲を出して哭泣する也、羅山曰、上の思字と、此懷字と、何れもおもふと讀共、思は、念慮也、懷は胸懷、內におもひを抱く義を含めり、故に不平の字を註す【凡出乎―】總じて人の口より出て、言語の聲を成事は、歌ふも、哭するも、言ふも、皆心中不平なるに因ての事也、本朝にても、昔の人、思ふ事を云ねば、腹脹るとて、穴を掘て云入けると云るも左も有べし、此註に活の一字を下すは、退之が此句、活て動く樣也と云義也、是も文法の批判に用る字也、禪家に死句活句と云事あるは、又所指替るべし、此に凡出と云下に、又凡載と云るは、發端の大凡の內の小分也と可知、

樂也者、聲鬱於中而泄於外者也、善下語擇其善鳴者而假之鳴、又生出善字與假字金石絲竹匏土革木八者、物之善鳴者也、

樂は、音樂なれば、有聲故に、鳴と云ん爲に、注に聲

艸木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴、其躍也或激之、其趨也或梗之、其沸也或炙之、金石之無聲或擊之鳴、金石艸木、各只是一句、而水分出四句、此是不整齊中整齊、錯綜妙處、

艸本は、元來聲無れ共、風に吹撓まさるれば、枝葉鳴戰ぐ也、説文に、人の歌を謠ふを、風の木葉を吹て有聲に譬て、歌と柯と同韻にて、喩を取も、此義なるべし【水之無―】水も亦本來聲無れ共、風吹ば、波動て鳴也【其躍也―】孟子告子篇曰、今夫水搏而躍之、可使過顙、激而行之、可使在山、是豈水之性哉、朱子注水之過顙在山、皆不就下也、然其本性未嘗不就下、但爲搏激所使而逆其性耳、湖月曰、水の躍る事は、激するに依て也、水の石に當るを曰激、水本無聲、當石即鳴と云句ある也、羅山曰、水を打て揚る事は、下より澆き掛る事ある故也、龍骨車にて捲上るも此類也、愚案するに、前説是也【其趨也―】水は本低き處へ下る物なれ共、水道を塞げば、傍へ決て流走る者也【梗】古杏切、塞也【其沸也―】水は靜なる物なれ共、物に入て燒炙れば、湯と成て沸廻る時、必ず聲有て鳴也、又溫泉の沸出るも、下に如硫黃の熱石有て、熱き故に、湯と成て沸也【金石―】莊子天地篇曰、金石不得以鳴、故金石有聲、不考不鳴、金石も亦本來聲無れ共、打扣けば、必ず鳴響く也【註】【金石―】金石と艸木とは、各只一句に云終て、水の事をば、四句に分て書なり、是文法也【不整―】整齊は、とゝのひそろふ義也短句長句を云雜へたるは、掻亂したる樣なれ共、其一樣ならざる内に、一樣の句法あるを云也、是前後を云雜て、結りつける文法なれば、錯綜妙處と云也、絹を織者、其紋を長短に織共、一定と成して、筋目の違はぬを錯綜と云、是を文章の紋に譬る也、案するに、錯綜は、易の係辭に出たり、疏曰、謂交錯綜理之、朱子學的上云、錯者、雜而互之也、綜者、條而理之也【中整齊―】一樣に書そろへたる中に、別樣に書分るを云、是も文法にある事なれば此に云○青松曰、此文破題舉五行也、土則木火金水之中含之也、笑雲曰、火字亦無之、火亦木中含之乎、今案するに、必しも如此

此抽出成一篇序、如許其妙、莊子安得不爲作、困學紀聞左氏曰、先二子鳴、莊子云云、鳴字本於此、李性學文式、退之送東野序、一鳴字、發出許多議論、自周梓人爲筍簴來、黄氏日抄五十九云、送孟東野序、自物不得其平則鳴一語、由物至人之所言、又至天之於時、又至人言之精者爲文、歷序唐虞三代秦漢、以及於唐、節節中以鳴之說、然後歸之東野以詩鳴、終之曰、不知天將和其聲以鳴國家之盛邪、抑將窮餓其身思愁其心腸而使自鳴其不幸也、歸宿有味、而所以勸止東野不平者有道矣、師友之義、於斯乎在、而世徒以文觀之、豈惟不知公抑亦不知文者乎、事文類聚別集五、韓公送孟東野序曰、物不得其平則鳴、然其文云、在唐虞時、咎陶禹其善鳴者、而假言以鳴、夔假於韶以鳴、伊尹鳴殷、周公鳴周、又云、天將和其聲而使鳴國家之盛、然非所謂不得其平也、許彥周詩話云、東坡祭柳子玉文、郊寒島瘦、元輕白俗、此語具眼客見詰曰、子盛稱白樂天孟東野、又愛元微之詩、而取此語何也、僕曰、論道當嚴、取人當恕、此八字、東坡論道之詩也、

萬里曰、此篇十四段、自篇首至之鳴第一段、自人之至者乎第二段自樂也至者也第三段、自維天至平者乎第四段、自其於至善者也第五段、自周之至矣乎第六段、自其末至術鳴第七段、自秦之至鳴者也第八段、自唐之至能鳴第九段、自其存至鳴矣第十段、自抑不至盛邪第十一段、自抑將至幸耶第十二段、自三子至以悲第十三段、自東野至末第十四段、

大凡物不得其平則鳴、

羅山曰、漢書の藝文志に、大凡と云字あり、都合の義也、凡と一字ばかり書は、只をよそと讀む、すべてと讀、合せてと云類也、大凡と二字書は、をほよそと訓ず、惣合するの意也、大抵も大槩も、皆此義に通ず【物】とは、人にも係り、一切の萬物にも係る也【不得其平】とは、有愁有恨有憤を云也、故に恨を不平と云也、無爲無事なる時は鳴動せず、鳴動するは不平に在て也、或曰、蔡君謨云、伊尹周公得時鳴、如何不平而鳴邪、朱文公云、先擧不平而已、得意之人、而亦有以不平鳴也、

り第八に當る鳴字なし、故に三十九と云【讀者不覺─】是程短き內に、鳴字四十に及びあれ共、讀者其鳴字の繁多なる事を不覺、何とて左樣なるぞとなれば、文章の句法、變化とうつかはり、色色に書たる事、凡そ二十九樣なれば也【頓挫】羅山曰、抑る義也、頭を抑て、尖たる處を推摧くを云、靑松曰、手の裏にする義、愚案するに、二說甚非也、頓は、急速也、挫は、挫折也、長長と說下さん樣に覺る處を、急に折捉めて、きりくと短く書收る義也、陸機文賦頓挫而淸壯、註、頓挫、抑折也、假令ば、此文孔子之徒と云出して、長長と說さうにして、卻て四句にて書收め、末に東野が身の上を、只二句にて書止る類是也【升降】のぼりくだると讀、あげつをろいつする義也、愚謂文を上て云升せ、下へ云降す也、在於唐虞と云は、升也、其末也壯周と云より下は、降す也、高出晉魏と云は、升也、若不懌然は、降也【起伏】をこしふすと讀、現れ出ると、伏隱るとの義也、同じ水なれ共、地上を流る處は、起也、中を潛て行は、伏也、文章の陽に云と、底心有て陰に云との義也、愚謂く、起は、頭を擧、身を立、伏は、身を隱し伏する也、文を平平と說下すべきを、時として一廉崛起して說、又ひらりと伏沈めて說の義、假令は、發頭より段段說來て、孟郊東野始以其詩鳴と云は、起也、窮餓其身と云より下は、伏也【抑揚】をさへあぐと讀、褒貶の義にて、譽毀る事に用れ共、此にては文章の上にて、揚て云、抑て云とを云、愚謂く、下魏晉氏と云より、將天醜其德莫之顧邪と云迄は、抑也、唐之有天下と云より、使鳴國家之盛と云迄は、揚也、此類にて可推【如層峯─】層も疊も、皆かさなる也、此序を山水に喩れば、幾重も重ねたる山の如くなる處もあり、是は氣高處を指て云、又はげしく大波の打樣なる處もあり、是は文勢の盛なるに譬ふ【無一句─】一句も手ぬるく由斷なる辭なきを云【無一字─】每に能鍛鍊して用る程に、一字も拙く汚はしき事無と也【愈讀─】讀ば讀ほど面白き文也とぞ

○此序に鳴字を多用る事先例あり、周禮の考工記に、以脰鳴者、以注鳴者、以旁鳴者、以翼鳴者、以股鳴者、以胸鳴者、謂之小蟲之屬、又云、擊其所縣而由其虛と云り、此語を本として、此序を書たりと、文式に評せり、又莊子德充符篇、莊子謂惠子曰、天選子之形、子以堅白鳴、林希逸注、只一鳴字、韓文公就

清之功也【摧】は、碎也【陷】は、穽へ落し入る也、城を攻落すをも云【廓】羅山曰、敵の充滿したるを推開く義也、愚謂くほがらかに廣く開けたる意、國の亂を靖めて、何く迄も廣く治るを云【清】敵のある處を逐拂ひて、迹を清むる義也愚謂く迹字有弊、當換世字歟【比於—】孟子より後、聖學を知者、絶て少く、異端暴行するを、退之是を排逐して、正道を天下に倡ひ、魏より以來文風頽敗して、浮靡を事とするを、退之只一人古文を本として、文の道に合ふ樣にせし事、名將の雄偉が千人萬人に勝れて、尋常ならず、敵の鋒を碎破り、城を陷れ、國家の亂を治て、清め廣するに喩ふ、

○送孟東野序

〔迂云〕曲盡文字變態之妙○〔謝云〕一篇僅三百三十餘字、鳴字三十九讀者不覺其繁何也、句法變化、凡二十九樣、有頓挫、有升降、有起伏、有抑揚、如層峯疊巒、如驚濤怒浪、無一句怠慢、無一字塵埃、愈讀愈可喜、

韓退之

韓文十九、送孟東野序注曰、東野名郊、貞元十二年登第、間四年、調昇州溧陽尉、蓋是時送之序也、溧、理吉切、貞元は、唐の德宗の年號也、其十二年に、東野五十歳にして、進士及第す、能官位にも昇り、朝廷の左右にも可有と思ふ處に、僅に中四年有て、江南の溧陽の尉とて、卑き官に移されて、遠國へ遣はさる、退之文章の友にて、中好あるに依て、或時退之、我願くは雲と成、東野は化して龍と成て、四方上下相追隨んと云る程の事也、龍は必ず雲に隨ふ物なる故に、雲龍の交とは是也、東野が詩は、酸寒とさびて清寒なるを、蛩の聲などにも喩たり、東野も一家の名を得たる詩人也、只今溧陽へ赴く故に、退之別を惜て、此送行の序を作て遣也○萬姓統譜、孟郊、字東野、武康人少隱嵩山、性介少合、爲詩有理致、最爲韓愈所稱、登進士、調溧陽尉、後隨鄭餘慶、鎭興元、爲參謀、卒、張籍謚曰忠曜先生、才子傳、孟郊、洛陽人、貞元十二年、李程榜進士、時年五十矣、詩曰、昔日齷齪不足嗟、今朝曠蕩思無涯、春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花、當時議者亦見其氣度窘促、卒漂淪薄宦、詩讖信有之矣、天實爲之何哉、有咸池集十卷【註】【迂云曲盡—】此序文每句に、種種樣樣、文字のすがたを變化して、具に其奇妙を云盡すと也【謝云一篇—】此序一篇の文字、三百三十餘にして、鳴の字三十九あり、笑雲曰、字數六百三十三字あり、萬里曰鳴字四十字也、一本に發端よ

德仁義の道を發明せし程に、遂に天下の人、其道に皈宿して、餘澤を受る事、炳如とあきらか也、退之仁義之言藹如也と云は、無隱名句也、

洞視萬古、愍惻當世、遂大拯頽風、敎人自爲　以上形容先生文與道合

【洞視】上下表裏を見透す義也、萬古を視透して、聖賢の道に皈依し、當世の君臣昏迷するを愍惻とあはれみいたんで、道德に引入らるゝ也【遂大拯―】公遂に大に頽壞とくづれやぶれたる文章の風俗を救て、聖人の道に正し返し、世の人に敎知しめて、道と合ふ樣に、自ら爲しむと也、句解曰、敎人自爲正道之皈註【以上形―】是より以上には、退之文と道と相應する事を、形容とかたどり明して書述る也、

時人始而驚、中而笑且排、先生益堅、終而翕然隨以定、　此段四語、說盡退造平生

後漢魏晉より以來、唐の今に至る迄、文章道德皆頽敗して、四六綺麗の文のみにて、秦漢より以上の古文實學をば不知程に、退之が古を復し、道を本とするの文章を見て、始の間は、肝をつぶして驚く、中比には、氣狂に我まゝなる文章哉とて、笑嗤て且又排ひ斥く、一元湖月羅山皆謂く、始は驚て、退之が氣象を譽る也、排字、靑松は、退之佛老を排するを見て、李逢吉皇甫鎛が輩皆笑て、退之を排逐したりと云り、羅山は、退之か文を取て投捨たると云り、愚謂く只笑ふのみならず、又惡く云謗て、退け用ひぬと云也【先生益―】然共退之は、人の氣に不入事を、何共不思、彌我心を堅く守て不移、終には天下の人翕然と盛に信仰せしかば、其驚怪笑排する事も、合點するに隨て、止定まり、退之に皈服する也、羅山曰、翕然と皆心が合て、退之こそ文章書なれとて、退之文を手本とし、定めたぞと也注【此段―】此四句、公か平生始終作れる文を、世人一たびは毀り、一たびは褒る事を說盡す、

嗚呼、先生於文、摧陷廓淸之功、比於武事、可謂雄偉不常者矣、

【嗚呼】は、李漢、先生の文章に於て有功事を、嘆息する也、句解曰、摧抑陷卻在彼之文、使斯文有恢廣澄

此始、記二其言行一、策而藏レ之則史之原、起二於黃帝一【百子】老子莊子列子墨子韓非子荀子淮南子等所有諸子の屬也【搜抉】さぐりくじる【無隱】退之子史百家の書を搜り求て、不レ殘讀盡さるゝ程に、一部も隱る事は無と也、青松一元湖月羅山諸解皆如レ此但し無隱とは、其書を熟讀して、搜り見る程に、其の人の隱私、逃る所なしと云義にては非る歟、

汗-瀾卓-踔、𤁋 音殷 泫澄-深、詭-然而蛟-龍翔、蔚-然而虎-鳳躍、鏘-然而韶-鈞鳴、日-光玉-潔、 説二他溫潤明白處一、

句解曰、【汗瀾】清波多レ文也【卓犖跳踔】、文之奇也、汗瀾は、清波に紋の有が如くに、退之文章美しきを云、卓犖は、文章の奇特絶妙なるを云、句解曰【𤁋】泉水深貌【泫】水流貌、喩二文之宏潤一也、𤁋泫は、水の涌出て流る如くに、文章潤しく、意廣き也、乾き枯たる氣象不レ有也【澄深】句解曰、澄徹而清、深奧而邃、謂二文之淸瑩而非二淺近一也、澄深は、水の淸潔にして深き如に、文章奇麗に淺からず、凡近ならぬを云【詭】倶毀反、恠也【蔚】茂也、又文深貌、句解曰、文之詭恠、有レ如二蛟龍之騰翔一、文之蔚盛、如二虎鳳之飛躍一、退之文章の體、肝つふるゝ樣なる處のみあり、喩ば蛟や龍の翔り廻り、虎や鳳凰の飛踊る樣也とぞ、文章奇怪にして、人を驚かし、蔚盛にして凡卑ならざるを云【鏘】楚耕切、金玉聲、樂の聲を云【韶】九韶、舜の樂也【鈞】鈞天は、天帝の樂也、退之文章を、音樂に比して云ば、九韶鈞夫の樂を奏する樣に、高上奇妙なる文也、公が詩に、微風吹二木石一、澎湃聞二韶鈞一注、皆樂名【日光—】【注】【説他—】退之文章溫和潤澤と、むつくりと和かに、美しく潤ふ事、玉の潔きか如く、明白とあきらかなる事、日の光輝くが如しと也、

周-情孔-思千-態萬-貌、卒-澤二於道-德仁-義炳-如也、 澤、如二水有一レ澤、言二其歸宿處一、

王彥輔序云、逮レ至二子美之詩一、周情孔思、千彙萬狀、茹古涵レ今、無レ有二端涯一云云、退之才氣高上に、文章奇妙なる故に、周公の情志、孔子の意思を、千のすがた、萬のかたちに、種種變化して書出さるゝと也【卒澤—】註【澤如水—】公佛骨表原人等の文を書て、聖賢の道

【戊申】は唐の代宗大暦三年也、退之此年に生れられたりと也【孤】は、幼して無レ父の稱、退之三歳にして、父仲卿を喪す【兄】は起居舍人韓會也【播遷】配流也、罪を得て流さるゝを云【韶嶺】大暦十二年、宰相元載罪を得たり、公の伯兄韓會、元載に黨與すると讒せられて、韶州の刺史に貶せらる、退之時に年十一會に隨て配所に往れし也【兄卒】會幾程も無て、韶州にて死去せり【鞠】養也【嫂氏】嫂は、あによめ也、氏は、族也、古抄に、如レ曰二家嫂一家と云義、退之會か妻鄭夫人に養育せらる、退之會が養子老成を祭る文に云、兄沒從レ嫂、皈二葬河陽一、又復志賦曰、當二歳行之未一レ復兮、從二伯兄一以南遷、嗟日月其幾何、携二孤嫠一而北旋【辛勤—】南方にて兄死して後、辛苦して北方河陽へ皈來るを云、一説嫂鄭氏の事を云註【略叙—】畧は、大畧也【叙】は、述也【生長】生れしより成長する迄也【遷徙】父死して兄に從て南方に遷り兄死して嫂に携られて、北方に皈る、此方彼方へ移りし也、此段には、公が生長遷徙の本末を粗述る也【亦欲因—】退之幼少より成人迄、方方流牢し、艱難苦勞せしに依て、學問に力を用て、勤勵す事彌深し、其の人に示さん爲に、大略を書と也、

自知レ讀レ書爲レ文、日記二數千百言一、比二壯經書通念一曉析、

退之七歳より學問し、十三歳より文を書り、日日に數千百字の文を記すと也、邢君牙が公を稱美の書、進學解の註にあり【比壯—】は、二十歳計りを云【經書】六經諸書也【通念】我思念を通徹して、只上つらに眞似の樣にはせぬ也【曉析】さとしわかつ、經書の難レ讀を能其理に會通する也、

酷排二釋氏一、諸史百子、搜抉無レ隱、

強く佛法を排ひ斥る事、前の進學解、及び後の原道にあり、後漢の明帝より以來、佛法中國に入て、天下皈向す、唐の憲宗佛舍利を尊禮し、都鄙の士庶崇奉して、施捨する事無レ限、公佛骨表を上て諫諍す憲宗怒て退之を流す、此外詳に本集を可レ考【諸史】歴代の史官書置る者也、史記前後漢書三國志晉書南史北史隋書の類也、事物紀原云、呂氏春秋曰、蒼頡造レ史、帝王世紀曰、黃帝時造レ史、蒼頡始作二文字一、史官之作、蓋自レ

【後漢】の光武皇帝は、前漢の景帝の子長沙定王發六代の孫、是より獻帝迄に十四主、凡て百九十五年に滅る也【曹魏】曹操、字は孟德、後漢の末に、獻帝の讓を受て、國を魏と號す、武帝と謚す、是より元帝迄五主、凡て四十六年也、前の赤壁賦の註に載之、詳に魏志に見へたり【氣象ー】羅山曰、後漢の曹操が時分より、聖人の氣の象を、となえ失ふて、文道もしぼむ樣に成ぞと也此說未快愚謂く、後漢魏氏の代に至ては、上の唐虞三代の文章、氣象渾然、秦漢の氣象傑然とは、大きに變じ、物體衰へ果るを云【氣象】は、神氣體象、其からたましい也、凡そ文章は、以氣爲主、時代に古今あり、人に聖凡の異ある故に、所書の文、道理の外に、又神氣體象の盛衰美惡ある也【茶】奴結切、疲也、又艸枯也【司馬ー】司馬懿が孫、昭が子炎、字は安世、魏の禪を受、天下を一統して、國號を晉と云、是を西晉の武帝とす、是より七代東晉の恭帝に至て、合て百五十六年にして、宋の高祖劉裕に滅さる【規】は、作圓器、ぶんまはし【模】は、模範、鐘を鑄るいかた、此規模は、文章の法度也【蕩盡】韻會に、蕩蕩は、法度廢壞貌、西晉の時代より以來は、最早文章の法度もとろけつきて、物體もなく成果ると也、

悉謂易已下爲古文、剽掠潛竊爲工耳、文與道蓁塞、固然莫知也、第四節論後漢晉魏之非道也、

後漢より以來は、易より以下の諸經は皆悉く古文なれば、今の用に不當と云て、彼書籍からは、一二字三字、此物の本からは、一句半句づゝ竊出して、文を綴り成て、己が手柄上手とす、去程に文と道とが隔り塞て、固まり陋しけれ共、誰も惡きと不知也【剽掠】かすめかすむ、劫し奪ふの義也【潛竊】は、かくれてぬすむ隙を伺ふて、偸に盜也【蓁塞】蓁荊は、いばら也棘の路に生塞るを云註【第四ー】是迄は、次第次第に、末程道衰て、文も惡く成ことを云、

先生生大曆戊申、幼孤、隨兄播遷韶嶺、兄卒、鞠於嫂氏、辛勤來歸、略敘生長遷徙本末、亦欲見因艱苦而用力益深、

是逢君之惡、或者猶以其文墨取之、不知大人等賦、封禪等書、正其逢君之具也、吁尚足置齒頰間哉【董生】漢書列傳二十六有傳、一統志河間府、董仲舒廣川人、少治春秋、下帷講授三年、不窺園圃、以賢良對策、勸武帝勉强、學問行道、誠於內等語、帝嘉之以爲江都相、仲舒學有源委、正誼明道之言、度越諸子、爲漢醇儒、日鈔曰、董仲舒自孟子沒後、學聖人之學者惟仲舒、其天資粹美、用心純篤漢唐諸儒、鮮其比者【揚雄】漢書列傳五十七有傳統譜、揚雄、字子雲、成都人、好學博極群書、口吃不能劇談、而好沈思、成帝時、爲郎給事黃門、嘗奏甘泉河東校獵長楊四賦、又著法言及太玄經等書、性嗜酒、劉棻載酒問奇字、嘗校書天祿閣、王莽殺棻、詞及雄、乃投閣幾死、莽釋之、頌莽功德、比隆周召、通鑑綱目曰、莽大夫揚雄卒、明其罪也、日抄曰、雄淡泊而柔弱、富貴既非所好、節義又非所能、故唯欲以文字名世、嗚呼雄於浮辭曼語中、其殆拔足風埃、脫身塵涴者乎、不然、西蜀之一相如矣、漢世之儒、唯董生、其次王陽可耳、雄美新投閣、大節已虧【劉向】漢書列傳六有傳、統譜、字子政、本名更生、楚元王四世孫、年十二、父德任爲輦郎、既冠

以行修飭擢諫大夫、宣帝招選名儒俊材、向與焉、獻賦頌凡數十篇、元帝即位、蕭望之周堪薦更生明經有行、擢爲散騎宗正、以譖免官、成帝時、復起爲光祿大夫、以趙后淫亂、著列女傳、以王氏權大盛、作洪範五行傳、及說苑五十篇、數言得失、陳法戒、辭多痛切、發於至誠、上數欲用爲九卿、以王氏居位者所持、故終不遷、居列大夫三十餘年、七十一卒、向嘗校書天祿閣、有青藜夜照之、唐貞觀十三年、配享尼父廟堂、宋祥符二年、詔封彭城伯、漢書本傳註、師古曰、近代學者、讀向音餉、既無別釋、當依本字爲勝也、韻會去聲漾韻、向字二載之、其一音餉、其一音許亮切、向字在上時は、音しやう、在下時は、きやうと、常には讀共、劉向は、古來しやうと讀也、但し上の說なれば、又きやう共可讀【傑然】萬人に勝るを傑と云、傑出の作者也
註【言傑然―】羅山曰、自然と備はりたる道の文章の體也、喩ば渾然は、天地自然の艸木の如し、傑然は好畫工の艸木を畫き似せたるが如し、

至後漢曹魏、氣象萎苶、司馬氏以來、規模蕩盡、

誤りたれば、是非を辨析すべき爲に如此〔註〕分明、不再釋、

易繇爻象、春秋書事、詩詠歌、書禮剔其僞、皆深矣乎、第二節論聖經之深以道、

【易】の【爻】の辭は、周公の所作【象】の辭は、孔子の所係也、假令ば、乾の卦の初九にて言ば、乾元亨利貞と云は、文王所係の象の辭也、初九潛龍勿用と云は、周公所係の爻の辭也、潛龍勿用、陽在下也と云は、孔子の述給ふ象の辭也、句解曰、古易之道、由爻辭象辭之文而顯、爻は、毎一卦有六畫、是を六爻と云、其理を云述給ふを、爻辭と申也、其六爻の理を、毎爻に說を、象辭と云也、此二辭に依て、易の大綱は知たると也【春秋―】左傳序云、春秋者、魯史記之名也、記事者、以事繫日云云、大事書之於策、小事簡牘而已、孔子魯國史記を取て、春秋を作り、天下君臣善惡の事を記して、褒貶を成、後世の勸戒とし給ふ、皆是聖人の文章也【詩詠歌】詩大序曰、詩者、志之所之也云云、嗟嘆之不足故咏歌之云云、詩は、毛詩也、謠ふ物なれば、詠歌すと云【書禮―】孔安國尚書序云、上斷自唐虞、堯舜以下訖于周、秦繆芟夷煩亂、翦截浮辭云云、書は尚書、禮は禮記也、書禮には、僞たる事を剔り除て、實なる道ばかりを書述たる者也〔註〕【第二―】易春秋詩書禮記は、皆上古の聖人記し給る文なれば、各道理深奥也、

秦漢已前、其氣渾然、迨乎司馬遷相如董生揚雄劉向之徒、尤所謂傑然者也、言傑然、知與渾然異矣、第三節論秦漢之傑作、

秦漢より以前は、聖人の在せし時なれば、其文章の氣象渾然と眞圓にして、無疵瑕手の著處不有也【渾然】は、圓なる貌、如元氣未分也、又進學解の註に詳也【司馬遷】漢書列傳三十二に有傳、已に進學解に詳也、黃氏日抄四十七云、遷以邁性不羣之氣、無辜受辱、激爲文章、雄視千古、嗚呼亦壯矣、惜乎其未聞道也【相如】漢書列傳二十七、司馬相如有傳、亦同く前の解の注に見へたり、日抄云、相如素行不謹、立朝專

自篇首至不也第一段、自易繇至矣乎第二段、自秦漢至者也第三段、自至後至知也第四段、自先生至自爲第五段、自時人至以定第六段、自嗚呼至末第七段、

李漢

統譜、字南紀、少事韓愈、通古學、屬詞雄蔚、爲人剛、略類愈、愈愛重以子妻之、推進士第、遷左拾遺、唐敬宗侈宮室、舶賈獻沈香亭材、帝受之、漢諫曰、以沈香爲、何異瑤臺瓊室乎、

文者貫道之器也、文與道相離不得、道無形、文有迹、故曰文者貫道之器、**不深於斯道、有至焉者不也、**以上一節、先論文不離道、

註【文與道―】文は、文章也、道は、當然の理也、文と道とは二つなし、され共、道は理なれば、何の形もなし、文は文字にて形あり、故に文字を借て道を述ぶ、是文章は道を貫く器と云と也、此發端の辭に有病事を、朱子の評あり、文章は道よりこそ出たれ、文章から道は不出ほどに、文は貫道とは云れまじ、道は貫文とは可云と被申たり、晦菴語錄曰、或問韓文李漢序頭一句甚好、先生曰、公道好、某看來有病、問曰、文者貫道之器、且如六經是文、其中所說是道、是這道理如何有病、先生曰、不然、這文是從道中流出、豈有反能貫道之理、文是文、道是道、文只如喫飯時下飯耳、若以文貫道、卻是把本爲末、以末爲本、可乎、又曰、載道之器、猶飲器也、食則非無道、知道則非無書【不深於―】此所古來兩點あり、不深於斯と句を斷ば、斯字文に係る、道は、聖人の道也、言心は、深く文に達せずんば、聖道に至る者不じと也、不深於斯道と句を斷ば、道は、文章の道也、言心は、文道に達せずんば聖道に至る事は有まじきと也、何晦夫が句解に、以道字連斯字、萬里謂甚非也、湖月及び羅山も、亦前說を爲是、愚亦謂く、此道字は、上の貫道の道字と相應ずるなれば、道字下の句に連ぬべき事也、又斯字の內、暗に文字を含り、若し斯道と相連ねば、字法大きに拙く、且下の有至焉者の四字、所指安定せず、勿論兩點を擧るに不及事なれ共、已に句解に

悪き事の例には云難し、

乃其壻也、故爲レ叙云、

○集二昌黎文一序

〔迂齋云〕退之諸生、或爲二祭文一、或爲二行狀一、淺深疎密、居然可レ見、渙、

李漢、韓退之が文を集る時に、書る序也、退之卒して後、昌黎伯に封ぜられたる故に、韓昌黎と云【註】【迂齋云】【退之―】諸生は、退之が門弟子也、退之死後に、或は祭文を書者もあり、或行狀を書者もあり【祭文】は、神靈を祭る文也【行狀】は、一生の行跡を、具に述る文也【淺深―】各書たる文道、理の淺も深もあり、疎なるも密なるもあり、何れもを並べて見れば、上手下手、居ながら見ゆると也、李漢は、退之が壻なる故に、其文集の序を書と也、句解題註、此篇節奏、秩然不レ亂、先論二文以レ道爲レ本、次論二聖經之深一、於レ道、次論二秦漢之傑作一、次論二後漢魏晉、文與レ道乖一、然後方言二先生文與レ道合一、分二三四句一、說二時人始終之見一、末以二武事一比二先生雄偉之文一、文章一少伎、於二道末一爲レ尊、此論二後世之文一也、文者貫レ道之器也、此論二古人之文一也、天以二雲漢星斗一爲レ文、地以二山川艸木一爲レ文、要皆一元之氣所二發露一、古人之文似レ之、巧女之刺レ繡、雖二精妙絢爛、纔可一レ人目、初無レ補二於實用一、後世之文似レ之容齋續筆九、歐陽公書二韓文後一云、予家二漢東一、有二大姓李氏者一、其子堯輔、頗好レ學、予遊二其家一、見レ有二敝筐貯二故書一在二壁間一、發而視レ之、得二唐昌黎先生文集六卷一、脫落顚倒無二次序一、因乞以歸讀レ之、是時天下未レ有レ道二韓文一者、予亦方擧二進士一、以二禮部詩賦一爲レ事、後官二于洛陽一、而尹師魯之徒皆在、遂相與作爲二古文一、因出二所レ藏昌黎集一而補二綴之一、其後天下學者、亦漸趨二於古一、韓文遂行二于世一云云、予讀二張景集中柳開行狀一云、公少誦二經籍一、天水趙生、老儒也、持二韓愈文一僅百篇、授レ公曰、質而不レ麗、意若レ難レ曉、子詳レ之何如、公一覽不レ能レ捨、歎曰、唐有二斯文一哉、因爲二文章一、直以二韓爲一レ宗尙、時韓之道、獨行二於公一、遂名二肩愈一、字紹先、韓之道、大行二於今一、自レ公始也、又云公生二於晉末一、長二於宋初一云云、然則仕二國初一、開已得二昌黎集一而作二古文一云云、蘇歐陽更出二其後一、而歐陽略不レ及レ之、范文正公作二尹師魯集序一亦云、五代文體薄弱、皇朝柳仲塗、起而麾レ之、泊二楊大年一、專事二藻飾一、謂二古道不一レ適二於用一、廢而弗レ學者久之、師魯與二穆伯長一、力爲二古文一、歐陽永叔從而振レ之、由レ是天下之文、一變而古、其論最爲二至當一○萬里曰、此文七段、

此面白き時分の夜遊に、好詩を作り、文を不書しては、何とて風雅きやしやなる思ひをば述べきぞ、諸従弟何れも可作詩と也【如詩―】若詩を作り得ざる人には、罰盃を飲すべし、左あらば、其盃の數は、昔し金谷にての例の如く、三盃づゝにせんと也、晉の石崇、字は季倫、統譜曰、苞子、少敏惠、勇而有謀、年二十餘、爲修武令、有能名、入爲散騎卿、迁城陽太守、伐呉有功、封安陽郷侯、在郡雖職務、好學不倦、徵爲大司農、復鎭下邳、崇財業豐積、室宇宏麗、庖膳窮水陸之珍、與王愷競以奢靡相尙、後爲趙王倫所害、石崇金谷園にて、王詡潘岳など、合て二十四人、山水風景を玩び、酒宴歌舞して、詩を作る、詩不成者は、三斗の罰盃を飲せたり、其二十四友の内に、詩不作得して、罰盃を犯す者六人あり【註】【三斗―】世説に、王羲之が蘭亭の會に不作詩者に、三斗の罰盃を飲しむと云事あり、世説は、宋の劉義慶が編輯也、梁の劉孝標注之、此罰盃の事は、其註にあり、此古文眞寶の注の如んば、子良世説を作る歟と云樣なれ共、左樣には非ず、子良は、南齊の世祖の子也、義慶より後の人也、然れば、三斗罰盃の義は、石崇が時より有れ共、其如くに大盃の斗を定て、酒器を作る事は、子良が作なるべし、子良竟陵と云所の王に封ぜらる【石崇有記】金谷園の會の詩の序は、石崇書り、世説の注に載之、義之が蘭亭序も、石崇を慕て作れり【斗者―】五雜俎物部に曰、古人量猶多以升斗石爲言、不知所受幾何、或云、米數、或云、衡數、但善飲有至一石者、其非一石米、及百升明矣、按宋翌雜記云、淮以南、酒皆計升、一升曰爵、二升曰瓢、三升曰觶、此言較近、蓋一爵爲升、十爵爲斗、百爵爲石、以今人飲量較之、不甚相遠耳、古抄に、斗は、大盃也、三斗は、三杯也、杜工部が詩に、李白一斗詩百篇と云も、一盃に百篇を作るとぞ○羅山曰、此文を、叢林の僧、龍頭蛇尾などゝ批判して、惡き手本に載たなどゝ云は、大に誤也、何とて左云なれば、初には天地者萬物之逆旅などゝ、事事しく書出して、終には、罰依金谷酒數と止たるは、末物不足、尾の無やう也、書出しは龍頭なれ共、結句は蛇尾に似たりと云、然共此文に、名譽の處多し、況字、召我と云、假我と云、坐花と云、醉月と云、群季俊秀は皆と書、吾人は獨と書たる類、皆文章の手本とすべし、其上此眞寶には、古今の名文を集たれば、此篇を

【―】萬姓統譜云、謝惠連方明子、十歳能屬文、族兄靈運、嘉賞之云、每有篇章、對惠連、輙得佳句、嘗於永嘉西堂思詩、竟日不就、忽夢見惠連、卽得池塘生春艸、大以爲工、常云此有神助、非吾語也、官司徒彭城王義康法曹行參軍、又爲雪賦、以高麗見奇、靈運見其新文、每曰、張華重生、不能尙也、文字並行於世、年三十七卒、言心は、此親族の中、諸の弱き輩は、何れも皆秀逸拔群の文才にて、惠連が如なる衆也【吾人―】吾人は、自他也、但し今は只我と云義、李白自ら云、二字文選西都賦に見へたり【詠】は、吟詠【歌】は、詩歌、【康樂】統譜謝靈運、玄之孫、家于上虞、少好學、博覽群籍、文章爲江左第一、仕宋爲永嘉太守、襲祖父封爵、故世稱謝康樂、襲封は、父祖官爵を、子孫相次を云、靈運は、祖謝玄、父方明が爵を襲て、康樂公に封せらる、祖父よりの封爵なれ共、靈運名譽の人なる故に、謝康樂と云へば、靈運が事に成也、李白言心は、群季達は、皆惠連が如に、秀才なるが、我は獨靈運が如に、名句名文を作出す事のならぬは、恥しく思ふぞと也、上に皆と書、我に獨と書は、字法也、

幽賞未已、高談轉淸、開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月、

【幽賞】は、靜に風景を賞玩する也【高談】は、高上なる物語にて、野俗なる事を不云也、義談芳談の類【轉】流轉也、移り運て、漸漸なる意、又卻又復の義あり、云心は、風景を幽賞して未果、高談又淸して、人の耳を雪むる也【瓊筵】は、玉の席也、强ちに珠玉を坐席にするには非ず、奇麗なるを稱美して云【坐花】花を見て坐する也、春を含めり【羽觴】文選蜀都賦註、作鳥形也、又班婕妤賦註、觴輕如鳥羽之飛、羽觴、作生爵形、有頸尾翼、又晉束晳傳、羽觴隨波、如鳥之羽翼、鳥の形に盃を作り、指つ指れつ、月の前にて、酒を酌也、飛字は、羽字より書出す、此句は夜を含り、

不有佳作、何伸雅懷、如詩不成、罰依金谷酒數、

三斗爲罰、出世說、乃竟陵王子良作、石崇有記二十四人、犯者六人斗者、飲酒之杯也、

子を可指、但し文帝の書中に、已に古人と有なれば、其より以前の人也、

況陽春召我以煙景、大塊假我以文章、（莊）大塊假我以形、大塊、即天地也 會桃李之芳園、序天倫之樂事、

【況】矧也、佩觿集曰、發語之辭、今世話に、ましてやと云義也【陽春】毛詩曰、春日載陽、有鳴倉庚、陽は、火に取て溫なれば、春を陽春と云、沈休文詩、陽春布德澤、萬物生光輝【召】招也、上より下を呼也、此にては請待する意、【烟景】烟霞風景也、天の雲烟、艸木の花葉、日暄に風和き、鳥啼魚游の類、何れも春の風景也、古義に、春氣朦朧たる故に、烟景と云、李白言心は、常の時だにも、夜遊を可為事なるに、況や此春の景氣、一段面白く、我に來て遊べと請待する樣也、況字眼也【大塊――】註【莊子――】大宗師篇曰、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死大塊は天地の異名也、羅山曰、天地も我に文章を書とて、被假てある程に、能幸ぞと也我詩文を作る智慧は、天より備用したる者也、召我假我の字、奇妙なる文也、又古文訣曰、天以雲漢星斗為文、地以山川艸木為文、要皆一元之氣所發露、古人之文似之、愚按するに、此義は、今此本文に不相合、羅山注好【會桃李――】【會】は、會合宴會也【芳園】は、花多して香ふ苑也、强ちに無左共、只稱美する詞也、云心は桃李の園に會合して遊宴する也【序天倫――】【序】は舒也【天倫】穀梁傳曰、兄弟、天倫也、何休注、兄先弟後、天之倫次、又公羊傳及び禮記に、同く此語あり、但し今此に集る人は、必しも皆李白が兄弟許りにては無れ共、何れも親類なれば、其內にて年兄年弟を以て云、前に諸從弟とある是也、言心は我兄弟の如なる衆集て、歡樂の事共を、舒敘て遊ふ也、

群季俊秀、皆為惠連、謝靈運之弟曰惠連 吾人詠歌、獨慚康樂、靈運襲封康樂侯

【群季】は、諸の少年也、古義に、弟姪孫を指【俊】は、千人に優る者【秀】は、逸才、人より拔秀る者註【謝靈運

爲レ主、以二自然一爲レ宗、以二俊逸高暢一爲レ貴、其歌行之妙、咏レ之使二人飄揚欲一レ仙、選體多二露語率語一、五七言絶神矣、七言歌行聖矣、五言次レ之、七言律變體云云、事文類聚別集九云、李太白、初自レ蜀到二京師一、賀知章聞二其名一見レ之、出二蜀道難一示レ之、知章曰、公非二人間人一、豈太白星精耶、於レ是解二金豹一換レ酒、醉而歸、及レ見二烏夜啼一曰、此詩可レ啼二鬼神一、

夫天-地者、萬-物之逆-旅、（天地如二客舍一）**光-陰者、百-代之過客、**（日月如二流行過客一也、）

左傳僖公二年、今虢爲二不道一、保二於逆旅一、疏云、逆迎也旅、客也、迎二止賓客一之處也、莊子知北遊篇曰、悲夫世人直爲二物逆旅一耳、注、逆旅、客舍也、【夫】は、發端の詞【萬物】は、森羅萬象とて、天地の間に、所有氣形生植を總て云【逆旅】は、旅宿也、左傳に出たり（註）【天地―】客舍も、旅宿也、云心は、天地は一年一年に、萬物を送り迎て入宿する程に、天地は、萬物の爲には、旅屋也【光陰―】光陰は、日月のひかりかげ也【百代】は、天地開闢して、日月星辰出現するより、永劫千萬世迄を指云

【過客】は、旅人也（註）【日月―】云心は、日月流行して、千萬歲の間、四季晝夜、ちやつくと替り過るは、旅人の客舍に移り易る樣也とぞ、

而浮-生若レ夢、爲レ歡幾-何、古-人秉レ燭夜-遊、（古詩、晝短苦二夜長一、何不三秉レ燭遊一）**良有レ以也、**

秦二世曰、人生世間、譬猶下騁二六驥一過中決隙上也、李陵說蘇武曰、人生如二朝露一耳、何自苦如レ此、李白詩、處レ世若二大夢一、胡爲勞二其生一【浮生―】云心は人間の生涯を觀ずれば、夢幻の如く、甚た短し、其内に喜しき事幾くか有ぞ、愁勝なる者也とぞ【古人―】魏武帝短歌行曰、生年不レ滿レ百、常懷二千歲憂一、晝短苦二夜長一、何不三秉レ燭遊二云云、同文帝與二吳質一書曰、年一過往、何可二攀援一、古人思二秉レ燭夜遊一、良有レ以也、云心は、古人晝は短ふて、遊ふ間も無ければ、夜燭を立て遊宴するは、誠に有二此理一故也、是迄は日月の推移ことの速なるを云、人間の命の夢の如くなるに、徒らに日をは送るまじきと也、江西秉二燭夜遊一詩云、七十古稀休レ問レ天、只須レ秉二濁夜留連一、豈將二白髮三千丈一、坐待二黃河五百年一、此人は魏武父

荼、本艸行儀曰、猪苓行水之功多、久服損腎氣昏人目云云、東坡詩、千金得奇藥開視皆豨苓、荊公詩、物外眞游來凡席人間榮、願付苓通、本文の豨苓は、猪苓ぞと也【迂云―】前に匠氏璺師に比喩して書たる故に、此にて又如此結び止る也、

序類

【序】説文、東西墻也、徐曰、按書傳所以序別內外也、廬曰、夫序者、次第之語也、前之説勿施於後、後之序、勿施於前、其語次第、不可顚倒、故次第其語曰序、又文選、昭明太子序註、序、舒也、舒其物理、序は、其事を次第して云述るを云、孔子尚書の毎篇に、事を叙て、序を書給ふが、序の始也、又孔子易の十翼の内にも、序卦あり、又文に四體あり、序は、其事を有のまゝに云述を、序事と云、序と敍と通用す、增韻に、叙、述也尚書註疏、毛傳云、序者、緒也、則緒述其事、使理相胤續若繭之抽緒、帝王諸侯の言出す事を書を、辭命と云、義理を論し、人物を評し、諫異見などを書を、議論と云、文章に韻を抑を、詞賦と云、此四體を分て、眞西山文章正宗と云書を著せり、

○春夜宴桃李園序

李白本集、並に唐の文粹には、宴字の下に、諸從弟の三字あり、李白春の夜に、弟姪諸親族を引連て、桃や李のある園に往て、酒宴して遊る時に、詩などを作て、其詩の前書に、此文を書と見へたり○萬里曰、此序三段、自篇首至以也第一段、自況陽至康樂第二段、自幽賞至末第三段、

李太白

唐詩訓解姓氏云、李白、字太白、蜀人母夢長庚星而生、因名之、十歲通詩書、天寶初、賀知章言於玄宗、有詔供奉翰林、萬姓統譜、成紀人、唐宗室、性倜儻善詩歌、才思飄逸、大寶初召見金鑾殿、論當世事、詔供奉翰林、玄宗愛其才、欲官之會高力士以脫靴爲恥譖于貴妃、輒爲所沮、遂浮遊四方、寓情詩酒、有詩集三十卷、詳于新唐書文藝傳一百二十七○漁隱叢話前集五、山谷曰、太白豪放、人中鳳凰麒麟云云、唐詩選、李于鱗評、李白曰、五言古選體、及七言歌行、以氣

ければ、則ち分際の當然也、何の恨か有んと也【間】居晏切、隙也、空間、いたづらなる意、無用の義也【散】上聲、間散、散位、散地、散人の散にて、放散して不收の心、是も空隙無用の義、無官を散位と云【注】云心は、此動而—の四句は、退之自ら身上の難を解釋して、不怨不尤の心を說の辭也、

若夫商財賄之有亡、計班資之崇庳、忘己量之所稱、指前人之瑕疵、

何云、商確財利貨財之或有或無、如號寒啼飢之等、【商】は、量也【賄】亦財也、我人と財貨の有無を校べ量る也【班資】如爲御史竄南夷、爲博士不見治之等、羅山曰、位也、愚謂班は、班列とて、官位の高下次第行列也、資は、資給とて、俸祿也【崇庳】高下也、官位俸祿の高下を比べ計る也【忘己—】量は、器量也、我分際の其官職に相稱や否を忘る也【指前人—】韓文注、前人、謂在己之前謂貴顯者、古人の誤り惡き事を指陳して訕るならばと也、劉晝が傷讒に、洗垢求痕、吹毛覓瑕と云の類也、句解曰、若夫以下、末段結、乃自責而不敢責人也、

是所謂詰匠氏之不以杙爲楹、而訾醫師以昌陽引年　昌陽、乃菖蒲一寸九節〇【庳】音庇【疵】音慈【杙】音弋　欲進其豨苓也、　豨苓、乃猪苓迂云應前醫師匠氏之說、

祝曰、詰、責也、杙、橜也、楹、柱也、孫曰、杙小而楹大、故愈以杙自喩【註】【昌陽—】本艸大全、艸部上品之上、菖蒲、一名昌陽、一寸九節者良、孫曰、味辛溫無毒、久服輕身不忘、延年益心智、昌陽は石菖蒲也、一寸の內に節の九つ有が、長命の藥ぞと也、上に云如くに、人と財貨を比へ、官祿を校へ、人と同し樣に成たきと思ひ、己が小才を以て、古人の大才を毀るは、大工に細き杙を、大なる柱にせぬは、曲事と責、藥師の菖蒲を以て、年を延ると云を訕て、我此猪苓こそ壽命の藥なれ、是を服させ給へと進むると、同し事なるべしと也【註】【豨苓】黃氏日抄云、豨苓之豨、音喜、猪也、卽木猪

【猶且】上を承て、箇樣なれ共、まだかく有と也【月費―】諸王諸侯の外は、公卿大夫より下、皆官位に應して、毎月扶持銀切米を充給る、是を俸銀廩粟と云、俸は、―祿也、糜は、粥也、米をつぶす故に、物を用ひ費す義に取て、ついやすと訓ず、廩粟は、倉の米也、云心は、我何の功をも不成して、毎月公方より、錢を給て用ひ、毎年廩米を受け食ふと也【子不知―】先生仕官をする故に、子は田一畝も耕作せず、妻は紡績して織事もなし、博士の官なれば、馬に乘、奴僕を引具して行き、心安く席上に坐して、飯を食ふと也【踵常途―】踵は、躡也、句解曰、初爲四門博士、又三爲博士、是舊常途徑也、而役役踵行其間【役役】考異作促促、廉勤貌、又莊子齊物論曰、終日役役而不見其成功、注、役役、言身苦也、古義に、役役は、不進貌、三度迄博士に成は、熟路也、官位を經上る事も無ぞと也、羅山曰、我常の道は、博士の官也、其道を守て、役にして居る也、愚謂諸説皆誤れり、蓋し常道は、順正の路、日用常行の道也、役役は勤勞貌、言心は小官に居れば、大に其志を施事能はず、只我分際相應に任て、平日常行の正順なる道を守り行ふて、勤め勞するのみ也とぞ【窺陳編―】窺は、伺視也、陳は、舊也、編は、書籍也盜竊は、其内面白事は、我取て記憶するを、財寶を盜取に比す、云心は古書を伺ひ見て樂とし、其内奇特珍異なる所をば、能記し覺て、我重寶とすると也、羅山曰、弟子に物を敎るが役なる程に、陳編をば窺ふ也、其も皆皆とは會得せざる程に、所所を盜盜窺ふて、人に敎る迄ぞ、書物を見て、抜書する心もあり、此解甚謬、

然而聖主不加誅、宰臣不見斥、茲非幸歟、

如此して無用なる我なれ共、上に聖帝在す故に、慈仁充垂て、誅罰を不被加、宰相も黜け不捨して、下官なれ共充置、是我爲には好仕合に非ずやと也、

動而得謗、名亦隨之、投閑置散、乃分之宜、此四句、自解之辭、

我身を動せば、人の謗を得る程に、名も亦詘につれて惡く呼る、故に閑官散職に投ち置る、是我才短く能拙

に可レ言事に非すと云り、詳に孟子集註の序説大全に見へたり註【迂云含―】退之此に所レ引喩ニ內に、無レ限意味を含て書たると也、

今先生學雖レ勤而不レ繇ニ其統一、言雖レ多而不レ要ニ其中一、文雖レ奇而不レ濟ニ於用一、行雖レ修而不レ顯ニ於衆一、【迂云】此ニ之孟荀ニ、自謂レ足矣、

此先生は、退之自言也【學雖勤―】繇は、由也、統は、系也、歷聖より群賢に傳はる所の、儒者の道統とて、道のすぢめつりあり、此に云心は、我學問をば勤たれ共、孟子より以來千載、道統絶果たれば、誰より儒道の傳授を受たる事も無と也、蓋し底心には、退之聖人の道を傳たりと云事籠れり【言雖多―】要は、平聲、求也、孟子、以レ要ニ人爵一、老子經曰、多言數窮、不レ如レ守レ中、左傳、孔子曰、賜不幸而中、是使ニ賜多言一也、此には暗に老子の語を用て、不レ用ニ其心一、云心は、退之多言に口を叩け共、其中正の道をは求めずと也、按するに中字、下句の衆字と同く平聲、若論語に從て、去聲當也の義にすれば、衆字は衆多の義也不レ是【文雖奇―】退之所レ書の文章は、奇妙也と云へ共、何の用をも濟ひ成さぬと也、聖賢の文は、世用を濟て、國家を治る重寶也、杜詩韓筆愁來讀、如ニ倩ニ麻姑一爬ニ痒處一と云も、退之文の奇なるを云【行雖修―】行は、―迹、身の所レ爲也、修は、―理、美しく飾也、此にては、身に無レ過、行儀好事を云、退之行ふ所は、隨分好れ共、諸人の目に不レ立して、時に顯はれぬと也、言行能修者、國有レ道不レ捨と云には相違也註【迂云―】文公學と云、文と云、言と云、行と云、皆國家の大用を可レ濟者なれ共、孟子荀卿だにも、時に不レ遇して朽果たる程に、我可レ恨事なし、而して二賢に校れば、差て劣るべき事もなく、全く捨られもせねば、自ら滿足すると也、

猶且月費ニ俸錢一、歲縻ニ廩粟一、子不レ知レ耕、婦不レ知レ織、乘レ馬從レ徒、安坐而食、踵ニ常途一之役役、窺ニ陳編一以盜竊、

と相連屬する事を惡む也【鄙儒ー】此句の上に、史記には、不遂大道而營於巫祝、信禨祥と云十二字あり、生物知にて、不通事、いやしき儒者は、徒に小き道に拘り泥て、正大の道を行ふ事能はずと也【如莊周ー】莊子、名は周、史記列傳六十六に、滑稽傳あり、注、崔浩云、滑、音骨、稽、流酒器也、轉注吐酒、終日不已、言出口成章、詞不窮竭、若滑稽之吐酒、索隱曰、滑、謂亂也、稽、同也、以言辯捷之人、言非若是、說是若非、能亂同異也、莊子などが辯舌にて、是非を言亂り、世俗を搔亂る、荀子此類を皆惡む也【於是ー】儒は、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔、孟の道也【墨】名は翟、衞人、所著の書を墨子と名づく、事は孟子、荀子、淮南子、四書人物考等にあり、荀子、孔子、墨翟、道德仁義の行ひの事を推して、崇、老子、莊子か異端なる事を辨して、道の廢壞したるを擧興し、次第をし、論し列ねて、數萬言を著し、荀子と名づく、荀卿著書數萬言、羽翼六經、增光孔子と云是也又按するに、壞字、疑らくは懷、字歟【卒】死也【葬】死骸を穴に埋むる也、荀子後に隱居して、蘭陵にて死ければ、則其所に葬る、

是一二儒者、吐辭爲經、擧足爲法、絕類離倫、優入聖域、其遇於世何如也、

【迂云】含不盡之意、

孟子荀子は、何にても一言吐出せは、人の教と成故に爲經と云、經は、聖人の所作を云、此には二人を推尊て、假て言之【擧足ー】身を動し、事を行ふ、其行ひ成所の迹は、人の法度手本と成樣なる名儒也とぞ【絕類ー】皆繼く者なきを云、倫も、亦類也【優入ー】前漢賈捐之傳曰、臣聞堯舜、聖之盛也、禹入聖域而不優、注、臣瓚曰、禹之功德、裁入聖人區域、但不能優泰耳、云心は、此二人は、無比類名儒にして、優游とゆたかに、聖人の邦に入得たる學行なれ共、其も世に不遇、用られずして果たは、如何と云也、荀卿を孟子と相並へて稱する事は、漢唐の人の文章に多あり、退之讀荀子篇曰、孟氏、醇乎醇者也、荀與揚、大醇而小疵、此にも荀卿を大儒也とて、孟荀一樣に書り、而れ共、程子、朱子の評には、孟子は性善也と云に、荀子は性惡也と云は、第一道の本源大なる誤也、孟子と一つ

る者なし、是宰相の道也、

昔者孟軻好レ辯、孔道以明、轍環ニ天下ニ、卒老ニ于行ニ、【史】列傳、孟軻、鄒人也、游ニ事齊宣王ニ、宣王不レ能レ行、適レ梁、梁惠王不レ果レ所レ言、則見以爲ニ迂遠而闊ニ於事情ニ、

孟子滕文公下篇、公都子曰、外人皆稱ニ夫子好レ辯、敢問何也、孟子曰、予豈好レ辯哉、予不レ得レ已也云云、昔し孟子道を行はんと思て、色色口を叩て、異端を辯し正されしかば、孔子の道明かに成り、され共孟子を用て、國の政を授る者なく、孟子彼方此方を經廻り、車の迹天下に遍く行き、遂に旅にて老果られたり詿【史列傳—】列傳十四、孟軻荀卿同レ傳【鄒】は、魯國の內にあり、孟子は、其所の人也【游事齊宣—】齊の宣王に、此の間、臣下共なく、客人の樣にて居られたるを、游事と云【宣王—】孟子道を敎られたれ共、宣王合點無りしを云【適梁—】孟子梁へ行て、惠王に道を說れたれ共、惠王其云れし所を、果し遂て不レ行、羅山曰、道の事を皆云果させずに、惠王孟子の道は、一段と面白けれ共、先今時戰國の時分には、迂遠とまはりどをく、當座の用に立事にて無と思て、用ひなんたぞ【濶於事情】とは、事の實に遠して、急用に當らぬを云、羅山曰、孟子の云るゝ樣にすれば、人の氣に合ぬと云義也、是より當世に不レ合事を迂濶と云、

荀卿守レ正、大論以興、逃ニ讒于楚ニ、廢ニ死蘭陵ニ、【史】列傳、荀卿疾ニ濁世之政、亡國亂君相屬ニ、鄙儒小拘、如ニ莊周等ニ、又滑稽亂レ俗、於レ是推ニ儒墨道德之行事ニ、興壞序列著ニ數萬言ニ而卒、因葬ニ蘭陵ニ、

【守正】本集、作ニ宗王ニ、史記、荀卿尊ニ宗王道ニ【大論】一作ニ大倫ニ【以興】考異、作ニ是弘ニ、一作ニ是洪ニ【逃讒—】孫曰、史記、荀卿遊ニ於齊ニ、三作ニ祭酒ニ、齊人或讒ニ荀卿ニ、荀卿乃適レ楚、春申君以爲ニ蘭陵令ニ、春申死而荀卿因家ニ蘭陵ニ、荀卿、名は況、趙人正道を守て、孔子を尊ひ、數萬言を著はして、大なる論興れり、甞て齊の國に游官したれ共、讒言する者有しかば、逃て楚に行、蘭陵と云所にて朽果たり詿【史列傳—】荀子濁世とて、水の濁たるが如なる世の政道、國家を亡し、王君を亂て、亂と亡

皮倶收並蓄、待用無遺者、醫師之良也、

【玉札】註玉屑也、韓文註、一名玉泉、本艸大全曰、玉屑生藍田、玉のすりくづ也【丹砂】註朱砂也、本艸曰、辰州丹砂、辰砂也【赤箭】本艸綱目に、苗を赤箭とし、根を天麻とす、舊說には一物とす【青芝】本艸云、一名龍芝、生泰山、註四者貴藥とは、玉札丹砂赤箭青芝也【牛溲】註牛溺也 溲所留切小便也 主腫脹【馬勃】註生於地、如菰而圓且輕、山中に多し菰は、くさびら也、主惡瘡馬疥【敗鼓】敗き鼓の皮也、主蟲毒、此三藥は、賤き者也【倶收―】貴藥は不及申、賤藥及び常に不用者迄も、收め蓄へて、何病に逢ても、事不欠、其用に應ぜんと、殘さぬ樣にするは、良醫師所爲也、考異注方云、淮南子曰、賢王之用人也、猶巧工之制木也、大者以爲舟航梁棟、小者以爲楫楔、修者以爲櫚榱、短者以爲侏儒枅櫨、無大小修短、皆得其所宜、規矩方圓、各有所施、天下之物、莫凶於雞毒烏頭也、然而良醫橐而藏之、有所用也、是故林莽之材猶不弃、而況於人乎、公言蓋如此、

登明選公、雜進巧拙、紆餘爲妍、卓犖爲傑、校短量長、惟器是適者、宰相之方也、

是より宰相の人材を用る事を云、上の匠氏醫氏の譬は、畢竟是を言ん爲也【登明―】可登用者を、明に知て擧進して、選出才能、我私に忌嫉む事なく、我私に愛する所に依怙なく、公道にして、巧なる材能は不及云、拙く無調法なる者も、其其に似合しく雜へ進めて用る也【紆餘―】句解曰、紆餘、才之縈紆不迫、而綽有餘裕者、是爲妍、文選上林賦注、妍餘、妍好也【卓犖―】卓、異也、犖有力量也、乃超絕之才也、淮南子、萬人曰傑、紆餘は、のびのびと有餘者、才學の優なるを云、之をば傑として用に立、妍は、女の顏好也、卓犖は、奇特の材辨、類を拔出たる者也、其をば傑として、其用に立るとぞ【校短―】人の材、此に短して、彼に長く此に長して、彼に短き者あり、假令ば、文章に長じたる者、人を治るに長じたる者、軍法に長じたる者あり、其其に量校へて、其人の器用に相適て用れば、廢

聞事に被仰人哉と問難すると也、然而公と云より是迄は、難じて云詞也、

先生曰、吁、〔迂云〕設爲之辭 子來前、

書經注云、【迂】者、嘆其不然之辭、あゝ左樣にては無と云心也、此義文勢に相合よ歟、羅山曰、退之弟子に被詰て、溜息を續て返答する也、吁字をんの共、あゝ共讀り、大息を續て歎く詞也【註】【迂云—】退之詞を設作て問答を書と也【子來前】退之其方我前へ來れ、細かに理窟を云て聞せんと也、

夫大木爲宊、細木爲桷、欂櫨侏儒、宊、屋梁、桷、榱、欂櫨、乃柱上、附枅侏儒、短椽之屬【宊】音盲 椳闑扂楔、椳、戸樞、闑、門梱、扂、關柱也、楔、杙也爾雅、樞謂之椳、在地謂之闑、扂、閉門也、椳謂之楔、註門兩旁木也【椳】音猥【闑】音臬【扂】音簟【楔】音屑

各得其宜、以成室屋者、匠氏之功也、

退之弟子に引事をして聞する也、先材木數多可有に、良大工其内を見分て、大なる木をは棟梁にし、小木をは桷枅としなどして、其其に宜き樣に使ふて、家を作ると也【宊】【註】【屋梁】家のうつばり也【桷】【註】【桷榱】屋のたるき也【欂櫨】文選長門賦註、斗栱之屬、參差以承虛梁、說文、柱上枅也、柱上互木曰枅【註】【乃柱上附枅】ますがた也、柱の上に、花の蔕の樣に付る故に、附枅云【侏儒】【註】【短椽之屬】侏儒は、一寸法師也、短き義也、此に云短椽之屬とあれば、つかばしらを云【椳】【註】【戸樞】門の扉のくさび也、但し樞は、くろゝと訓ずれば、くさびにては非る歟【闑】【註】【門梱】門のしきみ也【扂】【詩】【關柱也】關の木也【楔】【詩】【杙也】門の兩旁の木也、くい共讀り【各得其—】如此其其に材木無費宜き樣にして、家を造立るは、大工の功業手柄也とぞ、是は人を使ふ事を、材木を用るに喩たる事、晏子春秋、管子、淮南子などに有に依て、退之底心に含て書也、

玉札丹砂、玉札、玉屑也、丹砂、朱砂也 赤箭青芝、四者貴藥 牛溲馬勃、牛溲、牛溺也、馬勃、生於地、如菰而圓且輕○二者賤藥 敗鼓之

文に、爲字作年字、注曰、公元和初、權知國子博士、避謗求分教東都、三歲即眞也、舊傳作三爲博士、蓋公正元十八年、爲四門博士、元和初自江陵掾、入爲國士、至是元和七年、自尙書外郎爲之、作三爲博士亦可、靑林曰按公貞元壬午、受四門博士、元和丙戌、爲國子博士、丁亥分教東都生、壬辰自職方員外郎、爲國子博士、凡四爲博士矣、此先言暫爲御史、繼言三爲博士、拜御史、則自元年赴召、至四年春、尙爲博士、首尾巳四年矣、玉川子有常州孟諫議座上、聞韓員外貶國子五首、云國學太頻頻、謂此也、考異作三年博士也、韓詩、三年國子師、腸肚蒺藜莧、以此詩見、則三年爲當矣、行狀云、分司東都、權知三年、【冗不―】何云、繁冗而不見其治理之敍、孟簡諫議聞公貶國子有云、國學太頻頻、正謂三爲博士之時也、羅山曰、先生三度博士の官に成て居らるゝが、其内には閙しく迫しき事のみにて、綏りと治る事は不見と也、冗は、世話に貧乏無隙と云が如き也、愚按するに、此二說の如んは、以治爲去聲、大に誤也、此上下の句、皆支韻なれば、當從平聲、作陳之切、云心は、三年博士と被成たれ共、公用繁して悤劇なる迄にて、何の治めらるゝ所も無と也、【命與―】先生の天命悪くて、只仇敵と談合する様也、然れは身の敗を取ん事、幾程も有まじきと也、取字、唐書に作其、

冬暖而兒號寒、年登而妻啼飢、頭童齒豁、竟死何裨、不知慮此、反教人爲、

世間に今年の冬は、何もより暖なと云へ共、先生の子息は衣薄ければ、寒く凍へたりと呼ひ泣、今年は豐年にて、五穀みのりたるとて嬉がるにも、先生の妻室は飢たりと云る迄也【頭童】髮脫落ち、幼童の髮短く、しかと不生樣なと也【齒豁】斷縮り、齒の間すきくつろぐ也、公贈劉師服詩美君齒牙牢且潔、大肉硬餅如刀截、我今呀豁落者多、所存十餘皆兀巍云云【竟死―】先生の身にては、年齡よりも早く老態を備へ、髮は脫、齒は落すいて、遂には頓て死なれんが、其にては何の裨け益有んと也【不知慮―】先我身に右の如の體ある事をば思ひ計らすして、弟子に教訓だては、一段

を指【成】論語、子路問成人其行成就して、少も惡き事なきを云、先生少年より勤學し、成長するより義方に志を通じ、文章は名人也、然れば眞の儒者にして、不足もなき人也と譽る也註【以上稱—】少始と云から皆退之人がらを稱美する也、

然而（上四段稱美、此一轉辨難）公不見信於人、私不見助於友、跋前疐後、（〔詩〕狼跋其胡、再疐其尾【疐】音致、）動輒得咎、

【然而】上を承て、翻して下を生する辭、註【上四段—】是より上四段は、弟子先生を譽、此にて一つ語を轉じ換て、不審を打て、是程の人なれ共、而も其體は如何と云也【公不見—】先生の體を見るに、公界にては、所言人に信仰せられず、私にしては、朋友の退之こそ善人なしと云て、救ひ助る者も無れば、公私共に欠たりと也【跋前—】註【詩狼跋—】詩經の狼跋篇の辭也、注跋疐、顚倒貌、老狼有胡、進則跋其胡、退則疐其尾、言進退有難也、年老たる狼の、喉に長毛有て、前へ行は、其毛を蹈、後へ退けは、尾の長き物なる故に、其に躓く也、人の進も退も、共に難義なるに喩ふ、今先生進退にしわづらふたる事を云也【動輒—】一言指出る事あるか、何ぞ物を少云んとすれば、人に惡く云れて、咎に逢と也、

暫爲御史、遂竄南夷、（貶連州令）三爲博士、冗不見治、命與仇謀、取敗幾時、

【暫】少時也【爲御史—】按ずるに貞元十九年、韓愈自四門博士、召拜監察御史、未及一年、是歳冬因上書極論宮市、又爲幸臣李實所讒、德宗怒、即貶連州山陽令、少しの間、官位高く成れたと思たれば、又被取返て、剩へ南方の夷狄の邊へ、流し者にせられ給ふと也【竄】は、何れの所へなり共流し、推込て放置て、其所より外へ出さぬを云也、連州の山陽は、大唐の南方の界に在て、夷の界なれば、南夷と云註【貶】は、官位を削貶て、配流する也【令】は、縣令、代官也【三爲—】韓

内並に文選に、其文多有之、無隠文章の上手也、已に前に記之、又後の集昌黎文序の註にあり【相如】は、司馬相如、是も文章の上手、別して賦を書名人也、漢書文選に多く載之、史記列傳五十七、司馬相如者、蜀郡成都人也、字長卿、少時好讀書學撃劍、故其親名之曰犬子、相如既學、慕藺相如之爲人、更名相如、以貲爲郎、事孝景帝爲武騎常侍、因病免、客游梁、居數歳、乃著子虚之賦、後上讀其賦、善而召之、相如曰、此諸侯之事、未足觀、請爲天子游獵賦、賦成奏之、天子以爲郎云云【註】【皆作史】史字誤也、一作者字是也【工】巧思也、文章の意趣を云【曲】部曲、文章の體格を云、同工異曲とは、上の經傳諸子の作と、先生が文章、或は意同して體異なるか、或は體同して意異なるか、何れに替て書と也、

先生之於文、可謂閎其中而肆其外矣　以上稱先生文章之著見

【閎其中】禮記註、寛中也、莊子天下篇曰、其於本也、弘大而闢、深閎而肆疏云、閎、大也、肆、申也、云心は退之被作文は、胸中廣して、五經、史記、莊子、離騷等を入置て、何事も用に隨て書出さるゝ事、自由三昧也とぞ【註】【以上—】是より上には、退之文章の著るく見はるゝ事を譽て云、

少始知學勇於敢爲、長通於方、左右其宜、先生之於爲人、可謂成矣　以上稱先生爲人之成立

退之幼少より、學は善物と知て、勇て強て爲らるゝと也【敢】說文、進取也、ふんぎりて爲也、論語に、見義而不爲無勇也と云から、此句を書出す【長】は、成長也、年十五なるを曰成童成人、長と云からは、十七歳の比より可云歟【方】古註并羅山、皆以爲道言心は先生成人するから、廣く道に通じた程に、前後左右皆宜と也、愚案ずるに字彙に、義方、論語、且知方也、方者、義之所在也、方は、方正にして、義の所在、文公此に志を通ず、故に身の行ふ所、皆正ふして無邪僻也、下に其宜と云、爲人可謂成と云は是也【爲人】人品

ふべし【詩】は、毛詩也、其道理正當にして、而も其詞花やかに麗し、歌ひ物なる故に、詞に花を咲せて、美しく作れり【葩】は、花貌、古の詩は、三千篇ありしを、孔子刪り正して、三百十一篇にし給へり【註】【詩之―】詩の義理正しく當て、而も辭のかざりうるはしきは、實に華の開けるが如し、日本にて、毛詩を葩經と云は、此語より云也【藻】華釋曰、黼藻【麗】美也、先生常に手本にする書は、先上代に於ては是等也、但五經の内にて、禮記を出さず、蓋し漢儒の古傳記を拾ひ集て、聖人の手筆に非る故歟、

下逮荘騷、（下及荘子、屈原离騷）太史所録、（司馬遷大史公史記所録）

是よりは聖人の書に非ず、又上に對しては、後世の輩なれば【下逮】と云、【荘】史記列傳第二、荘子者、蒙（屬梁國）人也、名周、周嘗爲蒙漆園吏、與梁惠王、齊宣王、同時、其學無所不闚、然其要本皈於老子之言、故著書十餘萬言、大抵率寓言也、有三十二篇、文意奇怪にして上手也【騷】楚の屈原、讒に遇て、江南の長沙瀟湘へ流されて居る内に、離騷經を作る、離は、あふ共、かゝる共訓ず、騷は、うれひと訓ず、又はなれてうれふ共讀、屈原流されて居る時に作る、故に騷と云、屈原より以前には、騷と云事は無りしに、屈原騷經を作しより、騷の體と云文の體ある也【太史】前漢の武帝の時、司馬談、其子司馬遷、相繼て太史の官と成、遷上黄帝より、下當代武帝の天漢二年迄、凡て三千餘年の間の事を記録して、史記を作る、帝王の事を記すを本紀と云、年代を略して記すを年表と云、當時天官封禪河渠等の事を記すを書と云、諸侯大臣の、代代國を承繼を記せるを、世家と云、臣下諸人の事を記すを、列傳と云、合て一百三十卷也、太明一統志平陽府に載、司馬遷、龍門人、父談爲太史令、遷十歳誦古文、弱冠游江淮、浮沅湘、涉汶泗、過梁楚、以皈、太初中爲太史令、因論李陵、得罪幽、而發憤修史記、劉向、揚雄、皆稱其有良史才、詳には史記の自序傳、漢書の列傳に見へたり、

子雲相如、（揚雄、字子雲司馬相如、皆作史）同工異曲、

【子雲】は、揚雄が字也、前漢の蜀人、漢書に有傳、其

難讀也、羅山曰、佶屈は、よれかたまりて、情の強き意也、屈强も此義也、聱牙は、齒の不立、嚼知れぬ義、讀にくき物と云意也、殷盤周誥を指て云、

春秋謹嚴、一字褒貶、謹而嚴毅　**左氏浮誇**左傳之文、釋經而修飾、若浮虛而誇大、

【春秋】は、孔子の筆作なる故に、謹嚴なる也、褒貶謹み嚴じふして、一字も苟且にし給はざるを云、孟子、作春秋而亂臣賊子懼と云是也註【一字―】春秋は、天下の諸侯大夫の事を書給ふとて、一字を以て褒つ貶つせる程に、謹て屹かと嚴しく毅く、少しも亂賊を恕容せす、人の見て如此に無りし者をと得云ざる樣に、恥恐る樣にし給ふと也【左氏―】左傳、穀梁傳、公羊傳は、皆春秋の傳也、此三家の內にて、左丘明が傳は、浮誇なると也、羅山曰【浮誇】は、根も無て、誇りたるを云、無實意也、浮字を用るは、萍などの、根は無て漫る心也、無實者をうきたる人と云も此義なるべし、左傳、春秋の註なれ共、合て見れば、春秋よりは飾て書たる故に、浮誇と云也註【左傳之文―】釋は、註解也、修飾は美く飾る也、浮虛は、上つらに、輕ふして水に浮ぶが如く、中空にして朽木の實ならざるが如く也、誇大は、實に過て誇張し、大言して密ならざる也、左傳の浮誇にして、春秋の謹嚴と相反する事を譏れり、左氏が事は、四書人物考等にあり、

易奇而法、易之變易甚奇、而正當之理可法　**詩正而葩**詩之義理甚正當、而辭之藻麗實華、

【易】は、周易也、伏羲始て八卦を畫し、是を重て六十四卦とし給へり、周の文王、其占の辭を作り給ふ、一卦に有六爻、合て三百八十四爻也、周公爻の辭を作り給ふ、孔子十翼を著せり、是四聖人の作也、陰陽變化の道理を述、占卜の用を兼、其文奇妙にして法度あり、凡そ奇妙なる事は不合法、正當なる事は、奇妙ならざる者なれ共、易の奇にして法に合たるは、聖人の作なる故也、所謂十翼は、彖辭上下、大象、小象、文言、繫辭上下、說卦、序卦、雜卦、是也、宜考易經大全註【易之變―】易は、變易とうつりかはる處有て、奇妙不思議なる者也、而して正當なる天理、尤も法り效ひ用

郁含英咀華、至子雲相如同工異曲、此退之作文章
法也、

作爲文章、其書滿家、上規姚姒、
渾渾無涯、

【上】は、上古也【規】は、法也【作爲】は、つくる也【文章】は、先生が文章也、其所自作の書、澤山に家に充滿て有と也【姚】說文、舜居姚墟、因以爲姓【姒】音似、禹母呑薏苡而生、因姓姒氏、舜禹の事は、史記、幷に綱鑑等の書に詳也【渾渾】揚子曰、虞夏書渾渾爾、古義に無極貌、又廣大貌、羅山曰、圓にして無疵貌、愚謂荀子に、財貨渾渾如泉源と云時は、古注の二義相合す、枚乘が七發に曰、沌沌、渾渾、狀如奔馬、李善が注に孫子兵法、渾渾沌沌、形圓而不可敗と云時は、羅山の義佳也、但し三義を相合して、渾沌とにごりて、不可見、不可測、故に廣大にして無極、圓にして無痕と云は、如何可有や、言心は先生の文章は、誰を手本にしてか、書ぞと云へば、先上古舜の時に、堯の事を記されたる堯典や、禹の時に、舜の事を記されたる舜典などを、慕倣して作れる也、彼二典の文章は、渾厚にして無痕、道理無極故に、凡才の筆力非所及、而るを退之は是を手本とせらるゝと也、

周誥殷盤、 殷三盤、卽書盤庚上中下三篇、周五誥、卽書大誥康誥酒誥召誥洛誥五篇 佶屈聱牙、 聱牙、謂不入牙難讀也、

周公旦の著し給へる書五篇あり、尙書の內の大誥康誥酒誥召誥洛誥是也、是を【周誥】と云、大誥は、武王殷の紂を滅し給ふに、其民久しき國の主人なれば、紂を亡し給ふを恨に可思かとて、此篇を書て、示し喩さるゝ也、康誥は、周公の弟康叔を、衛の國に封ずるとて、教戒て書給へり、酒誥は、紂が酒を嗜て、惡逆をしたる事書て、戒とし給ふ也、召誥は、周公と召公の問荅を書り、周公召公は、成王の左右の大臣也、洛誥は、洛都を經營し立る事を載られたり【殷盤】は、殷の盤庚書給へり、上中下三篇あり、是も書經の內に載之、盤庚帝都を他所へ遷せるとて、萬民舊土を離る事、迷惑すべけれ共、後に善らんぞと云事を、民に告られたる書也【佶屈聱牙】孫曰、皆難澁貌【註】聱牙、謂不入牙

障百川而東之、廻狂瀾於既倒、

先生之於儒可謂勞矣　以上稱先生之勞於儒道、

【墜】は、落也【緒】字彙、基緒、系統也、物を繫げる絲也、墜緒は、孟子歿して後、儒道の筋目斷落たるを云【茫茫】遠く霞て見へざる貌、云心は、道統の傳の已に絶果たるを尋求め、獨旁く搜らぬ處もなく、遠く上孟軻氏の傳を紹と也【障】は堤也、阻也、堤を築て水を塞止むる也【百川—】大唐の地形、西北は高き故に、川の流出る源あり、東南は低して海なれば、有ゆる川は東南へ流て、海に落る也、人間無水不朝東と云句も此心也、海邊に山あり、砥柱と名づく、此山皆石にて、海底より高く涌出たるが如し、沖より大波打たる時、此砥柱に礙られて、取て返す也、若無此砥柱は、津波などの有ん時、海邊の國は、大形皆海に可成に、此山にかゝつて無恙と也、故に大事の用に立人の助と成者を、砥柱に喩る也、砥柱の事、尚書の禹貢に見へたり、句解曰、佛老之言、蕩蕩然波流風靡、若狂湧波瀾、已盡傾倒、公已乃急掉而廻之、言心は、百川皆東へ流る者なるに、四方の堤斷て、漫に溢れ流るを、堤を築て、東へ流る樣にする也、吾道の異端に流るを、禹の洪水を治るが如く、孟子の楊墨を距くが如く、本の正道へ進み行かしむる也【狂瀾】は、老莊佛教を指【既倒】は、躐次もなく傾き溢るを云、異端の盛に行れて、不可救正を、力め辨して推廻す、如此先生儒道に大功を成て、辛勞有と可申事也【註】【以上—】先生の儒道を守護するに、苦勞すると譽て云也、愚謂勞字、古來苦勞の義に見るは、一段順也、但し功勞の勞として、退之儒道に於て、大功あるを云は、如何、是歟、

沈浸醲郁、含英咀華、

【沈浸】深涵の心、道理深奧なるを云【醲郁】酒味厚く、香氣濃なる也、文章の體、厚く濃なるを云【含】は、口にふくむ也【英】は、華也【咀】は、嚼也【華】は、艸木の英華、言心は、先生作れる所の文章は、道理深して、水に沈み浸すが如く、體製厚く濃にして、淡薄ならず、精英光華を發揮して、艸木の英華を含み咀ふ樣也とぞ、花やかに美しきを云、唐の代の文章を集たる書を、文苑英華と名くるも、此語に本けり、是より下、文章の妙なる事を説、孫曰、補注、陳齊之語錄云、沈浸醲

皆不給に會通し、日の内は不及申、夜も燈を燒て日の景を承繼で、少も無間斷常住頭をも不振勤學して、一年中を暮し送り給ふ、先生の作業は、隨分勤苦と可申と也【兀兀】文選注、用心貌、一作矻矻文選に、終日矻矻、注、勤作也又毛晃曰、矻矻、勞極也、但し今は、上の二注を可用註【以上一】上に所云は、皆退之自業を勤る事を述る也、

觝排異端、攘斥佛老、補苴罅漏、張皇幽眇、

〔漢書〕冠雖敝、不以苴履【苴】子魚反【罅】呼訝反

韓文注【觝】角觸、淮南子曰、兕牛之動以觝觸【排】擠也、斥也【異端】論語爲政篇、子曰、攻乎異端、斯害也已、朱子注、異端非聖人之道而別爲一端如楊墨是也、言心は、聖人の道の外なる異說妄術、世を惑し、民を誣る者をば、先生力めてつきのけ、をしをとす樣にすると也【攘】字彙、袪逐也、郤退也【斥】黜也、擯也屏除也【佛老】釋迦老子の道也、佛は寂滅を宗とし、老子は虛無を宗とす、佛は五倫の道を捨、萬物を幻化とし、寂滅爲樂を宗旨とし、人事を謝絕し、山林に逃入て、獨其身を善す、老子は道在天地之前萬物未生の時虛無自然の境界を本宗とすと云て、仁義を攘ひ、禮讓を廢て、世法に不拘、故に儒道よりは、大に嫌ひ忌、詳に性理大全、近思錄、異端辨正等に見へたり、而して先生專らに是をはらひしりぞく、佛骨表などにて可見【補】綴緝也、衣の破たるを、つゞりおぎぬふ也【苴】字彙苞苴裹曰苞、藉曰苴註漢書、冠雖敝、不以苴履、補註云、苴所以藉履也、孫曰、包苴也、案ずるに字彙補注の義は、しく也、漢書の義は、冠はふるけれ共、履のつぎにはせぬと云を、此註に所引は、をぎぬふと讀せん爲也、孫が義は、つゝむ也【罅】說文、裂也、廣韻、孔罅也器のひゞきの入を云、ひまと訓ず【漏】水もるゝ也補苴罅漏とは、儒道の透間ある所を補ひ足す也【張皇】書康誥曰、張皇六師正義曰、皇、大也【幽眇】句解曰、此道之幽而微者、眇而小者、則鋪張而廣大之也、儒道の幽眇とかすかにかくれたる所をば、張皇とはりおほひにする也以上皆先生己が任として所爲也とぞ、

尋墜緒之茫茫、獨旁搜而遠紹、

生欺レ予哉、弟子事二先生一、于レ茲有レ年矣、

退之上の如く云る處に、其座に列り居たる內に、是を聽て笑て云樣は、先生は吾等を虛氣にして、だまして斯く仰せらるゝ歟、吾等先生に就て學問する事、年久しきに依て、先生の上さは、能知たりと也【既】は、盡也、終也【註】【迂曰設―】退之自ら假に門弟の辭を造て、我如此云たれば、弟子の內に是を笑て問難する者ありたると云て下の辭を書出す也【以下皆―】此下は、皆退之が學の事を譽て、又艱苦の事を詰る也、

先生 以下皆美二先生之事一 口不レ絕レ吟二於六藝之文一、手不レ停レ披二於百家之編一、

漢書儒林傳序曰、古之儒者、博學二乎六藝之文一、注、師古曰、六藝、謂二易禮樂詩書春秋一、又藝文志、師古曰、六藝者、六經、而謂二之六藝一、猶二種也學者用レ功於六經一、猶二農者用一功種藝一、一說、六藝は、禮樂射御書數也、但し此にては、六經を指也、是より下、弟子退之を褒て云、先生常に口には六經の文を唱へ、手には百家の書を開て、觀つ誦つする事を不レ止と也、皇甫湜曰、先生三歲而孤、七歲好レ學、邢君牙曰、十三能レ文、亦勇二於進修一矣、

記レ事者必提二其要一、纂レ言者必鉤二其玄一 此二句、是讀レ書法、

何にても事を筆記すれば、必ず其內の要約を提擧し、言を纂述すれば、必ず其中の玄妙を鈎取と也、韓文注、玄、幽深也【註】【二句―】此兩句は、古書を讀の手本也とぞ、後世の書に、史學提要、禮記纂言、群書鈎玄と云名は、此にある文字を取て付る也、

貪レ多務レ得、細大不レ捐、焚二膏油一以繼レ晷、恒兀兀以窮レ年、先生之業、可レ謂レ勤矣 以上稱二先生之勤二於己業一、

書を讀、事を識るに、博く多からん事を貪り求め、其道理を不レ殘得ん事を務め、小なる事も、大なる事も

骨者、きりひらく義、又剔抉は、ほりくじる也【抉】說文、挑也、韓文序曰、諸子百史、搜抉無餘、ほりくじる也、是は抉去兇邪に係て看る【刮垢磨光】身の垢をこそげ除る如に、惡人を去、玉の光をとぎみがく如に、善者を勝り立る也、萬里曰、人有惡迹、如垢穢然則刮削而去其垢、人有善行而光輝者、則磨濯而出其光、此言成就人才也、此說甚是也、羅山曰、惡き者を除る事は、垢を去如にして、光を磨き出す樣に有ぞと也、恐くは誤也【蓋有幸―】桂林曰、幸字、應爲末非幸歟之幸也、指たる者にては無れ共、不慮に仕合好して、官に選ばるゝ事は有と也、羅山曰、學問をして名を得んと思ふ者は、不及云、亦只吾心の嗜にせんと思ひ、名の爲にもせずしてある者も、不思に選出さるゝ者も有と見へたりと也、此說甚迂闊【迂云幸―】此幸字に、許多の義理を含たるぞと也、不慮に選るゝ者と、勿論名を知るゝ程の學者に成んと思ふ者とに係る程に、有含蓄と書たるぞ、是羅山の說也、愚謂只不慮に選者と云注許りにて內に他人の上さと我身も幸に其數に入と云意あり、是則含み蓄る所あるの義也、勿論と云より下、幷に前說の意は、本文に不見可謂穿鑿而迂濶【孰云多―】萬里曰、孰謂多才之人而不獲顯揚乎、此皆誘掖諸生之辭也誰有てか多能なれ共、用ひられずとは可云ぞと也、

諸生業患不能精、無患有司之不明、行患不能成、無患有司之不公【迂云語健】

前に云如なれば、構て諸生達、自ら我所作の精熟せざる事を患へよ、宰相の明かに無などゝ憂る事勿れと也【有司】の字は、書の大禹謨に出たり、諸事の司を云、此にては、宰相及び選擧を主る人を指【行患―】我身の行迹成就せぬ所を思ふべし、宰相の依怙贔屓にて、用られぬとばし思ふなと也、論語、子曰、不患人之不己知、患不知人也、此等の語勢也、此業字行字、精字成字は、皆前に應ず【迂云語健】とは、此四句弱氣なく、强きを譽て云、

言未既、有笑于列者曰【迂云設爲弟子之辭】先

【業】は、學業也、己見師說注【精】は、熟也、凡物之純至者、皆曰精、字彙米を舂て、粹白にするの意あり、故にしらげと訓す【荒】は、廢也【嬉】は、戲樂也【行】は、行迹、身の擧動也【成】は、成就、身の所行、至善にして無玷を云【思】は、思慮、工夫するを云【毀】は、傷也、禮儀を傷て正しからざる也【隨】は、句解曰、追隨於遊觀之人、桂林曰、晤用詩之詭隨字、羅山曰、學問のしわざは、能勤る程くはしく成、遊嬉むに依て怠也、行は、是非共と思に依て成就し、惡き道に隨へば、行は敗る者也、愚謂毀于隨の義、諸說の如にては、文理不快歟、蓋し平生工夫もなく、我所爲のまゝに隨へば、行迹敗るの義也、

方今聖賢相逢、治具必張、拔去兇邪、登崇俊良、占小善者率以錄、名一藝者無不庸、

【聖】は、憲宗を指【賢】は、皇甫鎛、李逢吉等を指【治具】莊子天道篇曰、刑名賞罰、治之具、漢書酷吏傳序曰、法令者、治之具、而非制作清濁之原也、師古注、言爲治之體、亦須法令、而法令非治之本【必】考異に作畢、言は只今聖君賢相相遇會して、治道法度能張行はると也【兇】字彙、音胷、惡暴也【邪】不正也、姦思也、佞也【俊】智過千人曰俊【良】說文、善也、廣韻、賢也云心は、惡人を擇去、善人を擧用る也【占】韓文注、去聲、字彙、固有也、身にたもつ義也【庸】は、用也、云心は、小にても善を有つ者をば、大方其名を記して置、一藝に勝るゝ名ある者をば、用ひぬと云事なしと也、

爬羅剔抉、刮垢磨光、蓋有幸而獲選、【迂云】幸字、有含蓄　孰云多而不揚、

韓文注、爬、義與把字同、前漢貢禹傳曰、捽山把土、晉書嵇康傳曰、把無已、注、把與爬通、師古曰、以手絲罟鳥也、羅山曰、爪を齊へて、物をかき出す也【羅】爾雅、鳥謂之羅あみに羅て洩さぬ也、是は俊良小善一藝を擧用るに云【剔】音逖、說文、解也、或作肆、周禮內饔注、剔者、肆解肉也、詩楚茨注、有肆其

官位卑き事は何ぞやと云ければ、朔答客難の文を作る、客の問難するに答ふるの義也【班固】字は孟堅、後漢扶風の人、顯宗の時に、蘭臺の令と成、中護軍に至る、續蒙求曰、班固、繼父彪業、著漢書、其序事不激詭、不抑抗、贍而不穢、詳而有體、使讀之者、亹亹而不厭、亦有良史之名、其答賓戲自序曰、永平中爲郎、典校秘書、專篤志於儒學、以著述爲業、或譏以無功、又感東方朔揚雄自喩以不遭蘇張范蔡之時、曾不折之以正道、明君子之所守、故聊復應焉、人班孟堅が著述許りを事として、何の功も無と毀りければ、答賓戲の文を作る、自ら主人と成て、賓客の戲に返答するの義也、此解、嘲客難、賓戲の三篇漢書、後漢書、幷に文選に載之、隱れもなき名文也、今此進學解の大意東方朔、揚雄、班固が事を感じて、右の三篇の體を學べ共、而も此解の文章、過て勝れり、公過とは是也、公は、退之を指○萬里居士曰、此篇十四段、自篇首至不庸第一段、自爬羅至不揚第二段、自諸生至不公第三段、自言未至勤矣第四段、自觝排至勞矣第五段、自沈浸至外矣第六段、自少始至成矣第七段、自然而至人爲第八段、自先生至功也第九段、自玉札至良也第十段、自登明至方也第十一段、自昔者至如也第十二段自今先至之宜第十三段、自若夫至末第十四段、

國子先生、元和七年、公復爲國子博士晨入大學、招諸生立館下、誨之曰、〔迂云〕設爲國子先生之辭、

孟子告子下篇、先生將何之、趙岐曰、學士年長者、故謂之先生、韓詩外傳、古之謂知道者、曰先生何也、猶先醒也、不聞道術之人、芒芒乎其猶醉也退之國子博士と成時に、自設て書たる文也【註】の義は、題註に詳也【晨入—】晨は、早朝也、諸生は、學徒也、館は、說文、客舍也、但此は大學寮の內の館也、云心は、退之末明に、大學寮に入て、學徒を招集て、示し敎て云也【註】【迂云—】實は箇樣にては無を、假に辭を設作て、あり〳〵しく問答を書たると也、

業精于勤、荒于嬉、行成于思、毀于隨、

部、掌檢勾事、唐天寶十一年改掌諸司公廨公私缺負、及句用度物也、羅山曰、人の功勞を比量して、位を進むる事を主る也、愚謂此說誤也、諸事の物を奉行し、勘定を司る官也、今の納戶奉行にして、勘定吟味の役を兼たる者也、事文要玄曰、秦有郎中、以其爲郎侍衞居中、故曰郎中【孫樵】韓文題注云、孫樵與王霖書曰【吏部】事物紀原曰、漢初曰常侍曹、後漢爲選部、魏始曰吏部、又曰、秦有郎中令臣瓚以爲主郎內諸宮、吏部は、日本の式部也、郎中は、日本の大輔少輔大丞などに配當す、然れば吏部郎中は、式部大輔等の官也、是は博士より高き官也、退之此官に成故に、韓吏部と云也【玉川子】は、盧同也、退之と同時の詩人也、月蝕の詩を作る、名譽の詩なれ共、長篇にて讀にくき者也、其詩を韓文にも、事文類聚等にも載たり【莫不拔―】進學解と、月蝕詩とは、文章の勢、大地を抽出、高天に倚靠て、天地の間に卓立し、縱横自由にして、毎句皆活て動くが如く、赤手とて、手に刀も杖も不持、素手にて、大蛇を捕るが如し【控】韻會、制也詩注、止馬曰―ひきとゞむる也、韓文注作鞚、鞚、馬勒也くつはづらと訓ず、くつは也【勒】馬鑣、銜也くつは也【生馬】乘

入れぬ新馬也云心は新馬の駻に、轡を不掛、手綱も無しで騎るが如くに、強く壯にして人の手に自由に成らぬ義也、此二つの譬は、皆此文幷に月蝕詩の、句句活動して、他人の所不及を譬て云【大旨出於―】

【揚雄】字は子雲、前漢の季の人也、一統志に、揚雄、成都人、少好學、博極群書、口吃不能劇談、而好沈思、成帝時爲郎給事黃門、嘗奏甘泉、河東、校獵、長楊四賦、又著法言及太玄經等書、太玄經を作ければ、或人嘲て、玄尙白と云、太玄と云へ共、未熟故に、猶白と云也、揚雄又解嘲の文を作る、あざけりをとくと云意也

【東方朔】字は曼倩、前漢武帝の臣也、史記滑稽傳に、齊人有東方生名朔、以好古傳書愛經術、多所博觀外家之語、時會聚宮下博士諸先生、與論議、共難之曰、蘇秦張儀、一當萬乘之主、而都卿相之位、澤及後世、今子大夫修先王之術、慕聖人之義、諷誦詩書百家之言、不可勝數、著於竹帛、自以爲海內無雙、即可謂博聞辯智矣、然悉力盡忠、以事聖帝、曠日持久、積數十年、官不過侍郎、位不過執戟、意者尙有遺行邪、其故何也、朔乃作答客難以辨之、客東方朔を難じて、昔の蘇秦張儀は、高位高官に昇りしに、其方材智あれ共、

韓文公門弟子に學問を勤よと進めて、此解を書れし也、故に進學解と云、本集第十二に載之註【據韓愈—】唐書列傳第一百一に有本傳、其一生の事を記せるを本傳と云【據】は、字彙に、依也、身の物に依靠る樣に、其書に依て按驗する也【唐貞元】は、德宗の年號也、其十八年に、退之國子四門博士と成、國子監は、大學寮也、在內裏、漢官儀註、博者、博通古今、士者、辨於然否、明經博士とて、五經を明にしたる者、博士の官に成て、此大學寮に居る也【調】前漢書張釋之傳、十年不得調、師古曰調選也、音徒釣反、官位に選み進めらるゝ也【拜監察—】拜は、官に除せられ拜する也、事物紀原曰、初秦以御史監理諸郡、謂之監察御史、又曰、御史、上世皆爲記事之官也、秦漢以來、始糾察風憲云云、横目などをする役也【元和】憲宗の年號也、憲宗は、德宗の孫、順宗の子也、其元年に、國子博士となる、事物紀原曰、晉武咸寧中、初立國子學、置國子博士之官、周禮夏官曰、諸子掌國子之倅、注、國子、謂諸侯卿大夫士之子也、周師氏以三德三行敎國子、凡國之貴游子弟學焉、諸王子宗室に敎授する官也【分敎東都】敎、本傳に作司字、退之勅を請て、朝廷の大學寮より出て、東都へ行て、敎授する博士と成也、東都は、唐の長安の都より東、洛陽にあり【復爲國子—】國子博士、四門博士、少し不同あり、詳に唐書百官志に見へたり【及爲監察—】監察御史と成てより後、御史を罷られて、三度博士と成也、博士は、博學の士也、官は卑し、日本にては、文章博士は、從五位下に相當す、是唐の翰林學士也、日本の大學博士は、正六位下に相當す、唐の國子博士也【及元和—】退之憲宗の御前好も無て、頻に退けられて、官位も下りければ、則此解を作て、自身に喩へ、己が心を發き明す也、樓迂齋古文訣曰、設爲師弟子詰難之詞、以伸其己意、機軸自揚雄解嘲、班固賓戲來、許氏曰、此篇主意、專譏宰相大用小材、不能無憾於時、怨懟無聊之辭、托之己、最得體、黃氏日抄曰、進學解、類賦體、逐段布置、各有韻【執政】宰相は、天下の政事を執行ふ故に云、此時の宰相は、武元衡、李吉甫、李絳也、白居易撰公除官制云、學術精專、文力雄健、立詞措意、有班馬之風、宰相此文を見て、退之が才を奇特也と譽進めて博士にて可置事ならずとて、奏聞して比部郎中と成也【比部郎中】事物紀原曰、魏尙書有比部曹、通典曰、北齊比

待聖人而出、是其德之衰也、謂之不祥亦可矣、以春秋之世而麟出焉、故魯人以爲不祥、然有仲尼識之是麟爲仲尼出也則麟果不爲不祥也哉、

又曰、麟之所以爲麟者、以德不以形、〔呂云〕意高〔謝云〕此一轉尤高、麟乃仁獸、爲四靈之一、麟之所以爲麟者、以其有德、不必論其形之不類、

上にて已に云盡し、又曰と轉して書たるが、此文の手柄なる置樣也、麟を瑞應の物と云事、其德あるを以て也、其形の珍しきを以て云には非ずと也【註】【呂云意高】此句人の得云まじき所を、一重云上たるを、譽て評する也【謝云―】是も此に一轉して、又曰と書たるを、尤も奇妙なるぞと稱美する也【麟之所以―】麟の德ある故に、祥瑞の物と云、仁を含み、義を懷く獸なる故に、德と云形の常底の物に非るを以て、貴ぶにては無と也、

若麟之出、不待聖人、則其謂之不祥也亦宜、若麟之出、不待聖人在位之時、上無五帝三王、下無孔子、必無人知之、則其謂之不祥之物也亦宜矣〔謝云〕此篇僅一百八十餘字、有許多轉換、往復變化、議論不窮、人能熟讀此等文字、筆便圓活、便能生議論、

本集には、宜字の下に、有哉字、考異には、有也字、麟若不有聖人に出現せば、人の不祥と云も、尤ならんと也【註】云心は、若麟出るに、上に五帝三王の樣なる王者もなく、下に孔子の如なる聖人も無して、不圖出たらば、是は不祥の物と云んも理ならんと也【謝云】云心は、此文僅に一百八十八字なるに、種種に轉し換て、前へ行つ、後へ復つ、變化無限、評論極らざる筆法也、人能食物の飪熟する如に、百千反も箇樣の文章を讀て會得せば、自ら文を書時に、筆法圓なる物の、くるくると轉り活て動く樣に成、能何の議論をも生じ出すべしと也、

○進學解

據韓愈本傳、唐貞元十八年、調國子四門博士、十九年、拜監察御史、元和元年、爲國子博士、二年分敎東都、至七年復爲國子博士、後爲四門博士矣、及元和八年癸巳、愈以斂黜官、及爲御史之後、又三爲博士矣、又下遷、乃作進學解以自喩、發明己意、執政奇其才、改比部郎中【孫樵曰】韓吏部進學解、玉川子月蝕詩、莫不拔地倚天、句句欲活、如赤手捕長蛇、不施控勒、騎生馬、大旨出於楊雄解嘲、東方朔客難、班固賓戲、而公過之、

韓退之

知、則其謂之不祥也亦宜、左傳哀十四年春、西狩於大野、叔孫氏之車子鉏商獲麟、以爲不祥、以賜虞人、仲尼觀之曰、麟也、然後取之〔呂云〕叙盡前說不祥意〔謝云〕有麟而人不可知其爲麟、則其人謂之不祥也亦宜也、

上に云如く、麟は常にしも不有、同類も無れば、其形を見ても不可知と也【註】能分明也【不可知—】麟を不知は、恠異の獸と云も理ぞと也【註】左傳を所引、題註に詳也、杜預が註に、大野、在高平鉅野縣東北、大澤是也、車子、微者也【呂云】前に麟は不祥の物とて、見知難と所云を、此にて述盡すと也【謝云】注の旨明也、

雖然麟之出、必有聖人在乎位、麟爲聖人出也、〔呂云〕說祥〔謝云〕雖然五帝三王之時、麒麟在郊藪、麟之出、必有五帝三王之聖人在乎位、麟乃爲聖人而出、非無故而出也、

前に麟は知れぬ物、不祥の獸と云も、尤と云から、此に承て、然共不祥になき證據には、麟の出る時は、聖人在位、然時は聖人の爲に、出る者ぞと云事を說也

【註】【謝云】五帝の說、諸家不同、宋の五峯の胡宏、雙湖の胡一桂、定めて孔子の易大傳に、伏義、神農、黃帝、堯、舜を以て、五帝とし給ふを正說とす、三王は、禹湯文武也【郊藪】禮記禮運篇曰、山出器車、河出馬圖、鳳凰麒麟、皆在郊棷、注疏、棷、本或作藪、澤也、鐔津文集、非韓第七曰、郊、謂逼王城也、棷、謂其樵薪之淺叢也、周禮、五百里爲遠郊、藪、說文、大澤也、周禮注、無水曰藪、風俗通曰、藪厚也、有艸木魚鼈、所以厚養人也、白虎通曰、王及公侯、必有郊者、上則郊接天神、下則郊接諸侯、郊接隣、麟の出現する時は、必ず聖人在位、五帝三王の時は、都外の林藪にあり、然れば聖人の爲に出る者也、故も無には出ぬ者ぞと也、

聖人者必知麟、麟之果不爲不祥也、聖人知孔子者、必能知麟、有聖人知之、可見麟之果不爲不祥也、

聖人は能麟を見知、又必祥瑞の爲に出る時は、決して不吉物恠の者に非るぞと也【註】云心は、孔子などの樣なる聖人は、能麟を知なれば、不祥の物にては無事を可見也、文章軌範、湯東澗評曰、麟以德爲祥、若不

ぞ、

然麟之爲レ物、不レ畜二於家一、不三恒有二於天下一、其爲レ形也不レ類、【麟之形、與二尋常山澤之獸一不二相類一】非下若二馬牛犬豕、豺狼麋鹿一然上、【見二其形一、不レ難二辨認一】

物字の下に、韓文に有二也字一、麟は、人の家に常に養ふて置れず、餘の獸の樣に、山澤の間に、常に有者にてもなし、其形何の獸共不レ似と也【註】【麟之形――】麟は、尋常不斷にある、山野の獸とは不二相似一と也【非若馬牛――】麟は、牛馬犬豕などの、類の樣なる、物にては無と也【註】【見其形――】其形とは、馬牛等を云、馬牛等の類は見知易き者也とぞ、

然則雖レ有レ麟、不レ可レ知二其爲一レ麟也、〔呂云〕結語健、

【然】は、如レ此の心也、上に云如く、馬牛等は常に在て、人能知、麟は常住無物なる程に、假令不圖出現したり共、是こそ麟よと知まじきと也【註】【呂云――】此くゝりの語、強く健也とぞ、

角者吾知二其爲一レ牛、鬣者吾知二其爲一レ馬、犬豕豺狼麋鹿、吾知三其爲二犬豕豺狼麋鹿一、【此六者、形狀皆可二辨認一、出二於世間一、吾皆知三其爲二犬豕豺狼麋鹿一】〔呂云〕作レ文、大抵兩句短、須二一句長者承一、

角の有者は、牛と見知、鬣の有者は、馬と見知、犬をば、犬と知、豕狼などの如なる者は、常に見付たる物なれば、其々に能知と也、上に角者――、鬣者――と書て、下には犬豕――と書たるは、韓公が文法可レ著レ眼【註】【此六者――】此六の獸は、其形辨へ知易し、世に出れば、皆能一一に其と知也【認】は、認知也【呂云――】文を作る法を云、上に角者――、鬣者――と、二句短く書故に、下に犬豕――と、長長と十六字一句に書り、

惟麟也不レ可レ知、【惟麟不三常出二於天下一、吾亦不レ知二其爲一レ麟】不レ可レ

書於春秋、〔春秋〕晉哀公十四年、西狩獲麟〔謝云〕一句四字、

是も發端の句の證據也、註に見へたり、詳なる事は、前の題注に有之、隱居詩話班固云、春秋五傳、謂左丘明、公羊高、穀梁赤、鄒氏、夾氏也、鄒氏無書、夾氏未有書、而韓愈贈盧同詩云、春秋五傳束高閣、獨把遺編窮終始、不知此二書、果何等書也【謝云—】第二句四字にて此一句也、

雜出於傳記百家之書、〔公羊傳〕麟者、仁獸也〔鶡冠子〕麟者、蓋元枵之精也〔廣雅〕麟者、含仁懷義、行步中規、折旋中矩〔謝云〕三句九字、此是章法、

【雜出】は、彼此の書中混雜して出見する也、百家の書なる故に雜と云【公羊傳】は、春秋の註也、子夏門流公羊高と云人、春秋を傳て著したる書也、其内に麟者、仁獸也とあり【鶡冠子】は、楚人也、姓名不知、鶡鳥の毛を冠として著たる故に、其人の名とす、其書にも麟者、蓋元枵之精也とあり、杜預曰、元枵二宿、北方の星、子の分野也【廣雅】は、梁の張揖撰る書也、其內に麟者、含仁懷義云云とあり【規】は、圓き物を作る定規、ぶんまはし也【矩】は、四方とる物を造る曲尺、大工のかね也【行步】は、前へ直にありくを云【折旋】は、をれめぐりて、傍へ行、角へ廻る、たちふるまひ也、此注には、公羊傳、鶡冠子、廣雅、三部の名を載たれ共、是は大數也、此外に、漢の劉安が淮南子後漢の許愼が說文、晉の王子年が拾遺記、唐の徐堅が初學記などにも、麟の事を載たり、別に考へ見るべし【傳記】は六經の外の古書を指【百家】は、諸家、百の內にても、外にても、多しと云ん爲に、大數を擧云也、【六經】は、五經に、孝經を添ても云、樂記を加ても云也【謝云—】上の二句、一は三字、一は四字に書て、此句は九字也、是文を書に、章の法也、詳に前の雜說の注に見へたり、

雖婦人小子、皆知其爲祥也、〔雖婦人小子無高見遠識、亦知麟出爲王者之祥瑞〕〔呂云〕此是昭昭處、

麟は祥瑞目出度獸と云事は、いかなる女童迄も知と也【註】【婦人—】高見遠識とて、才智勝れたる人にてもなき女童と云へ共、麟は聖王の瑞相祥兆の物と云事は知也【呂云此是—】此發端に昭昭也と云は、是也と

精粹とくはしく、嚴密ときびしうして、辭の置樣、簡易くだくしからず、陳古とふるめかし【鋪叙―】鋪叙は、文を布陳ね、次第する也【繳結】は、しめくゝり也【圓轉】は、くるくとめぐつて、滯り止る事なく、活て動く樣なる也、此文能云迺云收て、句法圓に轉て、珠の盤の上を走る樣也とぞ【森然―】森然は、いよやかなる貌、字彙に、衆木貌とあり、但し今は秀逸なる義、文章に法度あり、此文法秀逸にして、人の手本にすべき者也とぞ、

謝疊山曰、此篇僅一百八十餘字、有許多轉換往復變化、議論不窮、第一段說麟爲靈物、雖婦人小子皆知其爲祥、第二轉說雖有麟不知其爲麟、第三轉說馬牛犬豕、豺狼麋鹿、吾皆知之、惟麟不可知、第四段說麟既不可知、則其謂之不祥也亦宜、第五轉說麟爲聖人而出、聖人者必知麟、既有聖人知之、則麟果不爲不祥也、第六轉說麟之所以爲麟者、以其爲仁獸、爲靈物、不必論其形、第七轉說若麟之出、不待聖人在位之時、則人謂之不祥也亦宜、人能熟讀此等文字、筆便圓活、便能生議論、黃氏日抄五十九曰、獲麟解、大意謂麟祥物也、但出非其時人不謂之祥、蓋以自況而不直說、遂成文法之妙、古文標準題註曰、自先秦雅馴之書不復作、而學者溺於浮靡之習、韓愈氏以古文起八代之衰、至今天下師承之云云、後世雖有作者未易造其閫域云云、

麟之爲靈昭昭也

〔禮記、麟鳳龜龍、謂之四靈〇言麟之爲靈物甚分明〕

【靈】は、神靈也、凡常の物に非ずと也【昭昭】は、明也、莊子達生篇曰、昭昭乎若揭日月而行也註【禮記―】禮運篇也【四靈】とは、毛のある物三百六十品の內にて、麟が長也羽蟲とて羽のある物三百六十の內にて、鳳が長也、鱗のある蟲三百六十の內にて、龍が長也註分明、不及再釋、甲のある蟲、龜、蛤蝮などの類、三百六十の內にて龜が長也、

詠於詩

〔呂云、承得上好〇謝云、一句三字〕

上麟之爲靈昭昭と書たるに因て、此にて證據を引已以て詩にも、麟の事を詠じたる也【詠】は、吟詠也、詩經周南麟之趾篇に、麟之趾、振振公子、于嗟麟兮、云云註【呂云承―】此句能上の文を承得たると也【謝云―】此一句三字也、

るに依て、感じて獲麟の年より、前二百四十二年の事を書て、即獲麟の年迄にて書留られたりと云兩義也、獲麟より後、三年有て、孔子卒去し給ふ春秋の制作も、三年の間に成就すれば、西狩獲麟と書て、其筆を抛て果給ふと云義に取て、日本にて、人の辭世の詞を獲麟の一句など丶云は是なるべし、獲麟の說左傳、公羊傳、杜預、何休の諸儒等、異說あるに因て、韓退之も此解を作て論ずる也、是に因て、孔子を感麟翁とも、見東坡集泣麟翁錦綉萬花集とも申也、

【註】【麟仁獸―】前漢書注張揖曰、雄曰麒、雌曰麟、狼蹄一角、郭璞曰、角在鼻上、京房曰、有五采、腹黃、高丈二尺、金獸之瑞、今幷州界有麟、如鹿、非瑞應麟也、埤雅曰、麟、土畜也、信而應禮、以足至者也、軒轅大角之獸、狼頟赤目五蹄、含仁懷義、音中鍾呂、行中規矩、不群居、不旅行、不入陷穽、不罹羅網、王者至仁、則出、蓋太平之符也、角端有肉、示有武而不用云云麒麟は仁の心ある獸にて、生物を傷らず【麕身―】麟の形は麕の樣にて、尾は牛に似たり、角一つ有て、角の尖に肉あり角は武勇の相なれ共、肉あるは物を突殺さゞるの表也【不食生―】生たる者を不食、生たる草を不蹈、仁獸なる故也【王者―】聖王有道の代、仁政行るゝ時は、麟出る也【毛蟲三百―】獸の數三百六十品ある內に、麟が長也、大戴禮に見へたり、長は、つかさと云心也【四靈】は、麟鳳龜龍也、麟は、其內の一也〇韓文註方云、李本、元和七年、麟見東川、疑公因之而作、今按此文旨有激而託意之詞、非必爲元和獲麟而作、樊曰、公旣作此解、李習之嘗書以贈陸員外傪曰、韓愈非玆世之文、古之文也、其詞與意適、孟軻旣沒、亦不見其有過於斯者、嘗書其一章曰獲麟解、其他可以類知也〇【東萊云―】此文字數は少しく、意を深く書たると也【文字立―】竹に節のある如に、所所に屹かと文段を轉化して書たり、ぬらりと意趣も筆力もなき類に非ず、殊勝なる作也とぞ【其抑揚―】抑は、をさふる也、不祥に係て看よ、揚は、あぐる也、祥に係て看よ、開は、言を放て、大に濶ぐる也、合は、括り合する也【只在祥字―】とは、祥と云、不祥と云て、抑へ揚つ開つ合せつする也【反覆―】打反し引覆し、五段と成て說と也麟之爲より祥也と云迄一段、然麟之より麟也迄二段、角者吾より亦宜迄三段、雖然麟より不祥也迄四段、又曰麟より末迄五段【立意―】意を立る事、

○獲麟解

麟仁獸、麕身牛尾、一角、角上有レ肉、不レ食ニ生物一、不レ踐ニ生艸一、王者有レ道則麟出、毛虫三百六十、麟爲ニ之長一、爲ニ四靈之一一〔東萊云〕字少意多、文字立レ節所ニ以甚佳一、其抑揚開合、只在ニ祥字一反覆、作ニ五段一說○立レ意精嚴、措レ辭簡古、鋪叙織結、句法圓轉、如ニ走レ盤珠一、森條法度之文也、

韓退之

春秋哀公十四年春、西狩獲レ麟、春秋は、魯國の史記の名也、春を云て夏を包、秋を云て冬を兼たり、然れば一年と云ん爲也、事を記す時は、先其年を記し、時を記し、月を記し、日を記す、是を編年と云て、古の史官の日記の例也、哀公十四年の春魯の都の西大野と云所に狩をして、珍しき一角の獸あり、叔孫氏が車子鉏商と云者、此獸の足を打折たり、人皆不祥也と思て、虞人に賜る、虞人は、山澤を掌る官也、孔子是を見て、麟也と云り、麒麟の事也、麟は、仁獸にて、聖人王者の世ならでは、出現せざるに、今此に出たるは、瑞應の驗を失ふのみに非ず、剰へ打損ぜられて、取獲られたるは、王道も衰へ、孔子の道も行はれざる事を感じて、是より思立て、春秋を作れり、上隱公元年より、下哀公十四年迄合て二百四十二年の事を記す、是孔子の自ら書給ふ也、隱公、桓公、莊公、閔公、僖公、文公、宣公、成公、襄公、昭公、定公、哀公、合て十二君也、起ニ筆於獲一レ麟之一句一、絕ニ筆於獲一レ麟之一句一とは、孔子麟を得たるに感じて、始て春秋を作ん事を思出て、隱公元年より記すは、起レ筆也、是春秋の發端也、感じて書始めたる事、獲レ麟より起れば、則是を春秋の終とせんとて、哀公十四年西狩獲レ麟と書給へり、此故に春秋を麟經共云也、是左傳の義、杜預が說也、斯て哀公十六年四月、孔子七十三歲にして、歿し給へり○公羊傳の說には、孔子春秋を制作し給ふ事、三年にして成、此書の作を感じて、麟出現す、然處に麟打殺されたるを見て、孔子嘆て、是は聖王の位に在時出る、奇瑞の獸也、今何故に出て來れるや、出て死するは、吾道の極れる所也とて、袖を顏に當て泣を流し給ふ、是に依て春秋は、獲レ麟の一句にて書留たり○胡氏傳の意も、公羊が義を引て、昔伏羲の時には、龍馬河圖を負て出るに就て、八卦を作り給ふ、舜の時には、韶樂を奏せしかば、鳳凰來儀し、禹の時には、神龜出て洛書を作給へり、孔子春秋を作り給へば、麒麟感じて出現す、是皆天地人感應の驗也○以上の諸說を見れば、三年の間に春秋を作り出して、麟出たりと云と、麟出た

子謂菊、花之隱逸者也、牡丹、花之富貴者也、蓮、花之君子者也、

菊は、花の中にて、隱遁の士の如くなる者也、何となれば、餘の花は、春を得て爭ひ開く、菊は、諸花と榮を同ふせず、時に後て、霜露を凌て獨開けば、花の隱逸なる者と云、世俗の心に不合、故下に陶後鮮有聞と云へり、【逸】は、韻會、隱也、遁也【牡丹花之―】牡丹は、花の中にて富貴なる物ぞと也、いかにも外を飾て奢たる花也、唐朝に驕を好む故に、牡丹を愛する也、書言故事に、富貴花と名づく、裴璘が詩に、長安豪貴惜春殘、爭賞光開紫牡丹、別有玉盃承露冷、無人肯向月中看【蓮花之君―】君子の徳に似たる事、前に詳也、

噫、菊之愛、陶後鮮有聞、蓮之愛、同予者何人、牡丹之愛、宜乎衆矣、

菊を愛する者、淵明より以後は不聞と也、勿論菊花を面白とて、すく者も有べし、され共淵明か愛する心とは各別で可有ぞ、淵明は、花の隱逸めきたる處を愛する也【蓮之愛―】蓮を愛する者は有べけれ共、茂叔の心と同しく玩ふ者は、何人か有んと也、茂叔は君子の徳有を以て愛せらる、衆人の蓮を玩ふとは、心別也、茂叔に同き者は、稀に可有者也【牡丹之―】牡丹をもてはやす人の多きこそ道理なれ、富貴なる花なれば也、今世間の人の名利に濡滯して、心濁て居るなれば牡丹を愛する者許り也とぞ、

解類

〔解〕說文、判也禮記經解の注に、分析之名、分ち解の義也、莊子に、庖丁解牛とあり、牛の皮肉筋骨經絡を、能斷解を解と云如く、義理を解分る也、解字、角と刀と牛とを合せて一字とす、此意也、禮記に經解篇あり、五經の所謂をとき述る故に名づく、論語集解、左傳集解など云は、本文を斷る義也、文章にも有此義、故に一體を立て解と名づく、又案するに、文心雕龍書記部曰、解者、釋也、解釋結滯、徵事以對也、

城之人皆如狂と作るも、箇樣にはやる以後に作れる者也、此詩の心は、牡丹の盛なる事廿日程あるに、其內は洛陽城中の人は、物狂の樣に牡丹見して、駈廻ると也、倭名に廿日艸と訓ずるは是也、本艸に牡丹皮を出すも、唐朝にて追加して出す也、百家名書には、古之芍藥は、今之牡丹也とあり、又牡丹を木芍藥とも云なり、

子獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻翫焉、

【予】は、茂叔自ら云【獨】は、前代に未た此花を愛する者ある事を不聞、先生に至て、始て獨り愛之【出淤泥—】【淤】字彙、泥澱、どろ共、ひちりこ共訓ず【漣】風動水成紋【詩魏風】河水清、且漣漪、さゞなみと訓ず、蓮花の泥中より出て、而も淤泥に不染して、清漣とて、小波の清に洗て、不妖とて、ばけ〳〵しき事もなく、爽かに有を玩ぶと也、古詩に、淤泥不染如來性、淨社如陪多士禪、又洛神賦、灼若芙蓉出綠波【妖】は、妖恠とて、ばけものと讀り、餘花の色は、ばけ〳〵しき所有て、人の心を動さする樣なぞ、愚按するに、字彙に、妖は、艷也、媚也、いつくしくみやびやかにして、媚ばかす樣なる體あるを云、牡丹などの類是也、妖恠と云註は、心別歟【中通—】中はうつほに、竅上下に通ず【外直】は、眞直にして强し、蔓は、藤や葛などの樣に、つるにて延纏を云【不蔓】は、はひまつはらざるを云【不枝】は、蓮一本立の花也【香遠—】香遠して彌清く薰ず【亭亭】韻會に、聳立貌、亭亭として、眞直に清く立、遠より見事にして、馴馴しく玩ふべき物に非す、出淤泥而不染は、君子の溫和にして、世に隨へ共、少も汚れざる也和而不流の義也、濯清漣而不妖は、潔白質素にして、外を不飾也、中通は、心明にして、能物理に通し、無欲にして心內無塞也、外直は、言行正直なるなり、不蔓は、無貪欲して、人に媚諛はざる也、不枝は、無益の事をせざるなり、香遠益淸は、內德深也、亭亭淨植は、行迹潔白にして獨立する也、可遠觀而不可褻玩は、威有て狎慢るべからざる也、

殺し、武氏を皇后とす、武氏か所生の太子を中宗と云、高宗崩して後、中宗をば房州に配流して、武氏即位、唐の宗室諸大臣を殺し、恣まゝに天下を押領し、唐を廢して周と改む、在位二十一年、狄仁傑が諫に依て中宗を返して、復太子とす、武氏崩して後、張柬之諸人と相共に、武氏か一類を殺して、中宗位に復る、唐書列傳第一に、武氏か傳あり、通鑑並に綱目に詳也【西河―】武氏が故郷は、西河也、其所の精舍の內に、牡丹あり【精舍】は、元來學校也、然を潔白之義を取て、僧寺をも云、此精舍は、寺を云、事物紀原曰、今人以佛寺爲精舍、不知乃儒者敎授之所、晦菴有武夷精舍云云、書言故事曰、稱書齋爲精舍、後劉淑立―|―、晉謝靈運石壁―|―【特異】其牡丹一入見事に有しと也【天后―】武氏禁中の花園に、此牡丹の無事を嘆て、勅命して移して禁苑に種しむる也、三輔黃圖曰、上林苑、周廻三百里、離宮七十所、皆容千乘萬騎、漢宮殿疏云、方三百四十里、漢舊儀云上林【由此―】天子の御すき也とて、洛中に牡丹のはやる事甚し【今白禁―】韻會、漢號禁門曰黃闥、師古曰、宮中小門曰闥【官署】は、官舍也、今禁中の事は不及申、諸官人の居所の外に、及ひ士庶人の家迄も、牡丹を玩ばぬ所なく、はやる也【瀰漫】水廣大貌【四瀆】は、江河淮濟也、詳于群書拾唾、羅山曰天下へ彌綸してある事四瀆の流の始は小にして、末は大河と成が如也とぞ、愚謂只天下に漫り多しと云ん爲許り也【每暮春―】春の季には、牡丹盛なる者なれは、此も彼も、牡丹見と云事夥しき體と云也【遨遊】は、皆あそふ也、詩、以敖以遊【上國】は、都を云【繁華】は、繁昌也、類纂曰、宮殿高侈、謂之土木之妖、珠璣錦綉、謂之服飾之妖、洛中牡丹、維揚芍藥、謂之花妖、婦人美色能文翰、謂人妖、又大平老人所撰の袖中錦に載之、天寶遺事曰、明皇沈香亭前、一枝二頭牡丹、朝深碧、暮深黃夜粉白、香艷各異、帝曰、此花木之妖賜國忠、唐より以前には、芍藥の事はあり、遂に牡丹を愛すると云事は無し、唐以後にはやる也、舒元輿牡丹賦、我按花品、此花第一、脫署群類、獨占春風、さる程に花王と號し、天香とし、狀元紅とす、魏氏の人、紫の牡丹を持ては魏紫と云、姚氏の家に黃なる牡丹あれば姚黃と云、歐陽公花譜に、牡丹凡九十四種、姚黃を第一とし、牛黃を第二とし、魏紫を第三とす、白樂天樂府に、牡丹芳花開落二十日、一

高、胸中洒落、如二光風霽月一、並見二性理大全一〇孔子の道、孟子沒せられしより後、傳はらず、天下悉く老莊並に佛法盛に行れて、聖人の道は湮沒す、唐の韓文公、聖學を收拾して取立たれ共、又斷絶せり、宋朝に至て、濂溪先生、千載不傳の道統を繼て、儒の道中興す、河南の二程子十五六歳の時分より、先生に從ひ學て、道を明らめ、聖學を發明す、

水陸艸木之花、可レ愛者甚蕃、

水艸にも陸花にも、艸木の中に、愛し玩ぶべき物、幾ら共なく多し、此篇頭に水陸艸木之花と云て、千萬無量の花を括り入たり、奇妙なる文也、

晉陶淵明獨愛レ菊

晉陶潛、字淵明、獨愛レ種レ菊、其詩有下採二菊東籬下一之句上、

水陸艸木の內、面白き花何程かあれ共、淵明は只獨り菊を愛せしと也註【晉陶潛】淵明ばかり獨菊を愛して種たると也【其詩有―】前の歸去來辭の註の中に詳也、劉蒙菊譜叙曰、余甞觀二屈原之爲一レ文、香艸龍鳳、以比二忠正一云云、而陶淵明乃以二松名一配レ菊、連語稱レ之、夫屈原淵明實皆正人達士、堅操篤行之流、至二於菊一猶貴二重之一如レ此云云、

自二李唐一來、世人甚愛二牡丹一

舒元輿牡丹賦序云、天后之鄕、西河也、精舍下有二牡丹種一、其華特異、天后歎二上苑之有一レ闕、因命移植焉、由レ此京國牡丹日日寖盛、今自二禁闥一洎二官署一、外延二士庶之家一、瀰漫如二四瀆之流一、每二暮春之月一、遨遊之士、亦上國繁花之事也、

唐の高祖、姓は李氏、名は淵、故に李唐と云、假令は、秦嬴姓なれば嬴秦と云、漢劉氏なれば劉漢と云、魏曹氏なれば曹魏と云、晉司馬氏なれば司馬晉と云、宋劉氏なれば劉宋と云、宋趙氏なれば趙宋と云が如し、唐より以來、世間の人、以外に牡丹を賞玩する也註【舒元輿】氏族排韻云、唐東陽人、中二第進士一、擢二監察御史一、拜二同中書門下一、甞作二牡丹賦一、時稱二其工一、元宗摘二其傑句一云云牡丹賦唐文粹第六卷に載【天后】は、唐の第四主則天皇后武氏名は曌也初め太宗の才人也、才人は、女官、太宗の腰許使にて有し也、太宗崩して後、武氏尼に成て寺に居けるを、太宗の子高宗、寺に幸して、彼尼の眉目の美を見て、大に悅ひ、宮中に召入、髮を長させて寵愛し、終に前の皇后王氏、淑妃蕭氏を廢して

云たと、物語をせられよと也【京師】事物紀原曰、京大也、師、衆也、大衆所居、故以名天子之都【註】【此乃責兄一】子由に學を力めよと責る也【迂齋云結尾一】尾一は、終也、此篇の終を結たる、子皈一より末までの兩句は、只友を責て、勵し勸るのみに非ず、兄弟の內にても、互に勉め進て敎訓するは、古人の道也【昆季】儀禮の注に、昆、兄也、

○愛蓮説

濂溪先生愛蓮、取其有君子之德、異乎衆人之愛也、

【註】【濂溪先生一】宋の周茂叔、晚年に廬山の麓に隱居す、淸潔なる溪あり、其上に書堂を築て、濂溪と號す、故に世に濂溪先生と稱す、濂字、古は廉字を用しに、偏に水を添て書り、蓮は、君子の德ある花と見立て愛せられし也、常の人の面白かるとは各別ぞと也、此説は、先生四十七歳の時に作る、古文標準の題注に曰、濂溪先生、道學宗師、其愛蓮花、取其有君子之德、異乎衆人之愛也、學者玩味斯文、當悟其旨○青松曰、此篇凡三截第一截擧一様所愛、第二截言自所愛、第三截以議論結之、萬里居士曰、此篇四段、自篇首至牡丹第一段、自予獨至玩焉第二段、自予謂至者也、第三段、自噫菊至衆矣第四段、

周茂叔

先生、世家道州營道縣濂溪之上、姓周氏、名惇實、字茂叔、後避英宗舊名改惇頤、用舅氏龍圖閣學士鄭公向奏、授洪州分寧縣主簿、縣有獄久不決先生至一訊立辨衆口交稱之、部使者薦以爲南安軍司理參軍、移郴及桂陽令、用薦者改大理寺丞、知洪州南昌縣事、簽書合州判官事、通判虔州事、改永州、權發遣邵州事、熙寧初用趙淸獻公、呂正獻公薦、爲廣南東路轉運判官、改提點刑獄、公事未幾而病、亦會水齧其先墓、遂求南康軍以皈、既葬上其印綬、分司南京、時趙公再尹成都、復奏起先生、朝命及門而先生卒矣、熙寧六年六月七日也、年五十有七、葬江州德化縣淸泉社、先生博學力行、聞道甚早、遇事剛果、有古人風、爲政精密嚴恕、務盡道理、嘗作太極圖、易說、易通、數十篇、詳見伊洛淵源錄、及通書朱子序○程明道曰、自再見周茂叔後、吟風弄月以皈、有吾與點也之意○周茂叔窓前艸不除去、問之云、與自家意思一般、子厚張橫渠觀驢鳴、亦謂如此○太史黃公庭堅曰、舂陵周茂叔、人品甚

吾今雖欲自以爲不足而衆且妄推之矣、

吾も學問が未足程に、今暫く引籠て勤んと思へ共、諸人理不盡に博學廣才と、推進めらるゝに依て、不及是非と也、

嗚呼、吾子其去此而務學也哉、博學而約取、厚積而薄發、吾告吾子止於此矣 此乃責朋友之善

坡公嘆息して云、其方此地を去て、故郷に返らば、隨分勤學せられよと也、羅山曰、是程さへ學問をすれば、最早好ぞと思ふ心を捨て、務て學をめされよと也【博學―】論語雍也篇曰、博學於文、約之以禮、朱子注、約要也、君子學欲其博、故於文無不考、守欲其要、故其動必於禮、博く學問をして、知識を推廣め、其を心に約に取用ふ、是を扇に譬ば、博學は扇を開也、約取は、要を持用也【厚積】は、學問の功を云【薄發】は、才能の施を云【吾告―】吾其方に暇請して告語る事、是許也、此外に云べき事は無と也註【此乃―】孟子離婁下篇、父子之間、不責善、朱子注、責善、朋友之道也、嗚呼吾子と云より是迄張琥に能學問をせよと勵し勸る也、羅山曰、責字、借錢などをおほせて、乞はたると云時に、はたると讀り、責善と云は、善事を朋友におほせて置て、せめはたる樣に敎化する也、故に此字を用ふ、愚謂此說の如は、側責切、負財也と云註に合り、疑らくは誤也、只本音側格切、責望と云註を用て、何とて此善をばせぬぞと責て、其人の善らん樣に、望求る義なるべし、

子歸過京師而問焉、有曰轍子由者、吾弟也、其亦以是語之 此乃責兄弟之善○(迂齋云)結尾兩句、非特見朋友相切磋之意、亦且知古之昆季、其相勉勵也、蓋如此、

【子】は、張琥を指、其方歸路の次でに、京師を通り過られんまゝ、尋問て見給へ、蘇轍字は子由と云者有べし、其は吾弟也是と參會あらは、東坡か其方へ如此

【信】は、伸と同、尺蠖之屈、以爲信、少年より晝夜勤學し、苦勞を經て、其功成就する時に、出で仕へ、國家の用に立、是身久く屈る中より伸て、才能既に充足の後に用らるゝ也【流於既溢—】學を身內に有餘る程積て、外へ溢れ流る處を以て用ふ、喩ば器に水を入て、其水器より外へ餘る程ある時、古人は學力才能充足と思ふ也【發於持滿—】史記李廣傳曰、胡急擊之、矢下如雨、漢兵死者過半、漢矢且盡、廣乃令持滿毋發、師古注曰、注矢弓弩而引盡之、不發矢也、又漢書周亞夫傳、彀弓弩持滿、弓を射るに、矢を注、十分に引ずまして、暫し持て的を射れば、能中る、學問も少年より晝夜勤て怠らず、博學審問愼思明辨篤行て、天下の道理に於て昏からず、我知識廣く極むれば、弓を十分に引持て放つの意也、

此古之君子、所以大過人（此論成才之美）
而今之君子、所以不及也、

古も今も、人の生質にさして不同は無と見へたれ共、古人は學問して、養ひ立る所、上の如くなれば、才用大に勝れて、今人と各別也【評】【論此成—】古人の才能成就する事を云【而今之—】今人は學力不足、才能備はらずして、早く出て仕る故に、古人に所不及多し、

吾少也有志於學（引歸自己）不幸而早
得與吾子同年、吾子之得亦不
可謂不早也、

東坡少年より學を勤たきと思ふ志有しと也【評】【引歸—】我身の上にかけて云也【不幸—】我不仕合にて、世間から蘇軾と云者こそ、大才なれと持はやされ、我本懷を遂させずして、早く世に出、其方と一度に及第したると也、此【吾子】は、張琥を指也、孟子に、吾子與管仲孰賢と有から、向ふを指て吾子と云、其方と云義也、東坡と張琥と、同年に及第したり、東坡二十二歲の時也、張琥が年は、何の書にも見へず、一說に、東坡と張琥と同齡と云は誤歟【吾子之得—】其方の及第して名を得たる事も、遲いとは云れまじきぞ、少早きぞと也、

ふたるにては有まじきと也、孟子滕文公上篇、成覸謂齋景公曰、彼丈夫也、我丈夫也、吾何畏彼哉、顏淵曰、舜何人也予何人也、有爲者亦若是云云、此處と心同註【引皈―】古人の身上の事を、美稼に譬て云也、是を云ん爲に、上に美稼不美稼の事を述る也、

其平居所以自養而不敢輕用以待其成、閔閔焉如嬰兒之望長也、

【平居】は、無事にして安居する也、但此にては、平日平生の義と同じ、平生吾身の分際を能知て、自ら其心を養ひ立て、輕々しく聊爾には仕官せまいぞと思て、學力の成就するを待、左あるに因て、才能勝れ、天下國家の大事の用に立也【閔閔】閔、或は作憫廣韻、傷也、韻會、憂也、左傳昭公三十二年、閔閔焉如農夫之望歲、杜預注、閔閔、憂貌、古人學をするは、我學の成就せざる以前は、閔閔焉と憂て、勤勵す事、譬て云ば、幼き子を育る母の、此子早く成人せよかしと、思ふ心の切なるが如くなるぞと云義也、

弱者養之以至於剛、虛者養之以至於充、三十而後仕、五十而後爵、

學の弱き所あれば、勤養ふて剛く成まで勵し、空虛にむなしき所をば、務て充る様に養ひ立る也、禮記內則曰、三十而有室、始理男事、四十始仕、五十而爲大夫、服官政、上に云如く、先弱き時より學を勤て、三十許に成て仕へ、五十許にて位を經上る也、十歲より前を幼と云、十五を童と云、二十を弱と云、三十を壯と云、次第次第有て、百歲迄の事を、禮記に載たり、此に三十と云は、孔子の三十而立と宣ふから書たる也、

信於久屈之中、而用於既足之後、流於既溢之餘、而發於持滿之末、【信】音伸、

口】は、毎人口一つ充ある故に、十人を十口と云、一家に十人あるは、上の百姓也、五六人あるは、下農也、梁惠王上篇曰、百畝之田、勿奪其時、朱子註、百畝之田、亦一夫所受、司馬法、六尺爲歩、歩百爲畝、【畝】は、せと訓ず、百畝は一町也、然共唐の尺は、尺には依べけれ共、總別短し、殊に上代の尺は、今の半分餘にも當れば、百畝と云共、日本の一町とは相違すべし、坡公が家、百畝の田を作て、十人許を養ふ【寸寸】田地を一寸も餘さず種て取也【日夜】我貧なる故に、田毛の熟する迄を待かねて、日日夜夜に長せよかし、實のれがなと願ひ望也、

鋤耰銍艾、相尋於上者、如魚鱗、而地力竭矣、種之常不及時、而斂之常不待其熟、此豈能復有美稼哉　已上言稼之不美（艾）音乂

【鋤】は、鉏と同、すぎ也、又田をすきかへす也【耰】は、音尤、過秦論注、鉏柄也、說文、摩田器也、徐曰、布種後、以此器摩之使土開發處復合以覆種、田をすき開て、種を蒔て後、其上へ土をかけ蓋ふ也、たなをほひすと訓ず【銍】說文、穫禾短鎌也【艾】刈同、說文、芟艸也、詩周頌臣工篇、奄觀銍艾、銍艾は、鎌にて草を刈事也【尋】次也【魚鱗】漢書向子政傳、靑紫貂蟬、充盈幄內、魚鱗左右、師古曰、言在帝之左右、相次若魚鱗、言心は田地の上に、色々の道具にて、鋤つ種つ刈つする事、年中相次て、魚の鱗の、段々に透間もなく、繁く重なりたる樣に、田をせつた程に、地休む間なく、物を生ずる力竭果て、田地彌惡く成也【種之常不—】貧なる故に、人も不待して、時節を取外し、後れて耕種し、食物乏しき故に、刈納る時も、能熟するを不待して、實生しく堅まらぬ也【此豈能—】此體なれば、何としてか、美稼は有べきぞと也【註】【已上—】今吾と云より是迄は、貧者の田を作る事を說也、

古之人、其才非有大過今之人也　引歸古人身上

古人も其生れ付たる所の才能、今の世の人に、拔群違

【盖】は、疑の辭にて、おほふ共、ふた共、訓ずる字也、盖と發端に置は、知ぬ事なれ共―云義を以て、けだしと置也、此發端の蓋と云字、古來叢林の衆、點じ來て讀也、然共東坡文集などに、曷字を書たる本あり、曷は、盍字と通じて、何不と字註あり、然らば蓋字を、盍字に成て、なんぞざると讀で、盍レ觀ニ富人之稼一乎と、點じたき事也、禮記檀弓篇に、子盍レ言ニ子之志於公一乎と云時に、蓋と盍と通ずと有て、蓋字を何不と注する也、此にてけだしと讀は、義思はしからず【觀富人―】財に富たる者の、田を作を見よと也【其田美―】富人の田は、本より良地を多く持也【其食足―】富人は食物滿足して、餘るほど有と也、

其田美而多、則可三以更休一而地力得レ完、其食足而有レ餘、則種レ之常不レ後レ時、而斂レ之常及ニ其熟一、

良田地を多く持農人は、毎年皆米を作らず、三年に一度づゝ、廻々に畠にし、稷麥大豆芋木綿などを種る程に、田地代る〳〵に休み、地心肥て、物を生ずるが不足なし【其食足―】富る者食物澤山なれば、人も多き程に、耕作の時分を違へず、種るも耘るも、時に後れず、能熟して後に刈收れば、實太り堅ふして、減少する事なし、

故富人之稼常美、少レ秕而多レ實、久藏而不レ腐、已上言ニ稼之美一【秕】音比、

【秕】韻會、穀不レ成也、富る者の稼は、上に云如くなる故に、毎年能見事に出來、秕とて、穀中に實のなき様なる事なく、いかにも堅き實多く生ず、好米なる故に、久く倉に入置ても不レ腐也註【已上―】是より上の文には、稼穡の美好なる事を云、

今吾十口之家、而共ニ百畝之田一、寸寸而取レ之、日夜以望レ之、

孟子梁惠王上篇曰、八口之家、可ニ以無一レ飢矣、趙邠郷注、八口之家、次ニ上農夫一也、【吾】は、東坡自ら言【十

轍乎吾知免矣　逆知少公得禍必輕

左傳成公二年、范武子曰、吾知免矣、論語泰伯篇曾子曰、而今而後、吾知免夫小子、老泉、子由か禍を受まじき事を、兼兼に料知也註少公とは、子由は弟なる故にかく云、如案子由も東坡故に、流人にはなれ共、頓て召返され後には官職に進で事を執行ふ也、

○稼說　此篇爲送張琥作、以稼喩人才〔迂齋云〕觀坡公所作豈以一世之盛名自居哉、其朋友兄弟之相切磋者如此所以名益盛而學益進也、

蘇子瞻

周禮司稼註、種穀曰稼、如嫁女以有所生、穡曰稼、斂曰穡【稼】は、穀を種るを云、たなつものと訓ず註【此篇爲送―】此文は、東坡、張琥が故郷へ歸を送るとて、作たる也、公與張琥倶登嘉祐二年第、公年二十二【以稼喩―】稼の好をば、高才に喩へ、惡をば不才に喩て書と也【迂齋―】東坡作たる文を見るに只其一代の名譽を取のみにては無と也【其朋友―】其朋友兄弟迄を務め勵して、心術を磨立る事、尤難有所存也、朋友は、張琥を指、兄弟は、子由を指、詩經衞風淇澳篇如切如磋、如琢如磨、水牛の角、象牙などにて物を作んに、先能程に切て、下形をするを【切】と云、其を上削し、木賊椋の葉などにて美しく磨て、器に成立るを【磋】と云此にては、只學問を勤て磨勵す事を云【所以名―】道理哉坡公が名の高く學の彌進める事、是程に朋友迄を勸て學を勵さしむる人なる程にと也○桂林曰、此篇四段、題註云、第一段反覆論稼之美與不美第二段論人才須美成之而後用、第三段自責其才而且責全才於張琥、第四段因以勉其弟使之大其成萬里居士曰此篇六段、自篇首至不腐第一段、自今吾至稼哉第二段自古之至及也第三段自吾少至之矣第四段、自嗚呼至此矣第五段、自子歸至末第六段○慈溪黃東發日抄曰東坡稼說、論厚積薄發自論論道之難見、蓋爲不務學者戒也、又曰東坡之文、如長江大河、一瀉千里、至其混浩流轉、曲折變化之妙則無復可以名狀蓋能文之士莫之能尙也、

蓋嘗觀於富人之稼乎、其田美而多、其食足而有餘、

世俗ニ恐レ得レ禍重ニ也、不レ外
飾一、與下無レ所レ爲一句上相應、

東坡が心立は、浮世の人の氣に合まじきと見立たり、外を飾らず、素氣なれば、氣遣に思ふと也、何の書にも名を云には、也字を付るが此には乎字を用ふ、杜子美が李潮と云者、能八分字を書を稱ずる詩に、潮乎潮乎と作る、左傳に范燮を燮乎と云、論語に參乎と云、此軾乎と書たると僅に四を見得たり、近代の文に若有とも此等の文を、手本にして書たるなるべし【註】【深憂長公—】東坡は兄なる故に長公と云り、老泉東坡世俗に不レ合ほどに人の所作も氣に不レ入我も亦人に睨れて重く罪を得ん歟と恐る也【不外飾—】是故に浮世の風に違ふ也、未だ事も見へざる以前に、如レ此文を書て名を被レ付たるに、少も不レ違、王荊公天下の、權柄を執て、新法を立たるを、東坡爭論して、中惡して居たるほどに、終に讒言せられて、配流せられし也、

天下之車莫レ不レ由レ轍、而言ニ車之功一轍不レ與焉（不レ與レ功、亦不レ受レ禍正相乘除）雖レ然車仆馬斃而患不レ及レ轍（忌レ之者少、或可レ免レ禍）是轍者禍福之間、

【轍】韻會車輪所レ輾迹也、天下に幾らも車あれ共、轍とて土に著所の迹無ては、車如何して行んや、然共車の功を云時に輪輻蓋軫などは、皆役あり、轍は、只車の運りて行土の上の迹なれば、何の功德をも言れず【雖然—】車仆馬斃れ共、轍は損ぜず、かまはぬ者也、然れば轍は、功もなければ、禍なる事不レ有、損ずる患も無れば、禍に遇事不レ有、是禍と福との間なる者也、子由は、人の利にも不レ成害にも不レ成生賁なれば、福にも禍にも、預るまじき者と見立て、名を轍と付られたり【註】【不與功—】天下に功を成者にてもなし、又人に惡まれもせずして、禍を受まじき者也【正相乘除】算法に添レ算曰レ乘減レ算曰レ除猶レ言ニ加減一也、乘は、物を益てゆく算也、除は物を減しまふてくる引算也、益は引、引は益如くに、毒にも藥にも不レ成して可レ居と也【忌之者—】惡む者が有まじき程に患を免るべきと也、山谷が詩云、此公天機深、爵祿心已死、養レ生遺ニ形骸一、觀レ妙得ニ骨髓一、

泉眞宗大中祥符二年誕、世號文安先生、嘉祐元年、與二子偕至京師、歐陽公得所著書二十二篇、獻諸朝、名動京師、先生二十七擧進士不中、擧茂方異等又不中歎曰、此不足爲吾學也、悉取其所爲文焚之、益閉戶讀書、不爲文辭者五六年、乃大窮六經百家之說云云、娶程仁覇女生三子、曰景先早喪、時寶元元年也、英宗治平三年卒、享年五十有八、葬于墓頤山東二十里、地名老翁泉、蜀の老泉と云處に居住せられたる故に號とす、三蘇と云へば、父子兄弟也、二蘇と云へば、兄弟也、

輪輻蓋軫 圜轉者曰輪、輳於輪曰輻、覆乎車者曰蓋、車後橫木曰軫 皆有職乎車、

註【圜轉者曰輪】まろふしてめぐる者是車のわ也【輳於輪曰輻】車の輪に刺骨也、やと訓す、老子經曰、三十輻共一轂、韻會【轂】者居輪之正中而爲輻之所湊也、【輳】字をあつまると讀も車の輪に、いくつも刺者なる故につとふ心にて書也、湊字、與輳通用す、輻輳と云は、物のあつまるを云輳を湊とも書、水邊に舟や人のこぞり集ふ意也【覆乎車者曰蓋】蓋をきぬがさと訓す、車のをほひ也【車後橫木曰軫】車の後の橫がみ也、ことぢと訓ず、上の四の者は、皆それ〳〵に車役有て、無ては不成、是無れば車不行也、

而軾 音式 獨若無所爲者、軾在車前 雖然去軾、則吾未見其爲完車也 言天下無此人不得、

註【軾在車前】ひさつと訓す、車の前にある木也、車に乘て人に禮をする時に、手を懸よりかゝる木也、柳子厚說車曰、敬而可伏者軾、註、軾、車前板隆起者也、云心は此軾は、車の用に於て不入者の樣に見ゆる也【雖然—】され共此軾が無れば、物不足して諸道具不缺車とは、し難し註【言天下—】老泉、東坡が生質は、車に取て云は、軾の如なる人也世に有ても無ても樣に見へて、而も無て叶はざる人也、然れば其方が名をば、軾と付るぞと也、

軾乎、吾懼汝之不外飾也 深憂長公之不合

洵老泉自少豪放、嘗於庚午重九、仁宗天章八年、老泉二十一歳玉局無礙子肆中、見一畫像、筆法清奇、云乃張仙也、有禱必應因解玉環易之、洵尚無嗣、毎旦露香以告、逮數年乃得軾、又得轍、性皆嗜書、乃知眞人急於接物、而無礙之言不吾妄、故識其本末、使異時子孫求讀書種者於此加敬云、慶暦戊子上元日、拜章罷、蘇洵稽首書、亦見勸善書、又湖海新聞、夷堅續志前集藝術門曰、老泉蘇明允之祖白蓮道人、數世爲蓮社、一日遇一人於其鄕、問曰、君何人、曰、吾即蔣山人、邀之歸家留數日、情稍稔、山人問公欲地否、吾有二地、一主大富、一主大貴、惟公所擇、道人曰、吾有子讀書、富貴則不願、但願得賢子孫足矣、山人曰、彭山縣象耳山、此地當出文章之士、敢以獻道人、明日當同往一觀、道人喜、及至其地、指道人而示之、以山人命取燈一盞、然於其所、雖四面風來、此燈凝然不動、曰、此正穴也、他日若用此地、只依此所、雖一步亦不可移、言畢即行、後道人母死、竟以此地葬之、未幾山人復至、問道人曰、曾用地否、曰、已用之矣、山人往看曰、亦復小差、當爲公正之、道人殊以爲恠、曰、公果何鄕何里、山人曰、我直以告公、公家累世修善、我乃羅漢中第四尊者、曾爲峩眉山下寺場、今再爲公下此穴、後公子孫、必有興者、一揖而去、回象耳山飛升橋、冉冉不知所之、註【老泉先生―】【長】は兄也【軾】字は子瞻、號東坡【次】は弟也【轍】字は子由、號潁濱【觀此老―】老泉兼々に其二人の子の一代の事を能量り見て此篇に書述られたるに少も違ふ事なし、能深く其二子を知れりと可云也【毫】は、韻會に、長鋭也、秋毫成之時、端極纖細也【畫】は、十毫也、瞿景淳曰、料二公倶從車上起議論、而卒符其言、豈觸機耶抑寓言耶、令二公實重圖之、則言之不中公亦安之矣、句解曰、二子之名、皆以車中一物、故此篇全以車之物形容二子終身之所爲其以文爲戲者乎【迂云―】此文字數は少ふして、意深し、宛轉も、折旋も共にめぐる義也、能言廻して書て、無窮味あり尤も奇妙也、

蘇老泉

東都事略儒學傳、蘇洵字明允、號老泉、眉山人、年二十七、始發憤讀書五六年不爲文辭及下筆、頃刻數千言、宋嘉祐中、叙校書郎、時蘇氏文章名擅天下、學者以其父子倶知名、故稱老蘇以別之、又按ずるに、老

が子之に國を讓り、漢の哀帝天下を董賢に讓んとするの類は、昏君庸主の所爲也、上たる人賢人君子に、天の位職祿を共にせざるは、王公の英雄を擧用ざる也【執策—】執策の二字は、曲禮に出たり、馬を食者、其道を用る事をばせず、剩へ鞭を取て馬に臨て今代天下に良馬なしと云、天下に賢才異能の人なしと云心也囲明也、

嗚呼、其眞無馬耶、其眞不識馬耶、

其眞無才耶

其上之人不識人耶○〔呂云〕結好〔謝云〕此謂任使之不以其道、爵祿之不能盡其材、諫不行、言不聽、而不得以行其志、爲宰相者、操用其權、不能知人乃曰、天下無英雄豪傑、嗚呼、天下眞無英雄豪傑、宰相眞不識英雄豪傑、

韓文公嘆息して云嘆かしき事哉、其眞に無馬乎、但又良馬はあれ共、眞に不知馬乎と也囲【其眞—】とは、誠に有才能人無之乎、よも左にては有まじきと也【其上—】天下に奇才異能は有べけれ共、其人を知君相有まじきと也【呂云—】結は、文を引括りて收るを云、此文結句の處、奇妙と也【謝云—】策之と云より下、結句迄を、皆注する也【任使—】賢者に任せ使ふに道あり、尊位重祿を與て、國家の權柄を執する是也、今左樣にせぬ也孟子離婁下、諫則不行、言則不聽【諫】は、主君へ異見する也【言】は、天下國家の爲に、好事を上へ申す也、諫て見れ共、擧行れず、言上すれ共、聽用られずして、賢者の好したきと思ふ志、空しく成果也、庸愚の宰相、漫りに、時の權を操用て、善人を知事を能はず、己が目の見へぬをは不云して、郤て天下に善人なしと云、實に天下に英雄無んや、宰相眞に英雄を不知也、

○名二子說

老泉先生二子、長曰軾、次曰轍、觀此老之所以逆料二子之終身、不差毫釐、可謂深知二子矣〔迂云〕字數不多、宛轉折旋、有無限意、此文字之妙也、

此說は、老泉其二子東坡と潁濱とに名を付るとて作れり、莊子曰、名、公器也、疏云、名、鳴也、宋仁宗景祐三年丙子閏六月、眉州嘉禾生九穗、同十二月十九日卯時產軾、是時老泉二十八歲、寶元二年己卯二月二十日亥時產轍、于時老泉三十一歲、軾、徽宗建中靖國元年卒、享年六十六轍徽宗政和八年卒、享年八十、見三蘇年譜、事略本傳には、卒年七十四とす、老泉文集、

如常材安求其能千里也、安得見其爲異材、〇〔謝云〕此謂英雄豪傑雖有立大事成大功之材、無尊位、無厚祿、無重權、其才知不可展布、且欲與庸衆人等而不可得、安可求其辨大事成大功哉、

せめて常底の凡馬と同し樣に食れ、待遇れたく思へ共、其さへ成難し【註】【謝云祿位—】祿は輕く、位は卑し、我才を展布事は置て、常の人並にさへならぬと也【安求—】凡馬にさへ及ばぬ體にては、其千里の能を見はす事は、思ひも寄ぬ と也【註】【安得—】何とて人に勝たる才學を見はさん也【謝云】【此謂—】英雄豪傑の人なる程に、大事の政道を執行ひ、大功を成べき才學はあれ共、無位祿薄く權輕き故に、我才智を展布事は置、せめて凡人と同し樣に成たく思へ共、其だにも不可得、然れば大事をさばき、大功を成就せんとは、求めぬ也、

策之不以其道、食之不能盡其材、鳴之不能通其意、〔謝云〕此二句、即孟子所謂弗與共天位也、弗與治天職也、弗與食天祿也、非王公尊賢也執策而臨之曰、天下無良馬、謂天下無異材、

馬に鞭を打共、打樣の道あり、無理に鞭を著打責り、養ふ事も馬に可依を、有能も無能も同じ如にする程に、馬飢て力疲れ、千里の材能も、盡く見はす樣なし、馬鳴かば、何故にかと推量て、馬の心に叶ふ樣に、充養べきに、其さへ曾て心を不著、馬の意に會通する事能はざる也【謝云—】孟子萬章下篇に見へたり、眞西山曰、天位所以處賢者、天職所以任賢者、天祿所以養賢者、三者皆天所以待賢、必使治天民者也、而晉平公之於亥唐、特虛尊之而已、未嘗處之以位命之以職、食之以祿也、此豈王公尊賢之道哉【天位】は、天より受たる位也【天職】は、天より授たる職也【天祿】は、天より與たる祿也、上たる人一人して、此三者を貪て、我私物にするは、不仁無道也、天下は一人の天下に非ず、堯は天下の爲に、其子を置て帝位を舜に讓り舜亦禹に讓り湯王は伊尹を舉、高宗は傅說を宰相とし、武王は太公を師として、大國を與るの類は、天位天職天祿を人と共にする者也、若夫燕王噲

【食】詳恣切、音寺、以レ食食レ人、孟子食レ志食レ功【粟】爾雅翼、古以レ米之有レ孚殻レ者、皆稱レ粟【石】韻會、量名、漢志、十斗曰レ―、千里の名馬は、一度飯に、一石の米を食ふ【註】【才之異―】才能人に勝たる事を云【必尊位―】位を擧進め、祿を澤山に與へ、萬事を打任て置也【此謂英雄―】賢才の人、能大事の政道を成、大功を成就する事は、必ず位高く祿重して、政事を執行しむる故に、我志しを天下國家に展布也、

食レ馬者不下知二其能千里一而食上也、

今之養二君子一、不下知三其爲二異才一而加中禮養上【謝云】此謂養二英雄豪傑一者、不下知二其能辨二大事一成中大功上而不上レ以二尊位重祿一養レ之也

是馬雖レ有二千里之能一、食不レ飽、【謝云】二句三字○位不レ尊　力不レ足、二句三字○祿不レ重　才美不二外見一、三句五字、此章法○雖二異才一、亦難二展布一也、

馬を養者、此馬は千里の能ある事を知ざる故に、粟を心に足る程不レ充レ食也【能】の字、古來のう共、よく共讀、兩點何れも苦しからず、但し下に千里之能と云句あれば、のうと可レ讀歟【註】【今之養君子―】今字は、退之が時代を指【君子】は、賢才の人也【不知其爲―】其人の賢才なる事を知ざる故、禮を加て崇敬せず、厚祿を與へて養はず【註】【謝云此謂―】英雄豪傑、養ふて置ながら、此人は何樣の大事をも、埒を開、大功を成べき者也とて、高位重祿を與て禮養せざるを云【是馬雖有―】千里の名馬なれ共、飽まで食ざる程に、微力して、千里の材能も見はれず【註】【謝云】【一句三字―】食不レ飽、力不レ足、二句共に三字づゝ也【三句五字】才美不二外見一の句也【此章法】上二句は、皆三字づゝにして、此一句五字なるは、是文を書に、章の法如レ此ならざれば、上重ふして、下輕く、文勢弱くなる也、獲麟解に、詠二於詩一、書二於春秋一、雜二出於傳記百家之書一、又原道に、火二于秦一、黄二老于漢一、佛二于晋宋齊梁魏隋之間一と云類、能心を著、眼を留て可レ見、羅山曰、是退之が文の法也【位不尊】は、下位に居る也【祿不重】は薄俸也【雖異才―】は、人に異なる才學あれ共、展布べき樣なき也、

且欲下與二常馬一等上不レ可レ得、【謝云】祿位不レ足二以展布一、反不レ

原曰、昔周公位冢宰、正百工、以相成王、故有宰相之稱、

千里馬常有、而伯樂不常有、知人者○〔謝云〕此謂英雄豪傑常有、而賢宰相知人者不常有、

云心は、異材なる人は、常に世間にあれ共、其材能を見知事、伯樂が馬を知たる樣に知用る賢宰相は、常に無者也註【知人者】とは、賢人を見知者なきを云、謝が註能明也、

故雖有名馬、秖辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之間、駢頭而死、言多也〔謝云〕高才居下位不以千里稱也、〔迂齋云〕有力〔謝云〕不知其爲異才○此謂天下雖有英雄豪傑、徒受辱於昏君庸相之朝、沈滯於小官、終身不得行其志、不以英雄豪傑稱也、

【奴】字彙、—婢、古罪人、今僕隸、通謂之奴、【隸】賤稱、增韻、僕—【槽】韻會、畜獸之飯器【櫪】馬牛皁、皁、馬閑、漢書音義、食牛馬器、以木作、如槽、魏武帝曰、老驥伏櫪、志在千里、【故名馬—】如此なる故に、善馬はあれ共、伯樂が如の馬を知たる者無れば、徒らに奴隸人とて、賤きやつごの手に辱しめられ、引づり打れて、馬槽の間に、頭を並て死果る也註【異材】名馬を賢材に比する也【駢頭—】幾等も善者世に用られずして、空く朽死ると也【謝云】高才は、智慧才學のある人、官位も進められずして、下位の卑き輩に、打交りて居る也【不以千里—】一日に千里も行能ある事を、人不知故に、稱譽せられざる也註【迂齋云有力】とは、此一句有筆力事を、譽て評ずる也【謝云不知—】常の人と、かはりたる才能ありと云事を知ざる故に、稱せられずと也【此謂天下—】昏君は、智くらき主君也【庸相】は凡庸にうつけたる宰相也【沈滯】は、下位に朽果るを云、言心は天下に善人はあれ共、徒らに昏君庸相の朝廷に、辱めを受、下位に沈て、身の果る迄、我才能ある志をも不振して居る程に、人に譽稱せらるべき樣も無と也、

馬之千里者、一食或盡粟一石、才之異乎人者、必尊位重祿、以任使之○此謂英雄豪傑、能立大事、成大功者、必得尊位重祿、斯可以展布、

千人曰英、萬人曰傑、又禮註疏曰、雄、武稱也、獸之將群爲雄、故借名、淮南子曰、智過百人謂之豪、疊山評して云、此篇の主意は、英雄豪傑とて、千人萬人に勝れたる者、必ず我を知者に遇て擧用られ、尊するに高官を以して、是を崇敬し、養ふに俸祿を厚く與へ、萬事を任せ行はしめて、時の權柄を執すれば、英雄の人、其材を展布て、天下に施し行ふ也、然共暗君上に在時は、不才不肖の者宰相と成て、權威を振ひ、賢才君子は、推へ捨られて、小位に屈し、山野に隱る也、此篇にて馬と云は、賢才の人の、下位に居るを指、伯樂は、天下國家を治る君主、又は時の執權を指也、○萬里居士曰、此篇四段、自篇首至稱也第一段、自馬之至里也第二段、自策之至良馬第三段、自鳴呼至末第四段、

世有伯樂、

〔莊馬蹄〕伯樂善治馬、註、伯樂、姓孫、名陽、善馭馬、而氏〔星經云〕伯樂、天星名、主典天馬、孫陽善馭、故以爲名〔謝云〕以伯樂喩知人者、

然後有千里馬、

〔謝云〕此喩異材、○此謂下有賢宰相、然後有英雄豪傑爲中之用上、

戰國策、楚客謂春申君曰、昔者騏驥駕鹽車、上呉坂、遷延負轅而不能進、見伯樂仰而鳴、之知其伯樂知己也、袁彥伯三國名臣序贊云、夫未遇伯樂、則千載無一驥云云、世間に伯樂と云馬乘の上手有て、能馬を見知てから後に、名馬は出來る也【註】莊子の馬蹄篇に、伯樂能治馬注に、伯樂、姓孫、名陽、善馭馬【治】も【馭】も、能馬に乘事也、馬の上手にて、何樣の馬をも、自由にする也【馬而氏】と古來讀來れ共、それは惡し、馭馬と讀べし【而氏】は、甘氏石氏とて二人あり、共に能天文を知て星經を作る、此處に其を書とて甘字か、石字かを誤て、而字に書たると見へたり、然れば而字を、石字か、甘字かに成て見るべし、愚謂而氏の字にても不害歟、孫陽が善馬を馭する故に、伯樂の名、取て氏とする也、甘公、石申は、皆漢人也【石氏星經曰伯樂―】伯樂と云星は、天の馬を主る星也、此孫陽も、善馬を乘人なればとて、異名に伯樂と云也、【謝云以伯樂―】とは、能賢才を材とは知たる宰相は、伯樂が馬を知る如くなると也【然後有―】【註】【謝云此喩異才】とは人に勝れたる材能ある人を、千里の馬に喩ふと云義也【此謂有賢―】とは、先善宰相有て後、賢才を崇敬するから、能者は出て天下の寶と成也、事物紀

ん爲に、如斯而巳と云註一篇の綱目不亂、結括り得て、筆力ある也【以師待之】增韵に待は、遇也、呂か說、謝か說、共に分明なれは、細釋するに不及、

李氏子蟠、年十七、〔韓曰〕蟠、貞元十九年進士　好古文、六藝經傳、皆通習之、不拘於時、請學於余、

〔李氏子〕とは、年弱故に云也、左傳に、仍齊之子弱也とある文法也、又武氏子と云語もあり、論語に、鄹人之子とあるも、皆此例也註【韓曰】韓氏の人、韓文を註するに依て、今此に引也【貞元】は、唐の德宗の年號也【進士】は、此時李蟠進士及第する也【六藝】は、禮樂射御書數を云、又前漢書儒林傳註、師古曰、六藝謂易禮樂詩書春秋【經】は、聖人の所作【傳】は、賢人の所述、又經は、詩、書、易、春秋、禮記、周禮、論語、孝經の類、傳は、左傳、公羊傳、穀梁傳の類也【通習】六藝經傳何れも皆彼是相通して、學び習ふ也【不拘於時―】當世は師と云、弟子と云事を笑ふ時也、然るに左樣の事に泥み拘らず、古の聖賢の學を好て、退之に請問、故に古文と云、古道と云、

余嘉其能行古道、作師說以貽之、〔謝云〕第十段、收歸李氏子從學之意、作師說之因、貽、遺也、

退之其能古道を行ふ事を褒美す【古道】は、即上の傳道師道と云道也註【收歸】退之李蟠か學に從ひ、能古道を行ふ事を述ん爲に、師說を作り、此所にて、因緣を說收め、根本に歸する也、

○雜說〔疊山云〕此篇主意、謂英雄豪傑、必遇知己者、尊之以高爵、養之以厚祿、任之以重權、斯可以展布、

韓退之

此を【雜說】と云は、韓退之心に思ふ事を書たる文、四篇あるを、一所に集て、何とも名をば不付して、雜說と云、此文も其內の一篇也【雜】は、まじはると訓す、黃氏日鈔五十九、韓文公雜說四首、龍喩言君不可以無臣、醫喩言治不可以恃安、鶴喩言人不可以貌取、馬喩言世未嘗無逸俗之賢註白虎通、禮別名記曰、

十七年】郯は、國の名、其君子爵なる故に、郯子と云、爵に公侯伯子男の五等あり、此人魯國へ來て、朝廷に參謁す、昭公是と酒宴を成、魯國の臣昭子問て云、古の帝王少皡氏、鳥を以て官の名とするは何故ぞ、郯子答て云、少皡氏は、即ち吾先祖也、吾能是を知れり、此時鳳凰出來る、因て鳥を以て官の名として、鳥師とすと云、其外黃帝は、雲を以て官の名を紀し、炎帝は、火を以て官の名を紀し、共工は、水を以て官の名を紀し、伏羲は、龍を以て官の名を紀すと語りければ、孔子此事を聞及て、郯子に見へて、官の事を學び給ふ、孔子其時年二十八也、孔子人に語て云るは、天子官を失ふ時は、學四夷に在と云事は信也けりと宣へり、官を失とは、天子衰微して、其官職を修る事能はざるを云、郯の國、遠鄙にある故に、中國よりは、夷狄の如くに思ふ也、故に四夷と云、此萇弘、師襄、老子、郯子の四人は、皆孔子の師也、【其賢ー】其賢とは、右の四人を指、此四人の賢は誠に孔子に及ばざれ共、孔子是を師とせり、

孔子曰、三人行則必有我師、〔語述而篇〕

三人の內、一人は我也、其二人の內に、善をは我師とし、惡をは戒とする時は、何れも師となる故に、三人行ふ時は、我師と云也、老子經曰、善人者、不善人之師、不善人者、善人之資、

故弟子不必不如師、師不必賢於弟子、聞道有先後、術業有專攻、如斯而已、〔呂云〕說得最好、又應前吾師道處意、綱目不亂、結有力〔謝云〕第九段、說孔子無常師、問樂於萇弘、問禮於老聃、問樂於師襄、問官名於郯子、遇有事之精者、卽問之、卽以師待之此四人者皆不及孔子也、論語、孔子曰、三人行、必有我師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之、皆吾師也、以孔子之事可觀、弟子不必不如師、師不必賢弟子、聞道在吾前、術業有專攻者、雖聖人亦師之、不以爲恥、況衆人乎、

上に云如く、萇弘等の賢は、孔子に及ばざれ共其師と成時は、弟子も必しも師に劣るべからず、師も必しも弟子に勝るべからず、只先に道を聞と、後に道を聞と、其術業に專攻あるとの不同也【術業】は、其藝能所作也【專攻】は、もつはらをさむると讀り、學問に精を入、專に能力め治る也、師弟子の道は、只是迄也と云

歎後世不レ知レ有二師道一、士大夫之族恥二於從一レ師、是智不レ及二巫醫樂師百工之人一也、

巫醫百工の人をば、君子每に是を鄙しむ、是も其一藝はあれ共、聖賢大學の道に對すれば、皆小道也、士大夫の所レ可レ學は、大學の道也、然れ共師を擇ふ事を知ざれば、其智は卻て巫醫等の輩に及ふ事能はす、怪み不審すべき事也、前には醫巫樂師百工と云、此には樂師を略して中に含めり、鄙レ之を、韓文考異には、不レ齒と作る、謝註分明也、

聖人無二常師一

〔語子張篇〕夫子焉不レ學、而亦何常師之有、

孔子は、文王武王の道を專らに學び給へり、而も常に定りたる師匠とてはなし、誰にてもあれ其道を知たる者には、我疑しき事を問給へり入二大廟一而每レ事問とある時は、此廟守も一旦の師なるべし、

萇弘、師襄、老聃、郯子之徒

〔家語觀周篇〕孔子謂二南宮敬叔一曰、吾聞老聃、博レ古知レ今、通二禮樂之原一、明二道德之歸一、則吾師也、今將レ往矣、對曰、謹受レ敎、與俱至レ周、問二禮於老聃一、訪二樂於萇弘一、〔史孔子世家〕孔子學二鼓レ琴師襄子一、〔左昭十七年〕郯子來朝公與レ之宴、昭子問曰、少皡氏、鳥名レ官、何故也、郯子曰、吾祖也、我知レ之、仲尼聞レ之、見二於郯子一而學レ之既而告レ人曰、吾聞レ之、天子失レ官、學在二四夷一猶信

其賢不レ及二孔子一、

【家語】は、孔子の事を書集めたる書の名也【南宮敬叔】は、孔子の弟子也、孔子是に語て云るは、周に老聃と云人あり、此人廣く古今の事を知、禮樂の源に通し、道德の趣を明す、我是を師とすべしと云て、敬叔を相伴て、魯國より周に往て、禮を老聃に問、又樂の事を萇弘に習へり此【老聃】は、即ち老子の事也、禮記に、吾聞二諸老聃一と有も此事也【萇弘】も、周の大夫也、左傳國語に見へたり、家語先聖歷聘紀年圖、夫子二十九歲、適レ晉學レ鼓レ琴、三十四歲、適レ周問二禮老聃一、訪二樂萇弘一、反レ魯、史記曰、南宮敬叔言二魯君一曰、請與二孔子適一レ周、魯君與二之一乘車兩馬一豎子一、俱適レ周、蓋見二老子一云云、索隱曰、莊子云、孔子年五十一、南見二老聃一、蓋系家亦依レ此爲レ說、而不レ窮二其旨一、遂俱誤也、何者、孔子適レ周、豈訪レ禮之時、即在二十一一耶、且孔子見二老聃一云、甚矣道之難レ行、此非二十七之人語一也、乃既仕之後、言耳【史孔子世家―】師襄子は、魯人也、又能磬をも擊、故に、論語に擊磬襄入二於海一とあるも、此人の事也【左昭

事を不ㇾ恥、聖人賢人の惑を解、心を明にする道をば、君子士大夫好師を擇て不ㇾ習是れ師を耻る也、

士大夫之族、曰ㇾ師、曰ㇾ弟子云者、則群聚而笑ㇾ之、問ㇾ之、則曰、彼與ㇾ彼年相若也、道相似也、〔呂云〕渋ㇾ前 位卑則足ㇾ羞、官盛則近ㇾ諛〔呂云〕生ㇾ意説、此二句佳 嗚呼、師道之不ㇾ復可ㇾ知矣、〔謝云〕第七段、説下巫醫樂師百工之人、不ㇾ恥ㇾ從ㇾ師、士大夫之族、以ニ弟子ㇾ從ㇾ之、則爲ㇾ人所ㇾ笑、問ニ其所ㇾ笑者何事、則曰ニ弟子與ㇾ師年相若、道相似、或曰ニ弟子位高、師位卑、則足ㇾ羞、弟子無ㇾ官、師官盛、則近ㇾ諛、此四句ㇾ應ニ無ㇾ長無ㇾ少、無ㇾ貴無ㇾ賤八字ニ

白虎通曰士者、事也、任ㇾ事之稱也、故傳曰、通ニ古今、辨ニ然否、謂ニ之事、大夫之爲ㇾ言、大扶ニ進人ㇾ者也、故傳云、進ㇾ賢達ㇾ能、謂ニ之大夫ㇾ也、若師と成、弟子と成て、道を學ぶ者あれば、士大夫の族、群り集つて、嘲り笑ふ、何故に如ㇾ此笑ふぞと問へば、彼學ぶ者と敎る者と、年齢も相上下して多く違はず、道も相似て異なる事なし、師と可ㇾ成事もなく、弟子と成べき事もなし、年弱くは可ㇾ學、道劣らば師とすべけれ共、年も道も不同なきに、師と成、弟子と成は、可ㇾ笑事也と云註【應前】とは、上の吾師ㇾ道也、夫庸知ニ其年之前ニ後生於吾乎、是故無ㇾ貴無ㇾ賤、無ㇾ長無ㇾ少、道之所ㇾ存、師之所ㇾ存也と云に相應す【位卑則―】位卑き者に物を習へは、耻也とす、論語に、君子不ㇾ恥ニ下問ㇾとあり、位高く共、位卑き者を師とするは、君子の道也可ㇾ恥事に非ず、官盛なる者に物を習へは、諛ふて追從すると譏る也、高官を師とせん事は、勿論也、聖人の王たるは、天下の君也、天下の師也、不ㇾ及ㇾ云、伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文、武の如き是也註【生意説】羅山曰一篇の内に此意を云出す、此二句尤も好と云り、愚謂平平と説下すべきを、一つの新意を生じ出して説を云【嗚呼―】此にて嗚呼と嘆息して、師道の古に復らざる事を可ㇾ知と云也註謝か註分明也【四句】は、彼與ㇾ彼年相若也一句、道相似也一句、位卑則足ㇾ羞一句、官盛則近ㇾ諛一句、

巫醫百工之人、君子鄙ㇾ之、今其智乃反不ㇾ能ㇾ及、可ㇾ怪也歟〔謝云〕第八段、慨ㇾ

レ師而敎レ之、所謂師者、不レ過三授レ書習二句讀一而已、至二於其身一、則恥レ於從レ師、不下以二傳レ道解レ惑爲上レ急、童子句讀之不レ知、則爲レ之擇レ師、其身惑之不レ明、則不レ擇レ師、是學二其小一而遺二忘其大一、可レ謂二不明一

【句讀之不知】とは、童子の師に學ばぬ故也【惑之不解】とは、大學の師なき故也註【雙關文法】とは、句讀と惑とを相對して說を云【或師―】或は師あれば、童子句讀を習ふ、或は師あらざれば、其身惑を不レ解、相對して云り、【或不焉】の文は、上に或師焉と書たる故に、不レ有レ師と云意とす、不字をしからず共、いなゝり共可レ讀也、此文法左傳國語に多し註謝が云心は、我子には師あり、我身には師を耻、我子の句讀を知は、有レ師故也、下の小學と云と貫通す、我身師を恥て、惑不レ解は、師あらざる故也、下の大遺と云と貫通す、是は韓文公、巧を弄んで、文法を作る所也、書亂し言雜へたる樣なれ共、前後上下、文法の筋目能通ずる也【巧】は、奇巧とて、色色に面白く上手に云述るを云【小學―】小學は、僅に句讀を讀習也、大學無レ師して、不レ傳レ道不レ解レ惑は、大遺也、然れば其明なる事を不レ見不レ明は有レ惑故也註【呂云―】言心は上の一句を結て筆力強く、文法關鎖す、古義に、上一句は、句讀之不レ知惑之不レ解を指、愚謂愛二其子一擇レ師而敎レ之、於二其身一也則耻レ師焉を指歟、何れにても皆二句也、但小學而大遺の一句を指乎、是にては又未レ穩、如何【謝云第六段―】子を愛する者の師を擇ぶは、只句讀を敎る迄也句讀を不レ知故に、師に習しむる也、是小を學ふ也、其父の身に於ては、不レ知レ道、不レ解レ惑とも、師に學ん事を耻、如何ぞ其身の惑を明かにせんや、是大を遺る也、不明也、

巫醫樂師百工之人、不レ恥二相師一

【呂云】就二鄙賤一處一說、諭得切、

【巫醫―】の二字は、論語に見へたり、巫は、玉篇、男曰レ巫、女曰レ覡、みこ、かんなぎ也、醫は、治レ病工、くすし也【樂師】は、周禮に見へたり、音樂をする者也、盲目の人に、此藝を習はしむる也【百工】は、論語に、子夏曰、百工居レ肆、以成二其事一、萬つの細工人を云、此等の輩は、何れも師に學ぶ事を不レ耻也註の心は、鄙賤の處に就て說述る也、巫醫等の藝能諸職は、君子士大夫の學に比すれば、鄙賤の事也、是をば人師に就て學ぶ

也【此】とは、師に學ぶと、師に不レ學とを云註分明也、不レ及ニ細釋一【此是雙關文法】聖人と愚人とを、兩立相對して云は、門闕の並び對するが如しと云、

愛ニ其子一擇レ師而敎レ之〔呂云〕体得親切 於ニ其身一也則恥レ師焉〔呂云〕抑揚 惑矣、

其子を愛する者は、好師を擇て敎しむ、是は師に物を習ふは、好事也と知故に、我子を愛して指南を賴む也註の意は、師匠を擇ふ事は好と云ことを、象り得て親切也、愚謂師を擇て子を敎しむる事は、必人の父の其子を愛する者所レ爲也、此處に能體り述得て、尤も親して疎かならず、密切にして迂濶ならず、羅山又云、此師說は、李氏か子に書て遣たる事なれば、子を愛すると云事を云へ共、下に其父の事と、童子の師と云論を包含り、愚謂必しも李氏が子に係て見るべからず、只泛く父の子を愛する事を云也【於其身―】我子には師を取れ共、其父の身には、師に物問事を恥る也、其子に敎しめんよりは、先其身に學ぶべきを、卻て師に問事を恥てせぬは、大なる惑也、智の昏くして、身を忘れたるを云註【呂云―】師を擇は、揚也、善として譽る也、師を恥は、抑也、惡き故に敗抑する也、

彼童子之師、授ニ之書一而習ニ其句一讀一者也、非下吾所レ謂傳ニ其道一解ニ其惑一者上也、

【童子之師】は、童子小學の師也、書籍を授け、讀習はする者也、一章の內、文意斷絕する處を、句と云、一句の內、語未だ絕ずして、分て讀に便するを、讀と云、此時は、讀音豆、是は文字を讀までにて、道を傳へ、惑を解の師には非すと也、

句讀之不レ知、惑之不レ解、〔謝云〕此是雙關文法 或師焉或不焉〔謝云〕此是於ニ其身一也則恥レ師焉、此一段、亦是愛ニ其子一、擇レ師而敎、句讀之不レ知、或師焉、與ニ小學一相貫、惑之不レ解、或不焉、與ニ大遺一相貫、此是文公弄レ巧作レ文 小學而大遺、

吾未レ見ニ其明一也〔呂云〕結ニ上一句一、有レ力、有ニ關鎖一〔謝云〕第六段、說ニ今人愛レ子、則擇

古之聖人、其出人也遠矣、猶且從師而問焉、〔東萊云〕應前聖人且從師、此高一等說、翻前人非生而知之之意、

【出人】とは、人に勝れ出る也、古の聖人は、人に勝りたる事、甚高遠なれ共、猶師匠に道を問給へり【註】東萊云心は、前の古之學者必有師と云に相應す、前には生ながらにして知者ならねは、師無ては不叶と說、此にては生知の聖人さへ、師に從て物を問と、打反して、一等高く云述る也、

今之衆人、其去聖人也亦遠矣而恥學於師、是故聖益聖、愚益愚〔呂云〕結得主意、盡關鎖使袁盎傳意、換骨法、

今の凡人は、聖人に劣りたる事、甚だ遠して、而も郤て師に學ぶ事を恥る也、此故に古の聖人は、聖にして益々聖也、今の凡人は、愚にして益々愚也【註】呂が云心は、此處人として師無んば不可有と云本意を結括り得たり【盡關鎖】とは、前後上下の文法、能本意を鎖し留めて、外へ放ち移さず【使袁盎―】前漢書列傳十九、袁盎傳、欲以致天下賢英士大夫、日聞所不聞以益聖、而君自閉鉗天下之口、而日益愚夫以聖王責愚相、君受禍不久矣、此處に袁盎が傳の益聖益愚と云四字を使ひ用るに、換骨の法を得たり、詩人玉屑に、奪胎換骨法あり、凡夫の骨を換て、仙人と成を云、其如く古語を用ひて、能其意を換、新く勝りて作るを、換骨法とす、冷齋夜話に云、不易其意而造其語、謂之換骨法、規模其意形容之、謂之奪胎、韓文公今此文に、袁盎が傳の字をば用れ共、聖益聖、愚益愚と書たるは、袁盎が傳の文よりも、勝て新奇也、凡骨を換改て、神仙と成が如し、又碧岩の序に、換骨靈方とあり、

聖人之所以爲聖、愚人之所以爲愚、其皆出於此乎、〔謝云〕第五段、說古之聖人、其過人遠矣、猶且從師、故聖者益聖、今之衆人、其不及聖人也遠矣、而恥學於師、故愚者益愚、聖人之所以爲聖、愚人之所以爲愚、係乎從師不從師而已、此是雙關文法、

聖人の聖たると、愚人の愚たるとの不同、皆此に出る

らば、則不ㇾ及ㇾ云、吾是に從て師とすべし、吾より後に生れたり共、其道を聞くこと、吾より先ならば、亦師とすべし、其年に老弱あり共、道を所二聞知一の先なるを師とすべし【聞道―】論語里仁篇、子曰、朝聞ㇾ道、夕死可矣、

註【承接―】云心は上の句をうけつく事緊き也すきまもなき義也【有精神】とは此文字に、たましい有て死句に非るを云【吾師―】年の前後に拘らず、道の所ㇾ在を師とす、上には傳ㇾ道聞ㇾ道と云て、此にては只道とばかり云註【呂云―】先に生れ、後に生るゝを論せず、道を師とすと云が、結び括りたる處也【夫庸知―】吾より先に生れ、後に生れたる事を不ㇾ知、只道を學ふ也、註【繳】は、玉篇、之若切、縎ㇾ矢射也、生絲を矢に係て、鳥を射取を云【繳本意】とは、一篇の本意を結び回す義也、

是故、發二盡上意一無ㇾ貴無ㇾ賤、無ㇾ長無ㇾ少、道之所ㇾ存、師之所ㇾ存也〔呂云〕承接開合處、綱目〔謝云〕第三段、說二無ㇾ貴無ㇾ賤、無ㇾ長無ㇾ少、道之所ㇾ存、卽師之所一ㇾ存、

【是故】の二字にて、上文の意を承て、發明し盡す也、貴賤となく、長少となく、道のある處は、師のある處也【長少】は、老弱の義【存】は、在也註【承接―】とは、上の句を、能うけつぎて、開きて說、合せて云述る處大綱と小目とあり、

嗟乎、粘ㇾ上、卻立ㇾ意起 師道之不ㇾ傳也久矣〔東萊云〕上說ㇾ學、至ㇾ此卻立ㇾ意處、欲二人之無一ㇾ惑也難矣、〔疊山云〕第四段、慨二歎後世師道不一ㇾ傳、人如何無二疑惑一、

【嗟乎】は嘆息の辭、師道の傳らず、人の惑る事を嘆く也註【粘上―】粘は、とりもち也、ねひと訓す、鳥黐や糊を以て、物を貼たる如く、上の句に能著て不ㇾ離、卻て意を立起して說也、古には師匠あれ共、今は師道廢て、久く傳らぬ也註東萊云心は、此文には師に學ふ事を云て、此にて、卻て又意を立て說也、【欲人之―】師道傳らざる故に、人惑無こと難き也註【疊山―】慨も、亦嘆也、師道の傳らぬ事を嘆て、人爭でか疑ひ迷ふ所無んと云也、

故玉不琢、不成器、人不學、不知道、子夏曰、百工居肆以成其事、君子學以致其道、孔子曰生而知之者上也、學而知之者次也、是以雖有自然之性、必立師傅焉【關鎖】は、羅山曰、括り鎖る也、人として師無は不可有の義を、發端の句にて關鎖する也、愚謂くゝりとめて放散せざる義歟、此兩句を說起して、一篇の大意、此外に不出也、羅山の說は、結句結得と云注に可用【疊山云―】此第一段に、先此三大綱を立て、後に節節小目を說出す、綱は、網のつな也、大意を擧るを云【道者―】道は、大學の道也【致知―】は、大學の八條目也、古より帝王聖賢傳る所の道也致知は、我知識を推極る也、格物は、事物の理を窮盡て、至極の所に到也、誠意は、心の動發する所を眞實にして、自ら欺く事なき也、心は、一身の主宰也心と意と、艸を以て譬れは、心は根、意は苗也、正心は、邪曲ならぬ樣に正ふする也、八條目の事は、詳に大學大全に見へたり【業者―】六經は、詩書易春秋禮記孝經を云【禮樂】は、五禮六樂也、大學大全に備にあり、

人非生而知之者、孰能無惑、惑而不從師、其爲惑也、終不解矣

〔呂云〕人不可無師處、應上、是第二段、〔謝云〕第二段、先說解惑不可無師、

論語述而篇曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也、凡そ人生ながらにして知者に非んば、誰も惑は可有也、惑て師に從はずんば、其惑は終に解まじき也、堯舜禹文王周公孔子の如は、皆生知安行の聖人也、それも皆師に逢て問給へり【註】の心は、是第二段也、人として師無んは不可有の心を云ん爲に、惑の事を云、

生乎吾前、其聞道也固先乎吾、吾從而師之、生乎吾後、其聞道也亦先乎吾、吾從而師之〔呂云〕承接緊有精神吾師道也〔呂云〕結句處夫庸知其年之先後生於吾乎呂云繳本意、

吾より先に生れて、其道を聞こと、亦固に吾より前な

歲讀書、日記數千百言、比長盡通六經百家之學、擢進士第、累官刑部侍郎、時憲宗迎佛骨、愈上表極諫貶潮州刺史、除鱷魚患、尋改袁州、召拜國子祭酒、歷轉吏部侍郎、卒贈禮部尚書、諡曰文、愈爲文粹然一出於正、佐佑六經、學者仰之如泰山北斗云、

古之學者必有師、師者所以傳道受業解惑也

〔呂云〕大意說兩句、起人不可無師、關鍵好〔謝疊山云〕第一段先立傳道受業解惑三大綱、道者、致知格物、誠意正心、齊家治國平天下之道、業者、六經禮樂文學之業、惑者、胸中有疑惑而未明也、

古の學者は、必ず師あり、學者のみに限らず、王公大人も、亦必師あり、湯王は、伊尹を師とし、高宗は、傅說と甘盤とを師とし、文王武王は、太公望を師とす、是を學而後臣之と云也、白虎通論語讖曰、五帝立師、三王制之、傳曰、黃帝師力牧、帝顓頊師綠圖、帝嚳師赤松子、帝堯師務成子、帝舜師尹壽、禹師國先生、湯師伊尹、文王師呂望、武王師尙父、周公師虢叔、孔子師老聃、又呂氏春秋四云、神農師悉諸、黃帝師大撓、帝顓項師伯夷、帝嚳師伯招、帝堯師子州支父、帝舜師許由、禹師大成贄、湯師小臣、文王武王師呂望、周公旦、齊桓公師管夷吾、晉文公師舅犯、隨會、秦穆公師百里奚、公孫枝、楚莊王師孫叔敖、沈尹巫、吳王闔閭師伍子胥、文之儀、越王勾踐師范蠡大夫種、此十聖人六賢者、未有不尊師者也、師は道を傳へ、作業を授け、人の心の惑を解ほどく者也、孟子曰、夫道若大路然、晦菴朱子云、道之得名、正以人生日用當然之理、猶四海九州百千萬人當行之路、爾、又曰、道、卽理也、以人所共由而言、則謂之道、以其各有條理而言、則謂之理、其目則不出乎君臣父子兄弟夫婦朋友之間、而其實無二物也、又此註謝疊山が云、道者、致知格物云云【道】は、人間日用當然の道理也【業】は、字彙に、事—學—、凡所攻治者皆—、しわざと讀り、人の所作を云【惑】は、字彙に、迷也疑也、眩亂也、人の心の昏迷て、道理分明ならざるを云○註【呂】は、東萊也【大意】は、此一篇の大括の意趣也【兩句】は、古之學者必有師一句、師者所以傳道受業解惑也一句【起人—】此兩句、人たる者、師無んば不可有の心を說起す、白虎通曰、學之爲言覺也、悟所不知也、故學以治心、慮以變情、

其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾倶至云云【卒然】は、常山と云山にある大蛇の名也、其首を打ば、尾を以て救ふ、其尾を打ば、首を以て救ふ、其眞中を打ば、首尾を以て兩方より相救ふ、是軍法の上に喩て云を、今又引て此文を論ず、前後始中終段段能そろふて筆力强く少しも疎かに隙ある所なく、論じ殘す事なし○【東萊曰—】一統志金華府、呂祖謙、夷簡六世孫、祖好問、隨高宗南渡、仕至尙書右丞、卜居金華、祖謙早擢高第、歷官著作郞直秘閣、倡道於婺、爲一代宗師、號東萊、著書立言、幷行於世、卒諡成、東萊云心は、此師說、能結び括て、段段に有力、中間の三段に、三意有て說起す、され共全篇大概、意思承續て說下し、卻て少も本意を不失也【中間三段】古說に、第四段の嗟乎師道之不傳云云、第五段の古之聖人云云、第六段の愛其子云云を指也、今按するに、黃氏日抄の師說前起後收中排と云義歟○日抄曰、師說前起後收中排、三節皆以輕重相形、初以聖與愚相形、聖且從師、況愚乎、次以子與身相形、子且擇師、況身乎、末以巫醫樂師百工且從師、況士大夫乎、公之提誨後學、亦可謂深切著明矣而文法則自然而成者也、韓文註、洪曰、曹成王碑、造語法子雲也、南山詩、平淮西碑、氣象宏富、法相如也、進學解、師說之類、精粹入道理、法劉向也、凡爲文字、字有法、法左氏、司馬遷也、班固以下不論云云、又日抄讀文集部蘇文忠云、詩至於杜子美、文至於韓退之、書至於顏魯公、畫至於吳道子、古今之變、天下之能事畢矣、此東坡博學高識、知味之言云云○建仁寺僧靑松曰、凡此篇十截、古之學者、以第一截擧古而標之、人非生以下第二截、立理、生乎吾以下、第三截、說當從師、嗟乎以下第四截、粘上起下古之聖以下、第五截、正斥其非、較聖人與愚人、以決於學、愛其子以下第六截、較句讀與道惑、以責其暗、巫醫樂師以下第七截、較鄙賤與君子、以疑其智、巫醫百工以下第八截、引聖人之師資以爲其證、聖人以下第九截、李氏以下第十截、收歸也、

韓退之

唐書列傳一百一云、韓愈、字退之、鄧州南陽人也、七世祖茂、有功於后魏、封安定王、父仲卿、爲武昌令、有美政、既去、縣人立石頌德、終尙書郞云云、大明一統志懷慶府、韓愈、南陽人、即今修武縣北南陽城是也、七

經也、營營靑蠅、止于棘、讒人罔極、交亂四國、六義の中にて興の詩也、詩の心は、蠅は此彼こへ往來して、棘に止まると、目前の體を興したる也、其如く讒人の止事なく、善を惡と云、惡を善と云により、四方の國亂るゝ也、此讒人を、幽王の退け給はぬ所を刺りたる也、

說類

韻會去聲霽韻【說】音稅、誘也、增韻、說誘、謂以言語諭人使從己也、又入聲屑韻、文選、陸機文賦、說、煒煒而譎誑、注、善曰、說、以感物爲先、故煒煒譎誑、翰曰、說者、辯詞也、辯口之詞、明曉前事、詭譎虛誑、務感人心、煒煒、明曉也、盧曰、自出己意、橫說竪說、其文詳贍、抑揚無所不可、如韓文師說是也、說は、孔子の說卦より始て、後人文の一體とす、其事の理を、ときほどく義也、故に書の註を、集說と云も、集解の義也、せつ共、ぜい共、古來より讀來れり、

○師說

〔洪曰〕柳子厚答韋中立書云、今之世、不聞有師、獨韓愈不顧流俗、犯笑侮、收召後學、作師說、因抗顏爲師、愈是以得狂名、余觀退之師說云、弟子不必不如師、師不必賢於弟子、其言非好爲人師者也、學者不歸子厚而歸退之、故子厚有此說耳、此篇文字、如常山之蛇、救首救尾、段段有力、學者宜熟讀、○〔東萊曰〕此篇最是結得段段有力中間三段、自有三意說起、然大槩意思相承、都不失本意、

萬姓統譜、洪邁、皓季子、亦中博學宏詞科、紹興末假翰林學士使金、書用敵國禮、金人怒鎖使館、後得還、孝宗卽位、拜中書舍人、直學士院、後知建寧婺州紹興、皆有善政、以端明殿學士致仕、謚文敏、洪言心は、柳子厚書を作て韋中立に答て云樣は、今の世に人の師と成者ある事を不聞、若あれば、人見て笑之、韓愈獨世俗に拘はらず、人の笑侮る事を顧みず師說を作て、自師となる、【抗】は、擧也、抗顏は、自瞞する貌、愈自ら師匠顏をする也、是に因て、愈狂人の名を得たり、柳文三十四にあり柳又報嚴厚輿書云、僕才能勇敢、不如退之、故不爲人師、人之所見有異同、無以韓責我云云【余】は、洪自ら云也、洪柳か書を引て論して云、今師說に、弟子不必とあれば、韓退之自ら人の師と成事を好む者に非す、此時學者子厚に隨はずして、退之に歸依す、故に子厚憤て云るなるべし、孟子離婁篇曰人之患、在好爲人師【此篇文字―】孫子九地篇云、善用兵者、譬如卒然、卒然者、常山之蛇也、擊

してまどろむ、暫時も防ぐことを嚴密にせずして怠れば、子を生付、類を殘して置ゆへに、次第に其子ども多く大に成、食物腐りて敗れ損ずる也【淋漓】は、肉などの腐りて汁の出ること也、

使親朋卒至、索爾以無歡、臧獲懷憂、因之而得罪、此其爲害者三也、

【使親—】親類朋友至れとも、畜はへし美食も、腐り果て無故に、饗應喜ばしめん樣もなし、然故に、蠅を守し奴婢とも罪を得る也、是蠅の害を成す第三也【索爾】は、無歡貌也【臧】は、男下部【獲】は、女下部也、揚子法言、荆淮海岱之間、罵奴曰臧、罵婢曰獲、怒て云時に、男奴を臧と云、女婢を獲と云也此にては只下人の事也、風俗通、燕北郊民而夫奴謂之臧、女而婦奴謂之獲、法言、燕齊、亡奴謂臧、亡婢謂獲、

是皆大者、餘悉難名、

【是皆—】云立たる三箇條は、害の大なる者也、餘のことは取上て云べき樣もなしと也、

嗚呼止棘之詩、垂之六經、於此見詩人之博物、比興之爲精

嗚呼—【嗚呼】は、歎息の詞也【止棘の詩】とは、逍注にありし青蠅の詩のこと也、營營青蠅、止于棘とあるに因て、止棘の詩と此に書り【六經】とは、五經に孝經を副て、六經と云也、今此に云は、此止棘の詩を、六經の中の詩經に記したり、此にて詩人の博識にして、物に比興したる事の委きを見たりと也、

宜乎以爾刺讒人之亂、誠可嫉而可憎　詩青蠅、大夫刺幽王也、營營青蠅、止于棘、讒人罔極交亂四國、

【宜乎—】周幽王の時、大夫青蠅の詩作りたり、讒人を蠅に喩へたり、歐陽が言は、蠅を讒人にたとへたる事、げにもと也、誠に惡みても餘ありと也、面白結句也註【詩青蠅—】周幽王、褒似を愛せし人也【詩】は、詩

於此之時、王衍何暇於清談、王衍手揮玉麈終日清談賈誼堪爲之太息、賈誼上書、可爲痛哭者三、可爲長太息者六此其爲害者二也、

於此—【王衍】は、晉の代の人、美男にて物語の上手也、清談なるまじきと也【註】王衍—【玉麈尾】とは、麈と云獸の尾を、拂子の樣にこしらへて、持所を玉などにて飾る、官人の持物也、王衍王麈尾を打振て、清談せしと也、詳に蒙求にあり、賈誼—賈誼は、前漢の人也【註】【賈誼—】賈誼文帝へ上たりし書に、今の代の政に、痛み哭くべき事三つ、ためいきつくごとくなる事六ありと書り、委く前漢書賈誼傳にあり、今此賦に云るは、賈誼もかやうの時は、太息すべきと也【此其—】蠅の害をなす第二也、

又如醯醢之品、醬䣺音泥之制、及時月而收藏、謹缾罌之固濟、乃衆力而攻鑽、極百端而窺覬、

又如—【醯醢】はしり、びしほとて、魚鳥などの肉にてこしらゆる也【醬䣺】は、骨をませてこしらゆる物也、今用るたゝき、なしものゝ類也【制】は、制法にて、其をこしらゆる作法也【及時—】字彙、罌、瓶之總名、輟耕錄云、類、釜、醯醢醬䣺をこしらへて、熟する時分まで納め置て、器に入て、固く蓋をして置ば、蠅とも多く其上へ集まり、彼方此方、到らぬ處もなく、透間をうかゞふ也【攻鑽】とは、蠅か障子の紙などへはたと飛當りて、紙を破りて出る事を、きると云也、

至於大胾肥牲、嘉殽美味、蓋藏稍露於罅呼訝反隙、守者或時而假寐、纔少怠於防嚴、已輒遺其種類、莫不養息蕃滋、淋漓敗壞、

至於—【大胾】は、大きにきれる肉也【肥牲】は、こへたるにえ也【嘉殽】は、骨のあるうまき肉也【美味】は、うまき食物也、禮記、左殽右胾、註、骨體曰殽、切肉曰胾【蓋藏—】蠅にくはせじと、食物を守るも、或は時と

を好みて、それに溺れて死するを知らず、諸人は利欲を貪りて、罪禍に逢也、人の利を云はゞ、命より實はなし、又命より重きは仁義也、義理を守て、命を捨ること眼前也、人たる者此理を分別せざらんや只是欲にくらまさるゝ故也、故大學に明德を明にすることを敎る也、

尤忌赤頭號爲景迹　〔酉陽雜俎〕身靑者能敗物、巨者頭如火

一有霑汚、人皆不食、

【尤忌―】頭の赤き蠅は、取分むさき者也、それをば景迹とも云也囯酉陽―【酉陽雜俎】は、書の名也、唐の段成式書著はしたり【一有―】赤頭の蠅一つも食物を汚す時は、人忌て不食也、

奈何引類呼朋、搖頭鼓翼、聚散倏忽、往來絡繹、

【奈何―】何しに此蠅は、類を引連、友を呼、頭らを動かし、羽鼓きをし、聚るよと思へば散じ、散ずるかと思へば忽に聚り、彼方此方しばらくの斷絕もなく、往來するぞと也【倏忽】は、忽と云心也【絡繹】は、連續することを云也、

方其賓主獻酬、衣冠儼飾、使吾揮手頓足、改容失色、

方其―【獻酬】は、崇敬する客、又は晴の時の盃の禮儀也、獻は、此方より客へたてまつること也、水を器に入て置て、洗てさす事などあり、酬は、此方へ其盃を返さるゝこと也、殊外六かしき禮儀也、禮記に委あり、左樣の晴がましき時、嚴しく束帶して、行儀を正す折節、蠅が我をせゝるほどに、手を擧て打拂ふ、座などを立時、足をもせゝるほどに、足をもそばだてゝ不禮になる也、行儀の亂るゝを迷惑する故に、顏色も變りて無興になる也漢書、楊惲報孫會宗書云、頓足起舞、文選、張翰季鷹雜詩云、頓足託幽深、註善曰、頓、止也、又東萊觀瀾文集、兵車行註曰、頓足者、足踊於地而爲之困頓、戰國策、聞戰頓足、注、頓、踴也、愚謂頓足は、足を踊して追驅也、如王思怒蠅也、

の字の上に、者の字あり、今此無之、傳寫印寫の時誤りて落せる歟、

又如峻宇高堂嘉賓上客沽酒市脯鋪筵設席聊娛一日之餘閑奈爾衆多之莫敵、

【又如―】【峻宇】の二字、書經にて、やかずをたかふすと讀、此にては、たかきいゑと云心也【高堂】は、たかき堂也【嘉賓】は、よきまらふと【上客】は、尊貴の客也【沽酒―】嘉賓上客を得て、酒を求め乾ける肉の類をも儲へ、美しくしたるむしろなどを布き、座席を設け、一日ゆるりとしづかに娛樂せんとすれは、蠅が多く來る、爾に敵當して防くべき樣もなき也、又一說に、蠅は多く集りても、人が寄ば、其まゝ飛散して、吾に敵當せぬほどに、何ともすへき樣なきを、奈爾衆多之莫敵と云也、愚按後說不知文理者之解、大可笑、

或集器皿或屯几格或醉醇酎

音宙

因之投溺或投熱羹遂喪其魂諒雖死而不悔亦可戒夫貪得

〔班固難莊〕青蠅嗜肉汁而忘溺死、衆人貪世利而陷罪禍、

【或集―】器又は皿、まないたの類にあつまる也【屯】とは、陣を張ことを屯すと云、此にては蠅の多くあつまることを屯と云なり【或醉―】醇酎は、厚き酒也、熱羹は、熱したるあつもの也、愚謂あつくにえたる汁也蠅が醇酎に飛入て醉死、熱羹を食はんとて、落入て燒死也【雖死―】蠅は醇酎熱羹の食欲に引れて、死すれとも後悔せず、それを見なからも飛入也、小人は盜賊をして、刑戮に遇を見ながらも、惡事をする也、是皆明德私欲に昏まさるゝ故也、尤貪欲を戒べき也、此一賦小人のことを蠅のうはさに取成て書たり、かやうの所にて著じるし 註班固―【班固】は、漢の世の隱なき者也、萬姓統譜班固彪長子九歲能文及長博貫載籍明帝時典校秘書續成父所著西漢書及作兩都賦與頌記凡若干卷【難莊】とは、書の名か、文の名か、古來より日本にある書籍には、何とも知ぬ也、蒼蠅は肉汁など

髣髴、〔註〕吾不復夢見周公 莊生安得與蝴蝶而
飛揚 〔莊子〕夢爲胡蝶、栩栩然、胡蝶不知周也、俄然覺則蘧蘧然周也、
【於此—】論語述而篇、子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復
夢見周公、朱子曰、孔子盛時、志欲行周公之道、故夢
寐之間、如或見之、至其老而不能行也、則無復是
心而亦無復是夢矣、故因此而自嘆其衰之甚也、炎
熱の時分一睡せんとすれば、蠅がせゝりて眠られぬ
ほとに、孔子も假初にも、周公を夢に見給ふこと有ま
じ〔註〕【語—】語は、論語也、孔子盛なりし時は、周公聖
人也し間、周公の道を天下に行んと志し玉ひし也、然
るほどに夢中に周公を見給ふことも有べし、老し玉ひ
て、道も行はれざるまゝ、周公を夢に見玉ふことも無
とて、吾衰たる事を嘆じ玉ひての語也、後世周公とい
へば夢の事に用る也、唐の盧同茶詩曰高丈五睡正濃、
將軍扣門驚周公、此詩も、周公と云を夢のことに用
ひたり、此賦に書たるも、寢られねば夢も見ぬ者也、
孔子も寢たまはずは、周公を夢に見たまふことある
まじきと也【莊生—】莊子夢中に蝴蝶となる【栩栩然】
は、飛揚する體也、蝶に成て、彼方此方飛行き、少も莊
子が成と云心もなく、全體胡蝶也【蘧蘧然】は、僵直
貌ふんぞりて臥たる義也、夢醒ておれば、莊子にて有
し也【周】は、莊子が名也、此賦に書るは夢の車にのみ
假用なり、

徒使蒼頭丫髻、巨扇揮颺、或垂
頭而腕脫、或立寐而顚僵、此其
爲害一也

徒使—【蒼頭】は、双婢のこと也、頭におをき物を蒙る
に因て、蒼頭と云、前漢書鮑宣傳、蒼頭盧兒皆致當、
注臣瓚曰、漢儀註、宦奴給書計、從侍中以下爲—類
書簒、漢名奴曰—、猶言黔首也【丫髻】は、髮を唐兒
に結たる童子也、角丫と書て、あげまきと讀、陶氏
輟畊錄十七、吳中呼女子之賤者曰丫頭、列賓客寄
贈小樊詩、花向丫頭十二三、春來綽約向人時、童僕に
大なる扇などにて蠅を逐すれば、始のほどこそあれ、
後は退屈して、或は頭をさげて睡り、或は眠り仆るゝ
也、是先蠅の害を成す一箇條也、類聚に此賦を引、一

流汗成漿、

【炎風―】夏の炎熱して長日には、神も昏く、氣も蹙て、流汗も如漿也【漿】字彙に、米汁相將也、本艸綱目に、諸漿水を載す、こんづと訓す、うすにごりの水を云也、

委四肢而莫擧、眊兩目其茫洋、

【委四―】委は委頓也身なへて仆る義【四肢】は、手足也、手足を擧べき力もなく、手足のまゝに打任せて置也、目も昏て、茫洋と何をも辨へぬ也、夏日の體を、あり〳〵と書り、

惟高枕之一覺、冀煩歊之暫忘、念於爾而何負、乃於吾之見殃、

惟高―【一覺】は一寢入の意、炎暑の時分、高枕一睡して、蒸熱を忘れんとすれば、蠅がせゝりて、いねさせぬ也、【煩歊】は、熱氣也、漢揚雄傳、散歊蒸、思へば蠅の氣にそむきたる事もなきに、何とて如此なるぞと也、

尋頭撲面、入袖穿裳、或集眉端、或沿眼眶、

【尋頭―】取分て蠅は寢入たる時は、頭へ集る者也、顏へ飛懸るを、面を撲と云也、袖の中へ飛入、裳のあきまへ穿入、眉のはづれ、まかぶらなどへ傍集る也【眶】は、まぶた也、

目欲瞑而復驚、臂已痺而猶攘、

【目欲―】目を塞がんとすれども、蠅にせゝらるゝ故に、又我身を警固するやうに眠らす、愚謂警は、警悟也、只さむる心、此下の註に引警周公と云語可味、臂もしひるれとも、袂まくりして蠅を逐也、孟子、馮婦攘臂下車、

於此之時、孔子何由見周公於

【眇】は一目小也、形は極めて微小なる蟲にて食欲も滿足しやすき也、小人は小利欲にして、一旦滿足する道理也、

杯盂殘瀝、砧几餘腥、

【杯】は、さかつき、【盂】は、ほとぎ也、【砧几】は、まないたの如き物也杯盂などに殘れるしづく、砧几などの腥に、必蠅は取付也、

所希杪忽過則難勝、

【杪】は、粟のゝぎ也【忽】は、蛛の井の細き者也、蠅が好み願ふ所は、少しきの食物なれとも、飛過るをも人は忌也、

苦何求而不足、乃終日而營營

【詩】營營青蠅、

【苦何—】蠅は何ほどの食物を求とてか、不足に思ひて、終日彼方此方へ飛行するぞと也【營營】は往來の貌　註【詩—】詩經小雅に、青蠅の篇あり、其詩に、營營青蠅、止于樊などゝ作れり、營營の二字、此本語より書也、

逐氣尋香、無處不到、

食物の氣と香とを聞で、到らぬ隈もなし、

頃刻而集、誰相告報、

食物のあるを、誰か蠅に知する者も無に、暫くの間に集まる也、

其在物也雖微、其爲害也至要

形を受ること微小なれとも、物を害ふこと肝要也、

若乃華榱　音衰　廣廈、珍簟、方牀、

若乃—【華榱】は、文選上林賦註に、彩椽也、うつくしくいろどりかざれるたるき也【廈】は、字彙に、側屋也、廣廈は、ひろきいゑ也【珍簟】は、めづらしく美しき竹筵、也、【方牀】は、四方なるゆか也、此より蠅の害を成ことを、して一一云立たり、

炎風之燠、夏日之長、神昏氣蹙、

白く汚し、白き物をば黒く汚して、物を害ふが如し【此詩人―】詩小雅に、青蠅の篇あり、周の大夫幽王を譏りて作たる詩也姦人邪佞を蠅のうはさに取成して作る事、詩經の青蠅の篇に出たり此皆詩人の物に寄て、比興したる所也【比興】は、六義の中の比興也、詩經ノ青蠅篇ある故に、此に本きて此賦を作れり、朱子曰、比者、以彼物比他物也、興者、先言他物以引起所詠之詞也、黄氏日抄云、歐陽公憎蚊詩、始以乾坤廣大之語、終以麟鳳不見之語、詠微物而先以大者言之文法也、○萬里居士曰、此篇五段、自篇首至至要第一段、自若乃至一也第二段、自又如至二也第三段、自又如至三也第四段自是皆至末第五段。

蒼蠅蒼蠅、吾嗟爾之爲生、

【蒼蠅―】蒼蠅蒼蠅と、重ね詞に云事は、詩經に、碩鼠碩鼠とも、鳲鳩鳲鳩ともあり、甚た其事を云んとて也、蠅の名を呼出して、何して人に強く惡まるゝぞ、甚爾が生涯を哀しむと云也、爾とは、蠅を云、下皆同、

既無蜂蠆之毒尾、又無蚊虻之利觜、

〔聞見錄〕歐陽公云、予作憎蠅賦、蠅可憎矣、尤不堪蚊蚋自嚶喝來、利觜咬人也、

既無―【蜂】は、はち也【蠆】は、和訓に、さそりと讀、左傳に、蜂蠆有毒と云り、蜂蠆などは、毒尾にて人を螫もの也、蠅は毒もなくして、人に惡れ忌るゝ也【又無―】【蚊】は、か、【虻】は、あふ也、蚊虻などのやうに、するどにときくちばしもなし註聞見―【聞見錄】は、宋の邵伯溫が聞及見及たることを書あつめたる書也、伯溫は康節の子也其書に、歐陽公云、我蠅を憎みて、憎蒼蠅の賦を作たるか、蠅は堪難く憎き物也【蚊蚋―】かあぶなどは、聲をたて鳴來つて、人をかむ、蠅は强ち鳴來ることもなき也【嚶喝】の二字、蟲の鳴聲也、

幸不爲人之畏、胡不爲人之喜、

【幸不―】幸に利觜毒尾も無ほどに、人に畏怖せられぬに、何とて人に悅喜せられぬや、

爾形至眇、爾欲易盈、

九月九日、玄宗沙苑と云所に狩し給ふ時、鶴の飛を、帝自弓を引て射玉へば、其鶴箭を帯て、未申の方へ飛去る、青城山の道士徐佐卿と云者有しが、外より歸る時、箭を一筋持來て云やうは、此箭の主、明年必此所へ至るべし、其時此箭を返すべしと云しが、案の如く明年に、玄宗蜀に狩し玉ふ時、其箭のあるを見玉ひて、さては沙苑にて射たる鶴は、徐佐卿にて有たるよと知しめして、恠しみ給へり、此事を高道傳に書たり、神異記と云書にもあり、坡が夢中に道士を見て、昨夜の鶴は、爾也しかと云たること、徐佐卿がことより本づきて書り【元豐―】東坡元豐六年に、此賦の奥に、自書付たる也、江水漢水の間に、赤壁と云所三所あり、【一在漢―】漢水の尾は、竟陵と云所の東方にあり、即復州と云所也【一在齊―】とは、舟を繫ぐ所を云とあり、舟入などのある所と見へたり【一在江―】唐は六町一里也、【江夏】は、今漢陽縣に付たる地也【古】とは所の名も多く易れり【予謂―】江夏の未申にある赤壁は、曹操周瑜に敗れし所也【按三國志―】三國志と云書に曹操は江陵より下る、劉備と周瑜とは、夏口より上りて、曹操を迎へ戰ふとあり、然則竟陵の東と、齊安の舟入にある赤壁にてはなし、東坡が遊たるも、黄州の赤壁にて、曹操が敗北せし赤壁にてはなけれども、赤壁と云名より、曹操周瑜が事を思ひ出して、前赤壁賦に書り、後難を受じがために、東坡如レ此記し置たり、赤壁を思違へて賦したるにては非ず、

○憎蒼蠅賦　　歐陽公

蠅之爲レ物、賦レ性至微害レ物至重、猶下姦人邪佞、以敗二君徳一、變二黒白一以爲中物之害上、此詩人託レ物比興、

【蒼蠅】は、あをき蠅也、此賦うちむきは蠅をにくみたれとも、姦人邪佞のうはさを、蠅に取成して書たる也【註】【蠅之爲―】淮南子に、蠅は爛灰の中より生ずるとあり、和訓にはいと讀も、此故なるへき歟はいと云字、蟲偏に繩と云、字の旁を書り、蠅は前の足にて、繩を綯ふ如くにする故也、蠅は小蟲なれども、物を害ふと重し、【猶姦人―】姦人は、かだまゝしき人也、邪はよこしまなる人也、佞は、佞人也、今諺にいふ佞人とは相違なる歟、佞は口才とて、口がしこく、善を惡と云、惡を善と云亂るやうなる者を云也、姦人邪佞、君の側にあれば、必君法を敗り害ふ也、蠅の黒き物をば

【嗚呼―】上の嗚呼は、人の摠してあゝと云に同じ、下の噫嘻は、別して云心也、何も歎息する也、【我】とは、東坡也、

疇昔之夜、飛鳴而過我者、非子也耶、

【疇昔―】檀弓上、夫子曰、予疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間陳澔注云、疇昔之夜、猶言昨夜也、疇は、へだつると云義也、昔は、夕べと云義也、疇昔を疇夕とも書也、きのふは今日の昔なる故に、昔と云字を用たり、坡云やうは、きのふの夜、赤壁にて飛鳴して、我舟を掠て、通たりしかば、爾にては無かと云也、

道士顧笑、予亦驚悟、開戶視之、不見其處、

〔東萊云〕此賦結處用韓文公石鼎序彌明意、指鶴爲道士、亦暗使高道傳靑城山徐佐卿化鶴事、○元豐六年、東坡自書此賦後云、江漢之間、指赤壁者三焉、一在漢水之側竟陵之東、卽今復州、一在齊安郡之步下、卽今黃州、一在江夏西南二百里許、今屬漢陽縣、予謂江夏之西南者、政曹公所敗之地也、按三國志、操自江陵而下、備與瑜由夏口往而逆戰、則赤壁明非竟陵之東、與齊安步下也、

【道士―】坡に云れて、此道士見廻して笑ふ也、時に坡も夢醒たり、起て戶を開て、道士は何くにぞと見れども、迹形もなし、[註]【東萊―】姓は呂、名は祖謙、字は伯恭、早く高第に擢らる、朱晦庵と友たり、倡道於婺、爲一代宗師、東萊此賦を評論して曰、書留に道士の事を書たるは、韓退之が書たる石鼎序の軒轅彌明が心也、軒轅彌明と云者、衡山と云處の道士也、元和七年、十二月四日、劉師服と云者の所へ行たり、侯喜と云者、詩を能得たりとて、劉師服と詩の物語などをしたりし時、彌明其側に在しが、侯喜に云ことは、さらば坐中にある石鼎に就て、句を作らんとて作しに、師服も中々及ばず、後には彌明を敬ひて敎を受んなどゝ云へども、反答もせず、師服壁に靠りて眠りたり、夜も明方に成ぬれば、侯喜も師服も睡りて、目醒て後、日も出たり、彼彌明を尋ぬれば、行方知ざりしと也、此事を韓退之書たるを、石鼎聯句序と云也、坡が書たる道士の事意相叶へり、石鼎は、石にて作たるかなへ也、彌明が事委く韓文にあり【指鶴―】天寶十三載、

玄裳縞衣、戛然長鳴、掠予舟而西也、

【適有—】たま〳〵鶴の飛來るあり、其體大なる江に横たはりたるやうにて、東方より來る也、愚謂只鶴の海上を横に飛也【翅如—】鶴の兩翼車輪の如くなる也、横江と云より、如此ことく〳〵しく書り、上曰衣、下曰裳、裳は、もはかま也、玄裳縞衣は、鶴の羽稍の黑くて、惣身の白きを云也【戛然—】句解曰、戛然忽爾發聲、鶴の鳴聲也、愚謂戛は擊也物を打樣に鳴聲あるを云【長鳴】は、なが〳〵となきたる也【掠予—】東坡が舟をすりこすりて、西へ飛也、句解曰、而西、與東來之字答也、

須臾客去、予亦就睡、

【須臾—】しばらくして、二客も各の家へ歸りたり、東坡も歸宿して睡たり、此下夢中のことを書り、

夢一道士、羽衣翩躚、

【夢一—】一人の道士を夢みたり【道士】とは、仙術を學ぶ者を云、事文類聚、人行大道、號道士、士者何、理也、事也、身心順理、唯道從是從道爲事、故稱道士、三洞道料、道士有五、一天眞道士高玄皇人之流也、二神仙道士社中尹軌之列也、三山居道士、許由巢父之比也、四出家道士、宋倫彭諶之四也、五在家道士、黃瓊蘐鏗之倫也【羽衣】道士衣服也【翩躚】は、道士の行く體也、翩躚、韻府註云、行貌句解云、夢一道士、鶴爲僊禽、道士乃仙侶、坡儒有此風骨、故以類感、

過臨皐之下、揖予而言曰、赤壁之遊樂乎、

【過臨—】道士東坡が居たる臨皐の下を通るとて、東坡に禮をなし、赤壁の遊は、面白かりしやと云也、說文、手著胸曰揖、此禮禪家に猶有之、

問其姓名、俛而不答、

【問其—】坡夢中に誰人にてあると、氏名を問へども、道士俛て答へぬ也、

嗚呼噫嘻、我知之矣、

海若舞馮夷、馮夷がこと列仙傳にもあり、江淹別賦、慙幽宮之琴瑟、

蓋二客之不能從焉、

【蓋二―】東坡が行所へは、同道の客人は、中々上り從ふ事ならぬ也、

劃然長嘯、艸木震動、山鳴谷應、風起水涌、

劃然―【劃然】とは、俄にと云心也、東坡うそふきたれば、艸木も振ひ動き、山も鳴り出る也、山の響きにて、谷も答へて鳴、風も起、水も涌出る也、強ちに、うそふきたる故にて有まじけれども、如此廣大に書出す也、三國志、諸葛恪荊州游學、抱膝長嘯、愚謂く、劃は、以刀、破物也、高聲に嘯く程に、鳴響て物も裂る樣なるを、象て云也、此下に戛然長鳴と云文勢一同也、

予亦悄然而悲、肅然而恐、凜乎其不可留也、

予亦―【悄】七小切、說文、憂也、詩云、憂心悄悄、東坡も悄然とうれへて悲み、肅然とつゝしみて恐るゝ也、愚按するに、肅は、肅殺の肅はげしく身のちゞむ樣なる義、【凜乎】は、寒く冷まじき心也、中々すさまじくて、留りて居られさうになき也、此中に遙に朝廷の事を思て、つゝしみをそるゝ道理籠れり、

反而登舟、放乎中流、聽其所止而休焉、

【反而―】山中より返て舟に乘、沖中へ出、舟の止るに任せて休息する也、愚謂其止り次第に止る心也、休は、休止の休、非休息の休、

時夜將半、四顧寂寥、

【時夜―】其時早夜半計に成たり、四方を見廻せ共、さびしく、しづかなる也、

適有孤鶴、橫江東來、翅如車輪、

俯馮夷之幽宮 〔冷齋云〕馮夷、華陰人、服八石得水仙、是爲河伯、

【予乃—】東坡衣をかきあげて、險岨なるいはほを踏み山に上る也【披蒙—】句解云蒙茸、細艸、行而披開、蒙茸は、細かなる艸也、艸のしげみを推開きて行也、句解曰、石類虎豹之貌、踞而座於其上石の虎豹などの貌に似たるもあり、其石の上に踞まり居る也、增韻、蹲踞、獸直前足坐也、漢汲黯傳、上踞廁視之、廁臨高垂下也、句解曰、古木類虬龍者、攀而登其上、古木の虬龍に似たるもあり、其上などへ上る也【虬】は、みつちとて、角なき龍也、句解曰、既登高處、鳥巢可攀【攀栖—】とは、大鷹の巢のこと也、事の外高き所へ上る故に、鷹の巢のある邊りまで攀上る也、惣じて赤壁は鷹の巢ふ處也、復齋漫錄云、東坡謫居黃五年、赤壁有巨鶻栖于喬木之上、後賦所謂攀栖鶻之危巢、俯馮夷之幽宮是也韓子蒼、靖康初守黃州、三月而罷、因遊赤壁、而鶻巢已亡、作詩示何次仲云、緩尋翠竹白沙遊、更挽藤梢上上頭、豈有危巢尚棲鶻、亦無陳迹但飛鷗、經營二頃將歸去、眷戀羣山爲少留、百日使君何足道、空餘詩句在江樓、次仲和答云兒時宗伯寄吾州、諷誦高文至白頭、二賦人間眞吐鳳、五年江上不驚鷗、蟹當見水人猶怒、鶻有危巢孰敢留、珍重使君尋故迹、西風悵望古城樓、二詩皆言鶻巢、蓋推賦而云也、言文勢形容山水之際、登其最高、忽俯其下、言履巉巖如踞虎豹、披蒙茸如登虬龍也、【俯馮夷—】とは、馮夷は、水神也、幽宮は、馮夷の居所也、葛洪抱朴子曰、馮夷、八月上庚日渡河死、天帝署爲河伯、事林廣記、馮夷、人面魚身、或曰、三河伯、九江神也、鷹の巢などのある高き所へ上りたる故に、俯て下を見れば、水神などの居所にても有んと思ほど深き所を見る也此は東坡ひたすら我身仙人などにも成て、飛行自在を得たるやうに、世人の及ばぬ所の樂を云り

註【冷齋—】とは、冷齋夜話と云物の本あり宋の僧惠洪か所編也今韻府を按るに、水仙花の下に、此事を引作誠齋、又事文要玄に、楊誠齋水仙花の論を擧、然れば此冷字は必誤也、誠齋名は萬里、字は廷秀、宋の孝宗寧宗の時の人也、華陰は、所の名也【八石】は、抱朴子云、丹沙、雄黃、白礬、曾青慈石、青丹、黑丹、黃丹、又云、丹砂、雄黃、雌黃、硫黃、曾青、礬石、磁石、大禹餘粮【河伯】とは、水神のこと也、離騷云、使湘靈鼓瑟兮、令

【顧安―】漢書師古註曰、顧、思也、歸、坡歸也、婦、坡夫人也如此の肴はあれども、酒を何くにて得んと客云也【歸而―】史記楚欲相優孟、孟請歸與婦謀之、東坡詩云、歸舍聊須與婦謀、坡其まゝ其より立返りて、妻に酒の有か無かを問也、

婦曰、我有斗酒、藏之久矣、以待子不時之需、

【婦曰―】酒、婦、久、皆有韻、【需】は、須也、謝註に、求也、東坡文集、及勝覽、作須字、易之需卦九五曰、需于酒食、貞吉、妻の云ことは、我一斗ほど酒を久く蓄へたり、東坡の何時か求め給んと云ふて、箇樣の時を待と也、

於是攜酒與魚、復遊於赤壁之下、

【於是―】酒も肴もあれば、七月既望にも行たれとも、又赤壁の下へ行て遊ふ也、

江流有聲、斷岸千尺、山高月小、水落石出、曾日月之幾何、而江山不可復識矣、

【江流―】江の流も聲冷まゝしく、切立たるやうなる岸千尺程も高くある也【山高―】高山の月を遙に見上る故に、月細く見ゆる也、水湛へたる時は石も見へねとも減り落る故に、岩石見はれ出る也、天然奇妙なる書樣也【曾日―】東坡七月既望に遊しより今迄は、月日の幾程もなきに、如此に風景も易るものかと思ふ也さりなから風景の變りたるをば江山も知まじきと也、愚謂七月には、前賦に山川相繆、鬱乎蒼蒼と云如く、山木も繁茂し、江水も漲りしに、纔に九十日許に、景象悉くに變じ、葉落枝枯て、山更に高く見へ、山高きが故に、月小きに見ゆるのみに非す、月も冬は黄道の北を行ほどに、遙に小きに見ゆ、江も冬は水縮つて少く成て、石見はれて出る也、日月幾くも無して、箇樣に成べきとは、江山たにも又知べからず、

予乃攝衣而上、履巉巖、披蒙茸、踞虎豹、登虬龍、攀栖鶻之危巣、

とは、客ゟ助音して歌ふを云也、

已而歎曰、有客無酒、有酒無肴、月白風淸、如此良夜何、

【已而―】東坡歎息して云也、客はあれども、酒もなし、縱又有酒とも、肴も有まじ、明月淸風の面白き今宵を如何せんと也、

客曰、今者薄暮、擧網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸、【隋唐佳話】吳都獻松江鱸魚膾、煬帝曰、所謂金齏玉膾、東南之佳味、

【客曰―】客人東坡が歎息を聽て云ことは、今日の夕暮に、網にて魚を取たり、口大きに鱗細にして、松江の鱸の如く也、前漢尹賞傳、薄暮塵起、【薄暮】とは、極晩を云也、薄はせまると讀、暮こつまりたると云心也【松江】は、鱸の名所也、吳國にあり、せうかうと可讀、ずんがうとは不可讀、若唐音にて可讀は何れの名所も唐音なるべし行宮行李生熟虞伯生の類をも叢林にて唐音まぜに讀可笑【鱸】はあゆ也、倭名集に、すゞきと、訓するは、誤也、或は鰶を以てあゆとす、以て非也、詳見本艸綱目註【隋唐―】吳國の都より、隋の煬帝へ、松江の鱸の膾を進上したり、帝金齏―と宣ふ、【金齏】は、日本の漬物などやうの物也、黄色にて、見事なる故に、金齏―と云―【玉膾】とは、白玉を削りたるが如く、膾の白く潔きによりて云り、惣して松江の鱸は隱れなき名物也、後漢書列傳七十二、左慈と云者字は元放とて、廬山の人也しが、我ため奇妙なる事あり、左慈曹操が、所に在しが、或時曹操客を設けて饗應しに、種種の珍物を調へたり曹操客に云事は、今日大方の珍物はあれども、松江の鱸はなしと云し時左慈唯今の內に求べしとて、銅の器に水を入て、竿を以て銅盤の中へ釣をたれければ、松江の鱸をつりあげたり、操云ことは一魚にては、坐席へ足ましきが、亦求られんやといへば、始の如くして又つり出したり、長さ三尺あまりありしと也、人皆奇妙に思しとあり、委く後漢書左慈傳に見へたり、

顧安所得酒乎、歸而謀諸婦、

り、西に小橋あり、堂下に暗井あり、七年めに汝州に移る、其時雪堂をば、潘大臨と云者兄弟に取せしなり、勝覧五十、黄州雪堂註云、在州治東百歩、蜀人子瞻謫居黄三年、故馬正卿爲守、以故營地數十畝與之、是爲東坡、以大雪中築室、名曰雪堂、繪雪于堂之壁、西有小橋、堂下有暗井、七年移汝州、去黄之日、遂以雪堂付潘大臨兄弟居焉、崇寧壬午元年、黨禁既興、堂遂毀、其後邦人屬神霄宮道士李斯立重建、何斯擧作上梁文、其警聯云、歳在辛酉、蔚爲鸞鳳之棲、堂毀崇寧、庵作鼪鼯之野、又曰、前身化鶴、嘗陪赤壁之遊、故事換鵝、復無黄庭之字、蓋佳語也【將歸—】雪堂から臨皐へ行し也、臨皐も、東坡が居所也註【公—】子瞻始て黄州に至る時、定惠院に宿せし也、其後臨皐亭に移る也、其亭は回車院にある也、勝覧、黄州臨皐館註云、在朝宗門外、舊曰臨皓亭、其所見南北百里、東西一舍、晝則舟楫出沒於其前、夜則魚龍悲嘯於其下、變化倏忽、動心駭目、不可久視、今乃得翫之几席之上、

二客從予過黄泥之坂、

【二客—】郭遘古耕道二人同道せし也、路次すがら黄泥と云長坂を過し也、坡の字書たる本あり、惡き也、東坡集、東坡八首中、其一云、潘子久不調、沽酒江南市、郭生本將種、賣藥市西垣、古生亦好事、恐是押牙孫、潘子、潘邠老、郭生、郭遘古、生、古耕道也、又黄泥坂詞云、出臨皐而東騖兮、並叢祠而北轉、走雪堂之坡陀兮、歷黄泥之長坂、云云朝嬉黄泥之白雲、暮宿雪堂之青烟、

霜露既降、木葉盡脱、人影在地、仰見明月、

四句形容景物

【霜露—】十月の事なるほどに、霜露も降り、諸木も皆落葉する故に、月を障べき木葉もなし、さるほどに人影の鮮かに地に在を恠みて、ふりさけ見れば、月が明か也面白書やう也註【四句—】霜露より明月まで、四字一句にて、四句也、時節の景物を、あり〳〵と象りて書たり、

顧而樂之、行歌相答、

【顧而—】道中の景を見廻して、客と樂て歌也、【相答】

白、

【相與ー】二人ながら、舟の中によりかゝりて、東の白むをも知ぬ也、愚謂枕藉はまくらしきもの也臥と云ん爲也前漢尹賞傳曰、相枕藉死、

○後赤壁賦　蘇子瞻

晉陸機云賦體レ物而瀏亮、坡知二前赤壁賦、已曲盡二其妙一、後賦、尤精二於体レ物、如二山高月小、水落石出一、皆天然句法、末用二道士化レ鶴之事一、尤出二人意表一、

【後赤壁賦】東坡四十七歳の作也、上のを前赤壁賦と云に因て、後の字を加へたり註【晉陸機云】陸士衡と云人也、文選に文賦とて、文の事を論して書る賦あり、其詞を此に載る也【賦體ー】體レ物は物景を體認する也ありく〳〵と云述る義惣して賦の書やうは、物を象りて、能明に云顯す也、【瀏亮】は、明に物を云顯すを云也、瀏は水清貌、又水深貌、亮は明朗也是まで文賦の詞也【坡知ー】東坡既に前赤壁賦に、能妙處を盡して書り、又は此賦は、陸機が云し如く、尤も委く物を象れり【如山ー】此賦の中に、此句あり、末に詳也、如レ此の句法、眼前にある天然の事なれとも、東坡、以前、誰も如レ此なる事を書たる者なし、天然に妙なる句法也【末用ー】末段に此事あり、世人の心外なる奇妙を述たり、○萬里曰、此篇分二六截一、自二篇首一至二之坡一、第一截、記二實事一、自二霜露一至二相答一第二截、述二景象一、自己而二至二之需一第三截、言レ謀二酒肴一、自二於是一至二識矣一第四截、言二景象變態一、自二予乃一至二留也一第五截、言二遊事奇異一、自二反而一至二篇末一第六截、結以二道士化レ鶴之事一

是歳十月之望、歩自二雪堂一、蘇子得二廢圃於東坡一而作レ堂焉、號曰二雪堂一、堂以二大雪中一爲レ之、因繪二雪於四壁一 將レ歸二于臨皋一、公始至レ黄寓二定惠院一、後遷二臨皋亭一、亭在二回事院一、

【是歳ー】是年とは、元豐五年壬戌也、前賦に壬戌之秋と支干を書たる故に、前に承て、是歳と書り、是筆端の皷舞也【白雪ー】如レ此の文法、書經に多有レ之註【蘇子ー】子瞻四十五歳にして、元豐三年庚申二月一日に、黄州に謫せらる、馬正卿と云者守護たりしが、昔人の栖荒したりし處を、子瞻に與へたり、雪中に家を作りたりし故に、四壁に雪を畫て、雪堂と名けた

造物者之無盡藏也、而吾與子之所共適、〔謝云〕此一段、全學荘子情思、

【惟江—】只此江のほとりの清風と山中の明月とを樂むべきと也【註】【應前清風—】此賦の初に、清風と月とを云し首尾也【耳得—】清風を聞けば聲あり、明月を見れば色あり、耳目と境界と、道理一致に叶ふ處也【取之—】清風を聞、明月を見れども、誰あつて禁制すべき者なし、清風明月を用て樂めども、盡期なし、此天地萬物を作爲する造物者の盡せぬ倉なし、遵生八牋云、李太子詩、清風與明月、不用一錢買、赤壁賦云、惟江上之清風、與山間之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造物者無盡藏也、東坡之意、自太白之詩中來、夫風月不用錢買、而取之無禁、太白東坡之言信矣、【而吾—】方輿勝覽五十黄州部朱元晦云、前赤壁賦、言吾與子之所共食、食如食品之食、今人改作所共樂、非矣、後賦、前言二道士、後言孤鶴、東坡親蹟亦然、則或是筆誤也、【吾】とは、東坡也、【子】は、客也、風月この、二人の心に適ふ物なしと云也、適の字東坡文集、方輿勝覽にも、食の字に書り、食の字は、領知する心也、國郡を知行するを、食邑と云也其如く此水月は、東坡と客との、好みもの也、吾師活所翁云、適作食可也、食は、嗜好の義、俗にすきこのむと云すきの字也、人を生ながら食ふ事を好む馬なればとて、生食と云是也、今世茶道を好て、客を請待するを、數寄と書は誤也、茶を喫するも、亦食するなれば、食の字を茶道のすきにも可書、數寄は、亦數奇の誤也、

客喜而笑、洗盞更酌、肴核既盡、杯盤狼籍、

【客喜—】東坡に云はれて、客も歡喜微笑して、盞を更ため、互に酒を飲也【肴核—】魚肉をば肴と云、菓實をば核と云、色色のさかな物盡果て、盃盤も狼籍に取散してある也、狼籍の二字を、をゝかみふむと讀、狼物を蹈めば、蹈散す者也、世俗に云狼籍と云詞も、みだりがはしき事を云也、史記滑稽傳淳于髡傳、履舃交錯、杯盤狼籍、

相與枕藉乎舟中、不知東方既

蓋將自其變者而觀之、則天地曾不能以一瞬、自其不變者而觀之則物與吾皆無盡也、而又何羨乎、

【蓋將──】【變ずる者】とは、往來盈虛して、遷り易る者を云、天地さへ、初あれば必終ある道理なれば、一瞬するにも足ず、況水月をや、江山をや、增て人生をや、愚謂く【天地曾不能以一瞬】とは、天地開闢より以來永劫までも、晝夜運行不休して、能四時生成收藏の功を成す、其またたき程も不變事のならぬを、不能以一瞬と云也、若怠慢して休で變せずんば、四時萬物の功成就せざらまし【自其──】不變者とは、大虛に備れる造物者也、天地も此中より出、況や萬物をや、故天地同根、萬物一體なれば、人も又本より生なければ、又死もなし、何の變ずることか有んや、元來盡る事なし、物とは、水月の類吾とは、我身也、按ずるに古文大全註、言不必羨仙、謂我自有千古不朽、與水月相為無盡者云云、僧桂林曰、水月本無盡、吾身亦有不待生而存、不隨死而亡者、是無盡也、般若心經にも、不生不滅と云如くに、此理の所不盡を指て說也、羅山解に優れる歟、○此語莊子に似たり、莊子曰、自其異者視之、肝膽楚越也、自其同者視之、萬物皆一也と云へり、此意は、眼の違ひたる者より見れば、一身の內にある肝臟膽腑も、楚國と越の國ほど、遠く思ふ也道の眼より見れば、萬物一體也、

且夫天地之間、物各有主、苟非吾之所有、雖一毫而莫取、

【且夫──】繰返して盡る事なき意を云也天地の間には物物それ〴〵に主あり、我か有つ所とならねば、兎の毛のさきほども貪り取事なし、

惟江上之清風、與山間之明月、應前清風徐來、月出東山之句、耳得之而為聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是

の響にも悲あると、客が東坡へ云也、愚按ずるに、【託】は、寄也、【遺響】は、餘音也、本聲の過て、後にひゞく音を云【悲風】は、古義に、悲慘風韻と云、但秋は、萬物肅殺の時にて、風も悲を含めり、其上客此感懷ある程に、尤も悲風と云也、言は飛仙長生は、驟かに不可得、我蜉蝣一粟の身なる事を嘆て、其悲感を、簫の聲の中に含ませ、如怨如慕、如泣如訴、餘音を秋風に寄付て、嫋嫋として不絶如縷に吹と云り、

蘇子曰、客亦知夫水與月乎、逝者如斯、而未嘗往也、(此句說水)盈虛者如彼、而卒莫消長也、(此句說月)

【蘇子—】東坡又客へ問也、客も水と月とを知歟【逝者—】水は晝夜の辨へなく流るれども、此に一つ西へも東へも往ぬ者あり註【此句說水】謝註、人之逝者、若水之流、然而來者未嘗往也【逝者如斯】は、論語之語也【盈虛—】月はみちかくれども、此に光の消もせず、長もせぬ者ある也、是は老子の心也註此句說月【莫消長】は、易の語也、如彼の彼の字、東坡自筆の賦には、代の字に書り、朱子語錄、或問東坡言逝者如斯而未嘗往也、盈虛者如代而卒莫消長也、此只是老子獨立而不改周行而不殆之意否、曰、然、又問此語、莫也無病、曰、便是不如此、既是逝者如斯、如何不往、盈虛者如代、如何不消長、既不往來、不消長、卻是箇甚底物事、這箇道理、其來無盡、其往無窮、聖人但曰、維天之命於穆不已、子曰、逝者如是夫、只是箇不已、何嘗說不消長不往來、他本要說得來高、卻說得不活了、既是往者如斯、盈虛如代、便是這道理流行不已也、東坡之說、便是肇法師四不遷之說也、又云、盈虛者如代、代字、今多誤作彼字、而吾與子之所共食食字、多誤作適字、嘗見東坡手本、皆作代字、頃年蘇季眞刻東坡碑本後赤壁賦、夢二道士、當作一字、疑筆誤也○思歸叟續叢林公論、肇法師讀老子道德章歎曰美則美矣、猶未盡也云云後作宗本物不遷等論、所謂旋風偃岳而常靜、江河競注而弗流、野馬飄鼓而弗動、日月歷天而弗周、又曰、聖人有言、人命逝速於川流、是以聲聞悟非常以成道云云幷舉莊生藏山、仲尼臨川等事以明之、

寄蜉蝣於天地、（蜉蝣、小虫名、渠略、朝生暮死）渺滄海之一粟、

【寄蜉―】人間のあだなるとを比して云、言こゝろは只今客與東坡が境界あだなる事は、蜉蝣の天地の間にあるか如しと也、囲蜉蝣―【蜉蝣】は、かげろふと讀、ひをむしとも云也【朝生暮死】蜉蝣は命短き者也、蜉蝣、渠略也、甲蟲、朝生暮死、似蛣蜣、身狹而長、有角三寸、叢生糞土中、甲下有翅、甲小有文彩、王褒聖主得賢臣頌、蜉蝣出以陰、郭璞詩、借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年と作れり【渺滄―】猶も云へば、人生の小しき事は、遙かなるあをうみの上に、粟一粒浮へたるほどの事也、客と東坡と、天地の間にある事如此と也、滄海の滄の字、東坡集には、浮の字に作る、方輿勝覧にも作浮、

哀吾生之須臾、羨長江之無窮、

哀吾―【須臾】韻會、不久貌、僧祇律云、一日一夜、有三十須臾、人生は、しばらくの間也、今遊所の長江は、何の代から有やらん、又盡る限りも有まじければ、吾生を悲しひて、長江を羨むと客云也、

挾飛僊以遨遊、抱明月而長終、

【挾飛―】列仙傳、簫史者、秦穆公時人、善吹簫、能致孔雀白鶴、居數年、吹似鳳聲、鳳凰來止、其屋、公作鳳臺、夫婦止其上、不數年、而一日皆隨鳳凰飛去、故秦人作鳳女祠【遨】本作敖、說文、出遊也、詩、出遨以遊、仙術成就すれば、飛行自在になる者也、人生暫時にして事を思へば、飛行自在の仙人をわきばさみて、其に遊て長生したき也【挾】は、相携へ伴ふ意、簫史が簫には、鳳凰も感じて出し也、遂には鳳凰に伴ひて飛去る、此外飛仙多くあり、古今文海註、自月明至周郎言怨、自方其至雄也言慕、自而今至一粟言泣、自吾哀至悲風言訴【抱明月―】月を前に望むは、抱其光也、背後にすれば、負月也、言心は、明月に對して、月と共に長生したきと也、

知不可乎驟得、託遺響於悲風、

【知不―】飛仙明月とともに、いつまでも長生したけれども、死生有命ほどに、成まじき也、離騷湘夫人詞云、時不可兮驟得【託遺―】かく思ふ故に、今吹洞簫

釃酒臨江、橫槊賦詩、【元稹云】曹氏父子、鞍馬間爲文、往往橫槊賦詩

固一世之雄也、而今安在哉、

【謝云】有感慨、

【釃酒—】臨安人、酌酒亦曰釃酒、江上に酒を酌也、古義に謂く、釃酒とは、三略に、良將の簞醪を得て、河中へ投して、諸軍に飲せしとあるに、意叶へり【橫槊—】曹操さしもの勇士にて、戰場に臨み、戟を橫たへても、詩を作りし名人也【註】【元稹—】【元稹】は、唐の世の人にて、樂天など同時代也【曹氏】は、曹操也、曹操か子をば曹丕と云り、魏の文帝是也、父子ながら名人にて、馬上にても文を作り、戟を橫たゆる時も、詩を賦せし也、元稹杜子美が墓誌に書たるを此へ載たり、南史曰、曹操曹丕上馬橫槊、下馬談論【固一—】後漢許劭曰曹操曰、淸平姦賊、亂世英雄、曹操などは、類ひ少なき英雄なれとも、早悉く死果たり、一說に、此中に、周瑜が事も籠る也、一說に、周瑜を指と云義もあり、文章軌範の註也【註】【謝云—】【感慨】は、感じ嘆する也、

況吾與子漁樵於江渚之上、侶魚鰕而友麋鹿、

【況吾—】勝覽、朱元晦云、此云吾與子、吾字客自謂、子指坡、後云吾與子吾字、坡自謂、子指客也、今【吾】は、客也、【子】は 東坡を指て云也、曹操周瑜なとも、今は空しき名のみ也況んや客や東坡は江渚の邊りにて、すなとり、きこり、なとする身上也、實に漁樵するには非ず、只曹操周瑜に對して、我身の凡鄙を云んとて也、謝註、客謂與子混漁人樵子于江渚之上【侶魚—】漁する故に、魚鰕などを友にする也、鰕は、えび也、樵する故に、麋鹿を友にする也、麋は、めじか也、

駕一葉之輕舟、擧匏樽以相屬、

駕一—【駕】は、舟車に乘也、五雜俎云、匏立瓜之類也、與瓠一種而有甘苦之異、甘者爲瓠、詩所謂幡幡瓠葉是也、苦者爲匏、不可食、但可用以渡水而已、詩所謂匏有苦葉、濟有深涉是也、瓢瓠を樽にして酒を入る也、今客と東坡と、小舟に乘て匏樽の酒を飲て相共に樂む也【相屬】は酬酢也互にさひつ、さされつするを云、

西望夏口、東望武昌、（武昌、即鄂州、夏口、在鄂州江夏縣西、）山川相繆、鬱乎蒼蒼、此非孟德之困於周郎者乎、（周瑜、吳人呼為周郎、〔謝云〕此一段、設為客之言、以發明己意、）

【西望―】【夏口】【武昌】は、所の名也、註【武昌―】【武昌】は鄂州のこと也、夏口―【夏口】と云所は、鄂州の江夏と云縣の西にあり、山川―【繆】音了、與繚同、繞也、纏也、相如賦、繆繞玉綏、蓋し山川相繞て、縄をまとふ樣也、舟中より西東を見渡せは、山川相まとふたるか如く、鬱乎と木立しげく、蒼蒼とあをくしく見ゆる也【此非―】此處こそ彼曹操が周瑜と戰ひて、打負て、くるしめられし所にてはなき歟、註【周瑜―】周瑜を、吳國の人、周郎と云也、瑜年少き故に郎と云、日本に太郎次郎と云心也、郎は、をとこと讀、周瑜、字は公瑾、為吳建威中郎將、吳中呼為周郎云【謝云―】此段は、東坡客の反答を設け成て、我心を發明する也【設為】とは、自問自答の事也、

方其破荊州、下江陵、（劉琮降、曹公自江陵至赤壁、）順流而東也、

方其―註【劉―】建安十三年、曹公劉表を伐つ、折節表が卒する、月、新野と云處へ至る、表が子琮、即ち曹操が方へ降參せし也、下江陵註【曹公自江―】曹操劉備が江陵と云處に居たるを追崩して、其より赤壁へ往し也、さて赤壁にて周瑜と戰し也、已に詳于題註下、李白赤壁詩曰、二龍爭戰決雌雄、赤壁樓船掃地空、烈火張天照雲漢、周瑜於此破曹公、風雅集、龍麟洲赤壁詩、蹈呂推袁虎視眈、阿瞞氣勢捲江南、磯頭一霎東風轉、天下江山自此三【順流―】赤壁は、東方也、水の流に順ひて赤壁へ行也、

舳艫千里、（舳、是舡尾、艫、是舡前面安棹處、）旌旗蔽空、

【舳艫千里】とは、舟のともへを齊へて、夥たしく有を、千里ほど有と云也註【舳是】【舳】は、船のとも也艫は舟のへ也、舡與船同、一本面の字なし【旌旗―】旌旗は、皆はた也はた多して、虚空を掩ひ蔽すほど有と也、

龍也【泣孤―】【嫠婦】は、やもめの事也、孤舟に乘たるやもめも是を感じて泣べき也、白樂天琵琶引曰、元和十五年秋、予左遷九江郡司馬、明年秋、送客湓浦口、聞舟中夜彈琵琶、其音錚錚然有京都聲、問其人、本長安倡家女、嘗學琵琶於穆曹二善才、年長色衰、委身爲賈人婦、遂命酒使快彈數曲、曲罷因爲歌贈之、命曰琵琶行云云文章軌範註云吹簫而潛蛟亦舞、喩己潛伏于謫所也、寡婦聞此亦泣、喩己孤立不得于君也、

蘇子愀然正襟、危坐而問客曰、何爲其然也（愀音悄、）

【蘇子愀然】容色變也、禮記、愀然作色【襟】字彙、衣之交衽處、李涗自省錄曰、今所謂危坐、卽古之坐、今所謂跪、古亦謂之跪、而古別無危坐盤坐之稱也、危坐は、かしこまりて、足の蹠を立る也、跪は、とくと地に著てかしこまる也、何れも、ひざまづくとは訓ずべし、其時東坡色を變して、衣を刷ひ、居長高に成て、何故に此聲は如此なると、客へ問也、

客曰、月明星稀、烏鵲南飛、此非曹孟德之詩乎【選魏武帝短歌行】月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依○曹操字孟德、是爲魏武帝、曹操詩、讖先主之奔走、

【客曰―】客東坡へ反答也、明月の詩より、曹公が詩をも思ひ出したり、註【選魏―】【選】は、文選也、梁の昭明太子撰す、【魏武帝】は、曹操蜀先主との戰に打勝し時、短歌行を作れり【月明―】月明なれは、星稀なる者也、月明は、曹公自比し、星稀は、氣呑宇宙、目中無呉とある如くに、天下の人、我と共に抗ぶべき者なきに喩る心あり【烏鵲】は、かさゝぎ也、烏鵲南飛とは、蜀の先主曹操に打負て敗北することを喩て云【繞樹―】此烏鵲樹を三めぐり廻りたれども、翄を休むべき枝もなき也、先主の逃て依べき無ことを讖れり註【曹操―】魏志曰、太祖武皇帝、沛國譙人、諱操、字孟德、漢相曹參之後也、祖曹騰爲中常侍大長秋、養子嵩嗣、父嵩官至大尉、太祖少機警、有權數、而任俠放蕩、不治行業、故世人未之奇也、唯梁國喬玄、南陽何顒、謂太祖曰、天下將亂、非命世之才、不能濟也、能安之者、其在君乎、

君子を美人と云こと、其例多し【註】【楚辭―】屈原も如此書り愚謂欒光望方の四字、陽韻也望の字にて小讀を可成、楚詞等に例多し、古來讀誤て望美人―と云可笑、

客有吹洞簫者、倚歌而和之、

【客有―】前漢王褒有洞簫賦、註云、洞、通也言無底上下相通、故曰洞簫、簫、肅也、其聲肅肅然、大者二十二管、長三尺四寸、小者十六管、一名籟、此吹物の聲肅肅然たり、又其底なく、上下へ相通する故に、洞簫と云とあり、言心は同道の客の中に、洞簫を吹者あり、歌によりて、洞簫を吹合する也烏衣佳話曰、楊世昌、綿竹道士、與東坡同遊、赤壁賦所謂客有吹洞簫者即其人也、

其聲嗚嗚然、如怨如慕、如泣如訴、

其聲―【嗚嗚】は、洞簫の鳴る聲也【如怨―】如此色色ある也、

餘音嫋嫋、不絶如縷、

餘音―【嫋嫋】亦作裊裊、長弱貌、嫋嫋は、聲の長く引て、裊かなるを云也、洞簫の音、縷などを引續けたる如く、細くたをやかに、長く響く也、前漢五行志云、文武之道廢、中國不絶若綫、不絶如帶、師古曰、綫、縷也、

舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦、

嫠音狸（爾雅）寡婦曰嫠、

【舞幽―】荀子勸學曰、伯牙鼓瑟而游魚出聽、瓠巴鼓琴而六馬仰秣、又黃帝張雲門咸池樂於洞庭之野、魚龍出舞、觀瀾文集註、引李肇國史補云、李舟得村舍烟竹、截以爲笛、堅如鐵石、以遺李牟、牟吹笛天下第一、月夜泛舟吹之、俄有客呼舟、請載既至、請吹之、其聲精壯、山石可裂云云、客忽不見疑蛟龍也、伯牙が琴をば遊魚出てきゝ、黃帝の雲門咸池の樂には、魚龍も出て舞とあれば、此洞簫の聲にては、深谷にかくれたる、みつちも出て舞べき也【蛟】は、みつちとて、無角

は韻會、依也、よりかゝる心、字彙、據也、其所を我物にして居る心、河上仙翁馮虛、又陶隱居眞誥云、仙道有飛行之羽以躡虛空、故有長生飛仙之說、列子御風冷然【御】は、馬車に乘事を云、虛空により風にのりて、止る處を知ぬか如く也【飄飄―】風に物のひるがへるを飄飄と云、世上の塵事を忘却して、獨り萬物の外に立て、羽化の仙人に成が如き也、仙人の術成就すれば、羽翼生して、自在に飛行すると也、書言故事曰、羽化、讃其生羽翼飛昇爲仙也○【註】【天字】は、即天也、釋名、宇、羽也、如鳥羽翼自覆蔽也句解云、言氣象之大、如馮虛御風、獨立於物表以遺世俗、

於是飲酒樂甚、扣舷而歌之、歌曰〔謝云〕學騷文、

【於是―】與客酒を飲て歌ふ【註】【謝云―】屈原が離騷經の文法を學びたる處也、

桂櫂兮蘭槳〔楚辭九歌云〕桂櫂兮蘭槳　擊空明兮泝流光〔謝云〕秋水清見底、月在水中、謂之空明、月光與波倶動、謂之流光、搖槳曰擊、逆水而上曰泝、

【桂櫂―】韻會、前推曰槳、後曳曰櫂、縱曰櫓、横曰槳、字彙、櫂、進船檝也、在傍撥水、短曰檝、長曰櫂、案ずるに、韻會の註なれば、櫂はかぢ、槳はろかいと見へたり、然れば槳をさほとも訓ずべき歟、字彙の說なれば、櫂はながきろなるへし、句解云、以桂木爲櫂、以蘭草爲槳、取其香、只今東坡が乘たる船は、櫂を桂にて作り、槳をも木蘭などの香き木にて作りたる也【註】楚辭―【楚辭】は、屈原が文を集たり、屈原楚人なる故に、其書を楚辭と名く、其中に九歌と云篇あり、擊空―【註】謝云【秋水―】水清して月水底に見ゆるを、空明と云、月影波に寫りて、月光動き流るゝが如くなるを、流光と云【泝】は、波にさかふて舟を行るを云也、

渺渺兮予懷、望美人兮天一方〔楚詞云〕望美人兮南浦

渺―【渺渺】は、遙なるを云也【美人】とは、朝廷にある賢人君子を云也【天一方】とは、朝廷也、東坡今謫處より、朝廷にある賢人君子を、遙かに思ひ出す也、賢人

に月出皎兮とあるは、先月の事を云たれども、美人の顏色の白きにたとへて云也、舒窈糾兮とあるは、姿の徐かに、みやびやかなる事を云也【坡老―】本文に明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふとあるは、詩經の月出の詩の事也【窈窕】朱子集註幽閑之意、東坡此詩を借用て、此處へ賦し入たり【亦譏―】當時在位の人、善を好まぬ事を譏れり、亦の字を、立の字に書たる本あり、惡き也、

少焉月出於東山之上、（前言清風、此言月出、一篇張本在此）徘徊於斗牛之間、

【少焉―】十六夜なる故に、暮より暫く有て月東より出る也、坡老が十六夜月の詩に、月與佳人本有期、掛簷低戸映蛾眉、亦從昨夜十分滿、漸覺氷輪出海遲註【前言―】此已前には、淸風徐來と云、此には月出ことを云、此賦の本は、此處也、左傳隱公五年、杜預註、張本、書言故事、預爲後地曰張本【徘徊】字彙不進之貌【斗】は、北斗の星也【牛】は、牽牛星也、牽牛星は東にあり、月出て二星の間にやすらを也、

白露横江、水光接天、

【白露―】月に照されて、露なども江に横りて、一はい有やう也、水も天上とひた〳〵と續交りたるやう也、

縱一葦之所如、凌萬頃之茫然、

【縱一―】詩經河廣篇、誰謂河廣、一葦杭之註、葦蒹葭之屬、杭、度也、此詩より、船の事を一葦と云也、疊山註、一葦、小舟也、船の行に任する也【凌萬―】凌は、陵と通用する歟、陵は、侵也、しのぐと訓す【頃】韻會田百畝也【茫然】は、廣大貌、水波の窮りなく、何くとも知れぬ所を、陵き行也、

浩浩乎如馮虛御風而不知其所止、飄飄乎如遺世獨立、羽化而登僊、（謝云、嘗中秋夜、泛舟大江、月色水光、與天宇合而爲潔、始知此賦之妙、）

【浩浩―】書、浩浩洪水、韻會、浩浩は、廣大なる貌【馮】

十七）蘇子瞻は、仁宗景祐三年丙子十二月十九日卯時、蜀の眉山縣にて生る、

壬戌之秋、宋元豐四年　七月既望蘇子與客泛舟、遊於赤壁之下、

壬戌之秋【註】【宋―】今案ずるに、東坡赤壁に遊し事は、神宗元豐五年の秋也、此註に元豐四年とあるは誤也【七月既望】書召誥、惟二月既望、註、十六日也、周禮卿士註、月大十六日望、月小十五日望、望とは、十五夜を云也、既は、つくると讀、十六夜を既望と云、望盡る故に云也、色色說あれども、此義宜也【蘇子―】客は、楊世昌と云者也、二人舟に乘り、赤壁に遊ぶ也、漁隱後集二十六、東坡云、元豐五年十二月十九日、東坡生日也、置酒赤壁磯下、踞高峯、俯鵲巢、酒酣、笛聲起於江上、客有郭古二生、頗知音、謂坡曰、笛聲有新意、非俗工也、使人問之、則進士李委、聞坡生日、作新曲曰鶴南飛、以獻呼之使前則青巾紫裘、腰笛而已、既奏新曲、又快作數弄、嘹然有穿雲裂石之聲、座客皆引滿醉倒、委袖出嘉紙一幅曰、吾然求於公、得一絕句足矣、坡笑而從之、詩云、山頭孤鶴向南飛、載我南遊到九疑、下界何人也吹笛、可憐時復犯龜茲、

清風徐來、水波不興、

【清風―】風も徐かに吹ほとに、水波も躁がぬ也、

擧酒屬客、音祝　誦明月之詩、歌窈窕之章、〔詩月出篇〕月出皎兮、佼人僚兮、舒窈糾兮、本刺好色、謂在位不好德而悅美色焉、章中、月出皎兮、喻美色之潔白、窈糾、其姿之舒也、佼人、則美人也、坡老借此而賦、亦譏在位之不好德爾、

【擧酒―】酒を飲て客に饗應也句解云、屬客者、擧酒與客相屬和、字彙、音祝、著也、付也、託也愚謂酒を取出ひて客に付て、進る也、屬和の義なれば、酬酢の心歟【註】【詩月―】詩經陳風に、月出の篇あり、【皎】は、しろしと讀又いさぎよし共、ほがらか共讀【狡人】は、美人也【僚】は、毛萇註曰、好貌、うつくしき貌也【舒】は、毛註、遲也、又安舒也、緩緩としづかなるを云【窈糾】毛註、其姿之舒也【謂―】位にある人の善德を不好して、美人を寵愛するを云也【章中―】月出の詩

爲疊山、爲人豪爽、以忠義自奮、寶祐中試經科、除教授、德祐初以江西招諭使知信州、遣將與元兵戰不利、乃變姓名入建寧山中、元初大臣屢薦、輙辭、有怨者逼以北行至元都、問謝太后攢所、及瀛國公所在、再拜慟哭、不食而死、妻李氏携二子在貴溪山中、後被執、亦自經死【此賦―】此赤壁賦は、莊子と屈原が作りし離騷經との文法を學ひて書たれども、一句も莊子離騷經に似たることなし【非超―】人に超たる才智、類ひなき智慧にてなくは、如此に書出すことなるまじき也、說文倫、輩也、廣韻、等也、比也又類也【瀟洒―】瀟洒とは、さび〴〵としていさぎよく、風流なる事也【神奇】は、不思議奇特なる也、此賦の體、風流なる妙處、塵を出、世俗を離れて、凡鄙なる事なき也【如乘―】此賦雲に乘、風に御て九天の上に立たるが如く、氣高き也【乘雲御風】は、列子に出たり【俯仰―】六合は、四方上下を云也、此眼より見れば、天地四方に、ふしあふきて見るに、何物にても知ぬ物なく、胸中にあり【茫茫】は、無知の貌、字彙、廣大貌、愚謂此にては、不分明貌歟、言は天に立て、上下四方を見廻すに、廣大無邊なる内に、何物か茫茫として、眼に遮る者有て、分明ならざるや【非惟―】東坡配處に居たれども、少も世間を恨むる事は、中中齒にも出さず、增て心には少もなき也、愚謂言は天地の間の物只口齒に掛て云に不足のみに非す、況や又心を經て思量するに足んや坡翁胸中廣大に氣象雄逸にして、文辭奇絕なる事を譽る也○靈臺丹府は心の異名也、莊子に出たり○僧德昌曰、此篇凡六截、自篇首至登僊第一截、叙赤壁今夜景象、自於是至一方第二截、述蘇子昌歌之樂、自客有至悲風第三截、因洞簫之聲以舒散於文章、自蘇子至羨乎第四截、論水與月而述理以寬、自且夫至共適第五截、指風月以爲所適、自客喜以下第六截、客更酌而喜也、

蘇子瞻

大明一統志、蘇軾、洵長子、弱冠博通經史、爲文渾涵光芒、雄視百世、擧制科、累官至翰林學士兵部尚書、初軾貶黃州、築室東坡、號東坡居士、卒謚文忠、軾器識閎偉議論卓犖、挺挺大節、群臣無出其右、所著有易書傳、論語說、東坡集、奏議內外制、數百卷、子三、邁、迨、過、俱善爲文、孫符、禮部尚書、（詳于宋史列傳九

曰、今治水軍八十萬衆、與將軍會獵於吳、權以示羣下、莫不失色、張昭請迎之、魯肅以爲不可、勸權召周瑜、瑜至曰、請得數萬精兵、進往夏口、保爲將軍破之、權拔刀斫前奏案曰、諸將吏敢言迎操者、與此案同、遂以瑜督三萬人、與劉併力逆操、進遇於赤壁、瑜部將黃蓋曰、操軍方進船艦、首尾相接、可燒而走也、乃取蒙衝鬪艦十艘、載燥荻枯柴、灌油其中、裹以帷幔、上建旌旗、豫備走舸、繫於其尾、先以書遺操、詐爲欲降、時東南風急、蓋以十艘最着前、中江擧帆、餘船以次俱進、操軍皆指言蓋降、句去二里餘、同時發火、火烈風猛、船往如箭、燒盡北船、烟焰漲天、人馬燒溺、死者甚多、瑜等率輕銳、靁鼓大進、北軍大壞、操走還、後屢加兵於權、不得志、操嘆息曰、生子當如孫仲謀、向者劉景升兒子、豚犬耳、【曹操】、とは、魏國の主也此曹操が時代に、天下魏吳蜀とて、三に分れし也、吳國の主をば、孫權と云、蜀國の主をば劉備と云、中にも魏國威勢ありて、二國を亡さんと思ひし也【宇宙】の字、をほぞらと讀、天下を呑こみたると云心也、上下四方を曰宇、往古來今を曰宙、【樓船―】樓船は、やぐらなど構へたる船也、赤壁に大なる江續きたり、楊子江

など云江も一つに續けり、兵船を江に浮へて、目の中に吳國を無き物に、曹操思ふ也、無すとは無物の樣に思ふ也【而周―】其時吳國より曹操を防きに、周瑜とて、年二十四になる者を大將として、黃蓋と云者を副大將に成て出せし也、裨將は、副將軍と云心也、顏師古曰、裨助也【一炬―】曹操と周瑜、互に軍を挑みしに、周瑜が方より、曹操へ降參せんと、僞りて文を遣り、油斷させて、燒艸を船十艘に積て、油を燒艸に灌き懸て、幕にて包みて、東南の風の急なるを見て、曹操が船へ流し掛たり【炬】字彙、束蘆燒之、たいまつ也、曹操さしもの人なれども、防べきやうなく、船を燒破れて敗北せし也、是まで赤壁の軍の事也【公謫―】公は、東坡也、神宗の時、元豐二年に、黃州へ流されし也、赤壁に遊ふことは、元豐五年也、此時東坡四十七歲也【黃岡】は、黃州のこと也【數】字彙、音朔、頻也、頻也屢也【忘意―】浮世の事を忘れて、江の波洶湧するを見て、慨然として古此所の軍の事周瑜か功を大ひ也として、此賦を作る也【洶湧】は、波の起を云也【慨然】は、感慨の心也、字彙、感慨、竭誠、貌、此にては周瑜が功を感じて嘆ずる也〔謝云〕謝枋得弋陽人、號

【童子—】童子も歐陽が長物語の內に睡眠したる也【但聞—】【唧唧】蟲の頻りに鳴聲也、童子は寐たり、誰も反答する者もなし、四壁に蟲の啼を聞けば、予が秋を哀しむを助音して、蟲の鳴如く也【四壁】は、家の四方の壁也、漢書司馬相如が傳より出たる字也、此書止面白き筆法也【註】【末段—】此に云、人の少年より老年にいたる事、艸木の春より秋に至りて變ずるが如し、凛乎—【凛乎】は、をそるゝ也、すさまじき也、誠に秋を哀しむ心、言の外に揭く顯はれたり、溢とは、水の餘りて、川岸より上へ越すことを云也、其如く感慨の意、能顯はれたる故に、溢とは書也、

○前赤壁賦

按【晁補之續離騷序云】赤壁前後賦者、蘇公之所作也曹操氣吞宇宙、樓船浮江、目中已無吳矣、而周瑜年少、黃蓋裨將、一炬以焚之、公謫黃岡、數遊赤壁下、忘意於世矣、觀江濤洶湧、慨然懷古、壯瑜功而賦之云【謝云】此賦學莊騷文法、無一句與莊騷相似、非超然之才、絕倫之識、不能爲也、瀟洒神奇、出塵絕俗、如乘雲御風、而立乎九霄之上、俯仰六合、何物茫茫、非惟不掛之齒牙、亦不足入其靈臺丹府也、

句解註、赤壁有二、周瑜困曹操、本在鄂州蒲圻縣、黃州亦有赤壁、但非周郎所戰之地、坡詞亦嘗托其言、曰人道是周郎赤壁、則心知其非矣、至於賦中有云、此非孟德之困於周郎者乎、抑亦疑之、蓋是時坡仙謫居黃州、爲赤壁之遊、以其名同、所以有感周郎曹操之戰、乃賦此寄興、樂與清風明月共適、其有意也夫、詳に後賦の後に見へたり赤壁と云所に遊し時、作りたる賦也、東坡二度赤壁に遊びし也是は初の時の賦也、二度めのは後赤壁賦とて、此次にあり故に前—と名く、東坡文集には、前の字なし、前の字は、後の人加へたるにて有べし、此岩赤き故に、赤壁と云也【註】按晁—【按】するにとは、註者の詞也【晁補之】は、東坡が弟子也、蘇門の四學士とて、東坡が門人に、四人好學者ありしが、其中の一人也、晁無咎とも云、屈原が作りし離騷經を學て作りし後世の文を、晁補之多く集めて、續離騷と名く、其中に此賦もあり、それに晁補之序を書り、其序を此註に引也【赤壁—】前赤壁後赤壁の賦也【蘇—】蘇公は、東坡也【曹操氣吞宇宙】建安十三年、秋七月曹操擊劉表、表卒、子琮擧荊州降、操劉備奔江陵、操追之、備走夏口、操進軍江陵、遂東下、亮謂備曰、請求救於孫將軍、亮見權說之、權大悅操遺權書

【而況―】君子思不出其位とて、善人は分際に過たることは思はぬ也、我力量智慧のあたはぬ處を思ふは、小人の爲也、我力にて成まじきことを思ひ、我智慧の能はぬ所を愁へば、精神動く事必定也、句解、艸木無情有變、難乎以有情而與無情爭榮衰、生於憂戚、不在秋聲、心與時推移而已、

宜其渥然丹者爲槁木、黟然黑者爲星星　黟、於脂反、

【宜其―】宜とは、げにもと云心也、詩簡兮篇に、赫如渥赭、又終南篇に、顏如渥丹、鄭氏註、渥丹、赤而澤也、渥は、あつしと讀、然の字は、付字にて心はなし、【渥然丹者】とは、顏色の事也、壯年の比は、顏色もうるはしく有しが、老年になれば、紅顏は變じて、枯木の如くなる也【槁木】は、枯木也【黟然―】【黟】は、黑也、黑き髮も、變して白くなる也、星は、白き者也故に【星星】となるとは云也、鬢黙星など、云て、髮の白くなるを、星に譬る事多し、

柰何非金石之質、欲與艸木而爭榮、

【柰何―】人間は、金石の如く强からぬ者也、朝は夕を知ぬ者也【質】は、すがた也【欲與―】人間の榮は、艸木の榮には及ばぬ也、槿花は朝に開て暮に落れども、それよりも幻なるは人間也、艸木と榮を爭ふ事も成まじき也、

念誰爲之戕賊、亦何恨乎穐聲　戕、音墻、

念誰―【戕賊】は、共にそこなふ也、能思へば、何者か人の年齢を賊なふぞ、皆是自然の理にて、少より老に至り、盛より衰に及ふ也、然るほどに、秋聲をも恨むまじき也、此段發明の處也、

童子莫對、垂頭而睡、但聞四壁蟲聲喞喞、如助予之歎息　末段謂人之憂感、

自少至老、猶物之受變、自春而秋、凜乎悲秋之意、溢於言表也、

始傷、被刑法也、此心は、夷は、やぶると云心也、則は、のりと云心也、萬物秋に成て敗るゝは、刑德を蒙る也、此故に七月を夷則と名く易に明夷と云卦あり、明夷と讀り、

商傷也、物既老而悲傷、夷戮也、物過盛而當殺、又説聲、

【商傷―】上にありし商聲の商は、やぶると云心也、萬物悉く老して、必ずかなしみやぶるゝ也、春生長せし艸木、秋に成て零落する也、人生又如此也【夷戮―】上にある夷則の夷は、戮の字の心にて、ころす也、物毎に盛り過ては、必ず衰ふ、夏木立の綠なるを、秋枯す也、

嗟夫、艸木無情、有時飄零、

嗟夫―【嗟】は、嘆ずる辭也、此段前に云立しことを決して、後を生ず、艸木は非情の物なれども、秋の時分に、葉翻り落る也、

人爲動物、歸之於人惟物之靈【書】人爲萬物之靈、

【人爲―】艸木は非情也、人は有情で、うごきはたらく者也註【歸―】前には秋聲の事に付て、艸木の上を云ひ、此段にて人身の上を云こと也、秋聲賦とありし處の註に末に人生の事を云とありしは、此事也、惟物―註【書人―】是は書經泰誓の篇の語也、蔡氏註曰、萬物之生、惟人得其秀而靈、具四端、備萬善、知覺獨異於物、云云人は萬物の中にての首ら也、靈とて、しかも奇特なる智慧の有る者は人也、

百憂感其心、萬事勞其形、

【百憂―】憂多き時は、必心を感ずる也、業多き時は、形を勞する也、人生は、憂も業も多き者也、

有動乎中、必搖其情、

【有動―】心内に物感ずれば、情意善惡に付て、動き易き者也、

而況思其力之所不及、憂其智之所不能、

仁義を物の貌にとれば、仁は圓き者也、義は四角なる者也、方とは、四角なるを云也、四角なる物は、かどらしき故に、義に譬る也【故秋爲矩】春を規に取り、秋を矩に取る也、規矩は、所以成方圓とて、規は、物を圓かにするぶんまはしにて、春氣の悠悠たるに喩ふ、矩は、物を四角にする常規也、秋氣の厲まじきに喩ふ、故前の段にある如くに、秋は刑罰を行ひ、兵を習はす處、皆是矩の道也【常以—】秋の景氣は、物冷まじく烈き者にて、艸木も變ずる也、是を肅殺と云也【肅】は、つゝしむと讀め共、をそるゝ心也、又をどすとも讀、愚謂はげしとも可讀、月令、季春行冬令、艸木皆肅、註謂枝葉縮栗、疏正義曰案詩、九月肅霜、縮也、霜降而收縮萬物肅、謂嚴肅、故曰肅縮栗、言枝葉減縮而急栗【殺】は、ころすとも、からすとも讀也【註】【鄕飮—氣也】鄕飮酒義は、禮記の篇の名也、

天之於物、春生秋實　又說秋

【天之—】米穀艸木までも、春は生長して、秋は菓實がなる物也、本集には、大哉天之於物とあり【註】【又說秋】此段に又くりかへして、秋のことを說也、

故其在樂也、商聲主西方之音、夷則爲七月之律【月令、孟秋之月、律中夷則、秋曰素商、應西方金行之氣】

【故其—】宮商角徵羽とて五音あり、此五音脣舌牙齒喉の五より出也、方角にとる時、商聲は、西方の聲にて金也、齒にて云聲也、樂にて云へば、商聲は、秋の樂也、故商の字を秋と讀【夷則—】【律】は、十二律也、今日本にある十二律とは各別也、十二律は、竹を管の如くに切てする物也、十二にするは、十二月に配合する故也、月月の律管に長短あり、夷則の律管は、五寸六分あり、是七月の律管也、爾雅律謂之分、郭璞註云、律管可以分氣者也、陽爲律、陰爲呂、正月大簇、二月夾鍾、三月沽洗、四月中呂、五月蕤賓、六月林鍾、七月夷則、八月南呂、九月無射、十月應鍾、十一月黃鍾、十二月大呂、【註】【月令—】【月令】は、禮記の篇の名也【孟秋】は、七月也、七月の律管を【夷則】と云也、故に七月の異名を夷則と云也、夷則とは、何とて云ぞとならば、白虎通曰、七月謂之夷則何、夷、傷、則、法也、言萬物

（大司馬と云）秋官（司寇と云）冬官（司空と云）【秋官】は、司寇とて、國の法度を行ひ、惡人を罰する官也、故本文に【刑官】と書也、日本の刑部に當る、周禮、大司寇之職、掌建邦之三典以佐王刑邦國詰四方【於時―】十二月を陰陽に表する時、秋は陰也註前律―【前】は、前漢書也、前漢書の內に、律歷志とてあり【陰氣―】陰氣になれば、萬物零落する也、時節に取れば秋也、於時爲陰此本語より書出す也、

又兵象也〔夏官〕大司馬中秋教治兵　於行爲金〔唐樂章〕金行在節、

【又兵―】秋は殺氣とて、草木も葉の落る時分也【兵】は、矢刄也、物を生育するは春、物を枯すは秋也、兵は物を傷ふ道理あり、故に兵に象ると云心也、堯舜の代には、刑罰を主る者も、兵を主る者も、一官にして、舜の臣皐陶か主りし也、周の代より、刑官兵官分れたり、註【夏官】是は周禮の語也、六官の中、夏官は、大司馬とて、兵を司る官也、【治兵】とは、敵陣に赴く時の備などの立やう、軍法など也、唐には四季に狩をする也、狩をするは、兵を習はしめん料也、治にも亂を不忘の心也、其狩に行時は、軍陣に行時の如くに備を設る也、秋は兵に象とる、故に中秋に、大司馬の官、治兵を教る也、秋は兵の象也と云證據に、是を出す也、周禮疏曰、凡兵出曰治兵、入曰振旅、春以入兵爲名、尙農事、秋以出兵爲名、秋嚴尙威故也【於行―】【行】は、五行也、五行は、木火土金水也、五行を四季に配合すれば、金は秋也註【唐樂―】唐の太宗の代に、音樂の事を書たる書を、樂章と云也、秋は金行の時節也、一說【在節】とは、音律の節度を正す也、金行の行も、五行の行也、

是謂天地之義氣〔律歷志〕義者成、成者方、故秋爲矩也　常以肅殺而爲心〔鄕飮酒義云〕天地肅殺、此天地之義氣也、

【是謂―】義如秋霜、仁如春日とて、義は、はげしき者也、仁は、やはらかなる者也、秋を義に取り、春を仁に取也、草木も秋は黃落して、物冷じき也、是天地の義氣也、故春行恩賞、秋行刑罰也註【律歷―】義は成と云心也、喻ば、春生じて、秋實る心也【成者方】とは、

也、蕭瑟兮、艸木搖落而變衰、

故其爲聲也、淒淒切切、呼號奮發、

【故其―】風雨のすさまじきを【淒淒】と云【切切】は、しきりちる也、愚謂急迫の貌、はげしき意也【呼號】は、さけぶ也【奮發】は、ふるひをこす也、秋聲すさまじくしきりにして、人のさけふ如くふるひをこす也、古解云、萬籟呼號、其聲奮發一段能分明に覺ふ、

豐艸綠縟而爭茂、佳木葱蘢而可悅、

豐艸―【豐艸】は、ゆたかに生長したる艸也【綠縟】は、みどりにこまやかなる也、說文、縟、繁采也【爭茂】は、艸のみどりの紛れ合て、幾村も榮へたるを云也、【佳木―佳木】は、見事なる木也【葱蘢】は、木の繁りたる貌也、艸木の榮へたるは、目を悅しめ、心を慰べき者也、

艸拂之而色變、木遭之而葉脫、

【艸拂―】とは、秋也、千萬の艸色木葉も、秋になれば、紅葉黄落する也、

其所以摧敗零落者、乃一氣之餘烈、(此說聲)

其所―【摧敗】は、くだけやぶるゝ也【零】は、艸葉の落る也【落】は、木葉の落る也、さりながら零落と云へば、木葉の落ることにも用也、乃【一―】【一氣】は、秋氣也、秋氣はげしさのあまり如此也、

夫秋刑官也、(周禮秋官、司寇專掌邦國之刑)於時爲陰、(前律歷志、陰氣遷落物、於時爲秋)

【夫秋―也】【夫】とは、發端の詞也、是より繰廻して、又秋を立る也〇註【周禮――周禮】とは、周公旦の作り給ふ書也、周の代の禮に、六の官を立られたり、天官(家宰と云)地官(大司徒と云)春官(宗伯と云)夏官

樹間」と云まで、四字一句にて、四句也、秋聲をあり〳〵と書たる事妙也、陳簡齋晩秋詩、莫レ教ニ西風吹一レ葉盡、卻悲無レ處著ニ秋聲一、

予曰、噫嘻悲哉、此秋聲也、胡爲乎來哉、

【予曰―】歐陽童子の返答を聞て、嘆息する也【胡爲―】此秋聲は、待もせぬに、何として來るぞと也、感ある詞也、哀公魯國の大野に狩をせらるゝ時、叔孫子が車を主る鉏商と云者、麟を得たり、脛をかた〳〵打折たり、常になき獸なる故に、誰も見知ず、孔子に見せたり、孔子是を見給ひて、胡爲乎來哉とて、袂を返し、泪を拭ひ給ふ、是より春秋を書し給ふ、委史記に見へたり、此詞を取て、歐陽書たる也、

蓋夫秋之爲レ狀也、其色慘淡、煙霏雲斂、其容清明、天高日晶、

蓋夫―【蓋】とは、疑ひの詞也【夫】とは、云起したる詞也【其色―】其色は、秋の色也【慘】は、いたむと讀、秋の色は、物ごとに痛ましき者也【淡】は、あはしと讀、秋の色は、春色などの如くならであはき者也、故慘淡と云、此處秋色の體を能書したり、讀者感あるべし【其容―】此には秋の容を云【清明】は、きよくあきらかなる也、雲霧晴れば、秋は一入天も高きやう也、秋陽とて、秋の日は、殊更明かにて、濕へる物をも、能乾す也、故日晶と書り、

其氣慄冽、砭ニ人肌骨一　以レ石刺レ病曰レ砭　其意蕭條、山川寂寥、

【其氣―】秋の氣を云也【慄】は、をそるゝ也【冽】は、水の清潔にして、はげしき事也、韻會、慄、通作レ栗、冽、通作レ烈、栗烈、寒氣之嚴凝也【砭人―】とは【砭】は、いしはりと讀也、上古には、鍼石の法とて、石にて針を作て、病を刺て治する事あり【肌骨】は、はだへほね也、秋氣の身にしみて烈きこと、人の肌骨に砭するが如しと也【其意―】秋の意也【蕭條】は、すさましき也【寂寥】は、さびしき也、宋玉九辨云、悲哉秋之爲レ氣

如し、此には秋の聲を、波濤風雨に象りて書出す也、韻會、【驟】鉏救切馬行疾也、又不馳而小疾曰驟、波濤の句は忽奔騰と云に應じ、風雨の句は、初淅瀝と云に應ず、

其觸於物也、鏦鏦錚錚、金鐵皆鳴、（鏦、音窻、又七容切、錚、音琤）

其觸―【觸】字彙、觝也、突也、犯也、牛の角にて突を云此所は、あたりさはる意、秋の聲の萬物に觸當る也【鏦―】鏦鏦は、刀及などの鳴音也、錚錚は、一切の金物の鳴音也【金鐵―】金と云へば、一切の金物の總名也、鐵は、くろがね也、鏦鏦錚錚とあるより、金鐵と書り、五行の内に、金は、秋の氣也、秋風を金風と云も、此故也、

又如赴敵之兵、銜枚疾走、（枚、如箸、軍士銜之）禁其語不聞號令、但聞人馬之行聲、

【又如―】漢書田儋傳註、師古曰、枚、狀如箸、橫銜之、繣絜於項、繣、結礙也、絜、繞也、禮記、下、皆銜枚、註疏云、止諠囂也、【枚】とは、箸の如くに造へて、士卒の口に銜まする者也、是は士卒の鳴を靖めんため也、物を云へば、一言づゝなれども、諸人の口なる故に、喧しき也、そのために枚を口に銜せて、物を云せぬやうにする也、夜打の時などに用之【不聞―】號令とは、大將の下知法度也【人馬の行聲】とは、秋聲の體也、大將の下知する聲は聞へずして、只人馬の行聲を聞やうなると也、

予謂童子、此何聲也、汝出視之、

【予謂―】歐陽侍側の童子に語る也、此聲は何の聲ぞ、立出て見よと云也、

童子曰、星月皎潔、明河在天、四無人聲、聲在樹間、（四句形容秋聲最妙、）

【童子―】童子歐陽への反答也、出て見れば、星月もしろくいさぎよくして、銀漢も在天、四方に人聲もなし、能聞けば、聲は樹木の間也、星月皎潔より、聲在

皆江西人、老蘇所謂執事之文、非孟子之文而歐陽之文也、朱文公謂江西文章、如歐陽永叔、王介甫、曾子固做得如此好、亦知其皜皜不可尚已、至於詩則山谷倡之自爲一家、並不踏古人町畦、象山云、豫章之詩、苞含欲無外、搜抉欲無秘、體製通古今、思致極幽眇、貫穿馳騁、工夫精到、雖未極古之源委、而其植立不凡、斯亦宇宙之奇詭也、開闢以來、能自表見於世、若此者、如優鉢曇華時一現耳、楊東山嘗謂余云、丈夫自有衝天志、莫向如來行處行、豈惟制行、作文惟然、如歐公之文、山谷之詩、所謂不向如來行處行者也、

歐陽子方夜讀書、

【歐陽子―】歐陽は、氏也、子は、男子の通稱とて、男をば推並て、子の字を付て云也、孔子孟子など云が如し、夜學に讀書する也、句解曰、夜靜則秋聲愈淒肅、故曰夜讀

聞有聲自西南來者、

【聞有――者】讀書するとて聞けば、何とも辨へず、聲の西南より聞へ來る也、東西南北を四季に取る時、東北は春冬、西南は秋夏也、秋は西方より來る者也南は夏也夏より秋に移る故に、西南とは云也、伊川易傳に、東北は陽方、西南は陰方、必讀古文註云、天地嚴凝之氣、盛於西南、故秋聲自此而來、

悚然而聽之曰、異哉、

悚然―【悚】說文、懼也、歐陽恐て此聲を聽て、奇異にあやしみ思ふ也、

初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃、

砰、普耕反　湃、普湃反

如波濤夜驚、風雨驟至、狀秋聲

【初淅瀝―】韻會【淅瀝】雨聲【蕭颯】風貌、屈原九歌、風颯颯兮木蕭蕭【奔騰】は、わしりのぼる也【砰磅】は、聲也【滂湃】は、水の聲、列子曰、砰然聞之如雷、韓文、詩韻豎𡾰咏砰、註、水聲石貌、初は雨のはら／＼と降音して、又風のすごく吹音なるが、忽ちに此彼へ奔り行く如くにて、又波の岩に當りたる如くなる聲ある也

【如波―】波などの夜暴く成り、風雨などの俄に至が

可履、三十九坐孤甥張氏置產事、出知滁州、四十二知揚州、四十三移潁州、樂西湖之勝、將卜焉、四十四知應天州、四十六丁母憂、歸潁州、明年歸葬母吉州、冬復還居潁、四十八爲翰林學士、明年上書論宰相陳執中、出使契丹、五十一知貢舉、五十二知開封府、五十三充御試詳定官、五十四拜樞密副使、明年參知政事、五十七輔英宗卽位、年六十爭濮議、明年去國、六十二知青州、始令長子發築室於潁、六十四乞知壽州、更號六一居士、明年致仕、年六十六薨、唐文三變、至韓文公、方能盡掃八代之衰、追配六經之作、嗚呼亦難哉、文公沒未幾、俳語之習、已復如舊云、翰墨全書曰、歐陽脩、字永叔、初從尹師魯遊、迭相師友文章名冠天下、蘇內翰序公之文曰、韓愈之後、三百餘年而後得歐陽子出、撰五代史記、法嚴辭約、取春秋遺意、漁隱後集曰、六一居士傳云、居士初謫滁州、自號醉翁、既老而衰且病將退休於潁水之上、則又更號六一居士、客有問曰六一、何謂也、居士曰、吾家藏書一萬卷、集錄三代以來金石遺文一千卷、有琴一張、有碁一局、而常置酒一壺、客曰、是爲五一爾、奈何、居士曰以吾一翁、老於此五物之間、是豈不爲六一乎、客笑曰、子欲逃名乎、

而屢易其號、此莊生所謂畏影而走乎日中者也、余將見子疾走大喘渴死、而名不得逃也、居士曰、吾固知名之不可逃、然亦知大不必逃也吾爲此名聊以志吾之樂爾、詩法源流曰、歐公秋聲、坡公赤壁等賦、已極變化、而起承轉合、截然不亂、後山詩話云、世語云、蘇明允不能詩、歐陽永叔不能賦、曾子固短於韻語、黃魯直短於散語、西淸詩話云、歐公守滁陽、築醒心醉翁兩亭於琅琊幽谷、且命幕客謝某者、雜植花卉其間、謝以狀問名品、公卽書紙尾云、淺深紅白宜相間、先後仍須次第栽、我欲四時攜酒去、莫敎一日不花開、其淸放如此、冷齋夜話云、意趣所至、多見於嗜好、歐公喜士爲天下第一、常好誦孔北海坐上客常滿、樽中酒不空、范文正淸正嚴而喜論兵、常好誦韋蘇州詩、兵衞森畫戟、燕寢凝淸香、東坡友愛子由、而味着淸境、每誦何時風雨夜、復此對床眠、山谷寄傲士林、而意趣不忘江湖、其作詩曰、九陌黃塵烏帽底、五湖春水白鷗前、又曰、夢作白鷗去、江湖水粘天、又作演雅詩云、江湖野水碧於天、中有白鷗閑似我、鶴林玉露云云、江西自歐陽子以古文起於廬陵、遂爲一代冠冕、后來者莫能與之抗、其次莫如曾子固王介甫、皆出歐門、亦

又其後の人哀しがる也、其哀む人かなしがる許りにて、其を惡き手本にせずは、又其後の人に哀しかられふぞと也、此句は、國を治むる者の手本になる事を含ﾃ書也能能讀べき篇也と註にあり、此末一段の句法、莊子より承て書也、莊子曰、徐無鬼云、嗟乎我悲ﾑ人之自喪者ﾌﾁ、吾又悲ﾑ夫悲ﾑ人者ﾁ、吾又悲ﾑ夫悲ﾑ人之悲ﾑ者ﾁ、

○秋聲賦

此篇最善形ﾆ容物象ﾆ、鋪叙模寫、變態不ﾚ窮、末歸ﾆ於人生愛感ﾆ、與ﾚ時俱變ﾆ、使ﾆ人讀ﾚ之、有ﾆ悲ﾚ秋之意ﾆ、

秋聲賦、秋の景氣を賦したる也【註】【此篇】とは、則秋聲賦也【形容物象】とは、秋の景物之貌を、ありくと能顯したると也【鋪叙】の二字、しきのふると讀【模寫】は、二字共にうつすと讀、此賦能義理をしきのべ、秋の景をうつしたると也【變態―】此一賦の內、秋の容を云ひ、秋の氣を云、秋聲を波濤風雨に喩へ、轉變窮りなき也、變は、かはると讀、態は、すがたと讀、變する態不ﾚ窮也、司馬相如子虛賦曰、殫ﾆ覩衆物之變態ﾆ【末歸―】末段には、人身の少年より、老年に至るも、萬物の秋に遇が如くなるに比して云事あり、猶末段に委し【使人―】此賦を讀めば、秋の悲意、自然にある也、

萬里居士曰、此篇七段、自ﾚ始至ﾆ行聲ﾆ第一段、自ﾆ予謂ﾆ至ﾆ來哉ﾆ第二段、自ﾆ蓋夫ﾆ至ﾆ餘烈ﾆ第三段、自ﾆ夫秋ﾆ至ﾆ當ﾚ殺第四段、自ﾆ嗟夫ﾆ至ﾆ飄零ﾆ第五段、自ﾆ人爲ﾆ至ﾆ秋聲ﾆ第六段、自ﾆ童子ﾆ至ﾚ末第七段、

歐陽永叔

太明一統志、江西吉安府、載ﾆ歐陽脩ﾆ、覯子、四歲而孤ﾅﾘ、母鄭氏守節敎ﾆ育之ﾆ、擧ﾆ進士甲科ﾆ、仁宗時爲ﾆ諫官ﾆ、論ﾚ事切直、韓琦范仲淹相繼罷去、脩上疏極諫、出知ﾆ滁州ﾆ、還爲ﾆ翰林學士ﾆ、拜ﾆ參知政事ﾆ、盡ﾚ心匡弼、與ﾆ韓琦ﾆ策ﾆ立英宗ﾆ、熙寧初以ﾆ太子少師ﾆ致ﾚ仕、自號ﾆ六一居士ﾆ、卒贈ﾆ究國公ﾆ、謚ﾆ文忠ﾆ、脩多ﾚ所ﾆ著述ﾆ、撰ﾆ唐書五代史ﾆ、文章名ﾆ冠天下ﾆ、與ﾆ唐韓愈ﾆ幷稱云、歐陽公年譜、公、吉州永豐人、綿州推官觀之子、四歲而孤、年十歲借ﾆ書季氏ﾆ、得ﾆ昌黎文於故書中ﾆ、乞得ﾚ之、力學焉、二十歲自ﾆ隨州ﾆ薦ﾆ名禮部ﾆ、二十四歲當ﾆ天聖八年ﾆ、以ﾆ再薦ﾆ魁ﾆ禮部ﾆ、年三十歲責ﾆ司諫高若訥不ﾚ救ﾆ范文正ﾆ、坐貶ﾆ夷陵ﾆ、年三十四掌ﾆ書記ﾆ不ﾚ就、三十七知ﾆ諫院ﾆ三十八使ﾆ河東ﾆ、回言ﾆ麟州不ﾆ

國王の一族を、殘さず殺すを、族と云、秦の子孫をも殘さず天下から亡したれども、秦の奢甚しき故に滅されたほどに、秦が秦を亡した者也、天下から亡したでは無ぞと也、

嗟夫、使六國各愛其人、則足以拒秦、

【嗟夫—】嘆しひ事哉と嘆息して曰、六箇國王、各其國の人を能懐けて置たらば、秦の兵を防ぐ事易かるべき者をと也、句解云、況使六國之君、各愛其所治之人、則人人心既歸而可以拒秦之彊兵矣、

秦復愛六國之人、使秦既併六國之地、又復兼愛六國之人則遞三世可至萬世而爲君、誰得而族滅也、

【秦復—】秦より六國を平てから、其六國の人を懐けたらば、始皇二世三世まで續くのみならず、其より萬世までも、國を治めらるべきに、誰あつてか亡さんぞと也、此三世より遞にして云句は、秦始皇本記曰、朕聞太古有號毋謚、中古有號、死而以行爲謚、如此則子議父、臣議君也、甚無謂、朕弗取焉、自今已來、除謚法、朕爲始皇帝、後世以計數、二世三世、至于萬世、傳之無窮、始皇古之聖人の道を推除て、我を始にして、二世三世より、千萬世まて、國を保たんと云はれたから書也、古への五帝三皇を合て、皇帝と號して、我を始めにせよと云事に依て、始皇帝と名け、我子を二世と云ひ、孫を三世と云、其より續きて、萬世に至らんと云へる也、如此ありつれども、二世にて果たる也、牧が言は、始皇若六國の人を愛して、政を善せましかば、其云れし如くに、二世三世より、互に傳へて、萬世に至り、誰か秦を滅さんやと云也、

秦人不暇自哀、而後人哀之、後人哀之而不鑑之、亦使後人而復哀後人也、此一句、大含規戒、一賦之中、其意思悠長、蓋無終窮、其可永歌者矣、

【秦人—】秦の人自哀べき間もなき内に亡びたれば、

分之、【戍卒】とは、境目などを守る者を云也、【戍卒叫】とは、陳勝ー云者、二世胡亥の時に、閭左の者どもを連て、番に往とて、雨に阻られて遅く行也、さて法度嚴しき故に、今行ならは、日限違ふほどに、とても法度に逢べきとて、道にて諸卒と談合して、とても死すべきに、謀叛を巧まんとて、一揆を起す也、其巧みやうは、先大楚起らん、陳勝王たらんと云事を書て、魚の腹に入て賣するに、此魚を買て、腹を開れば、あそこにもあり、こゝにもあるほどに、天下の者不審をする也、又は古き塚の中に、人を隠し置て、夜祠の中に火を燃して、狐の鳴眞似をして、右の如く呼はらせなんどする也、あげくに天下の動亂を起す也、詳に史記漢書の陳渉傳に見へたり、【函谷擧】史記正義曰、函谷關、在陝州桃林縣西南十三里、【擧】韻會、拔也、漢高祖謀叛を起して、函谷は天下第一の要害にて、秦の固にて、容易破難き關なれども、高祖の責入時に、手間も不入打通て、咸陽へ入らるゝ也、是を擧すと云【義兵】は、不義を誅罰する軍也、

楚人一炬、項羽燒秦宮室以一炬之火可憐焦土、

【楚人ー】高祖咸陽に入て、秦の民を懐けられしに、後に項羽來て、咸陽を燒也、項羽は、楚國人也、咸陽宮を炬松一つにて滅されしは、哀れなる事也、杜牧詩、子羽一炬火驪山三月紅と作るは、此事也、驪宮は三月まて燒止なんたと也、又蕭澥が詩に云、築了連雲萬里城、春風管絃醉中聽、凄凉六籍寒灰裏、宿得咸陽火一星、戍卒より是まで、發端の句法に書也、

嗚呼、滅六國者、六國也、非秦也、族秦者秦也非天下也、此截極言秦以奢侈自取敗亡之禍、

【嗚呼ー】燕趙韓魏齊楚此六國をば、秦から亡したれども、其王各政をさへ善したらば、秦には亡さるまじきに、無道なる故に、亡されたほどに、秦が破りたではなし、我と自ら亡びた者ぞと也、是より先政の善内には、七雄互に戰ひたること多くあれども、取れなんだと云事がある也【族秦ー】漢書高祖紀、誹謗者族、師古曰、族、謂誅及其族也、族するは、國を亡して、其

いなつぶとも訓す【瓦縫—】屋の葺たる瓦の合目の、參差とかたゝがひに囓違ふたるは、人の一身に著たる帛の縷の數よりも多しと也、毛詩、參差荇菜、註云、參差、不齊貌、左傳序曰、聖人包周身之防、

直欄橫檻多於九土之城郭、管絃嘔啞多於市人之言語、

【直欄—】欄干のたてよこにあるは、九州の城郭よりも、秦の宮が多き也、九州は、冀兗青徐豫荊揚梁雍也、【管絃—】簫笛を吹、琴琵琶を彈て歌ふ聲は、市に何程ともなく人聲の有んに、それよりも喧しく多しと也、古文前集、琵琶行註、嘔、音歐、啞、音瘂、言其聲韻粗俗也、此にては、只歌ふ聲を云、

使天下之人不敢言而敢怒、

【使天—】句解云、　秦楚誹謗人不敢言其過但生怨怒心爾、如此奢れども、天下に惡ひと云者、一人も無と之也、是は政の酷に恐て也、

獨夫之心日益驕固、

【獨夫—】尙書泰誓下篇曰、獨夫受、洪惟作威、乃女世讎、註、言獨夫失君道也、始皇に誰も諫言する者無ほどに、日日に驕長ずる也、獨夫とは、殷紂を云より始て、政の惡き王を云、天下を持て居れども、人の心が一人も思付かぬ故ひとりあるをとこと同意なるとて云也、天下の人に疎まれて、獨り身となる義也、

戍卒叫、（陳勝乃戍卒耳遂呼而人響應）函谷擧（漢王擧義兵入函谷關）

【戍卒—】史記、秦二世元年七月、戍卒陳勝等反故荊地爲張楚、勝自立爲楚王、居陳、遣諸將徇地、山東郡縣少年、苦秦吏、皆殺其守尉令丞、反以應陳涉、相立爲侯王、合從西鄉、名爲伐秦、不可勝數也、武臣自立爲趙王、魏咎爲魏王、田儋爲齊王、沛公起沛、項梁擧兵會稽郡、沛公將數萬人、已居武關、三年趙高殺二世、立子嬰、子嬰三族高家、以徇咸陽、子嬰爲秦王、四十六日、楚將沛公破秦軍、入武關、遂至霸上、使人約降子嬰、子嬰卽係頸以組、白馬素車、奉天子璽符、降軹道旁、沛公遂入咸陽、封宮室府庫、還軍霸上、居月餘、諸侯兵至、項籍爲從長、殺子嬰及秦諸公子宗族、遂屠咸陽、燒其宮室、虜其子女、收其珍寶貨財、諸侯共

棄打捨て有こと、廣く連り續く義歟、鼎玉金珠を指く云、如此の寶を捨て置に秦の宮人は、何とも思はぬと也、此三句に奢を書也、

嗟乎、上文既叙其奢侈矣、此郤歎息而言其弊、一人之心、千萬人之心也、秦愛紛奢、人亦念其家、

【嗟乎】とは、上の文に出たる奢の事を、一つに收之歎ひて書る詞也是より下の文に、秦の費へを云也【叙】は、ついて述る也【弊】は、惡く成もて來て敗るを云【一人—】荀子曰、千萬人之情、一人之情也、我か心の如く、人も同し心なれば、始皇の驕を、近習が見習ひ、公卿士太夫まで移り、其より百姓萬民も、分々に我身の榮華をする程に、度世したく思ふ也、

柰何取之盡錙銖、用之如泥沙、

【柰何—】民を貪て取事は、一分一毛のことまで逼迫て、使ふことをば、どろいさごの如くにするぞと也、是より下に、物を使ふことは泥沙の如くする證據を書也、孟康曰、黃鍾一籥、容千二百黍、爲十二銖、說文、銖、權十分黍之重也、一曰、十黍爲絫、十絫爲銖、又八銖爲錙、二十四銖爲兩、說文又曰、錙、六銖也、一曰、八兩爲錙、

使負棟之柱、多於南畝之農夫、架梁之椽、多於機上之工女、

【使負棟—】宮殿共の棟を負たる柱は、耕作の時、田面に集りたる農民より多しと云は、數の無限に喩る也、梁に度しかまへたる椽は、幾機も列なり並び、布帛を織出す織手の女よりも多しと也、

釘頭磷磷、多於在庾之粟粒、瓦縫參差、多於周身之帛縷、

【釘頭—】毛詩、白石磷磷、註曰、磷磷、水淸石見貌、此にては光り耀く義也【庾】韻會、倉無屋者、釘の頭の數は、在藏粟の數よりも多き也【粒】は、つぶと讀り、

られぬ者ありしと也、是宮女の多き故也、上陽人が、十六歳にて參內して、六十に成まで、玄宗へまみへざるが如し、按ずるに、始皇卽位乙卯元年より、崩する年辛卯までは、凡て三十七年、今三十六年と云は崩する年を除く歟、不詳、

燕趙之收藏、韓魏之經營、齊楚之精英、燕趙韓魏齊楚六國之美人、其收藏經營皆精英者、

【燕趙―英】秦より取れたる六箇國の美人どもを、取集められたるを云也【收藏】は、燕と趙とにて、收め藏し置たる美女共也【經營】は、詩經靈臺篇に出たり、それは造作の義也、是は韓と魏とにて、尋求たる美人共也【精英】は、齊楚の間にて、勝れたる美婦也、

幾世幾年、取掠其人、倚疊如山、一旦有不能輸來其間、〔晦菴云〕當作不能有、謂幾世所積而有、若云取足於一旦、則不能一朝一夕、便可輸納遺來於此宮之間者、

幾世―【掠】は、奪也、かすむと訓ず【倚疊】は、積重ぬる也【輸】は、運也、いたすと訓す、此美人ともは、幾年も係りて、取集められたが、山の如くに積み重ねてあるが、中〱一度には此宮中へ是程連て來る事は、成まひ事ぞと也、愚案ずるに、杜牧之か有不能―と書は、左様には成まひと疑ふ心あり、朱文公の不能有と、改め見られしは、必定成らぬと云心也、明星熒熒開妝鏡也と云より、是まて宮女の多きを云、

鼎鐺玉石、金塊珠礫、視寶鼎若鐺然、視美玉若石然、棄擲邐迤、秦人視之言秦人視金如土塊視珠如瓦礫亦甚不惜、此截極言宮人之奢侈、

【鼎鐺―】鼎の義は、弔屈原賦にあり、鼎は寶物なるに、鍋などの如くに思ひ、玉も石を見る如くに思ふ也、玉は、山より出るたま也【金塊―】金は人の重寶なるに、秦の宮中の人は、つちくれの如くに思ひ、珠をばつぶての如く思ふ也、珠は、海より出るたま也【棄擲―】句解に、棄擲、棯擲、邐迤、猥藉、字彙には、邐迤、連接也とあり、句解の註なれば、捨散したる心也、字

ぎ共、ふぢばかま共訓ず、此に焚椒蘭と書たるは、牧が手がら也秦の時分には、沈香と云とはなし、蘭や椒など、云物は、香ひの深き物なる間、是を懐に入れ、或腰に帯び、又は熏もする也、牧が時分には、沈香など有ほどに、沈香を焚などゝ書べきに、時代を考て、椒蘭と書は、面白也、學齋佔俾曰、此賦善於用事、凡作文之法、經可證史、史不可證經、前代史可證後代史、後代不可以證前、如阿房宮賦所用事、不出於秦時、只烟斜霧横、焚椒蘭也兩句、尤不可及、六經只以椒蘭爲香、如有椒其馨、其臭如蘭、蘭有國香是也、楚詞亦只以椒蘭爲香、如椒漿蘭膏是也、沈柤龍麝等字、皆出於漢西京以后、詞人方引用、至唐人詩文則盛引沈柤龍麝爲香、而不及椒蘭矣、牧此賦、獨引用椒蘭、是不以秦時所無之物爲香也、只如近世之文人、作漢宮詞、婕好怨、明妃曲、而引用梅妝蓮步字、尤爲可笑、此皆齊末以后事、漢時寧見此而効之耶、劉觀堂所謂不善用事、爲事所使、殆謂此也、

雷霆乍驚、宮車過也、（宮車之聲、若雷霆之驚）轆轆遠聽、（車行漸遠之聲轆轆）杳不知其所之也、

雷霆—【霆】は、疾雷也、強くひつしりと鳴いかづち也かみなりいかつちの如くなる音の、俄に聞ふるは、車に乗て、宮女の通る也、其音響て遠く聞ゆる也【轆轆】は、車のなる音を云【杳不知—】と云は、車の音はすれども、どこへ行と云ふことは知らぬと也、

一肌一容、盡態極妍、縵立遠視而望幸焉、（望秦王之臨幸其宮中也、）

一肌—【肌】は、肌膚、はだへ也【容】は、形容、すがたかたち也【態】は、嬌態、なりふりを云【妍】は、妍美、かほよしと訓ず、宮女ども我劣らじと假粧立て居るほどに一肌一容と云、成ほどかほよく、なりすがたを盡て、立やすらふて、車の行處を望見て、我處へ臨幸あるかと待也、

有不得見者、三十六年、（始皇在位者、三十六年、有終其身而竟不得見者）

【有不—】遂に始皇即位、三十六年の間に、一度も見

云、宮人歌唱之時、暖響如春光、舞袖之時、冷袖如風、淒、此氣候之不定也、

妃嬪媵嬙、（自皇后而下次爲妃、次爲嬪、又其次爲媵爲嬙、皆宮女之在阿房宮中者）王子皇孫、辭樓下殿、輦來于秦、

妃嬪—【妃】は、后の次也、【嬪】は、妃の次也【媵】は、嬪の次也【嬙】は、媵の類也、此宮女ども、皆阿房宮の中に居る女房也【王子—】あの連枝の王子、此腹の皇孫などゝ云者、樓下を手車に乘て、咸陽宮へ行也【辭】は、辭退也、我住居の樓を退出し、殿階を御下て、秦都へ參內する也○句解曰、王子皇孫、皆爲秦之公族、辭樓下殿、閑遊其間、車輦還來、事物紀原二、宋朝會要曰、周官巾車氏、有輦車、以人組挽之、宮中從容所乘、杜氏通典云、秦以輦爲人君之乘、漢因以彫玉爲之方徑六尺、

朝歌夜絃、爲秦宮人、

【朝歌—】とは、此中に、晝夜となく、舞つ歌つするは、宮女とも也、

明星熒熒、開粧鏡也、（粧鏡之多且光、如明星之在天）綠雲擾擾、梳曉鬟也、（髻鬟新綰、如天外綠雲）

【明星—】明星の熒熒かゝやく如くなるを、何ぞと云へば、宮女の鏡を開く也【綠—】綠は、青黄、もゑぎ色也、但此にては、髪の色を云ほどに、黒意あり、毛詩にも、鬒髪如雲と云て、髪の美しく多きを、雲に喩へたり【擾擾】は、博雅に、亂貌【髻鬟】は、髪をわげ結たるを云、もとゞりと訓ず【綰】は、わげゆふ也、髪をすきけづる體を擾擾と云、註の心は、綰結體を云、

渭流漲膩、棄脂水也、（早朝洗脂粉之水、入渭河流、漲其膏膩、言其多也）煙斜霧橫、焚椒蘭也、（椒蘭之香氣如烟霧）

【渭流—】渭水は、清渭とて、濁らぬ川なるが、油が浮て、濁て流るは、何事ぞと思へば、宮女のはんぞう盥の水を捨るか、落て流る故に、渭水ほどの大河も、油の如くに漲濁ると也【煙斜—】時ならぬ霧が降り、烟の靡くは宮女の香の烟也、楚辭、以椒蘭爲香如椒漿蘭膏是也、句解曰、盡其嬌態、極其姸美、蘭は、あらゝ

海上洪師民子娶黄山谷女弟學齊佔嗶第二曰、杜牧之阿房宮賦、長橋臥波、未雩何龍、正本元是雲字、後人傳寫之訛、云未雩何龍、殊爲無理、牧之意蓋謂長橋之臥波上、如龍之未得雲而飛去、正如蛟龍得雲雨、恐終非池中物之義、若加以雩字、則不惟無義、兼亦錯誤讀龍字了、左傳、龍見而雩、註、龍、星也、非龍也、龍星未見、則不之雩、今曰未雩則龍當未見、何形可見龍又、星名、何有長橋之勢哉、

複道行空、阿房爲閣道自殿直抵南山之嶺、以爲闕、目爲複道不霽何虹、複道之長、朱碧相照、有若虹之光彩、

複道――註【阿房――不霽】阿房より複道を作て、直に南山の上へ、殿閣作り續けらるゝは、虹の如く也、雨の上句なとにこそ、虹は起者なるに、是は何とて虹か、時ならず起と思へば、複道の照耀く故に、如此なると也、註朱は赤く碧は、青白也、蕣の花の色を云、

高低冥迷、不知西東、

【高低――】宮中へ入れば、餘り廣くて、高き所もあり、低處もありするほどに、心惘惘として、東西を辨へ難き也【冥迷】は、くらくまよふ也、

歌臺暖響、春光融融、舞殿冷袖、風雨凄凄、

【歌臺――】或臺の上に、宮女の歌を唱る處あり、大勢の聲にて囃せば、人氣にて、其中が暖にて、春三月比の天氣の、融融とのどかなるが如し、融融左傳隱公元年大隧之中其樂也融融註和樂也又或殿の内に、舞樂をする處あり、是も大勢舞ことなれば、其翻す袖の羽風にて、其間冷かにして、風雨の時分、凄凄とそゞろさむきやう也とそ、

一日之内、一宮之間、而氣候不齊、歌臺暖響、冷袖風凄、此時候之不定也、

【一日――】歌臺は暖氣にして、舞殿は涼冷なれば、一日の内、一宮の間にても、春と秋との氣候定まらざる也、以上の文は宮中の廣大なる事を云、文章軌範註に

【蜂房━】雨溜の落る處に、瓦を布たるは、蜂の窠を抑けたやうな中から、水が渦卷て流ると也、註【遠望天井━】とは、簷端の瓦の並び連るは、蜂の窠の如く也、其瓦の端より、雨溜の天井の中へ落るが、卽渦を成と也、【天井】は、樋也、羅山義とは、上下各別也【蠹不━】註【瓦溝】は、屋の平瓦は、低して、溝の如く、丸瓦は、高して脊のやう也【蠹初六反】【蠹蠹焉】は、長直貌、ますぐなるを云【不知簷溜之落處幾千萬落條】とは、雨溜の樋に落て、其水の渦卷て、眞直に落る事、幾千萬筋があるやらんと也、條は、木の枝也、此にては、一筋二筋と云義也、

長橋臥波、 自阿房度渭、屬之咸陽、取象天極、有長橋臥水波上 **未雲何龍、** 隱居詩話云、牧謂龍見而雩、故用龍以比橋、殊不知龍者龍星也○又【洪駒父云】、鮑欽止謂余、言杜牧未雩何龍、古本作未雲何龍、當以未雲爲是、

長橋━註【自阿房━】已に詳に題註にあり、又此註にて能聞へたり、言心は、阿房より渭水を渡つて、咸陽まで造り續けて大河の上に橋を掛たるは、本體龍の波の上に臥てあるやう也、未雲━註【隱居詩話━】隱居詩話曰、杜牧晚晴賦、忽引舟于深灣、觀八九之紅芰、姹然如婦、嫣然如女、芰、菱也、牧乃指爲荷花、阿房宮賦、長橋臥波、未雩何龍、牧謂龍見而雩、故用龍以比橋、殊不知龍者龍星也春秋、龍鬪于鄭之時門、退之詩云、庚午憩時門臨泉觀鬪龍、韓自河陽還汴、但道經時門、豈復覩當日之鬪龍邪、或本には、未雩何龍と書たり、未雩と云處を、左傳に龍見而雩とあるは、龍星の事にて、東方の七宿也、此星春見ゆる時に雨請する事なるを、牧が見損ふて、蟲の龍蛇の龍と見て、雨乞などをするに因て、未雩と云たは、惡きと云批判、隱居詩話にある也、然を鮑欽止と云者、山谷姪の洪駒父と云者に云ことは、杜牧未雩何龍と云句、昔の本を見たれば、未雲何龍とあると云から、龍は雲に緣ありて、龍吟雲起なとゝ有によつて雲もなきに龍の如くなるは、何ぞと思へば橋也と云心に書たるらんとて、此義を譬て、未雲何龍と書也、隱居詩話、並に洪駒父が說、共に漁隱叢話前集二十三卷にあり、排韻、洪芻、字駒父、第進士、放浪江湖、不求聞達、生平詩千餘篇、有前後老圃集、靖康中爲諫議大夫、坐事貶

大きに作ることを云、

二川溶溶、流入宮墻、

【二川—】一統志西安府、截渭河、在府城北五十里、出臨洮府渭源縣鳥鼠山西北谷、東流經盩厔、興平、咸陽、渭南、至華陰界入黄河、又曰、涇河、發源平涼府界岍頭山、經邠川醴泉涇陽、至高陵縣入渭、渭水涇水とて、二の大河あるを、卽宮中の外堀にす、卽是御溝也【溶溶】は、安流貌【入宮墻】は、城内へも通ずる也、

五步一樓、十步一閣、

【五步—】步は、六尺也、五步置て樓一つあり、十步置て閣一つあり、莊子云、澤雉五步一啄、十步一飲の句法也【樓】説文、重屋也、爾雅䟽云、凡臺上有屋、狹長而屈曲曰樓、たかとのと訓す【閣】韻會一曰、覩也、司馬相如上林賦、高樓四注、重坐曲閣、

廊腰縵廻、簷牙高啄、（簷牙尖彎如牙、高聳若鳥之喙、）

【廊腰縵—】廊腰は、卽廊下を指す【縵廻】は、長く連る義也【簷牙高啄】とは、註【簷牙—】簷は、のき也、牙は、簷の角の尖り彎りて、上へそりたる所を云、樓閣の簷角高く聳へて、鳥の喙の餌を啄むやう也とそ、

各抱地勢、鈎心鬪角、（屋中心聚處、其勢如鈎、屋角自相鬪湊焉、）

【各抱—】其所の地形の高下にて、高も低も、家を作也、是を抱地勢と云也【鈎心】とは、屋の眞中の、曲りそりたるを云【鈎】は、字彙、曲也、一曰、懸物者、鐶の一方欠たるやうに有て、簾帳を掛る物也、又まがると訓ず、【鬪角】とは、屋の簷の角の集りたるが、相戰ふやうなと也、愚謂【角】も、亦爭ひ鬪ふ心あり【湊】は、集也、

盤盤焉、（盤環之貌）囷囷焉、（輪囷之貌、）

【盤盤—】羅山曰、宮殿の勢ひを云まで也【盤盤】は、註盤環之貌、めぐる義也、上の各抱地勢と云句に相應す【囷囷】は、註輪囷之貌、字彙、屈曲盤戾貌、そり曲るを云、上の鈎心鬪角と云句に相應す、

蜂房水渦、（遠望天井、如蜂窠焉、水之溜、天井中爲渦、）矗不知其幾千萬落、（瓦溝矗矗焉、不知簷溜之落處、幾千萬落條矗、初六反、）

此時戰國七雄とて、我も〳〵と國を有ちて、天下七に分れて有しを、六箇國を亡して、秦一國して十六年か間に、天下を打取る故に、六王畢とは云也、說文【海】ハ天池也、以納二百川一者、爾雅、九夷八狄七戎六蠻、謂二之四海一、海、晦也、取二其荒遠冥昧之稱一、李巡註、四海遠二於四荒一晦冥無レ形、不レ可二教誨一、故曰二四海一詳に韻會にあり、四海の內は、一つに秦に皈する故に、四海一とは云也、是三字の句法とて、珍敷書様也、此より後宋の劉幾と云者三字の句法を書たること有しを、歐陽永叔、杜牧が句法を手本にして書たると、批判せらるゝと也、筆談擧人論曰、天地軋、萬物茁、聖人發、歐公曰、此必劉幾也戲續曰、秀才剌、試官刷、以二大朱筆一橫抹レ之、謂二之紅勒帛一後數年換二文體一易二名煇一歐公擢爲レ第一、

蜀山兀、阿房出、

（蜀山木盡、阿房宮成　○此且言二作レ宮之由一）

【蜀山―】秦天下を我か物にしてから、宮殿を建らるゝに、蜀は大山なるが、其山材木を盡故に、はげ山に成てから阿房宮が出來ると也、兀とは、はげる事也【兀】說文、高而上平也、韻會を按するに、虮禿、山貌とある、能此處に合へり、

覆二壓三百餘里一、隔二離天日一、

【覆壓―】阿房宮大なる故に、下は方三百餘里の地を覆ひ壓て、上は飛甍翔宇にて、天も日も隔て見へぬ也、俗に日のめもさゝぬと云が如し、離は、遠也、

驪山北構而西折、直走二咸陽一

（自二二山一北結レ屋、直至西向、回折而委曲爲）
（直赴二咸陽殿一爲二大宮一、走、去聲、）

【驪山―】大明一統志、陝西西安府ノ、載二驪山一、在二臨潼縣ノ東南三里一、因二驪戎所一レ居、故名、山之麓、溫泉所レ出○註【二山】二の字、驪の字を誤たる也【北結屋】は、北構の義を釋する也【構】は、結構とて、家屋を造作するを云【直至】よりは、西折の註也、驪山の北の方より、西の方へ作り廻すなり、註に【回折】とあるは曲りをれて、鈎の手になる義也【委曲】は、幾まがりもある義也【直走―】一統志西安府、載二咸陽縣一、在二府城西北五十里一、本秦舊縣、孝公徙レ都此、其地在二山南水北一、山水皆陽、故名二咸陽一、阿房宮より咸陽宮へすぐに行やうに、

盡せりと也、
末一段尤含鑒戒、讀之有餘味焉、
【末一段尤含鑒戒】とは此篇末に後人不鑒─とあ
る一段は好戒めぞとの批判を註者が云こと也【讀
之有餘味焉】と註にあるは此文を讀て見れは世の
盛衰の變が知れて一段と面白と云義也○萬里居士
曰、此篇六段、自始至宮墻第一段、自五步至萬落
第二段、自長橋至六年第三段、自燕趙至不甚
惜第四段、自嗟乎至天下也第五段、自嗟夫至
末第六段、凡此篇五截、自篇首至入宮墻第一截、
述其事言作宮之由說地之勢、自五步至不齊第
二截言宮殿狀情言樓閣之多也、自妃嬪至其間第
三截極言宮中之侈也、鼎鐺以下第四截言財貨之
奢、嗟乎以下五截、奢侈極則必亡、故以警策結之、

杜牧之

杜は氏、牧は名、牧之は字、唐の敬宗の時の人也、敬宗
普請ずきをしたり、女色に耽らるゝに因て、此文を
書て諷する也、三體詩姓氏註云、杜牧、字牧之、擧進
士、復擧賢良方正、太和末自侍御史出作沈傳師宣
城幕、除官入京、後二十餘年、連典池黃湖等四郡、遷
殿中侍御史、後爲司勳員外郎、踰年遷中書舍人、卒年
五十、牧詩情致豪邁、人號小杜、以別杜甫○辛文房才
子傳、牧之、京兆人也、善屬文、太和二年、韋籌榜進
士、與厲玄同年、初未第、來東都、時主司侍郎崔郾、
太學博士吳武陵、策蹇進謁曰、侍郎以峻德偉望爲明
君選才、僕敢不薄施塵露、向偶見文士十數輩、揚眉
抵掌、共讀一卷文書、覽之乃進士杜牧阿房宮賦、其人
王佐才也、因出卷搢笏朗誦之、郾大加賞曰、請公與
狀頭、郾曰、已得人矣、曰、不得即請第五人、更否則請
以賦見還、辭容激厲、郾曰、諸生多言牧疎曠不拘細
行、然敬依所敎、不敢易也、後又擧賢良方正科、

六王畢、四海一、

秦始皇十七年、攻韓得韓王、十八年、攻趙虜趙王、二十一年、取燕得太子丹之首、二十二年攻魏魏王降、二十三年、虜荊王、二十六年、攻齊得齊王、

【六王─】韓王名は安、秦より內史勝大將として滅
之、趙王名は遷、秦の王翦滅之、燕王名は喜、秦の始
皇二十五年、王賁滅之、魏王名は假、王賁滅之、荊は、
即楚、王名は負芻、王翦滅之、齊王名は建、王賁滅之、

山あり、此二の山の南を受て建たるに因て、陽の字を付ると也、陽は、みなみと訓ずる故也、

以象天極閣道 絶漢抵營室也、

【以象―】通鑑綱目註、盧生說始皇爲微行以辟惡鬼所居宮毋令人知然後不死之藥始可得也、始皇乃令咸陽旁三百里内宮觀複道甬道相連帷帳鐘鼓美人充之、詳に史記にあり、如此宮殿を作るにいはれあり、天極とは、星の名也、閣道も、星の名也、漢は、天漢、又銀漢と云、卽天河也、此星分野とて、巡り宿る事ありて、天の河を渡て、營室と云星の旁へ行也、是を象りて作也、渭水を渡りて咸陽に至ると也、始皇三十五年と云より、抵營室と云までは、史記本紀を書也、

阿、山曲也、房旁也、

綱目集覽曰、阿、曲也、房、一作旁、或讀如房室之房、言殿之四阿皆爲房、一說、大陵曰阿、言殿高若於阿上爲房、四阿と書て、あづまやと訓す、阿は、四方へ雨溜の落るやうに屋を作也、【阿は曲也】とは、山のくまを云【房は旁也】とは山のかたはらを云、

乃舊地名、宮成未更名而燬、故天下只云阿房宮、

【乃舊地名】とは、此阿房宮、山の曲にあるに依て、直に名に付る也【燬】音毁、韻會、火也、焚也、毛詩王室如燬宮が出來して、未た名を付ぬ内に燒たほどに、天下の者が、阿房宮と云と也、史記曰、阿房宮未成、成欲更擇令名名之、作宮阿房、故天下謂之阿房宮、

此篇宏壯巨麗、馳騁上下、累數百言、

【此篇宏壯巨麗】とて、ひろくさかんに、大きに華麗なることを、上下に文を振ひて書たること、數百言を累ねたれとも、楚人の一炬とて、項羽か兵起て、燒土と成たと云止まると也【數百言】は、字の數に係て云もあり、句に係て云所もあれども、此は字に係て云也、詩三百篇などをば、一句を一言と云、老子の五千言、東坡が五百言などの時は、一字を云、其所に依べし、

至楚人一炬可憐焦土其論盛衰之變判於此矣、

【其論盛衰―】とは、初に始皇天下を一統し、宮殿の壯觀、聲色の逸樂、資用の侈奢を具に述、後胡亥子嬰が時に至て、忽に變衰して亡ひたる事を、能判斷し

しを拓ひて、內裏を作られたる也【朝】字彙、音潮、朝廷、又覲君之總稱、朝、早晨也、人君視政、臣下覲君、均貴於早、聲轉爲朝、朝宮は、大廣間などの類、諸國の者に對面し政を聽處也【渭】水、出陝西平涼府渭源縣鳥鼠山、至西安府同州入河、內裏を上林と云事是より始る也、

先作前殿阿房、東西五百步、南北五十丈、上可以坐萬人、下可以建五丈旗、

【先作—】先大廣間を作也【東西—】正義曰、三輔舊事云、阿房宮、東西三里、南北五百步、庭中可受萬人、步は六尺也【上可—】二階作りのやうに立たる上には、人萬人ばかり居るほど廣く、下には長さ五丈の旗のつかへぬ程に高く作と也、此【下可以—】と云に、兩義あり椽の下の高さを云ともあり、床の上から檐までの事にてもあるべし、

周馳爲閣道、自殿下直抵南山、表南山之顚以爲闕、爲複道、自阿房渡渭屬之咸陽、

【周馳—】僧桂林云、周回四畔而可驅馳也、愚謂廻廊也、通鑑赧王三十六年註、崔浩曰、路險不容行、架木爲棚而度、名曰閣道、羅山曰、周馳は、めぐること也、殿中を廻り〳〵て殿閣共あり、其に樓架を建、殿下より南山へ直に行やうに建たる也、南山は、在華陰縣【表南—】【表】韻會、識也、明也、表識とて、しるしを立て、其所を顯し明むる義也、此にては、佛寺の本堂の心あり【闕】禮部韻曰、釋名、闕在門兩旁、中央闕然爲道、郭璞曰、宮門雙闕也、門觀也、殿下より南の山まで、家を作り繼て、南山に宮を作て複道とて、王の行幸の道を、百姓以下の一圓不見やうに壁を付て、外をば往來の道にするを、複道と云、其ごとく道を付て、渭水と云大河をも、上に橋を懸て、直に阿房より咸陽に行やうに作られし也、一曰、複、音伏、重也、上下有道、故謂之複、毛晃曰、上下有道曰複道、複道則築起爲道、不與民庶相雜、天子自行其上、有私路處、則穴竇如城門、百姓在彼中往來也、愚按するに、此說の如なれば、今の二階廊下也、羅山解誤也、雍錄曰、秦咸陽、在京兆西徼北四十里、本杜縣地、至唐咸陽縣、則在秦都之西二十里、云云關中記曰、名咸陽者、山南曰陽、水北亦曰陽、地在渭水之北、九嵕諸山之南、故曰咸陽、此內裏を咸陽と云事は、咸山嵕山とて二

【彼尋―】善曰、莊子曰、弟子謂庚桑楚曰、夫尋常之溝、巨魚無所還其體、而鯢鰌爲之制也、良曰、汙瀆、小池水也、呑舟、巨魚、謂大魚腹中可容船也、言小池水之中、不能容呑舟大魚、喩暗君亦不能用賢也、索隱曰、汙、潢也、瀆、小渠也、汙は、くぼき所也潢也とあれば、たまり水也、瀆は、みぞ也、但此にては不泄之水と注して、旁へ不洩たまり水也、僅のよのつねのたまり水などに太船を呑ほどの大魚は居られまひぞと也、政の亂れたる小さき朝廷には、賢聖をば得置まひと云心也、

横江湖之鱣鯨兮、固將制於螻蟻、

鱣、大魚、無鱗、口在腹下、鯨魚、長者數里、鱣、升連反、螻、音婁、螻蛄也、螘與蟻同、叶五居反、

【横江―】索隱曰、以喩小國暗王不容忠臣、而爲讒賊小臣之見害、呂向曰、蓋賢者失位、遭讒佞之所害、鱣は、ふか也、鯨は、くじら也、制は制服、したがへらるゝ意也、螻蛄は、けら也、蟻は、あり也、江湖は、廣き大水也、其に横はる程の魚あらんに、其江湖にありてこそ、居て似相たる所なれば、鱣鯨の威勢を振ふすら捕へて水のなき處に置たらば、螻蟻にせゝりころされふぞ、是善者惡き處に居ば、江湖を離れたる大魚の心と云義也、螻蟻、ぎの音なれどもろうぎよと讀也、五居反とあり、魚の韻に通じて作る文なる故に如此、此文屈原が事を云やうにして、皆自ら云と思べし、

○阿房宮賦、

始皇三十五年以咸陽人多、先王之宮庭小、乃營作朝宮渭南上林苑中、

【始皇―】通鑑綱目第二、秦始皇三十四年戊子、燒詩書百家語、三十五年巳丑、除直道、營朝宮、作前殿阿房、集覽曰、阿房、初秦惠文王作宮阿基房、未成而亡、始皇廣其宮規恢三百里、史記正義曰、括地志云、阿房宮、亦曰阿城、在雍州長安縣西北一十四里、按宮在上林苑中、雍州郭城、西南面即阿房宮、城東面也、二世皇帝元年壬辰、復作阿房宮、徵材人五萬人爲衞、註徒刑者七十餘萬人、分作阿房驪山、關中計宮三百、關外四百餘、因徙三萬家驪邑、五萬家雲陽、秦始皇即位三十五年に、咸陽に人多く、先王よりの內裏狹さに、渭南の上林苑とて、大なる林あり

去父母之邦、惜乎屈原廉直而不知道、殉節以死、然後爲快、此所以未合于聖人耳、使原如柳下惠用之則行、舍之則藏、終身於楚、優游以卒歲、庶乎其志也哉○陳繼儒曰、賈之弔屈原、即所自爲痛哭流涕者也、然屈子戀國之無已、賈謂故都不懷、則疏戚之分宜然乎、要之功名、固是有意無意之不同也、

鳳凰翔于千仞兮、覽德輝而下之、四尺曰仞、

【鳳凰━】山海經曰、鳳凰出丹穴山、形似鶴、首文曰德、背文曰義、翼文曰順、腹文曰信、膺文曰仁、京房易傳、麟前、鹿後、蛇頭、龜背、魚尾、雞喙、燕翼、五采、高六尺、一曰、雄曰鳳、雌曰凰○註四尺曰仞、四尺七尺八尺と云説あり、【千仞】は、至て高しと云ん爲也【德輝】は、人君の德化光輝にして、政務の勝れて善を云、索隱曰、鳳凰翔見人君有德乃下、故禮曰德輝動于內是也、鳳凰は靈鳥にて、上に云如く高く飛者也、有德の所を見て下ると也、此文に三所に鳳を云、是楚辭の躰也、古人の文此例多し、

見細德之險徵兮、遙增擊而去之、增重也、

【見細━】翰曰、細德、猶無德也、言見時君無德、左右奸險、恣爲徵祥、則搖擧羽翮而去也、增、擧也、師古曰、增、重也、言見苛細之人、險阨之證、故重擊其羽而高去險徵、漢書作險徵、史記文選作險徵、王應麟曰、見細德之險徵、顏注云見苛細之人、險阨之證、則徵當作徵見陰證而去、所謂色斯擧矣、見幾而作也、正義曰、搖、動也、增、加也、言見細德之人、又有險難徵起、則合加動羽翮、遠逝而去也遙增擊、句解作遙矰擊、註、遙、遠也、矰、弋射短矢也遠懼矰矢之擊射害己而去之、知幾也、擊、漢書作擊、史選併作翮、善曰、如淳曰、鳳皇嘗擊九千里絕雲氣遙遠也、嘗、高高上飛意也、細德とて、少なくてせはしき所をば、のし羽を使ふて、一段高逃る也是德ある故也、

彼尋常之汙瀆兮、豈容吞舟之魚、八尺曰尋、倍尋曰常、汙瀆、不泄之水也、汙、一胡反、

羈を係て置ば、犬や羊と同し物にて、彼神靈なる德は有まじきと也、聖賢の才德ある人を、微祿にて絆し、國家の政には棄て不レ用は、其德顯はれずして、愚不肖の者と同しかるべしと也、

般紛紛其離レ此郵一兮、亦夫子之故也、般、反也、離、遭也、郵、過也、般、音班、字從二丹青之丹一、郵、與レ尤同、史作レ尤、故、叶二音孔一、史作レ辜、

【般紛―】孟康曰、般音班、般、反也、句解曰、般、還也、還而思二我心之紛紛擾擾一、亦羅二遭此過尤一兮、賈誼反而自言二其身事一、此已上、皆賈誼自謂、蘇林曰、般、音盤、文選五臣註、般作レ盤、良曰、言屈生盤二桓於亂時一、不レ能レ避去、遂及二此罪一、亦屈生自爲之故也、盤桓、不レ進貌、或曰、盤桓不レ去、紛紛、搆レ讒意也、李奇曰、般、久也、紛、亂也、師古曰、賈誼自言今離レ郵、亦猶如二屈原耳一、亦夫子之辜也、索隱曰、夫子、謂二屈原一也、李奇曰、亦夫子不レ如二麟鳳翔逝之故一、羅二此咎一也、汪齋云、故、音孤、言亦如二屈原之孤立一爾賈誼今日能能思へば、屈原紛紛とみたれたる時に、何方へも行て、國の相けと成へきを、却て楚にばかり居いでは、不レ叶やうに思はれし程に、此尤に逢れたは、只人の過に非す、屈原の心からと也、漢書の注の心は、此句は誼自我身の上を云、今紛紛として尤に逢、流さるゝは、屈か如くなるの故也、

歷二九州一而相二其君一兮、何必懷二此都一也、歷、經過也、歷、史作レ瞝、視也、其君、史無二其字一、

歷九―【九州】謂二雍梁荊豫徐揚冀青兗一是也、李善曰、言知二時之亂一、當レ歷二九州一、相二賢君一而事レ之、何必思二此都一、而遭二放逐一、呂向曰、言天下之君、皆可二輔相一、何必懷レ思此楚都一、歷字、漢書作レ經、屈原ほどの人なるに、九州の內にて、何れの國也とも、有道の國にて、其君の佐と可レ成を何んぞや此楚國の都を大事に思ひ過して、罪を得られたぞと也○蘇子由古史曰、漢賈誼爲二長沙傅一過二汨羅一、爲レ賦以弔二屈原一曰、歷二九州一而相レ君、何必懷二此故都一、誼之言或一道也、而非二原志一、原、楚同姓、不レ忍弃二其君一而之二四方一、而誼敎レ之以二孔子孟軻歷聘諸侯一以求レ行レ道、勢必不レ從矣、柳下惠爲二士師一、三黜而不レ去曰、直レ道而事レ人、何往而不二三黜一、枉レ道而事レ人、何必

彙曰、蟂、水蟲、似蛇四足、能害人、又曰、獺屬、害魚者、獺は、かはをそ也【蟂音梟、獺音撻】、偭蟂獺三字、史作彌融爚、又作彌蝎爚、史記正義曰、顧野王云、彌、遠也、融、明也、爚、光也、沒深藏以自彌遠明光以隱處也、字彙曰、蝎、桑蟲、一曰、蝤蠐、郭璞曰、腐木根下有之、蠕、熠蠕、螢火別名、羅山曰、融爚は、燿爚と同意、螢火の義也、毎に人難心得處也、彼神龍の如き者は、蟂獺などには交はらぬ也、其を偭と云也、應劭曰、以言背惡從善也、索隱曰、螘、音蟻、漢書作蝦、言偭然絶於蟂獺、況從蝦與蛭螾也、正義曰、言寧、投水合神龍、豈陸葬從蟻與蛭螾、文選註銑曰、偭、殊也、蟂獺、水蟲食魚者、言神龍之德、且殊於蟂獺、以隱處於深淵之中、豈復隨從其小蟲也、君子但避亂世以隱居、不可與小人從仕、蝦はえび、蛭はみゝず也、蟂獺に背くからは、勿論蝦與蛭螾づれには交らぬ也、皆小人を指して云、言は君子は、乱世を避て隱れ居り、小人と共に暗君に從ひ仕へさる也、

所貴聖之神德兮、遠濁世而自臧

臧古藏通、

【所貴ー】史記並文選、聖下有人字、楚辭無之、莊子曰、宣尼見蟻丘之將是聖人僕也、是自埋於民自藏於畔、郭象曰、進不榮華、退不枯槁〇註臧、古藏通、楚辭同之、史記文選及び句解、並に作藏、神德は、天より所得の玄妙の道德也、聖人には神德ありと、貴ぶ處何事ぞと云へば、濁世を去て隱れ居る、行藏用舍の能合時故也、鳳の遠去、龍の深潛るを以て、聖人の亂邦に不仕に喩ふ、又按するに、臧は、善也、言は濁世を遠て、其生を危せず、自能保ち守て、其自を善する也、

使麒麟可係而羈兮、豈云異夫犬羊

【使麒ー】史記正義曰、使麒麟可得係縛羈絆、則與犬羊無異、責屈原不去濁世以藏隱、其文如橐也、驥、千里之馬也、選作騏驥、註翰曰、騏驥、良馬也、言君子之德、不遠避濁世、則如良馬見係絆而羈束也、及其用之、乃騁千里之道、其不用、與犬羊之才無異也、【麒麟】は、仁獸にして、四靈の一つ也、若繫ぎ縛へて、

鳳縹縹其高逝兮、夫固自引而遠去（縹、輕擧貌、【縹】、匹遙反、史作レ漂、逝、史作レ遰、引、史作レ絶）

鳳縹ー【縹縹】選作二漂漂一、註曰、漂漂、高飛貌、史作二鳳漂漂其高遰兮、夫固自縮而遠去一、註、索隱曰、遰、音逝、師古註曰、漂漂、輕擧貌○囲縹、輕擧也、按するに縹の下に、當二又有一縹字一、脱簡也、上に云如く、鳳凰は靈鳥なる故に、濁世をば去て、固自身を引て去ほどに、災難に可レ逢ことが無と也、德を能治むる鳥と云心也、【縹縹】は、輕飛貌とあり、輕く高く飛で、德を守る故に、別の鳥の如く、網に罣る事もなく、鷹に取らるゝこともなき也【遰】は、遰と同、引、史作レ絶、絶は誤る、縮字也、

襲九淵之神龍兮、沕淵潜以自珍（襲、重也、九淵、九旋之淵、言レ至二深一也、沕、音昧、又于筆反、）

【襲九ー】史註鄧展曰、襲、重也、索隱曰、莊子曰、千金之珠、必在二九重之淵而驪龍頷下一、故云二九淵之神龍一也、呂向曰、襲、猶レ察也、言察二於神龍一則知レ藏二於深淵之處一、可二以自珍寶一也、言君子在二亂世一可二以隱一也九淵とは、九曲ほどある、いかにも深き淵也、十淵と云ぬは、九は極りにて、十と云へば、一へ歸る心あるに因て、九淵と云也、九は、數のきはめ也、至て高き事を云んとて、九天などゝ云心也索隱曰、深微貌、徐廣曰、潜、藏也、音亡筆反、又彌畢反、又音物、【沕】も深き心也、如レ此神變なる靈鱗は、淺き所には居らず是吾德の能治まる處也、上の四句、皆身を守りたる者を云也、鳳や龍は、皆君子を指して云也九淵を重ぬと云へば、深きこと不レ可レ言、旋は、めぐると訓す、九旋は、九曲の義也、但一本に、重を作レ垂、羅山曰、垂は、ほとりの心あり、淵いつぱいと云義也、垂天の垂の字の心也、

偭蟂獺以隱處兮、夫豈從蝦與蛭螾（偭、背也、蟂、獺、皆水虫害レ魚者、蝦、蛭、螾、亦水虫之小者、言龍自絶二於蟂獺一、況肯從二蝦與蛭螾一乎、偭、音面、蟂、音梟、獺、音撻、三字史作二彌融爚一、又作二彌蝎爚一、蝦、音遐、蛭、音質、螾、音引、叶二平聲一、蝦、史作レ螘）

偭蟂ー囲偭、背也とは、應劭が注也、偭、音面とは、蘇林が注也、蟂獺、皆水蟲害レ魚者とは、應劭が注也、字

居とあるほどに、早く退たるが好と見る也、

嗟-苦先-生獨離二此咎一兮　嗟、咨嗟也、苦、勞苦也、或曰、苦、當レ作レ若、易曰、則嗟若、若、語辭、史此一節兮字、皆在二句中一、

【嗟苦一】嗟は、又嘆也、右の如く云たては、屈獨此尤に遇れたは、苦しき事也となり、嗟苦を嗟若と書なれば、二字をあゝと點して、離るゝこと不レ得也、易に則嗟若とあり、易節の卦より出から見れば、嗟若と、苦の字を、若の字に直しても、意同じ、

誶曰　誶、告也、卽亂辭也○誶、音碎、史作レ訊

【誶曰】史作二訊曰一、史註李奇曰、訊、告也、張晏曰、訊、離騷下竟亂辭也、索隱曰、訊、音信、劉伯莊音素對反、訊、猶レ宣也、重宣二其意一、周成解詁、音碎、辭註曰、亂者、樂節之名也、國語曰、其輯之亂、輯、成也、凡作二篇章一、義既成、撮二其大要一、以爲二亂辭一也、或云、自語段畢而重起、謂二之亂一、史屈原傳、懷沙賦、亂曰、注、索隱曰、王師叔云、亂者、理也、所下以發二理辭旨一、總撮中其大要上、而重理前意上也、韻會、古賦末有レ亂、師古曰、理也、總理二一賦之終一、論語泰伯篇、關雎之亂、朱子注、亂、樂之卒章也、歌の終を誶と云、亂は、治の心にて、歌ひ治めた義也、歌ひ終て、又曰と云心に、誶曰と書也、

已矣國其莫二吾知一兮、子獨壹-鬱其誰-語　壹鬱、猶二怫鬱一也、【吾】史作レ我、無二兮子字一、【壹】史作レ堙、【語】去聲、

【已矣一】離騷抽思篇曰、已矣哉國莫レ人莫二我知一兮、又何懷二乎故都一、向曰、已矣、絶レ望之辭也、文選呂延濟注、國謂レ君也、言既不レ知二我心一、獨聚二憂思一、誰與レ語レ事者也、壹鬱、謂レ聚レ憂也、已矣とは、何もいらぬ、ざつと果たと云こと也、愚按するに、選註、言二止矣、不レ可レ咨嗟一之意也と云を以て見れば、餘の事に一向嘆くまいと云義也【國其莫吾知】とは、屈が詞に、國莫レ人兮莫二吾知一とあるから、此に書也、莫二吾知一の吾をば、屈原に吾也【子獨壹鬱】とは、屈は胸にすゝまぬと思ひて、うちふさがりて居られふずれども、此鬱憤を誰に語て聞せん樣が有まひと也、子獨の子も、屈を云也○註壹鬱、猶二怫鬱一也、怫は、誤り怫字也、憤の積で胸に滿るを云、

の物ぞと云に、昔よりの說には、底のある瓦にて作たる器也、缶の類の物と云から讀來るを、或人古來右の如くいへども、只底の字は付字にて瓦盆の事ぢやと云れし也、此の兩說の內に就て、底のある缶の類のやうに心得て好との批判あり、今按するに、底の字を用ることは、葢のなきを云ん爲也、付字ばかりとは難心得、漢書の師古が註に、鄭氏の說を引て、康瓠は、瓦盎底也と云り鄭氏は、漢の代の人、師古は、唐の太宗の時分の人也、鄭氏か時分には、底の字を助字に用ひたること有まじき歟、世俗の平話に、尋常底端的底恁麽底など云て、助字に見るは、唐宋の時分より始まるにや、然れば此の底の字は、そこと云義可然乎、

騰駕罷牛兮、驂蹇驢兮、驥垂兩耳服鹽車兮　罷、讀曰疲、蹇、跛也、驥、駿馬也、服駕也、

騰駕━【騰駕】は、車を牛の上へあげかくる意也【罷牛】は、くたびれたる牛也囲罷、讀曰疲、五臣註の文選には作疲、劉良曰、騰、奔也、言御車者、但奔駕其疲敝之牛、乘其蹇跛之驢、使良馬駕鹽車、亦猶賢人在野、小人在位【驂蹇驢】驂とは、四馬にて車を引に、二つは轅の內を行、二つは轅の外を行也、轅の外を行を、そえむまと云也、蹇は、あしなゆると讀、驢は、うさぎ馬とて、惡き馬也、如此牛や驢に車を引せて、良馬と云と也、【驥垂━】驥とて、一日に千里行程の良馬也、上の句にある如く、牛や、うさぎ馬を良と見らるゝ世なる故に、驥驎などの樣なる良馬は、鹽を負、兩耳を打垂て、使はれて居ると也、戰國策、汗明曰、夫驥服鹽車上太行中坂遷延、負轅不能、伯樂下車器之也○囲服、駕也、牛馬に乘載るを云、

章甫薦履、漸不可久兮　章甫、冠名、薦履反在履下也、

【章甫━】應劭曰、章甫、殷冠也、釋名曰甫大夫也、服之所以表章之也、師古曰、章甫薦履、言冠乃居下履乃居上也、章甫は、冠の名也、頭にきるこそ本意なるを、履の下のかいしきにする如くなる體なれば、世は逆さまに成たりと云也【漸不可久】こゝに兩義あり、如此世が逆まに成ほどに、頓て亡びんと、近來讀めども、文選の義を以て見れば、漸不可久と點して、如此逆まなる世ならば、君子たる者は、危邦には不

頓、銛、息廉反、

【莫邪―】史記應劭註曰、莫邪、呉大夫也、作寶劍、因以冠名、呉越春秋曰、呉王使干將造劍二枚、一曰干將、二曰莫邪、許愼曰、莫邪、大戟也、莫邪は、名劍の事也、是は干將と云者の妻に莫邪と云あり、夫婦ともに刀を造る名人也、然間夫のうちたるをば干將、妻のうちたるをば莫邪と名く、個樣の好劍をば不切と云て、鉛にて作りたる刀を能切ると云樣なる時也、索隱曰、鉛者、錫也、

于嗟默默、生之亡故兮　默默、不自得意也、生、謂屈原也、言其無故而遭此禍也【默】史作墨、亡、音無、

于嗟―【于嗟】は、嘆息也、【默默】は、口にては云ねども、心に嘆くこと也【生】は、上の文に先生を弔すと、屈原を云から、直に生を屈と指也、故なくて如此なるは、定めて自得せまいぞと也、

斡棄周鼎、寶康瓠兮　斡、轉也、【康瓠】、瓦盆底也、【斡】、烏活反、

【史】寶上、有而字、

斡棄―【註】斡、轉也と云は、史記如淳が注也【斡、烏活反】とは、索隱の註也、韻會曰、鼎、説文、三足兩耳、和五味之寶器也、昔禹收九牧之金、鑄鼎荊山之下、入山林川澤、螭魅蝄蜽、莫能逢之、以協承天休、周鼎とて、足の三ある、金にて鑄たる者也、是は夏の禹王の時、國國よりの貢の金を以て鑄る也、大唐四百餘州を、九つに分て、鼎を九つ鑄させて、都に寶とす、是を九鼎と云也、夏殷周傳て寶となる【斡棄】をしころはかいて置也、言は時昏く人愚にして、大寶をば、却て投捨る也、爾雅曰、康瓠、謂之甈、音丘列反、大瓠也、應劭曰康容也、斡、音筦、筦轉也、康、空也、李巡云、康、謂大、瓠、瓢也、文選翰註、周有九州之鼎、言大鼎也康瓠瓜也、言時君棄賢用不肖、亦猶轉棄大鼎之器、而寶其瓠瓜也、何解云、周鼎可寶、轉而棄之、康瓠、乃瓦盆底耳、乃愛之如寶、是はふくべの樣なる貌に、土にて作りたる物に、底を入て、不斷の使ひ道具にする、輕く卑しき物を秘藏する事也、杜少陵が詩に、莫笑田家老瓦盆、羅山曰、此註に瓦盆底とあり、是を何樣

賢聖逆曳兮方正倒植

植、立也、音値

賢聖—【賢】は、字彙、有レ德者、又善也、かしこしと訓す【聖】の義は、漁父辭の内に註す、文選銑註、逆曳、謂レ不レ順二其正道一也、賢良方正之士、皆在二草澤一、小人在レ位、故云二倒植一也、善曰、逆曳不レ得二順レ道而行一也、倒植者、賢不肖顛倒易レ位也、聖人賢人などの、能國家を治る善人は、順路に行ふことを不レ得と也、句解云、方正端介之士、反倒立不レ順【逆曳】は、譬ば手を取て引べきを、足を取て引也【方】は、四方也、行ひの萬事きつかとして、物の四面なるが如し、義方方直方正など〻あり【正】も亦行のゆがまず、ろくにたゞしきを云、方直端正の人は、浮世に倒まに立るやうに、あやうし【倒植】は、譬ば頭を下にし、足を上にするが如し、

謂隨夷溷兮、謂跖蹻廉

隨、下隨、讓二天下一而不レ受、夷、伯夷、讓レ國而餓死、跖、盜跖、蹻、莊蹻、秦楚之大盜也、跖、之石反、蹻、居略反

【謂隨—】漢書註、應劭曰、隨、湯時廉士、湯以二天下一讓、而不レ受、事は莊子に有レ之、般湯王、下隨は賢人なる故に、天下を讓んと有て召されたれども、天下は何の用にせんとて、引籠たる者也、史記列傳曰、伯夷叔齊、孤竹君之二子也、父欲レ立二叔齊一、及二父卒一、叔齊讓二伯夷一、伯夷曰、父命也、遂逃去、叔齊亦不三肯立二而逃一レ之、國人立二其中子一云云、武王伐レ紂、伯夷叔齊諫云云、武王已平二殷亂一、天下宗レ周、而伯夷叔齊、不レ食二周粟一、隱二於首陽山一、遂餓死、孤竹の君の二子、兄を伯夷、弟を叔齊と云、父國を叔齊に讓る、叔齊兄の伯夷に讓る、伯夷父の命也と云て不レ受して去る、叔齊又兄を閣きて、我不レ可レ受とて、同く去る、故に國人其中子を立て、孤竹の君とす、如レ此者は、濁りたる者とて惡く云也、李奇曰、跖、魯之盜跖、蹻、楚之莊蹻、盜跖は、柳下惠が弟、爲二天下大宰一、肝二人之肉一、暴戾恣睢、聚レ黨數千人、橫二行天下一、竟以壽終、詳に莊子の盜跖篇にあり、韓非子喩老篇曰、莊蹻爲二盜於境內一、而吏不レ能レ禁、此政之亂也、此兩人は、皆大ぬす人也、如レ此者は、一段と正直な者と云て譽る也【廉】は、字彙に、不レ貪也、潔也、此所の註は、史記索隱也、

莫邪爲レ鈍兮、鉛刀爲レ銛

莫邪、寶劔名、銛、利也、鈍、史作レ

【遭世—】周書、文王曰、惟世罔ㇾ極、汝尚助ㇾ予、漢書師古注、罔、無也、極、中也、無二中正之道一、一曰、極、正也、句解云、遭二逢濁世一、罔ㇾ有二中道一、張晏曰、讒言罔ㇾ極、罔ㇾ極、言ㇾ無二中正一也、呂延濟曰、言遭二當世讒邪之人無一ㇾ極、乃喪二隕其身一、罔、猶ㇾ無也、浮世の正しきことなき故に、如ㇾ此の體になられたかと也、極は、中正と註す、きよくなきは、文選の點、世のたゞしからぬと云義也、遭二世罔一ㇾ極と、古文に注するは、詩の讒人罔ㇾ極と云から承て書也、人の讒の極なきと云義也、此九字全く楚詞の語を用○註は、李善也詩は、小雅青蠅篇の辭、

烏-雩哀-哉兮逢二時不-祥一、

【烏雩—】とは、嘆息の詞也、詳見二韻會小補、寘韻戯字下一、此下に、于嗟默默嗟若先生とあり、三度歎詞を用ふ、【逢時—】浮世のさがなき時に出られたは、哀哉と云也、不祥、日本記にさがなしと訓す、さいはひなく、不仕合なる義也、楚國の君暗く臣拙き時に逢を云、

鸞-鳳伏-竄兮鴟-鴞翺-翔　鴞、史記、作ㇾ梟

【鸞鳳—】李翰曰、鸞鳳、喩二賢人一也、鴟梟、惡鳥也、諭二讒人一也、竄、藏也、鸞鳳は靈鳥にて、不祥の世に不ㇾ出鳥也、如ㇾ此の鳥は隱れて、鴟鴞の類の出てとびまはる世と云、鴞は、ふくろうと讀、鴟は、とびと讀、翺翔は、とびかけると訓す徳昌云、伏竄、見二于襄二十一年傳一、此一篇中、言二鳳者三所一、各別有ㇾ意、始者見二他伏竄之鳳一、次者引去之鳳、終者待ㇾ時而出之鳳、鸞鳳を賢人に喩へ、鴟鴞を讒人に喩ふ、濁世なれば、賢人君子退て隱れ、讒臣小人は、出て權をとり、政をする也、

闒-茸尊-顯兮、讒-諛得ㇾ志　闒茸、不才不肖人也、闒吐盍反、茸、人勇反、

【闒茸—】漢書司馬遷傳、在二闒茸中一、師古曰、闒茸、猥賤也、闒、下也、茸、細毛貌、言ㇾ非二豪傑一、胡廣曰、闒茸、不才之人、無二六翮翺翔之用一而反尊顯、爲二諂諛一得二志於世一也、字林曰、闒茸、不肖也○註闒茸、不才不肖人也、是は漢書賈誼傳顏史古が註也、無智無能なるを云、如ㇾ此者は官位尊く顯達し、讒諛とて、人を讒言し、又は媚諛者が滿足する世也とぞ、

謂承天子命也、句解曰、爲臣謫官不敢怨言、謂之敬承嘉美之惠待罪爲長沙太傅、越絕書曰、恭承嘉惠、述暢往事、琴操、伍子胥歌曰、俟罪斯國、志願得兮、賈誼文帝の勅命を敬て承て罪を長沙に待つは、また御恩也、嘉は、善也、惠は、恩也、去ほどに、罪をば長沙にて受んと也、此にて何樣にも仰付らるべきを、長沙へ御流しあるは、辱しと也、是は上つらは辱しと云めれども、底心はこと〴〵しく天子を鼻にのせて云たる也、東坡が配所にて作たる詩も此心也、莫嫌瓊雷隔雲海、聖恩猶許遙相望と作て、弟の子由、雷州と云所へ流されて居たりしに、坡は瓊州へ謫せられて居て遣也、此心は、吾は瓊州に居、其方雷州に在とて、君をしばし恨みな、雲を隔て、其方を望み見ることを御許あるは、こと〴〵しき天子の御恩ぞと云心也、是も此發端の句の體に同意也、

仄聞屈原兮、自湛汨羅　湛音沈

【仄聞―】是より屈原がうはさを云也【仄】史記作側字彙、仄與側同、廣韻、側、旁側也、かたはらと訓ず、側聞は、私かに旁にして聞及ぶ意歟、一説に、屈原は、賈誼より百餘年以前なれば、ほのかに聞と云、是倭訓に牽るゝ者也、考字彙、仄側共に幽遠の義なし、此說何れの字詁を取て云や○註【湛音沈】史記、文選、共に作沈、楚辭後語の註に湛、古沈字、我ほのかに聞、昔屈原此所にて身を沈められしと也【汨羅】、縣の名にて、原が沈し處をば、汨羅と云といへども、古來べきらと讀來るに依てべきらと讀也、

造托湘流兮、敬弔先生

【造托―】漢書註、師古曰、造至也、言至湘水而因託其流也、史記幷楚辭註、七到反、托字、史記作託、文選、銑註曰、造、就也、湘、水名、汨羅流入湘川、故就託此水而弔之、先生、即屈原也、顏師古が註の心なれば誼湘水に來至るに依て、文を書、水に寄ことゝつて、汨羅へ通し流すと也、張銑が義なれば、即此水に就て、文を寄流すと也、譬は成經康頼が、鬼界島にて、卒都婆を流して、都の方へ寄送し意也、屈原は、楚の同姓の大夫にして、亦先輩なれば、敬て弔ふと云、

遭世罔極兮、廼隕厥身　極、止也、詩曰、讒人罔極

尉爲河南守、聞其秀才召置門下、甚幸愛、孝文皇帝初立、聞河南守吳公治平爲天下第一、故與李斯同邑而常學事焉、乃徵爲廷尉、乃言賈生年少、頗通諸子百家之書、文帝召以爲博士、是時賈生年二十餘、最爲少、每詔令議下、諸老先生不能言、賈生盡爲之對、人人各如其意所欲出、諸生於是乃以爲能不及也、孝文帝說之超遷一歲中至大中太夫、賈生以爲漢興至孝文二十餘年、天下和洽、而固當改正朔、易服色、法制度、定官名、興禮樂、乃悉草具其事儀法、色尙黃、數用五、爲官名、悉更秦之法、孝文帝初卽位、謙讓未遑也、諸律令所更定、及列侯悉就國、其說皆自賈生發之、於是天子議以爲賈生任公卿之位、絳灌東陽侯馮敬之屬盡害之、乃短賈生曰、洛陽之人、年少初學、專欲擅權紛亂諸事、於是天子後亦疏之、不用其儀、乃以賈生爲長沙王太傅、賈生既辭往行、聞長沙卑濕、自以壽不得長、又以適去、意不自得、及渡湘水、爲賦以弔屈原、賈生爲長沙王太傅三年、有鴞飛入賈生舍、止於坐隅、楚人命鴞曰服、賈生既以適居長沙、長沙卑濕、自以爲壽不得長、傷悼之、乃爲賦以自廣、後歲餘、賈生徵見、孝文帝方受釐坐宣室、上因感鬼神事、而問鬼神之本、賈生因具道所以然之狀、至夜半、文帝前席、既罷曰、吾久不見賈生、自以爲過之、今不及也、居頃之、拜賈生爲梁懷王太傅、梁懷王、文帝之少子、愛而好書、故令賈生傅之、文帝復封淮南厲王子四人皆爲列侯、賈生諫以爲患之興自此起矣、賈生數上疏、言諸侯或連數郡、非古之制、可稍削之、文帝不聽、居數年懷王墮馬而死、無後、賈生自傷爲傅無狀、哭泣、歲餘亦死、賈生之死時、年三十三矣、及孝文崩、孝武皇帝立、擧賈生之孫二人至郡守、而賈嘉最好學、世世其家○括地志曰、潭州長沙縣、本漢臨湘縣、長沙王吳芮都之○史記索隱曰、誼爲傅、是吳芮之玄孫差、襲長沙王之時也、非景帝之子長沙王發也、綱目集覽同之、漢書作定王發○荊州記曰、長沙城西北隅、有賈誼祠、及誼坐石牀在也、

此篇五段、自始至厥身第一段、自烏雩至爲銛第二段、自于嗟至此咎兮第三段、自誶曰至犬羊第四段、自般紛紛至末第五段、

恭承嘉惠兮、竢罪長沙、

【恭承—】張晏註曰、恭、敬也、李周翰註曰、恭承嘉惠、

してから百年に餘る也、湘水の邊りに、屈が身投し汨羅あり【誼追ー喩】とは、賈昔の屈原を追憶て、此文を書て、湘水へ投入て弔ふ也【自喩】とは、我も原が如く、流さるゝと云心を云述る也【後之君子】とは、賈誼が事を、朱子の批判して云れたぞ、賈誼は、志も高て、才智も人に勝れたれども、去ながら胸が狹きぞ、何となれば、聖人は天命を能知に因て、時の災難に逢ことなとを、人の尤の如は思はぬ也、因此淵明歸去來の辭をば、楚辭の體なれども、少も尤め怨める心なしとて譽し也、樓迂齋曰、誼謫長沙不得意、投書弔屈原、而因以自諭、然譏議時人、太分明、其才甚高、其志甚大、而量亦狹矣○黃文獻公曰、屈原死後百有餘年、而漢有賈生、賈生以適去過湘水、乃投書以弔屈原、太史公蓋合二子以爲傳、夫亦徒見生之爲文、愁痛無聊、發憤壹鬱、不殊於原、而未極其趣者也、夫懷王受欺於張儀、疏屈原而不用、身陷國蹙、爲天下笑、項襄親値其亂、而曾不悟、反怒屈原、迁之江南、而楚亦尋滅、彼屈原者、誠悼夫存君興國之志終無所伸、而爲是發憤無聊也、生之在漢、非有肺腑之親、歷試之久、顧於卒然遇主之頃、欲盡去其舊、而惟己之所欲爲、一不見用、則遂自附於原、而待其君以亡國之主、誠何理耶、夫改正朔、易服色、制法度、定官名、興禮樂、事至不輕也、大臣不聞、議士不與、而遽自草具其儀法、不可哉云云、韻語陽秋七、屈原悲吟澤畔云、賈生謫長沙傅、渡湘水、爲賦以弔之、所遭之時、雖與屈原不同、蓋亦原之志也云云、議者謂誼所欲爲、文帝不能用者、以絳灌東陽之屬譏之爾、故誼之賦首云、鏌鋣爲鈍云云幹棄周鼎云云、觀此是有憾於絳灌東陽者、雖然、勃也、嬰也、敬也、皆素有長者之譽、必不肯害賢而利己、楚漢春秋、別有絳灌、豈其是耶○東坡曰、若賈生者非漢文之不用生之不能用於漢文也云云、及其過湘爲賦以弔屈原、趯然有遠擧之志、其後卒以自傷哭泣、至於死絕、是以不善處窮者也、嗚呼、賈生志大而量小、才有餘而識不足也○黃氏日抄四十七云、賈誼天資甚比高、議論甚偉、惜不聞孔孟之學、然一時無與者云云、

賈　誼、

史記列傳二十四、與屈原同傳、而屈在前、賈在後　賈生、名誼、洛陽人、年十八以能誦詩屬書、聞於郡中、吳廷

生有命、富貴在天、孟子盡心篇、殀壽不貳、脩身以俟之、所以立命也、易曰、樂天知命、故不憂、言は我安閑無爲にして、運數を天に任する上は、深く天命を信して樂之何の疑ふ所有てか、憂悲まんと也、但し本注には、樂天命て、名利に拘はらず、其心を歸去に決定したりと云、在具眼者是非如何

○賦類

大序、詩有六義焉、陸士衡文賦曰、賦體物而瀏亮、李周翰曰、賦象事、故云體物、瀏亮、淸明也、盧疎齋云、賦者、古詩之流也、前極宏侈之規、後歸簡略之創云云蓋詩人之賦、必麗以則也○事文類聚曰、賦之所起、屈原始作賦、既死之後、楚有宋玉唐勒景差之徒、皆以賦稱、是賦之所自戰國始○揚雄曰、如孔子之門用賦也、則賈誼升堂、相如入室矣、如其不用何、上には辭の類を云、是より賦の類を編に因て云、賦とは、諷賦比興雅頌の六義の一つ也、其事を布陳て、分明に說顯すこと、物の體を不具ならぬ樣に象る如くも也、故に體物と云、是賦を作る法也、

○弔屈原賦

弔屈原者、漢長沙王大傅賈誼之所作也、誼以謫去意不自得、及過湘水時、屈原沈汨羅已百餘年矣、誼追傷之、投書以弔、而因以自喩、後之君子、蓋亦高其志惜其才而狹其量云、

屈原が事前におり、弔は、とふらふと訓ず、祭文の類也、朱子楚辭を注せらるゝ時に、此賦書入るとて、其序あり、それを此の題註に引也、文選には、弔屈原文として、弔文の部にあり、弔屈原が賦と、がの字を點じて讀は、惡き也、此文、史記楚辭漢書等に載誼に弔屈原ー作也とは、此賦は、漢の文帝、洛陽の賈誼を召出して、文など書せられたる也、其比賈誼年十八歲なるが、才識勝れたりしかば、文帝累りに官位を進め給ふ、周勃など、漢の朝廷政事法度などを毀る者、洛陽に在とて、賈誼を文帝へ譖たり、然間文帝無故事に流すことも、如何と思召に因て、長沙王の傅に成れとて、南方のはての、長沙に流されし也【傅】は、說文、相也、かしづきと訓す、今云をもり、幼き人の師傅と成也、長沙へは、湘を過て行所と也【誼以ー】とは、【謫】は、流さるゝ也【意不自得】とは、意に面白も思はぬこと也、流されて行に依て、意にすまぬと思ふ也【及過ー】とは、誼長沙へ往に、湘水を通る時は、屈原が死

所爲也、然を願て富貴に成たがるは、僻事也【帝郷—】邦畿千里は、人の居たがる處なれども其も願て居らるゝ理なき程に少も期せぬと也、

懷良辰以孤往、或植杖而耘耔、

耘、音云 耔、音茲、

【懷良—】懷は、喜心あり、【良辰】は、無風雨天氣清和なる日也、非吉日也、東征賦曰、選良辰而將行司馬彪曰、獨往任自然不復顧世、李周翰曰、懷安也、孤、獨也、言安此良辰獨往田園以習其性也【或植杖—】李周翰曰、植杖、謂挿其所執之杖於田以除田中之艸也、耘耔、謂除艸也、詩曰、或耘或耔耘耔の二字共にくさぎると訓す田の草を去也、

登東皐以舒嘯、臨清流而賦詩、

【登東—】李善曰、阮籍奏記曰、將耕東皐之陽呂向云、東皐、當之所也、春事起東故云東也、皐は、田也、毛長詩傳曰、舒、緩也【嘯】説文、吹聲也、或作歗、詩其歗也歌、箋云、蹙口而出聲又吟也、淵明屋の邊に、小高き處あるに登りてうそを吹也、琴賦曰、臨清流而賦新詩清流などのあるに臨みて詩を作りなとして慰むと也、

聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑

淵明樂夫天命、無營無求決於歸去而無疑也〇此一節、斷盡歸去來辭一篇之旨、

【聊乘—】張銑曰、聊且也、詩曰、聊與之謀、箋云、聊、且略之辭、此にては、なりあひにと云心歟、銑曰、乘化謂乘運會也、李善曰、家語、孔子曰、化於陰陽象形而發、謂之生化窮數盡、謂之死、莊子曰、生有所乎萠死有所乎歸周禮大宗伯合天地之化易上係辭曰、天地變化、聖人效之、莊子曰、天地爲爐、造化爲炭、韻會曰、寒暑相易則爲變、萬物生息則爲化【化】は、造物化土とて、天地の間陰陽を運用して萬物を成敗する主宰あり、銑曰、歸盡、謂死也、言はどうなり共、運化に任せて時節到來次第死せんと也【歸】は、入也、歸根と云意【盡】は、我命數盡果て死る也【樂夫—】論語爲政篇、五十而知天命、朱子註曰、天命、即天道之流行而賦於物者、乃事物所以當然之故也、又顏淵篇、死

觸物興懷、歎其昔行今止〇此一節、述其歸去之後、景象之美、交游之樂

【善萬―】羅山曰、無心の物だも其時を得て榮る心あるは、枯たるを見ると替り、一段快也、此理仁の道也、人として榮るを見にくしと思ひ、枯凋るを好む者はなし、若有之は理に暗き方也、周茂叔窻前の艸掃はぬと云へるは、此心也註【觸】は、をかしさはる意【感】は、說文、動人心也、物を見聞に就て、我心に感が起る也淵明が身も、昔は出て仕へ、今は歸て隱る、是景物を見て、我身の上を感懷する也愚謂行休は、行休と讀て、行末の今休息する義ならん歟、上句と相應す但與註不合、

已矣乎、寓形宇內復幾時、曷不委心任去留、

【已矣乎】論語公冶長篇、子曰、已矣乎、吾未見能見其過而內自訟者也、朱子注云、已矣乎者、恐其終不得見而歎之也、何事も打捨よと嘆して云詞也【寓形宇―】李善、曰、尸子、老萊子曰、人生於天地之間、寄也、琴賦、委性命兮任去留、劉良曰、寓、寄也、曷、何也言何不委棄常俗之心、任性去留也吾身の世界に寓ること幾程か有んに、世に心のまゝにして、居るまい事が有てこそと也【委心】は、隨意也、親族朋友を訪尋ね、遊山玩水に就ても心まゝに去も留もする也〇句解云、此三節、述其歸來之後、所交所見、眞樂如此、

胡爲乎遑遑欲何之、

【胡爲―】李善曰、孟子滕文公篇下、孔子三月無君、則皇皇如也、朱子註皇皇如、有求而弗得之意也、按するに皇皇と遑遑と同、名利を求て馳廻る義也孔叢子孔子歌曰、天下如一欲何之、何事に利欲に拘はりて、惑ひ行きての用はと也

富貴非吾願、帝鄉不可期、帝鄉、京都也、

【富貴―】大戴禮、孔子曰、所謂賢人者窮爲匹夫而不願富貴、莊子華封人謂堯曰、乘彼白雲、至于帝鄉、富貴は願て得られぬ者也、誰か位高くなることは否と思ひ、富を嫌ふにては無れども、輕重あるは、皆天の

【農人―】文選無ニ及字一、劉良曰、有レ事、謂ニ耕作一也西疇謂ニ潜所一レ居之西一也【疇】田也國語註曰、一井爲レ疇柴桑の百姓どもが最早田を耕す時分てあるさうと告るほとに、さらば西の方に田を持たるを、耕さんなど〻思ふ也、如レ此百姓に打交はりて居るこそ樂なれと云也、淵明上戸なる故に我田を半分は、酒米を作ると也、

或命ニ巾車一、或棹ニ孤舟一、

或命―【命】は、命令也、奴僕に云付る也、李善曰、孔叢子孔子歌曰、巾レ車命レ駕將レ適ニ帝都一、鄭玄周禮註曰、巾猶レ衣也、呂延濟曰、巾レ車猶レ言レ裝ニ飾其車一、或擧ニ棹於孤舟一、將ニ游行一也【巾】は、かざりと訓す、柴桑にて誰恐しくもなく、飾りたる車に乘又は舟に乘て自由に行きて、處處を見て居ると云也、又案するに、周禮春官の註に、巾車、役車也、然れは農民諸工の器物米穀を運ふ雜車也淵明隱居の時、似合しき事也、文選の註、貴人の乘物は、不ニ相應一也と云説あり、但陶公歸田詩に、濁酒聊自適、日暮巾ニ柴車一とあれば、即自作にて義分明也、

既窈窕以尋レ壑、亦崎嶇而經レ丘

窈窕、深長貌、壑、澗水也、謂ニ行舟以尋一レ之也、崎嶇、險也、駕レ車以涉レ之也、

既窈―註【窈窕】深長貌とをくふかき處を云、曹操詩曰、窈窕山道深、二字出ニ于毛詩周南一【壑】は、註に澗水也とあり、水の出る磵也此句は、孤舟に係て云也、亦崎―註崎嶇險也、さかしき難所を云、箇樣の所をは、車に乘て行て遊ふ也、此句は、車に係て云也、此段の注は李周翰也、

木欣欣以向レ榮、泉涓涓而始流

欣欣、生意貌、涓涓、泉流貌、

木欣欣註に【欣欣】生意貌、木の春になり、陽氣を受て、芽の立體也【向】は、それに近づき向ふ義也【榮】字彙茂也、さかふると訓す、枝葉次第に繁榮せんとする也註に、涓涓泉流貌、春に成ほどに、水も解て、泉始て流る也此註は、呂尙也、

善ニ萬物之得一レ時、感ニ吾生之行一レ休

深く愛する也、陶公が四時詩に、冬嶺秀孤松とも云り○註【謂―】呂尙注也【堅】は、其姓の堅固なるを云【貞】は、霜雪にも色不變して、貞正なる也、松は堅貞の者なる故に、淵明愛すると也、前にも松菊猶存とあり、此までは、彭澤より皈りたる體を云、此より下の文は、吾生涯の取置を云也、

歸去來兮、請息交以絕游、

【歸去―】歌曲は、箇樣に起語を再ひ興して節奏に合する也【交】は朋友の事也【游】は仕官の路也、言は今巳に皈りすましたる程に是よりは一向人にも交らす官游の念を絕萬事を放下し安閑にして餘年を可送也李善曰、列子曰公孫穆屛親昵絕交游、

世與我而相遺、復駕言兮焉求

焉、何也、

【世與我―】我も世を棄世も我を棄昔君平棄世世亦棄君平是兩方より互に相棄也桓子新論曰、凡人性難極也難知也故其絕異者常爲世俗所遺失焉【復駕―】毛詩衛風竹竿篇曰、駕言出遊馬車に乘て、浮世をする事は、少も求めまひと也道理を思ふに求て成らぬ事也わざと如此貧を好に非す願て叶はぬ理を會得するに因て也愚謂駕言は車に乘て遊行也○新論又曰、知我者謂我心憂不知我者謂我何求、

悅親戚之情話、樂琴書以消憂、

悅親―【親戚】禮記註、孔穎達曰、親指族內戚言族外、親は父方、戚は母方、李善曰、說文曰、話、會合爲善言也、句解曰、但欲會親戚故舊喜悅以說眞情之語、劉歆遂初賦曰、玩琴書以滌暢吾一族とも、心安く一所に居て、互の情を喜ふと也【樂琴―】浮世を愁る心深けれとも、此憂をば、琴や書を以て消ておくる也淵明は無絃の琴とて絲を掛ぬ琴彈と也琴を彈とさへ思へは、同し事と思ふ故に、如此、書を讀とも義理のすまぬ所を强ちには見ぬと也、我か理のすむ處はかりを見ることかすき也樂む道理まて也、

農人告余以春及、將有事于西疇、

くに、靜々と廻行也、佳は、面白意【門雖ー】淵明が家へは、人の往來も稀なる故に、門あれども常に鎖して置と也、是世を逃れたる體を云逃る也、

策扶老以流憩時矯首而游觀

策杖以扶老弱、周流而憩息也、矯、擧也、

【策扶ー】李善曰、易林曰、鳩杖扶老、衣食百口、因學紀聞云、扶老、藤名也、又扶老は、杖の名、杖能老人を助くるに依て、扶老と號す、杖に成かづらなれば、扶老藤と云あり、但此所をば、老を扶くと讀べし、淵明年寄たるほどに、屋敷の內を行くにも、杖をつく也、吾老は、杖に助けられたると也〇註【策杖ー】此註は、呂延濟也【流憩】は、流は、周流と注にあり、ありく心也、憩は、注に、息也とあり、やすむ心也、吾身の自由なる處を云、時矯ー【時】は、時時也【矯擧也】此註は、王逸也【游】字、六臣文選、及楚辭後語には、作遐、按するに、古文に游目と云語あり、而れば緩緩と目を放て、景物を見遣義也、園の內を行きて、折折首を打揚て、四方の體を遠見などするまで也、

雲無心以出岫鳥倦飛而知還

言雲自然之氣、無心意以出於山岫之中、自喩心不營事、自得縱逸也、言鳥晝飛而暮還故林、亦猶人日出而作、日入而息也、

雲無ー【岫】說文、山穴也【倦】字彙、疲也、勞也、無心の雲さへ山のくきを出、鳥だも晝は四方を飛で、夜なれは、故林とて、寢ぐらに歸る、况や人たるもの、其理を知ざらんやと也、是淵明皈來の理を云也〇註【言ー】李周翰が注也【營】は、韻會、造也【縱逸】は、ほしいまゝ也、言は淵明何事を不成逍遙放逸にして、日月を送る也、但此註の心は、羅山解と別也、

景翳翳以將入撫孤松而盤桓

謂賞其堅貞、故盤桓而戀也、

【景翳ー】李善曰、丁儀妻寡婦賦曰、時翳翳而稍陰、日暈暈以西墜、爾雅曰、盤桓、不進也、易屯卦曰、盤桓利居貞、景翳翳は、日暮の時分に、家に入んずる也、其路に一本松のあるを撫て、たちもとをると也、愚謂【將入】は、日の西に沒んとする也、此句は我已に老て、暮齡の頹んとするに比する心あり、去程に景物を

渡水、今人則用以盛水而已、按するに、ふくべと云說は、此所には無用なれ共、爲參考記之、只つぼと云義可然言は盃を取て、先一盃手づから掛て飮と也【眄庭―】酒を一盃飮て、さて庭の樹木を見れば、枝葉茂りて、心よく漫るを見れば、枯るや朽たるを見るやうには無て、面白ほどに、顏も喜べる色あると也、陸機高祖の功臣頌曰、怡顏高覽○註は、呂向註也、大全註、榮字作樂也、

倚南牕以寄傲、審容膝之易安

北郭先生妻曰、今結駟列騎、所安不過容膝、言審思此事、則所須非廣遠、容膝亦可安也、

倚南―【倚】は、依かゝる也、南の窓に向ふて、打はたかりて居る體也【寄】は、托也【傲】は、字彙に、慢也、倨也、寄傲は、此所にてうずいをする也、ほこるは、常のをごりに非ず、我內にて、誰を恐れくもなく、樂々と居ると云也、句解曰、徙倚南窓下、以寄傲世之情、審容―【審】は、字彙に、詳也、熟究也、能合點する義也【安】は、落著て案堵するを云、宮殿樓閣に居ても、我居處は、膝二つより外は無用也、句解曰、知足常足、信此容膝之小室、亦易自安○註【北郭先生】―北作李は、誤也【結駟】戰國策、結駟千乘、註云結、連也、四馬曰駟、車一輛に四馬を懸るを云、天子は又外に兩驂を加るに依て、六龍と云也【列騎】は、騎馬を多列る也、それほどの大名に成ても、其身の所安は、不過容膝と也、韓詩外傳、楚莊王聘北郭先生、曰、臣有箕帚之婦、願入計之、即謂婦、楚欲以我爲相如何、婦曰、結駟列騎、所安不過容膝、食前方丈、所甘不過一肉之味、而殉楚國之憂、可乎、於是遂不應聘、按するに、列女傳には、此語を以て、楚の於陵の子終が妻の事とす、

園日涉以成趣、門雖設而常關

田園之中、日日游涉、自成佳趣、

園日―【涉】は、字彙に、徒行厲水也、徒にて水を渡は、急には難進やうに、そろ〳〵と行也【趣】は、趣向也、心の所趣也、日日に菜園などを、そろ〳〵と行き慰て、時節を感じ、風景を愛して、何なりとも、我思やうにする也註は劉良也、游は、をよぐ也、水を游ぐ如

が、只松と菊とは、不改して殘り在也、存は、在也【註】【昔蔣詡】李善曰、三輔決錄、蔣詡、字元卿、舍中三徑、唯羊仲求仲從之遊、皆坐廉逃名不出、羅山云、三徑は、門へ出る路背戸へ通ふ路、井へ往く路也、資治通鑑曰、蔣詡、漢平帝時人爲兗州刺史以廉直爲名、王莽居攝、詡以病免歸鄉里、按ずるに、蔣詡初て開三徑淵明慕之、後宋の吳宣義も亦景之、見于黃山谷詩集、又楊誠齋東園新開九徑、江梅棠桃李橘杏紅梅碧桃芙蓉各植一徑、命曰三三徑、詩云、三徑初開是蔣卿、再開三徑是淵明、誠齋菴有三三徑、一徑花開一徑行、淵明が菊をすきて愛せしこと多し、菊は百花零落の以後にありて、而も霜に傲り有香に因て、淵明愛する心深也、樂天詩云、不是花中偏愛菊、此花落後更無花とも云り、採菊東籬下、悠然見南山など、陶が詩にもあり、此詩を聖一國師の、採菊東籬下、悠然見南山と點ぜられたと也、此意達磨の心にも劣るまじきとて、第一の達磨と、淵明を指也、菊を採て、南山に對する心は、巧みに非ず、自然の景氣なれば、此時の心は、達磨に劣るまじきと云也、松は不變の色にて、節義ある物なれば、淵明面白く思ふ也○西清詩話云淵明意趣眞古、清淡之宗、詩家視淵明、猶孔門視伯夷也葛常之韻語陽秋十二云、不立文字見性成佛之宗、達磨西來方有之、陶淵明時未有也、觀其自祭文則曰、陶子將辭逆旅之館、永歸於本宅、其擬挽詞曰、有生必有死、早終非命促、其飲酒詩則曰、採菊東籬下、悠然見南山、云、皆寓意高遠、蓋第一達磨也、

攜幼入室、有酒盈樽、

【攜幼―】善曰、戰國策曰、扶老攜幼迎孟嘗君、嵇康贈秀才詩曰、旨酒盈樽、子共を連て、奧へ入て見たれば、先酒が樽につまりて有しを云、

引壺觴以自酌、眄庭柯以怡顏、

柯、木枝也、怡、悅也、言其枝柯相掩覆以爲可榮、故悅之、

引壺―【引】は、字彙に、延也引取義【壺】は、周禮註、以壺爲尊疏云、盛酒之器、又謝在杭五雜俎曰、以長而曲者爲瓠、短項而大腹者爲葫蘆、即匏也、亦謂之壺、豳風、八月斷壺、鶡冠子、中流失船、一壺千金是也、然則壺嫩而甘者、亦可食、老而苦者、古人皆用以

明彭澤より、在所へ舟に乘て行體を云、舟に乘て歸り來れば、風がそよ〳〵と淵明が衣を吹也、搖搖、本集幷文選作遙遙、史記或云搖搖也、此注は、張銑也、

問征夫以前路、恨晨光之熹微

問前路遠近也、熹微、日欲暮也○此一節、述其歸去之由

【問征―】毛詩曰、駪駪征夫、征夫は、旅人也、舟中にて行逢ふ舟にも、又は陸を行者にも、是より柴桑栗里へは、道いか程あるぞと問ば、いく〳〵ら程あると云に依て、短日にして長途なれば、日が暮んかと恨むる也、【晨光】は、朝日のこと【熹微】は、夕日の義、此註は、劉良也、

乃瞻衡宇、載欣載奔

衡宇、謂其所居衡門屋宇也、載、則也、欣則奔、喜而至也、

【乃瞻衡宇―奔】毛詩衡門篇、衡門之下、可以棲遲、注衡門、横木爲門也【宇】字彙、屋四垂爲宇、釋名曰、宇、羽也、如鳥羽翼自覆蔽也、衡は、横と同、木を横へて門とするを、衡門と云、かぶき門と號す、屋の四方に庇を垂るを宇と云【載欣載奔】は、周詩の語也、舟よりあがりて、我家の門のかぶきや、屋のみねを見付て、嬉く思て走行也、

僮僕歡迎、稚子候門

稚、小也。候門、伺候潛到也、

【僮僕―】周易、得僮僕貞、説文曰、【僮】奴也、徐曰、僮、即罪人之子、供給使者也【僕】給事者也、古者有罪者、不入於刑則役之【僮僕】は、つかいものども也、史記、楚懷王稚子子蘭【稚子】は、幼なき子ども也、淵明有五子、儼俟份佚佟と云、淵明が來るを喜びて迎に出たるもあり、門に立て待もあり、

三徑就荒、松菊猶存

昔蔣詡幽居開三徑、潛亦慕之、言三徑已就荒蕪、惟松菊耳、

【三徑―】三徑は、園の間に、逕を三通り立分るなるべし、聯珠詩格注、三徑者、松徑竹徑菊徑也、愚謂淵明が三徑必しも松竹菊とも、古書に見へざれば、決して云難し、言は淵明僅に居らぬ間に、三徑草茂り荒果たる

私自憐、注、惆悵、自失貌、字彙、悲愁、惆悵は、うれへの貌也、なんぞ形を養はんとて、心を枉て悲まんやと也、許彥周詩話云、彭澤歸去來辭云、既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲、是此老悟道處、若人能用此兩句、出處有餘裕也、

悟已往之不諫、知來者之可追

悟已往之事、亦不可諫、而方來之事、尚可追止、謂雖爲官、今將歸去、是來者可追也、

【悟已―】已往は、過去也、來者は、方來也、自是以後の義言は今日迄の過りは、不及是非、明日よりは如此なることは、すまじきと云事を、能合點したぞと也、此註は、文選李周翰が注也、無方字、追下有改字、論語微子篇、楚狂接輿歌曰、往者不可諫、來者猶可追、

實迷塗其未遠、覺今是而昨非

如人行迷失道途、尚尤未遠可早回也、謂休官而歸、

【實迷―】一旦迷ふは迷たれとも、早く立歸たると也、此句は、易の復の卦、不遠復、無祇悔とある語を含て書たり○李善曰、楚辭曰、回朕車而復路、及迷塗之未遠【覺今―非】今日柴桑の歸は、一段是也、昨日まで其理を悟らずして、彭澤の令と成しは非と也、覺の字と、知の字の義、同やうなれども、別あり、覺は、吾と是非をさとる義あり、知は、人に云れてなんど悟る心也、此句は、五十にして四十九年の非を知と云ことを孔子の友に、蘧伯玉と云者の語あるを含て書也○莊子謂惠子曰、孔子行年六十而化、始時所是、卒而非之、未知今之所謂是之非五十九非也○註は、呂尙文選の注也、尤字は、猶字を省て犹と作を、誤て尤と書也、言は行まじき方へ、蹈迷て少行かゝれ共、忽に心付て、未遠して早く立回る也、彭澤の令と成こと、僅に八十餘日にして、即掉頭て舊宅に歸ることを云、

舟搖搖以輕颺、風飄飄而吹衣

行舟歸也、

【搖搖】は、舟の動て行貌【飄飄】は、風の輕く吹貌、淵

日、潜無履、弘顧左右造履、左右爲之請履度、潜便於坐申脚令度焉、弘要之還州、問其所乘、答云素有脚疾、向乘籃輿、亦足自反、乃令一門生二兒共輿之、至州而言笑自適不覺有羨於華軒也、弘後欲見輒於湘澤間候之、至於酒米乏絶、亦時相贍、其親朋好事、或載酒肴而往、潜亦無所辭焉、每一醉則大適融然、又不營生業家務、悉委之兒僕、未嘗有喜慍之色、唯遇酒則飲、時或無酒、亦雅詠不輟、嘗言夏月虚閑、高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人、性不解音而畜素琴一張、絃徽不具、每朋酒之會、則撫而和之曰、但識琴中趣、何勞絃上聲、以宋元嘉中卒、時六十三、所作之文集、並行於世○排韻云、陶元亮、在晉名淵明、在宋名潜、世號靖節先生、侃曾孫也云云、晉義熙末、徵爲着作郎不就、所著文章、義熙以前、明著晉代年月、自宋永初以來、惟書甲子而已、故朱子書云晉徵士卒、五子儼俟份佚佟、祖茂武昌太守、父姿城太守、史逸其名、昭明太子所作傳云、陶淵明、字元亮、或云、潜字淵明、顔延之誄云、晉徵士潯陽陶潛、晉史、潜、字元亮、南史、潜、字淵明、淵明詩集年譜云、在晉名淵明、在宋名潜、元亮之字、未嘗易矣、名淵明、統與延之説是也、名潜、晉史南史の説非也、年譜、張續所作也、

歸去來兮、田園將蕪、胡不歸、（蕪、謂艸也）（胡猶何也）

【歸去―】いざ彭澤の令を辭して、柴桑へ歸らん、田園將蕪【田】は我田【園】は、畠也、菜園などする處を園と云淵明が田畠も、定て荒て、草が生て有ふほどに、歸て作らんと也、なんぞかへるまいことはと也、毛詩曰、式微式微、胡不歸、

既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲、

【既自―】我八十日之間、彭澤の令に成て居たるは、形に使はれて、心を損じたもの也、形をこそ心が使ふべきに、不覺なる事をしたと也、淮南子曰、形神俱役者也【奚惆―】文選注、呂延濟曰思求於祿故形屈而駈役、此我自爲、何所惆悵而獨爲悲、楚詞曰、惆悵兮而

立海、又曰、歸去來、以賦爲辭○韓子蒼曰、傳言淵明以至郡遣督郵、即日解印綬去、而淵明自叙、以程氏喪去奔武昌、余觀此士、既以違己交病、又媿役於口腹、意不欲仕久矣、及因妹喪即去、蓋其孝友如此、世人但以不屈於州縣吏爲高、故以因督郵而去、此士識時委命、其意固有在矣、豈一督郵能爲之去就哉、躬耕乞食、且猶不恥、而恥屈於督郵、必不然矣○容齋隨筆第八、淵明在彭澤、悉令公田種秫、曰吾常得醉於酒足矣、妻子固請種秔、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種秔、其自叙亦云、公田之利、足以爲酒、故便求之、猶望一稔而逝、仲秋至冬、在官八十餘日、即自免去職、所謂秫秔、蓋未嘗得顆粒到口也、悲夫○句解云、凡此篇四截、自初至熹微第一截、乃瞻衡宇以下、至盤桓第二截、歸去來兮以下、至行休第三截、已矣乎以下第四段第四截內有小段三

陶淵明

唐太宗文皇帝御撰晉書隱逸傳第六十四、陶潛、字元亮、大司馬侃之曾孫也、祖茂武昌太守、潛少懷高尚、博學善屬文、穎脫不羈、任眞自得、爲鄉鄰之所貴、嘗著五柳先生傳以自況云云、其自序如此、時人謂之實錄、以親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸、州召主簿不就、躬耕自資、遂抱羸疾、復爲鎭軍建威參軍事、謂親朋曰聊欲絃歌以爲三徑之資、可乎、執事者聞之、以爲彭澤令、在縣公田悉令種秫、曰令吾常醉於酒足矣、妻子固請種秔、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種秔、素簡不私事上官、郡遣督郵至縣、吏白應束帶見之、潛歎曰、吾不能爲五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪、義凞二年、解印去縣、乃賦歸去來、其辭云云、頃之徵著作郎不就、既絕州郡覲謁、其鄉親張野、及周旋人羊松齡龐通之等、或有酒要之共至酒坐、雖不識主人、亦忻然無忤、酣醉便反、未嘗有所造詣、所之唯至田舍及廬山游觀而已、刺史王弘以元凞中臨州、甚欽遲之、後自造焉、潛稱疾不見、既而語人曰、我性不狎世、因疾守閑、幸非潔志慕聲、豈敢以王公紆軫爲榮邪、夫謬以不賢、此劉公幹所以招謗、君子共罪不細也、弘每令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐通之等、齎酒先於半道要之、潛既遇酒、便引酌野亭、欣然忘進、弘乃出與相間、遂歡宴窮

は永叔、後の秋聲賦の註に詳也【兩晉】西晉は、武帝司馬炎泰始元年より四主五十二年、東晉は元帝より、十一主百三年にて亡ふ、兩晉百五十餘年の間、詞人才子、文章は歷歷多有れども、終に歐陽公の氣に入たる文章なき故に、西晉に文章なしと云、只淵明皈去來辭ばかりが氣に入たまでぞと評せられしと也【其詞―】とは、其詞義とは、詞も義理もと云心也【夷曠】は、平らかにして廣也、【蕭散】は、さびて美麗なることなく、爽なる心也【楚の聲といへども】とは、楚詞の體に似たれともと云也【尤怨―】とがめうらむることの病がなきと云義也、論語に、不怨天、不尤人云云、是は屈原が文は、怨を含て書たり、淵明が文は、怨たる氣色なくて、體は楚辭に似たりと云也、其詞も義理も、平にさは〱として、楚辭に似たり、而も怨み尤むる心なきほどに、一段面白と云也○冷齋夜話云、李格非善論文章、嘗曰、諸葛孔明出師表、劉伶酒德頌、陶淵明歸去來辭、李令伯乞養親表、皆沛然如肝肺中流出、殊不見斧鑿痕、是數君子在後漢之末、兩晉之間、初未嘗欲以文章名世、而其詞意超邁如是云云○遯齋閑覽云、

六一居士推重陶淵明歸去來、以爲江左高文當世莫及、涪翁云、顧謝之詩、可謂不遺鑪錘之功矣、然淵明之墻、數仞而不可窺也○玉屑八、漫唐錄、子虛大人賦、夸做遠遊、而屈子心事、非相如所可窺識、故氣象自別、淵明歸去來辭、千古絕唱、亦是祖歸田賦意、此類甚多○又曰、休齋論歸去來辭云、陶淵明罷彭澤令、賦歸去來、而自命曰辭、迨今人歌之、頓挫抑揚、自協聲律、蓋其辭高甚、晉宋而下欲追躡之不能、漢武帝秋風辭、盡蹈襲楚辭、未甚敷暢、歸去來、則自出機杼、所謂無首無尾、無終無始、前非歌而後非亂、欲斷而復續、將作而遽止、謂洞庭鈞大而不淡、謂霓裳羽衣而不綺、此其所以超然乎先秦之世而與之同軌者也○東坡別集五、陶淵明作歸去來、有其詞而無其聲、余晩治東坡築雪堂、作斜川之歌、又取歸去來詞、稍加檃括、使就聲律、倚耒而歌、扣牛角而爲之節、以休老勞農、相勸東坡之下、蓋般涉之哨遍○源流至論云、靖節之歸去來、有閑鷗立海之狀、讀之令人清灑忘名利心、往製也、或者有以賦爲辭之議、嗚呼、爲文之難如此、而況於論文者乎、注、前輩謂陶淵明如野鶴任風、

紳也、男子鞶帶、婦人帶絲、束帶は、衣冠を著する時に用る也、吏が淵明に申事は、郡守より郡廻りの横目が參る程に、束帶して出てまみへられよと云也【潛嘆―】とは、淵明吏が云事を聞て、嘆息して云く、吾何として、すこしの俸祿にかゝはりて、鄕里の小童部のやうなるものに、腰を屈て、出合んと也、文獻通考曰、令官俸、一日五斗云云【即日―其志】とは、即日とは、其日と讀、解印綬とは、【印】增韻、刻文合信也、事物紀原曰、七國之時、臣下璽、始稱曰印、漢自三公而下、有金銀銅三等、事始曰、州縣之有印、始於秦云云【綬】又曰、蓋貫佩玉而相承受者也、今所帶綬、蓋起於七國而名之自三代也、印は、令になれとの印也、綬は、絲を組たる者にて、印を帶に付る也、常の者に紛れぬやうに、物司をする者は、印を帶に下る也、淵明彼印も綬も、皆返して引籠也、遂に此辭を作て、吾か志の程を見はすと也、【後以―】とは、後劉裕と云者、晉の臣たりしが、威勢ありて、晉の君を推付て、宋へ位を移すに因て、二姓に仕へんことを恥かしく思て、終に不出也、是賢臣二君に不仕と云義を思故也、

晉は司馬氏、宋は劉氏、故に二姓と云、淵明は、陶侃が後にて、代代晉の臣たりし故に、劉裕などには、中〻仕へまじきと思心あり、劉裕、字は德輿、晉の恭帝元熙元年に位を劉裕に禪れり、劉裕國を宋と號し、永初と改元す、恭帝を零陵王に封ぜしが、遂に是を鴆殺す、劉裕後に宋の高祖武帝と云、武帝淵明を著作郎の官に成さんとて、被召出ども不仕也【宋文帝―】とは、劉裕位を奪て王に成て、其子を文帝と云、文帝、名は義隆王業漸く盛也、文帝復淵明を召出されたれとも、不出して死す、按ずるに、淵明、晉の安帝義熙元年十一月彭澤縣令の印を解て歸耕す其より二十三年を過て宋の文帝元嘉元年に卒す、韻會、卒、即律切、死也、禮記、大夫曰卒○【謚靖節―】文選、顏延年陶徵士誄、宜謚曰靖節徵士、李善注、謚法曰、寬柔令終曰靖、好廉自克曰節、靖節は寬柔にして廉潔なるに依て謚號とする也、徵士とは、召とも至らざりしに依て云也、尋到原頭曰、漢昭帝徵有行義者韓福等至長安、書徵士始此、字彙、謚之言、烈也、行之跡也、誄行立號以易名也、自周公始【歐陽―】とは、歐陽公、名は脩、字

諸侯以惠愛爲德家叔以余貧苦、遂見用于小邑、于時風波未靜、心憚遠役、彭澤去家百里公田之利、足以爲酒、故便求之及少日、眷然有歸歟之情、何 則質性自然、非矯厲所得、飢凍雖切、違己交病、嘗從人事、皆口腹自役、於是悵然慷慨深愧平生之志、猶望一稔當斂裳宵逝、尋程氏妹喪于武昌、情在駿奔、自免去職、仲秋至冬、在官八十餘日、因事順心、命篇曰歸去來兮、乙巳歲十一月也【東坡曰】俗傳書生入官庫、見錢不識、或怪而問之、生曰固知其爲錢、但怪其不在紙裹中耳、予偶讀淵明歸去來辭云、幼稚盈室、瓶無餘儲粟、乃知俗傳信而有證、使瓶有儲粟、亦甚微矣、此翁平生只於瓶中見粟也耶

陶淵明彭澤より、吾在所の柴桑栗里へ引籠て作たる辭也【歸去—】とは、來の字は、付字にて、皈と云心まで也、史記孟嘗君傳、馮驩謌曰、長鋏歸來乎、食無魚、長鋏皈來乎、出無輿、長鋏皈來乎、無以爲家、二程全書曰、性中只有箇仁義禮智四者而已、曷嘗有孝弟來、按ずるに是皆以來字爲語助、若以爲往來之來、則大に意義を失せん、而も韻書には、未見爲語助者、重考舊解、建仁寺德昌、眞如寺一元も、皆已に爲助辭【朱文公】とは、名は熹、字は元晦、號晦菴、徽州新安人也、楚辭の後語を編たる時に、此辭楚の屈原文の體に似たりとて、被書入時、此生を序に書れし也【歸去—】此辭は、晉の淵明か作と也、陶は氏、潜は諱、淵明、字也、晉陶潜が作る處とばかり書て聞ゆれとも、次でに字をも人に知せん爲に、陶潜淵明と書れたる也【潜爲—】とは、字彙曰、縣令、漢法、縣萬戶以上爲令、以下爲長、一說、令、領也、理領之、使不得相犯也、縣令は、今の鄕代官也、守は、其地を守護する義、郡守は、今の郡奉行也、守は、上官、令は、下官也、淵明彭澤と云縣の令とて、彭澤を知行する者の下司に成て、八十日ばかり居たりし內に、郡守とて、其郡の主、處處の法度を置に人を廻すを、郵を督すと云、則官の名也、書言故事曰、督郵、主諸縣糾察之事、後漢郡主簿、亦曰督郵、隋以錄事參軍代之、掌句稽文簿、率彈善惡、字彙、馬傳曰置、步傳曰郵、郡は、國の次、縣は郡の次也、【吏白】とは、說文、吏治人者也、漢書注、師古曰、吏、理也、理其縣內、此にては、ふれながしをする定使の事也【當束—】とは、說文、帶、

洗と也【滄浪—】滄浪の水が濁るならば、泥足を可洗と也、劉良注云、清喩明時可以修飾冠纓而仕也、滄浪之水、江水名也、濁喩世昏闇可以濯我足、言宜隱遁也、世の治れるを清に譬へ、世の亂を濁に譬ふ、治りたる時は、出て可仕、亂れたる時は、隱れ遁るべしと云心を以て、屈原を諷諭する也、此義上の世と推移とあるに相應ずる也○孟子離婁篇云、有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足、孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也、注、滄浪水名、纓、冠索也云云○右の歌を、孟子には、水が濁れば、人が泥足を洗ひ、水が奇麗に清は、人が冠を洗ふと、義理をとる時は、冠を洗るゝも、水の心、足を洗るゝも、水の心、善と惡とは、己にあると云義にとる、水を己に諭て云也、さて此にては、漁父が屈原に當て取る、義理は、滄浪の水は世にとりて、世間が濁たらば足を洗ひてをり、世間の清たる時、冠を洗はで、不謂ことに、濁りたる水にて、冠を洗ひたがるほどにと云義にとれは、此文にかけて面白き也【遂去—言】如此歌ふて、舟を刺て去るより、互にものを云なんだと也○句解、昔孔子見隱者發鳳兮之嘆、欲與之言、其人趨避不得與之言、今原託辭漁父、於其卒也、不復與言、其意蓋取諸此、終篇托意放辭、大抵不肯自汗之意也、按るに論語微子篇、楚狂接輿、歌而過孔子前曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下欲與之言、趨而辟之、不得與之言○東坡八卷、和子由木山引水詩曰、蜀江久不見滄浪、注次公曰、孺子歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、雖在楚地有滄浪水之名、而滄浪兩字、大率言水之狀耳、如選詩云垂影釣滄浪、

○歸去來辭

〔朱文公云〕、歸去來詞、乃晉陶潛淵明之所作也、潛爲彭澤縣令、時郡守遣督郵至、吏白當束帶見之、潛歎曰、吾安能爲五斗米折腰向鄉里小兒耶、即日解印綬歸去、遂作此詞以見其志、後以劉裕將移晉祚、恥事二姓、遂不復仕、宋文帝時、特徵不至、卒諡靖節徵士、歐陽公言兩晉無文章、幸獨有此篇耳、其詞義夷曠蕭散雖楚聲而無尤怨切蹙之病、

本集有序云、歸去來兮辭序曰、余家貧耕植不足以給、幼稚盈室、缾無儲粟、生生所資、未見其術、親故多勸余爲長吏、脫然有懷、求之靡途、會有四方之事、

埃乎、湘、史作常、音長、葬上史有而字、於、史作乎、一無之字、中下史有耳字、皓皓、一作皎皎、一無而字、塵埃、史作温蠖、若従諸本、則埃叶衣字、作於支反、若従史、則白叶蒲各反、蠖、於郭反、而二字自相叶反、〇温蠖、猶惛憒也、

【寧赴─】たとひ身を湘水に沈むともと也【寧】説文、願詞也、徐曰、人言寧可如此、是願如此也、論語、禮與其奢也寧儉【湘】説文、水出零陵陽海山、北入江史記、作常流、注、猶長流【葬江─】縦魚の餌には成ともと也、安能─【皓】字彙、音槁、潔白精瑩貌【皎】音矯、潔白也、何ぞ皓皓のいさぎよき心を持ていながらと也【蒙世─乎】今の世の人の、きたなき心に従つて、塵に交はらんやと云心也【註】【惛】は、亂也、痴也【憒】は、心亂也叶反字楚詞註に作矣、

漁父莞爾而笑、鼓枻而去乃歌曰、滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足、遂去不復與言莞、胡板反、枻、一作曳、一無乃字、吾一作我、下句同、濁、叶竹六反、莞、微笑貌、鼓枻、扣舡舷也、滄浪之水、即漢水之下流也、見禹貢、纓、冠索也、

【漁父─笑】漁父屈原が存分をきゝてにこ〳〵と笑也【莞】爾【註】微笑也【鼓枻而去】【註】鼓枻、扣船舷也、舟のはたをたゝひて去る也【乃歌曰】船歌をうたふ也、此辭は屈か作也、此船歌は、古來ある歌なるを、此へ取付けて作也【滄浪─纓】【註】滄浪之水、即漢水之下流也、見禹貢、按ずるに史記夏禹本紀注、括地志云、漢水、源出梁州金牛縣東二十八里嶓冢山、又曰、均州武當縣有滄浪水、漢水記云、武當縣西四十里、漢水中有洲、名滄浪洲、荊州圖經曰、滄浪洲、長四十里、廣十三里寰宇記、二水合流、故號滄浪水、漁父亭、在武岡軍、春秋戰國爲楚地、即屈原見漁父處、濯纓臺、在江陵、屈原濯纓處、江陵、春秋時、謂之郢都、詳見方輿勝覽二十七江陵府【禹貢】書經集註曰、上之所取謂之賦、下之所供謂之貢、是篇有貢有賦、而獨以貢名篇者、孟子曰、夏后氏五十而貢、貢者、較數歲之中以爲常則、貢、又夏后氏田賦之總名、禹の洪水を治め給ふ時、天下を九州に分ち、其土地の所産みつき物を悉くに記して、一篇の書にし給ふ、是を禹貢と云也、禹貢曰、嶓冢導漾東流爲漢、又東爲滄浪之水、滄浪は、滄水浪水とて漢より流出る水の末也、其水清ならば冠の緒を可

推移、又云、衆人皆濁云云衆人皆醉云云此與孔子和而不同之言何異、使屈原能聽其說、安時處順、寘得喪於度外、安知不在聖人之域、而仕不得志、狷急褊躁、甘葬江魚之腹、知命者肯如是乎、故班固謂露才揚己、忿懟沈江、劉勰謂依彭咸之遺則者、狷狹之志也、楊雄謂遇不遇、命也、何必沈身哉、孟郊詩三黜有慍色、即非賢哲模、孫郃云、道廢、固命也、何事葬江魚、皆貶之也、而張文潛獨以謂楚國茫茫盡醉人、獨醒唯有一靈均、哺糟更使同流俗、漁父由來亦不仁、註に、𨣧、子禮切、集韻、𨣧、手搦酒、又作擠、推也、𨣧の字を、こす共、しぼる共、したむ共讀、

屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣、安能以身之察察受物之汶汶者乎、

察察潔白色、汶汶、垢辱也、振、音正、汶音問、

屈原曰我聞──【我聞】とは、其方の云如くなれとも、吾學びて聞たることとありと云義也、新沐──【沐】字彙、濯髮也【彈冠】逸曰、拂土坌也、今こゝに髮を洗ふ者有しに、必冠に坌はなくとも彈くへし、彈は塵を拂ふ心也、新浴──【浴】說文、洒身也【振衣】逸注、去塵垢也又行水などをしては、著物に塵なくとも、必可拂、如其なる也○困學紀聞、楚辭漁父、吾聞之、新沐者云云者乎、荀子曰、新浴者振其衣、新沐者彈其冠、人之情也其誰能以己之潐潐、受人之掝掝者哉荀卿適楚、在屈原後、豈用楚辭語歟、抑二子皆述古語也○【安能──】なんぞ我身の奇麗なるをもつて也【受物──者乎】人のむさき塵芥を蒙るまじきぞと也【察察】註潔白也、清く潔きを云【汶汶】註垢辱也、楚詞の註には作沾、文章軌範の註には亦作坫、沾は、字彙に、漬也、濡也、坫は、屏也、障也、又反爵之坫、案ずるに、坫は此の義に不合、沾は、楚詞の注も同じければ當是、儀禮の註に、以黑至白爲辱とあり、然れば、沾辱を、うるほひけがると云義に可見、重考呂尙注曰、汶汶、塵垢也、又或本作垢辱是にては、あかづきけがるゝ意にて、文理分明也、

寧赴湘流葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白而蒙世俗之塵

與世推移、世人皆濁、何不淈其泥而揚其波、衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨、何故深思高擧、自令放爲、餔、食也、歠、飲也、糟、醨、皆酒滓也、以水盪糟曰醨、醨者、薄酒也、淈、胡沒切、歠、昌日反、醨、力支反

聖人――【聖】說文、通也、心通萬物之情、若耳之通聲、又禮記禮運註疏、才過千人曰英、倍英曰賢、過萬人曰傑、倍傑曰聖、ひぢりと訓す、不凝滯――【凝】は、氷堅也、停也、こり固まる義【滯】は、凝也、淹也、つかへて不流を云聖人は、萬づ物によれかたまらぬ義也、所謂意必固我の心なきを云、逸曰、不困辱其身也【能與――】聖人は、世上の風と推移て、已を立、人に忤ふ事なし、但し其中に於て、心あるへし、推移やうに、善惡あるが故也、所謂和而不同是也、逸曰、隨俗方圜【世人――】逸注、人貪婪也、言心は人皆無道ならばと云義也【何不――】張銑曰、隨其流也、言は人並に泥水を立て丶、其波を揚て居ぬぞと云、此心は、世濁らば、吾も潔白を晦して、世に隨ひ交るとも、心さへ濁り汚ねば、善と云也、老子の和光同塵も、此心に可通【衆人――】逸云、巧佞曲也、世上の人、醉たるか如くなる内にはと云義【何不――】とは、如此なる世ならば、何とて人と同じやうに、蒙昧に成て居て、其糟を食ひ、汁をも啜らぬぞと云也、此心は、人皆醉らば、吾も智慧を藏し、尖を包て、諸人と混雜すとも、只愚なるやうに有て居るべし、箕子が奴と成、甯武子が愚なるも、此心に可通【餔其糟】逸註、從其俗也【歠其醨】食其祿也○史記評林、李廷机曰、隨流揚波者、不至於俱濁、亦不必獨清、餔糟啜醨者、不至於俱醉、亦不必獨醒、所謂與世推移者也、餘曲見文選註【何故】なにと云ことなれはと云也【深思――】李周翰曰、謂憂君與民也【高擧――】逸注、獨行忠直、言は深く君と民とを憂思ひ、人にもぬけて、忠節だてをすると也、羅山云、ふかく道理を思慮し、身を高ぶりてと云也、此說恐未是【自令――】屈原人にそぐはず、柔かにせずして、我身を潔白高上にする故に、心から放ち棄らる丶事をすると也、是皆隱者の詞也○韻語陽秋第八余觀漁父告屈原之語曰、聖人不凝滯於物而能與世

其非而放棄之也、王逸楚辭注曰、放身放逐也、放の字を、ゝくとも訓す、流人を放逐と云は、そんじやうそこにをくと云て、追放ちて居れとも、そこより他へやらで置と云心に、放置と云也【游】は、游歷、へめぐりあそぶ也【江潭】は、離騷序云、遷於江南屈潭、私云、即原自沈處、今屬潭州寧鄉縣【行吟—】王逸注、戲水側也【吟】は、去聲、長詠也、歎意、あまり欝憤のあるに因て、江の畔に、うそふきて行きしを云、【顏色—】憔悴、又作顦顇、或作瘷瘁、韻會、憂患也、かしけたりと讀、面がはりして瘦る心あり、顏色かしけはてたと云義也【形容—】なりかたちも瘦果、枯木の如くと云義也、

漁父見而問之曰、子非三閭大夫與、何故至於斯、

【漁父—】とは屈原が體を、漁父が見て問也【子非—】漁父が屈原を能見知て、其方は、楚國の三閭大夫にては無歟と問也、三閭は、官の名、昭氏、屈氏、景氏、謂之三閭、其一族を司る也、文選註、三閭大夫、原故官也、又按するに、爾雅に、里門を爲閭と云へば三閭は、三家と云義なるべし【何故—】何とて此澤畔へは來るぞと云也、又文選注云、曷爲遭此患也、

屈原曰、擧世皆濁我獨淸、衆人皆醉我獨醒、是以見放

與、史作歟、至於斯、作而至此、擧世、一作世人、皆、史作混、我上一有而字、下句同、放下一有爾字、

擧世—【擧世】とは、天下の人、悉く皆と云意、王逸注、濁、衆貪鄙也、淸、忠潔巳也、世は皆無道にて濁たるに、我獨すみきつてあると也、濁とは、世に付て云、世上の行ひ汚れよごれて、利欲の塵に塗る也、【衆人—】逸曰、醉、惑財賄也、醒、廉自守也、今時の人、皆心の內が、酒に醉たる如く、蒙昧にあるに、我獨酒の醒たる如くにあると也、醉は人に付て云也心迷ひ惑ふて、昧く愚かなるを指也【是以—】如此人とも、世とも、心が齟齬たる故に、讒言に逢て流されたると云義也、逸曰、放棄草野也、

漁父曰、聖人不凝滯於物而能

邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷、離騷者猶離憂也云云、屈平既疏、不復在位、懷王死、頃襄王立、令尹懷王子子蘭、使上官太夫短屈平於頃襄王云云、王怒而遷之、屈原至於江濱、被髮行吟澤畔云云、又作懷沙賦云云、於是懷石遂自投汨羅以死、屈原死之後、楚有宋玉唐勒景差之徒者、皆好辭以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫、其後楚日以削、數十年竟爲秦所滅、自屈原沉汨羅後百有餘年、漢有賈生、爲長沙王大傅、過湘水、投書以弔屈原○說文、汨、長沙汨羅淵也、屈平所沈水、應劭曰、汨水、在羅、故曰汨羅、今屈潭是也、韓文、張舜民云、入歸義江口十里許、即汨羅、南曰汨、北曰羅、洲上有忠潔侯廟、又詳于史記屈原傳註○楚武王子瑕、食采於屈、因氏焉、屈重、屈丐、屈蕩、屈完、屈到、屈建、屈平、皆其後也、屈平、字原、曰正則靈均者、釋其義爲美稱也、屈は氏、原は名、平は字也、屈原は、楚王之一族にて、其先祖代代、屈と云所を知行して居たりし故に、姓とす、懷王の左徒と成、三閭大夫に任す、內にしては、國家の政事、號令の相談、外にしては、諸侯の聘禮、賓客の應對を司て、皆能埒明ければ、王甚信之、上官大夫靳尙と云者、妬て王へ讒言しけるを、王聽納て、屈原を疎遠にせらるゝ程に、原愁へて作離騷、後に秦の昭王、楚王を欺て、武關にて會合せんと云けるを、懷王赴んとせらるゝ程に、屈原强ちに諫れ共、不聽して行、如案秦王武關を鎖て、懷王を不返、懷王の子頃襄王、繼國而立、懷王の子子蘭、屈原を讒しければ、王怒て流す、此辭も配所にて作りたる也、○容齋隨筆、自屈原詞賦、假爲漁父日者問答之後、後人作者、悉相規倣、司馬相如子虛上林賦、以子虛烏有先生亡是公、揚子雲長楊賦、以翰林主人子墨客卿、班孟堅兩都賦、以西都賓東都主人云、源流至論後集、屈原之離騷、有長鯨蒼虬不得伸之態、讀之令人激切生忠憤心、奇體也、或者至有露才揚己之譏、

屈原既放、游於江潭、行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁、

屈原——【既】は已然之詞【放】は、字彙、逐也、廢也、置也、古者臣有罪宥之於遠也、春秋正義臣事君王、諫不從、有待放之禮、放者、有罪當刑而不忍刑之、寬

洗其耳拭其目曰、嚮者聞言負吾友遂去終身不相見、又曰、許由、字武仲、堯舜皆師之云云、隱乎沛澤之中、堯舜乃致天下而讓焉云云、退而遯耕於中岳潁水之陽、箕山之下、文選李周翰註曰、漁父、避世而隱於漁者也、原因之而叙焉、又詳于莊子【荷簣】とは、論語憲問篇に、孔子衞の國にて磬を擊たまふ時に簣を荷る人、門前を通り云けるは、心ありて磬を打り、孔子の心、天下道を行はん事を忘ざる故に、其意磬の聲に形はる、簣は、土籠也、此簣を荷る人、能聞知て、今無道にて孔子を用ひざるに、其天下を忘ざるは、無用のこと也と云を、孔子聞給ひて、然るには非す、世を忘捨ることは最易き事也、我心は天下一家萬人の如くに見る故に、一日片時も世を忘るゝこと無と也【丈人】是も論語微子篇にあり、孔子楚國へ行たまふ時に、子路供奉せしが後れて、路にて丈人に逢り、子路孔子を見たりやと問ければ、丈人不知と云て、杖を立て、草を切てぞ居ける、時に子路を留て一宿せしめ、雞を殺して其二人の子をも出して、子路に見せける、明日此事を子路孔子に申しければ、孔子それは隱者なりとて、又子路を遣し物語せしめんとす、子路立皈て行けば、彼丈人他行して逢ざりき、是は孔子の傳言を聞まじきとて、わざと留守をつかひたる也、又楚狂接輿が孔子の車の前を、歌を歌ひて通りて、孔子を諷ずる時に、孔子是と語らんとすれば、跡を消て去ぬ、此漁父が滄浪の歌を歌ひて去て、屈原と再び云さるも皆是隱者の風體也【或曰原託之】とは、上に原設詞云と同說也、此詞分六節、屈原既放至於斯第一節、屈原曰擧世至見放第二節、漁父曰聖人至令放第三節、屈原曰吾聞至汶汶者乎第四節、寧赴湘流至埃乎第五節、漁父莞爾至終第六節、

屈平

史記列傳二十四曰、屈原者、名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞彊志、明於治亂、嫻於辭令、入則與王圖議國事、以出號令、出則接遇賓客、應對諸侯、王甚任之、上官大夫與之同列、爭寵而心害其能、懷王使屈原造爲憲令、屈平屬艸藁未定、上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平爲令、衆莫不知、每一令出、平伐其功曰、以爲非我莫能爲也、王怒而疏屈平、屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、

て韻を協へて、一體を成すといへるは、歌韻也、又此題註に秋風辭一章、凡三易韻とあり如此證據多ければ、此辭三韻なること勿論也、此に六韻一叶と云は、此次の漁父辭の事也、庚韻支韻、歌韻徵韻文韻、灰韻是也、韻を後先へ混雜して用る、是を錯雜成章と云、漁父辭のみに非ず、楚辭一部の内に、此體多し、六韻一叶の事は、漁父辭の註に詳也、眞寶の註をする者、漁父の註に、六韻一叶と書べきを、錯て秋風辭の下に置、然は右の三韻一叶は、奈老何の下にあるべし、然を錯に不能忘の下に、置也、惺齋(妙壽院藤斂夫先生)も此義を是とすべしと被申たり、此外種種の説あれども皆不可用之○愚案するに皇明神宗皇帝御製序ある古文眞寶には、三韻の三を二字に作り、六韻の六を三字に作る、蓋し徵陽の二韻、通して一叶たり、歌の韻、又上の二韻に通して三韻一叶となる義歟、如此は、錯雜成章楚詞之體也の九字の義、能分明也、若漁父辭に在ては、楚詞之體也と云注無用歟、不及云也、

○漁父辭

此篇、乃屈原之所作也、漁父、蓋亦當時隱遁之士、或曰亦原之設詞耳○(迂云)漁父、蓋古巢由之流、荷蕢丈人之屬、或曰、亦原託之也、

【漁】説文、捕魚也、すなどりと訓ず【父】音甫、徐曰、父、老也、穀梁傳註、父猶傅也、男子美稱、此辭、史記文選楚辭にも載たり、楚辭は、楚人屈原作たる辭を編たる書也、离騷經より天河九歌九章なとを一つに編て、是を楚辭と題號す、註【此篇—】朱文公註也、漁父は、避名晦迹、卑き業に身を寄る者也【亦屈原設詞耳】とは、一説には、屈原我と相手を立て、自問自答して作と云義也、別に眞寶の漁父あるに非す○【迂云】樓昉、万姓統譜、鄞縣人、宋紹熙中進士、昉與弟昞俱以文辭名、少從呂祖謙學、號迂齋、其文汪洋浩博、從學者凡數百人、嘗集古今文、名曰崇古文訣、迂齋か云心は、此漁父は、疑ふらくは、上古の巢父許由、又は荷蕢丈人などの類にて、才德もある人なれ共、漁父に成て隱遁して居たるならんと也【漁父蓋古巢由之流荷蕢丈人之屬】とは、高士傳曰、巢父、堯時隱人、年老以樹爲巢而寢其上、故人號爲巢父、堯之讓許由也、由以告巢父、巢父曰、汝何不隱汝形、藏汝光、非吾友也、乃擊其膺而下之、許由悵然不自得、乃遇清冷之水、

聞昔湯伐夏、左驂牡驪、右驂牡驔、而遂殺桀、武王伐殷、左驂牡騏、右驂牡驥、而遂克紂、至於華山之陽、主君不欲渡則已、與妾同舟、何傷乎、簡子悅、遂與渡、中流爲簡子發河激之歌、其辭曰、升彼河兮而觀清、水揚波兮杳冥冥、禱求福兮醉不醒、誅將加兮心驚云云、簡子悅曰、昔者不穀夢娶妻、豈此女乎、以爲夫人、

簫鼓鳴兮發棹歌 棹歌、發棹而歌、

簫は、吹もの也、鼓は大鼓也、只管絃の類を云り、【發棹歌】とは、水手楫取の歌也○註【棹歌—】とは、竿を擧て歌ふを云、

歡樂極兮哀情多 〔列女傳〕陶答子妻曰、樂極心哀生、

【歡樂極—】とは、喜の至極は、必哀みの事あるぞと也、○註【樂極哀生】とは、陶答子が妻の語也、此詞を承て作る也、列女傳は、漢の劉向が作也、陶は、地の名、答子は、陶を治めたる者也、遍く列女傳を考るに、無此語、宜別考、

少壯幾時兮奈老何 〔古長歌行〕少壯不努力、老大徒傷悲○六韻一叶、錯雜成章、楚詞之体也、

【少壯】とは、盛なる年を云【幾時】とは、いくばくほどか有ぞと也、【奈老何】とは、いくほどもなき中に、年よりたると云義也、此は武帝少き時、位に即て、文帝景帝太平の迹を受て、粟も腐り、錢など餘り澤山に有て縄が腐りて、取あつかはれざる程有しに其上大唐四百餘州を治て、猶不足に思召て、匈奴を取んとて、軍をさせられて、人を損さしたる事などの有しを、此辭を作り玉ふ時分は、後悔に思召す故に、如此作り玉ふ也、匈奴は、韃靼の事也、文中子に、秋風辭、武帝悔心之萠乎と云へるは是也、文中子註、漢武歌云、歡樂極兮哀情多、此悔悟前過、志形哀痛之詔也○註【古長歌行少—】とは、少年時に、勤めて物を仕課せされは、年よりて悔しきと云義也、此語をうけて、本文に作れり、帝王の身にて、如此作り玉ふ事、殊勝の事也、句解云、武帝處富貴之中、乃因少壯而思老之將至、况他人乎○六韻一叶は、古今不詳、今案するに、秋風辭は徽韻、歌韻、陽韻此三韻を通用す、上に三韻一叶と云是也、句解に、前四句、係兩韻換韻、後五句係同音協韻自成一體也、前四句は、兩韻に係て韻を換ふと云へるは、徽韻陽韻也、後五句は、同韻に係

【蘭有秀兮】とは、秋蘭も、花の盛なると也、有秀の字を、文選に、はなさけることありと讀り、蘭は、あらゝぎと訓す、本草曰、春芳者爲春蘭、色深、秋芳者爲秋蘭、色淡、菊有芳とは、秋菊も香しく盛なると也、此より上の辭は、皆秋の體を云り、下の句を云んとて、先秋の景氣を與して云也、楚辭後語註云、蘭秀菊芳、以興下句之詞、與湘夫人、及越人歌同法、知此則知興之體矣、秋唯蘭獨秀、菊自芳、感時也【懷佳人—】とは、群臣の事を、何事も忘れぬ義也、忠あるに依て不忘と也、【佳人】とは、美人の事を云、此にては、忠ある臣下に喩ふ、楚辭にも、美人を賢人に譬たる事あり、文選、懷字作攜、楚辭後語、作懷、佳人、指群臣之賢者、攜而同行、不能暫忘也○註佳人—とは、本文に註せり○此三韻一叶とは、三韻は、徽陽歌韻也、此註は、篇末奈老何と云句の下に可置を、誤て爰に書也、詳に後に註す、又按するに、三韻一叶、六韻一叶は、林以正が註也、餘は皆文選の註也、

泛樓船兮濟汾河

【應劭】漢書註云、作大船、上施樓、故號曰樓船、

【樓船】は、やぐら船なり、【汾河】は、河東への行幸に、汾河を船にて渡り玉ふ也○註應劭漢書註曰、作大船、上施樓とは、船の上にやぐらを造ると也、天子の召す船なれば、結構に樓閣を作る、武帝の時、楊僕爲樓船將軍、應劭は、後漢人也、前漢書を註す、氏族排韻云、應邵、字仲遠、少篤學博覽、治聞舉高第、刪定律令、著漢官儀、又撰風俗通、以辨物類名號、漢献朝拜軍謀大尉、

横中流兮揚素波

【列女傳】津吏女歌曰、水揚波兮杳冥冥、

【横中流】とは、河の中程に、船のよこたふるを云り、【揚素波】とは、白き波の立を云也、是河中の體を作り玉ふ也○註に列女傳を引て、水揚波兮杳冥冥と云語を、本文に承けて作り玉ふと也、列女傳、趙津女娟者、趙河津吏之女、趙簡子南擊楚至河、津吏醉臥不能渡、簡子怒欲殺之、娟懼持楫而走、簡子曰、女子走何處、對曰、妾父聞王君來渡不測之水、恐風波之起、水神動駭、故禱祠九江三淮之神、供具備禮、不勝盃酌、醉至如此、願待其醒而殺之、簡子將渡、用楫者少一人、娟曰、願備父持楫、簡子曰、不穀將行、撰士大夫齋戒沐浴、義不與婦人同舟而渡也、娟對曰、妾

にて渡り玉ふ、河の中程にて也、【與群臣飲燕】とは、近臣達と、酒宴を成さるゝを云、【上歡甚】とは、武帝言外に御機嫌好也、【乃自作秋—】帝御機嫌好まゝに、此秋風の辭を作り玉ふ也、上行より、秋風辭曰と云までは、其時の體を、史官が書たること也、此秋風辭、史記漢書には見えず、文選に載たり、

漢武帝

前漢書第六、武帝紀曰、孝景皇帝中子也、母曰王美人、年四歳立爲膠東王、七歳爲皇太子、母爲皇后、十六歳後一二年正月、景帝崩、甲子、太子即皇帝位云云、武帝、諱は徹、年十七にして即位、在位五十四年にして崩す、壽七十一、葬茂陵、

秋風起兮白雲飛、艸木黄落兮鴈南歸

禮記曰、季秋月、草木黄落、鴻雁來賓、

四季の中に、以秋爲感慨こと多し、白樂天暮立詩、大抵四時心惣苦、就中腸斷是秋天、五色の中に、以白爲秋、主西方、物入陰、色剝爲白也、言は秋風に吹れて、雲の勢も早く、飛やうなる者也、風は聲を聞雲は色を見る、是秋の聲色を寫し出す也【草木—】とは、此時分草木も、葉黄み枯落て鴈もはや南に翔り來ると也、是亦無情の草木有情の鴈を以て、秋の景氣を述る也○註禮記曰と云は、月令篇の語也、孟春より季冬まで七十二候の事を盡く記せり、一箇月には、六候あり、爰に所引は、文選李善が註也、此辭の本文に就て、禮記の語を顚倒して言之、季秋月とは、九月を云也、草木黄落、鴻雁來賓、是も九月驗也、八月の處に、雁來と書く、九月に來賓と、賓の字を書ことは、八月に來る雁は、在付て主と成て、九月に來る雁賓と成る、故に賓の字を書く、賓は、まらふどゝ讀り、禮記月令集註曰、雁以仲秋先至者爲主、季秋後至者爲賓、如先登者爲主人、從之以登者爲客、夫木の秋部に、草木黄落鴈南歸と云事を、常盤井入道大政大臣の讀る歌に、草も木も、色かはり行秋風に、南に歸る初鴈の聲とあり、

蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘

佳人、謂群臣也○此三韻一叶、

と不審あり、漁父は騷の體なれは、楚辭にも漁父とばかり題して、辭の字なし、後人辭の字を加へたり、然ば辭と題することは、秋風を始とすへしと云義也、句解、此篇感時發與、於始言歸紀實、於中慷慨悲思、於終句語不多而意在言外、以萬乘君得詩人吟詠之趣、其可愛也夫、

上行幸河東、祠后土、顧視帝京欣然、中流與群臣飲燕、上歡甚、乃自作秋風辭曰、

事物紀原曰、司馬遷作史記、凡指斥君尊者、依違不正言、稱曰上、太史公自叙、漢書武本紀曰今上之類是也、今臣子亦呼天子曰上、由司馬子長始也、蔡邕曰、上者、尊位所在、不敢媟言尊、尊之意、【上】とは帝也、帝王を上と云事、上代にはなし、司馬遷史記を書とて、天子の事を、上と書たるが始也、それよりして後、世の人、帝を主上と云、今上と云も此上の字の意也、【行幸】蔡邕獨斷曰、天子車駕所至、賜以食帛、民爵有級、或賜田租、故謂之幸、行幸、巡幸也、韻會に詳也、行幸とは、天子のみゆきある處は、或は不便なる在所を通り玉ふ時は、年貢を宥し、訴訟の事あれは、御聽あるに因て、みゆきある處は、さいはひあると云に依て、行幸と云也、幸の字は、さいはひと讀り、【河東】は、河は、黃河也、本晉の地也、武帝紀、元鼎四年十月、自夏陽東幸汾陰十一月甲子、立后土于汾陰睢上、禮畢、行幸滎陽、還至洛陽、史記、高祖以十月爲歲首、武帝大初元年初用夏正月、故改爲大初、私按自元鼎四年至大初元年凡十年也、以秦正月考之則秦十一月、當夏八月、今之秋風字用夏時、漢書地理志、師古曰、汾陰、屬河東郡、武帝は、河東にて地神を祠り玉ふ也、后土、詩註疏曰、社者、五土之神、能生萬物者、以古之有大功者配之、共工氏有子勾龍爲后土、能平水土、故祀以爲社、漢書郊祀志曰、自共工氏霸九州、其子曰勾龍、能平水土、死爲社祠、師古曰、共工氏在太昊炎帝之間、無祿而王、故謂之覇、勾、讀曰鉤、白虎通、社、土也、人非社不立、故封土立地、示有土也、【顧視帝京】とは、武帝道より宮中を御覽ありて也、前漢の都は、長安也、【欣然】とは、欣は、喜也、【中流】とは、河東へ后土を祠りに行幸あるに、汾河と云を、船

綱目關鍵、第四見二主意首尾相應一、第五見二鋪序次第一、第六見二抑揚褒貶一、第七見二詩策之句法一也、

辭類　古文矜式云辭賦之文、貴二婉麗一云云、辭以寄レ情深而語緩、易繫辭、屈原楚辭是也、楊仲弘云、詩亡而離騷作、亦國風變也、

【辭】とは、屈原が讒せられて在し時に、周の詩をうけて、騷と云事を、哀れに作る也、其騷を一變して、武帝又辭を作り玉ふ也、辭は、詩と騷との體を兼て、約かにして心深き樣に云ことを、辭とす、是文章の一體也、

○秋風辭

【休齋云】、詩變而爲レ騷、騷變而爲レ辭、皆可レ歌也、辭、則兼二詩騷之聲一、而尤簡邃焉者、漢武帝因レ祠二后土於汾陰一、作二秋風辭一章一、凡三易レ韻、其節短、其聲哀、此辭之權輿乎、

文選有二并序二字一、○註【休齋】姓陳、名知柔、字體仁、溫陵人自號二休齋居士一、在二天臺一、徧遊二名山一、飯至二會稽一、愛二巖岳之秀一、留止二一年、罷二賀州一、歸留二惠陽一三年、暇日泛二湖一、登二白鶴峯一、追二和東坡詩一、陶二寫羅浮風物一殆盡、凡四奉レ祠諸生受レ業、戶屨常滿、姪模楷皆登レ第、向友錄休齋か言は、【詩變而爲騷】とは、周の詩を、屈原流されてから、一變而愁なる樣に作り成したり、是を騷と云、騷は、うれひと訓す、【騷變爲辭】とは、屈原が作りたる楚辭の體を承けて、武帝作り玉ふ也、【皆可歌】とは、詩も騷も辭も、皆歌ふ者也、【辭兼詩騷之聲】とは、辭は、詩と騷との意を承て作る者也【尤簡邃焉者】とは、詩と騷とを、簡約深邃にして、意を云立るを、辭と云也、【漢武帝因祠后土於汾陰】とは、武帝后土を汾陰に祠り玉ふとて、此辭を作れり、后土は、地神也、【一章】とは、一篇の事也、【凡三易韻】此辭の內、微韻陽韻歌韻あり、唐人は詞和らかなるに因て、此三韻通する也、故に叶韻と云、周詩にも、楚辭にも、叶韻多し、【其節短其聲哀】とは、歌物は、章歌ふし拍子あり、一節每に韻を用て、辭は短けれ共、律に叶へて歌ふ時は、其聲哀れなると云義也、【此辭權輿乎】とは、詩權輿篇註、權輿始也、造レ衡自レ權始、造レ車自レ輿始、權は、秤の錘也、輿は、車の中の坐する處也、衡は、はかりのさほ也、秤を作る者は、先權を作て後、衡を作也、車を作ものは、先所レ乘を作て後、餘處を作る也、權輿の二字、畢竟始と云義也、屈原か漁父辭は、武帝より百二三十年以前なるに、何とて秋風辭を、辭の始めと云べきや

と題する本あり、其れには、滕王閣序の序の字を作記字、而して記部に只此一篇ばかりを載す、【諸儒】とは、註者を指す也、迂齋東萊疊山など也、諸とは、此註解非出於一人之手也、儒とは、儒釋道と云る時は、三つなれども、學問をして道を明むるを儒と云也、日本記には、儒の字をはかせと讀り【箋解】とは、註をする義也、後漢書六十九下、儒林傳、鄭玄作毛詩箋、註、箋、薦也、薦成毛義也、張華博物志曰、鄭註毛詩曰箋、不解此意、或云、毛公嘗爲北海相、玄是郡人、故以爲敬云、陸德明毛詩音義曰、鄭氏箋、本作牋同、薦年切、字林曰　箋、表也、識也、案　鄭六藝論曰、註詩宗毛爲主、毛義若隱略、則更表明、如有不同、即下己意、使可識別也、孔穎達毛詩正義曰、鄭於諸經皆謂之註、此言箋者呂忱字林云、箋者、表也、識也、鄭以毛學審備、遵暢厥旨、所以表明毛意、記識其事、特稱爲箋、餘經無所遵奉、故謂之註、註者、著也、言爲之解說使其義著明也、箋は、あらはすとも字さしとも讀り、あらはすの時は、本文の意をあらはすと云義也、字さしの時は一字づゝ指つめて、註をすると云意也、解は、とくと訓す、牛を屠り切る時、刀を用るに

不入力、骨肉の透間を能斷解を、解と云、其如くに、文文句句のつがいを能解故に、置字也、莊子曰、庖丁爲文惠君解牛曰、臣之刀、十九年、所解千牛而刀刃若新、彼節者有間而刀刃無厚、以無厚入有間、恢恢乎其於遊刃必有餘地、是以十九年　刀刃如新、又韻會、解、判也、从刀判牛角、徐按　庖丁解牛、會意、又禮記經解註、解者、分析之名、前淮南王傳、以出爲解、顏註、解說、若言分疏、【古文】は、古人の文章也、【眞寶】とは、文章の內にて、眞實の寶なりと云義也、よりて此書の名とす、韓文十六、韓退之答崔立之書の題註に、樊汝霖曰、韓公所學者、堯舜三代孔孟之道、其文則六經古文也、公以古文爲寶、又蔡氏書經集傳序、不見眞古文乎、歷代寶之とあり、【後集】とは、古文前集とて、詩などを書たるあり、文章ばかりを集めて後集とす、前集後集各十卷あり【卷】とは、昔は紙なくて、竹に物を書也、さて長き文を、一つゞけに卷けば、大に成て、取扱ひにくきに因て、卷の一、卷の二と云て、幾つにもする也、それよりして、今とぢて紙に書をも、卷と云り、字彙に、可卷舒者曰卷、編次者曰帙

○呂東萊見文法云、第一見主張、第二見規模、第三見

辭、遂述其槩而爲之書、

此段は、序をかく所謂を云也、【有章余君】、元史、余璟、字元璋、建章府有章人也、其父左迁、終卒于福州東、璟、洛來廬于塚上、既十九年、以醫鳴其世、工絲竹、蓬文詩、一旦至勁川之側、不知其終焉【語予―】予は、士文を云、【先師】とは、以正也、【猶未―】序が無れば、序を書給へと云程に、不獲辭して序を書也、三國志、趙岐、昔爲賣餅者、其文好異、作孟子註與序、不曰序曰題辭也、【盍請序之】とは、序を所望せひてはと云義なるべし、【辭】は、辭退の義也【述】、字彙、著述也、又紀人之事、纂人之言、皆曰述、大槩は、大率也、

至正丙午孟夏、盱江後學鄭本

士文叙、

至正丙午は、元朝第十四主順宗の年號也、【孟夏】は、四月也、即本邦第一百代後光嚴院貞治五年に當る、【盱江】は、前漢地理志、盱水、自建昌西北至南昌入海、【後學】は、晩進末學の義、鄭は氏、本は名、士文は字也、傳未按出、

魁本大字諸儒箋解古文眞寶

卷之一、

此書は、何れの人の編たると云こと不詳、林以正と云人、市にて買取て廣むる也、句解は、樵東耕野何晦夫が釋文也、或云、句解に、龍川劉軒張肇字天啓と云人、古文眞寶を編校すとあり、一說に、句解は、此眞寶の註に非ず愚案するに、皇明弘治年中雲中青藜齋跋此書曰、永易黃堅氏所集古文眞寶二十卷、而前集十卷、後集十卷云云、卷首に、神宗皇帝御製の序を載たり、作者の姓名考證する所あるべし、然れば古來隱晦、今日按出す、但し未知黃堅者何時人也【魁本】とは、魁は、さきがけと讀り、古文の板、世間に以來起るとも、我板が一番也と云意也、【大字】とは、林以正が市にて買取たる本は、細字にて有を、大字に直して、板に開くと云義也、魁本大字の四字は、板行する者の置字也、又按するに、鰲峯先生所刻の本、目錄の前には、善本大字諸儒箋解古文眞寶と置、編首の端には、魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集と題す、而して原道以下の諸文を不載、又明本大字諸儒箋解古文眞寶

傳、馮道、本田家、道入朝、任贊劉岳在後、道行數歩輒反顧、贊問岳何爲、岳曰、遺下兎園書爾、（謂俚儒敎田夫所誦者也）道大怒云云、兎園は、漢の文帝の子梁の孝王の園也、王薨じて後、皆田畠と成て、耕民の年貢、吏卒の算帳ばかりの取あつかひ迄なれば、物の鄙き喩を云んとては、兎園冊と云也、【黨庠術序】、禮記學記曰、古之敎者家有塾、黨有庠、術有序、國有學、陳氏註、古者二十五家爲閭、同在一巷、巷首有門、門側有塾、民在家者、朝夕受敎於塾也、五百家爲黨、黨之學曰庠、敎閭塾所升之人也、術當爲州、萬二千五百家爲州、州之學曰序、序則敎黨學所升之人也、正義曰、術、遂也、周禮、萬二千五百家曰遂也、在家五百ある村を黨と云、其所の學校を庠と云、在家一萬二千五百家ある鄕を術と云、其學を序と云、【箝口】前漢晁錯傳、拑口不敢言矣、袁盎傳、箝天下之口、又五行志、畏刑而拑口、又後漢崔琦謂梁冀曰、鉗士口、蔽王聽、箝、或作拑、又鉗通、箝は、さしはさむ物也、けぬきにて挾しむる如くに、口を閉るを、箝口と云、

予寓書林六年、得一善士而與之友者、必先生之高第也、來後去先、雖不及會、然觀其徒、則可以知其師矣、

此段は、鄭士文林以正が爲人を知事を云、【予】と云は、鄭士文也、【寓】は、字彙、寄也、托也、やどると訓ず、【書林】、林は、叢木也、衆盛也、蓋書の多聚る所を云、言は士文在書林こと年久し、一善士を得て友とするが、其人は、以正先生の高第也、【高第】史記索隱云、謂才優而品第高也、孟子題辭曰、高第弟子萬章云云、才藝に高下次第あり、高第は、才勝れて其品高也、【來後―】とは、我生れ來る事は以正に後れ、又以正が死去事は、我に先て早ほとに、士文は竟に以正には不會、されども其徒を見て、以正が爲人と、出處進退の名人なる事を知る、其師とは、以正也、

一日有章余君語予曰、古文眞寶、先師用心之勤矣、猶未有以題其首、非缺歟、盍請序之、不獲

三山林以正也、【三山】、大明一統志、福州府、三山、郡名、方輿勝覽、在歸安縣西南八十三里、【林以正】、名楨、銳於詩者也、見詩學大成叙、本傳未審、【先生】、韻會、師之稱、【徒】は、類也、學生を指て云、【閱】は、字彙、觀也、【市】は、買賣之所、言は林以正學者に敎授するの暇に、市肆を見廻りて、此書を不圖見出して、買求得たる也、後漢王充、家貧無書、常遊洛陽市肆、閱所賣書、見蒙求、【未善—】言は不善なる所をば、是を正して改正し、又繁多にして無益の事を載置ける所をば、是を芟去也、【芟】、說文、刈草也、國語註、芟、大鎌、所以芟艸也、【至當】は、至極適當也、言は此註能的確切當にして、此外に無餘義に至て置也、

若此書者、撮大意於篇題之下、精訓解於句讀之間、非惟使幼學之士得有所資、而挾兎園冊於黨庠術序之間者、亦免箝口之譏矣、

此段此書註解を得て、學者の爲に有益事を云、【撮大—】言は一篇の大意を題下に撮集て、註して置也、【篇】、字彙、簡成章也、詩關雎註疏、篇、徧也、出情鋪事、明而徧也、【題】、韻會、書題也、孟子題辭、所以題號孟子之書、又名也、又題目也、【精訓—】韻會、精、的也、訓、說文、說敎也、徐曰、訓者、順其意以訓之也、字彙、訓釋也、如某字釋作其義、【句讀】、宥韻に、讀、音豆、增韻、句讀、凡經書成文、語絕處謂之句、語未絕而點之、以便誦詠、謂之讀、今秘書式、凡句絕則點於字旁、讀分則點於字之中間、言は文義を註して、一一に句讀の下に精明にする也、【非惟—】言は此書は童幼後學に補あるのみに非ず、如何なる博學廣識なる者の、兎園の書を庠序の間に挾て講談する者も、箝口不得答して、人に譏らるゝ事あるも、此註解を見て、不審を晴る程に、其譏を免也、書言故事、鄉校敎田夫牧子、所誦兎園冊、註、漢梁孝王、竇太后之愛子、(文帝第三子、名武)、景帝之母弟、孝王有囿、名曰兎園、(卽修竹園)、孝王卒、太后哀慕之、景帝以其苑令民得耕種、乃當官守、籍其租稅、以供祭祀、其簿籍皆俚語之字、故鄉俗所誦、云兎園冊云云、五代劉岳

傳曰、公卿之太子、元士之嫡子、年十三入小學、二十入大學、白虎通曰、八歲入小學、十五入大學、此太子之禮也、論語集註、餘力、猶言暇日也、文、謂詩書六藝之文、尹氏曰、德行、本也、文藝、末也、程子曰、爲弟子之職、力有餘則學文、不修其職而先文、非爲己之學也、朱子曰、力行而不學文、則無以考聖賢之成法、識事理之當然、而所行或出於私意、非但失之於野而已、言心は、人の子弟たる者、能孝弟忠信の道を力め行ひ、其暇日餘剩の工夫あらは、亦古文六藝を學ひ習ふべしと也、

眞寶之編、首有勸學之作、終有出師陳情之表、豈不欲勉之以勤而誘之以忠孝乎、此編者之微意也、

此書の前集の首に、勸學文あり、宋眞宗、仁宗、司馬溫公、柳屯田、王荊公等、皆有勸學文也、此後集第八に、諸葛孔明が出師表二篇、李令伯か陳情表一篇あり、其意は、能勸て學文稽古をせよと、學者に勸て、さて、學者誘引するに忠孝の事を以する也、朱子曰、盡己之謂忠、能君に仕て誠を竭す也、又曰、善事父母爲孝、能父母に愛敬を致す也、言心は、徒に古文を編るに非す、此德行を勸る意、其中にあり、微意は、俗語に細志と云是也、

惜乎舊所栞行、率多刪略、註釋不明、讀者憾焉、

此段此書の舊刊、往往不正事を云也、【栞】は、通作刊、【率】、韻會、大略也、此書舊本は、刪除簡略多、而も註釋、不分明、去程に後學の誦者憾焉、

有三山林以正先生者、授徒之暇、閱市而求書、未善者正之、繁者芟之、略者詳之、必歸於至當而後已、

此段此書を校正する事を云、校正する者誰ぞなれば、

古文眞寶後集諺解大成

古文眞寶序

【序】は、左傳正義曰、序與敘音義同、爾雅釋詁云、敘緒也、然則舉其綱要若繭之抽緒、按ずるに、敘は、次第也、ついで共、ついづ共讀、緒は、繭のいとぐち也、是も、ついでと訓ず、言心は、凡そ序文には、必先其書一部の簡要次第を舉記す者也、譬ば、繭の緒を抽出せば、其絲繰分易き如くに、其序に依て、其書の大義已に知へし、

萬里居士の解に、此序分七段、自六藝至意也第一段、論學問之次第也自眞寶至微意也第二段、論此書所編之深密之義也自惜乎至憾焉第三段、論此書舊刊往往不正也自有三山至後已第四段、言所以校正此書者元朝林以正也、自若此書至譏矣第五段、述此書得註解而學者有補也、自予寓至師矣第六段、說鄭本士文知林以正之爲人也、自一日至末第七段、論所以爲此序也、

林羅山諺解　鵜飼石齋大成

自六藝不講而世之誨小學者、必先以語孟而次以古文、亦餘力學文之意也、

【六藝】は、禮樂射御書數也、韻會に、藝、技能也、漢書儒林傳、師古曰、六藝、謂易禮樂詩書春秋、詳于進學解註也此段は、學問をする次第を云也、言ば六藝を講習せぬより、世間の小學の者に敎るに、必先論語孟子を以して、其次に古文等を敎也、其は論語學而篇に所謂行有餘力則以學文と云意也、大戴禮保傅篇曰、古者年八歲、出就外舍學小藝焉、履小節焉、束髮就大學學大藝焉、履大節焉、註、束髮、謂成童、尙書大

古文眞寶後集諺解大成目次

而未有歸於至當者也、比屬洛下石齋隱士、乃取羅山諺解而補其闕漏、折衷諸說以集大成、典據分明、繁簡得宜、名曰古文眞寶諺解大成、書成請序於予、予雖不敏、以文爲交者有年、亦喜斯文有所攷、卒爲之序而不辭也、有客率爾而謂曰、道不同不相爲謀、子奚爲題此書耶、予曰、固哉客之言也、道不同文則同、眞俗不同交則同、吾見其同者而不見其不同者、若其不同者、則與其不同者亦各有道、是之謂大同、故曰、道並行而不相悖、此道之所以爲大也、

時

寛文三禩歲舍癸卯九月之吉　霞谷山人妙子序

古文眞寶後集諺解大成序

道者無象也、不可見也、欲見道之象、斯文也已矣、是以、古之欲傳道於天下者、莫不從事於斯矣、東魯文宣王、以道之不行乎當世、乃退修六經之文、韋編三絶易翼成、求一百餘國寶書作春秋、遂以傳道而爲天下後世之師表也、西天文中王、以道鳴乎世者五十年矣、雅言妙句布滿五天、洎三藏之譯之於東土也、所謂錦繡背面一翻隔其光彩、此什公之所以有嚼飯與人之歎也、然而其理則西天之古教、其文則東土之古文、質而不野、巧而不浮、槩乎足以傳道也、夫古文者何耶、唐虞三代之雅言也、學之而得者、則如所謂韓、柳、歐、蘇之筆、亦足以傳道也、若夫王、楊、盧、駱之儷語、既非古文之雅言、豈足以傳道也哉、宜乎以古文之爲眞寶也、古文眞寶之行乎本朝也久矣、叢林之間競爲講說、共作鈔解、匪特叢林、近代儒林亦有之矣、但其講解之際、或典據不明、事跡有闕、或失則太繁、得則太簡、

の學者皆以て至便の書となせりと云ふ。

めば、何ぞ來年を待んと、即日爲に起講せり。其の著述羅山文集一百五十卷及び其他凡そ一百餘種あり。

【講述者の小傳】鵜飼石齋、名は信之、字は子眞、石齋は其の號、號を以て行はる、又、心耕子と號す、江戶の人。年二十にして、京都に遊び、那波活所(藤原惺窩の門人)に從ひ學ぶ。後ち塾を油小路に開き、敎授し、山崎闇齋、毛利貞齋と其盛名を齊うせり。寬文四年七月二十一日歿す、年四十九。當時文學尙未大に開けず儒生講習の書、四書、近思錄、小學、史記、漢書、蒙求等數種に過ぎざりしが、石齋始めて諸書を校刊し、大に行はる。學者亦甚だ之を惠とせり。其の著、古文後集諺解大成、和漢珍書考、自省錄等あり。而して古文後集の解は、是より先き羅山諺解を著はし、玉山禪僧靑松萬里等の諸說を取捨删補して較其當を獲れども、其書直に義理を說きて事證を略するを以て、石齋爲めに其の闕遺を補訂し、尤も力を用ひたれば、一時

へて讀まざるはなし。嘗て徒を集め、朱子の四書新註を講ず。博士清原秀賢、其の勅許を得ずして經書の新義を講ずるは古典に違ふを劾し、之を罪せんと請ふ。朝廷之を幕府に諮詢す。德川家康笑ひて曰く、講ずる者は特達の識あるを見るべし、劾する者は豈に偏狹の譏なからんやと。秀賢言なくして止む。是に於て羅山の名益、著はれ、從遊日に盛なり。時に藤原惺窩洛北に隱居し、洛閩の理學を唱ふ。羅山景慕し、遂に弟子の禮を執る。後家康の辟に應じ江戶に至り、法印の號を受けて、道春と名け、文學顧問の職に備はりたり。關東の禮制儀式は、羅山の定むる者多し、世以て漢の叔孫通に比す。年七十五、明曆三年正月二十日歿す。子孫世々幕府に仕へて、學政を司掌し、德川氏と終始せり。羅山平生講學倦まず。門人菅得庵嘗て除日に來謁し、明春を以て通鑑綱目を講ぜんと請ふ。羅山曰く、子の心誠に之を求

先哲遺著 漢籍國字解全書第十二卷

解題 附 著者小傳

古文眞寶後集　林羅山原解、鵜飼石齋增述

【本書の解題】本書の解題は、第十一卷古文眞寶前集に掲ぐるを以て玆に之を畧す。

【講述者の小傳】林羅山、名は忠、一名は信勝、字は子信、羅山は其の號、又、羅浮山、浮山、夕顔庵等の別號あり、又三郎と稱す。父信時、羅山を京都に生む。羅山幼にして、頴悟、神童の稱あり。年十四五、建仁寺に入り書を讀む。衆僧佛門に入るを勸むれども、羅山聽かず。衆僧乃ち京尹前田玄以に請ひて其父信時に强ふ。信時曰く、唯兒の好む所に任せんと。羅山遂に去りて家に歸り、再び寺門に入らずして

第拾貳巻

古文眞寶
後集

林羅山
鵜飼石齋
講

先哲遺著

漢籍國字解全書

早稻田大學出版部藏版



漢籍國字解全書